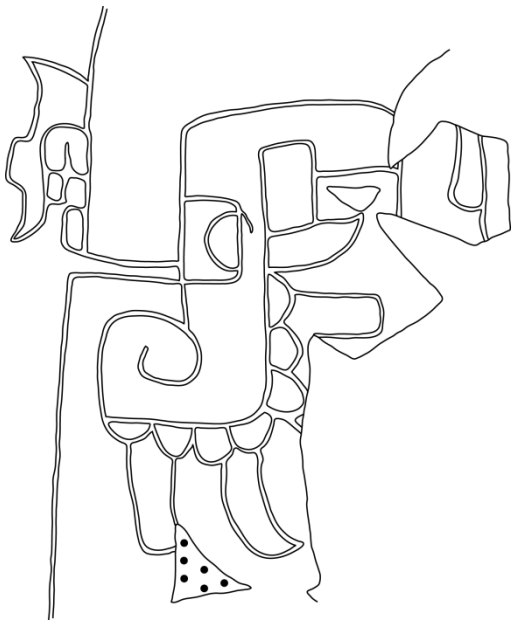
先史アンデス形成期の社会動態
―ペルー北部ワンカバンバ川流域社会における社会成員の活動と戦略から―



山本　睦

博士（文学）

総合研究大学院大学

文化科学研究科

比較文化学専攻

平成 24 年度

（2012）

要旨

本論の目的は、考古学データの分析を通じて、ワンカバンバ川流域におけるアンデス文明形成期（紀元前 3000－50 年）の社会動態を明らかにすることである。その際、社会動態を流域社会内部の動態と外部社会との地域間交流の動態の、両面が絡み合う通時的な変化の諸相として捉え、その背景に存在する行為主体である社会成員の活動と戦略を検討する。

形成期の社会的統合の中心とされる神殿で行われる諸活動には、それを支える宗教的、経済的、政治的活動が不可欠であり、そこには当該社会やそのリーダーといった人々の戦略が反映すると想定される。本論では、神殿をめぐる考古学データの通時的変化と地域間比較研究、GIS（地理情報システム）を分析手法として、リーダーの特質や彼らによるイデオロギーの操作と集団内の社会的差異の構築、および地域間交流の実態を明らかにし、ワンカバンバ川流域社会を実際に動かした人々の行為や戦略を検討する。

本論は全 12 章で構成される。

第 1 章では、研究目的を述べ、研究方法と理論的背景を整理して、本研究の問題意識と理論的位置づけ、ならびにその意義を明確にする。

第 2 章では、アンデス各地でみられる神殿を中心とした多様な社会展開について、神殿をめぐる諸活動のほか、遺構や遺物といった物質文化によって推定される地域間交流から総括し、それらの問題点をあげて本論の位置づけを明確にする。

第 3 章では、本論の軸となるインガタンボ遺跡とワンカバンバ川流域における調査・研究の着想に至る経緯、およびその概略を述べる。

第 4 章から第 7 章では、インガタンボの特徴を建築、土器、人工遺物や自然遺物の分析から検討する。建築を扱った第 4 章では、ワンカバンバ期（紀元前 2500－1200 年）、ポマワカ期（紀元前 1200－800 年）、インガタンボ期（紀元前 800－550 年）にわたって儀礼的増改築「神殿更新」を繰り返すことで、神殿が自然の丘陵を利用した小神殿から大規模化する過程を明らかにした。

第 5 章では、土器のタイプ分類にもとづいて編年を確立するとともに、時期ごとの特徴を論じる。ポマワカ期の土器出現以降、時期をおうごとに出土量とタイプ数が大幅に増加することを明らかにした。

第 6 章では、石器、貝製品、土製品、骨角器について検討する。とりわけ奢侈品となりうる海水生種の貝製品がポマワカ期以降に顕著となる点は、第 7 章で論じられる海生資源や荷駄獣であるラクダ科動物、儀礼にも利用されるトウモロコシの出現時期と一致する。また、第 7 章では、多様な環境を利用した食料基盤の存在についても論じる。

第 8 章では、インガタンボ出土資料を周辺地域の先行研究と比較検討して、その差異や類似性からインガタンボを中心とした地域間関係とその時期的変化を論じる。インガタンボ期に入ると、それまで北部熱帯低地や極北部海岸との交流を重視していた人々が、それらに加えて北部海岸や北部山地との関係を強く意識しはじめる様相が明らかとなった。

要旨

第 9 章では、流域内のセトルメント・パターンの通時的変化について論じる。ワンカバンバ期にはインガタンボだけに認められた神殿建設が、ポマワカ期になると隣接地域へ抜ける地域間ルート上で同時多発的にみられた後、インガタンボ期にはインガタンボへと収斂する過程を明らかにした。これは、地域間交流が、神殿や神殿を支える社会を大規模化するうえで重要な要因となったことを示唆する。

第 10 章では、GIS による最小コストルートの分析を通じて、ワンカバンバ川流域を中心とした地域間主要ルートの全体像とその変遷を検討する。ワンカバンバ期まで周辺地域間との交流にさほど関与していなかったインガタンボは、ラクダ科動物の導入によって移動手段とルートが変化したポマワカ期に入ってはじめて、当該地域の地域間交流網に組み込まれたと考えられる。

第 11 章では、前章までに提示した一次データと、その分析結果である二次データを総合して、ワンカバンバ川流域社会の動態を明らかにし、その背後に存在する社会成員の活動と戦略を空間的に三つのレベルから考察する。

インガタンボにおいて神殿をめぐる諸活動は、神殿を支える集団、とくにそのリーダーによって積極的に実施された。これは、ワンカバンバ期まで社会成員の紐帯を図り、社会を維持するための契機であったそうした行為が、ポマワカ期以降になると社会的紐帯の強化だけでなく、リーダーの戦略を他の成員に知らしめ、集団内の社会的差異を認識させて不平等を覆い隠すとともに、その権威を正統化する契機や手段となったためである。

この際に重要な作用をおよぼしたのが、地域間交流であった。事実、それが活発化するポマワカ期には、神殿の流域内併存や神殿と居住域、あるいは耕作地間の空間分化が生じる。また、併存していた神殿群が、インガタンボ期にインガタンボが流域内の社会統合の核となるとともに姿を消す現象は、地域間交流に関するインガタンボの発掘データと相まって、物資や情報の獲得と利用が流域の社会動態に与えた重要性を強調する。

この地域間交流のあり方を大きく変えたのが、ポマワカ期以降に現れるラクダ科動物の利用とそれによる地域間ルートの変化であった。インガタンボの人々、とりわけそのリーダーは、これを積極的に利用することで、流域社会における立場を確立することに成功したのである。もちろん、そうしたリーダーの活動や戦略は、周辺地域社会との関係性のなかで、状況に応じて時期ごとに変化した。

第 12 章に述べる結論は以下の通りである。

インガタンボ、ならびにワンカバンバ川流域では、神殿の更新と神殿における儀礼が社会変化に一定の役割を果たした。このなかで、イデオロギーの普及装置ともなる神殿とそれをめぐる諸活動は、集団内の社会的秩序を構造化して、社会的差異を成員に認識させると同時に差異を創出、あるいは維持させる契機や手段となった。

また、神殿における諸活動を実施し、集団内での社会的差異を維持、顕在化するうえで、地域間交流は、外在の知識や物資、もしくはその製作技術へのアクセス手段として重要であった。そのため、地域間交流は、インガタンボの人々の戦略として重視された。

とりわけ、地域間ルートの変化は、ルートの結節点となるワンカバンバ川流域、とくにインガタンボにおいて、階層化の萌芽を含む社会組織の変化をもたらした。つまり、流域社会の変化に際して、神殿における諸活動と地域間交流の相互関連こそが重要であったことが指摘できる。

しかしながら、このような状況のなかで、地域間交流とその社会的、政治的、経済的役割は、決して静態的な事象ではなかった。形成期後期になって、地域間交流が質的に変化すると、周辺地域社会の動向に応じてその影響をうけつつも、インガタンボ社会は自らの位置づけを主体的に変化させた。こうして、地域間交流を介して、周辺地域の社会とイデオロギー、経済、技術的背景を共有していても、ワンカバンバ川流域社会には独自の展開が生じたのである。

総じて、インガタンボやワンカバンバ川流域でみられた社会動態とは、当該地域独自の展開でも周辺地域社会の影響下で一元的に引き起こされたものでもなく、おかれた状況に積極的に関与した在地の人々の能動的な対応と、所与の社会的状況、および生態環境を利用した戦略の結果であった。

謝辞

本論文のもとになった調査・研究は、「先史アンデス社会の文明形成プロセス」（科学研究費補助金〈基盤研究（S)〉研究代表者：加藤泰建）と、「都市と文明の起源に関する人類史的研究―アンデスにおける形成期研究の再構築―」（科学研究費補助金〈基盤研究（A)〉研究代表者：加藤泰建)、「先スペイン期アンデス文明における権力と社会変化」（科学研究費補助金〈特別研究員奨励費〉研究代表者：山本睦)、「先史アンデス文明における祭祀建造物と社会変化の動態的相互関係」（科学研究費補助金〈特別研究員奨励費〉研究代表者：山本睦)、ならびに総合研究大学院大学の「スチューデントイニシアティブ実践教育プログラム」によって実施されたものである。

本論文の完成にいたるまで、本当に多くの方々に、言葉では言い尽くせないほどたくさんのご助力とご協力をいただいた。この場をお借りして、厚く御礼を申し上げたい。

総合研究大学院大学博士課程では、諸先生方に大変お世話になった。關雄二先生には、学部生時にペルーにはじめて訪れた際のクントゥル・ワシ遺跡の発掘調査時から現在に至るまで、日本とペルーで大変お世話になっている。そして、カハマルカの遺跡分布調査やパコパンパ遺跡発掘調査などの様々な現場では、調査のいろはを教えていただいた。また、博士課程に入学してからは指導教官としてご指導くださり、ご多忙のなか、調査や研究の方法、研究姿勢にいたるまで親身なご助言、ご教示をいただいた。さらに、私の拙い日本語の文章に何度となく、目を通していただき、博士論文の執筆を支えてくださった。国立民族学博物館名誉教授の藤井龍彦先生は、入学時は副指導教官として、退官されて以降は自主ゼミでの発表時に、多くのご教示とご助言をいただいた。印東道子先生には、藤井先生が退官された後に副指導教官を引き受けていただき、筆者の研究を励ますとともに、数多くのご助言をいただいた。なお、竹沢尚一郎先生、野林厚志先生、池谷和信先生には、ゼミや授業、博論指導等で、筆者の研究に対して様々な面でご指導いただいた。

東京大学名誉教授である大貫良夫先生には、筆者がはじめてクントゥル・ワシ遺跡の発掘調査に参加させていただいた時から、長年にわたりお世話になっている。そして、筆者の調査について多くのご教示をいただき、研究を励ましていただいた。また、テレサ夫人にもペルーでの生活をはじめとして、色々な面において大変お世話になった。

埼玉大学理事・副学長の加藤泰建先生は、筆者がアンデス考古学を志し、埼玉大学教養学部に入学して以来、様々な面でお世話になっている。卒業論文と修士論文の作成を厳しくも温かくご指導いただいたことに加えて、学部生時にクントゥル・ワシ遺跡の調査に参加することを許していただくなど、アンデス研究への契機をつくっていただいた。また、科研費プロジェクトへの参加の機会を与えていただくなど、筆者の研究の遂行に多大なご

助力を賜った。同じく埼玉大学の井口欣也先生には、大学院修士課程在籍時から親身にご指導いただいている。そして、特別研究員として埼玉大学に在籍した際は、受入教員となって筆者の研究生活に様々な便宜を図ってくださると同時に、調査や研究に対して多くの建設的コメントをいただいた。

アンデス調査団の諸先生方には、多大なご指導とご教示をいただいた。山形大学の坂井正人先生にはクントゥル・ワシ遺跡の発掘調査で大変お世話になった。また、東亜大学の鵜澤和宏先生には動物骨の分析について、聖マリアンナ医科大学の長岡朋人先生には人骨の分析について、それぞれご教示いただいた。さらに、東京大学の西沢弘恵氏には石器分析についてご教示いただいた。

東海大学の大平秀一先生には、エクアドルの考古学やウミギクガイについてご教示いただくとともに、論文執筆に際して様々なコメントをいただいた。

長谷川悦夫氏、徳江佐和子氏、渡部森哉氏、鶴見英成氏、芝田幸一郎氏、松本雄一氏、松本剛氏、広田健氏、若林大我氏には、筆者がアンデス研究を志し、現地での調査に参加して以来、研究について、いつも心あるご助言をいただいている。また、ときには熱い討論を交わすなど、研究者として研鑽を積んだ大切な存在でもある。このなかでもとくに、形成期を専門とする鶴見英成氏、芝田幸一郎氏、松本雄一氏の三氏には、何度となく筆者の調査・研究に対して貴重なコメントをいただき、また、必要な文献の入手に際してお手伝いいただいた。そして、伊藤裕子氏には、GIS 分析のご指導に加えて、図面作成に至るまで尽力していただいた。

総合研究大学院大学でともにアンデス研究を志した土井正樹氏、中嶋直樹氏、佐藤吉文氏、荒田恵氏、八木百合子氏、武田和代氏、浅見恵理氏、サウセド・セガミ・ダニエル・ダンテ氏、中川渚氏には、多大なご協力とご助言をいただいた。とくに、佐藤吉文氏には、論文の内容や構成について多くのコメントをいただいただけでなく、文章の推敲に関して多大なご協力をいただいた。そして、博士課程在学中の同期・先輩・後輩諸氏は、博士論文作成という同じ目標を達成する仲間として大きな励みとなり、研究生活の支えとなった。なお、学部時より苦楽をともにし、互いに励まし、時には貶し合いながらも、研究を続ける仲間であり、永遠のライバルでもある福原弘識氏には、図面の作成で大変お世話になった。

埼玉大学の三浦敦先生をはじめ、修士課程時の同志でもある高橋品子氏、山崎光弘氏、遠藤麻理氏には、少数精鋭で繰り広げられる研究会において筆者の研究に対して様々なコメントをいただいた。

謝辞

ペルー共和国においても多くの方々のお世話になった。カトリカ大学で特別研究員の受入教員となっていただいたピーター・カウリケ先生には、大学で様々な便宜を図っていただき、多くの面でご指導とご教示をいただいた。また、イリス夫人にはペルーにおける生活面などで大変お世話になった。さらに、ラファエル・バルデス氏、イディリオ・サンティアーナ先生、鬼籍に入られたメルセデス・カルデナス先生には、筆者の調査・研究を励ましていただき、数多くのご助言をいただいた。

サン・マルコス大学のルス・シャディ先生、エルナン・アマット先生、ラファエル・ベガ・センテーノ氏には、様々な機会において多大なご助言をいただいた。トゥルヒーヨ大学のビクトル・バスケス先生とテレサ・ロサレス先生は、筆者が実施した発掘調査で出土した自然遺物の分析にご尽力くださった。シカン博物館のカルロス・エレーラ氏には、ペルー北部地域の研究についてご教示とご助言をいただいた。また、キリーノ・オリベーラ氏は、筆者が調査するペルー北部熱帯低地の研究について、数多くのご助言をくださった。

アメリカのイェール大学のリチャード・バーガー先生は、黒曜石の分析に関してご協力いただいただけでなく、筆者の研究について多くのご教示とご助言をくださった。スタンフォード大学のジョン・リック先生とは意見交換を行い、数多くのご助言をいただいた。

エクアドル共和国のホルヘ・マルコス氏、エクアドル・カトリカ大学のフランシスコ・バルデス氏には、学会の際に、筆者の研究に対して貴重なご助言をいただいた。

ポマワカ市で実施した考古学調査の参加メンバーであるホセ・ペーニャ氏、カルロス・モラーレス氏、金子勇太氏、ルリカ・ハヤカワ氏、マリーナ・ラミーレス氏、ロイ・グティエレス氏、ジェニー・オチョア氏には多大なご協力をいただいた。とくに、ホセ・ペーニャ氏は、筆者がペルーで調査を開始してから常に行動をともにし、研究者として、時には友人として、公私にわたって協力をいただいた。

ペルー人考古学者のエルメル・アタラーヤ氏、ワルテル・トッソ氏、ミルトン・ルハン氏、エクトル・サルダーニャ氏、フアン・パブロ氏、フアン・ウガス氏、ウーゴ・イケハラ氏、メラニオ・デルガード氏とは、常に研究に関する意見交換を行った。彼らとの親交は、筆者の研究上の大きな励みともなっている。

文化庁カハマルカ支局のウィルデル・レオン氏、フェルナンド・エスケレ氏、セグンド・エルナンデス氏、ラウル・チョラン氏、文化庁トゥルヒーヨ支局のセサル・ガルベス氏、ビクトル・ピミンチューモ氏は、考古学調査を実施するにあたり、多大なるご協力をいただいた。

謝辞

ポマワカ市前市長で鬼籍に入られたルイス・セルベーラ氏、ハエン市長ハイメ・ビルチェス氏、ポマワカ市の教諭であったホセ・カホ氏とそのご家族、発掘調査員、および土器整理員は、筆者の考古学調査の実施に欠かせない存在であり、彼らには多大なるご協力をいただいた。このほかにも、ポマワカ市をはじめとしたハエン市とカハマルカ市の方々は、考古学調査実施中の日常生活の様々な面でご協力くださり、筆者の研究を温かく支えてくださった。とくに、ポマワカ市の人々は、スペイン語が上手く話せずに言葉足らずの筆者、そして至らないところも多い筆者の調査に対して、いつも笑顔で明るく接してくださった。

ペルーでの研究生活だけでなく、私生活においてもお世話になった方々に深く謝意を表する。とくに、ウーゴ・津田氏と妻カルメン氏、ご子息であるウーゴ氏とマリエラ氏には、筆者のはじめてのペルー渡航より、いつも大変お世話になっている。まさに、ペルーの家族とも呼ぶべき存在である。また、トゥルヒーヨの李氏一家、ホセ・ペーニャ氏一家、セリダ・ディアス氏、カハマルカのルイス・アルカンタラ氏、エルメル・ラモス氏とそのご家族は、公私にわたりペルーでの筆者の研究生活を支え、ご協力くださった。

上記以外にも、調査や研究において、これまで多くの方々と出会い、様々な便宜を図っていただくとともに、公私にわたって多大な助力をいただいた。紙面の都合もあり、全ての方の名前をあげることはできないが、ここに深く感謝したい。とくに、埼玉大学のアンデス研究をはじめとした人類学や考古学、あるいは歴史学を専攻する学部や修士の学生には、本論文の作成に際して、多くの協力をいただいた。修士課程に在籍する井上恭平氏と荘司一歩氏には、図面作成などの作業を手伝っていいただいた。彼らの協力なしには、本論文の完成が大きく遅れていたことは間違いない。また、専修大学に移られた高久健二先生、その後に埼玉で教鞭をとられている中村大介先生とその門下生からなる埼玉大学考古学研究会の皆さんには、考古学に関する研究面だけでなく、公私において多大なご協力をいただいた。とくに、高久健二先生には、埼玉大学に入学以来、公私にわたってたくさんのご支援をいただき、研究に対する姿勢について学ばせていただいた。この場をお借りして謹んで感謝の意を表したい。

最後に、このような不肖な息子の自分勝手な生活を許してくれた家族や親族、身勝手で適当な私をいつも笑顔で支えてくれた友人たちに、深く感謝する次第である。

目次

要旨
謝辞
第 1 章：序章-本論文の目的と背景 1
1-1. 本論文の目的 1
1-2. 本論文の研究方法 6
1-3. 本研究の背景 9
1-3-1. 先史アンデス形成期における神殿 11
1-3-2. 先史アンデス形成期における地域間交流と社会変化 15
1-4. 本論文の構成 23

第 2 章：アンデスにおける形成期研究 25
2-1. アンデスの地域区分 25
2-2. 形成期の概念と編年体系 27
2-3. ペルー北部とエクアドル南部における形成期研究 28
2-3-1. 形成期早期（紀元前 3000-1800 年） 29
2-3-2. 形成期前期（紀元前 1800-1200 年） 32
2-3-3. 形成期中期（紀元前 1200-800 年） 34
2-3-4. 形成期後期（紀元前 800-250 年） 38
2-3-5. 形成期末期（紀元前 250-50 年） 42
2-4. 先行研究の問題点と本論の位置づけ 43

第 3 章：調査対象地域の設定と発掘遺跡の選定 46
3-1. 調査対象地域の設定 46
3-2. 調査地概要 52
3-3. ワンカバンバ川流域における遺跡踏査：経緯と目的、および対象範囲 54
3-4. 発掘遺跡の選定 56

第 4 章：インガタンボ遺跡の発掘調査：建築と年代 58
4-1. 調査の経緯と目的 58
4-2. 調査遺跡概要 59
4-3. 発掘区の設定と発掘方法 60
4-4. 建築フェイズの記述方法 62
4-5. A 基壇 63
4-5-1. ワンカバンバ期（紀元前 2500-1200 年） 63

目次

4-5-2. ポマワカ期（紀元前 1200-800 年） 66
4-5-3. インガタンボ期（紀元前 800-550 年） 71
4-6. B 基壇 77
4-6-1. ワンカバンバ期（紀元前 2500-1200 年） 77
4-6-2. ポマワカ期（紀元前 1200-800 年） 77
4-6-3. インガタンボ期（紀元前 800-550 年） 85
4-7. C 基壇：ポマワカ期（C 基壇 PM） 87
4-8. D 基壇 87
4-8-1. ポマワカ期（D 基壇 PM） 87
4-8-2. インガタンボ期（D 基壇 IG） 87
4-9. 小括：インガタンボ遺跡における建築の時期的変遷 89
4-9-1. ワンカバンバⅠ期 89
4-9-2. ワンカバンバⅡ期 89
4-9-3. ワンカバンバⅢ期 89
4-9-4. ワンカバンバⅣ期 89
4-9-5. ポマワカⅠ期 90
4-9-6. ポマワカⅡ期 91
4-9-7. ポマワカⅢ期 92
4-9-8. ポマワカⅣ期 93
4-9-9. インガタンボⅠ期 94
4-9-10. インガタンボⅡ期 95

第 5 章：インガタンボ遺跡の土器 97
5-1. 分類の方法とその目的 97
5-2. 土器の属性とタイプ一覧 101
5-3. 属性の基準と分類 104
5-3-1. 胎土・混和材 104
5-3-2. 色 104
5-3-3. 表面調整 105
5-3-4. 装飾 105
5-3-5. 器形 107
5-4. ポマワカ期の土器タイプ 109
5-4-1. PM タイプ 1（ポマワカ期白色：PM Blanco） 110
5-4-2. PM タイプ 2（ポマワカ期赤色磨研：PM Rojo Pulido） 111
5-4-3. PM タイプ 3（ポマワカ期赤色平滑：PM Rojo Alisado） 115
5-4-4. PM タイプ 4（ポマワカ期褐色磨研：PM Marrón Pulido） 129

目次

5-4-5. PM タイプ 5（ポマワカ期褐色平滑：PM Marrón Alisado） 130
5-4-6. PM タイプ 6（ポマワカ期褐色平坦：PM Marrón Nivelado） 138
5-4-7. PM タイプ 7（ポマワカ期褐色粗整形：PM Marrón Tosco） 142
5-5. インガタンボ期の土器タイプ 145
5-5-1. IG タイプ 1（インガタンボ期オレンジ色：IG Anaranjado） 145
5-5-2. IG タイプ 2（インガタンボ期灰色磨研：IG Gris Fino） 147
5-5-3. IG タイプ 3（インガタンボ期黒色磨研：IG Negro Pulido） 149
5-5-4. IG タイプ 4（インガタンボ期白色：IG Blanco） 154
5-5-5. IG タイプ 5（インガタンボ期赤色磨研：IG Rojo Pulido） 155
5-5-6. IG タイプ 6（インガタンボ期赤色平滑：IG Rojo Alisado） 163
5-5-7. IG タイプ 7（インガタンボ期褐色磨研：IG Marrón Pulido） 181
5-5-8. IG タイプ 8（インガタンボ期褐色平滑：IG Marrón Alisado） 186
5-5-9. IG タイプ 9（インガタンボ期褐色平坦：IG Marrón Nivelado） 206
5-5-10. IG タイプ 10（インガタンボ期褐色粗整形：IG Marrón Tosco） 210
5-5-11. IG タイプ 11（インガタンボ期未分類） 213
5-6. インガタンボ遺跡出土土器の諸特徴との土器タイプ別構成比 215

第 6 章：インガタンボ遺跡の石器、貝製品、土製品、骨角器 218
6-1. 石器 218
6-1-1. 分類と石器一覧 218
6-1-2. 石鉢 219
6-1-3. 装身具 223
6-1-4. 剝片・砕片 223
6-1-5. 研磨具 224
6-1-6. すり石 224
6-1-7. 石錘 224
6-2. 貝製品 228
6-2-1. 海水生種 229
6-2-2. 陸生種 236
6-3. 土製品 237
6-4. 骨角器 237
6-5. 小括：出土遺物の特徴と時期的変遷 239
6-5-1. 出土遺物の特徴と時期的変遷 239
6-5-2. インガタンボ遺跡における工芸品製作 241

目次

第 7 章：インガタンボ遺跡の自然遺物 243
7-1. 資料の採集方法と種の同定 243
7-2. 貝類 243
7-3. 植物 246
7-4. 甲殻類、魚類 248
7-5. 鳥獣骨 249
7-6. 小括：インガタンボ遺跡から出土した自然遺物の特徴と時期的変遷 251
7-6-1. 自然然遺物の特徴と時期的変遷 251
7-6-2. 生業と食糧基盤 252

第 8 章：インガタンボ遺跡の建築、および出土資料からみる地域間交流 256
8-1. 建築 256
8-1-1. 基壇 256
8-1-2. 広場 259
8-1-3. 配置 260
8-1-4. インガタンボの建築からみる地域間関係 261
8-2. 土器 266
8-2-1. ペルー北部山地 270
8-2-2. ペルー北部海岸 273
8-2-3. ペルー極北部海岸、エクアドル南部山地 276
8-2-4. ペルー北部熱帯低地、エクアドル南部熱帯低地 282
8-2-5. インガタンボにおける土器製作 285
8-2-6. インガタンボ遺跡出土土器からみる地域間関係 287
8-3. 土器以外の人工遺物と自然遺物 295
8-4. 小括：インガタンボ遺跡の建築、および出土資料からみる地域間交流 297
8-4-1. 形成期早期（ワンカバンバ期前半） 297
8-4-2. 形成期前期（ワンカバンバ期後半） 297
8-4-3. 形成期中期（ポマワカ期） 297
8-4-4. 形成期後期（インガタンボ期） 298

第 9 章：ワンカバンバ川流域のセトルメント・パターン 300
9-1. ワンカバンバ川流域の遺跡分布とその一般的特徴 300
9-2. ワンカバンバ川流域の形成期遺跡の形態的分類 307
9-3. ワンカバンバ川流域における遺跡間の関係 312
9-4. ワンカバンバ川流域における地域間ルート 321
9-4-1. 北方面ルート 322

目次

9-4-2. 南方面ルート 323
9-4-3. 東西方面ルート 324
9-5. 小括：ワンカバンバ川流域のセトルメント・パターンとその時期的変遷 327
9-5-1. ワンカバンバ期前半（形成期早期） 327
9-5-2. ワンカバンバ期後半（形成期前期） 327
9-5-3. ポマワカ期（形成期中期） 327
9-5-4. インガタンボ期（形成期後期） 328
9-5-5. 神殿の立地と生態環境 329

第 10 章：ペルー北部とエクアドル南部における地域間交流の動態 332
10-1. アンデス形成期における地域間交流とルート研究 332
10-1-1. 地域間交流とルート研究の関係 332
10-1-2. アンデスにおけるルート研究 333
10-2. 輸送システムと地域間ルート 340
10-3. GIS を用いたルート分析の目的と意義、および方法 343
10-3-1. GIS を用いたルート分析の目的と意義 343
10-3-2. GIS を用いたルートの分析方法 344
10-4. ペルー北部とエクアドル南部における最小コスト地域間ルート 345
10-5. 小括：地域間ルートの通時的変遷 356
10-5-1. ワンカバンバ期（形成期早期-前期） 356
10-5-2. ポマワカ期（形成期中期） 360
10-5-3. インガタンボ期（形成期後期） 363

第 11 章：ワンカバンバ川流域における社会動態と社会成員の活動、および戦略 366
11-1. インガタンボ神殿における社会動態 366
11-1-1. ワンカバンバ期 367
11-1-2. ポマワカ期 369
11-1-3. インガタンボ期 371
11-1-4. インガタンボにおける社会的差異と社会組織 374
11-2. ワンカバンバ川流域における社会動態 375
11-2-1. ワンカバンバ川流域における空間分化 376
11-2-2. ワンカバンバ川流域における神殿間の関係 377
11-3. ワンカバンバ川流域社会と外部社会との地域間交流の様態 379
11-4. ワンカバンバ川流域における社会動態と社会成員の活動、および戦略 387
11-4-1. ワンカバンバ期 387
11-4-2. ポマワカ期 389

目次

11-4-3. インガタンボ期 392
11-5. ワンカバンバ川流域を中心とした形成期の社会動態
—地域間交流を軸に— 398

第 12 章：結論 402

■引用文献 405

■附録：インガタンボ遺跡の層位状況 附録-1
1. A 基壇の発掘区と層位状況 附録-1
1-1. A 区 附録-1
1-1-1. トレンチ 1 附録-1
1-1-2. トレンチ 2 附録-9
1-1-3. トレンチ 3、および発掘区 1
（AE4S16-AO6S16、AE4S17-AO6S17、AE3S18-AO6S18、
AE3S19-AO6S19、AE3S20-AO6S20） 附録-9
1-1-4. 発掘区 2（AE6S11-S12、AE7S11-12） 附録-9
1-1-5. 発掘区 3（AE17N3-N4、AE18N3-N4） 附録-9
1-1-6. トレンチ 4 附録-9
1-2. B 区 附録-21
1-3. C 区 附録-21
1-4. D 区 附録-21
2. B 基壇の発掘区と層位状況 附録-27
3. C 基壇の発掘区と層位状況 附録-33
4. D 基壇の発掘区と層位状況 附録-33

図目次

図 1-1	アンデス形成期における本論文関連遺跡とワンカバンバ川流域、およびインガタンボ遺跡（★）の位置	2
図 2-1	アンデスの地理的区分と文化領域	26
図 3-1	先行研究に基づいたワンカバンバ川流域の遺跡分類分布図①	48
図 3-2	先行研究に基づいたワンカバンバ川流域の遺跡分類分布図②	49
図 4-1	インガタンボ遺跡全体図	59
図 4-2	インガタンボ遺跡 A 基壇地形図、および発掘区	62
図 4-3	A 基壇：ワンカバンバ期	65
図 4-4	A 基壇：ポマワカ I 期、II 期	68
図 4-5	A 基壇：ポマワカ III 期	69
図 4-6	A 基壇：ポマワカ IV 期	70
図 4-7	A 基壇：インガタンボ I 期	73
図 4-8	A 基壇：インガタンボ II 期	76
図 4-9	B 基壇：ワンカバンバ期	80
図 4-10	B 基壇：ポマワカ I 期	81
図 4-11	B 基壇：ポマワカ II 期	82
図 4-12	B 基壇：ポマワカ III 期	83
図 4-13	B 基壇：ポマワカ IV 期	84
図 4-14	B 基壇：インガタンボ I 期	86
図 4-15	C 基壇、D 基壇：ポマワカ期、インガタンボ期	88
図 4-16	ワンカバンバ I-III 期復元図	90
図 4-17	ワンカバンバ IV 期復元図	90
図 4-18	ポマワカ I 期復元図	91
図 4-19	ポマワカ II 期復元図	92
図 4-20	ポマワカ III 期復元図	93
図 4-21	ポマワカ IV 期復元図	94
図 4-22	インガタンボ I 期復元図	95
図 4-23	インガタンボ II 期復元図	96
図 5-1	PM タイプ 1 半球鉢	111
図 5-2	PM タイプ 1 開口半球鉢	111
図 5-3	PM タイプ 2-1 半球鉢	112
図 5-4	PM タイプ 2-1 ボトル	113
図 5-5	PM タイプ 2-2 開口半球鉢	113
図 5-6	PM タイプ 2-2 ボトル	114

図目次

図 5-7　PM タイプ 2-3 開口半球鉢　115
図 5-8　PM タイプ 3-1 短頚壺　116
図 5-9　PM タイプ 3-1 半球鉢　116
図 5-10　PM タイプ 3-1 開口半球鉢　117
図 5-11　PM タイプ 3-1 外傾鉢　117
図 5-12　PM タイプ 3-1 外反鉢　117
図 5-13　PM タイプ 3-2 壺　118
図 5-14　PM タイプ 3-2 半球鉢　118
図 5-15　PM タイプ 3-2 開口半球鉢　119
図 5-16　PM タイプ 3-3 半球鉢　120
図 5-17　PM タイプ 3-4 半球鉢　121
図 5-18　PM タイプ 3-4 開口半球鉢　122
図 5-19　PM タイプ 3-4 ボトル　123
図 5-20　PM タイプ 3-5 短頚壺　124
図 5-21　PM タイプ 3-5 半球鉢　124
図 5-22　PM タイプ 3-5 開口半球鉢　125
図 5-23　PM タイプ 3-5 外反鉢　125
図 5-24　PM タイプ 3-6 半球鉢　126
図 5-25　PM タイプ 3-6 開口半球鉢　127
図 5-26　PM タイプ 3-6 外傾鉢　128
図 5-27　PM タイプ 3-6 外反鉢　128
図 5-28　PM タイプ 4 半球鉢　129
図 5-29　PM タイプ 5-1 短頚壺　131
図 5-30　PM タイプ 5-1 半球鉢　131
図 5-31　PM タイプ 5-1 開口半球鉢　132
図 5-32　PM タイプ 5-1 外傾鉢　132
図 5-33　PM タイプ 5-2 壺　133
図 5-34　PM タイプ 5-2 半球鉢　134
図 5-35　PM タイプ 5-2 開口半球鉢　135
図 5-36　PM タイプ 5-2 外傾鉢　136
図 5-37　PM タイプ 5-2 外反鉢 1　136
図 5-38　PM タイプ 5-2 外反鉢 2　136
図 5-39　PM タイプ 5-3 開口半球鉢　137
図 5-40　PM タイプ 5-4 鉢　138
図 5-41　PM タイプ 6-1 短頚壺 1　140
図 5-42　PM タイプ 6-1 短頚壺 2　140

図目次

図 5-43　PM タイプ 6-1 開口半球鉢　141
図 5-44　PM タイプ 6-2 短頚壺　142
図 5-45　PM タイプ 7-1 短頚壺　143
図 5-46　PM タイプ 7-1 開口半球鉢　144
図 5-47　PM タイプ 7-2 短頚壺　144
図 5-48　IG タイプ 1-2 半球鉢　147
図 5-49　IG タイプ 1-2 ボトル　147
図 5-50　IG タイプ 2 半球鉢　148
図 5-51　IG タイプ 2 鐙形ボトル　149
図 5-52　IG タイプ 3-1 半球鉢　150
図 5-53　IG タイプ 3-1 開口半球鉢　150
図 5-54　IG タイプ 3-1 コップ形　150
図 5-55　IG タイプ 3-1 ボトル　151
図 5-56　IG タイプ 3-2 半球鉢　152
図 5-57　IG タイプ 3-2 開口半球鉢　152
図 5-58　IG タイプ 3-2 コップ形　152
図 5-59　IG タイプ 3-3 半球鉢　153
図 5-60　IG タイプ 3-3 開口半球鉢　154
図 5-61　IG タイプ 3-3 ボトル　154
図 5-62　IG タイプ 5-1 半球鉢　156
図 5-63　IG タイプ 5-1 開口半球鉢　156
図 5-64　IG タイプ 5-1 外反鉢　157
図 5-65　IG タイプ 5-1 ボトル　157
図 5-66　IG タイプ 5-2 開口半球鉢　158
図 5-67　IG タイプ 5-3 半球鉢　159
図 5-68　IG タイプ 5-3 開口半球鉢　160
図 5-69　IG タイプ 5-3 外傾鉢　160
図 5-70　IG タイプ 5-3 外反鉢　160
図 5-71　IG タイプ 5-3 ボトル　161
図 5-72　IG タイプ 5-4 半球鉢　162
図 5-73　IG タイプ 5-4 開口半球鉢　162
図 5-74　IG タイプ 5-4 ボトル　162
図 5-75　IG タイプ 6-1 短頚壺　164
図 5-76　IG タイプ 6-1 半球鉢　165
図 5-77　IG タイプ 6-1 開口半球鉢　165
図 5-78　IG タイプ 6-1 外傾鉢　166

図目次

図 5-79　IG タイプ 6-1 外反鉢　166
図 5-80　IG タイプ 6-1 高杯　166
図 5-81　IG タイプ 6-2 半球鉢　168
図 5-82　IG タイプ 6-2 開口半球鉢 1　169
図 5-83　IG タイプ 6-2 開口半球鉢 2　170
図 5-84　IG タイプ 6-2 外反鉢　170
図 5-85　IG タイプ 6-2 ボトル　170
図 5-86　IG タイプ 6-3 開口半球鉢　171
図 5-87　IG タイプ 6-4 半球鉢　172
図 5-88　IG タイプ 6-4 開口半球鉢　173
図 5-89　IG タイプ 6-4 外反鉢　173
図 5-90　IG タイプ 6-5 短頚壺　174
図 5-91　IG タイプ 6-5 半球鉢　175
図 5-92　IG タイプ 6-5 開口半球鉢　175
図 5-93　IG タイプ 6-5 外傾鉢　176
図 5-94　IG タイプ 6-5 外反鉢　176
図 5-95　IG タイプ 6-5 ボトル　177
図 5-96　IG タイプ 6-5 鐙形ボトル　177
図 5-97　IG タイプ 6-6 半球鉢　179
図 5-98　IG タイプ 6-6 開口半球鉢　180
図 5-99　IG タイプ 6-6 外反鉢　180
図 5-100　IG タイプ 7-1 半球鉢　182
図 5-101　IG タイプ 7-1 開口半球鉢　182
図 5-102　IG タイプ 7-1 外反鉢　183
図 5-103　IG タイプ 7-1 ボトル　183
図 5-104　IG タイプ 7-2 半球鉢　184
図 5-105　IG タイプ 7-2 開口半球鉢　185
図 5-106　IG タイプ 7-2 ボトル　186
図 5-107　IG タイプ 8-1 無頚壺　187
図 5-108　IG タイプ 8-1 短頚壺 1　187
図 5-109　IG タイプ 8-1 短頚壺 2　188
図 5-110　IG タイプ 8-1 半球鉢　189
図 5-111　IG タイプ 8-1 開口半球鉢　190
図 5-112　IG タイプ 8-1 外反鉢　191
図 5-113　IG タイプ 8-1 開口円筒鉢 1　191
図 5-114　IG タイプ 8-1 開口円筒鉢 2　192

図目次

図 5-115　IG タイプ 8-1 ボトル　193
図 5-116　IG タイプ 8-2 壺　194
図 5-117　IG タイプ 8-2 半球鉢　195
図 5-118　IG タイプ 8-2 開口半球鉢　197
図 5-119　IG タイプ 8-2 外傾鉢　198
図 5-120　IG タイプ 8-2 外反鉢　198
図 5-121　IG タイプ 8-2 ボトル　199
図 5-122　IG タイプ 8-3 半球鉢　200
図 5-123　IG タイプ 8-3 開口半球鉢　201
図 5-124　IG タイプ 8-3 外傾鉢　202
図 5-125　IG タイプ 8-3 外反鉢　202
図 5-126　IG タイプ 8-3 開口円筒鉢　202
図 5-127　IG タイプ 8-3 開口円筒鉢展開図　203
図 5-128　IG タイプ 8-3 ボトル　203
図 5-129　IG タイプ 8-4 壺　204
図 5-130　IG タイプ 8-4 半球鉢　205
図 5-131　IG タイプ 8-4 開口半球鉢　205
図 5-132　IG タイプ 8-4 外反鉢　206
図 5-133　IG タイプ 9-1 短頚壺　207
図 5-134　IG タイプ 9-1 半球鉢　208
図 5-135　IG タイプ 9-1 開口半球鉢　209
図 5-136　IG タイプ 9-2 短頚壺　210
図 5-137　IG タイプ 10-1 短頚壺　212
図 5-138　IG タイプ 10-1 開口半球鉢　212
図 5-139　IG タイプ未分類　214
図 6-1　石鉢①（写真 6-1 と対応）　220
図 6-2　石鉢②（写真 6-2 と対応）　220
図 6-3　石鉢③（写真 6-3 と対応）　220
図 6-4-1　石鉢④（写真 6-4-1 と対応）　222
図 6-4-2　石鉢④（写真 6-4-2 と対応）　222
図 6-4-3　石鉢④（写真 6-4-3 と対応）　222
図 6-5　石製装身具未製品（写真 6-5 と対応）　226
図 6-6　石製管玉（写真 6-6 と対応）　226
図 6-7　石製装身具未製品（写真 6-7 と対応）　226
図 6-8　石製円盤状製品（写真 6-8 と対応）　226
図 6-9　石製玉製品（写真 6-9 と対応）　226

図目次

図 6-10　石製管玉（写真 6-11 と対応）　226
図 6-11　石製玉製品（写真 6-12 と対応）　226
図 6-12　黒曜石製剝片①（写真 6-15 と対応）　228
図 6-13　黒曜石製剝片②（写真 6-16 と対応）　228
図 6-14　錐状石器（写真 6-17 と対応）　228
図 6-15　すり石（写真 6-18 と対応）　228
図 6-16　石錘①（写真 6-19 と対応）　228
図 6-17　石錘②（写真 6-20 と対応）　228
図 6-18　貝製板状玉製品（写真 6-21 と対応）　234
図 6-19　貝製板状玉製品②（写真 6-23 と対応）　234
図 6-20　貝製板状玉製品③（写真 6-24 と対応）　234
図 6-21　貝製板状玉製品①（写真 6-25 と対応）　234
図 6-22　貝製板状玉製品②（写真 6-26 と対応）　234
図 6-23　用途不明貝製品（写真 6-27 と対応）　234
図 6-24　貝製ペンダント（写真 6-29 と対応）　234
図 6-25　ウミギクガイ製玉製品（写真 6-30 と対応）　234
図 6-26　ウミギクガイ製管玉（写真 6-31 と対応）　234
図 6-27　貝製板状玉製品①（写真 6-32 と対応）　234
図 6-28　貝製板状玉製品②（写真 6-33 と対応）　234
図 6-29　貝製板状玉製品③（写真 6-34 と対応）　234
図 6-30　用途不明貝製品（写真 6-35 と対応）　234
図 6-31　ウミギクガイ製玉製品（写真 6-37 と対応）　236
図 6-32　貝製ペンダント（写真 6-38 と対応）　236
図 6-33　ウミギクガイ製玉製品（写真 6-39 と対応）　236
図 6-34　ウミギクガイ製玉製品（写真 6-40 と対応）　236
図 6-35　用途不明貝製品（写真 6-41 と対応）　236
図 6-36　貝製ペンダント（写真 6-42 と対応）　236
図 6-37　陸生貝製品（写真 6-43 と対応）　237
図 6-38　陸生貝製ペンダント（写真 6-44 と対応）　237
図 6-39　土製品（写真 6-45 と対応）　238
図 6-40　骨製ピン（写真 6-46 と対応）　238
図 6-41　骨製チューブ（写真 6-47 と対応）　238
図 6-42　骨製ピン（写真 6-48 と対応）　238
図 8-1　インガタンボ遺跡、および比較対象となる遺跡位置　257
図 8-2　中央アンデス北部における形成期の神殿の分布　258
図 8-3　形成期早期と形成期前期における神殿の建築特徴とその分布　262

図目次

図 8-4　形成期中期における神殿の建築特徴とその分布　263
図 8-5　形成期後期における神殿の建築特徴とその分布　264
図 8-6　形成期前期における土器特徴の分布　288
図 8-7　形成期中期における土器特徴の分布　290
図 8-8　形成期後期における土器特徴の分布　294
図 9-1　ワンカバンバ川流域遺跡分布図①　301
図 9-2　ワンカバンバ川流域遺跡分布図②　302
図 9-3　ワンカバンバ川流域における遺跡分類分布①（ポマワカ期）　314
図 9-4　ワンカバンバ川流域における遺跡分類分布②（ポマワカ期）　315
図 9-5　ワンカバンバ川流域における遺跡分類分布①（インガタンボ期）　319
図 9-6　ワンカバンバ川流域における遺跡分類分布②（インガタンボ期）　320
図 9-7　ワンカバンバ川流域における諸遺跡と地域間ルートの関係①　325
図 9-8　ワンカバンバ川流域における諸遺跡と地域間ルートの関係②　326
図 10-1　トピックらによるネットワークモデル概念図
[Topic and Topic 1983 より改変]　335
図 10-2　レンフリューによる交換のモード[レンフリュー・バーン 2007]　336
図 10-3　ホッケンヘムによるウミギクガイの交換ルート
[Hocquenghem 1993 より改変]　339
図 10-4　ペルー北部とエクアドル南部における地域間ルート（徒歩）　347
図 10-5　ペルー北部とエクアドル南部における地域間ルート（ラクダ科動物）　348
図 10-6　インガタンボを中心とした周辺遺跡への移動日数（徒歩：日速 30km）　349
図 10-7　インガタンボを中心とした周辺遺跡への移動日数
（ラクダ科動物：日速 20km）　350
図 10-8　ペルー北部とエクアドル南部における地域間ルート
（ワンカバンバ期=形成期早期）　352
図 10-9　ペルー北部とエクアドル南部における地域間ルート
（ワンカバンバ期=形成期前期）　353
図 10-10　ペルー北部とエクアドル南部における地域間ルート
（ポマワカ期=形成期中期）　354
図 10-11　ペルー北部とエクアドル南部における地域間ルート
（インガタンボ期=形成期後期）　355
図 10-12　ペルー北部とエクアドル南部における地域間主要ルート
（ワンカバンバ期=形成期早期）　358
図 10-13　ペルー北部とエクアドル南部における地域間主要ルート
（ワンカバンバ期=形成期前期）　359

図目次

図 10-14　ペルー北部とエクアドル南部における地域間主要ルート
（ポマワカ期=形成期中期）　362
図 10-15　ペルー北部とエクアドル南部における地域間主要ルート
（インガタンボ期=形成期後期）　365
附録図-1　A 基壇全体図と断面図位置　附録-2
附録図-2　断面図 1：O2N4-O2S2 西面断面図　附録-3
附録図-3　断面図 2：O2S3-O2S7 西面断面図、および O2S7 南面断面図　附録-4
附録図-4　断面図 3：O2S8-O2S13 西面断面図　附録-5
附録図-5　断面図 4：O2S14-O2S19 西面断面図　附録-6
附録図-6　断面図 5：O2S20-O2S22 西面断面図　附録-7
附録図-7　断面図 6：O3S10-O3S14 西面断面図、および O3S14 南面断面図　附録-8
附録図-8　断面図 7：O1S20-O4S20 西面断面図　附録-10
附録図-9　断面図 8：E1S17- E1S19 西面断面図　附録-11
附録図-10　断面図 9：E2S18- E2S19 東面断面図、E1S19-E2S19 南面断面図　附録-12
附録図-11　断面図 10：E2S16- E4S16 北面断面図、および E4S16 東面断面図　附録-13
附録図-12　断面図 11：O3S17- O6S17 北面断面図、および O6S17 南面断面図　附録-14
附録図-13　断面図 12：O1S19- E2S19 北面断面図　附録-15
附録図-14　断面図 13：E6S11- E6S12 西面断面図、E6S11-E7S11 北面断面図　附録-16
附録図-15　断面図 14：E17N3- E17N4 西面断面図、E17N4-E18N4 北面断面　附録-17
附録図-16　断面図 15：E7S7- E11S7 南面断面図、および E7S7 西面断面図　附録-18
附録図-17　断面図 16：E11S7- E16S7 南面断面図　附録-19
附録図-18　断面図 17：E16S7- E17S7 南面断面図、および E17S7 東面断面図　附録-20
附録図-19　断面図 18：BO1N12- BO3N12 南面断面図　附録-22
附録図-20　断面図 19：BE1N9- BE1N5 東面断面図、および BE1N5 南面断面図　附録-23
附録図-21　断面図 20：BE1N13-BE2N13 北面断面図、
BE2N13-BE1N10 東面断面図　附録-24
附録図-22　断面図 21：CE1N9- CE5N9 南面断面図、および CE5N9 西面断面図　附録-25
附録図-23　断面図 22：DO8N24- DO8N26 西面断面図、
および DO8N26 北面断面図　附録-26
附録図-24　B 基壇全体図と断面図位置　附録-28
附録図-25　断面図 23：B 基壇 E1S1- E1N5 西面断面図　附録-29
附録図-26　断面図 24：B 基壇 E1N5- E3N5 北面断面図、
E3N5- E3N3 東面断面図　附録-30
附録図-27　断面図 25：B 基壇 E3N2- E3N1 東面断面図、
E3N1-E2N1 南面断面図　附録-31
附録図-28　断面図 26：B 基壇 E1N1- E3N1 北面断面図　附録-32

図目次

附録図-29　C 基壇、および D 基壇全体図と断面図位置　附録-34
附録図-30　C 基壇断面図（断面図 27、28）、および D 基壇断面図（断面図 29）　附録-35

表目次

表 1-1　先史アンデスの編年体系[関・青山 2005 より改変]　3
表 5-1　インガタンボ遺跡出土土器のタイプ分類表　103
表 5-2　各時期における出土土器タイプ別構成表　217
表 6-1　インガタンボ遺跡出土、石器分類表　218
表 6-2　インガタンボ遺跡出土、貝製品分類表　229
表 7-1　インガタンボ遺跡出土、マキガイ種同定一覧　244
表 7-2　インガタンボ遺跡出土、ニマイガイ種同定一覧　245
表 7-3　インガタンボ遺跡出土、植物依存体一覧　248
表 7-4　インガタンボ遺跡出土、甲殻類、魚類一覧　249
表 7-5　インガタンボ遺跡出土、鳥獣骨一覧　250
表 7-6　インガタンボ遺跡出土、両生類、爬虫類一覧　250
表 8-1　比較対象地域における土器装飾一覧①　267
表 8-2　比較対象地域における土器装飾一覧②　268
表 8-3　比較対象地域における土器器形一覧　269
表 9-1　遺跡踏査登録遺跡リスト①（全時期）　303
遺跡踏査登録遺跡リスト②（全時期）　304
遺跡踏査登録遺跡リスト③（全時期）　305
表 9-2　標高と登録遺跡数の関係　306
表 9-3　時期ごとの遺跡数　306
表 9-4　ワンカバンバ川流域における形成期の諸遺跡と建築の形態的分類、
および土器分布範囲面積　309
表 9-5　ワンカバンバ川流域における形成期神殿とその形態的特徴　316
表 10-1　インガタンボ遺跡から周辺諸遺跡への移動日数　351

写真目次

写真 3-1　インガタンボ遺跡出土土器 1（ポマワカ「博物館」蔵）　50
写真 3-2　インガタンボ遺跡出土土器 2（ポマワカ「博物館」蔵）　50
写真 3-3　インガタンボ遺跡出土土器 3（ポマワカ「博物館」蔵）　50
写真 3-4　インガタンボ遺跡出土土器 4（ポマワカ「博物館」蔵）　50
写真 3-5　インガタンボ遺跡出土土器 5（ポマワカ「博物館」蔵）　50
写真 3-6　インガタンボ遺跡出土埋葬副葬品（1-1）（ポマワカ「博物館」蔵）　50
写真 3-7　インガタンボ遺跡出土埋葬副葬品（1-2）（ポマワカ「博物館」蔵）　51
写真 3-8　インガタンボ遺跡出土埋葬副葬品（2-1）（ポマワカ「博物館」蔵）　51
写真 3-9　インガタンボ遺跡出土埋葬副葬品（2-2）（ポマワカ「博物館」蔵）　51
写真 3-10　インガタンボ遺跡出土埋葬副葬品（2-3）（ポマワカ「博物館」蔵）　51
写真 3-11　ワンカバンバ川流域の風景（南北方向）　53
写真 3-12　ワンカバンバ川流域の風景（東西方向）　53
写真 4-1　インガタンボ遺跡遠景　61
写真 4-2　A 基壇遠景　61
写真 4-3　B 基壇遠景　61
写真 4-4　C 基壇、D 基壇遠景　61
写真 4-5　ワンカバンバ期：主要基壇東面の土留め壁の底石とそれを支える大石　66
写真 4-6　ワンカバンバ III 期の建築　66
写真 4-7　ワンカバンバ IV 期の建築　66
写真 4-8　ポマワカ期、主要基壇北面の階段　71
写真 4-9　ポマワカ期、更新に伴う床下の焼土層　71
写真 4-10　ポマワカ期、更新時の石鉢の奉納　71
写真 4-11　ポマワカ III 期、主要基壇上部の部屋状構造物
（上に載る円形構造物は IV 期）　71
写真 4-12　インガタンボ期、主要基壇北面の階段　74
写真 4-13　インガタンボ期、主要基壇上部の部屋状構造物　74
写真 4-14　インガタンボ期、主要基壇上部の部屋状構造物周囲出土の彩色壁画片　74
写真 4-15　インガタンボ期、主要基壇上部の部屋状構造物床下の土器出土状況　74
写真 4-16　インガタンボ期、A 基壇上部東側の部屋状構造物群
（II 期の建築が I 期の建築に載る）　74
写真 4-17　インガタンボ期、A 基壇上部西基壇の階段部分　74
写真 4-18　インガタンボ II 期、主要基壇上部の部屋状構造物
（部分的に I 期の再利用）　75
写真 4-19　インガタンボ II 期、主要基壇北東角の部屋状構造物　75

写真目次

写真 4-20　B 基壇発掘遺構　85
写真 4-21　B 基壇、ポマワカ II 期の更新に伴う埋葬　85
写真 4-22　B 基壇、ポマワカ III 期の階段　85
写真 4-23　C 基壇の発掘状況　89
写真 4-24　D 基壇の発掘状況　89
写真 5-1　PM タイプ 1 半球鉢　111
写真 5-2　PM タイプ 1 開口半球鉢　111
写真 5-3　PM タイプ 1 ボトル　111
写真 5-4　PM タイプ 2-1 半球鉢　112
写真 5-5　PM タイプ 2-1 ボトル　113
写真 5-6　PM タイプ 2-2 開口半球鉢　113
写真 5-7　PM タイプ 2-2 ボトル　114
写真 5-8　PM タイプ 2-3 開口半球鉢　114
写真 5-9　PM タイプ 3-1 短頚壺　115
写真 5-10　PM タイプ 3-1 半球鉢　116
写真 5-11　PM タイプ 3-1 開口半球鉢　116
写真 5-12　PM タイプ 3-1 外傾鉢　117
写真 5-13　PM タイプ 3-1 外反鉢　117
写真 5-14　PM タイプ 3-1 ボトル　118
写真 5-15　PM タイプ 3-2 壺　118
写真 5-16　PM タイプ 3-2 半球鉢　118
写真 5-17　PM タイプ 3-2 開口半球鉢　119
写真 5-18　PM タイプ 3-3 半球鉢　120
写真 5-19　PM タイプ 3-3 開口半球鉢　120
写真 5-20　PM タイプ 3-4 半球鉢　121
写真 5-21　PM タイプ 3-4 開口半球鉢　122
写真 5-22　PM タイプ 3-4 ボトル　122
写真 5-23　PM タイプ 3-5 短頚壺　123
写真 5-24　PM タイプ 3-5 半球鉢　124
写真 5-25　PM タイプ 3-5 開口半球鉢　125
写真 5-26　PM タイプ 3-5 外反鉢　125
写真 5-27　PM タイプ 3-6 半球鉢　126
写真 5-28　PM タイプ 3-6 開口半球鉢　127
写真 5-29　PM タイプ 3-6 外傾鉢　128
写真 5-30　PM タイプ 3-6 外反鉢　128
写真 5-31　PM タイプ 3-6 ボトル　129

写真 5-32　PM タイプ 4 半球鉢　129
写真 5-33　PM タイプ 4 開口半球鉢　130
写真 5-34　PM タイプ 5-1 短頚壺　131
写真 5-35　PM タイプ 5-1 半球鉢　131
写真 5-36　PM タイプ 5-1 開口半球鉢　131
写真 5-37　PM タイプ 5-1 外傾鉢　132
写真 5-38　PM タイプ 5-1 ボトル　132
写真 5-39　PM タイプ 5-2 壺　133
写真 5-40　PM タイプ 5-2 半球鉢　133
写真 5-41　PM タイプ 5-2 開口半球鉢 1　134
写真 5-42　PM タイプ 5-2 開口半球鉢 2　134
写真 5-43　PM タイプ 5-2 外傾鉢　136
写真 5-44　PM タイプ 5-2 外反鉢 1　136
写真 5-45　PM タイプ 5-2 外反鉢 2　136
写真 5-46　PM タイプ 5-3 開口半球鉢　137
写真 5-47　PM タイプ 5-4 鉢　138
写真 5-48　PM タイプ 6-1 短頚壺 1　139
写真 5-49　PM タイプ 6-1 短頚壺 2　140
写真 5-50　PM タイプ 6-1 半球鉢　140
写真 5-51　PM タイプ 6-1 開口半球鉢　141
写真 5-52　PM タイプ 6-1 ボトル　141
写真 5-53　PM タイプ 6-2 短頚壺　142
写真 5-54　PM タイプ 6-2 鉢　142
写真 5-55　PM タイプ 7-1 短頚壺　143
写真 5-56　PM タイプ 7-1 開口半球鉢　144
写真 5-57　PM タイプ 7-2 短頚壺　144
写真 5-58　IG タイプ 1-1 半球鉢　145
写真 5-59　IG タイプ 1-1 開口半球鉢　146
写真 5-60　IG タイプ 1-2 半球鉢　146
写真 5-61　IG タイプ 1-2 ボトル　147
写真 5-62　IG タイプ 2 半球鉢　148
写真 5-63　IG タイプ 2 ボトル　148
写真 5-64　IG タイプ 2 鐙形ボトル　148
写真 5-65　IG タイプ 3-1 半球鉢　150
写真 5-66　IG タイプ 3-1 開口半球鉢　150
写真 5-67　IG タイプ 3-1 コップ形　150

写真 5-68　IG タイプ 3-1 ボトル　151
写真 5-69　IG タイプ 3-1 鐙形ボトル　151
写真 5-70　IG タイプ 3-2 半球鉢　152
写真 5-71　IG タイプ 3-2 開口半球鉢　152
写真 5-72　IG タイプ 3-2 コップ形　152
写真 5-73　IG タイプ 3-2 ボトル　153
写真 5-74　IG タイプ 3-3 半球鉢　153
写真 5-75　IG タイプ 3-3 開口半球鉢　154
写真 5-76　IG タイプ 3-3 ボトル　154
写真 5-77　IG タイプ 4 鉢　155
写真 5-78　IG タイプ 5-1 半球鉢　156
写真 5-79　IG タイプ 5-1 開口半球鉢　156
写真 5-80　IG タイプ 5-1 外反鉢　157
写真 5-81　IG タイプ 5-1 ボトル　157
写真 5-82　IG タイプ 5-1 鐙形ボトル　157
写真 5-83　IG タイプ 5-2 開口半球鉢　158
写真 5-84　IG タイプ 5-3 半球鉢　159
写真 5-85　IG タイプ 5-3 開口半球鉢　159
写真 5-86　IG タイプ 5-3 外傾鉢　160
写真 5-87　IG タイプ 5-3 外反鉢　160
写真 5-88　IG タイプ 5-3 ボトル　161
写真 5-89　IG タイプ 5-4 半球鉢　162
写真 5-90　IG タイプ 5-4 開口半球鉢　162
写真 5-91　IG タイプ 5-4 ボトル　162
写真 5-92　IG タイプ 6-1 短頚壺　163
写真 5-93　IG タイプ 6-1 半球鉢　164
写真 5-94　IG タイプ 6-1 開口半球鉢　165
写真 5-95　IG タイプ 6-1 外傾鉢　166
写真 5-96　IG タイプ 6-1 外反鉢　166
写真 5-97　IG タイプ 6-1 高杯　166
写真 5-98　IG タイプ 6-1 ボトル　167
写真 5-99　IG タイプ 6-2 短頚壺　167
写真 5-100 IG タイプ 6-2 半球鉢　168
写真 5-101 IG タイプ 6-2 開口半球鉢 1　169
写真 5-102 IG タイプ 6-2 開口半球鉢 2　169
写真 5-103 IG タイプ 6-2 外反鉢　170

写真 5-104 IG タイプ 6-2 ボトル 170
写真 5-105 IG タイプ 6-3 開口半球鉢 171
写真 5-106 IG タイプ 6-4 半球鉢 172
写真 5-107 IG タイプ 6-4 開口半球鉢 172
写真 5-108 IG タイプ 6-4 外反鉢 173
写真 5-109 IG タイプ 6-5 短頚壺 174
写真 5-110 IG タイプ 6-5 半球鉢 174
写真 5-111 IG タイプ 6-5 開口半球鉢 175
写真 5-112 IG タイプ 6-5 外傾鉢 176
写真 5-113 IG タイプ 6-5 外反鉢 176
写真 5-114 IG タイプ 6-5 ボトル 177
写真 5-115 IG タイプ 6-5 鐙形ボトル 177
写真 5-116 IG タイプ 6-6 半球鉢 178
写真 5-117 IG タイプ 6-6 開口半球鉢 1 179
写真 5-118 IG タイプ 6-6 開口半球鉢 2 179
写真 5-119 IG タイプ 6-6 外反鉢 180
写真 5-120 IG タイプ 6-6 ボトル 181
写真 5-121 IG タイプ 7-1 半球鉢 182
写真 5-122 IG タイプ 7-1 開口半球鉢 182
写真 5-123 IG タイプ 7-1 外反鉢 183
写真 5-124 IG タイプ 7-1 ボトル 183
写真 5-125 IG タイプ 7-1 鐙形ボトル 183
写真 5-126 IG タイプ 7-2 半球鉢 184
写真 5-127 IG タイプ 7-2 開口半球鉢 185
写真 5-128 IG タイプ 7-2 ボトル 185
写真 5-129 IG タイプ 8-1 無頚壺 187
写真 5-130 IG タイプ 8-1 短頚壺 1 187
写真 5-131 IG タイプ 8-1 短頚壺 2 188
写真 5-132 IG タイプ 8-1 半球鉢 189
写真 5-133 IG タイプ 8-1 開口半球鉢 190
写真 5-134 IG タイプ 8-1 外反鉢 191
写真 5-135 IG タイプ 8-1 開口円筒鉢 1 191
写真 5-136 IG タイプ 8-1 開口円筒鉢 2 192
写真 5-137 IG タイプ 8-1 ボトル 192
写真 5-138 IG タイプ 8-1 鐙形ボトル 193
写真 5-139 IG タイプ 8-2 壺 194

写真 5-140 IG タイプ 8-2 半球鉢 195
写真 5-141 IG タイプ 8-2 開口半球鉢 1 196
写真 5-142 IG タイプ 8-2 開口半球鉢 2 196
写真 5-143 IG タイプ 8-2 外傾鉢 198
写真 5-144 IG タイプ 8-2 外反鉢 198
写真 5-145 IG タイプ 8-2 ボトル 199
写真 5-146 IG タイプ 8-3 半球鉢 200
写真 5-147 IG タイプ 8-3 開口半球鉢 201
写真 5-148 IG タイプ 8-3 外傾鉢 201
写真 5-149 IG タイプ 8-3 外反鉢 202
写真 5-150 IG タイプ 8-3 開口円筒鉢 202
写真 5-151 IG タイプ 8-3 ボトル 203
写真 5-152 IG タイプ 8-4 壺 204
写真 5-153 IG タイプ 8-4 半球鉢 204
写真 5-154 IG タイプ 8-4 開口半球鉢 205
写真 5-155 IG タイプ 8-4 外反鉢 205
写真 5-156 IG タイプ 9-1 短頚壺 1 207
写真 5-157 IG タイプ 9-1 短頚壺 2 207
写真 5-158 IG タイプ 9-1 半球鉢 208
写真 5-159 IG タイプ 9-1 開口半球鉢 208
写真 5-160 IG タイプ 9-1 ボトル 209
写真 5-161 IG タイプ 9-2 短頚壺 210
写真 5-162 IG タイプ 9-2 鉢 210
写真 5-163 IG タイプ 10-1 短頚壺 211
写真 5-164 IG タイプ 10-1 半球鉢 212
写真 5-165 IG タイプ 10-1 開口半球鉢 212
写真 5-166 IG タイプ 10-2 壺 213
写真 5-167 IG タイプ 10-2 鉢 213
写真 5-168 IG タイプ未分類 214
写真 6-1　石鉢① 220
写真 6-2　石鉢② 220
写真 6-3　石鉢③ 220
写真 6-4-1 石鉢④ 221
写真 6-4-2 石鉢④ 221
写真 6-4-3 石鉢④ 221
写真 6-5　石製装身具未製品（ポマワカ期） 225

写真目次

写真 6-6　石製管玉（ポマワカ期）　225
写真 6-7　石製装身具未製品（ポマワカ期）　225
写真 6-8　石製円盤状製品（インガタンボ期）　225
写真 6-9　石製玉製品（インガタンボ期）　225
写真 6-10　石製玉製品（インガタンボ期）　225
写真 6-11　石製管玉（インガタンボ期）　225
写真 6-12　石製玉製品（インガタンボ期）　225
写真 6-13　石英製剝片①　227
写真 6-14　石英製剝片②　227
写真 6-15　黒曜石製剝片①　227
写真 6-16　黒曜石製剝片②　227
写真 6-17　錐状石器　227
写真 6-18　すり石　227
写真 6-19　石錘①　227
写真 6-20　石錘②　227
写真 6-21　貝製板状玉製品（ワンカバンバ期）　232
写真 6-22　貝製板状玉製品①（ポマワカ III 期）　232
写真 6-23　貝製板状玉製品②（ポマワカ III 期）　232
写真 6-24　貝製板状玉製品③（ポマワカ III 期）　232
写真 6-25　貝製板状玉製品①（ポマワカ IV 期）　232
写真 6-26　貝製板状玉製品②（ポマワカ IV 期）　232
写真 6-27　用途不明貝製品（ポマワカ III 期）　232
写真 6-28　貝製未製品（インガタンボ期）　232
写真 6-29　貝製ペンダント（B 基壇、ポマワカ I 期）　233
写真 6-30　ウミギクガイ製玉製品（B 基壇、ポマワカ IV 期）　233
写真 6-31　ウミギクガイ製管玉（B 基壇、ポマワカ IV 期）　233
写真 6-32　貝製板状玉製品①（インガタンボ I 期）　233
写真 6-33　貝製板状玉製品②（インガタンボ I 期）　233
写真 6-34　貝製板状玉製品③（インガタンボ I 期）　233
写真 6-35　用途不明貝製品（インガタンボ I 期）　233
写真 6-36　貝製未製品（インガタンボ I 期）　233
写真 6-37　ウミギクガイ製玉製品（インガタンボ I 期）　235
写真 6-38　貝製ペンダント（インガタンボ II 期）　235
写真 6-39　ウミギクガイ製玉製品（インガタンボ II 期）　235
写真 6-40　ウミギクガイ製玉製品（インガタンボ II 期）　235
写真 6-41　用途不明貝製品（インガタンボ II 期）　235

写真目次

写真 6-42　貝製ペンダント（インガタンボ II 期）　235
写真 6-43　陸生貝製品（用途不明）　237
写真 6-44　陸生貝製ペンダント　237
写真 6-45　土製品　238
写真 6-46　骨製ピン（ポマワカ III 期）　238
写真 6-47　骨製チューブ（ポマワカ IV 期）　238
写真 6-48　骨製ピン（インガタンボ II 期）　238
写真 7-1　インガタンボ遺跡出土、ザルガイ　247
写真 7-2　インガタンボ遺跡出土、サザエ科　247
写真 7-3　インガタンボ遺跡出土、ウグイスガイ科　247
写真 7-4　インガタンボ遺跡出土、アコヤガイ科　247
写真 7-5　インガタンボ遺跡出土、イタヤガイ科　247
写真 7-6　インガタンボ遺跡出土、トウガタマイマイ科①　247
写真 7-7　インガタンボ遺跡出土、トウガタマイマイ科②　247
写真 7-8　インガタンボ遺跡出土、トウモロコシの澱粉　247
写真 9-1　ポマワカ市近郊出土の石皿　307

第 1 章：序章-本論文の目的と背景

本章では、はじめに本論文の目的について言及する。次に、研究方法と理論的背景についてまとめ、本研究の問題意識と理論的位置づけ、および意義を明らかにすることで、本論文の方向性を明確にする。そのうえで最後に、本論文の構成を述べる。

1-1. 本論文の目的

本論の目的は、ペルー共和国北部ワンカバンバ川流域（図 1-1）を対象に、当該地域における遺跡分布調査、ならびに神殿であるインガタンボ遺跡の発掘調査にもとづいた考古学データを分析することで、アンデス文明形成期（紀元前 3000-50 年：表 1-1）における社会動態を明らかにし､その背景に存在する行為主体としての社会成員の活動と戦略を考察することである｡その際、分析データを、ワンカバンバ川流域の近接地域、さらには広くアンデス全体におけるデータと比較、あるいは連動させることで、当該社会の独自性や他地域に展開した諸社会との共通性を抽出する。ここでいう神殿とは単なる居住目的の施設ではなく、公共的・記念碑的・宗教的側面をもつ建造物のことで、祭祀センターや公共建造物などと呼ばれる場合もある[Donnan ed. 1985; 加藤・関編 1998; Moore 1996]。形成期の神殿は社会的統合の中心であるとともに、交流の場でもあり、そこでの建設活動や儀礼、地域間交流といった諸活動は、当該社会の展開において重要な役割を果たしたとされる[Burger 1992; 加藤・関編 1998; Moore 1996]。本論でもこの立場をとり、神殿をめぐる諸活動の分析を通じて、社会成員の特質と彼らによるイデオロギー操作、集団内の社会的差異、および外部社会との地域間交流と、それら諸要素の相互関係から、社会成員の活動と戦略を明らかにする。ここでいう社会成員とは神殿をつくり、利用し、支えた人々のことである。本論では、そのなかでもとくに考古データから示される集団内の特定の人々、つまりはリーダーの行為や彼らと他の社会成員との関係に着目する。なぜならば、そうした彼らの動きこそが、神殿やそれを支えた社会の維持や変化に際して重要な役割を果たしたと考えられるためである。この視点に立てば、社会成員の活動と戦略とは、リーダーといった特定の人々が社会内部の差異化を図る動きや、周囲に存在する他の神殿との関係を構築していく際にとる動きとして捉えられる。また、上記の動きをとる際に生じる他の社会成員、もしくは他の神殿を支える人々との相互関係の中でとられる動きも、そこに含まれよう。なお、ここでいうリーダーとは、特定社会のなかで流動的ではあるが、一定の役割を持つ個人や集団のことである[関 2006: 64, 2010]。

本論で対象とする形成期社会は、国家以前の社会、あるいは複雑社会（complex society）[1]と呼ばれる。実際にどのような社会が存在したのか、その社会像はあまり明確ではないが、神殿と称される建造物がこの時期のアンデス文明を特徴づけていることは明らかである。そのため、既述したように、形成期社会は神殿を中心に展開したというのが現在の論調である。したがって、形成期社会を論じる際に神殿を調査し、分析の軸に定めることの意味は非常に大きい。

[1]国家と国家的な特徴を多く備えた非国家社会のことである[Yoffee 2005: 16]。

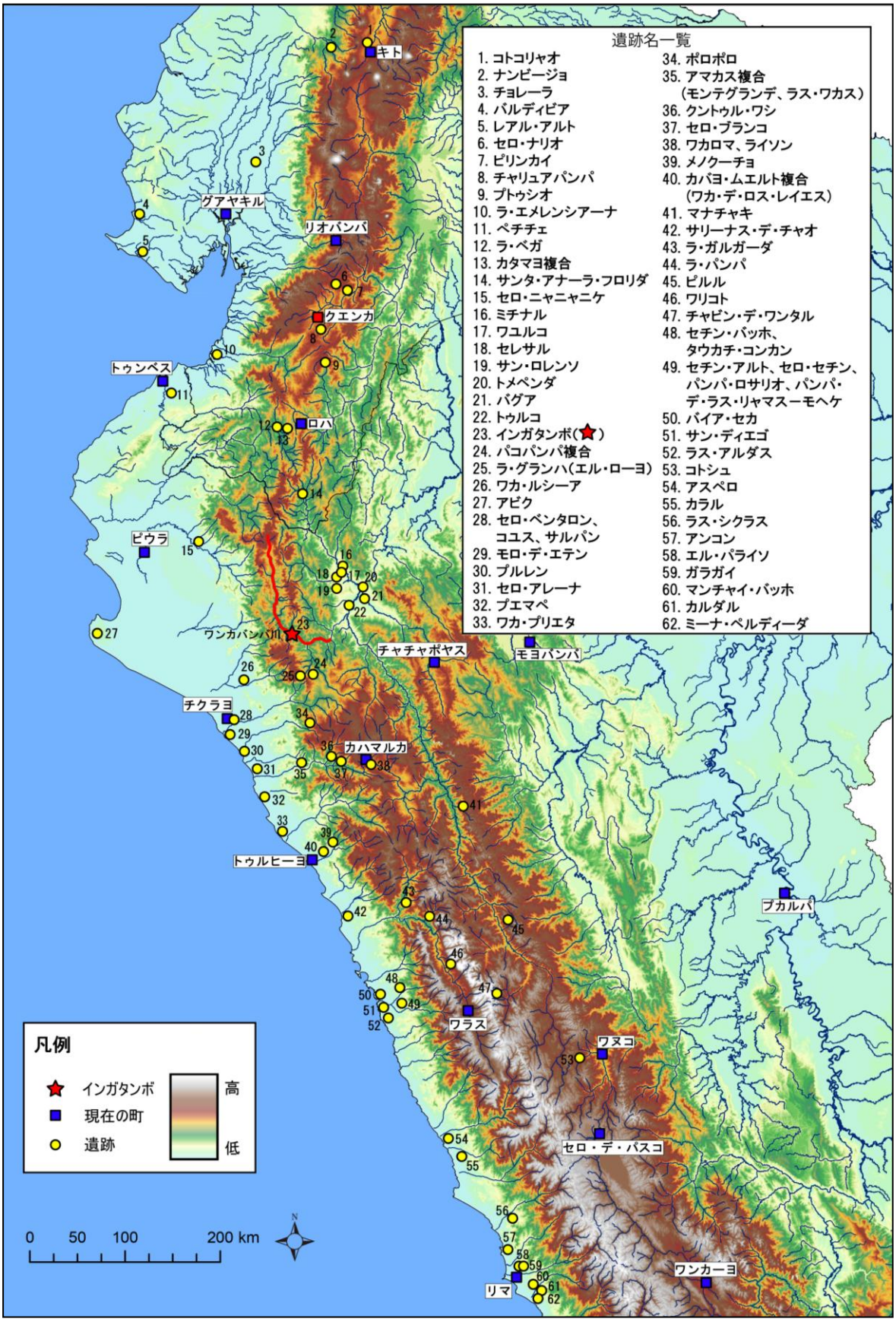
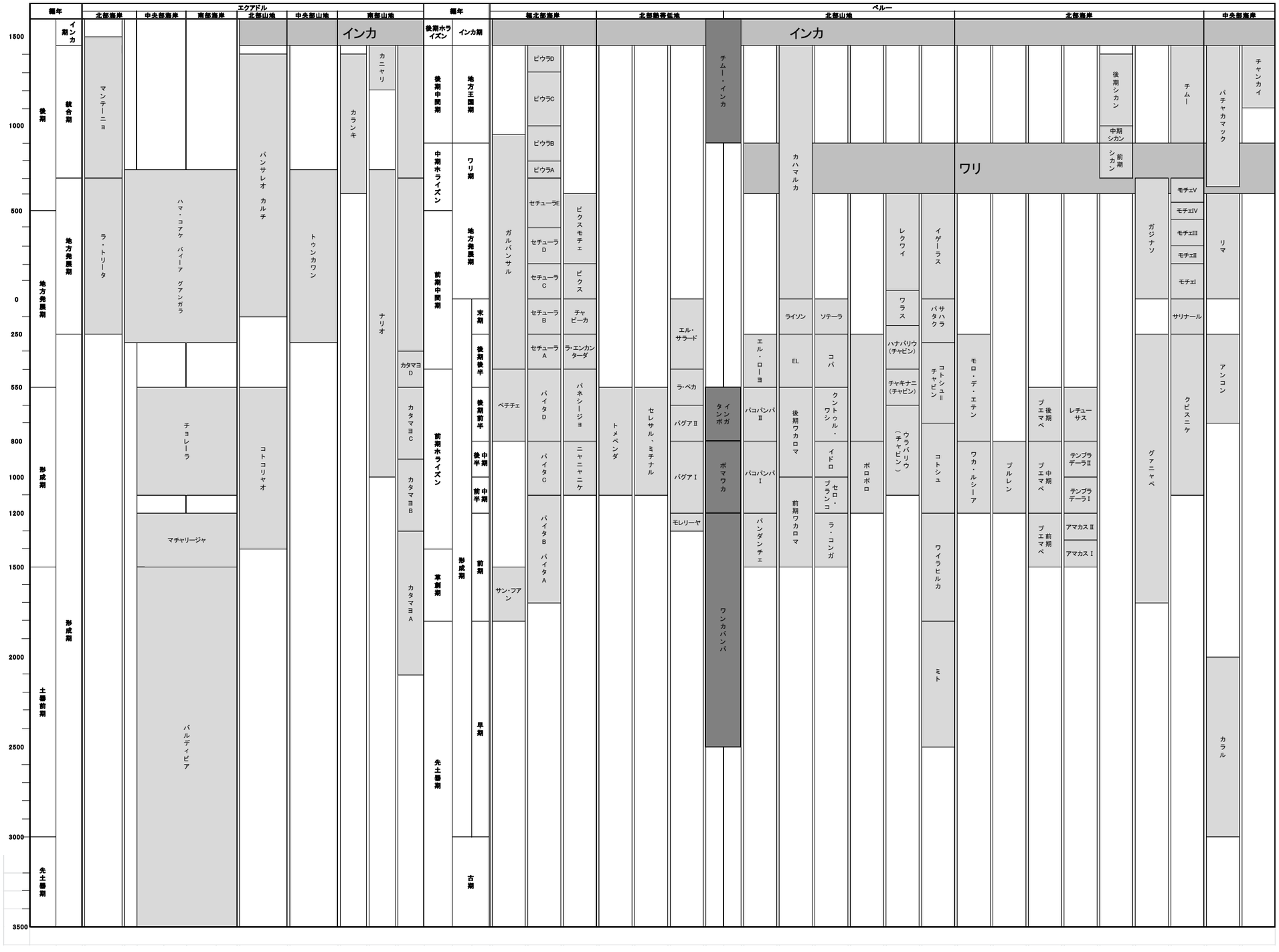


図 1-1　アンデス形成期における本論文関連遺跡とワンカバンバ川流域、
およびインガタンボ遺跡（★）の位置

表 1-1　先史アンデスの編年体系[関・青山 2005 より改変]



事実、これまでの形成期研究の焦点は自ずと神殿にあてられてきた。本研究もこの流れに位置づけられるものである。しかし、神殿における諸活動に焦点を絞りながらも、社会成員の活動と戦略に力点をおいて、実際に社会を動かした人々の行為を通じて形成期の社会動態を捉えようとする研究は、これまでほとんど実施されていないため、従来の文明形成論に新たな視座を与えることができると考えられる。

また、本論で捉えるべき社会動態とは、通時的な社会変化と、その過程、ならびにメカニズムであり、それらを考古学データを用いて論じることが本論の議論の中心となる。これまでの社会動態論では、研究者の重視する立場によって、社会変化の内的要因、もしくは外的要因のどちらかが重要視されることが多かった。この場合、内的要因とは生産力の増大や社会組織の構築などといった社会内部の展開であり、外的要因とは交易やイデオロギーなどの情報を含む交流、あるいは戦争などである。

しかし、実際に社会動態を考察するためには、社会の内的、および外的要因の双方から変化を捉える必要があることは明白であり、本論では両者をふまえて社会動態を論じる。そしてその際に、上記の二つの要因が絡み合う通時的な変化の諸相を捉えることを通じて、諸活動の中心となった人々やその集合としての社会の活動と戦略を明らかにする。このため、ワンカバンバ川流域という特定地域社会内部の動態と、外部社会との地域間関係の動態、すなわち地域間交流の動態の両面から社会動態を論じたうえで、実際に社会を動かした人々の主体的実践を検討していくのである。

こうした社会変化の過程や要因をめぐる諸問題は、人類学の主要トピックの一つである。その中で、物質文化資料を対象として過去を扱う考古学は、過去から現在に至る通時的な視点をもつがゆえに、最も有効な分野として貢献してきた。とくに、本研究の対象となる中央アンデス[1]と呼ばれる地域に展開したアンデス文明は、文字をもたなかった点や他文明との直接的な接触や交流をもたなかった点、アンデスの特徴でもある多様な環境を利用しながら文明が展開したという点で、強い独自性を有した文明である。したがって、文字資料が存在しない先史アンデス社会の場合、長期的な視点で過去の社会動態を捉えるためには、考古学が唯一といってもよい研究手法となる。

考古学的手法が適用される対象は様々であるが、本研究でとりあげるアンデス文明の胎動期とされる形成期の場合、神殿と呼ばれる大規模建造物の建設がはじまることから、それらを対象、かつ中心とした研究が推し進められてきた。しかも、そこでの関心は、神殿の発掘調査を通して文明の形成要因や形成過程を研究することであった。そのなかで、神殿の建設活動自体を社会変化の主要因とする議論 [加藤 1993: 44-46; 大貫 1989: 193; 関 1998b: 304-305]や、神殿という場を通じて生じる日常生活圏を超えた人や物資の移動である地域間交流が、文明形成において重要な役割を果たしたという二つの議論が生まれてきた[加藤・井口 1998: 220-224; Burger 1992: 220-227]。

[1]現在のペルーとボリビアの一部を指す。エクアドルは北部アンデス、あるいは中間領域と称される文化領域の一部に含まれる。

本論で注目するのは、まさにこの二つの点である。現在、形成期の神殿は、社会的統合の中心であったと位置づけられている。したがって、神殿で執り行われる建設活動や儀礼といった諸活動には、当該社会や社会内部のリーダーの戦略ならびに意図が反映されている。また、神殿における諸活動を維持するためには、それを支える経済的行為や政治的行為、そして実際に活動にたずさわる人々の存在が不可欠である。このため、神殿建築や神殿出土遺物、ならびに遺跡分布データの通時的変化を捉えることを通じて、社会内部のリーダーの特質、もしくは彼らによるイデオロギーの操作、社会に生じた一般社会成員との社会的差異について考察し、対象社会内部の動態、およびその背景にある人々の活動や戦略にアプローチすることが必要となる。

その一方で、社会動態の外的要因、すなわち地域間交流についても同様のアプローチが必要であろう。しかし従来、地域間交流は、土器の様式的類似性といった定性的な分析によって考察されてきた。また、個別の目的意識のもとで調査された各地の神殿より出土した考古遺物の類似性をもとに、遠く離れた地域が直接的に結びつけられるといった問題もあり、隣接地域との関係を総合的に明らかにしようとする研究はほとんど皆無である。とりわけ、これまでの研究では、地域間交流を実際に担った人々の動きは、ほとんど考慮されてこなかった。これらのことを受けて、本研究では、単に考古遺物の比較研究だけではなく、神殿間、あるいは地域間を実際に移動した人々、ならびにその移動を統御した人々の行為や戦略の結果として交流を捉えるために、GIS（地理情報システム）を用いて地域間ルートの分析を行い、地域間交流の動態について考察する。

このように、従来までの研究では十分に議論されてこなかった人々の行為、とくに社会において実際に建設活動や儀礼、地域間交流を行った人々の存在を明確に考慮する点が、本論の最大の特徴である。そしてそのうえで、社会成員の主体的実践がどのように社会動態と結びつくのかを新たな視点から論じることが、本論のねらいである。

本論の対象となる現在のペルーとエクアドルの国境地域の研究は、土器の出現が時期的に先行するエクアドルやコロンビアからペルーへの土器やその製作技術導入の問題、エクアドル領の暖流を生息域とするウミギクガイ（*Spondylus* sp.）やカブトソデガイ（*Strombus galeatus*）[1]といったペルーでは奢侈品とされる暖流系の貝の獲得などに関して、地域間交流を考えるうえで重要とされている。本研究の対象であるワンカバンバ川流域は、まさにそのエクアドルとペルーとの国境地域に位置し、考古学上の研究後進地域でありながらも、その地政学的な位置づけから形成期の地域間交流を論じるうえで重要な地域である。つまり、先にあげた土器の導入経路や貝の入手経路を考慮すると、当該地域は地域間交流ルートの結節点となるのである。そのため、ワンカバンバ川流域を研究対象とすることで、地

[1]アメリカ大陸を産出地とするウミギクガイ（*Spondylus* sp.）は 2 種あるため[Gorriti 2000; 西澤 2007]、多くの場合、*Spondylus* sp.として記載される。また、カブトソデガイ（*Strombus galeatus*）については、形成期の調査報告において種に関する明確な論述は少ない。多くの場合は、*Strombus* として記述されるが、なかには *Strombus galeatus* と表記されるものもある[Bourget 1990: 53]。

域間交流の実態に迫ることが可能になると考えられる。また、ワンカバンバ川流域のデータを、単に一地域の事例としてではなく、時間的にも空間的にもアンデス全体というマクロなコンテクストのなかに位置づけることで、ワンカバンバ川流域社会だけでなく、他地域における社会動態についても、包括的に捉えることが可能となる。そして、それを介してはじめて、ワンカバンバ川流域を中心とした形成期の社会動態を明らかにし、かつ当該社会を実際に動かした人々の活動や戦略について多角的に論じることができると考えられる。

1-2. 本論文の研究方法

前節でも述べたように、本研究の主たる対象は、神殿建築や土器といった考古資料である。では、考古資料から本論の目的である社会動態をみていく際に、社会をどのようにして捉えたらよいのであろうか。社会の捉え方には、様々な立場があり、社会をシステムとして捉える見方もあれば[Binford 1962]、より多面的で複合的なネットワーク群として捉える研究もある[マン 2002]。ただし、総じていえば、社会とは社会関係の総体であると考えられる。そして全ての社会には、経済的、社会的、宗教的、政治的活動の相互関連がみられ、その結びつき方や関係の強弱などによって、各社会の特性が表れると想定される。そこで、体系的な文字が存在しない形成期において特定社会の動態を明らかにするために、本論では物質文化、とくに当該時期の諸活動の中心である神殿を通じて、神殿を支える人々、ならびにその集合としての社会にアプローチするのである。また、本論では、社会における行為主体としての個人の思考、意思や役割、もしくは社会の戦略を重視する立場をとる。なぜならば、社会はひとりでに変化するようなものではなく、その変化は人々の主体的実践によってもたらされるためである。このことから本論では、人々がどのような手段で社会を維持、あるいは変化させたのか、ということを中心に、形成期社会における経済的、社会的、宗教的、政治的様相、およびその変化の過程と背景やメカニズムを論じていく。

このときに、本論で注目するのが神殿と神殿から出土する考古遺物である。なぜならば、神殿という場における諸活動とは、宗教的、経済的、社会的、政治的行為が集約されたものであると考えられるからである。このなかでもとくに顕著なのが、宗教的行為である。たとえば、神殿の建設に際しては、立地の選択や建築プランの設計が必須であるが、神殿の形態や配置は、その場で行われる儀礼やその指導者と参加者との区分、もしくは参加人数に深く関わっており、個人を社会に位置づけるイデオロギーの普及装置ともなる。ここでいうイデオロギーとは、社会秩序を示すコードであり、不可視的な面を強く持っている[DeMarrais et al. 1996; Earle 1997, 2002; 関 2006]。また、イデオロギーは、信仰体系や超自然的な情報へのアクセス、あるいは特定の人物や集団の思考や行動、儀礼、物質文化と深く結び付いている。このため、イデオロギーは、行為者のパフォーマンス能力、つまりは神殿で行われる建設活動や儀礼を通じて、もしくは儀礼で使用される象徴財（神殿の建築配置や宗教的シンボルを描いた奢侈品）によって具現化され、社会へと浸透する。こ

れは、イデオロギーの物質化、または可視化とよばれ、集団内の社会的不平等に正統性をもたせるものである[DeMarrais et al. 1996, Earle1997, Vaughn 2005]。このことからイデオロギーは、社会変化において積極的な役割を果たすものとされ、イデオロギーが物質化された神殿や神殿から出土する考古遺物の分析を通じて、イデオロギーを操作する人々や集団の戦略といった社会的、もしくは政治的行為が考察可能となるのである。

そのうえ、神殿建設に際しては、建設作業における労働力の確保や建設活動を支える食糧や資材の調達が必要であるため、神殿は宗教的行為だけでなく、経済的行為とも深く関連している。また、神殿で執り行われる儀礼や饗宴は、経験を共有し、イデオロギーを浸透させる場となることから、社会的紐帯を強化し[Ikehara and Shibata 2005; Vega-Centeno 2005a, 2005b]、参加集団内の関係性を明確化する機会となる。さらに、儀礼で使用される奢侈品や威信財の製作や獲得は、物資へのアクセスをめぐる集団内の社会的差異を助長する。奢侈品や威信財によっては、遠隔地から入手する必要があるものも存在するため、その獲得には地域間交流が必要となる。これは、儀礼と関わる情報や技術の入手においても、同様であると考えられる。つまり、神殿をめぐる活動は、特定の地域内で完結するものでなく、常に外へと開いたものであるため、物資の輸送やルートの維持、管理に加えて、他集団との関係が重要となってくるのである。このようなことから、奢侈品の生産と交換、すなわち地域間交流は、当該社会の経済だけではなく、イデオロギーとも深く関連し、集団内の上下関係を象徴的に顕在化、固定化し、政治的ネットワークを形成するのに役立つ[関 2006: 30]。したがって、本論では、遺跡の立地や機能と生態系との関係を捉えようとするセトルメント・パターン研究、動植物遺存体の種同定や鉱物資源の産地同定、土器などの考古遺物の比較研究、ならびに GIS による地域間ルートの分析を通じて総合的に、人の動きの総体として地域間交流を考察する。

以上のことから、神殿を研究対象とすることで、形成期社会の諸側面を総合的に捉え、かつ諸側面相互の関係性を捉えることを通じて、実際に社会を動かした人々の存在を重視しながら、社会動態を論じることができると考えられる。なお、経済などが十分に発展にしていない社会では、イデオロギーの重要性が増すという指摘 [DeMarrais et al. 1996: 16; 関 2006]もあり、神殿を中心に社会的統合が進んだとされる形成期においては、イデオロギーの重要性は極めて高いことが想定される。

これらのことをふまえたうえで、前節で提示した本論の目的を達成するために用いた研究方法は以下の通りである。

まず、ワンカバンバ川流域内で最大規模を誇る神殿遺跡であるインガタンボ[1]で、集中的な発掘調査を実施することである。この発掘のねらいは、第一に、特定遺跡における詳細な建築データを獲得することで、神殿における建設活動を明らかにするためである。そして第二に、建築に伴う出土コンテクストの確かな考古遺物を獲得し、分析を行うことである。そこでは、神殿の建設活動や儀礼だけでなく、それらの諸活動を支える人々の社会的、

[1]インカの宿駅（Ingatambo）という意味である。

経済的活動を明らかにし、神殿の成立とその社会的位置づけの通時的変化を捉えることになる。これは、前節で述べた社会変化の内的要因と対応する部分である。そしてこの分析を通じて、本論の目的の一つであるワンカバンバ川流域内の特定遺跡における社会動態を明らかにし、インガタンボを支える人々、とくにリーダーによって実施された活動や戦略について論じていくことが可能となる。

また、本研究には、インガタンボ遺跡の発掘調査に加えて、ワンカバンバ川流域全体の遺跡分布調査（遺跡の表面観察と地表面の遺物採集）が含まれる。このねらいは、流域内の諸遺跡の分布と生態環境との関連を捉えること、そして、集中発掘を行ったインガタンボの建築と土器データを用いて、分布調査によって獲得した建築や土器データを分析することであった。これらによってはじめて、特定遺跡だけにとどまらずに、地域的な枠組みのなかで流域社会の宗教的、経済的、社会的、政治的諸関係の通時的変化を捉え、ワンカバンバ川流域全体の社会動態を明らかにすることができると考えられる。これは、社会変化の内的要因を、より広い地域社会の枠組みのなかで捉えると同時に、流域社会における特定の人々による活動や戦略、あるいは流域内の神殿間の関係をめぐる活動や戦略について論じるためのものである。

次に、社会変化の外的要因についてである。本論では、もう一つの目的である地域間関係の動態、つまりは地域間交流の動態を明らかにするために、大きく二つの方法を用いてこの問題に取り組む。一つは、考古遺物の定性的分析で、発掘調査と遺跡分布調査で採取した資料と、ペルー北部地域とエクアドル南部地域の先行研究データとの比較研究、および動植物遺存体の種同定、ならびに石器の産地同定である。もう一つは、離れた地域間を直接的に結びつけることを避け、地域間を動く人の存在を重視して、地域間交流を捉えるために実施した地域間ルートの分析である。地域間ルートの分析に際しては、第一に、GISを用いて地形を考慮した空間分析を行い、地域間ルートを検討する。そして第二に、先述の遺跡分布調査データを用いて、ワンカバンバ川流域内の遺跡分布、とくに神殿遺跡の分布と地域間ルートとの空間的関係を考察する。なお、これら以外にも補足的ではあるが、形成期以降のインカ期における幹線であるインカ道に関する先行研究を用いて、地域間ルートの時期的変化についての検討を行う。また、遺跡分布調査時に行った地域住民へのインタビューから、地域間ルートの移動可能性を検証する。そのうえで、ワンカバンバ川流域を中心としたペルー北部とエクアドル南部にまたがる地域間交流の実態、およびその動態を究明していく。

最後に、上記の研究方法をとり、その結果を総合することで、ワンカバンバ川流域の社会動態を単なる地域的な事例としてではなく、アンデス全体という枠組みのなかで捉え、その位置づけを明らかにして、形成期における地域間交流と社会動態との相互関係を論じる。これらの全てをふまえてはじめて、インガタンボ、もしくはワンカバンバ川流域社会と周辺地域社会との地域間関係をめぐる流域社会の人々、とくに特定の人々の活動や戦略について論じていくことができると考えられる。

ただし、これまで述べてきたような内的、あるいは外的要因といった枠組みは、あくまで分析上の概念である。神殿の配置に関する情報やイデオロギー、もしくは儀礼における奢侈品や威信財の獲得といった神殿をめぐる諸活動にみられるように、内的、外的といった枠組みは、アプリオリな存在として規定されるようなものではなく、両者の相互関連が重要であることは明白であり、あくまでも分析を進めるうえでの視点であることを明記しておく。

1-3. 本研究の背景

本節では、本研究の背景について述べ、本論の意義と視点を明らかにすると同時に、前節で述べた研究方法の背景を明確にする。

第 1 節でも述べたように、これまでの形成期研究の根幹は、神殿を中心とした文明形成をめぐる議論である。本論でも神殿が主たる研究対象であることには違いがない。しかし、アンデス考古学の研究動向、方法、ならびに方向性は、これまでずっと一様であったわけではなく、考古学とナショナリズムの関係や同時代の人類学の学問的潮流の影響を受けて変化し続けている。たとえば、1940 年代には、アンデス文明の起源を求める研究が中心であった [Tello 1943; Larco 1941]。それに対して 1960 年以降には、各地域での調査の進展によって、地域ごとの多様性が認識されるようになった結果、各地域単位での社会展開の解明が中心的課題として取り上げられるようになる[Donnan ed. 1985 など]。現在の研究は、本研究も含めてこの流れのうえに位置づけられるものである。

このように、1960 年代はアンデス研究において大きな転換がみられた時期であり、この時期に生じたプロセス考古学と呼ばれる理論的潮流は、今日においてもいまだ影響が強い。ビンフォードやフラナリーに代表されるこの研究は、新進化主義と一般システム論、生態学的アプローチをとりいれ、仮説演繹的手法を用いて文化変化の過程を探求、説明することを中心課題とするものであった[Binford 1962; Binford and Binford eds. 1968; Flannery 1972; Renfrew and Cherry 1986; Willey and Sabloff 1993]。また、人間の行為の一般法則を追及し、客観性を求めて検証可能性を重視したのもこれらの研究の特徴である。さらにこの時期には、特定の遺物や遺構の分布を分析する空間分析の発展がみられた。

このような理論的影響は、アンデス研究において現在に至るまでみることができる。とくに 1980 年代からは、各地の地域的多様性への関心の高まりや[Burger 1985: 272]、国家形成論といった社会変化の過程への関心もあって[Billman 1999a: 3-4; Haas 1987: 2-4]、遺跡の空間的地理的位置関係、および遺跡間の機能と生態環境との関係を考察するセトルメント・パターン研究が増加し、流域や盆地といった限定された地域内において社会変化が研究されるようになった。たとえば、ビルマンは、ペルー北部海岸のモチェ川流域において、適応、政治、軍事といった理論モデルを用いて中央集権的政治組織の発展を考察した[Billman 1996]。また、ポゾルスキーは、北部中央海岸のカスマ川流域で立地と生業基盤の変化を通じて社会変化を捉えようとした[Pozorski and Pozorski 1987]。さらに、カスマ川

の北に位置するサンタ川流域で、人口圧と戦争の社会変化における役割を論じたウィルソンの研究なども[Wilson 1988]、上記の動きのなかで生じたものである。

その一方で 1980 年代以降になると、プロセス考古学への批判から、ポストプロセス考古学、あるいはコンテクスト考古学と称される理論的動向が表れてきた。これは、ホダーやシャンクス、ティリーの研究に代表されるように、一般性ではなく各地域社会の個別性や歴史性に着目する、もしくは社会変化における個人の思考、意思や役割に主眼をおく一連の研究である [Hodder 1982, 1986, Shanks and Tilley 1987; Yoffee 1993]。アンデスでも、ダルトロイやハストーフによるインカの支配における地方の主体性を重視した研究[D'Altroy 1992, D'Altroy and Hastrof eds. 2001]や、埋葬から死の観念を扱ったイズベルの研究[Isbell 1997]など、この理論的動向に沿ったものがみうけられる。

これらの研究においては、個人は社会関係や社会構造の形成、ならびに構築に重要な役割を果たすと同時に、個人の行動は社会構造によって規定されるものと考えられている。つまり、社会を考察する際に、社会構造と行為主体となる人々との相互作用に焦点が当てられているのである。

このような状況を鑑みると、本論の分析対象である物質文化は、当時の社会状況を反映するものであるというだけではなく、個人が社会に対して行った働きかけ、もしくはその相互作用の証であり、それらの結果として捉えることができる。この意味において、物質文化を介して特定社会の動態を捉えようとする研究の意義は大きく、そのため自ずと物質文化の分布や変化は、それぞれがおかれた個別のコンテクストのなかで追究される必要がでてくる。こうして、ポストプロセス考古学の枠組みのなかで社会変化が研究される場合、単にその過程を説明するのではなく、その過程において個人や集団が、どのようにして社会を維持、または変化させたのかということが中心的課題となる。

近年の形成期研究においてみられるような、社会におけるリーダーの能力や行為などに着目し、権力の生成や様態、その通時的変遷を扱う研究などは、この流れに位置づけられるものである[Bandy 2005; Rick 2005; 関 2006]。また、これまで述べてきたように、形成期の社会動態の解明に際して、地域社会に固有のコンテクストを重視したうえで、個人や集団の存在や役割、あるいはそれらの集合である社会の戦略といった点を重視する本研究は、同様の立場をとるといえる。なお、ここでいうリーダーとは、先述のとおり、特定社会のなかで流動的ではあるが、一定の役割を持つ個人や集団のことである[関 2006: 64, 2010]。これに対してエリートとは、階層性にもとづいた固定的、もしくは生得的な地位や身分を有する個人や集団のことである。以下、本論では同様の基準を用いて記述を行う。

さらに、形成期の先行研究では、神殿建築や神殿出土遺物といった考古資料の広範囲におよぶ共通性が常に指摘されてきた。しかし、その一方で、各地にみられる神殿の形態や規模、建築配置や遺物の出土状況の多様性も現在では明白となってきている。このような諸状況が生じる背景には、それぞれの地域社会において独自の社会的状況が展開していたことが想定される。したがって、形成期の社会動態を考察するためには、各神殿、または

各地域それぞれのコンテクストに即して、特定の神殿や特定地域の社会状況を把握しなければならない。また同時に、形成期の諸活動の中心とされる神殿個々の社会的位置づけを明らかにする必要もある。そのためには、神殿における詳細な考古学的調査にもとづいた、遺構や遺物といった物質文化の研究が必須である。なぜならば、建造物や出土遺物などの物質文化には、社会的意味が付与されているため[Shanks and Tilley 1987: 51-53]、その建設や生産、交換においても社会的現実が反映されると考えられるからである。これをふまえると、発掘調査を通じて明らかとなった神殿そのものや出土コンテクストの確かな遺物の変化は、神殿を支える人々やその集合である社会の動きと深く連動する。したがって、それらの分析を介して、物質文化と行為主体としての人々、あるいは社会との相互関係を動態的に捉えることができ、形成期の神殿の社会的位置づけも明らかになる。この意味において、社会関係が交錯する場である神殿は、形成期社会の諸相、とくに社会を実際に動かした人々の社会的役割や戦略を考察するうえで、最適な対象であるといえる。

1-3-1.　先史アンデス形成期における神殿

本研究を含む、これまでの形成期研究の主対象である神殿をめぐる研究テーマや方法論は多岐におよぶ。そのため、以下では、形成期社会における神殿の位置づけとその重要性に言及しながら、神殿に関わる研究の課題と本論のアプローチについて整理する。

神殿をめぐる研究でまずあげられるのは、その形態に関する研究である。ウィリアムスに代表される神殿の形態とその変遷に着目した研究は[Williams 1985, 1988]、各地に点在する建造物を比較し、共通性をみいだすことで地域間関係を明らかにしようという試みであった。この研究によって、形成期の神殿において後代の建造物と比較する際に容易に理解できるような明確な建築的特徴が認められ、そうした建築特徴は、年代決定の指標としてセトルメント・パターン調査にも利用されてきた[Billman1996; Wilson 1988]。しかし、現在では単に神殿の形態だけではなく、神殿を築いた人々の活動に研究の焦点があてられている。たとえば、神殿の形態的特徴を論じるだけでなく、建造物の形態や規模から建設に必要であると考えられる労働力を数量的に分析して、労働組織や人口、社会の規模といった問題を論じる研究は[T.Pozorski 1980; 関 2006; 関・坂井 1998]、その流れに位置づけられるものである。

先行研究の蓄積を通じて明らかとなった形成期の神殿の最大の特徴は、古い時期の建築を時には破壊したうえで埋め、その上に新しい建造物を造るという建設活動が繰り返されることである。こうした現象はアンデス各地の遺跡から報告されているが、神殿の建設活動に社会変化の契機を求め、社会変化の主要因を神殿の更新（造りかえ）自体にあるとしたのが、日本のアンデス調査団[1]によって提示された「神殿更新モデル」である[大貫 1989;

[1]当初は、東京大学を中心として調査団が組まれた。その後、中心は埼玉大学に移行し、現在では国立民族学博物館となっている。

大貫・加藤・関編 2010; 加藤・関編 1998] [1]。このモデルでは、安定した農耕による余剰生産の増大に先行して神殿が現れること、また、既述したように同じ場所で建設活動が繰り返されることに着目する。そして、こうした更新を実施するためには、それに見合うだけの生産力や労働力が必要となることから、繰り返される更新と社会変化の相互関連を文明展開の主要因として説明する。これは、神殿を調査、および分析の中心とする本研究の根幹に深く関わる。なぜならば、このモデルを考慮した場合、更新の度に入念に建築プランが準備されるほか、以前よりも大規模な神殿を築くには、より多くの労働力と大量の食糧が必要となるため、労働組織の複雑化が起きる。また、更新に際して建築にイデオロギーに関わる新たな要素を加え、更新活動を正当化する儀礼で用いる奢侈品などを調達するには、物資や情報などを外部社会との交流によって入手する必要が生じる。つまり、社会は繰り返される更新において、常に変化の契機をはらんだものとなるためである。

現在では、神殿更新が各地で確認されるなかで、その方法やあり方に多様性がみられることが報告されるようになってきた。このような多様性を覆い隠さないためには、神殿更新という行為自体を改めて検討していく必要がある。たとえば、ペルー北部中央山地のコトシュでは古い神殿を覆うように同じような神殿が新しく築かれたが[2] [Izumi and Terada 1972]、北部山地のワカロマやクントゥル・ワシでは単なる神殿の増改築とはいえないような複雑で大規模な神殿更新が繰り返されており [Terada and Onuki 1982, 1985, 1988; Onuki ed. 1995; 関 1998b: 304]、異なるタイプの更新が存在することが明らかである。

また、ペルー中央海岸のミーナ・ペルディーダとカルダルという近接した同時期の神殿の事例からは、神殿更新という活動の本質について重要な問題が提示されている。調査者のバーガーは、規模の異なる二つの神殿が、繰り返される更新の結果として大規模化していったものの、更新の規模や回数などを考慮すると、更新は比較的短期間のうちに繰り返し行われた共同体の年中行事のようなものであったと指摘したのである [Burger 2009a: 20-21]。そして、両神殿の規模の差は単に更新活動、つまりは神殿の利用期間によるものであり、ヒエラルキーを表すわけではないと結論づけた[Burger and Burger 1991: 292-293; Burger 2009a: 30-31]。ペルー北部のアマカス複合[3]を調査した鶴見は、神殿更新の議論を深化させ、拡張を目的とした神殿更新と破損個所の補修などの小規模な作業は本質的に同じであるとし、アマカス複合の神殿更新には、単一地点で拡張を続ける「拡張型神殿更新」ではなく、拡張を目的とせず、漸次的に活動の中心を移していく「移転型神殿更新」の特徴が顕著であると指摘した[鶴見 2008a: 246]。これらの先行研究を鑑みると、神殿更新に社会変化の一要因を求めるとしても、地域や時期によってその方法やあり方は多様であり、場合によれば社会における神殿更新の意味が異なる可能性が推測される。このことから、

[1] 形成期の特徴とされる周期的な増改築であり、時として意図的な破壊を伴う。この更新の過程では、規模のみでなく、同時に建造物の形態も変化する。
[2] かつては神殿を儀礼的に埋める行為が強調され、「神殿埋葬」とも考えられた[大貫 1998: 71]。
[3] ヘケテペケ川中流域のアマカス平原に存在する遺跡群を指す。モンテグランデ遺跡やラス・ワカス遺跡などが含まれる[鶴見 2008a]。

神殿における建設活動やその社会的役割を捉えようとする場合、個々のコンテクストに沿った詳細な検討を行う必要があることは明白である。そのため、本論では神殿の詳細な発掘調査を通じて、この問題に取り組む。

その一方で、近年の理論的転換をうけて、建造物をメディアとして捉えるアプローチが提起され、建造物に関する研究は新たな展開を迎えている[加藤 1993; Moore1996, 2005, Staller ed. 2008]。神殿は不動性という特性を有し、かつ大規模でその建設には多くの労働力と労働組織、建築プランや大量の資源を必要とする。また、神殿は、建設に際して初期の労働投資は大きいが、一度建設すれば長期間にわたって存続しうるため、多くの人々に対して情報を運ぶメディアともなる[Moore 1996: 1-18, 2005:1-5]。こうして神殿は、社会的秩序と社会的な動機を反映しているとされ、社会関係についての情報を含むメディアとして捉えられるようにもなったのである。

建築環境や空間から過去の人間の経験を明らかにしていこうとする景観（ランドスケープ）の見地に立てば、建造物だけなく、建設活動や神殿で行われた儀礼は、政治的、宗教的イデオロギーだけでなく、神殿やそれを取り巻く空間に対する人々の認識と深く関連する。このため、それらが概念化された場所である神殿において、建設活動や儀礼が繰り返されることで、当該社会の文化的記憶や宗教的知識も再認識、再解釈され、社会のヒエラルキーが再強化される[Staller 2008; Trigger 1990]。これによれば、神殿とは情報の管理と維持、蓄積のメディアとなり、イデオロギーの普及装置となる。そして、建築配置や神殿から出土する遺物は、イデオロギーが顕在化した物質文化として捉えることが可能になるのである。

このことから、神殿の配置や建設活動、または神殿出土遺物の分析を通じて、いかにして労働や資源を維持、管理したのかというリーダーやエリートの能力[Trigger 1990: 127]、どのようにして権威の正統性を社会の成員に理解させるのかという個人や集団の戦略、もしくは神殿の構造に反映され、かつ神殿によって形成される社会関係の相互作用が考察可能となる[Moore 2005: 3-5]。したがって、上記の視点をもつことで、神殿を政治的、社会的構造の単なる受動的な反映として捉えるのではなく、神殿という社会関係の交錯する場において、生産、または再生産される政治的、社会的様相についてアプローチすることができると考えられる。

このようなことをふまえて、特定の人々の戦略という側面から権力を考察する動きは、近年の形成期研究においてもみられる。たとえば、リックは、ペルー北部中央山地のチャビン・デ・ワンタル遺跡の石彫の配置と図像表現の時期的変化から、儀礼で用いられるイデオロギーが物質化された象徴財（神殿の建築配置や宗教的シンボルを描いた奢侈品）を、宗教的リーダーが操作することによって、特定の個人へと権力が集中していくという過程について言及した[Rick 2005]。また、関は、権力資源の操作といった視点から、北部山地のワカロマ遺跡、クントゥル・ワシ遺跡、パコパンパ複合などの調査データを比較して、階層化の出現や権力の生成について論じた。そして、同時期の隣接する地域間や遺跡間に

おいても、権力の生成過程や社会状況には差異があり、多様性が存在すると指摘した［関 2006, 2010］。つまり、イデオロギーの操作は、権力を生み出していくために、権力行使者の重要な戦略となる。しかし、その様相は個々の遺跡で異なるため、各遺跡における状況を掴むには、それぞれの遺跡において詳細な調査を実施することが必要となるのである。

以上のように、神殿の形態や配置、更新活動、あるいは神殿をイデオロギーの普及装置として利用しようとする人々の戦略には多様性が認められる。したがって、本論では、集中的な発掘調査を通じてえられる神殿の建設過程や建築配置、ならびに神殿出土遺物の分析から、神殿で実施された建設活動と儀礼を、ワンカバンバ川流域のコンテクストに沿って詳細に検討することを通じて、形成期のワンカバンバ川流域固有の社会動態とそれに関わる人々の主体的実践を明らかにする。

ただし、ワンカバンバ川流域に存在する神殿は、発掘調査を実施したインガタンボだけではない。そのため、特定神殿だけでなく、流域全体の社会動態を見渡す方法として本論で援用するのがセトルメント・パターンである。ここでいうセトルメント・パターン研究とは、個別の遺構や遺物ではなく、より広範な地域を研究対象として、特定地域全体の社会的状況を明らかにしようとする空間分析の研究である。こうしたセトルメント・パターン研究は、世界で最初の事例であるペルー北部海岸のビルー川流域をはじめとして[Willey 1953]、海岸部を中心にアンデス各地で行われ[Billman 1996; Pozorski and Pozorski 1987]、河川流域単位において社会変化の過程が論じられている。こうした研究は、1980 年以降の理論的動向の変化を受けて、特定の遺構や遺物の分布を単純に特定の人間行動に結びつけることはできないという批判を受け入れ、個々のコンテクストを重視する研究へと変貌を遂げながら、現在でも研究が実施されている。

また近年では、セトルメント・パターン研究で論じられてきた特定地域内の複数遺跡の分布パターンや神殿の構造などから、それらを築いた当該時期の人々の行動や認知に迫ろうとする「景観」に関する研究もある[Staller 2008]。ここでいう景観とは、人と空間や場の関係の総体である[Staller 2008: 1-2; Tilley 1996: 162]。さらに、空間や場とは、人によって改変されたものであり、社会的行為のなかに埋め込まれた存在とされるため[Tilley 1991: 10]、そこには様々な形で人間の行為や思考が介在することになる。アンデスにおいても、ポストプロセス考古学の流れをくんで、先述したムーアが建造物の視覚効果や空間構造から権力について議論を行い[Moore 1996, 2005]、コントレラスは環境や地形の自然的・人工的変化と、権力の生成といった社会政治的変化について議論している［Contreras 2007, 2010］。これらの研究に代表されるように、景観に関する研究では、自然の地形だけでなく、人が築いた建造物も含めた全ての空間と人との関係が研究対象となる。そのなかでもとくに大規模建造物は、物理的、宗教的、社会的、政治的、経済的諸要因が複雑に絡み合って建設されるものであるため、景観研究の主対象とされる。その場合、建造物で実施される儀礼行為は、個人を社会に位置づけるものとされ、建造物はそのための装置となる。この点をふまえて、ムーアは、大規模建造物を社会関係についての情報を有するメデ

ィアとして捉えたのである[Moore 1996]。それによれば、個人や集団が景観を造り上げる行為は、その場所がもつ社会的、政治的関係を個人や集団に伝達、認識、経験、再生産させる。この考えに依拠すれば、セトルメント・パターン研究とは、人と人によって築かれた空間との関係の研究である。したがって、諸遺跡の分布は、単なる分布パターンとしてではなく、当該社会の人々の意図や戦略が反映された宗教的、経済的、社会的、政治的景観として捉えることが可能となる。

これらをふまえて、本論では、ワンカバンバ川流域の遺跡分布パターンを、生態環境との関連のなかで当該社会を支えた人々の活動や戦略の結果としてみることで、発掘調査を行った特定遺跡だけでなく、ワンカバンバ流域という地域社会の動態を明らかにしていく。

1-3-2. 先史アンデス形成期における地域間交流と社会変化

前項までに述べてきたように、ワンカバンバ川流域という特定地域社会の動態を論じるためには、それがおかれたコンテクストに即して、神殿や地域の社会的状況を把握する必要がある。この際に注目すべきことは、これまでのアンデス研究において、多様な生態環境を利用する日常生活圏を超えた人や物資の移動が、考古学だけでなく、人類学の分野からも絶えず報告されてきたことである[Brush 1974, 1977, Murra 1975, 1985]。すなわち、個々の社会は、流域や盆地といった地理的区分によって想定される地域内で閉じられるようなものではなく、外部への移動や外部との接触を通じて、常に外に開かれている存在なのである。これまでの研究の蓄積によって、形成期においても、アンデス文明の形成に際し、山地と海岸地域、または、より東のアマゾン側に位置する熱帯低地、北のエクアドルに存在した社会との相互交流や、社会統合の中心として神殿の果たした役割の重要性が明らかとなってきている[加藤 1998: 10-11, Burger 1992]。こうした状況において、人と物資の移動が、どのようにしてある社会に変化をもたらすのか、もしくは、ある社会の維持にどのような役割を果たすのか、という問いは、研究の中心的課題の一つになっている。本論で取り扱う地域間交流の動態に関する研究は、まさにこの流れに位置している。

こうした地域間関係を論じる研究は、アンデスのみならず、考古学一般における重要なテーマである。古くは伝播論などにはじまるこうした研究の主目的は、物資や情報の移動から交換のメカニズムを解明すること、そしてその解明を通じて当該社会の社会構造や他集団との関係にアプローチすることにある。とくに、地域間交流は社会変化の重要な要因の一つであるとされてきたため、先行研究においては宗教、経済、政治との関連のなかで、この問題が捉えられてきた。とはいえ、神殿建築やセトルメント・パターンに関する研究と同様に、既述の理論的動向を受けながら、その視点は常に変化してきている。

形成期において、地域間交流と社会変化をめぐる研究の最初の事例であり、かつ代表例としてあげられるのが「チャビン問題」である。これは、チャビン・デ・ワンタル遺跡にみられる「チャビン様式（石彫、土器、壁画にみられる図像でネコ科動物をモチーフとするものなど)」と類似した様式が、中央アンデスの広範な地域にみられることから、アンデ

ス文明の起源としての「チャビン文化」が想定されたことに端を発する[Tello 1960]。そして、テーヨは、その文化の広がりがチャビン・デ・ワンタルという神殿からの宗教的イデオロギーの拡散によって成立したと考えた。つまり、チャビン・デ・ワンタルを中心としたアンデス文明の起源論である。

これに対し、ラルコは、ペルー北部海岸地域の遺跡を調査した結果、還元焼成で人物やネコ科動物といった図像が描かれた土器などの芸術様式からなる「クピスニケ」という文化の存在を提唱し、チャビン・デ・ワンタルは、むしろそこから派生したものであるとした[Larco 1941]。つまり、テーヨによるアンデス文明の起源としてのチャビン中心主義を否定し、その代わりとしてペルー北部海岸地域を中心とした起源論を展開したのである。

また、ウィレーは、テーヨの研究を受けて、「チャビン様式」を再定義したのちに、「チャビン・ホライズン」と称して、チャビン・デ・ワンタルを中心として汎アンデス的な様式の分布の拡がりを捉えようとした[Willey 1945, 1951]。これらの研究は、広範な地域にみられる遺物の共通性を、宗教的イデオロギーの拡散と想定したうえで、特定の遺跡から一元的に地域間の関係を捉えようとした古典的研究であるといえる。この時代のエクアドルの研究状況もペルーと同様であり、海岸部を中心として調査が実施され、形成期研究の主眼は文明の起源を追究することであった[Meggers et al. 1965]。

以上のように、形成期研究の端緒は文明の起源を探究することであった。そして、このような潮流が、1960 年代ごろまで研究の中心を占めていた。日本のアンデス調査団によるペルー中央山地のコトシュ遺跡の発掘調査[Izumi and Terada 1972]も、この流れのなかに位置づけられるものである。

しかし、コトシュ遺跡の事例がそうであるように、1960 年以降になって各地で発掘調査や遺跡分布調査が活発に実施されるようになった結果、かつて「チャビン文化」の影響下で展開したと考えられた各地の遺跡が、チャビン・デ・ワンタル遺跡よりも年代的に古いことからが明らかとなった。これにより、アンデス文明の起源としての「チャビン文化」の存在は否定されることになったのである。この結果、形成期研究は大きな変化を遂げ、起源論からの脱却が進んだ。そして、アンデス各地に存在する地域的多様性を認めたうえで、各地のデータを集積しつつ、それぞれの社会展開を追究する研究が主流となっていった。日本のアンデス調査団によるワカロマ遺跡[Terada and Onuki 1982]やクントゥル・ワシ遺跡[Onuki ed. 1995]、あるいはパコパンパ遺跡[関 2010; Seki et al. 2010]の調査は、この流れに沿うものである。このような動向はエクアドルでもみられ、海岸部だけにとどまらず、山地や熱帯低地においても様々な調査が実施されており、各地の社会展開が論じられるようになった[Guffroy 2004 など]。

しかしながら、「チャビン」の先行性が否定された今でも、その特異性から依然としてチャビン・デ・ワンタルを中心として形成期社会の展開を論じるような研究が存在することも確かである[Burger 1978, 1988, 1992; Rick 2005, 2008]。なぜならば、各地の神殿が交流をもちながら独自の社会展開をみせると考えられる一方で、「チャビン様式」の図像や土器

様式が地域的な多様性をみせながらも汎アンデス的な拡がりをみせ、この現象と時を同じくして、各地の神殿で大規模化が生じるためである。

この問題に対してバーガーは、単に遺物にみられる様式の共通性を強調するのではなく、「チャビン・カルト」[1]という宗教的イデオロギーの拡散という観点から「チャビン問題」を再検討し、新たな論を展開した [Burger 1984, 1988, 1992, 1993, 2008]。この論は、形成期のある時期（ハナバリウ相[2]：紀元前 390 - 200）に、巡礼システムの成立と地域間交流の増大を伴う宗教イデオロギーの拡散が起こり、それと同時にエクアドルを起源とする暖流系のウミギクガイや、ペルー南部山地のキスピシーサ産の黒曜石やワンカベリカ産の辰砂（硫化水銀）などといった物資の流通に関わる長距離交易の活性化と、階層化の成立が生じたとするものである。そして、汎アンデス的な遺物の共通性を、中央アンデス全体で起こった様々な技術革新を伴う社会、経済、環境上の変化と連動した動きとして捉えている点で従来の研究とは大きく異なり、重要である[Burger and Glascock 2000, 2002, 2009; Burger and Matos 2002]。しかし、調査の蓄積に応じて、宗教イデオロギーの拡散時期に対応するとみられた遺跡間で年代的なずれが認められ、影響を受けたとされる遺跡が従来の想定以上に少なくなってきており[井口 1996: 20-24]、議論の基盤が揺らぎつつある。

なお、チャビン・デ・ワンタル遺跡では、近年の調査成果として、建設プロセスと年代に関するデータが提示されている [Kembel 2001, 2008; Kembel and Rick 2004; Mesia 2007; Rick 2005, 2008]。これによれば、チャビン・デ・ワンタル遺跡は、紀元前 1500 年頃に建設が開始され、北部海岸の「クピスニケ」や中央海岸の「マンチャイ文化」、熱帯低地の諸文化との相互交流を経て紀元前 800 年頃に最盛期（ハナバリウ相対応）を迎えた後、紀元前 500 年頃に機能しなくなった可能性が指摘される。ただし、前述のバーガーは近年においても、ハナバリウ相は遡っても紀元前 700 年頃にはじまるという考えにあるため、チャビン・デ・ワンタル遺跡の編年問題の解決には、今後の調査を待たなければならない。いずれにせよ、現状では、形成期のある時期において、汎アンデス的な動きとして各地で大規模神殿が建設され、地域間交流や長距離交易が増大したという一連の動きのなかで、「チャビン問題」を再考することが不可欠である。

以上のように、アンデスの社会動態を捉えようとするとき、地域間交流は一つの重要なテーマとなっている。バーガーのモデルは、共通性を有する遺物の分布の空間的な拡がりを強調して地域間関係を捉え、アンデス全体をマクロな視点から考察したものである。そして、その際に用いられたのが、インタラクション領域 [Caldwell 1964; MacNeish et al.

[1]宗教や地域的な信仰とは異なり、普遍的な教義をもち、比較的広範囲に広まるという特徴をもつリージョナル・カルトであるとされる。また、これによれば、遺物の地域的多様性とは、信仰が強制ではなく、能動的であるために生じたもので、「チャビン・カルト」に加わる以前に各地域に存在した信仰や社会、政治、経済の差異によるものとされる。
[2]相（フェイズ）は、「時期」の下位区分として用いられるもので、サブ・フェイズとしてさらに細分化されることもある。

1975]という概念である[1] [Burger 1984, 1992, 2008; Church 1996]。これによれば、インタラクション領域内の諸社会は、それぞれが神殿を有しており、リーダーが存在して独自性と独立性をもちながらも、思考や宗教、技術を共有する同等政体間インタラクション（peer polity interaction）で結ばれたものであるという [Burger 2008: 698]。この同等政体間インタラクションとは、限定された地域内において同等のレベルにある独立した政体間で、同時発生的に生じる社会的政治的変化をマクロなレベルで説明するモデルである[Renfrew 1982; Renfrew and Cherry 1986]。また、特定遺物の広範囲におよぶ共通性の分布を、空間的な拡がりのなかで捉えることにその特色がある。

これに対し、加藤は、クントゥル・ワシ遺跡の調査データをもとに、形成期後期（紀元前 800 年）の神殿の成立過程について「広域型神殿」というモデルを提示している[加藤 2007: 18-20]。このモデルでは、地域間交流は必要な場所を点でつないだネットワークとしての側面が強調される。実際に、長距離交易品などの特定遺物の分布は、空間的に均一には広がらず、離れた点として表れることもある。したがって、特定神殿を核とした地域間関係は、領域というような概念だけで捉えるには不十分であり、ネットワークとしても考察する必要がある。なお、広域型神殿とは、地域社会や隣接地域社会との連続性や関係が希薄で、広範囲な物資と情報のネットワークに依存した神殿とされる。そして、神殿は、それ以前までの地域性が強く、地域の社会的中心としての神殿とは一線を画した、祭祀に特化したものとなったと考えられている。つまり、加藤は、この時期の社会変化を、地域内部の展開としてではなく、地域外に存在した社会との地域間交流から捉えている[加藤 2007: 18-20, 2010: 143-149]。

こうした議論が存在する一方で、パコパンパ複合を調査する関は、形成期後期の社会変化を次のように論じる。金製品や遠隔地を産地とする副葬品を伴う特殊な墓の出現などから、地域間交流と階層性の顕在化との関係を指摘するのである。そして、「神殿更新モデル」で指摘された神殿における建設活動を社会変化の要因とした社会から、権力基盤としての祭祀とそれに関連する奢侈品の交換と入手に依存した社会への転化を想定する[関 2010: 194-195]。この論は、地域間交流を社会変化の一つの要因としている点で、上記のモデルと同様ではあるが、変化に際して地域社会内部の動向を重視し、社会外部との関係も社会内部の問題として捉えている点において異なっている。つまり、地域間交流を社会内部に生じた特定の人々による活動の一環として捉えているのである。

このように、形成期の地域間交流に関して様々な捉え方が存在するが、それらは相反するようなものではない。むしろ、地域間関係をどのレベルで、何を中心に考察するか[2]、も

[1] インタラクションとは、物資の交換だけでなく、情報の交換も含む概念である[Renfrew and Cherry 1986: 8]。インタラクション領域とは、インタラクションする個々の社会を包括した地理的な広がりである。

[2] たとえば、遺跡間の関係として捉えるのか、あるいはより広く地域間、またはアンデス全体の中で包括的に捉えるのか、によって捉え方が異なる。

しくは議論の根拠とする物質文化が何であるか[1]、に応じて使いわけられるべきものである。また、空間的、時間的に地域間交流に様々な様態が存在した可能性もある。各地の調査が進展する現在、バーガーがインタラクション領域として空間的拡がりを強調したなかにおいても、多様性が顕在化してきている。このような多様性を覆い隠さないためにも、個々のコンテクストにおける詳細な議論を深化させたうえで、アンデス全体を包括するようなマクロな議論を展開していく必要がある。さらに、多様性の存在を重視すると、神殿間のネットワークや地域間関係は、各地の全ての神殿が均質的、かつ一様に結ばれたようなものであったとは考えられない。なぜならば、ある神殿と他の神殿とのネットワークは、それぞれの神殿を支える集団の社会的背景に応じて、各集団により選択的に決定されるため、ネットワークへの参加は各神殿の主体性に依拠するからである。本論ではこれを明らかにするために、ワンカバンバ川流域という特定地域の事例を詳細に検討していく。それにより、これまで地域間交流の重要地であると考えられながらも、研究の存在しなかった地域における神殿を中心としたネットワークの多様なあり方を提示し、先行研究に大きく寄与できると考える。

また、バーガーは「チャビン」として括られるインタラクション領域の北限を、海岸地域では北部海岸のランバイェケ - ラ・レチェ川流域、山間部ではパコパンパ複合の位置するチョターノ川流域までと位置づけている。そして、確かにウミギクガイといった物資はエクアドルからもたらされるものの、ペルーとエクアドルの間のインタラクションの度合い（密接さ）は、ペルー極北部海岸のセチューラ砂漠とエクアドル南部山地のカタマヨの森林地帯といった自然の障壁があるため、強固ではないとした[Burger 1984: 49-53]。つまり、ペルーとエクアドルは考古学的に異なる文化領域で、別のインタラクション領域[2]を有しており、それぞれの場所に展開した諸社会は、交流をもちながらも互いに異なる社会変化を遂げたと論じたのである[Bennett 1948: 5; Burger 1984, 2003: 477-481; Willey 1971: 3-4]。

その一方で、エクアドル南部からペルー北部の国境地帯は、海岸と山地、熱帯低地、または様々な山地間の移動に適した交通の要衝であり、そこには交流の仲介者的役割を果たした独自の社会が存在したとも考えられている[Burger 1984,1992: 99-103, 216-217; Guffroy 1989: 203, 2008; Hocquenghem 1991:312-314]。このような交流や文化接触の媒介についての議論は、「フロンティア」研究において盛んに組み交わされている。そして、このなかで「フロンティア」とは単なる文化的境界ではなく、異なる社会が接触する交流の場とされる[Green and Perlman 1985; Lightfoot and Martinez 1995; Parker 2006; Parker and Rodseth 2005]。この意味において、地域間交流の要衝と考えられるワンカバ

[1]たとえば、不動性を有する神殿を対象とするのか、可搬性を有する土器や石器、または長距離交易品に代表されるような奢侈品を対象とするのか、によって捉え方が異なる。
[2]バーガーは、チャビンとチョレーラという異なるインタラクション領域があるとした[Burger 1984, 1992]。

ンバ川流域をはじめとした国境周辺地域の研究は、地域間の狭間に位置した単なる仲介者としてというだけではなく、文化接触が生じ、接触した文化の折衷や混交が起こる「フロンティア」として積極的な意味を持つ。そのため、両者の文化的境界である「フロンティア」において地域間関係を明らかにしていくには、地域間交流によって具体的に何がやりとりされたのかということに加えて、社会においてどのように交流が作用していたのかという、交換の様態や交換される物資の背後にある社会的関係を考慮する必要がある。

つまり、ワンカバンバ川流域の社会動態を明らかにするためには、地域内に特化した議論だけでは不十分であり、周辺地域との物資や情報の交換といった地域間交流を明らかにし、流域外部の社会との関係から流域の社会的状況を捉えることが必要となる。そして、その考察をふまえることではじめて、ワンカバンバ川流域といった一地域の研究のボトムアップにとどまらず、より包括的に形成期の社会動態について考察することが可能となるのである。このことは、アンデス形成期研究への大きな貢献であると考えられる。

また従来、隣接する地域間の関係性は、より社会的に成熟しているとみられる支配的な地域から、その段階へは達していない地域への一元的な影響として捉えられることが多かった。遺跡間の関係を、「中心 - 周縁（core-periphery）」の不均衡な関係とみなし、「中心」社会からの視点で「周縁」社会の変化を捉えようとした考古学への世界システム論の援用もこれに近い[Rowland 1987]。もちろん、全てのモデルが周縁社会の状況を無視しているわけではないが[Burger and Matos 2002]、この立場においては、物資の移動は「中心」にある社会が「周縁」にある社会へ権力をおよぼす手段とされ、周縁社会は中心社会に統合されているものと考えられてきた。

その一方で、二項対立的な視点への批判から、エージェンシーに関する議論をもとに（agency-oriented）、これまで「周縁」とされてきたような社会に根差した視座から、ローカルな社会、あるいは社会に存在する個人の選択的な対応として、物資の動きを捉える研究もある[Goldstein 2000, Stein 1998, 2002]。これによれば、物資文化、とくに威信財の選択的な受容や使用は、社会内部で特定個人の地位を高め、外部社会のエリートとのネットワークを構築するため、ローカルな社会における権力の生成手段とされる。そのため、地域間関係を論じていくには、交流を行う個々の社会の主体性を重視し、それぞれの歴史的コンテクストから地域間関係を捉える必要が生まれてくるのである。

なお、形成期には、「中心」として認識されるような広範な地域を統合する集権的社会の存在は明らかではない。第 2 章で記すように、確かに形成期においても複数の大規模神殿は確認される。しかし、そのような大規模神殿と他のより小規模な神殿との関係を、はじめにその枠組みを規定することで単純に「中心 - 周縁」といった非対称的な関係として捉えることは、遺跡間関係の実態をアプリオリに規定しかねず、分析の枠組みとしては不適切である。ただし、このことは、「中心 - 周縁」モデルの有効性を完全に否定することを意味しない。たとえば、大規模神殿と他の小規模な神殿との関係が、歴史的変遷のなかで非対称な関係として現れた場合、その状態を説明するモデルとしての有効性は存在すると考

えられる。つまり、このモデルの批判の対象は、あくまで現象面を捉える以前に、モデルの枠組みを無批判に当てはめることにある。松本が指摘したように、バーガーの世界システム論の援用は[Burger and Matos 2002]、それまでの形成期研究では主として特定の流域や盆地といった限定された地域のなかで研究が行われてきたことに対し、汎アンデス的なレベルで地域間関係を解釈するための理論的枠組みを模索したという点で評価すべきものである[松本 2009: 82]。これまでにみてきたように、アンデスの各社会は閉鎖的ではなく、外部との交流を通じて、常に外に開かれている。したがって、特定社会の社会動態を考察する際には、流域や盆地といった生態環境や地理的に区分される地域的枠組みにとどまらずに、その外部に広がる地域間との関係を同時に明らかにすることで、対象や視点を徐々に広げていくような地道な作業が必要である。

また、バーガーはインタラクション領域の境界、または境界外にある諸社会を、インタラクション領域の中心に存在する社会のための「ゲートウェイ・コミュニティ」であると捉えている[Burger 1992: 101]。「ゲートウェイ・コミュニティ」とは、物資の輸送を管理するために自然の交流ルート上の要衝に出現するコミュニティとされる[Hirth 1978]。そして、このモデルでは「中心」と「周縁」モデルにみられたように、交流の中心に存在する社会とそれに従属する社会（ゲートウェイ・コミュニティ）との非対称的な関係が前提となっている。つまり、ペルー極北部海岸のセロ・ニャニャニケ遺跡や北部熱帯低地のバグア複合などの「フロンティア」の社会を、チャビン・デ・ワンタルやそれに関連するペルー北部の大神殿であるクントゥル・ワシやパコパンパ複合のために、北方のエクアドルからの資源を獲得する社会と捉えたのである。先行研究によれば、バーガーの指摘する「ゲートウェイ・コミュニティ」の遺跡が、ペルーとエクアドルとの交流に際して、重要な役割を果たしたことには疑いがない。しかし、交流の本質を明らかにし、セロ・ニャニャニケ遺跡やバグア複合と、北方のエクアドルや南方のペルーに存在する神殿との関係を適切に分析するためには、チャビン・デ・ワンタルといった大神殿の単なる「ゲートウェイ・コミュニティ」としてではなく、それぞれの神殿の主体性を重視する視点が必要となる。これまでの研究では、遺物の様式的類似性や産地が同定できる遺物を中心に、遠く離れた遺跡間の関係が距離を問わずに考察されてきている。このような比較研究だけでは、実際に社会を支えた人々の活動や戦略が考察されておらず、複数の地域間の狭間に位置する地域社会の存在を考慮することができないことは明白である。

そのために本論で取り上げるのが、地域間ルートの分析である。地域間交流を考察する際に、地域間を結ぶルートの存在を考えることは当然であるが、アンデスにおけるルート研究は、インカ期の主要幹線であるインカ道研究に代表されるように、主として形成期以降の社会において実施されてきた[Topic and Topic 1983; Hyslop 1984]。確かに形成期には、石畳や橋といった痕跡としての「道」そのものは特定困難であるが、地形や GIS などからルートを仮説的に想定することは可能である。詳細は第 10 章で述べるが、GIS を用いる利点とは、アンデスの特徴でもある複雑な地形や標高といった情報をふまえた詳細なルート

分析を実施できる点にある。そして、ルートの存在を介して地域間交流を考察することによってはじめて、遺物や様式の共通性のみで捉えられてきた地域間関係を、空間的な拡がりや点の結びつきとして単純に考察するのではなく、考古資料にみられる地域間の類似性と相違から、地域間を動く人々の接触による思考や情報の伝達、もしくは差異化の結果として捉えることができる。また、ルートを研究対象とし、主要ルートを同定していくことで、ルートの選択や決定に際して、その背景に存在した地域間交流をめぐる人々の活動や戦略が考察可能となる。このようにして、本論では、ルートや地域間交流の時期的変遷と社会変化との相互関係について論じていく。

さらに、地域間交流の頻度が増加していくと、ルートの管理が重要な問題となってくる。バンディは、「トランジット・コミュニティ」という概念を使用して、ルート上の戦略的な地点を占拠している社会が、中継地点としてのメリットを活かして利益を享受し、次第に権力を確立していく過程について論じた[Bandy 2005]。ルートは政治的、経済的、宗教的側面を有するものであるため、ルートの選択とその維持や管理には、当該社会の戦略が反映される。このように、ルートの変化は社会の動きと深く関連するため、その通時的分析を通じて社会変化を考察するという観点は、本論にとっても有益である。しかし、このモデルも、上記の「中心」と「周縁」モデルや「ゲートウェイ・コミュニティ」と同様の問題を含んでいる。つまり、ルートと「トランジット・コミュニティ」の関係は、あくまで能動/受動の関係にあり、中継地点にある「トランジット・コミュニティ」が利益を享受するかどうか、すなわちその社会の展開は、常にルートで結ばれた先にある他の社会に左右されることになるのである。しかしながら、ルートの選択や決定は、地域間交流に関連する各社会の状況、あるいはその内部の人々の戦略に応じて、選択的に行われるものである。この問題を解決するために、本論ではこれまで単に中継地とされてきた地理的な中間にある社会、すなわちワンカバンバ川流域社会の主体性を重視したうえで、ルートの変化と社会変化との関係を明らかにする。

また、地域間交流を論じていくためには、考古データやルート分析にもとづいて、交流の形態やメカニズム、つまりは実際の移動手段や移動方法を考察する必要がある。なぜならば、既述のように、交流の様相は、交流を行う各社会の社会的状況や戦略に応じて多様なためである。そして、これらをふまえることで、当該社会の社会組織や交流の社会的背景にもアプローチ可能となると考えられる。

このようにして、本論では地域間交流を、従来的な考古遺物の質的分析による比較に加え、地域間ルートの分析を通じて考察する。そのうえで、交流を空間的な拡がりであるとともに点の結びつきとしても捉え、実際に交流を行う人の動きを重視しながら、その実態を明らかにしていく。そしてその際、ワンカバンバ川流域の事例を中心として、交流で結ばれた個々の社会動態に目を向けることで、形成期における地域間交流と社会変化の関係について論じる。

以上のように、社会動態は、複数の手法からアプローチし、理解される必要がある。また、ワンカバンバ川流域は、ペルーとエクアドルという考古学的に異なる文化領域間、もしくは海岸から山地、熱帯低地、または様々な山地間における地域間交流の仲介者的役割を果たしたと考えられる社会である。そのため、本研究は人類学、考古学など学際的な分野で研究対象とされる交流の場の研究として位置づけられる。さらに、本論では、研究対象となる地域社会の独自性や主体性に力点をおき、その社会変化を地域の歴史的コンテクストに即して考察する。そして、当該社会の社会成員の存在を重要視しながら、ワンカバンバ川流域社会の動態と地域間交流の動態を考察することで、形成期の社会動態を論じていく。

このような立場をとる本研究の最大の意義は、物質文化にもとづき、神殿をめぐる諸活動や地域間交流と社会動態との関係を、社会成員の活動と戦略といった側面から捉えることにある。これによって、先行研究では十分に議論されてこなかった、実際に社会を動かした人々の主体的実践と社会動態との相互関連を明らかにすることで、単に調査未開拓地域の研究を底上げするだけでなく、社会動態論や人類文化史研究へ貢献できる。

1-4. 本論文の構成

次章以降の本論文の構成は、以下の通りである。

第 2 章では、本研究対象地域を中心として、先行研究を概観し、その問題点を明らかにすることで、形成期研究における本論文の位置づけを明確にする。

第 3 章では、先行研究の問題点を明らかにするために適切な調査対象地域を設定する。また、先行研究と発掘調査に先駆けて実施した予備調査にもとづいて、発掘調査遺跡を選定し、その学術的有効性を提示する。

第 4 章から第 7 章までは、インガタンボ遺跡で実施した発掘調査のデータを整理、記述する。第 4 章ではインガタンボ遺跡の建築データとその年代、第 5 章ではインガタンボ遺跡出土の土器資料、第 6 章は土器以外の人工遺物とその製作、第 7 章では自然遺物と生業について記す。

第 8 章では、インガタンボの建築や出土資料を総括し、それらを周辺地域の先行研究と比較検討することで、インガタンボの独自性と共通性を明らかにする。そして、周辺地域に存在した社会との地域間交流について論じる。

第 9 章では、発掘データにもとづいて、ワンカバンバ川流域の遺跡分布データを整理し、同流域の遺跡分布とその一般的特徴を明らかにする。そのうえで、同流域の諸遺跡の立地を生態環境、および地域間ルートとの関連をふまえて検討し、当該地域のセトルメント・パターンを通時的に明らかにする。

第 10 章では、GIS による最小（加重）コストルートの分析を中心に、第 8 章の考古資料の比較検討をふまえながら、ペルー北部とエクアドル南部における地域間主要ルートの変遷を明らかにする。また、移動手段と輸送システムの問題についても論じる。

第 11 章では、第 10 章までに述べたインガタンボ遺跡の発掘データ、ワンカバンバ川流

域のセトルメント・パターンに関するデータ、ならびに地域間交流に関するデータを総合する。そして、ワンカバンバ川流域社会の独自性や主体性を重視し、かつ当該地域のコンテクストに即して、行為主体である人々の行為や戦略から流域社会の動態について論じる。また、その論考を、地域間交流を軸としてアンデス全体というより広いコンテクストに位置づけることで、ワンカバンバ川流域を中心とした形成期の社会動態を論じる。

第 12 章では、前章までの論考の要点をまとめて、結論を導き出す。また、最後に今後の展望と課題について触れる。

以上のように、本章では本論の目的と研究方法、および研究の背景について述べてきた。次章では、それらと関連する形成期の先行研究をレビューしながら、本論文の立場をより明確なものにしていく。

第 2 章：アンデスにおける形成期研究

本章ではまず、アンデスの地域区分について記述する。次に、前章で述べた本論の目的と研究方法、および理論的背景をふまえて、本論で参照する遺跡を中心として時期ごと、あるいは地域ごとに、形成期の先行研究を検討する。そして、アンデス形成期の社会像を示すとともに、これまでの研究の問題点を明らかにしながら、形成期研究における本研究の位置づけをより明確なものとする。

2-1. アンデスの地域区分

アンデス地帯は一般に、海岸（コスタ）、山地（シエラ）、熱帯低地（セルバ[1]）よりなるといわれる。しかし実際には、その区分はさらに多様である。

本論で議論の対象となる地域は、現在のペルーとエクアドルの一部を含むが、当然のことながら、過去においては、そのような呼称が使用されていたわけではない。先行研究に依拠すれば、現在のペルー領は中央アンデスと呼ばれるのに対し、エクアドル領は北部アンデス、または中間領域という広大な地域を指す文化領域[2]の一部に相当する。本論は、二つの文化領域の境界地域を対象とするものであることから、以下の記述に際しては煩雑ではあるが、便宜上、ペルーとエクアドルという区分を用いて記述する（図 2-1）。

一般的に現在のペルー海岸部では、アンデス山脈から太平洋に流れ込む多数の河川を用いて地域区分がなされるが、研究者によって区分が異なる場合もあり、その区分は明瞭ではない。本論では、トゥンベス川以南ピウラ川以北を「極北部海岸」、レチェ河谷以南サンタ河谷以北を「北部海岸」、サンタ河谷以南スーペ河谷以北を「北部中央海岸」、スーペ河谷以南ルリン河谷以北を「中央海岸」とする。また、山地や熱帯低地における区分は、海岸部に比べて境界が曖昧であるため、海岸部の区分をそのまま東延して、「北部山地」や「北部熱帯低地」のように記す。なお、北部熱帯地域では、標高 400m 以上の場所で森林地帯が形成されることもあるため、必要に応じて「北部熱帯森林」と記述する。

その一方、現在のエクアドルでは、山地を軸として地域が区分されることが多い。本論でも同様に、ロハからカニャルまでを「南部山地」、キト周辺から北を「北部山地」とし、両者の間を「中央山地」とする。また、その区分に応じた形で、西の海岸部と東の熱帯低地をそれぞれ区分する。

[1]エクアドルではオリエンテと呼ばれる。
[2]考古資料の共通性などにもとづいて、設定されている[Bennett 1948; Willey 1971]。

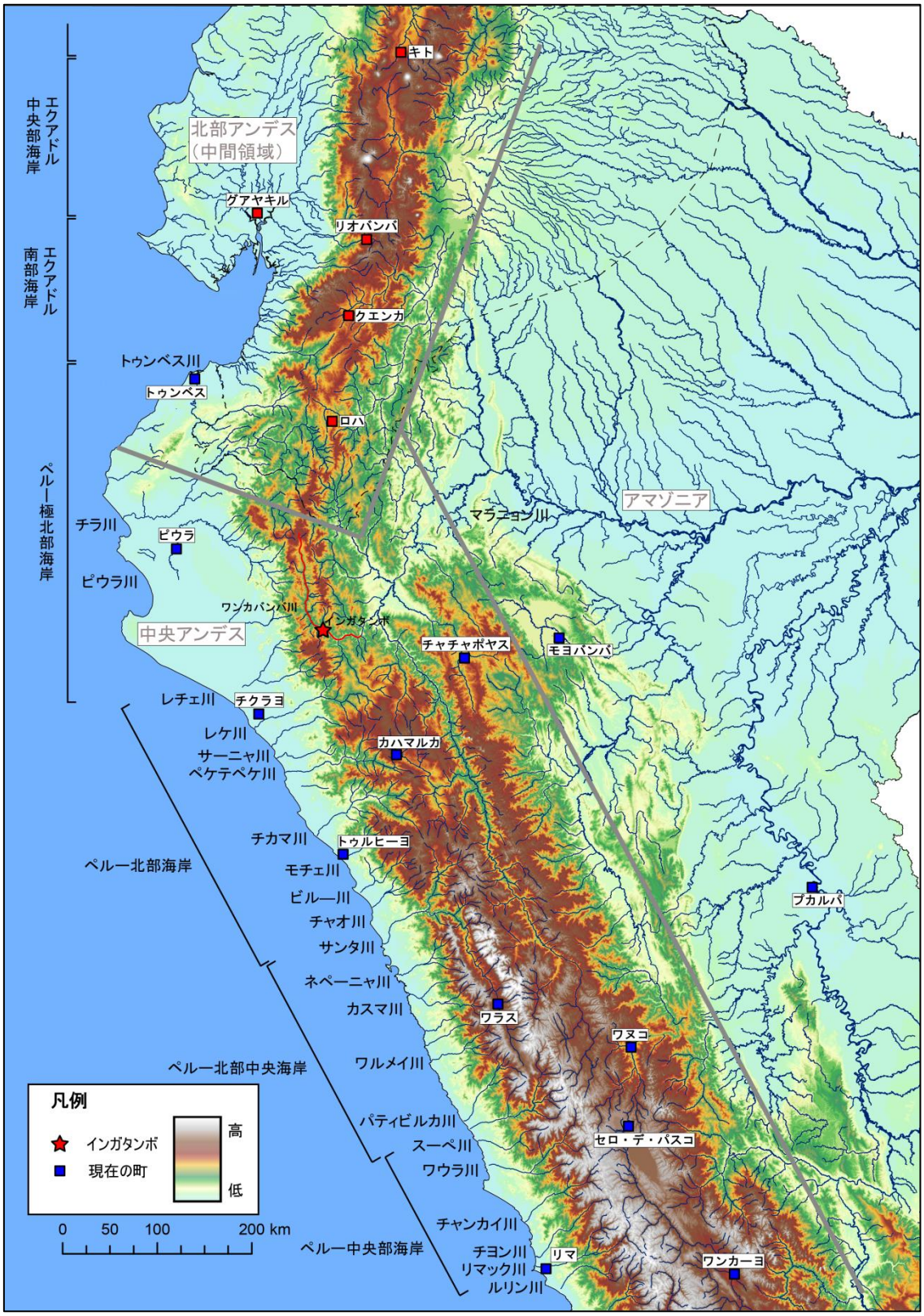


図 2-1　アンデスの地理的区分と文化領域

2-2. 形成期の概念と編年体系

形成期とは、文化進化論から提起された国家にいたる発展段階の一区分である[ルンブレラス 1977:14-16; Strong and Evans 1952]。その開始時期については現在も議論の対象であり、形成期の指標としては、農耕定住や土器製作の開始、神殿などの公共建造物の建設といった諸要素のセットがあげられる[井口 1998; 関 1997]。しかし実際には、アンデス形成期社会は、国家と称されるような社会へと単純に連続することはなかった。このため、アンデスにおける形成期研究とは、単に国家の前段階にあたる社会の研究ではなく、文明の多様な形成過程の研究であるといえる。

また、ペルーとエクアドルでは、形成期という同じ編年体系を用いているものの、両者の時期区分とその意味は大きく異なる[1]。これは、形成期という時期が土器の導入を一つの指標として開始されることに依拠しており、エクアドルでの土器の導入がペルーよりも 1500 年程度早いためである[Raymond 2003: 35]。

さらに現在、ペルーでは、形成期の一指標とされてきた神殿の建設が、土器製作の開始よりも時期的に大きく先行することが明らかとなっている。これを考慮して、日本のアンデス調査団は、土器の有無といった遺物上の特徴を基準に時期区分を行うよりも、神殿を指標として形成期という概念を捉えなおすことを主張した[井口 1998: 46；加藤 1998: 38]。この編年基準は、文明の形成過程を一貫した流れのなかで捉え、時期区分に形成期社会の社会的、経済的プロセスを反映させるという意味で、当該社会を考察する際に有効であると考えられ、筆者もこれを支持する。しかし、このような状況に対して、エクアドルではペルーにみられるような神殿は存在しないため[Raymond and Burger 2003]、同様の指標を用いて編年を組むことは困難である。

以上のように、ペルーとエクアドルの形成期には、時期指標となる物質文化の導入時期やその特徴において、顕著な差異が存在する。また、神殿の存在と規模や、土器などに描かれる図像表現の差異などから、双方に存在した社会が、社会的、経済的、宗教的に異なる展開を歩んだことも指摘される[Burger 2003: 477-481]。さらに、ペルーとエクアドルの形成期編年には、開始時期やその後の社会の展開だけにとどまらず、編年の年代幅においても大きな差異が存在する。これは、ペルーの形成期に関しては、日本のアンデス調査団による継続的研究の成果によって、ペルー北部山地を中心にアンデス先史学史上、類をみない充実したデータを用いた詳細な編年が設定されているためである。なお、ペルーとエクアドルでは、太平洋を南から北へ流れるフンボルト海流やペルー北部を境に生じるアンデス山脈の高低差などに由来する生態環境の差が大きく、そうした環境への適応や環境と人間活動との相互関係が、それぞれに展開した社会間の相違を生む要因となっているともいわれる [Burger 2003: 471]。

本研究対象地域であるワンカバンバ川流域は、ペルー北部地域、ペルーとエクアドルの

[1]考古学とナショナリズムが深く結びついて、国別の考古学が展開したという側面もある[Dillehay 2009: 166]。

国境付近に位置している。このため、その社会動態の解明には、ペルーとエクアドル双方の社会を視野に入れる必要がある。しかし、後述するように、ワンカバンバ川流域社会では、神殿の存在や土器の類似性などにおいてペルーの形成期社会との関連の方が強く認められる。また、詳細な編年を有する日本のアンデス調査団の研究対象地域は、ワンカバンバ川流域のすぐ南方に位置している。そのため、本研究にその調査成果を援用することは、効率的、かつ高精度に分析を進めるうえで有効であると考えられる。さらに、比較検討の材料となるワンカバンバ川流域の周辺地域に存在する諸遺跡の大半は、ペルー領内に存在する。以上を考慮して、本論ではペルーの形成期に関する概念、ならびに時期区分を使用する。そして、エクアドルに関しては、ペルーの編年的枠組みに即して、対応する事例を適宜記述することで比較検討を行う。

なお、ペルーでは、形成期とは別に主にアメリカ合衆国の考古学者を中心に利用される「ホライズン」と「中間期」を組み合わせた編年も存在する。ここでいう「ホライズン」とは広範囲に一定の芸術様式が分布する時期のことであり、「中間期」とはそれとは逆に、地域的多様性が広く認識される時期のことである。本論では、調査地域の周辺地域の先行研究との関係から、形成期以降のデータを記述する際に、「ホライズン」と「中間期」による編年も適宜参照する。なぜならば、隣接する北部海岸部では、とくに形成期以降の調査研究の充実がみられ、その際に「ホライズン」を用いた編年が利用されるためである。

2-3. ペルー北部とエクアドル南部における形成期研究

本節では、形成期社会の具体的な事例を、本論で参照する遺跡を中心として、ペルーとエクアドルに大別しながら時期ごとに言及する。この際、神殿をめぐる諸活動と社会展開、とくにその背景に存在する行為主体としての社会成員の活動と戦略を、リーダーの特質とイデオロギー操作、ならびに集団内の社会的差異、もしくは遺構や遺物といった物質文化から推定される地域間交流に着目して整理する。そのうえで、形成期研究の具体的な問題点を明らかにし、本論の位置づけを明確にする。

これは、一概に形成期といってもペルーとエクアドルでは様相が大きく異なり、編年にも相違が認められることから、それらを具体的な事例をもとに整理しておく必要があるためである。また、ペルーとエクアドルそれぞれの地域において、形成期の状況は年代や地域によって極めて多様である。したがって、本論後半の物質文化の比較検討、ならびに社会動態についての論考に先駆けて、アンデス形成期の状況を時系列に沿ってまとめておく。

なお、ペルーとエクアドルでは、神殿、あるいは祭祀建造物が社会統合の中心として機能していたという共通性がみられるものの、その社会的位置づけは、地域的、時期的に大きく異なっている[Burger 1992, 2003; Zeidler 2008]。また、ゴミスが指摘するように、エクアドルの形成期研究は、とくに山地の遺跡において編年が確立しておらず[Gomis 2002: 139]、ペルーとの対応関係も明瞭でない場合がある。

したがって、以下の記述では、ペルーにおける形成期編年にもとづいて、形成期を早期

（紀元前 3000-1800 年）・前期（紀元前 1800-1200 年）・中期（紀元前 1200-800 年）・後期（紀元前 800-250 年）・末期（紀元前 250-50 年）の 5 つに分けて、時期ごとの特徴を述べる。この時期区分は、日本のアンデス調査団によるペルー北部地域を中心とした綿密な発掘調査にもとづいた層位学的な遺構や遺物の変遷と、それに対応する層位から検出した炭化物の放射性炭素年代測定によって決定されたものである[加藤・関編 1998; 大貫・加藤・関編 2010]。なお、形成期早期から形成期末期までに細分された各時期の一般的な特徴としては、「早期＝神殿建設の開始」、「前期＝土器製作の開始」、「中期＝神殿の増加と大規模化、および図像表現の洗練」、「後期＝神殿の大規模化と金製品を伴う特殊な埋葬の出現（ペルー北部地域）ならびに地域間交流、とくに長距離交易の増大」、「末期＝防御に適したセトルメントの利用と神殿の質的変化」、などがあげられる。

2-3-1. 形成期早期（紀元前 3000-1800 年）[1]

（1） ペルー

先述したように、現在、形成期の開始時期は議論の対象となっている。なぜならば、研究の蓄積によって、形成期の指標の一つである土器製作に年代的に大きく先行して、神殿建設がはじまることが明らかになったためである。とくに中央海岸では、カラル遺跡[Shady 1997, 2001, 2003, 2004, 2008]など、基壇[2]、テラス[3]、円形半地下式広場[4]、方形半地下式広場といった建築的特徴を有した大規模な神殿が築かれた[Williams 1985]。また、北部海岸では、チャオ川流域のサリーナス・デ・チャオ遺跡[Alva 1986]で、大規模な神殿が確認される。さらに近年、レケ川流域で神殿遺跡であるセロ・ベンタロンが調査されたが、上記の神殿とは異なる建築的特徴をもっており、建設年代も既述の中央海岸の諸神殿よりもやや遅い[Alva Meneces 2010; Alva 2008]。このように、海岸部でも地域差がみられ、多様な神殿建築の存在が認められる。

これに対して、ペルーのなかでもエクアドルとの国境に近い、ペルー極北部海岸では状況がやや異なる。チラ川とピウラ川流域の沿岸部[Cárdenas et al. 1991]とトゥンベス川流域では[Moore 2010]、小規模な祭祀建造物（基壇）と居住用建造物が確認されるが、神殿はみられない。また、トゥンベス川流域とピウラ川流域では、形成期早期の終わりごろに対応するとされる土器の報告例がある[Guffroy 2008: 892; Izumi and Terada 1966: 71; Lanning 1963: 205]。しかし、詳細な層位発掘は実施されておらず、他地域との関係も不明な点が多いため、今後の検証が必要である。仮に土器の利用が開始されていた場合、エクアドルに近い極北部海岸部が、ペルーにおいて土器利用が最も早い地域となる。

---

[1]形成期の開始年代は、かつては紀元前 2500 年とされていたが、近年の発掘成果によって、それを遡る年代が次々と提示されており、変更が加えられている[関 2010: 26]。
[2]土砂を積み上げて三面、あるいは四面を石壁で支えた直方体の構造である。
[3]地面を均すか、盛り土をして整地した、土留め壁で支えられた段状の構造である。
[4]地面を掘り下げ、周囲に土手や壁を造ってその内部を広場とするもので、形状が円形のものを円形半地下式広場、方形のものを方形半地下式広場とする。

生業に関しては、沿岸部の豊富な海産資源（魚類、貝類、海獣）を利用[1]しながら、内陸部（河川中流域）で行われる農耕を生業に取り入れた沿岸部と内陸部での相互補完的な資源交換が一つの生業スタイルであったと考えられており、この傾向は形成期早期以降も海岸部においてみられる[Shelia Pozorski 1976, 1979; Pozorski and Pozorski 1979, 1987]。しかしながら、この時期の海岸部の遺跡では、すでにマメ類、根菜類、果実、トウガラシ(*Capsicum*)、ワタ(*Gossypium*)などの栽培、利用が行なわれていた。また、中央海岸のアンコン遺跡では、山地で栽培されたと考えられるジャガイモ(*Solanum tuberosum*)が出土する一方、山地の諸遺跡からも海水生種の貝類の出土が報告されることから、海岸部と山地の間に恒常的とはいえないまでも、地域間交流が存在した可能性が指摘されている[井口 1998: 53]。さらに、中央海岸のアスペロ遺跡やカラル遺跡から出土した土偶や暖流系のウミギクガイ(*Spondylus* sp.)製品、そして北部海岸のワカ・プリエタ遺跡から報告されているエクアドルのバルディビア様式の土器と類似した図像をもつヒョウタン製容器は[Bird and Hyslop 1985][2]、ペルーと遠隔地であるエクアドルの社会とが何らかの形で結びついていたことを示している。

その一方、山地においては海岸部とは状況が異なり、北部中央山地ワヌコのコトシュ遺跡[Izumi and Terada eds. 1972]にみられる「コトシュ宗教伝統」と呼ばれる建築特徴を有する遺跡が、各地で確認されている。大貫は、この建築特徴の分布をユンガとよばれる山間の温暖な環境と関連づけて、狩猟採集とは異なる新たな生業に基盤をおく社会が展開した結果として論じた[大貫 1992]。この時期の狩猟はシカ猟が主であるが、中央山地のフニン高原一帯ではラクダ科動物(*Camelidae*)の飼育が進み、狩猟からの転換が図られていたようである[Wheeler 1995]。海岸部で認められた地域間交流の痕跡は山地にもおよんでおり、たとえば、ラ・ガルガーダ遺跡では、北部海岸のワカ・プリエタ遺跡と同様に、バルディビアと類似性をもつ図像が描かれた織物が出土している。

(2) エクアドル

ペルーとは異なり、すでにバルディビア様式と称される土器を有し、トウモロコシなどの農耕に依存した社会が存在していた[Zeidler 2008]。ただし、ペルーのような大規模な神殿は確認されておらず、中央海岸のレアル・アルト遺跡[Bischof 1975; Damp 1988; Evans et al. 1959; Lathrap et al. 1975; Marcos 1988; Marcos et al. 2002; Raymond 2003; Zeidler 1986]や南部海岸のラ・エメレンシアーナ遺跡[Staller 2001]では、小規模な祭祀建造物を中心とした集落が形成された。

その一方で、南部山地のカタマヨ複合ではやや異なる状況がみられ、紀元前 2000 年頃からバルディビアとは様式的に異なる土器を伴う社会が存在した[Guffroy 2004]。また、ペル

[1]海岸部の社会において、農耕の開始以前に海産資源を生業基盤として人口が増加し、社会発展が起こったとする「文明の海洋基盤説」[Moseley 1975]などがその代表である。
[2]バルディビアとの直接的な関係を否定する論もある[Bischof 1999]。

ーとの国境付近にあたる、南部熱帯低地のチンチペ川流域にあるサンタ・アナ - ラ・フロリダ遺跡では、ペルーとエクアドルを含む範囲で最古の事例とも考えられる鐙形ボトル[1]や暖流系の貝であるカブトソデガイのほか、動物を表象、または象形した石製品を副葬品とする埋葬を伴った祭祀建造物も確認されている[2][Valdez 2007, 2008a, 2008b]。

(3) 小括

ペルーでは、地域的な多様性は大きいものの、形成期早期には各地で神殿を有する社会がみられ、神殿を核として小規模ながらも山地と海岸地域を結ぶ地域間交流が行われていた。神殿の規模や儀礼、副葬品を伴う埋葬の存在などから、政治的、もしくは宗教的リーダーの存在が示唆されるが、後述する形成期中期、あるいは形成期後期と比べて、社会内部の社会的差異を顕著に示す考古学資料は少ない。また、神殿を中心とした社会統合の様相にも地域差が認められ、比較的狭い地理的範囲内に神殿が複数存在し、どれか一つが大きく、地域全体を統合していたのではない[大貫 1998: 87]という状況もあれば、中央海岸のカラル遺跡[3]などのように、この時期すでに地域の核となるような大規模な神殿がみられる場合もある。

その一方で、エクアドルではペルーに先駆けて土器の利用が認められるが、神殿は確認されていない。また、ペルーの事例と同様に、海岸部と山地、もしくは熱帯低地を結ぶ物資の移動が報告されており、地域間交流が行われていたことは明らかであるが[Lathrap 1970]、その規模はまだ大きくなく、頻度も低いと考えられる。しかし、出土土器や石製品にみられる動物表象には、ペルー北部の図像表現との類似性も指摘される[Guffroy 2008]。総じて、遺跡内における建造物の規模の差や副葬品を伴う埋葬の存在からリーダーの存在は示唆されるが、社会的差異の具体的な証拠はペルーの事例と同様にみられない。

以上のように、ペルーとエクアドルの両地域を比較すると、それぞれの社会展開に大きな差異がみられることがわかる[Burger 1984, 1992; Zeidler and Isaacson 2003]。ペルーでは、神殿を中心とした社会統合がはじまる一方で、エクアドルの祭祀建造物は小規模であり、それ以上に居住用建造物が多い。また、ペルーとエクアドルのいずれにおいても、各地の神殿や居住用建造物には明確な規模差が認められるなど、地域的な多様性は大きい。さらに、すでに海岸部と山地、熱帯低地を結ぶ地域間交流がそれぞれの地域内に存在するものの、ペルーとエクアドルの間では、神殿と土器の有無といった文化的特徴に顕著な差がある[Burger 2003: 469]。このことから、国境付近を境に、両者は異なる地域であると考えられている[Bennett 1948; Burger 1984]。ただし、暖流系の貝の獲得や土器の導入の問

[1]胴部から口縁部までの形が馬具の鐙のような形を呈する土器である。
[2]放射性炭素年代測定によって、形成期早期からの活動があることは確かであると考えられるが、石製品や鐙形ボトルの編年上の問題もあるため、年代については今後の検証が必要である。
[3]この時期すでに都市化が起こったとする主張もあるが[Shady 2004, 2008]、神殿の建設過程や神殿間の時期的関係など、不明な点も多い。

題など、ペルーとエクアドル間に交流が存在したことは確かである。この問題の解明には、研究が遅れている両国国境地帯の調査を充実させる必要がある。

2-3-2. 形成期前期（紀元前 1800-1200 年）

（1） ペルー

形成期前期には、形成期早期と比して、各地でより大規模な神殿が建設されるようになるとともに、神殿数も増加する[Burger 1992; 関 1997]。なかでも、北部中央海岸のカスマ川流域では、セロ・セチン[1]など複数の神殿が建設され、その規模も突出している [Pozorski and Pozorski 1987]。また、灌漑農耕に伴う水利を安定化する目的から、神殿の立地が形成期早期と比べて内陸へ移動したことも指摘されており、その傾向はカスマ川流域だけでなく、北部海岸のモチェ川流域でもみられる[Billman 1996]。極北部海岸のピウラ川流域沿岸部やトゥンベス川流域では、祭祀建造物が確認されるものの、その規模はペルーの他地域のものより遥かに小規模である[Cárdenas et al. 1991; Moore 2010]。こうした傾向は、バグア複合 [Shady 1973, 1992, 2000; Shady and Rosas 1979, 1987]をはじめとした北部熱帯低地の遺跡にも認められる[2]。

その一方、北部山地に目を転じると、カハマルカ盆地のワカロマで確認された基壇上に載る部屋状構造物は神殿とは言い難いものの[Terada and Onuki eds. 1982, 1985, 1988]、ヘケテペケ川流域、とくに山地と海岸地域の狭間にあたる中流域で、モンテグランデ[Tellenbach 1986]やラス・ワカス[鶴見 2008a]などの神殿遺跡が集中してみられる。とりわけ、後者の 2 遺跡では、神殿の周囲に神官といった特定の人々の居住用とされる部屋状構造物も確認される。そして、副葬品を伴う埋葬（モンテグランデ遺跡）や建築の精巧さに加えて、建造物の立地に差異がみられることから、階層性の存在を指摘する向きもある[鶴見 2008a: 281-282]。また、同中流域のラ・ボンバ遺跡では、土器やチリイガイ（*Choromytilus* sp.）といった副葬品を伴う埋葬（塔状墳墓）が確認されており、海岸部との地域間交流や集団内の社会的差異に関して、モンテグランデとの類似性が示唆される[Seki 1997: 128]。

これに加えて、形成期前期の特徴としてとくに重要視されるのは土器の出現である。この時期には大きく 3 系統の土器があり、一つは、北部山地チョターノ川流域のパンダンチェ遺跡[3][Kaulicke 1975, 2005a]や北部山地のワカロマ遺跡とセロ・ブランコ遺跡[Onuki ed. 1995]、北部熱帯低地のバグア複合、ヘケテペケ川中流域のモンテグランデ遺跡やラス・ワ

[1]形成期早期にさかのぼる建築の造りかえも確認されている[Maldonado 1992]。
[2]実際に発掘されたのは、現代の町であるバグア・チカ、およびバグア・グランデ周辺に存在する複数の遺跡である。代表的な遺跡としては、この地域の編年において、時期名称で使用されたワカ・モレリーヤ遺跡、アレンヤ遺跡、エル・サラード遺跡、ラ・ペカ遺跡があげられる。これらの遺跡は、調査者の近年の報告で、基本的に「バグア」という遺跡群として表記されている。したがって、煩雑性を避けるため、本論でも同様にバグア複合として記述する。
[3]後述するパコパンパ遺跡を含めて、パコパンパ複合とも称される。その場合、形成期前期に対応する時期にはパンダンチェの名が冠せられる[Seki et al. 2006, 2010]。

カス遺跡などにみられる系統である。もう一つは、北部中央山地ワヌコのコトシュ遺跡で確認されるものである。これら 2 系統の土器は、それぞれペルーより土器が古くから存在したエクアドルとコロンビアから導入されたものと考えられている[関 1997: 61-63]。たとえば、北部山地の土器[Ulbert 1994; Seki 1997; 鶴見 2008a]は、その文様や器形のバリエーションなどから、バルディビアとの関係が推測される[Burger 1992: 60]。また、北部熱帯森林地帯に位置するマナチャキ遺跡の土器もペルーにおける最古の土器の一つであり、前出の地域との様式的類似性が指摘されている[Church 1996: 352]。その一方、極北部海岸のピウラ川とチラ川流域[Lanning 1963; Ravines 2008; Richardson et al. 1990]や、トゥンベス川流域[Izumi and Terada 1966]では、上記の 2 系統とは異なる系統の土器が用いられた。この土器については、ペルーよりもエクアドル海岸部のバルディビアや南部山地のカタマヨ複合の土器との関係が示唆されている[Ford 1969: 159; Lanning 1963: 152-153]。

(2) エクアドル

ペルーでみられた現象と同様に、エクアドルでも形成期早期と比して遺跡の規模が増大する。しかし、ペルーのように大規模な祭祀建造物（神殿）は確認されていない[Lippi 1998; Porras 1982; Villalba 1988]。また、南部山地のカタマヨ複合では、遺跡の多くが河谷底部の丘陵上に建設されることから、丘陵以外の土地は農耕に利用されたと考えられている[Guffroy 2004: 30]。

土器などの遺物に目を向けると、各地の様式的類似性は高く、そのため、海岸地域、山地と熱帯低地との間に地域間交流が存在したことが示唆される[Bruhns 1989; Porras 1987: 267-273; Stothert 2003: 381-387]。そのなかで、海岸部では鐙形ボトルを有するマチャリージャと称される土器様式が現れる[Bichof 1975, 1982; Estrada 1958; Zeidler 2008]。注目しておきたいのは、この時期には、エクアドル内部だけでなく[Bruhns 2003; Collier and Murra 1943; Porras 1982]、エクアドルとペルー北部山地やペルー極北部海岸[Lanning 1963; Ravines 2008]の諸遺跡との間にも、土器の類似性が指摘されるようになることである[1] [Grieder 2009a]。とくに、南部山地のカタマヨ複合[Guffroy 2004: 87-88]や南部海岸のラ・エメレンシアーナ遺跡で出土した土器は、エクアドルの土器よりもペルー極北部海岸トゥンベス川流域[Izumi and Terada 1966]の土器との類似性のほうが強い[Staller 2001: 139]。ただし、各地の土器には、文様などの装飾や器形といった特定要素によって確かに共通性が存在する一方で、細部には豊かな地域色がみられ、地域ごとの独自性も強く認められる。

[1]ただし、カタマヨ複合を調査したギュフロワは、出土コンテクストの悪さなどからセロ・ナリオ遺跡とチャウリャバンバ遺跡における最初期の土器編年について疑問を呈しており[Guffroy 2004: 89]、慎重な姿勢も必要である。

(3)　小括

ペルーでは、形成期前期になると各地の神殿が大規模化し、神殿数も増加する。また、地域差はあるものの、建造物や神殿建設に関わる労働量の増加、あるいは埋葬にみられる副葬品などから、社会内部において建設活動に関わるリーダーといった社会的差異が顕在化しはじめた可能性はある。しかし、その状況は、続く形成期中期以降の社会と比べると限定的である。また、各地で出土するようになった土器の類似性にも示されるように、形成期早期と同様に、山地と海岸地域の間に地域間交流が存在したと考えられる。

その一方で、エクアドルでは大規模な祭祀建造物は確認されず、ペルーと比べて階層性を示すような具体的なデータも少ない。海岸地域と山地、もしくは熱帯低地における地域間交流の存在は形成期早期にも増して明らかではあるが、ペルーとの国境に近いエクアドル南部では、エクアドルに存在した社会に加えて、ペルー極北部海岸や北部山地、北部熱帯低地との関係が強くみられる。

以上のように、ペルーとエクアドルの両地域を比較すると、神殿や祭祀建造物をめぐる活動の差異を背景として、それぞれの社会展開は大きく異なる。しかし、ペルーでは神殿、エクアドルでは小規模な祭祀建造物を伴う居住用建造物の規模が増し、それらの分布範囲は拡大する。そのため、ペルーとエクアドルの双方の地域で、神殿や祭祀建造物を中心として社会統合が進んだことが示唆される。また、神殿の規模や埋葬、あるいは特定の人々のための居住空間が出現することなどから、地域的多様性はあるものの、社会を構成する集団内に差異化が生じはじめた可能性はある。ただし、河川流域や盆地といった広い地域を統合する社会を示すような考古学データは、いまだ認められない。

さらに、ペルーとエクアドルそれぞれの地域において、海岸部と山地、熱帯低地間の地域間交流がみられる以外に、ペルーとエクアドル間の交流を土器の類似性のなかから読み取ることができるようになる。しかしながら、器形のバリエーションや土器以外の遺物、原産地や製作地が明らかにできるような遺物を包括的に分析せずに、単純に土器の様式的類似性だけで交流の存在を語ることには慎重な態度が必要であり、地形や立地などを考慮しながら、多面的にこの問題に取り組んでいかなければならない。

2-3-3.　形成期中期（紀元前 1200-800 年）

(1) ペルー

形成期中期に入ると、セトルメント・パターンの調査を通じて様々な地域で報告される、遺跡の規模差や分布状況などからも明らかなように[Billman 1996; Wilson 1988]、各地に建設された神殿の規模が増大し、地域的な統合の核となるような神殿が現れるようになる。また、人物やネコ科動物、蛇などといった動物表象が土器や神殿の壁画に表現されるようになり、世界観を物質化するという意味において、物質文化上に大きな変化がみられる。

ペルー全体を俯瞰してみると、形成期前期と同様に、北部中央海岸カスマ川流域の神殿の規模が突出している。そのなかでも、パンパ・デ・ラス・リャマス - モヘケ複合やセチ

ン・アルトは最大規模を誇る神殿遺跡で、それらが近隣の神殿遺跡とともに、流域内に初期国家ともいえる政体（政治的なまとまり）を構成していたことが調査者によって想定されている[1][Pozorski and Pozorski 1987, 1992: 864, 2002, 2008: 616]。また、カスマ川流域では、内陸部における農耕の比重が次第に高まったとされるが、沿岸部では内陸部の政体へ海産資源を供給するセンターが建設されることから、タンパク質の摂取においては依然として海産資源が重要な役割を果たしていたと考えられている。

こうした状況のなかで、中央海岸ルリン川流域のカルダル遺跡やマンチャイ・バホ遺跡、ミーナ・ペルディーダ遺跡[2]では、増改築が繰り返されることで神殿が徐々に巨大化していく更新活動が明らかになっている[Burger 1992; Burger 2009a, 2009b; Burger and Salazar 1991, 2009a, 2009b; Salazar 2009]。さらに、中央海岸では、「U字型配置」をもつ神殿が多く、土器や図像に共通性が認められることから、この地域に「マンチャイ文化」として区別できるまとまりが存在したことが指摘される[Burger and Salazar 2008: 86]。その一方、北部海岸では、還元焼成による黒色の下地に刻線で複雑な図像が描かれる「クピスニケ」様式の土器を有する大神殿が建設された [Alva 1986, 1988a, 1988b]。そのなかでも、レチェ川流域のワカ・ルシーア遺跡では神殿更新も認められる[3][Shimada et al. 1982]。

こうした神殿更新は、北部山地のワカロマ遺跡でもみられ、以前の建物を埋めて大基壇が築かれた。また、北部山地では、クントゥル・ワシ[Inokuchi 2002b; Onuki ed. 1995; 加藤編 2007]やパコパンパ複合[Flores 1975, 2005, Fung 1975, Morales 1977, 1980, 1998; Rosas and Shady 1970; Santillana 1975, 2005]などといった大規模な神殿遺跡が建設された。さらに、クントゥル・ワシ遺跡と隣接するセロ・ブランコ遺跡の埋葬には、方ソーダ石製品やウミギクガイ製品が副葬されるほか、ペルーでは南部山地のワンカベリカで採取される赤色顔料の辰砂が塗布されている。つまり、形成期前期まで以上に遠隔地起源の遺物が出土するようになるのである。同様に、ヘケテペケ川中流域のラス・ワカス遺跡でもウミギクガイ製品や方ソーダ石製品が出土している[鶴見 2008a]。また、この遺跡では、トウモロコシ(*Zea Mays*)の利用も開始されるなど生業面での変化がみられる。

これに対して、ペルー極北部海岸では、より南に位置する既述の地域とは異なる状況をみせる。ピウラ川中流域では、小規模の方形建造物を有する 3 つの基壇から構成されるセロ・ニャニャニケ遺跡[4]が築かれた[Guffroy 1989,1992, 1994; Guffroy et al. 1989, Kaulicke

[1]これに対し、カスマ川流域内には複数の神殿が存在することなどから、各神殿はそれぞれの地域的な集団によって建設、維持されたという論もある[Burger 1992: 87]。

[2]ミーナ・ペルディーダ遺跡では、アンデス最古の事例と考えられる金製品と銅製品の出土も確認されている[Burger and Gordon 1998; Burger and Salazar 2009a]。

[3]基壇上に円柱の立ち並ぶ部屋状構造物が検出され、基壇の造りかえと、最後に基壇が封印され、放棄されるという儀礼的行為が確認されている。

[4]建造物については、ヘケテペケ川流域のモンテグランデ遺跡との類似性が指摘されており[Guffroy 2008: 895]、その成立を北部海岸のヘケテペケ川とサーニャ川流域からの影響とする見方もある。

1998]。この遺跡は、当該地域に造られたはじめての神殿であるが、その規模はピウラ川流域より南に位置する同時代の遺跡よりも小さく、その北にある遺跡[1]よりも大きい[Burger1992: 100]。加えて注目したいのは、セロ・ニャニャニケ遺跡の土器で、極北部海岸、北部山地と北部海岸だけでなく、後述するエクアドル南部山地や同海岸部の土器とも様式的に類似している[2][Guffroy 2008: 895]。このことから、この遺跡は、ペルーとエクアドルとの交流における重要地であったと考えられている[3][Burger 1992: 101]。

また、北部熱帯低地のハエンやバグアでは、それぞれセレサルとミチナル[4][Miasta 1979]、トメペンダ[Olivera 1998, 2008]といった神殿が築かれた。これらの神殿の形態や配置は、明らかに他のペルーの神殿とは異なり、極めて独自性が強い。とくにバグア複合では、ペルー北部山地や極北部海岸だけでなく、エクアドル南部山地との関係が示唆される「バグア伝統」と称される土器が現れた[Shady 1973, 1974, 1987, 1992, 2002, Shady and Rosas 1979, 1982, 1987]。

(2) エクアドル

形成期中期のエクアドルでは、形成期前期と同様に神殿は認められないが、小規模な祭祀建造物を中心として居住用空間の拡大がみられる[Lippi 2003; Zeidler and Pearsall eds. 1994]。また、前時期の祭祀建造物を埋めたあとで、新たに小規模な祭祀建造物が建てられるといった神殿更新と類した建設活動の存在も指摘されている[Guffroy 2004]。さらに、海岸地域では、チョレーラと称される動植物表象を特徴とした土器様式を有する文化が現れる[Bushnell 1951; Cummins 2003; Zeidler 1994, 2008; Zeidler and Isaacson 2003]。

この時期においても海岸部と山地、熱帯低地との地域間交流が、石鉢の類似性[Zeidler 1988]や、南部山地のカタマヨ複合で出土したウミギクガイの集積遺構から示唆される[Guffroy2004, 2008]。また、北部山地のコトコリャオ遺跡から南部山地のカタマヨ複合にかけての広い範囲で、地域差は非常に大きいものの[Gomis 2002; Guffroy 2008; Porras 1987; Bruhns 1989]、土器の様式的類似性が指摘される[Zeidler 2008: 471-479]。さらに、南部山地のセロ・ナリオ遺跡、チャリュアバンバ遺跡やピリンカイ遺跡から出土した土器の胎土分析によると、上記の遺跡間で実際に土器が交換されたことが明らかとなっている[Bruhns 2003: 162-164]。このような状況のなかでも、ペルーとの国境に近いカタマヨ複合

[1]トゥンベス川流域、ウニャ・デ・ガト遺跡の祭祀建造物などがこれにあたる[Moore 2010]。
[2]極北部海岸のトゥンベス川流域ペチチェ遺跡[Izumi and Terada 1966]とチラ川・ピウラ川流域の諸遺跡[Lanning 1963; Ravines 2008; Richardoson et.al 1990]に加えて、北部山地のパコパンパ複合や北部熱帯低地のバグア複合の土器、北部海岸のサーニャ川流域やヘケテペケ川流域の土器、さらにはエクアドル南部山地のカタマヨ複合や海岸部のチョレーラ様式の土器との様式的類似性が指摘されている[Guffroy 2008: 895]。
[3]ランバイェケ川以北の山地は、それよりも南の地域と比べて、標高が低く、東西の範囲も狭いという特徴があり、山を横切るような移動が行いやすいといわれる。
[4]ミチナル遺跡では土器を有しない形成期早期の堆積があると記述されているが、その詳細は不明である。

の土器は独自性を有しており、形成期前期と同様に、むしろペルー極北部海岸や北部山地、もしくは北部熱帯低地との類似性が高い[Guffroy 1994, 2004, 2008]。いずれにせよ、形成期前期と同様に、エクアドルの各地で出土する土器は、ペルー北部地域（極北部海岸、北部海岸、北部山地）の土器との間に類似性を示す[1][Grieder 2009a: 84-96; Guffroy 1994: 421; Staller 2001: 139]。とりわけチョレーラの土器には、ペルー北部海岸のサーニャ川流域とヘケテペケ川流域のプエマペ遺跡から出土した土器との間に、細部に至る関連が指摘されている[Elera 1993: 240]。

(3) 小括

ペルーでは、形成期中期になると、各地の神殿が神殿更新を伴って大規模化する。また、その分布範囲もより拡大する。さらに、神殿の壁画やレリーフ、土器などの遺物に、動物や人物の図像表現が現れるようになるのも特徴の一つである。そして、何よりも重要であるのが、集団内の社会的差異がより鮮明になってくることである。たとえば、神殿更新には、組織化された労働力とそれを支える生産、または作業を統制するリーダーの存在が必要であると考えられる。しかし、この建設作業が、少数の専業的な労働者によって行われたのか、多数の労働者の季節的な協働作業によって行われたのかは、階層性に対する認識が大きく変わってくるために注意すべきである[関 2003: 223-224]。

また、遠隔地を起源とする副葬品が特殊な埋葬に限定的に表れる状況も、社会的差異の存在を支持する。クントゥル・ワシでは、神殿の構造に差異化がみられ、基壇上部に参加人数の制限された閉鎖的儀礼空間と、基壇下部に参加人数の多い公共的儀礼空間が生じた可能性も指摘されており[関・坂井 1998: 157-158]、これも社会分化の一つの表れであると捉えることができる。つまり、こうしたデータからは、神殿をめぐる活動を行う集団内に社会的差異が顕在化していくと同時に、神殿を核とした社会統合が進んだことが示されるのである。そして、神殿の規模は、神殿をめぐる諸活動に関わる社会成員の規模の増大を反映していると捉えることもできるよう。

いずれにしても考古学データは、海岸部と内陸部、あるいは山地や熱帯低地の広い地域間で交流が存在したことを示している。そのなかで、中央海岸の「マンチャイ文化」、北部海岸の「クピスニケ」、北部山地に分布する刻線で区画した器面に焼成後に顔料を充填する土器の分布は、ある程度の地域的な拡がりのなかで物質文化に高い共通性がみられる例である。しかし、遺跡間では図像表現などに差異がみられるため、イデオロギーを共有するような集団があったとしても、社会的に統合されえたのは、あくまで一つの盆地程度の範囲内であったとされる[関・坂井 1998: 155-156]。また、長距離交易を示す遺物の出土が少ないという指摘もあり[Burger 1992]、地域間交流は比較的緩やかなものであったと考えら

[1]北部山地のコトコリャオ遺跡では、ペルー北部山地のパコパンパ複合や北部中央山地のコトシュ遺跡との関係が考察されている[Izumi and Terada 1966: 71-89; Villalba 1988: 251-260]。

れる。

最後に、荷駄獣として利用されることから、地域間交流と深く関わるラクダ科動物の利用について検討してみたい。この時期にはペルー北部山地のパコパンパ複合[Uzawa 2010]と北部海岸のワカ・ルシーア遺跡で、ラクダ科動物の出土例が報告されている[Simada et al. 1982]。アンデスでは、中央山地のフニン高原一帯でラクダ科動物の飼育が先行することから[Wheeler 1984]、ラクダ科動物の家畜化の起源はより南方に求められる。しかし、パコパンパ複合やワカ・ルシーア遺跡より南に位置するカハマルカ盆地では報告例が少なく、ヘケテペケ川流域の諸遺跡ではこの時期の報告例はない。そのため、ラクダ科動物の利用は、南からの一元的な流れでは説明できず[鵜澤 2007a, 2007b]、各地域での動物利用に差異が存在することがわかる。

これに対してエクアドルでは、小規模な祭祀建造物が増加するとともに、居住用建造物の大規模化が各地でみられるようになる。ペルーの事例のように、建設活動から階層性の存在を考察することはできないが、土器や石器、貝製品の生産や流通の管理を通じて、社会を構成する集団内部の差異化が進んだ可能性はある。また、土器の類似性やウミギクガイの存在などが示すように、海岸部と山地、熱帯低地との間で、物資の交換を目的とした地域間交流がより活発に行われたと考えられる。しかし、ペルーとの国境に近いエクアドル南部では、むしろペルー極北部海岸や北部山地、北部熱帯低地との関係が強くみられる。

以上のように、ペルーとエクアドルの両地域で、神殿や祭祀建造物を中心に社会統合が進み、建築、土器や石器、貝製品の生産と分配などにおいて、階層性の存在が次第に明確になってくる。また、この時期のペルーとエクアドルでは、広い地域的な拡がりのなかで土器様式に共通性がみられるようになるが、同時に地域的な多様性も顕著である。

いずれにしても、神殿を核とした社会統合の範囲が、広くとも河川や盆地単位にとどまり、隣接する他の地域社会を統合するようなものではないという点や、遠隔地との交易を示すような遺物が少ないという点を考慮すると、特定社会が遠隔地との交易を一元的に管理していたとは考えにくい。隣接する各地域の神殿間において相互交流が繰り返され、そのネットワークを通じた結果として広範囲で物資の移動があったようにみられる、と考える方が妥当であろう。つまり、ウミギクガイやカブトソデガイといった儀礼用具、もしくは社会的地位を示す象徴財の使用コンテクストにおける差異は、象徴的意味などが両地域で共通しておらず、その背景にある社会構造も異なる可能性を示唆するものである[Burger 2003: 478-479; Stothert 2003: 362-366]。

2-3-4. 形成期後期（紀元前 800-250 年）

（1）ペルー

「海岸空白[1]」と呼ばれるような現象がおこり、海岸部を中心に全体的な傾向として、遺跡数の減少がみられる。そして同時に、神殿の多くが山地に分布するようになり、神殿更

[1]BC.800-700 頃に、ペルー海岸地域で大規模神殿が放棄される現象を指す[Onuki 1993]。

新を伴って、各地の神殿が大規模化する。こうした現象は、広範囲にわたってみられるため、大規模なエル・ニーニョなどの自然災害がその要因の一つとしてあげられている[Burger 1992: 184-189; 加藤・井口 1998: 211-212]。ただし、海岸部の状況も一様ではなく、地域差が認められる。たとえば、形成期中期までに大規模な神殿がみられた北部中央海岸カスマ川流域では、それまでの神殿とは異なり、部屋状構造物群がみられるようになる一方で[Pozorski ando Pozorski 1987]、北部海岸では引き続き基壇とテラスを伴う神殿が建設される。

同様に、山地の状況も多様である。たとえば北部山地のワカロマ遺跡では、形成期中期からの明確な変化が形成期後期後半（紀元前 550-250 年）までみられないのに対して、北部山地のクントゥル・ワシ遺跡では、更新活動によって神殿の形態が大きく変化して海岸地域の特徴を顕著に示すようになる[Inokuchi 2010]。また、基壇内から金製品を副葬品に伴い、辰砂が塗布された埋葬が確認されるほか、暖流系のウミギクガイやカブトソデガイ製品、ボリビア産の方ソーダ石製品[清水・加藤・清水 2007]、そしてペルー南部山地産の黒曜石といった長距離交易を示す遺物がみられる[加藤・井口 1998; Onuki ed. 1995]。さらに、石器や骨角器の分析によれば、未製品や製作道具類が出土することから、神殿が製作活動の場であったことも指摘される[荒田 2007; 西澤 2007]。調査者らは、こうしたクントゥル・ワシにみられる変化を、土器の特徴が変化して北部海岸のクピニスケ様式の土器との高い類似性を示すようになることなどをふまえて[Inokuchi 1998]、海岸地域から来た人々が主導した現象であると結論づけている[加藤・井口 1998: 214; 加藤 2007: 18-20]。

北部山地のパコパンパ複合でもクントゥル・ワシ遺跡と同様の現象がみられ、更新の過程において、基壇内部に金製品を伴う墓が築かれている[関 2010; Seki et al. 2010]。「パコパンパの貴婦人」と命名されたこの埋葬からは、金製品以外にも完形土器や海水生種と考えられる貝製品などが副葬されており、埋葬された人物には辰砂と藍銅鉱が塗布されていた。しかし、建築の全体プランや、基壇内部に張り巡らされた暗渠の規模などには、クントゥル・ワシ遺跡との差異も認められる。

また、パコパンパ複合から西へ進んだラ・グランハ複合[1]のエル・ローヨ遺跡でも、大規模な基壇建造物が建設される。金製品が副葬された埋葬やウミギクガイ製品などが出土しており[Wester et al. 2000]、クントゥル・ワシ遺跡やパコパンパ複合との共通点がみられる。

こうした神殿更新は、ペルー極北部地域でも確認されている。たとえば、ピウラ川中流域のセロ・ニャニャニケでは、ペルーの他地域の神殿と建築要素を共有しながらも、全体配置が異なる独自性の強い神殿が築かれた[Guffroy 1989, 2008]。また、土器にも大きな変化が生じたようであり、調査者はこれを、より南の地域からの搬入品が増加した結果として捉えている。

[1]開発事業に際して考古学調査が行われた結果、少なくとも、形成期中期と形成期後期に相当する複数の遺跡の存在が確認された。しかし、発掘が実施され、層位学的な情報とともに明確に時期を特定できるものは、エル・ローヨ遺跡に限られている。

これに対して、北部熱帯低地のバグア複合[Shady 2002: 204-209]や北部熱帯森林地帯のマナチャキ[Church 1996: 404-411]では、ペルー北部の広範な地域とエクアドル南部地域[1]との交流を示す土器の類似性が認められる。しかし、これらの地域の神殿に関しては、詳細は不明である。

さらに、この時期には、動植物利用に関しても大きな変化が生じたようである。北部山地のワカロマ遺跡やクントゥワル・ワシ遺跡では、植物利用に変化がみられ、トウモロコシの摂取量の増加が認められる[関 2007, 2008]。また、動物利用に関しても、形成期中期までに大勢を占めたシカから、荷駄獣としてのラクダ科動物へと比重が推移したことが、チャビン・デ・ワンタル遺跡 [Miller and Burger 1995, 2000]やクントゥル・ワシ遺跡[鵜澤 2007a]の動物骨の分析から明らかとなっている。こうしたラクダ科動物は、活発化した地域間交流に際して[Burger 1992; Burger and Matos 2002; 加藤・井口 1998]、輸送手段として利用されていた可能性がある。

しかし、このような状況は、紀元前 500 年頃を境にして一変する。まず、極北部海岸のピウラ川流域では、セロ・ニャニャニケが放棄され、土器の図像表現が変化する。また、北部山地のワカロマでは、この時期の活動は認められるものの、それ以前に存在した神殿建築が破壊される。さらに、北部熱帯低地のバグア複合や北部山地のクントゥル・ワシなどでは、土器の装飾や図像表現が変容する。そのため、クントゥル・ワシ遺跡を調査した加藤は、建築や遺物にみられる変化とあわせて、神殿に機能面での変化が生じたと論じている[加藤 2007: 18-20, 2010]。これと連動してクントゥル・ワシでは、石器の材質や動物利用、植物利用においても変化が認められている[西澤 2007; 坂井・清水 2001; 鵜澤 2007a, 2007b; 米田・関 2002]。

(2) エクアドル

形成期後期のエクアドルの状況は編年上の問題があり、ペルーとの対応関係が不明瞭である。形成期中期に海岸部で成立したチョレーラ様式の土器が、中央山地などでも確認されるなど[Arellano 2002]、地域間の関係が密接になったと考えられる一方で、地域ごとに独自の社会展開がみられる[Guffroy 2008]。編年が確立された数少ない遺跡であるカタマヨ複合では、南部山地の諸遺跡との間で土器の共通性が認められている[Guffroy 2004]。しかし、新たに現れる器形や装飾技法を伴う土器には、エクアドルの諸遺跡よりもむしろ、ペルー極北部海岸や北部山地、北部熱帯低地にみられる土器との間に高い共通性を見出すことができる。

また、単に物資が交換されただけでなく、宗教やイデオロギーを共有する社会が各地に存在し、遠隔地起源の奢侈品をとりこむことで、権力の確立を目論むようなリーダーが出

[1]ペルー北部山地のチョータやカハマルカ、ヘケテペケ川流域、極北部海岸のピウラ川流域、北部海岸のランバイェケ川流域、ならびにエクアドル南部山地のピリンカイ遺跡などとの関連も示唆されている。

現したことが指摘される[Stothert 2003: 381-386]。つまり、この時期はエクアドルにおいて、地域間交流の拡大や明確な階層性の存在など、社会的状況が大きく変化した時期と位置づけられるのである。

このような状況は、紀元前 500 年頃を境にして変化した。たとえば、カタマヨ複合では、無頸壺[1]がはじめて現れるようになるなど、ペルーに展開した社会との関係がさらに強まりをみせる[Guffroy 2004: 100-103]。調査者であるギュフロワは、チャビン・デ・ワンタル遺跡やパコパンパ複合との関係を考慮に入れているが、とくに近年の調査によるチャビン・デ・ワンタル遺跡の再編年によると[Kembel 2001]、遺跡間に年代差が生じるため、検討の余地は大きい。

(3) 小括

ペルーでは、神殿が大規模化するが、その数は絞られるようになる。かつては、チャビン・デ・ワンタル遺跡の影響下で、各地の社会が発展したというような図式において、この時期の社会変化が説明されてきた。しかし、調査の進展が顕著な北部山地カハマルカのデータによれば、このような図式は成り立たない。むしろ、北部山地のクントゥル・ワシ遺跡の事例は、当該地域の社会変化が北部海岸との関連のなかで進展したことを示唆している。つまり、各地の神殿は交流によって関係を有してはいたものの、それぞれの社会は独自の展開をみせたと考えられるのである[Burger 2008: 697-700; 加藤 2007]。

また、クントゥル・ワシやパコパンパ複合、ラ・グランハ複合で金製品を伴う特殊な埋葬や遠隔地からもたらされた奢侈品を伴う埋葬がみられること、あるいは石彫などの図像に人物表現が用いられるといった変化が認められることから[Rick 2005]、各神殿にはリーダーが存在し、諸活動を執り行う集団内で社会的差異が顕著になったことが示唆されている[Burger 1992: 203-206, 2008: 697-700; 関 2006]。さらに、神殿の規模や分布状況を考慮すると、神殿を中心とした社会の規模も増大し、より広範な地域的統合の核となったことが想定される。

汎アンデス的規模におよぶ地域間交流の成立も、この時期の特徴の一つである。海岸部と山地、または熱帯低地との相互交流は以前より指摘されてきたが、暖流系の貝やペルー南部山地を産地とする黒曜石、ボリビアを原産地とする方ソーダ石といった遠隔地起源の物資が、ペルー北部でも多く確認されるようになるなど、地域間交流は質的に変化した可能性がある。

その一方、エクアドルでは、神殿は確認されないものの、各遺跡において地域間交流を示すデータが増加する。そして、エクアドル内部だけでなく、エクアドル南部山地では、とりわけペルー北部地域との地域間交流が顕著となる。このように、遠隔地起源の物資を獲得すること、または流通を管理することによって、ペルーでも認められたように、次第

[1]頸部を持たず、球体の上部を切ったように丸みを帯びた土器で、ペルーでは形成期前期より出土例が多い。

に集団内の社会的差異が顕在化していったと考えられる。

以上のように、ペルーとエクアドルの双方で社会に大きな変化が生じ、階層化が進展する。また、地域間交流が活発化して、各地の遺跡で、隣接地域間、もしくは遠隔地との間に遺物の共通性がみられるようになる。さらに、チョレーラ様式やカタマヨ複合の土器やウミギクガイなどの考古学データからは、ペルーとエクアドルとの地域間交流が示唆されるものの[Gomis 2002: 151-153; Guffroy 2004: 94-103]、エクアドルでは「チャビン様式」と称されるような図像自体は確認されていない[Burger 2003: 469]。このため、バーガーは、エクアドルとペルーではそれぞれにインタラクション領域[1]があり、交流はもつものの、互いに宗教やイデオロギーを共有しあうようなものではなかったとしている[Burger 1992]。その最たる根拠は、ペルー北部山地のパコパンパ複合出土の黒曜石が、直線距離で近いエクアドルのキト近辺からではなく､それよりも数百 km 離れたペルー南部山地のキスピシーサ産ということである[Burger 1984]。このことは、地域間交流が単純な距離ではなく、社会的、宗教的、または政治的要因によって成立した結果であると捉えることができよう。

その一方で、ウミギクガイに代表される考古学データは、ペルーとエクアドルでは独自の文化領域が形成されつつも、必ずしも無関係に存在していたわけではないことを示している。そのなかで、従来の研究では、両者の間に位置するエクアドル南部からペルー北部の国境地域の社会を、二つのインタラクション領域のフロンティアとして、その交流の仲介者的役割を果たしたものと想定してきた[Burger 1984, 1992, 2008; Church 1996]。国境付近を「中間地域」とみる立場もこれと同様であるが[Guffroy 2008]、ギュフロワも指摘するように「中間地域」と一括りした地域の社会的状況は一様ではなく、その地域内においても複雑で多様な状況が存在したことは明白である。また、これまでみてきたように、現在の研究状況からは、双方の地域にインタラクション領域が存在したかどうかについても検討の余地は大きいと考えられる。

2-3-5. 形成期末期（紀元前 250-50 年）

これまでみてきた状況に大きな変化がみられる。そして、各地で神殿の機能が停止して、社会が変動したと考えられている[関 1998a]。たとえば、形成期後期までとは異なり、神殿ではなく、居住機能を主としたような建造物が築かれるようになる一方で[Brennan 1978, 1980]、立地的特徴から「要塞」とも考えられる建造物が建設されるようになる[Billman 1996, 1999b; Ghezzi 2006; Ghezzi and Ruggles 2008; Pozorski and Pozorski 1987; Willey 1953]。その結果、地域間関係も形成期後期までとは一変したことが示唆される。

また、形成期後期にアンデスの広範囲にわたってみられた土器や図像の類似性は認められなくなり、地域ごとの独自性が強くなる。たとえば、北部山地のクントゥル・ワシでは、神殿建設が行われなくなると同時に、それまでの土器特徴とは全く異なる土器がみられるようになる[Onuki ed. 1995]。ただし、地域間交流が完全に失われたわけではなく、北部山

[1]チャビンとチョレーラのインタラクション領域があるとした。

地のライソン遺跡と北部海岸のセロ・アレーナ遺跡から出土する土器の間には類似性も指摘される[Brennan 1978: 665-668; 関 1998a: 251]。

しかしながら、全体的な傾向として、土器などの物質文化の面では、形成期との連続性よりも、続く地方発展期との連続性の方が強くみられるようになる。これまで繰り返し建設されてきた神殿が居住性の高い建造物へ変容していくことと併せると、形成期末期とは、形成期後期までにみられたようなイデオロギー面をとくに重視した社会基盤から、後の国家社会にみられるような経済的側面を重視したものへと社会基盤が移行していく時期であったと考えられる。

このようなことから、本論で使用している編年上では形成期末期となっているが、形成期後期までの社会との差異、あるいは続く地方発展期の社会との共通性が存在すること[Kaulicke 2010]は、見過ごすことはできない。また、先述の「ホライズン」と「中間期」を使った編年でも、この時期からは「中間期」に相当し、差異化が図られている。なお、この時期のエクアドルに展開した社会は、すでに形成期としてではなく、地方発展期のものとして位置づけられており、ペルーの地方発展期と同様に各地に地域色の強い文化が展開している。

2-4. 先行研究の問題点と本論の位置づけ

これまでみてきたように、形成期社会の展開において、神殿における諸活動、とくに神殿を中心とした地域間交流の果たした役割は大きい。このような地域間交流の存在は、形成期早期より認められるが、なかでも注目すべきは、形成期中期から形成期後期への変化である。なぜならば、この時期、アンデス各地で地域間交流の活発化が指摘され、かつその活性化が技術やイデオロギー、もしくは輸送手段や生業面における変化と連動して、社会的差異の顕在化などといった多くの社会変化を生じさせたと考えられるためである。こうして、先行研究においても地域間交流の重要性が注目され、ゲートウェイ・コミュニティやインタラクション領域、あるいはネットワークといった様々な概念を用いて、地域間交流、および地域間交流が活発化する要因が、盛んに議論されてきた[Burger 1992; 加藤 2007]。しかし、これらの研究が抱える問題点は決して少なくない。とくにゲートウェイ・コミュニティに関する議論では、地域間交流を行う社会間の関係が、アプリオリに規定されている点に問題がある。そして、いずれの研究でも、離れた地域に存在する神殿が直接的に結びつけられて論じられるなど、交流を論じる際に肝心となる中間地域やそこに存在した社会の研究、ならびに論考が欠如している。

もちろん、形成期早期から、暖流系の貝の獲得や土器の導入の問題など、ペルーとエクアドル間に交流が存在したことは確かである。しかし、この問題の解明に必要な中間地域、つまりは両国の国境地域の調査は進展していない。現状の考古学データでは、形成期において地域間交易を一括管理するような特定社会の存在は認められないため、隣接する各地域の神殿間において相互交流が繰り返されていたと考えられる。この点において、遠く離

れた場所にある遺物の共通性を、距離を問わずに直接的に関連づけることに大きな問題があることは明白である。そのため、中間地域の調査を実施し、データを充実させたうえで、両地域との比較検討を行いながら、上記の問題に取り組むことが必要である。そして、国境地帯では、両者の中間的な社会が存在するのか否か、もしくは全く異なる社会が存在したのか、という問いを明らかにすることは、形成期研究にとって極めて重要である。

その一方で、とりわけ形成期前期以降、ペルーとエクアドルの各地域において、海岸部と山地、熱帯低地間の地域間交流が次第に顕在化していく。先述のとおり、地域間交流の活性化と神殿を中心とした社会の変化は大きく関連している。先行研究の蓄積によって、個々の神殿を中心として徐々に社会統合が進んでいったことは明らかである。しかし、各神殿の建設、あるいは神殿で行われていた儀礼や経済活動をめぐる状況は極めて多様であると考えられる。そのため、神殿における諸活動を支える集団の活動や戦略をみていくには、詳細な発掘調査を通じて各神殿の状況を明らかにしていくことが不可欠である。

また、本論の研究対象であるワンカバンバ川流域の周辺地域における調査データでは、とくに土器様式に顕著に示されるように、各地で周辺地域社会との共通性と多様性が同時に認識される。このことは、各社会に複雑な社会的状況が存在していたことを示唆する。そのため、隣接地域間であっても一様に地域間交流が行われたと考えるのは適切ではなく、各社会は独自の展開をみせたと考えられるのである。つまり、単純に土器の様式的類似性だけで、交流を語ることには慎重な態度が必要である。

したがって、器形のバリエーションや土器以外の遺物、産地や製作地が明らかにできるような遺物、もしくは建造物の包括的な分析に加えて、地形や立地などを考慮しながら、多面的にこの問題に取り組むことが重要である。これは、各社会のおかれた状況を明らかにするためには、個々のコンテクストにおいて遺構や遺物の様式的類似性や差異を検討し、それらがいかにしてもたらされたのかを明らかにする詳細な研究が必要ということである。そして、それを通じて交流の存在や度合い（密接さ）を検証することが不可欠であることを意味する。さらに、時代が下るにつれ、とくに形成期後期において、遠隔地との交流を示す遺物が増加するなど、交換される物資の特性や量によって、地域間交流のあり方に差異が存在する可能性を考慮する必要もある。これらの問題を実際に明らかにしていくためには、どのような形で、あるいはどのような方法で、どのような物資、もしくは情報に関する交流が行われたのか、その様態[1]を考慮することが重要である。

このことにもとづいて、本論では、発掘調査と遺跡分布調査を実施してえられた考古学データの包括的な分析を、GIS を用いて地形や立地などをふまえた地域間ルートの分析と総合することで、上記の問題に取り組んでいく。なぜならば、神殿における諸活動、とくに集団内の社会的差異やそれらに関わる特定の人々の活動や戦略、そして地域間交流、およびその質的変化といった社会展開を、地域固有のコンテクストから明らかにするには、

[1]考古資料の分布の空間的な分析から、交換に際して、どのような人や物資の動きが存在したのかを捉えるため、10 通りのモード（様態）が考察されている[Renfrew 1984]。

神殿遺跡の詳細な発掘調査だけでなく、神殿を含む地域の全体像を解明する必要があるためである。

以上のように、本章では形成期の先行研究を概観し、その問題点を指摘することで、本論の位置づけを明らかにしてきた。上記の問題点は、本論の目的や背景、ならびに研究方法と深く関わっている。そして、こうした問題点をふまえて実施されたのが、ワンカバンバ川流域の調査であり、インガタンボ遺跡の発掘調査である。次章では、本研究対象地域を設定した経緯を示し、調査対象地域の概要を述べるとともに、発掘調査遺跡の選定理由について明確にする。

第 3 章：調査対象地域の設定と発掘遺跡の選定

本章では、まず、先行研究の問題点に取り組むために実施された本研究の着想に至った経緯を述べる。そして次に、予備調査の意味合いも含め、発掘調査に先駆けて実施したワンカバンバ川流域の遺跡分布調査の目的を明らかにしたうえで、発掘対象遺跡の選定理由を明らかにする。なお、ここで記す遺跡分布調査によってえられたデータは、第 9 章において詳細に検討する。

3-1. 調査対象地域の設定

前章で述べたこれまでの形成期研究の問題点は、大きく二つある。一つは、ペルーとエクアドルとの間に存在した地域間交流の様相を明らかにしていくために、両者の中間地域の研究が不足していることである。そしてもう一つは、ペルー北部における海岸部、山地、熱帯低地間の地域間交流を論じる際に、距離を問わずに主として土器の様式的類似性のみに依拠して、交流が論じられてきたことである。先述したように、アンデス形成期では、各地に複雑な社会的状況が存在していると考えられる。こうした状況のなかで、各神殿における社会状況を明らかにするためには、個々のコンテクストにおける詳細な研究が必要である。そして神殿間、あるいは地域間の関係をアプリオリに規定するのではなく、当該社会の歴史性を重視する立場から、対象社会の社会動態を究明していくことが重要である。

このような問題に取り組むために本研究の対象地域として設定したのが、ワンカバンバ川流域である。ワンカバンバ川流域は、ペルーとエクアドルとの国境に近い、ペルー北部にあり、アンデス山脈分水嶺の東側、山地と熱帯低地の狭間に位置している。つまり、海岸部と山地や熱帯低地、または山地間を結ぶ地理上の要衝にあり、こうした交流は前章でも指摘した通りである。また、地形や先行研究を鑑みると、ワンカバンバ川流域は、地域間交流の重要地として、交流に際して中心的役割を果たしたと考えられる。したがって、ワンカバンバ川流域は、先行研究を通じて明らかとなった前掲の問題点を同時に考察するために最適、かつ重要なフィールドといえるのである。

しかしながら、筆者の調査以前には[Yamamoto 2007, 2010; Yamamoto and Peña 2006, 2007, 2008]、ワンカバンバ川流域における考古学的研究は、皆無に近かった（図 3-1, 3-2）[1]。ワンカバンバ川流域における先行研究としてあげられるものの一つは、ペルー国立トゥルヒーヨ大学の学生による学位取得を目的とした調査である[Malaver 2001]。この論文は将来的に考古学プロジェクトを立ち上げるためことを念頭におき、先行研究、調査計画や調査資金などペルー文化庁（現在は文化省）へ提出する考古学調査申請書の体裁で執筆さ

[1]ペルー文化庁より出版された遺跡地図には調査地域において 2 遺跡（インガタンボ遺跡とイェルマ遺跡）が登録されている。なお、インガタンボ遺跡は、後期ホライズンの遺跡として記されている[Ravines 1983]。

れており、遺跡踏査や発掘調査が行われたわけではない。ただし、本発掘対象となるインガタンボ遺跡の簡単な模式図と遺跡で収集、または遺跡から盗掘された土器や、埋葬と共伴したといわれる金や方ソーダ石を伴う装飾品についての報告がなされている。これらの遺物は現在、ワンカバンバ川流域に位置するポマワカ市[1]の「博物館」[2]に収蔵されている。2004 年に実施した事前調査の折に、実物を現地で確認した限り、形成期中期から形成期後期に対応するものであると考えられた（写真 3-1～2-10 ）。また、その他の博物館収蔵土器を実見したところ、ペルー極北部海岸部中流域のセロ・ニャニャニケ遺跡や北部山地のパコパンパ複合、北部熱帯低地のバグア複合から出土した土器との高い類似性が示唆された。

上記以外の先行研究としてあげられるものに、インカ道[3]を踏査し、関連遺跡を記録する目的に即して実施されたカパック・ニャン[4]のプロジェクトがあり、ワンカバンバ川流域を通るインカ道の存在が確認されている[Espinosa 2002]。このインカ道は、ピウラよりカハマルカへと通じるもので、80 年代の遺跡地図に登録されたインガタンボ遺跡を通過する。なお、調査対象地域からは外れるものの、ワンカバンバ川の上流域や、さらに北方のエクアドルとの国境付近では、インカ道とその関連遺跡に加えて、図像表現の特徴から形成期に相当するとみられる石彫群も報告されている[Polia 1995]。

さらに、ワンカバンバ川流域の考古学的情報として、ポマワカ市の教諭が長年にわたって、周辺地域で収集した博物館収蔵の考古資料がある。上記のように、このなかにはインガタンボ遺跡で収集された形成期中期から形成期後期に対応する土器も含まれており、資料からは周辺地域との様式的類似性が示唆された。

以上の状況から調査に先立って想定されたのは、第一にインガタンボ遺跡では、形成期とインカ期（後期ホライズン）における活動が存在することである。そして第二に、形成期には少なくとも形成期中期と形成期後期の活動があったと考えられることである。ただし、発掘調査が実施されていないため、遺跡の実際の堆積や建築の状況、ならびに編年的位置づけについての詳細は不明であった。また、ワンカバンバ川流域全体をみても、これまで集中的な遺跡踏査は行われていないため、流域内の遺跡の分布状況も把握できてはいなかった。

[1]以下、行政区分である Capital de Distrito（地区の中心）を「市」、Distrito の下位区分である Caserio を「集落」として記述する。
[2]文化庁に正式に登録されているわけではなく、あくまで地域住民による総称である。
[3]インカの支配地域に整えられた、現在のコロンビアからチリ、アルゼンチンにまでおよぶ道路網である。海岸部と山地にそれぞれ一つずつの幹線道路が南北方向に延び、東西方向も他の道路で結ばれている[Hyslop 1984]。
[4]文化庁主導で実施されたインカ道、および関連遺跡の調査であり、国家プロジェクトである。

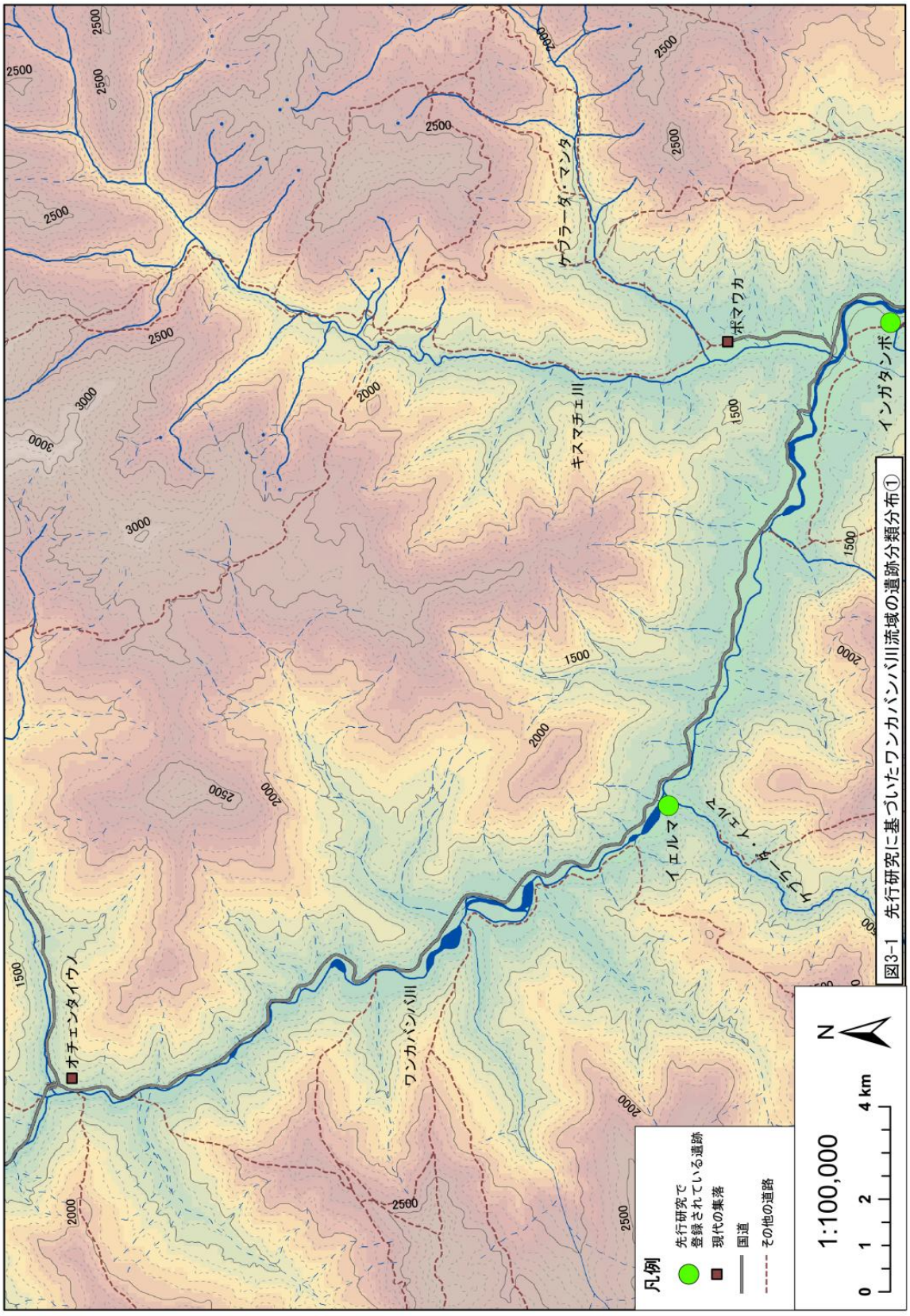


図3-1　先行研究に基づいたワンカバンバ川流域の遺跡分類分布①

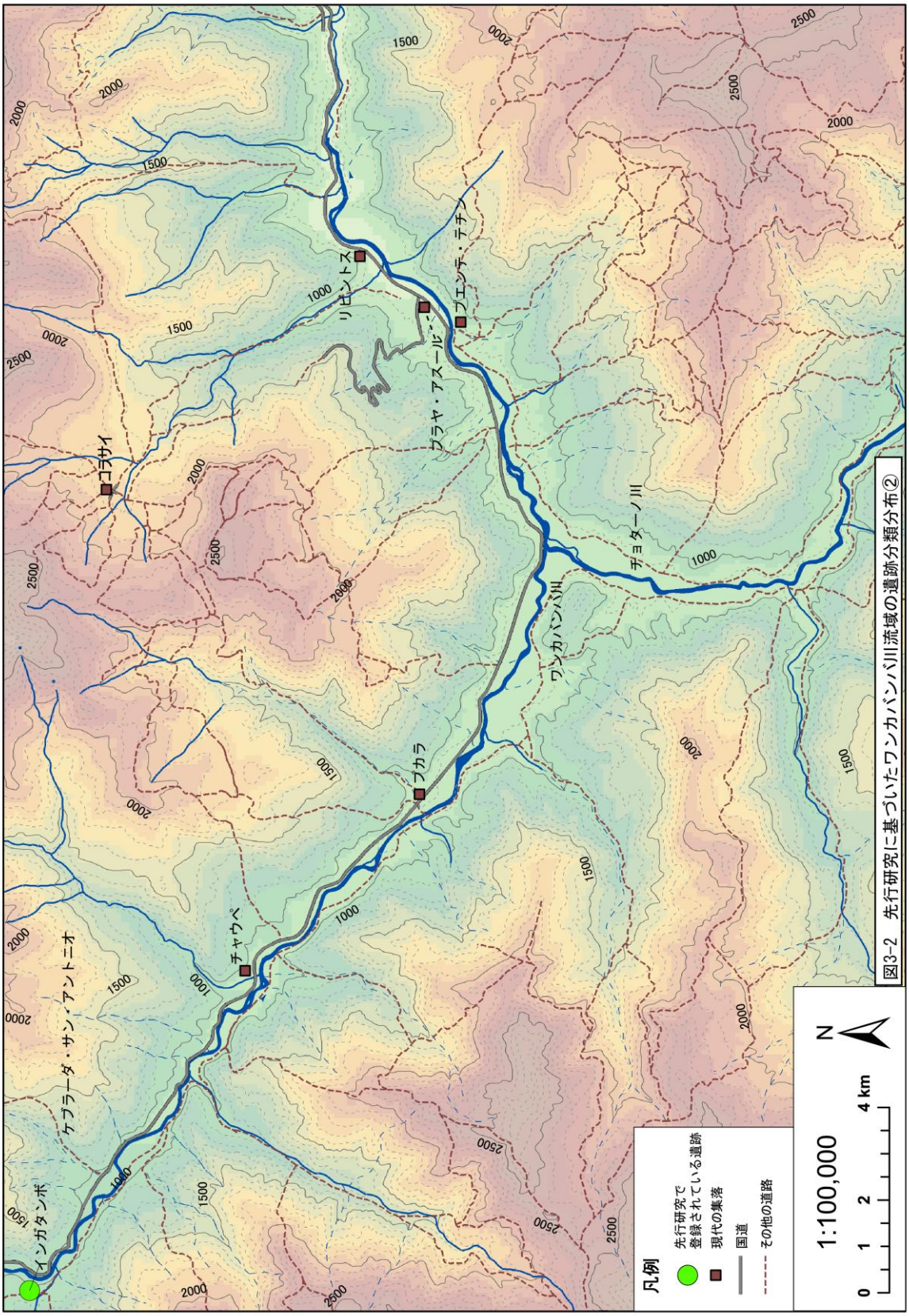


図3-2　先行研究に基づいたワンカバンバ川流域の遺跡分類分布②

写真3-1　インガタンボ遺跡出土土器1
（ポマワカ「博物館」蔵）

写真3-2　インガタンボ遺跡出土土器2
（ポマワカ「博物館」蔵）

写真3-3　インガタンボ遺跡出土土器3
（ポマワカ「博物館」蔵）

写真3-4　インガタンボ遺跡出土土器4
（ポマワカ「博物館」蔵）

写真3-5　インガタンボ遺跡出土土器5
（ポマワカ「博物館」蔵）

写真3-6　インガタンボ遺跡出土
埋葬副葬品（1-1）
（ポマワカ「博物館」蔵）

写真3-7　インガタンボ遺跡出土
埋葬副葬品（1-2）
（ポマワカ「博物館」蔵）

写真3-9　インガタンボ遺跡出土
埋葬副葬品（2-2）
（ポマワカ「博物館」蔵）

写真3-8　インガタンボ遺跡出土
埋葬副葬品（2-1）
（ポマワカ「博物館」蔵）

写真3-10　インガタンボ遺跡出土
埋葬副葬品（2-3）
（ポマワカ「博物館」蔵）

このため、調査に際しての課題として、第一にワンカバンバ川流域の遺跡分布調査を行い、流域内のデータを充実させ、流域の全体像を把握することに取り組んだ。第二に、インガタンボ遺跡のように、形成期において長期的活動がみられる遺跡の発掘調査を実施することで、編年を含む層位的に確実なデータを獲得するとともに、その通時的変化を押さえることで、議論の核を築くことを目指した。

以上のことをふまえたうえであげられる、アンデス形成期研究における本研究の意義は、大きく三つの点である。

第一の意義は、これまで研究上の重要な地域とはされながらも、研究後進地であった対象地域の形成期における実態を、考古学調査を通じて具体的に明らかにする、という形成期研究のボトムアップである。こうした基礎データを充実させることを通じてはじめて、

ワンカバンバ川流域を形成期研究の俎上にのせることが可能となる。

第二に、神殿を様々な社会関係が交錯する場、つまりはメディアとして捉え、その分析を通じて、社会動態を考察することである。繰り返し述べてきたように、形成期の神殿の特性は、当該社会の宗教的、経済的、政治的活動の中心とされることである。したがって、神殿遺構や神殿からの出土遺物、もしくは神殿を核とした地域間交流の分析を通じ、神殿を支える人々やその集合としての社会の活動や戦略にアプローチすることが可能となる。そして、これをふまえたうえで、特定社会の動態を社会内部と外部の双方から捉えようとする本研究の視点は、従来のものとは異なる新たな視座を与えるものであり、有益である。さらに、この一連の作業を介することによって、これまでに想定されてきた形成期神殿の特性を、ワンカバンバ川流域固有のデータから検証することが可能となる。

最後にあげられるのは、形成期の地域間交流と社会変化の関係について、考古資料の質的な分析だけでなく、GIS によるルート分析を援用して、地形や実際の人の動きを重視した総合的分析から明らかにすることである。また、それを下地として他地域の研究成果と照合し、ワンカバンバ川流域の歴史的コンテクストにもとづきながらも、より広い視野で形成期の地域間交流の動態を捉える。そして、流域社会と周辺諸遺跡との関係を社会的・政治的・経済的重層性のなかで明らかにする点も、本研究の重要な意義の一つである。

3-2. 調査地概要

前節では、ワンカバンバ川流域を調査対象地として設定した経緯について述べるとともに、本研究の意義を明らかにしてきた。以下、本節では、今後の議論において不可欠なものとなるワンカバンバ川流域の生態環境について記述していく。

ワンカバンバ川はペルー北部ピウラ県のアンデス山中にある湖に端を発し、本調査地域を流れ、その後、名前をチャマヤ川と変えながらマラニョン川へと注ぐ大きな川である。この川の地勢は、ワンカバンバ川流域に海岸部と山地や熱帯低地、または様々な山地間を結ぶ自然の回廊のような役割をもたらした。実際に現在、この川沿いには海岸部と東斜面の熱帯低地を結ぶ幹線道路が通り、主要交通路の一つとなっている。

ワンカバンバ川流域の特徴としてあげられるのは、豊富な水量とその多様な生態系である。ペルーの気候は、基本的に雨季と乾季の二つに大別され、乾季になると水量が激減する河川も多い。しかし、ワンカバンバ川は、乾季においても流水量が多く、雨季には山地の降水量に応じて氾濫を起こすこともある。ただし、ペルー海岸部で頻繁に洪水などの被害を巻き起こすエル・ニーニョ現象に際しては、海岸部と比して大きな影響はみられない。

調査対象となったのは、ワンカバンバ川流域のなかでも、アンデス山脈東斜面の熱帯低地と山地との狭間に位置している地域である。この地域では、谷の底部は標高 800mから1,000mでなだらかな土地が広がっているが、谷の両側は山で囲まれており、もっとも高い山で標高 3,000m 程度である（写真 3-11, 3-12)。これらは、ペルーの地理学者のハビエル・プルガル・ビダルの分類によれば、高度の順にセルバ・アルタ、ユンガ、ケチュアに相当

する[Pulgar Vidal 1987]。しかしながら、調査地は低緯度地帯であるため、特殊な生態を示す場合がある。以下、調査地の生態について概観する。

写真 3-11　ワンカバンバ川流域の風景（南北方向）

写真 3-12　ワンカバンバ川流域の風景（東西方向）

（1）ユンガ

海岸ユンガと山間ユンガの二つがある。前者はアンデス西斜面の河川の中流域にあたり、後者は山間部の谷底や盆地の底部にあたる。研究対象地域の一部はそのうちの後者で、標高 1,000～2,300mの河川の谷底や盆地底部、山麓地帯がそれに該当する。降水量が多く、湿度も高い。果物やマニオク（*Manihot esculenta*）、トウモロコシ（*Zea mays*）に加え、コカ（*Erythroxylon coca*）など熱帯や亜熱帯産の作物は、ほとんど栽培することができる[Pulgar Vidal 1987: 52-62]。

なお、調査対象地域の大半がユンガに相当するが、緯度の低さから、ボスケ・セコと呼ばれるアルガロボ（*Prosopis pallida*）やファイケ（*Acacia macracantha*）、サポテ（*Quararibea cordata*）と呼ばれる樹木、サボテン類で構成される乾燥した森が形成される場所が多い。

（2）ケチュア

標高 2,300～3,500m の山の斜面や山間盆地、山間の谷間にあたり、ユンガに比べてやや寒冷である。降水量はユンガとあまり変わらない。トウモロコシ、マメ類、ムギ類などが栽培される[Pulgar Vidal 1987: 67-75]。調査対象地域では、谷の南側にそびえる山々の頂上部付近がこれに相当する。

これに対して、対象地域の北側にそびえる山々は緯度の低さもあって異なる様相を示す。そこでは、エクアドルに顕著なパラモと呼ばれる多雨多湿の草原・低木地帯に類似した環境がみられ、湧水や湖が多い。メガネグマ（*Tremarctos ornatus*）、アルマジロ（*Dasypodidae*）、ピューマ（*Puma concolor*）、シカ科動物（*Cervidae*）など多様な動物が生息している。

（3）セルバ・アルタ

標高 400～1,000mのアンデス山脈東斜面にあたる。降水量が極めて多く、湿度も高い。高度差によって環境の変化が大きいが、標高の低い方はより熱帯雨林に、高い方はよりユンガやボスケ・セコ、あるいはパラモに近い様相を呈する。調査対象地域では、とくに東側の谷底部分がこれに相当する。スギ（*Cryptomeria*）などの木材やマニオク、コカや様々な果物が栽培される。また、メガネグマやアルマジロ、ピューマといった様々な動物もみられる[Pulgar Vidal 1987: 126-140]。

現在、調査対象地域では高度に応じて、イネ（*Oryza*）、サトウキビ（*Saccharum officinarum*）、カカオ（*Theobroma cacao*）、コーヒー豆（*Coffea*）、バナナ（*Musa*）、パイナップル（*Ananas comosus*）、トウモロコシ、ジャガイモ（*Solanum tuberosum*）などの多彩な作物が生産されている。また、多様な生態系から構成される森林では、シカといった種々の動物の狩猟が可能である。さらに、常に水をたたえる河川を利用して、淡水魚を対象とした漁撈や飼育も行われている。この意味において、当該地域は非常に豊かであり、人間の居住にとって好条件が整っているといえる。

3-3. ワンカバンバ川流域における遺跡踏査：経緯と目的、および対象範囲

2005 年の 7 月末から 9 月初頭、ならびに同年 10 月中旬から 11 月末までの期間において、ワンカバンバ川流域で遺跡分布調査を実施した。踏査範囲は、西端をオチェンタイウノ、東端をチプレという現代の集落とする範囲である。西端としたのは、ワンカバンバ川が水源の山地から南下してきた後に、他の川と合流しながら、東へと大きく進路を変更する場所で、現在でもワンカバンバ川流域から北の山地へ向かうための分岐点である。また、東端は、ワンカバンバ川が、南から注ぎ込む比較的水量の豊富なカリャユック川と合流する地点で、現代においてもワンカバンバ川流域から南の山地へと向かう分岐点となっている場所である。これらは、本論の議論の中心でもある地域間関係を考察する際に、ルートの存在を考えるうえで重要であると推測されたため、遺跡分布調査にあたって便宜上設定したものである。しかしながら、実際の踏査によって、ワンカバンバ川流域の生態学的特徴に関する理解度が増し、地勢を考慮した結果、本論においては東端をリビントスという現代の集落と変更して、分析、および考察を行った。この理由は、ワンカバンバ川流域では既述のオチェンタイウノ周辺から東に向かって谷幅が徐々に広がり、ポマワカ市とプカラ市周辺を最大として、その後リビントス周辺で谷幅が急激に狭まるためである。したがって、この範囲を一つの自然の地理区分とすることが妥当であると考え、本論ではこの区分を用いることにした。

また、この調査範囲は、ワンカバンバ川流域の地形と環境、そして支流や他の川との合流点などを考慮して設定しており、アンデスで一般的に移動ルートとされる川筋や山の尾根などはとくに重点的に踏査を行った。その際、谷の底部だけでなく、谷の両側にそびえ

る山の斜面、もしくは頂上や分水嶺までを一区分として踏査範囲とした。これは、ワンカバンバ川流域の先行研究がほとんど皆無であることに加えて、現代の民族誌例や地域住民の生活を考慮した際に、過去においても生活空間として谷の底部だけではなく、近隣の山の頂上部や斜面などが利用された可能性があるためである。

なお、本論でいうワンカバンバ川流域は、とくに注釈や補足がない場合、基本的に上記の踏査範囲を指すものとする。調査範囲は、行政区分上はカハマルカ県ハエン郡を中心として、同県クテルボ郡、またはランバイェケ県、ピウラ県の一部に相当する。

ワンカバンバ川流域における先行研究は少ないが、ポマワカ市の博物館所蔵資料や周辺地域の調査報告を検討すると、土器の様式的類似や海産性資料の存在などから、ペルー北部地域の海岸部、山地、あるいは熱帯低地間で地域間交流が存在したことが示唆される。そして、ワンカバンバ川流域の地勢を考慮すると、ワンカバンバ川流域がペルー北部の地域間交流において主要ルートの一つであり、その中継地として重要な役割を果たしていた可能性があると考えられた。

このため、踏査では、第一に基礎データの獲得、とくに遺跡分布と生態環境との関係を把握することを目的とした。第二の目的は、獲得したデータ（遺跡の立地や採集した土器片）を先行研究と比較検討することを通じて、周辺地域との地域間交流の様相を明らかにし、地域間関係とその時期的変遷を把握することである。そして第三に、遺跡分布、地形や生態環境、または住民へのインタビューなどから、ワンカバンバ川流域より隣接地域へ移動するための地域間ルートを解明することを目的とした。さらに、発掘調査を行う遺跡の選定も目的の一つであった。

具体的な調査方法としては、先行研究で登録されている遺跡を踏査するだけでなく、事前に地域住民へのインタビューを行うとともに、S.A.N.（Servicio Aerofotográfico Nacional：ペルー国立航空写真事業）刊行の航空写真を使って、地形などから遺跡に関する情報を集めたのちに、対象範囲をくまなく歩いて遺跡を同定した。遺跡の同定基準は、主として地表面に遺構や遺物が確認されることである。しかし、遺構が確認されない場合においても、丘陵の頂上部や斜面などといった限定された空間内に土器資料が散見される場合には遺跡として同定した[1]。その際、遺跡ごとの特徴や遺跡の時間的位置づけを明らかにするために、地表面で徹底的な考古遺物の採集と建造物の記録を行った。なお、登録遺跡の時期決定は、踏査時は周辺地域の先行研究との比較分析から行い、その後、発掘調査資料をもとに再検討した。

また、遺物の採集状況、遺構の建築的特徴や遺跡全体の形態を簡易測量などによって記録していくだけでなく、地理的・環境的特徴（遺跡の立地と耕作地や現代の道路との関係など）を記録した。さらに、遺跡の位置（緯度、経度、標高）については、GPS（Global Positioning System：全地球測位システム）を用いて、ペルー国土地理院刊行の 1 / 100,000 の地図に記録した。これらに加えて、地域間ルートの分析のために、現代の集落や旧道の

[1]建造物がなく、地表面に土器が数点落ちていただけでは遺跡登録していない。

位置を地図上に記録するともに、住民へのインタビューを行い、ルートの妥当性と現在における使用状況の把握にも努めた。

3-4. 発掘遺跡の選定

以上の遺跡踏査の結果をふまえたうえで、発掘調査を実施する際の選定理由としたのは主として以下の点である。

1．盗掘や現代の耕作などの影響が少なく、建築や文化層などの保存状態が良いと考えられること。
2．神殿を有する遺跡で、かつ形成期の複数の時期にまたがった利用が認められ、確実な層位データを採取できると考えられること。そして、建設活動や儀礼といった神殿における諸活動の時期的変遷を追うとともに、編年を確立することができる遺跡であること。
3．当該地域社会の中心的な遺跡であり、周辺地域との地域間関係を論じるデータを獲得できる遺跡であること。

その結果、遺跡分布調査時の地表面観察において、保存状態が良好で、流域内で最大級の規模を持つ神殿遺跡と推定され、かつ形成期の遺跡分布が集中するポマワカ市周辺に存在するインガタンボ遺跡が、発掘遺跡として最適な対象であると考えられた。また、インガタンボ遺跡は、形成期に長期間利用されていたと考えられ、こうした神殿遺跡はこれまでにワンカバンバ川流域以北のペルー北部地域（北部山地と北部熱帯低地）では調査されていない。そのため、インガタンボの編年を確立すれば、周辺地域を含めたペルー北部地域における形成期編年を比較検討、再考するための基礎資料ともなり、形成期研究のボトムアップにもつながる。

さらに、地形や先行研究、もしくはインガタンボ遺跡のデータ（遺跡分布調査データやポマワカ市博物館収蔵資料）を総合した結果、ワンカバンバ川流域、とくにインガタンボ遺跡は、地域間交流の重要地であり、交流に際して中心的役割を果たしていたと考えられた。これを支持するようにインガタンボ遺跡には、インカ道が通っており、形成期においても地域間ルートとして利用された可能性はある。それに加えて、インガタンボ遺跡付近では、ワンカバンバ川に注ぎ込む複数の支流が周囲の山から流れ込んでいる。そのため、インカ道以外の場所においても、地域間の移動ルートとして利用されやすい状況下に遺跡が立地しているのである。

また、ワンカバンバ川流域は、交流の存在は認められるものの、国境地域を境に異なる考古学地域とされるペルーとエクアドルの中間地域にある。両地域間の交流の実態は不明であるため、この問題の解明には国境地域の状況を明らかにすることを通じて、調査・研究に取り組む必要がある。さらに、ワンカバンバ川流域は、ペルー北部における海岸部と

山地、熱帯低地の狭間にあり、当該地域における地域間交流の動態を明らかにするうえで、戦略的な位置にある。

このように、前章で詳述した先行研究における問題点の解決を図ると同時に、とくに神殿における諸活動や地域間交流といった形成期の社会展開を地域固有のコンテクストから明らかにしていくために、インガタンボ遺跡は最適な研究対象であると考えられた。したがって、インガタンボ遺跡の実態を解明する目的のもとに、2006 年から発掘調査に着手した。

以上のように、本章では、本調査・研究の実施に至った背景とその目的について記した。次章から第 7 章までは、前章までに提示した研究課題に取り組むため、遺跡分布調査を通じて選定されたインガタンボ遺跡の発掘データについて、建築、土器、その他の考古遺物といった順に記述していく。

第 4 章：インガタンボ遺跡の発掘調査：建築と年代

本章ではインガタンボ遺跡の発掘調査の目的を明らかにし、調査によってえられた建築データを年代測定の結果とともに整理する。そして発掘調査の結果を、地形測量[1]、および遺跡地表面で観察できる建造物の測量データと総合し、時期ごとの建築活動の特徴を示す。なお、インガタンボと周辺地域の諸神殿との建築特徴の比較検討については、第 8 章で改めて言及する。

4-1. 調査の経緯と目的

遺跡分布調査時に採集したワンカバンバ川流域の形成期遺跡の土器やポマワカ市博物館収蔵土器は、極北部海岸のピウラや北部山地のカハマルカ、北部熱帯低地のバグアといった周辺地域で出土した土器との共通性を有している。とくに、上記の周辺地域で行われた先行研究からは、ワンカバンバ川流域が形成期における地域間交流の要衝であったことが推測された。さらに、流域内では「基壇」や「テラス」といった、他地域で神殿とされる遺跡に典型的な建築特徴を持つ複数の遺跡が確認されたが、そのなかでもインガタンボ遺跡は、建築特徴や規模、表面採集された土器などから、この地域の中心的な神殿であったと考えられた。総じて、インガタンボ遺跡では形成期において形成期中期と形成期後期の少なくとも 2 時期の利用と、隣接する諸地域との交流の存在が示唆された。

これらのことをふまえた結果、インガタンボ遺跡は、ワンカバンバ川流域における形成期の諸状況を通時的に把握するために適した遺跡であると考えられたため、2006 年と 2007 年の 7 月から 9 月にかけて発掘調査を実施した。

ワンカバンバ川流域では発掘調査を実施した先行研究がないため、発掘調査においては、層位にもとづいた建築データや土器といった考古学的基礎データの獲得を第一の目的とした。また、調査中は、土層観察や遺物の包含状況、ならびに遺構の確認を目指し、とくに基礎編年の確立のために、建設過程の把握とそれに対応した土器を中心とする考古遺物の通時的変化をつかむことに重点をおいた。これらのデータは、インガタンボ遺跡における形成期の社会動態を究明し、神殿をめぐる諸活動を支える人々の活動や戦略を論じていくための基礎データとなるものである。

第二の目的は、発掘調査の成果にもとづいて、遺跡分布調査データを再検討し、ワンカバンバ川流域における遺跡相互の関係を把握することであった。そして、これをもとにして、インガタンボ遺跡だけでなく、より広くワンカバンバ川流域という特定地域における社会動態を明らかにすることを試みた。

そして最後に、上記の二つの目的を総合し、遺跡踏査だけでは補えない出土コンテクストの明確なデータを充実させたうえで、他地域の先行研究と比較することを通して、地域間交流の動態を解明することを目的とした。なお、遺跡が広範囲におよび全域発掘が困難

[1]地形測量は、同県ハエン郡自治体の協力をえて実施した。

であったため、発掘作業と平行して遺跡の地形測量を行い、遺跡の全体像の把握に努めた。

4-2. 調査遺跡概要

インガタンボ遺跡は、ワンカバンバ川南岸の河谷底部から一段高まったテラス状の土地、ニナバンバ山の北麓に位置し、南緯 05º57’46.5”、西経 79º13’30.3”、標高 1,066m の[1]ところにある。大小八つの基壇建築と五つの広場状空間を有する、この地域最大規模の遺跡である（図 4-1; 写真 4-1）。

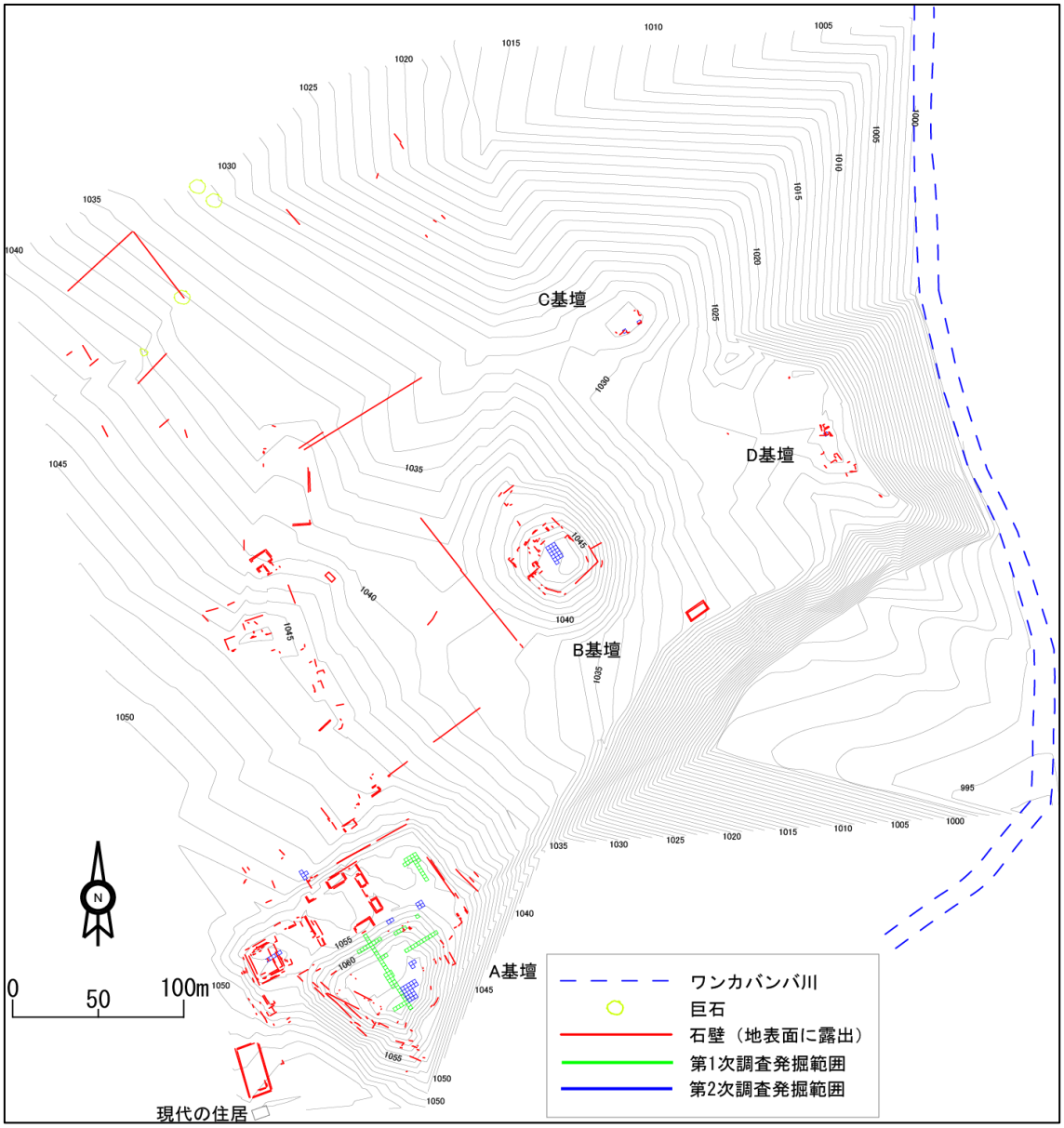


図 4-1　インガタンボ遺跡全体図

[1]A 基壇最上部にて測定した。

遺跡分布調査や先行研究、ポマワカ市博物館収蔵土器から、インガタンボ遺跡では形成期からインカ期の活動があることを想定していたが、発掘調査によって、それらに対応する計 5 時期の建設活動の存在を確認した。そのうちの最初から 3 時期目までは形成期に、最後の 5 時期目はインカ期（後期ホライズン）に相当するものである。4 時期目に関しては、後の時代の攪乱などによってデータが乏しく、今後検討の余地がある。しかし、現時点では堆積状況や出土土器からみて、地方王国期（後期中間期）、あるいはインカ期に属するものと考えられる。

本論で議論の対象となるのは、このうちの形成期に該当するデータである。1 時期目から 3 時期目には、時期[1]名称としてそれぞれ、「ワンカバンバ期」、「ポマワカ期」、「インガタンボ期」を冠している[2]。

インガタンボ遺跡の建造物は、基本的にやや小型の加工石材を積みあげ、その間を目地土で埋めたものであるが、部分的に壁表面に泥漆喰が残っている箇所もあり、かつては全ての壁に泥漆喰で仕上げが施されていたと考えられる。

4-3. 発掘区の設定と発掘方法

発掘対象として選定したのは、インガタンボ遺跡で最大、かつ遺跡全体で最も高みにある A 基壇（写真 4-2）、二番目に大規模で A 基壇の北東に位置する B 基壇（写真 4-3）、B 基壇の周囲に存在する C 基壇と D 基壇（写真 4-4）の四つである。このなかでも、とくに A 基壇を中心に発掘を実施した。そのため、A 基壇から獲得したデータは、他の基壇のデータよりも質的・量的に富んでおり、この調査結果を軸にインガタンボ遺跡の各時期は設定されている。

発掘に際しては、A 基壇の主要基壇[3]北面に位置するインガタンボ期の階段を起点および東西南北の軸とし、遺跡全体に基本単位となる 2×2m のグリッドを組んだ。グリッドの南北方向軸は、磁北に対して 29°西に傾いている。そして、発掘区の名称として、A、B、C、D の四つの基壇を用いた。ただし、A 基壇だけは、基壇上の建造物に併せて四つの発掘区（A～D 区）に細分した（図 4-2）。このうちの A 区は A 基壇の主要基壇に対応し、B 区は A 基壇上の東側部分、C 区は西基壇、D 区は A 基壇北面の基壇へのアプローチ部分に対応している。特定のグリッドを示す場合には、基壇ごとに設定した東西南北の座標を組み合わせ

[1]年代を表す際に、一番大きな区分として「時期」、その下位区分として「フェイズ」を使用する。また、「建築フェイズ」という用語も使用するが、これは単に該当する建造物の重なりを示すものである。

[2]時期名称の略号はそれぞれ、ワンカバンバ期（HB）、ポマワカ期（PM）、インガタンボ期（IG）である。

[3]主要基壇は A 基壇上に載るようにみえる。しかし実際には、後述するように、A 基壇はインガタンボ期になって主要基壇を中心として北側、東側、西側へ張り出すように基壇が建設、拡張された結果として現在の姿を呈する。

て表すこととし、A 基壇 A 区の起点から東に 0~2m, 北に 0~2m のグリッドは、A 基壇 A 区 E1N1 といったように定めた。

写真4-1　インガタンボ遺跡遠景

写真4-3　B基壇遠景

写真4-2　A基壇遠景

写真4-4　C基壇、D基壇遠景

発掘中はグリッドごとに遺物を登録しているが、出土遺物の採取もれを防ぐため、表土以外の掘り出した土は 9mm、6mm、3mm、1mm メッシュの四つのふるいにかけ、遺物の採取に努めた。

なお、実際に発掘を行ったグリッドは、上記の目的に即して建造物の形態、範囲、ならびに各建造物間の時期的関係を把握するために設定している。ただし、インガタンボ遺跡は広大な面積を誇るため、全面的な発掘を実施することは不可能であった。したがって 2006 年シーズンでは、堅実な層位データを入手し、時期ごとの建設活動を把握するために、A 基壇上にほぼ十字形となるトレンチ（試掘坑）を入れた。また、それとともに、第 2 章で指摘した盗掘品が出土したとされる A 基壇 B 区で、小規模なトレンチ発掘を実施した。その結果、形成期早期から形成期後期にかけての建設活動と土器の変遷を把握した。

そして、2007 年シーズンには、前年の調査成果を検証しつつ、インガタンボ遺跡に存在する A～D の四つの基壇の時期的関係を把握することと、議論の基礎となる層位的に堅実なデータ量を増やすために、4 基壇で発掘調査を実施した。最も集中的な発掘を行った A 基壇

では 2006 年に検出した基壇上の部屋状構造物一帯を発掘するとともに、基壇の建設過程を把握するために、小規模発掘を 7 箇所で実施した。また B 基壇では、建設活動を把握するために基壇上にトレンチを入れた結果、複数の建造物が確認されたことから、発掘区域を広げて調査にあたった。さらに C 基壇と D 基壇では、建設時期を明らかにするために、それぞれ 2 箇所と 1 箇所で小規模な発掘を実施した。

4-4. 建築フェイズの記述方法

インガタンボ遺跡の形成期の建築には、大きく 3 時期にわたる建築の重なりがある。しかし実際には、それぞれの時期や基壇において、複数の建築フェイズ、つまりは建築の増改築がみられ、その回数は各時期や基壇ごとに異なる。したがって、以下、建築の形態を記述する際には、建築名称の後に時期名称、および建築フェイズの略号を付記する。

たとえば､A 基壇においてワンカバンバ期の最初の建築フェイズに対応する建築を表す場合には､「A 基壇（HB I)」とする。また、B 基壇の場合は、ポマワカ期の最初の建築フェイズに対応するのが、B 基壇の建築フェイズ 2 となるため､「B 基壇（PM I B2)」となる。

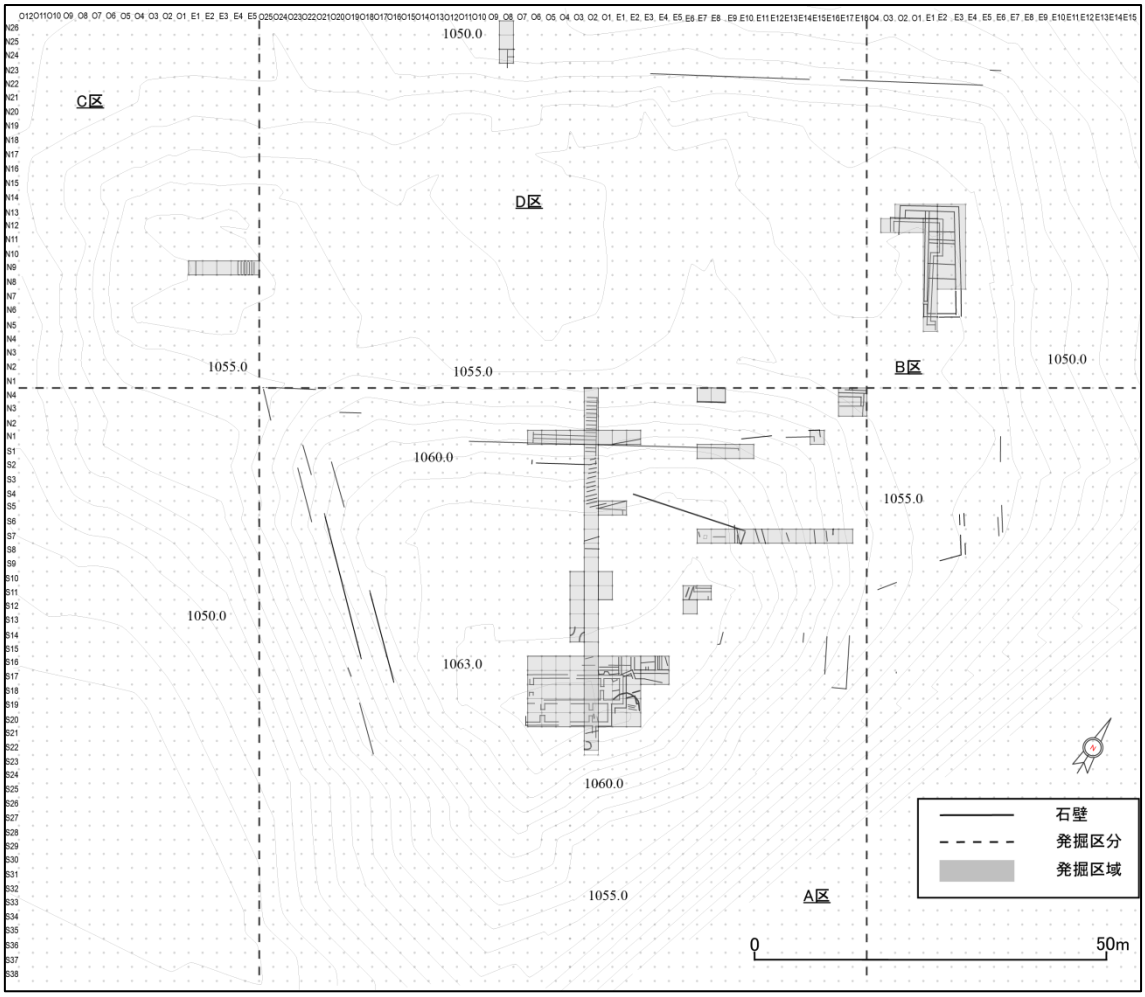


図 4-2　インガタンボ遺跡 A 基壇地形図、および発掘区

4-5. A 基壇

A 基壇は、インガタンボ遺跡南西部の最も標高の高く、遺跡全体を見下ろすことのできる地点にある。遺跡のなかで最も古い建築が存在しており、ワンカバンバ期では 4 フェイズ、ポマワカ期では 4 フェイズ、インガタンボ期で 2 フェイズの建設活動を確認した。また、A 基壇上部では、形成期以外にインカ期の活動もみられるため、部分的に形成期の文化層が攪乱されている場合がある。

先述したように、A 基壇の調査結果がインガタンボ遺跡の時期決定の基礎となっており、他の基壇は各基壇の建築フェイズをおさえたうえで、A 基壇の建築フェイズとの関係から時期決定されている。また、絶対年代による年代決定を行うために 4 点の試料を A 基壇から採集したが、炉中の炭化物のような、より確実性が高い良好な試料をえることはできなかった。測定試料は、建築と対応する床面や床中、もしくは床下から採集した確実性の低いとされるものであり、結果としてより古い年代が出たケースもあった。本文では、建築や共伴遺物、層位の解釈に加えて、周辺地域の編年との比較によって、その年代に整合性があると検証されたものだけを記述する。

4-5-1. ワンカバンバ期（紀元前 2500-1200 年）

ワンカバンバ期の建築は、主要基壇部分（A 区）のみで検出されており、いずれも地表面から 4m 以上掘り下げたところで確認されている。発掘に際しては、全ての時期の建造物を残しながら掘り下げていくため、当該時期の地層に到達したのは極めて部分的である。この時期に対応する層からは土器が出土しておらず、出土するのは石器や動・植物遺存体といった遺物のみである。放射性炭素年代測定を行った炭化物は 1 点である。

(1) 主要基壇（HB I）：ワンカバンバⅠ期　（図 4-3）

自然の丘陵を利用して基壇が建設されたと考えられるが、データが断片的で詳細は不明である。主要基壇中央部では床が、主要基壇東面では土留め壁とみられる壁が検出された（写真 4-5）。この土留め壁は、内側（西側）にあり、面が不揃いで傾斜のついた石積みと、そのすぐ外側（東側）にある壁から構成される。外側の壁は最下段しか残っていないが、内側の石積みの高さと基壇内部で確認された床面レベルから、高さは約 1.5m と推定される。建築学的見地からみると、この土留め壁は、建設の過程で土圧の分散、またはワンカバンバ川流域の生態的特徴でもある豊富な降雨への対応を目的として築かれたものであると考えられる。形成期の類例はこれまで皆無であり、インガタンボに特徴的な建築特徴といえる。なお、この時期の建築軸は、グリッドの南北軸よりも東に 12°ずれている。基壇へのアプローチ（階段）は確認していないが、基壇北面のポマワカ期とインガタンボ期の階段の下までこの時期の床が伸びていることから、同様に基壇北面にアプローチが存在したと考えられる。

(2) 主要基壇（HB II）：ワンカバンバⅡ期

床面のみ確認されている。主要基壇自体に変化はなく、また新たな建造物も検出されていないが、床面が前フェイズよりも 0.3mほど上に張り直されている。

(3) 主要基壇（HB III）：ワンカバンバ III 期

ワンカバンバ II 期に比べ、0.4m 程上に主要基壇の床面が張りかえられた。また、その床面と対応して黄褐色の泥漆喰が施された建築の一部が検出された。さらに、東西方向に延びる 3 本の石列が確認されたが、いずれも明瞭な面を持っていない（写真 4-6）。全体として、基壇の形態に大きな変化はみられない。

この建築と対応して採集した炭化物の放射性炭素年代測定値は以下のとおりである。

^{14}C年代（BP）	測定番号	暦年較正年代（信頼度）:1σ 範囲	暦年較正年代（信頼度）:2σ 範囲	δ ^{13}C ※
4049±30	wk-25525	2568-2519 cal BC (44.0%) 2498-2472 cal BC (24.2%)	2620-2456 cal BC (93.7%) 2418-2408 cal BC (0.7%) 2374-2368 cal BC (0.3%) 2363-2352 cal BC (0.6%)	−23.7±0.2
3893±30	wk-25528	2396-2385 cal BC (3.5%) 2346-2205 cal BC (64.7%)	2460-2198 cal BC (94.1%) 2161-2152 cal BC (1.3%)	−22.6±0.2

※AMS(Accelerator Mass Spectrometry：加速器質量分析計）による測定値

(4) 主要基壇（HB IV）：ワンカバンバ IV 期

前建築フェイズの床面から 0.4m程上に床面が張り直されたことが確認されたが、主要基壇自体の形態に変化はみられない。また、主要基壇中央部では黄褐色の泥漆喰が施された三つの構造物を部分的に検出した（写真 4-7）。そのうちの二つは円形を呈する。そのほか、基壇上部東側で検出した 2 本の石列には、同様に黄褐色の泥漆喰で仕上げが施されている。

このフェイズの建築はこれまでの建築に比べ、仕上げや構造物の存在などといった点で若干の相違がみられる。データに乏しく、断定は不可能であるが、紀元前 2500-1200 年というワンカバンバ期の長いタイムスパンを考慮すると、今後の調査の進展によって、ワンカバンバ期を細分化できる可能性がある。なお、本論では、後の論考の際に、ワンカバンバ期を前半と後半にわけて考察するが、上記の年代測定結果とワンカバンバ III 期からの建築特徴の変化をふまえて、ワンカバンバ期前半（I-II 期）とワンカバンバ期後半（III-IV 期）とする。

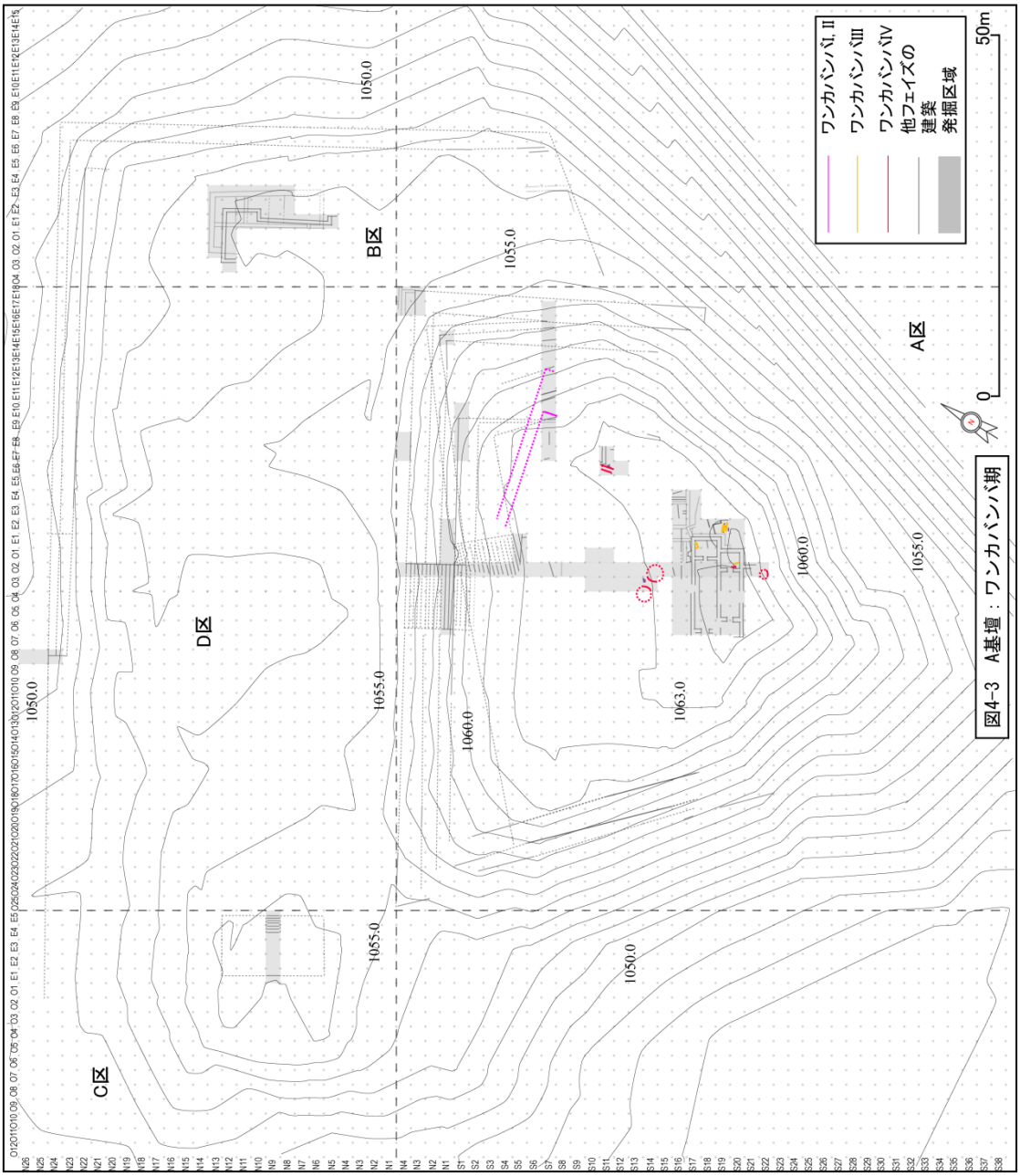


図4-3　A基壇：ワンカバンバ期

写真4-5　ワンカバンバ期：主要基壇東面の
土留め壁の底石とそれを支える大石

写真4-6　ワンカバンバIII 期の建築

写真4-7　ワンカバンバIV期の建築

4-5-2. ポマワカ期（紀元前 1200-800 年）

ポマワカ期には大規模な増改築が行われ、ワンカバンバ期の建築を埋めてその上に東西約 70m×南北 45m の基壇が築かれた。ワンカバンバ期と同様に、この時期の建築は主要基壇部のみで検出されている。この時期の建築軸は、グリッドの南北軸に対して 9°西にずれており、ワンカバンバ期のものとは異なる。また、基壇北面には基壇へのアプローチとなる階段を確認した。この時期からは少量ではあるが、土器がみられるようになる。なお、この時期に属する層位から検出した炭化物の年代測定結果は、ワンカバンバ期の想定年代と同様の古い値を示した。古い地層の炭化物が混入していたと考えられる。測定試料は、いずれも建築と対応する床下の層（埋土）から採集したものである。

（1）主要基壇（PM I）　（図 4-4）

主要基壇が四方に拡張され、基壇北面に階段が設けられた（写真 4-8）。床面は、ワンカバンバ IV 期と比べて、0.7－1.0m程上に張り直されている。基壇上では東西に延びる 2 本の壁とそれらに対応する床面が検出された。2 本の壁には 0.2m程度の高低差があるため、階段を登って基壇上部を中心部（南側）へ進むと、主要基壇上部に段状の構造が存在し、

主要基壇の上に低層基壇が載る形状を呈するようになる。

(2) 主要基壇（PM II）

主要基壇上部南側のみに小規模な改変がみられ、前フェイズの床面の 0.5m程上に新たな床面が張り直された。そのため、主要基壇上部の低層基壇は、高低差が前フェイズよりも明瞭となった。また、階段と低層基壇との間のスペースは、広場状開放空間となっている。新たに張られた床面直下には焼土層がみられ、そこからは焼かれた海水生種の貝が検出された（写真 4-9）。改築の際に火を用いた儀礼が行われた可能性が指摘できる。

(3) 主要基壇（PM III）　（図 4-5）

主要基壇全体の形態に変化はみられないが、前フェイズの床面の 0.7m上に新たに床面が張られ、基壇の高さが増加した。基壇上部南側では、以前よりみられた低層基壇の床面を張りかえる際に、動物が表象された石鉢が埋められた（写真 4-10）。改築に伴う奉納儀礼の一種であると考えられる。また、低層基壇上には、黄褐色の泥漆喰で精巧な仕上げが施された部屋状構造物が検出された（写真 4-11）。この部屋状構造物は、その立地や仕上げの状態などから単なる居住空間とは考えにくく、儀礼的活動の場であったと考えられる。

(4) 主要基壇（PM IV）　（図 4-6）

主要基壇上部南側の低層基壇において大きな変化がみられる。前フェイズの部屋状構造物の一部を破壊しながら埋め、床面の張りかえが行われると同時に、その上に円形構造物が築かれた。この建造物は、基壇上部の低層基壇部分で確認された唯一の円形構造物である。また、低層基壇の改築が行われる際には、その基礎として礫層が敷かれている。

主要基壇上部の他の場所では、全体的に 0.3－0.5m 程度床面が底上げされている。このフェイズから土器の出土量が大幅に増加する。

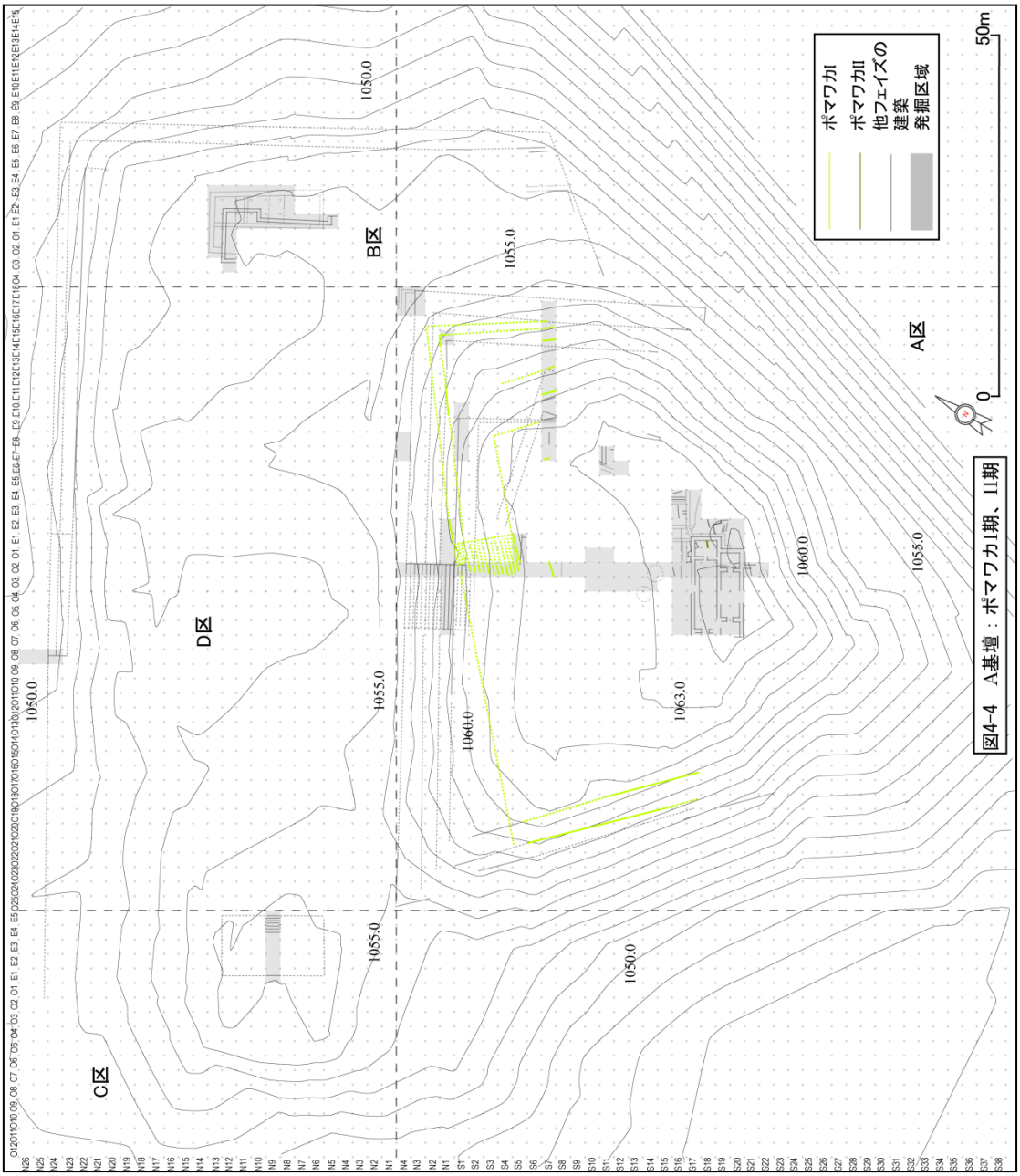


図4-4　A基壇：ポマワカI期、II期

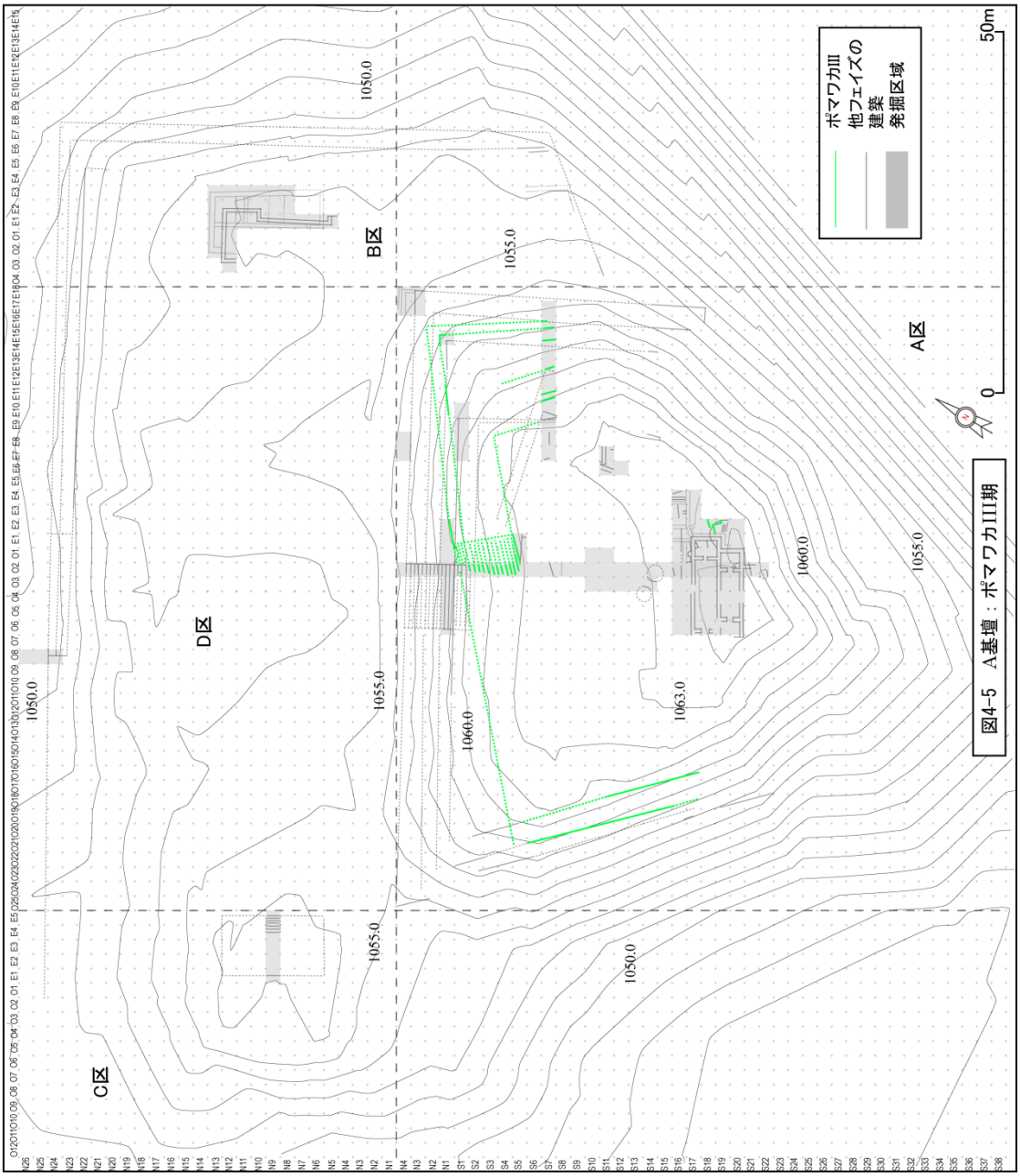


図4-5　A基壇：ポマワカIII期

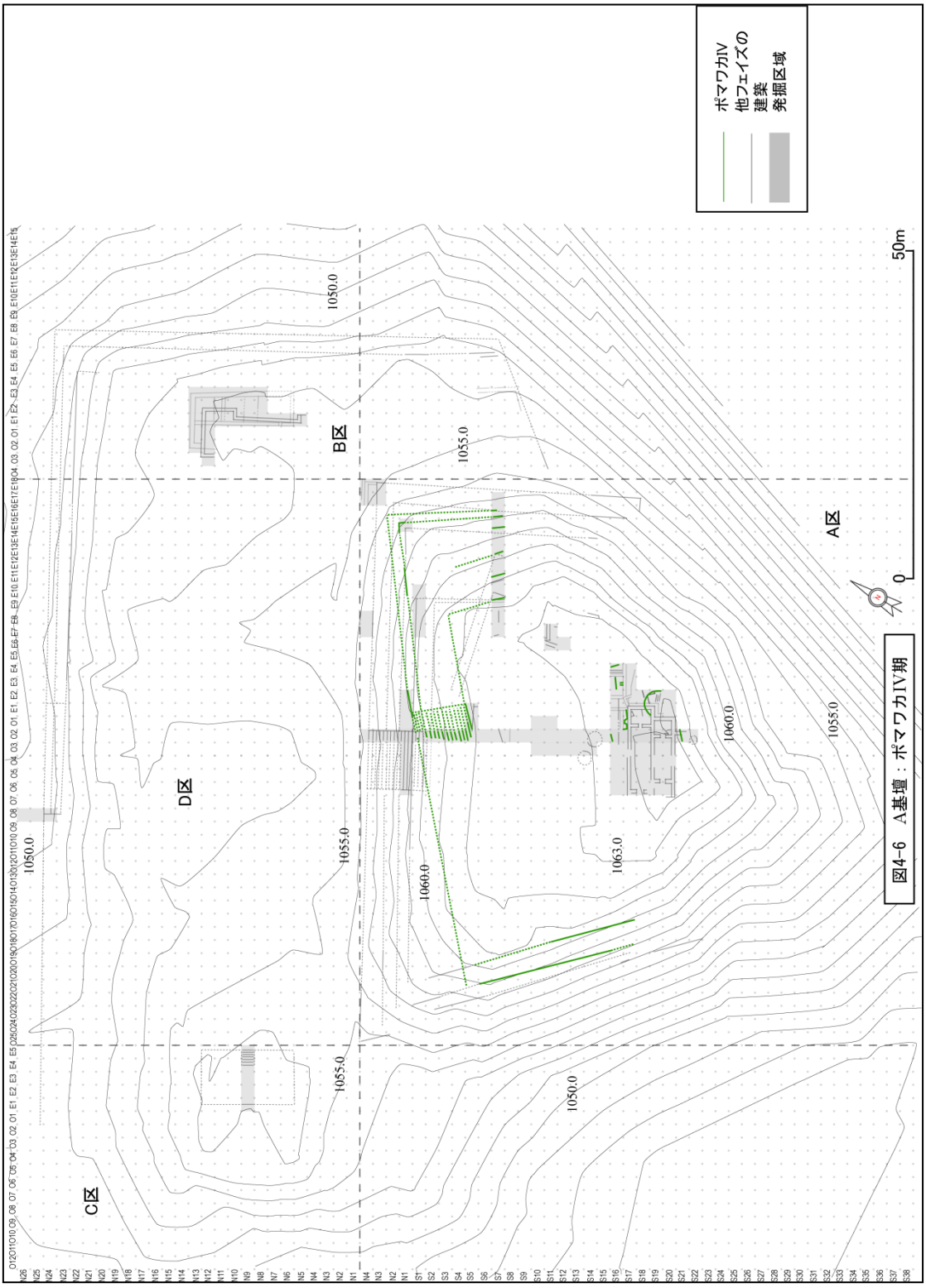


図4-6　A基壇：ポマワカIV期

写真4-8　ポマワカ期、主要基壇北面の階段

写真4-10　ポマワカ期、更新時の
石鉢の奉納

写真4-9　ポマワカ期、更新に伴う床下の焼土層

写真4-11　ポマワカIII期、主要基壇上部の
部屋状構造物
（上に載る円形構造物はIV期）

4-5-3. インガタンボ期（紀元前 800-550 年）

インガタンボ期は最も大きな増改築が行われた時期である。主要基壇ではポマワカ期の建築を埋めて、新たに東西 85m×南北 50mの基壇がたてられ、北面の階段も幅 10m、長さ 9m程度のものに作りかえられた。そして、主要基壇を囲むように東西 120m×南北 75mの A 基壇が建設され、全体として A 基壇の上に主要基壇が載るような形を呈するようになった。また、A 基壇上の東側部分に小基壇や部屋状構造物（B 区）、西側に西基壇（C 区）が築かれ、北面には階段が設けられた（写真 4-12）。この時期の建築は、主としてポマワカ期とは異なる建築軸で造られている。ただし、主要基壇西面の土留め壁だけは、前時期の壁が再

利用されているため、主要基壇の形態は台形状を呈する。年代測定試料の炭化物は 2 点で、いずれも建築と対応する床面や床中、あるいは床下の層から採集した。本文では、建築や共伴遺物、層位の解釈に加えて、周辺地域の編年との比較によって、その年代に整合性があると検証されたものだけを記述している。

(1) A 基壇 (IG I)　(図 4-7)

全体として大きな増改築がみられる。主要基壇は幅（東西)、長さ（南北)、高さともに拡張され、体積が増大する一方で、基壇上部南側には前時期と同様に低層基壇が築かれた。また、低層基壇上では、黄褐色の泥漆喰で精巧に仕上げられた六つの部屋状構造物が検出された（写真 4-13)。これらの部屋状構造物への出入口は、階段からの直線上には位置せずに、西側に設けられていることから、そのアクセスがコントロールされた可能性がある。さらに、中心に位置する部屋状構造物は、南側が床面より一段高くなった段状の構造を持っている。なお、部屋状構造物の発掘過程で赤色、白色、黄色の多彩色壁画の一部が壁際で崩落していることが確認された（写真 4-14)。したがって、これらの部屋状構造物は、立地や仕上げ、アクセスの問題などから単なる居住用空間ではなく、儀礼的空間であったと考えられる。また、この部屋状構造物の床下からは半完形土器が出土している（写真 4-15)。主要基壇上の階段から低層基壇までのスペースは、前時期と同様に広場状開放空間が広がっている。

これと同じくして、A 基壇上部東側（B 区）には部屋状構造物が築かれた（写真 4-16)。発掘で検出したのはそのうちの一部であるが、発掘状況から約東西 7m×南北 20mの規模を持つと想定される。この構造物の基礎部分からは海水生種の貝を加工した装飾品が大量にみつかっており、A 基壇、そしてその上に載る構造物の建設に際し、奉納儀礼が行われた可能性が示唆される。

また、A 基壇西側（C 区）には、東西 14m×南北 8mの小基壇（西基壇）が建設された。発掘状況から鑑みて西基壇の高さは少なくとも 2mはあったと考えられる。発掘範囲は限定的であるが、基壇上に建造物は検出されていない。

A 基壇北面では A 基壇へのアプローチとなる階段が検出されたが、後の時代の活動による破壊が激しい。階段は幅 16m、長さ 4mと想定される（写真 4-17)。

このフェイズに対応する層から採集した炭化物の年代は、以下の通りである。なお、この試料の採集層は、主要基壇上部にある低層基壇の床下の層である。

^{14}C年代 (BP)	測定番号	暦年較正年代(信頼度):1σ 範囲	暦年較正年代(信頼度):2σ 範囲	δ ^{13}C ※
2756±30	wk-25522	895-866 cal BC (25.0%) 856-812 cal BC (43.2%)	916-801 cal BC (95.4%)	-24.8±0.2

※AMS(Accelerator Mass Spectrometry：加速器質量分析計）による測定値

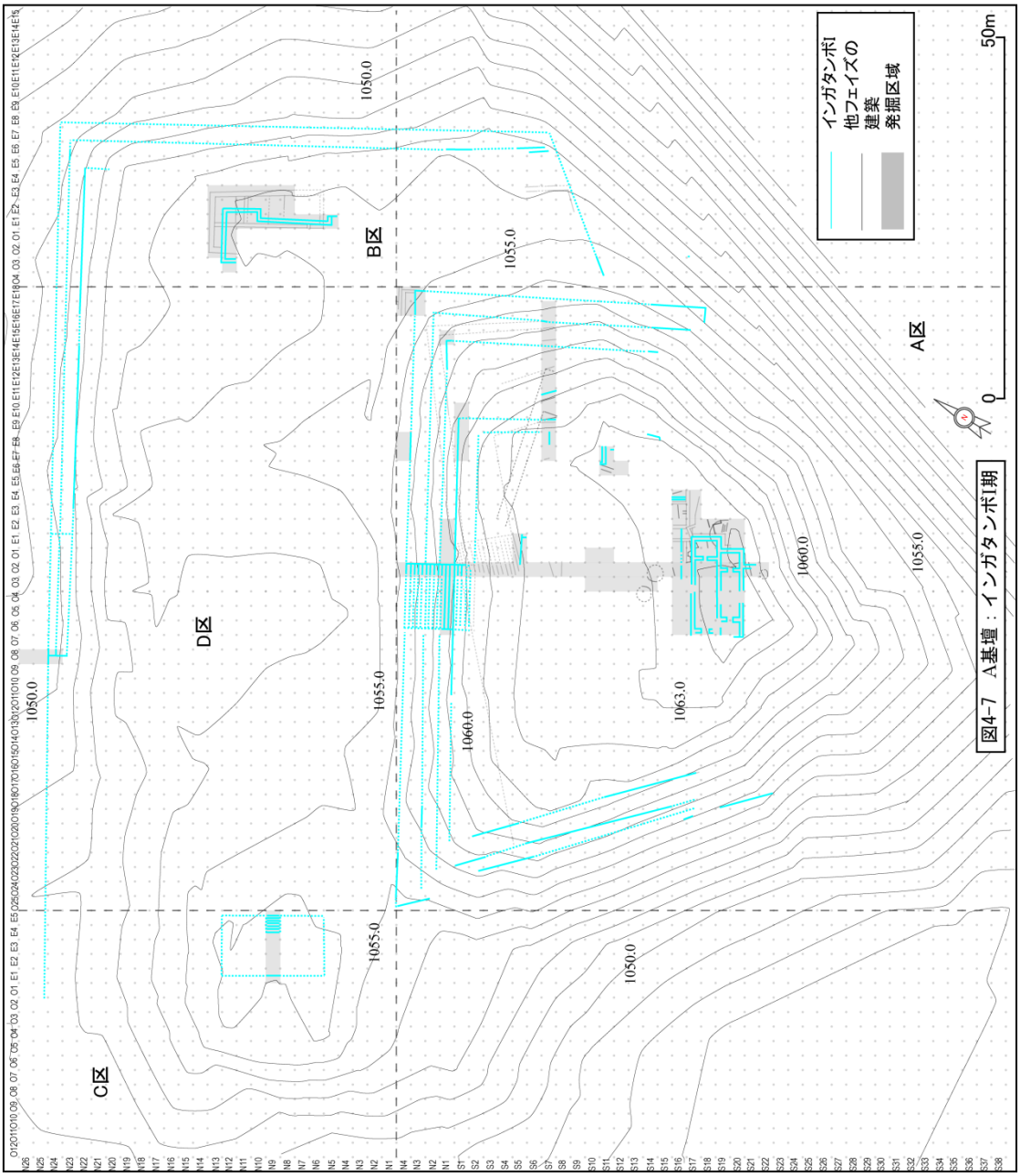


図4-7　A基壇：インガタンボI期

写真4-12　インガタンボ期、主要基壇北面の階段

写真4-13　インガタンボ期、主要基壇上部の部屋状構造物

写真4-14　インガタンボ期、主要基壇上部の部屋状構造物周囲出土の彩色壁画片

写真4-15　インガタンボ期、主要基壇上部の部屋状構造物床下の土器出土状況

写真4-16　インガタンボ期、A基壇上部東側の部屋状構造物群
（II期の建築がI期の建築に載る）

写真4-17　インガタンボ期、A基壇上部西基壇の階段部分

(2) A 基壇 (IG II)　(図 4-8)

A 基壇全体の形態に大きな変化はみられず、部分的に改築、または床の張りかえや底上げなどの改修が行われた。

主要基壇では、前フェイズに基壇上部の低層基壇上で確認された六つの部屋状構造物が引き続き再利用されながらも、北東側に拡張された（写真 4-18）。これらの部屋状構造物と関連して二つの半完形土器が検出されている。主要基壇上部中央部分は、層位状況から 0.4 m程床面が底上げされたと考えられるが、後の時代の活動によって大部分が攪乱されている。また、主要基壇北東角に少なくとも東西 4m、南北 2mの部屋状構造物が築かれた（写真 4-19）。部屋内部は北側が一段高くなった段状構造になっており、そこからは他の発掘区と比べてバリエーションに富んだ大量の精製土器が検出された。

A 基壇上部東側では、前フェイズの部屋状構造物が完全に埋められ、その上に新たな部屋状構造物が築かれた。前フェイズと異なり、4m×4m 程の部屋が並んだ配置になっているが、部屋への出入口は一つしか確認されていない。部屋には床を数回張りかえた痕跡があるが、あくまで小規模で部分的な改修であると考えられる。

西基壇と A 基壇へのアプローチである階段には、西基壇の床が底上げされた以外に、とくに変化はみられない。

このフェイズに対応する層から採集した炭化物は、以下の通りである。なお、試料が採集されたのは、A 基壇上部東側に築かれた部屋状構造物の床中である。

^{14}C年代 (BP)	測定番号	暦年較正年代(信頼度):1σ 範囲	暦年較正年代(信頼度):2σ 範囲	δ ^{13}C ※
2621±30	wk-25523	803-752 cal BC (49.9%)	809-736 cal BC (54.7%)	−22.3±0.2
		686-668 cal BC (12.3%)	690-662 cal BC (14.6%)	
		611-596 cal BC (5.9%)	648-548 cal BC (26.2%)	

※AMS(Accelerator Mass Spectrometry：加速器質量分析計）による測定値

写真4-18　インガタンボII期、主要基壇上部の部屋状構造物（部分的にI期の再利用）

写真4-19　インガタンボII期、主要基壇北東角の部屋状構造物

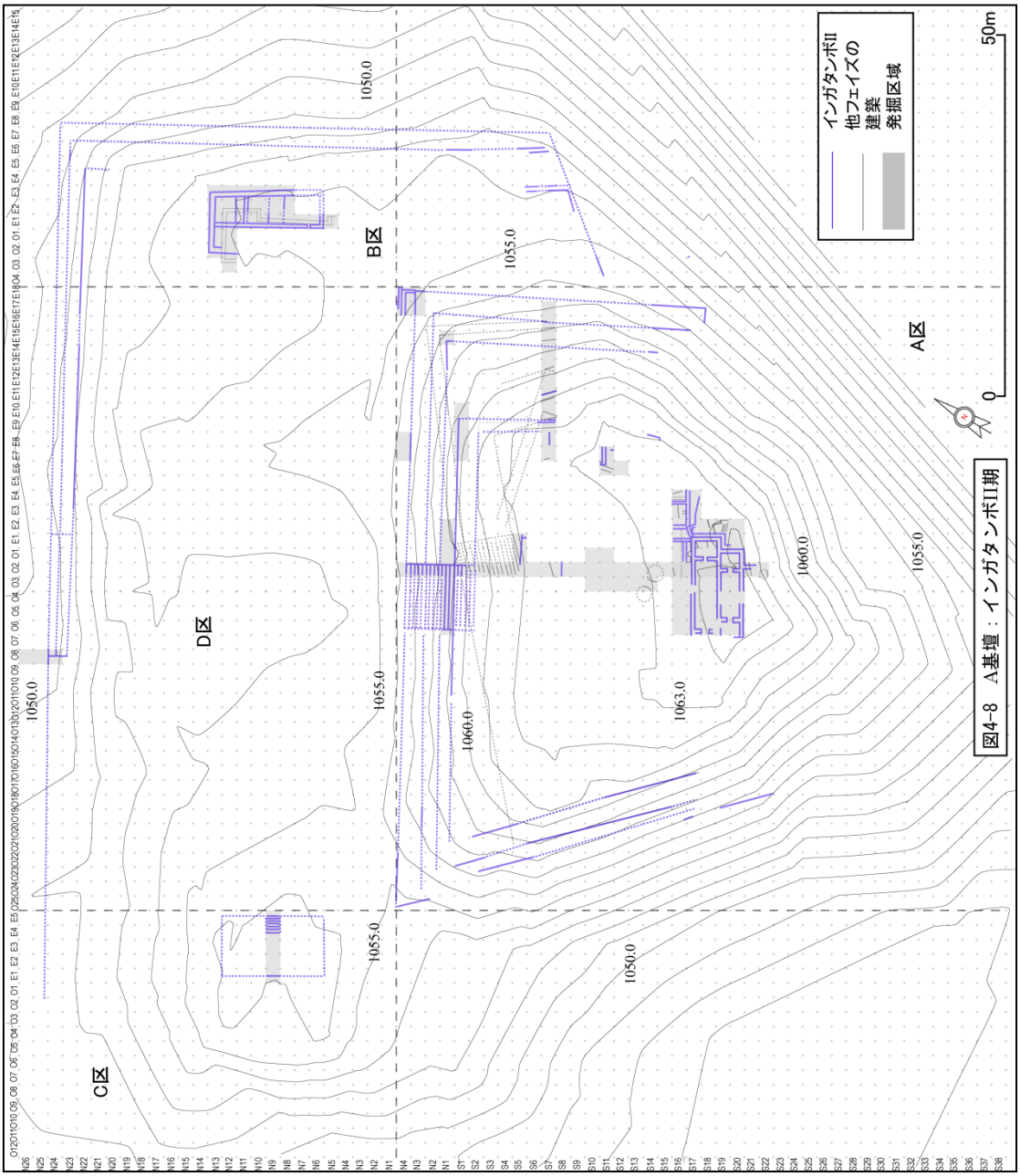


図4-8　A基壇：インガタンボII期

4-6. B 基壇

B 基壇は A 基壇の北東に位置するインガタンボ遺跡で二番目に大規模な基壇である。基壇上部は、盗掘やチムー期（後期中間期）、あるいはインカ期（後期ホライズン）の活動のために中央部が窪んだ形になっており、該当部分では地表面から 50cm 以上の堆積が攪乱されている。A 基壇との時期的関係、ならびに B 基壇の堆積の状況を明らかにするため、堆積が最も厚く、地表面で部屋状構造物が視認できる基壇上部の一部を発掘した。結果、計八つの建築フェイズ（B1-B8）を確認している（写真 4-20）。しかし、表土近くに堆積した B7、B8 フェイズの層は後の時代の活動で攪乱されており、建築に対応する純粋層からの遺物はほとんど採集できなかった。

建築軸、土器、放射性炭素年代によって A 基壇との時期的対応関係を考察した結果、上記の八つの建築フェイズは、B1 がワンカバンバ期、B2-B7 がポマワカ期、B8 がインガタンボ期に対応するものと考えられた。絶対年代による年代決定を行うために 2 点の炭化物を採集したが、これらの試料は、A 基壇の試料と同様に、建築と対応する床面や床面中から採集した確実性の低いとされるものである。

4-6-1. ワンカバンバ期（紀元前 2500-1200 年）

（1）B 基壇（HB B1）　（図 4-9）

地山（岩盤）表面が均一に均されており、硬くしまっていたため、床面ではないが生活面として同定し、一つの建築フェイズとして認識した。また、地山上には他の建築と関連しない不明瞭な石列が検出された。そこから採取された炭化物の年代は、以下の通りである。

^{14}C年代（BP）	測定番号	暦年較正年代（信頼度）：1σ 範囲	暦年較正年代（信頼度）：2σ 範囲	δ ^{13}C ※
4042±30	wk-25527		2618-2608 cal BC (0.9%)	−23.9±0.2
		2566-2522 cal BC (41.5%)	2598-2594 cal BC (0.2%)	
		2497-2470 cal BC (26.7%)	2583-2436 cal BC (90.3%)	
			2420-2404 cal BC (1.5%)	
			2378-2349 cal BC (2.5%)	

※AMS(Accelerator Mass Spectrometry：加速器質量分析計）による測定値

4-6-2. ポマワカ期（紀元前 1200-800 年）

（1）B 基壇（PM I B2、PM I B3）　（図 4-10）

二つの建築フェイズを確認したが（B2、B3）、建築の関連性や土層状況、および建築軸の一致から、これらの建築フェイズは一連の建設過程である可能性が示唆される。層位的にみると、ワンカバンバ期から連続するこのフェイズは、ポマワカ I 期に対応すると考えられる。A 基壇では、このフェイズに対応する層からほとんど土器が出土せず、また、年代測定を行うための良好な試料は検出されなかった。したがって、土器を指標に両者を比較することは困難であり、それぞれを個別の建築フェイズとしてカウントするものの、両者をポ

マワカ I 期に対応する一連の建築とした。B2 からこの後に続く B5 までの建築フェイズの建造物は、ほぼ同じ建築軸で築かれ、グリッド軸に対して 23°西にずれている。この建築軸は、正確には同時期の A 基壇の建築軸とは異なるが、建築の向く方向は概ね同じである。これは、ある一定の方向を重視しながらも、B 基壇では自然の地形を利用しながら建造物が築かれた結果であると考えられる。

PM I B2 の建築は、発掘区北西部で検出した東西方向に走る 1 本の壁の下部のみであり、壁の上の部分は後の活動によって、すでに失われている。また、この壁に対応する床面などは確認されていない。

PM I B3 になると、既述の東西方向に走る壁の約 3m 南、そしてその壁から約 4.5m 南に同じ建築軸を持つ壁が検出され、それに対応する床面が検出された。これらの壁の壁底レベルは、北から南にいくにつれて徐々に高まっている。そのため、南へ向かって高くなる段状の基壇が存在したと考えられる。

(2) B 基壇（PM II B4）　（図 4-11）

建築的には大きな変化はみられない。段状の基壇の床面が 20cm 程度高く張り直され、基壇の一部と組む南北方向に延びる西壁が築かれた。また、前フェイズの床面から新たに張り直された床面の間には、埋葬 1 体が確認されたが、墓室や副葬品は伴っていない。しかし、一個体が完全に埋葬されている点、単なる住居とは考えにくい B 基壇上部という特殊なコンテクストに埋葬されている点、もしくは当該フェイズの建築（石列）がその直上に建設されている点などから、基壇の改築時に埋葬された儀礼的意味を有するものであると考えられる（写真 4-21）。

(3) B 基壇（PM III B5）　（図 4-12）

前フェイズまでの基壇に登るために、PM I B3 でみられた東西方向に延びる壁を利用しながら階段が築かれた（写真 4-22）。保存状況が悪く、発掘範囲が限られているため、詳細は不明であるが、幅、長さともに少なくとも 2m は確認できる。このフェイズの建設活動は階段のある基壇上部北側に集中している。階段以外の部分は、前フェイズの段状の基壇が再利用された。

このフェイズに対応して採取された炭化物の年代は、以下の通りである。なお、この試料の採集層は、当該フェイズの建築に対応する埋土層である。

^{14}C年代（BP）	測定番号	暦年較正年代（信頼度）：1σ 範囲	暦年較正年代（信頼度）：2σ 範囲	δ ^{13}C ※
2873±30	wk-25526	1010-918 cal BC (68.2%)	1111-1102 cal BC (0.9%) 1086-894 cal BC (92.5%) 871-850 cal BC (2.0%)	−23.7±0.2

※AMS(Accelerator Mass Spectrometry：加速器質量分析計）による測定値

（4）B 基壇（PM IV B6、PM IV B7）　（図 4-13）

前フェイズまでの階段と基壇が完全に埋められ、地面を均した後にそれまでとは異なる建築軸で部屋状構造物が築かれた。建築軸は以前とは異なり、グリッド軸に対して西に 14° ずれており、A 基壇のポマワカ期の建築軸にやや近くなる。PM IV B6 では少なくとも東西 2m×南北 4m の部屋が基壇上部に造られた。部屋 B3 は、PM IV B7 において再利用され、この部屋の壁を使って南北に延びる細い回廊状の構造が築かれた。また、同時にその北西に新たな部屋状構造物も建設された。これらの建築に対応する床面は検出されておらず、部屋を構成する壁は、上部の大部分が後の活動によって壊されており、現存しない。

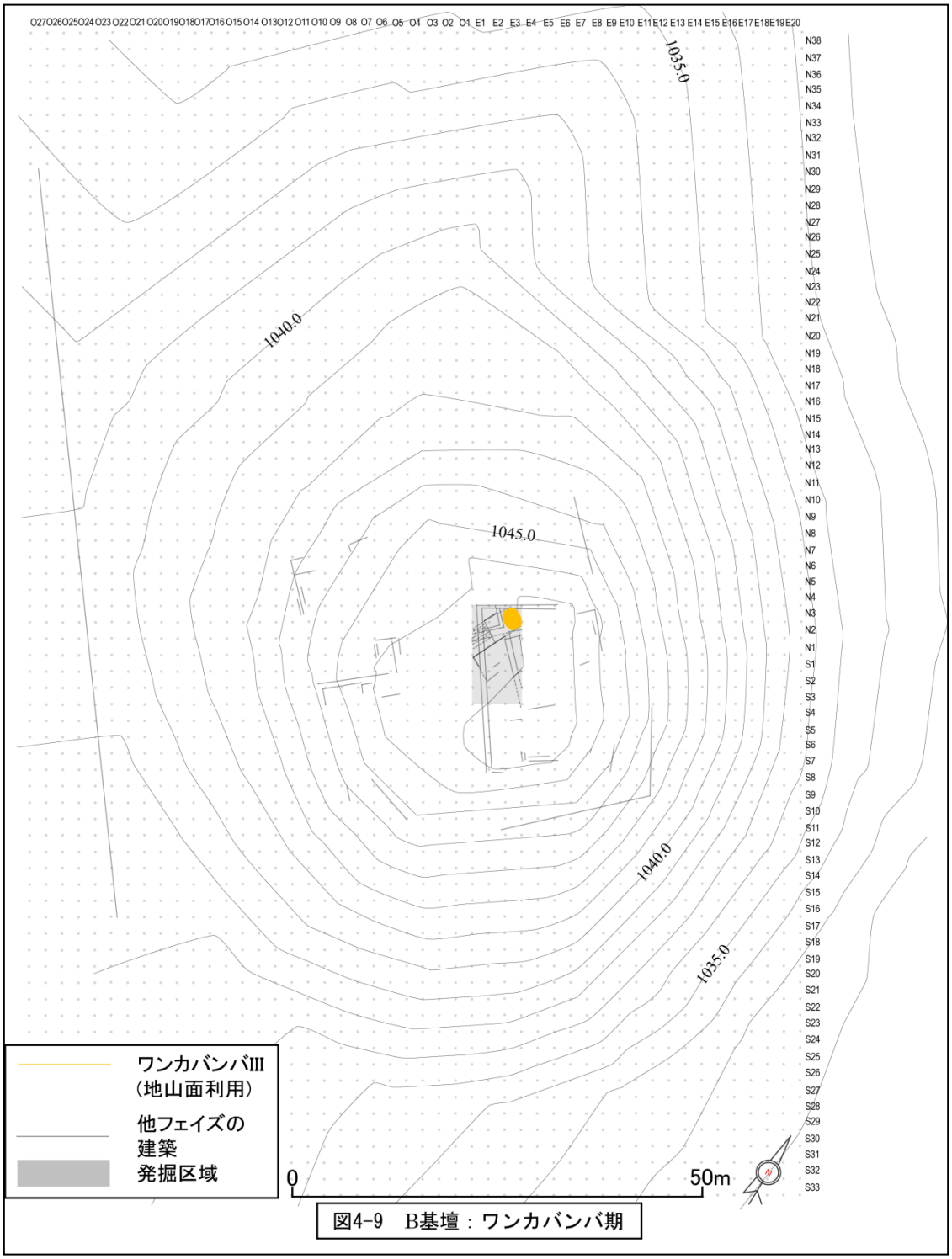


図4-9　B基壇：ワンカバンバ期

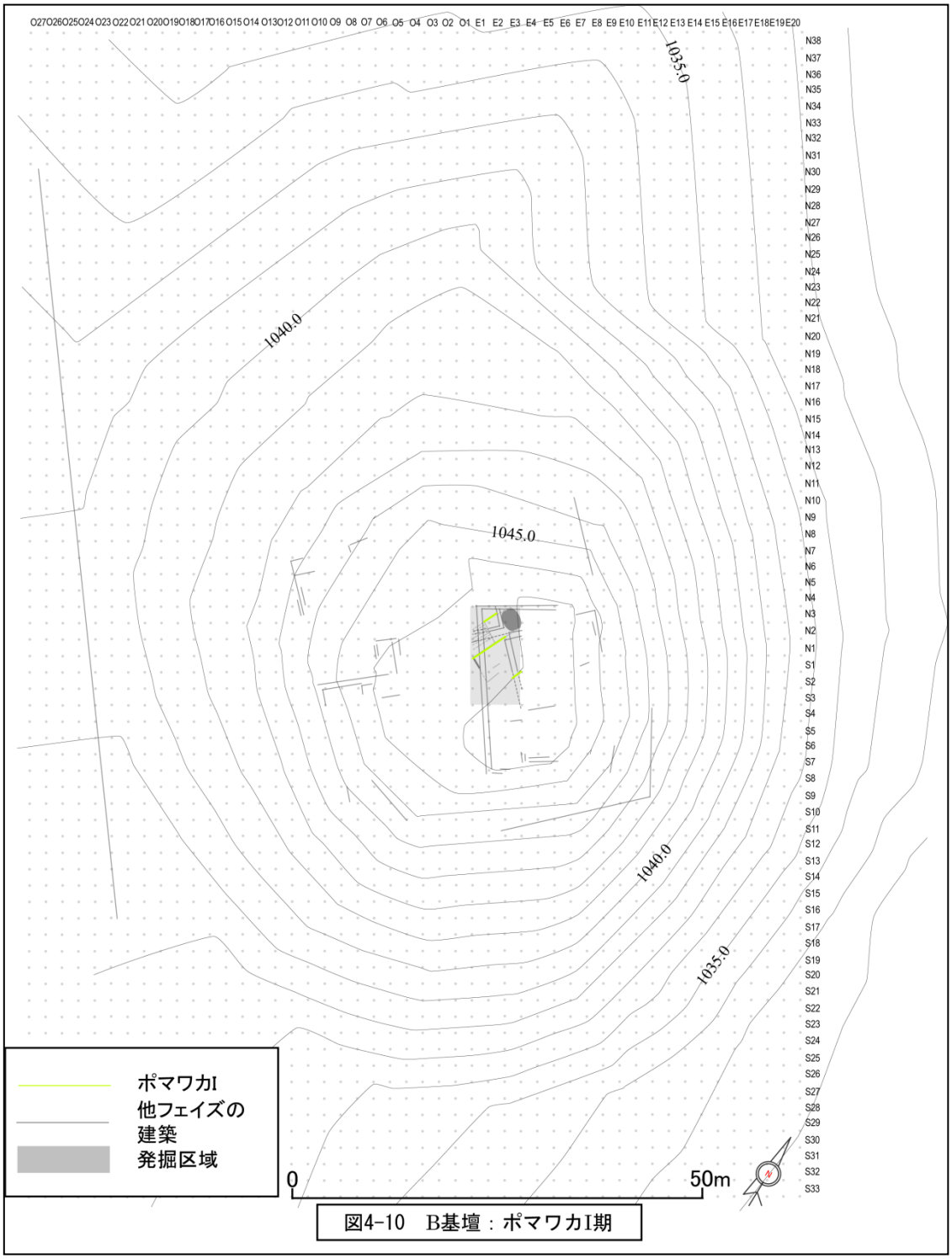


図4-10　B基壇：ポマワカI期

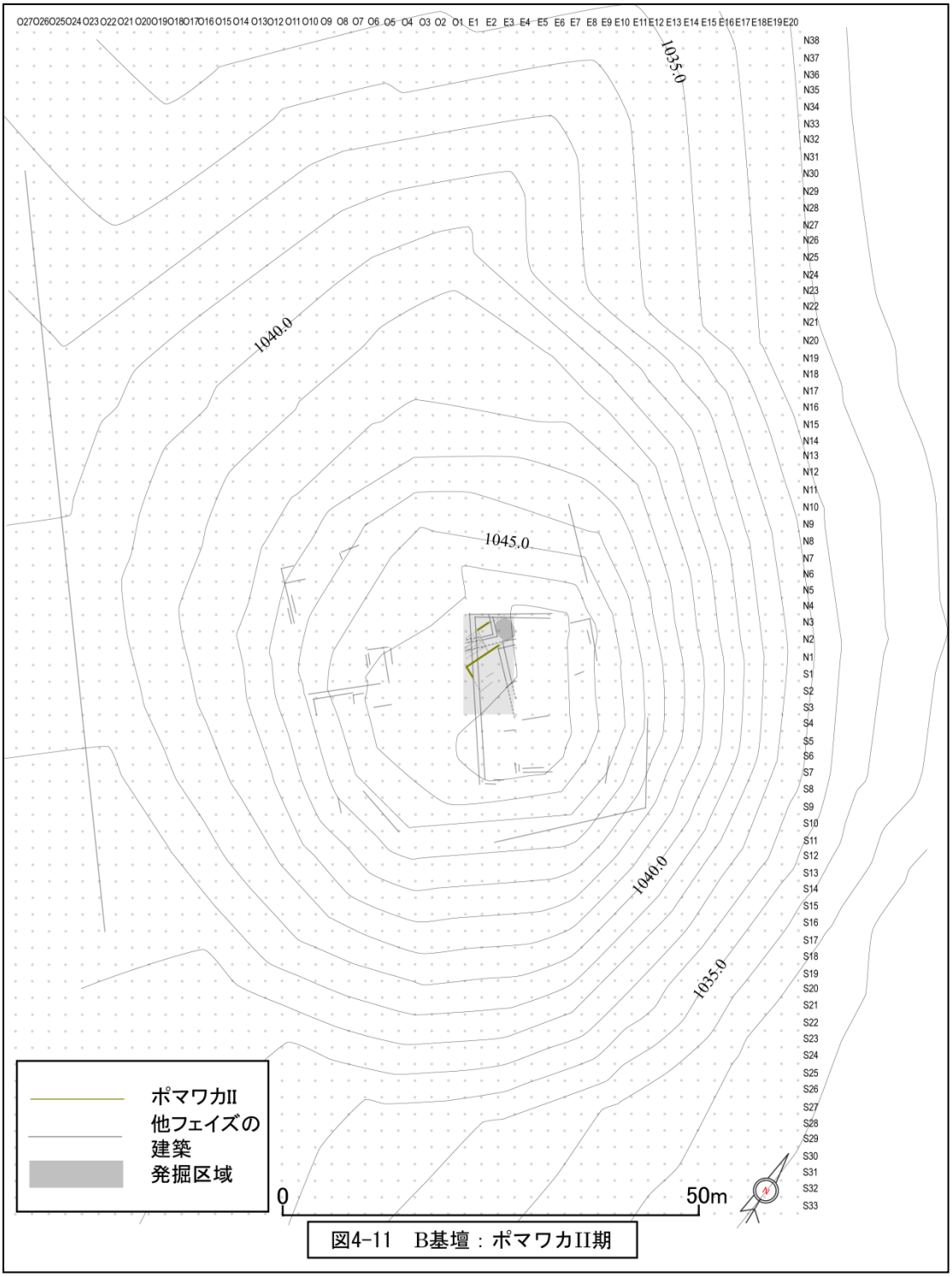


図4-11　B基壇：ポマワカII期

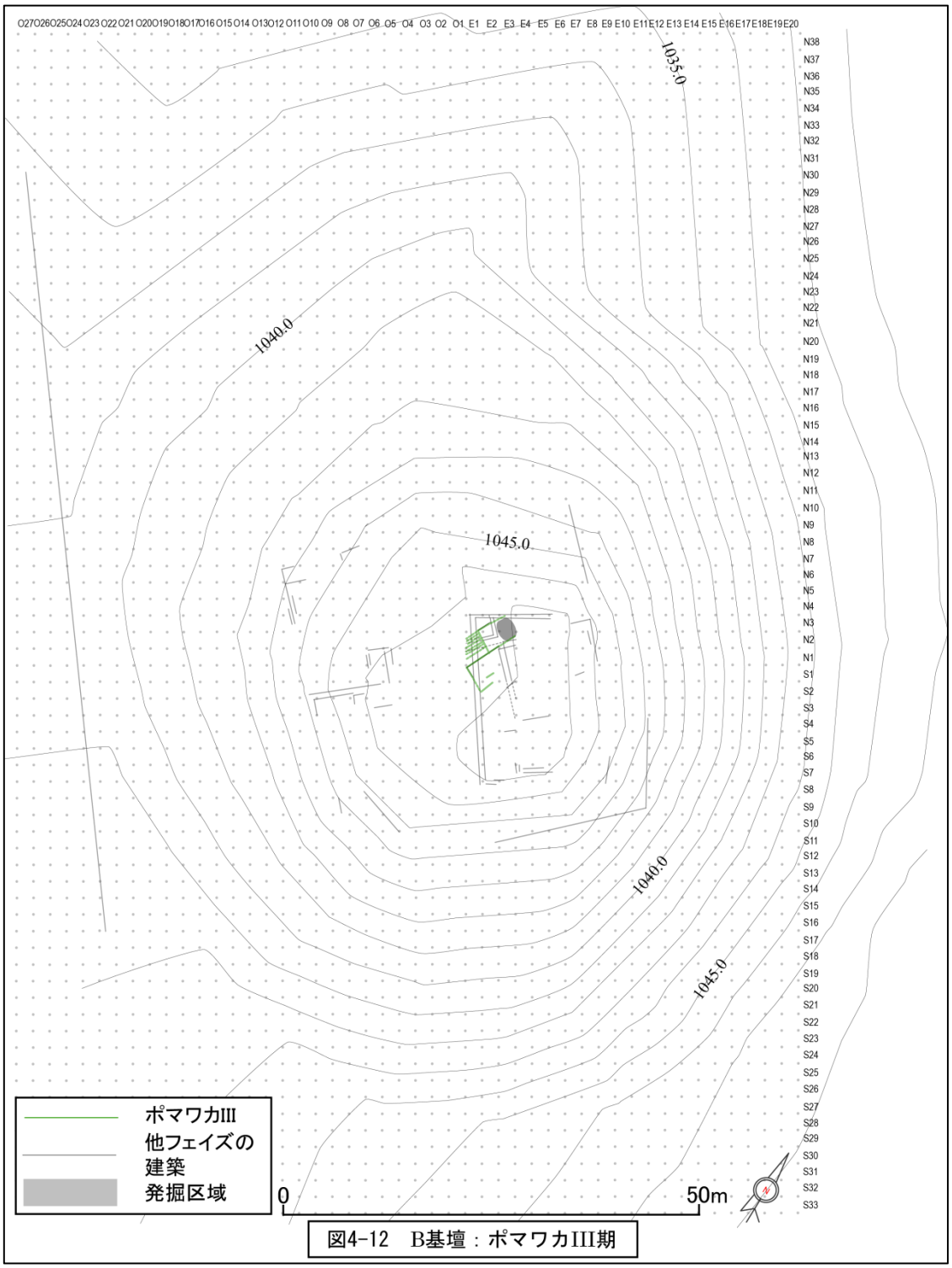


図4-12　B基壇：ポマワカIII期

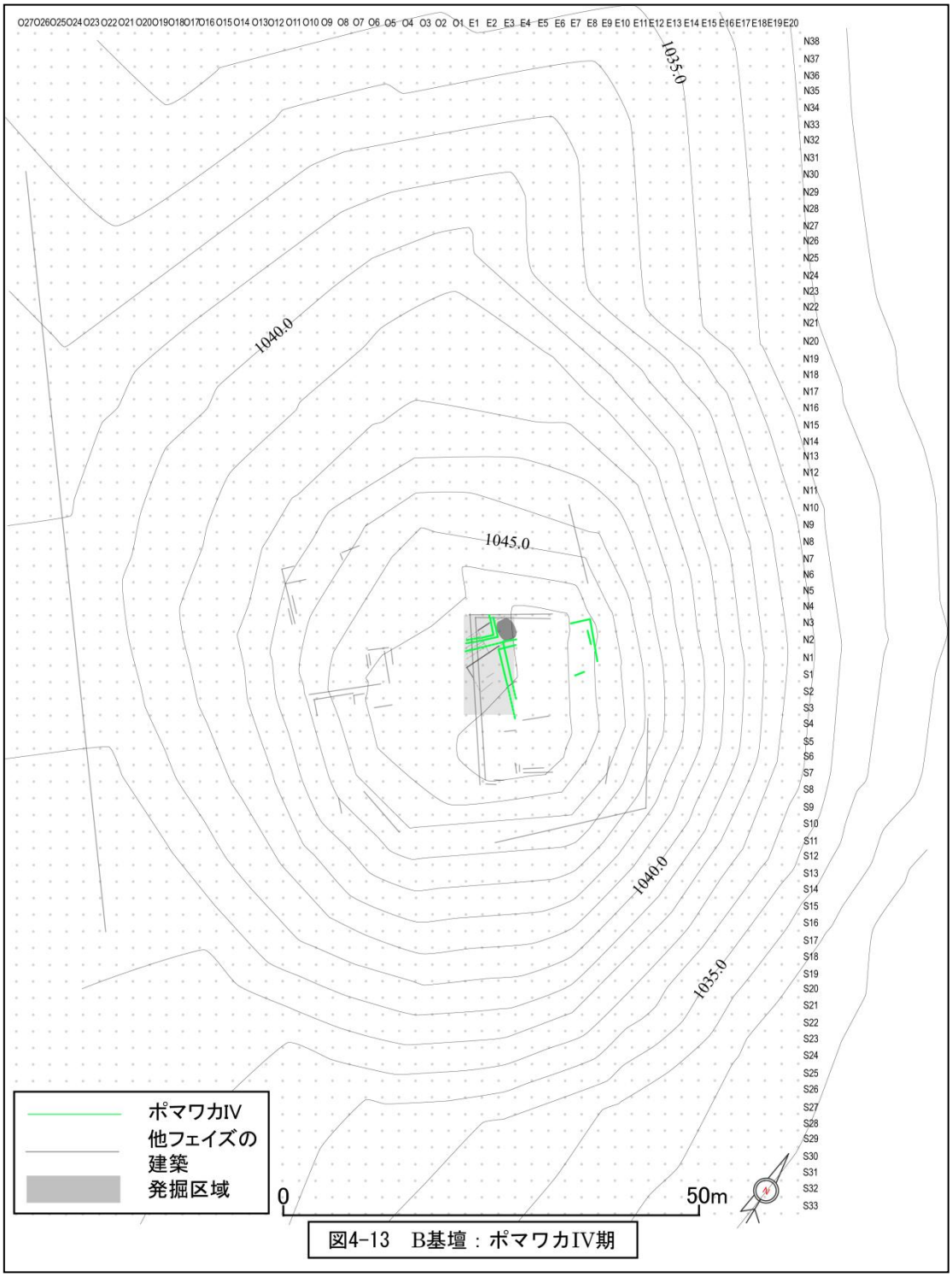


図4-13　B基壇：ポマワカIV期

4-6-3. インガタンボ期（紀元前 800-550 年）

（1）B 基壇（IG I B8）　（図 4-14）

B 基壇の最終建築フェイズである。前フェイズの建築を埋めて新たな建築軸で基壇上に部屋状構造物が築かれた。この建築軸は、A 基壇のインガタンボ期の建築軸とほぼ同一であり、グリッド軸に対して 3°西にずれている。部屋を構成する壁は残っているものの、後の時代の活動のため、床面は検出されていない。なお、部屋を構成する壁直下の土層には攪乱の痕跡がみられないが、その他の部分では攪乱が激しいため、次章の土器のタイプ分類にはこの層から検出した土器は含めていない。

また、測量調査の結果、同じ建築軸を持つ回廊のような構造物が B 基壇の西斜面に築かれていることから、この回廊が B 基壇の西にある広場状空間へのアプローチとして使用された可能性が示唆される。

写真4-20　B基壇発掘遺構

上：写真4-22　B基壇、ポマワカIII期の階段

左：写真4-21　B基壇、ポマワカII期の更新に伴う埋葬

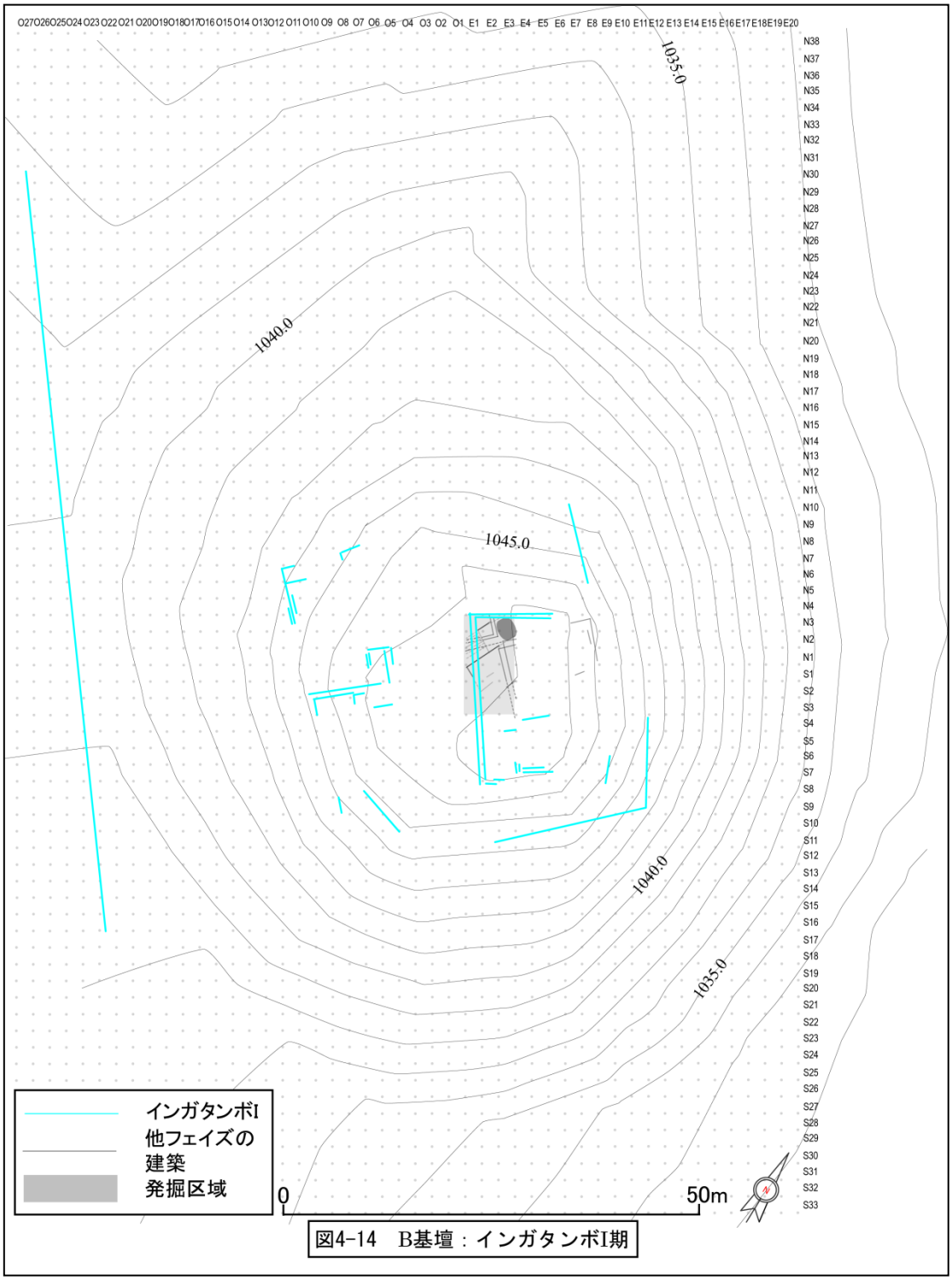


図4-14　B基壇：インガタンボI期

4-7. C 基壇：ポマワカ期（C 基壇 PM）　（図 4-15）

C 基壇は B 基壇の北東に位置する小基壇である。ここでは、とくに B 基壇との時期的関係を明らかにするため、小規模な発掘を実施した。地表面で視認できる建造物は軸の異なる複数のものが存在するが、表土を剥ぐと建造物の壁底が浮いた状態になるため、発掘では一つの建築フェイズ（C1）のみ設定した（写真 4-23)。堆積状況からみると、採集した遺物は建造物を築く直前、もしくは同時期のものと考えられる。堆積は非常に浅く、地表面から地山まで 50cm 程度しかない。

上記の状況、かつ発掘範囲の狭さによって全体像は不明瞭であるが、小基壇上には部屋状構造物が載っていたと考えられる。しかし、発掘範囲以外の軸の異なる建造物は、極めて断片的にしか残存しておらず、建築軸のみを時期決定の根拠とするのは極めて難しい。また、地表面に後期中間期以降の土器が散見されることもあり、こうした地表面観察によるデータは、本論の議論には組み込んでいない。

なお、C 基壇の時期決定は、建築軸と土器資料にもとづいて行った。放射性炭素による年代測定を行っていないこともあり、ポマワカ期に属すること以外は不明である。建築軸は、グリッド軸に対して西に 16°傾いており、B 基壇のポマワカ III 期の軸に近い。

4-8. D 基壇

4-8-1. ポマワカ期（D 基壇 PM）　（図 4-15）

D 基壇は C 基壇のすぐ南東に位置する小基壇である。D 基壇では、周囲の B 基壇と C 基壇との時期的関係を明らかにするために小規模な発掘を行った。地表面に複数の部屋状構造物が視認できるが、全体としての明確なプランはなく、残存状態が悪いため、建築の最下段しか残っていない。建築軸がグリッド軸と一致するような建築もあれば、グリッド軸に対して 14°西にずれているような建築まで存在することから、複数時期の建築が露出している可能性がある。発掘区では C 基壇と同様に、床面などは検出できず、表土を剥ぐと建造物の壁底が浮いた状態となった。しかし、C 基壇と比べて、文化層の堆積は厚く、地山から 2m 程度の盛り土をして基壇を建設している（写真 4-24)。発掘では C 基壇と同様に一つの建築フェイズ（D1）のみ確認した。放射性炭素年代測定は実施しておらず、時期決定は、主に土器資料と建築軸から行った。根拠に乏しい部分は多いが、検出した土器資料から、ここではポマワカ期のものとしておく。

4-8-2. インガタンボ期（D 基壇 IG）

発掘からではないが、地表面にみえている壁のうち、グリッドにほぼ直交し、A 基壇のインガタンボ期の建築軸に近いものをインガタンボ期の建築とした。A 基壇よりも近い B 基壇のインガタンボ期の建築軸がグリッドからやや西にずれており、それだけで時期を決定することは困難であるが、D 基壇のポマワカ期の建築とは明らかに軸が異なるため、ここではインガタンボ期のものとしておく。

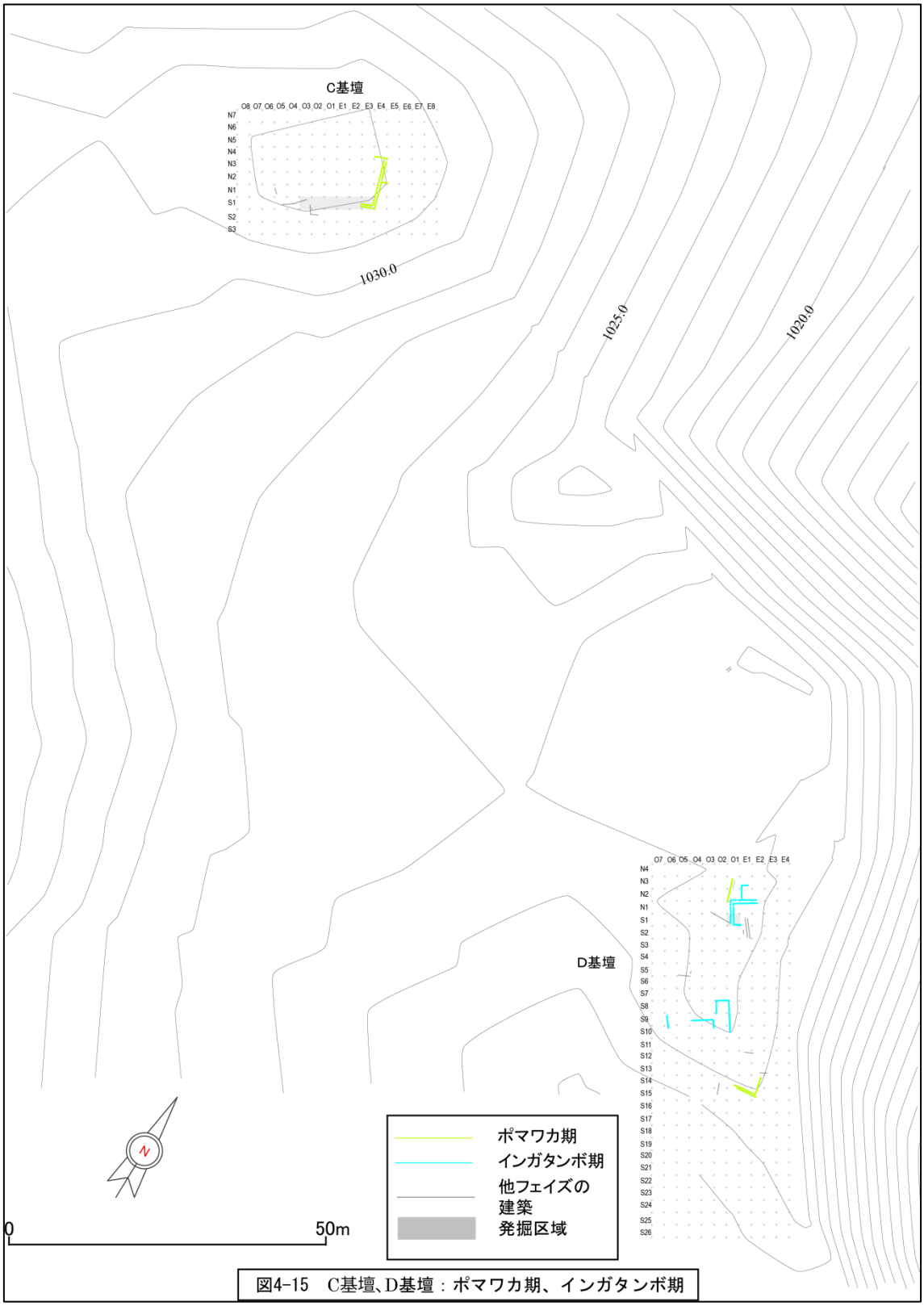


図4-15　C基壇、D基壇：ポマワカ期、インガタンボ期

写真4-23　C基壇の発掘状況

写真4-24　D基壇の発掘状況

4-9.　小括：インガタンボ遺跡における建築の時期的変遷

基壇ごとに記述してきた建築の形態と特徴を時期ごとにまとめて総合し、インガタンボ遺跡全体における建築的特徴の時期的変遷を明らかにする。

4-9-1. ワンカバンバⅠ期　（図 4-16）

自然の丘陵を利用して、主要基壇の建設がはじまる。基壇自体は、直方体で基壇上に建造物の載らない非常にシンプルなプランである。それ以外の場所では建設活動は行われておらず、インガタンボにおける建築の密度は低く、全体として小規模な利用にとどまっている。

4-9-2. ワンカバンバⅡ期　（図 4-16）

主要基壇で床面が張りかえられ、高さが増す以外に目立った建設活動はみられない。

4-9-3. ワンカバンバⅢ期　（図 4-16）

主要基壇で床面が張りかえられ、高さが増す一方、黄褐色の泥漆喰を仕上げに施された建造物が主要基壇上部に現れる。また、地山を利用して B 基壇で活動がはじまるが、利用は極めて限定的である。

4-9-4. ワンカバンバⅣ期　（図 4-17）

主要基壇全体の形態に大きな変化はみられないが、床面が張りかえられ、高さが増す。また、基壇上部に黄褐色の泥漆喰で仕上げられた複数の構造物が築かれるなど、基壇上部の状況に変化がみられる。現在のデータからは、それらの構造物の配置には、明確なプランは認められない。B 基壇の状況は前フェイズと変わらず、地山を利用した生活面が確認できるのみである。

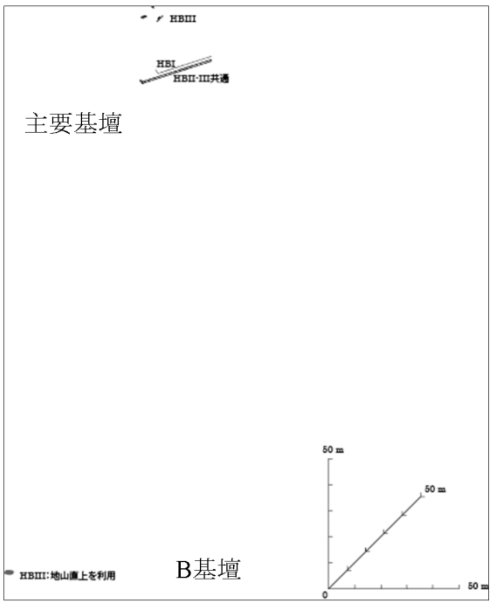


図4-16　ワンカバンバI-III期復元図

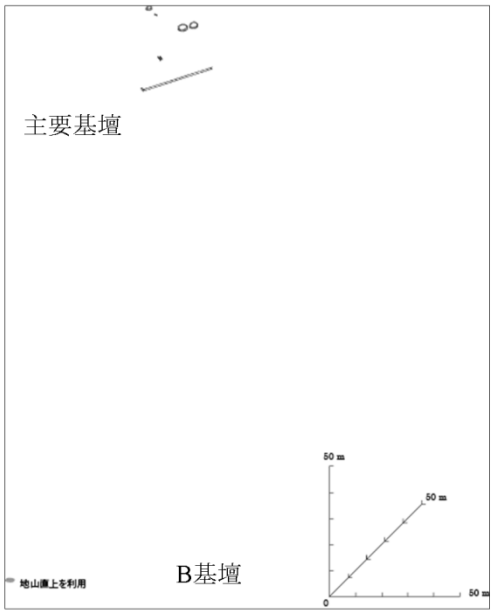


図4-17　ワンカバンバIV期復元図

4-9-5. ポマワカⅠ期　（図 4-18）

前時期とは異なる建築軸で、主要基壇が増改築される。主要基壇は大幅に体積が増し、北面には階段が設けられる。主要基壇上部は奥（南側）が一段高く、基壇の上に低層基壇が載る構造となっており、この低層基壇から階段までのスペースには広場状開放空間が存在した。また、B 基壇では段状の基壇が築かれるが、主要基壇と比べてかなり小規模である。主要基壇、B 基壇という離れた二つの基壇を貫くようなプランはなく、この時期には少なくとも独立した二つの基壇が存在していたと考えられる。データに乏しく、正確な時期は不明であるが、C 基壇、D 基壇がこの時期に建設された可能性があり、その場合は、インガタンボの北東部に B 基壇を中心として、その周囲に C 基壇と D 基壇が配置された基壇複合が現れることになる。これらの基壇の中央には広場状開放空間が存在したと考えられる。したがって、全体として U 字を呈するようにもみえるが、その配置は不規則的であり、第 8 章でふれる中央アンデスの他地域にみられるような U 字形配置とは大きく異なる。建設活動の頻度は、主要基壇と B 基壇では異なり、全ての建設活動が同時に行われたわけではない。

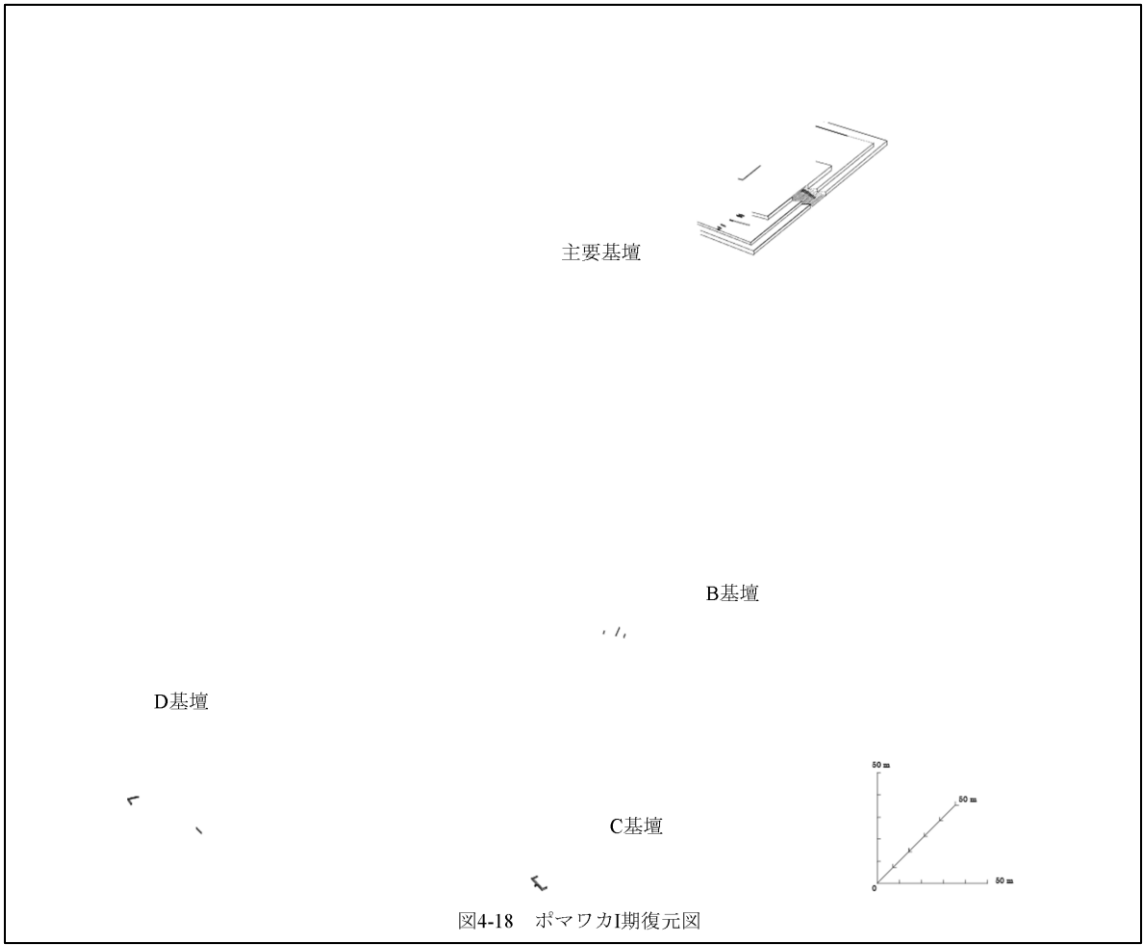


図4-18　ポマワカI期復元図

4-9-6. ポマワカⅡ期　（図 4-19）

主要基壇、B 基壇ともに大規模な建設活動はみられず、床の張りかえや壁の付け足しなどが行われただけである。主要基壇上部では前フェイズに築かれた低層基壇の高さが増し、その北側の広場状空間との高低差がより明確になる。

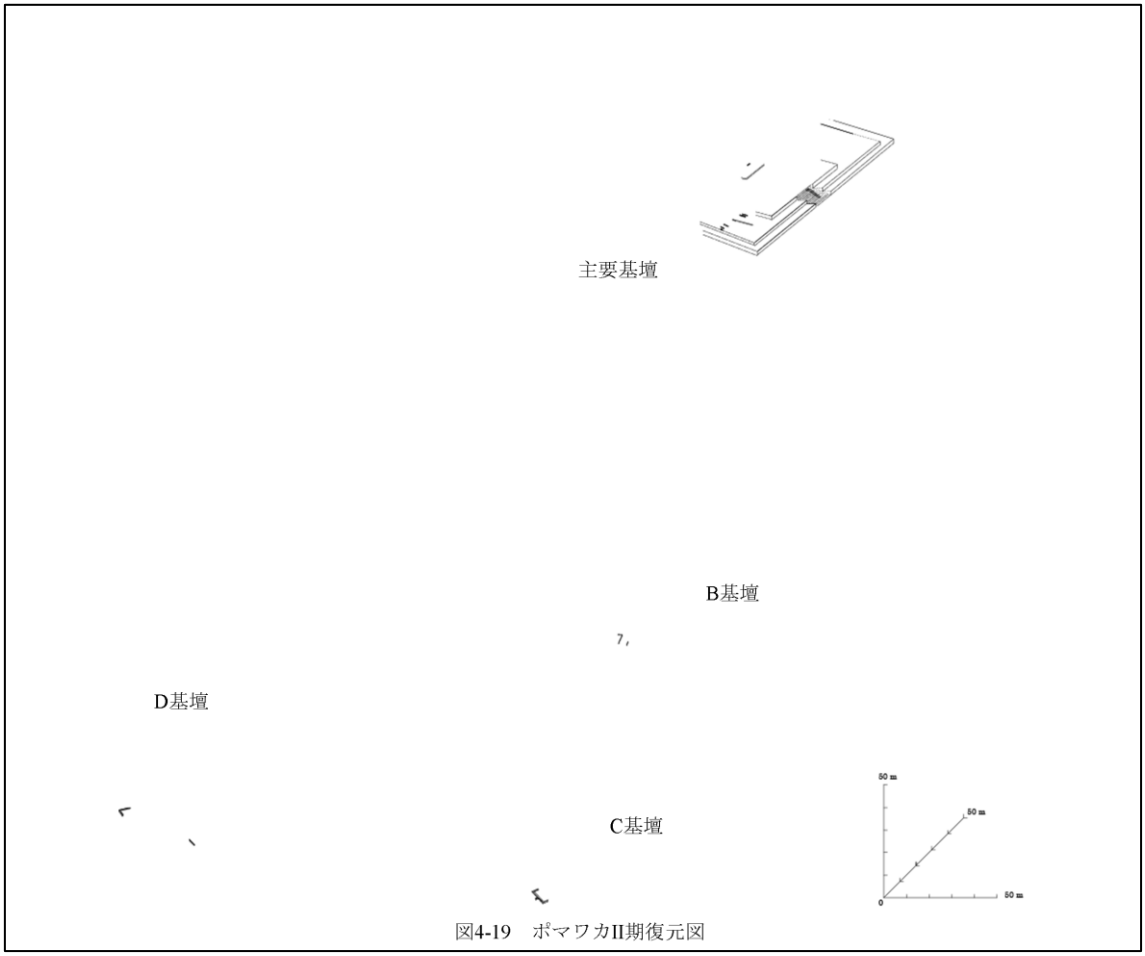


図4-19　ポマワカII期復元図

4-9-7. ポマワカ III 期　（図 4-20）

主要基壇では床の張りかえが行われ、高さが増す一方で、低層基壇の上に黄褐色の泥漆喰で精巧に仕上げられた部屋状構造物がはじめて築かれる。主要基壇中央部には広場状空間が広がっているため、主要基壇上には①部屋状構造物、②開放空間といった高低差を有する空間構造が現れることになった。B 基壇では小基壇に壁が付け足されるが、基壇自体の構造に変化はない。

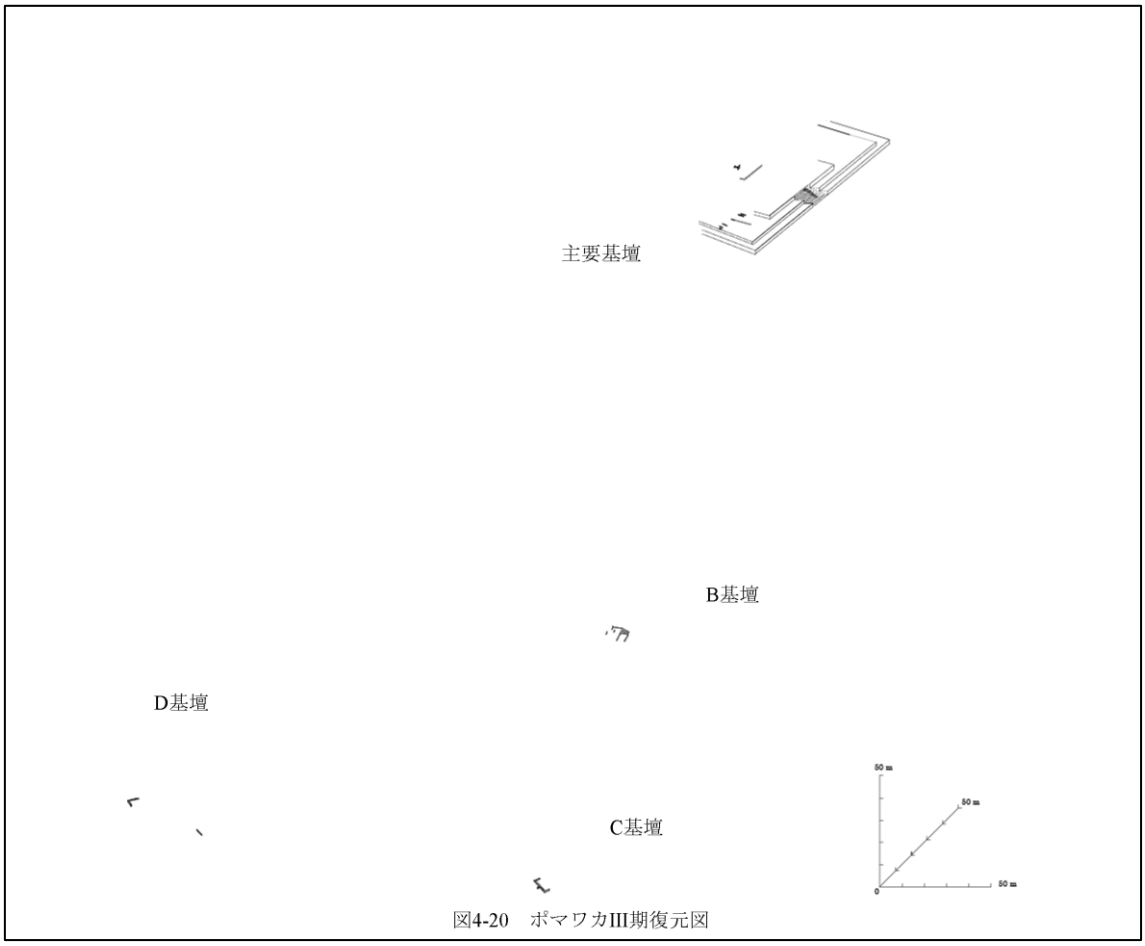


図4-20　ポマワカIII期復元図

4-9-8. ポマワカ IV 期　（図 4-21）

主要基壇では床の張りかえに伴い、高さが増す。その一方で、小基壇上に築かれていた部屋状構造物が破壊を伴って埋められ、その上に円形構造物が築かれる。それ以外の建築は検出されておらず、主要基壇上部の構造物の配置は明確ではない。B 基壇では小基壇に階段が増設されるなど変化がみられるが、基壇自体の規模に大きな変化はない。

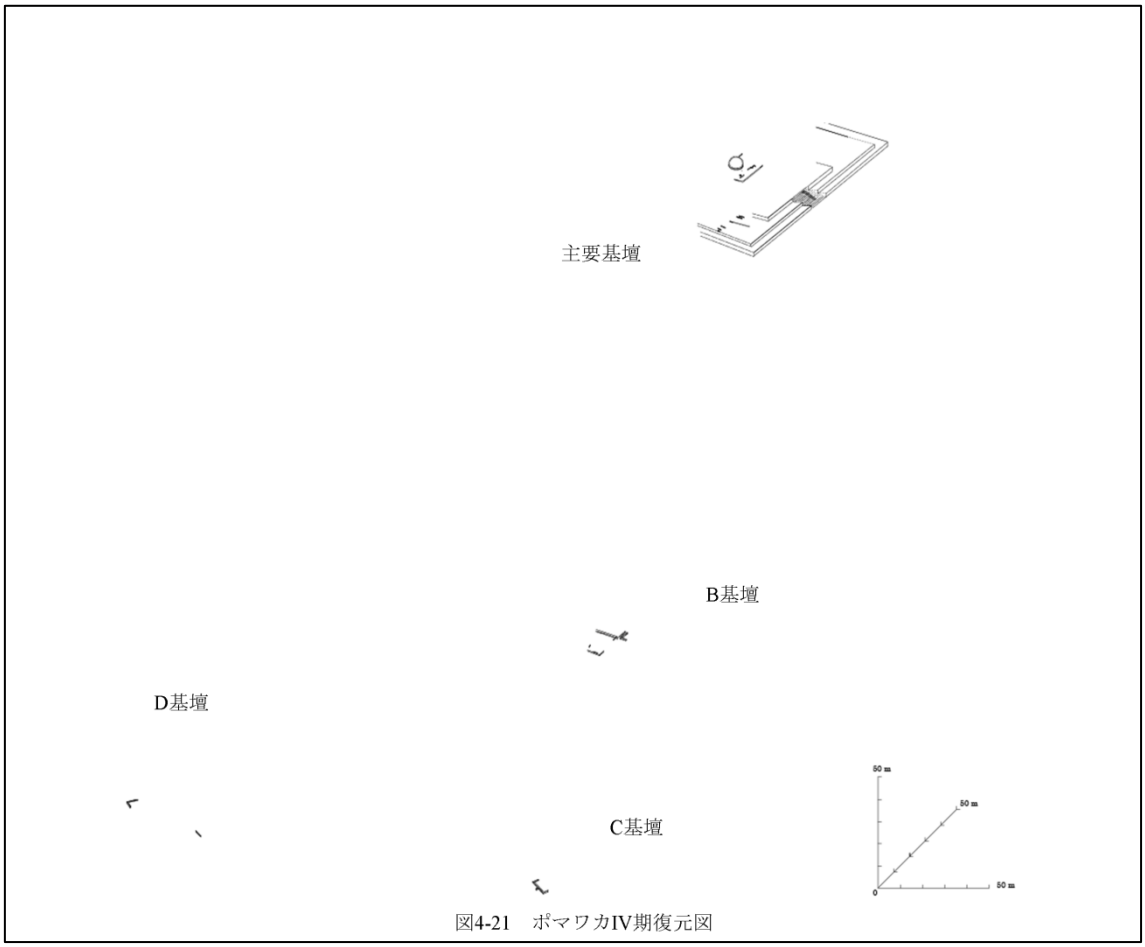


図4-21　ポマワカIV期復元図

4-9-9. インガタンボⅠ期　（図 4-22）

インガタンボで最も大きな建設活動が行われた時期である。この時期の建造物はポマワカ期とは異なる建築軸で築かれている。A 基壇が建設され、基壇上の南側に主要基壇、西側に西基壇が載り、東側には部屋状構造物が築かれる。それらの間のスペースは開放空間となっている。A 基壇を構成する要素の一つである主要基壇は、ポマワカ期と比べて体積が増す。また、主要基壇上部の低層基壇上には六つの部屋状構造物が築かれ、主要基壇中央部には広場状開放空間が広がる。したがって、A 基壇には①主要基壇上部の部屋状構造物、②主要基壇上部の開放空間、③A 基壇上部（主要基壇下）の開放空間といった高低差を有する空間構造が生じることになる。

B 基壇ではそれまでの建築を埋めて、部屋状構造物が造られ、西面に回廊が築かれる。また、A 基壇と B 基壇の間には巨大な広場状開放空間が築かれることから、B 基壇西面の回廊は、広場状開放空間へ降りるためのアプローチであると考えられる。さらに、B 基壇から視認でき、かつ B 基壇から A 基壇への通路にあたると考えられる A 基壇の北面と東面は、B 基壇と同じ建築軸で造られている。その一方で、B 基壇からみて裏側にあたり、直接視認できない A 基壇主要基壇の西面は、異なる建築軸が用いられたポマワカ期の建築が再利用

されている。これらのことから、この時期には、A 基壇と B 基壇が広場を挟んで繋がる一つの大きな基壇・広場複合が成立したと考えられる。この全体配置は、他地域の形成期遺跡において類をみないインガタンボ独自の形態である。

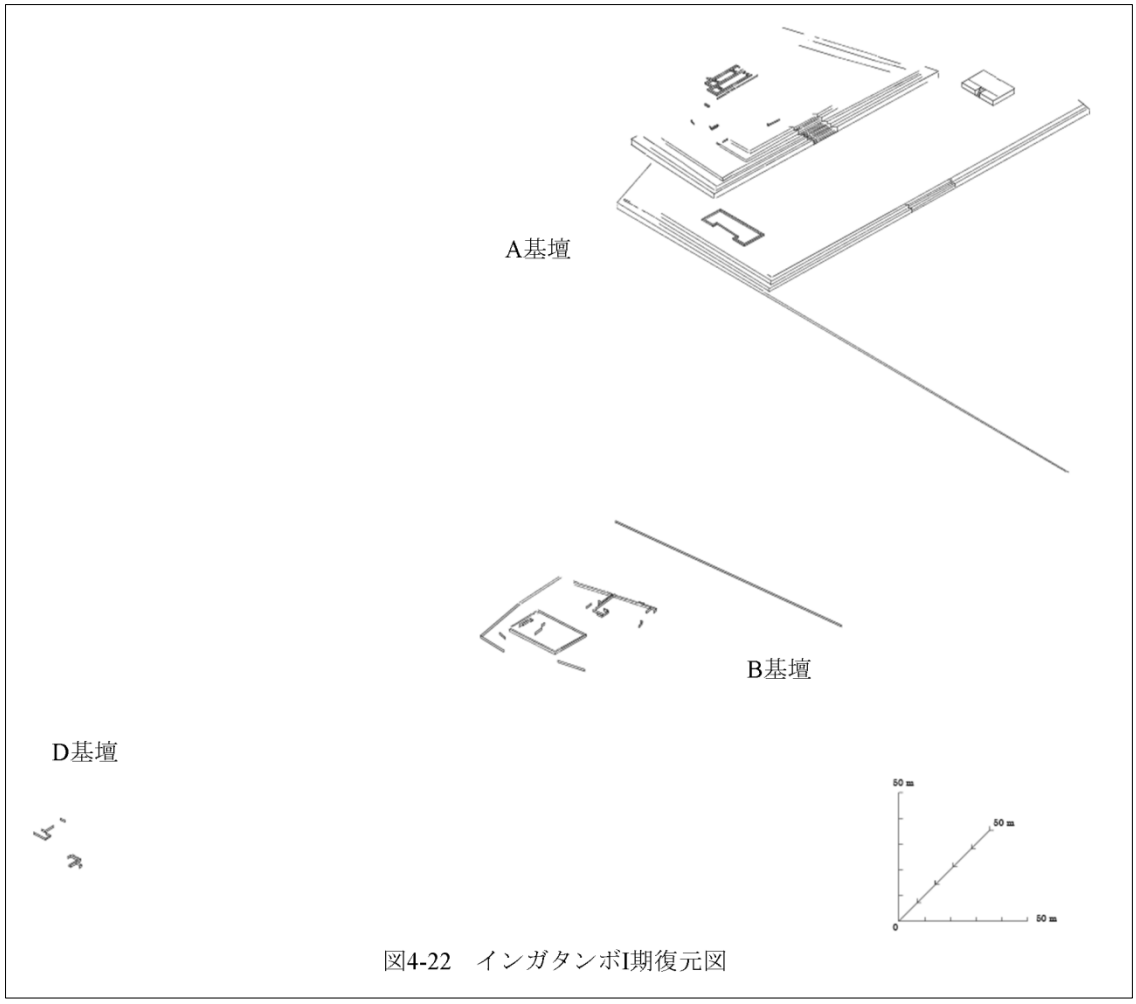


図4-22　インガタンボI期復元図

4-9-10. インガタンボⅡ期　（図 4-23）

この時期に建設活動がみられるのは A 基壇のみであり、前フェイズにみられたような大規模な増改築はみられない。主要基壇上部の低層基壇上にある部屋状構造物は再利用されつつ、拡張する。また、主要基壇北東角に部屋状構造物が築かれる。この時期の A 基壇上部東側では、前フェイズの部屋状構造物を埋めて、新たに小規模な部屋状構造物群が築かれるため、主要基壇北東角の部屋は、これらと関連して築かれたと考えられる。西基壇では床面が高く張りかえられた。

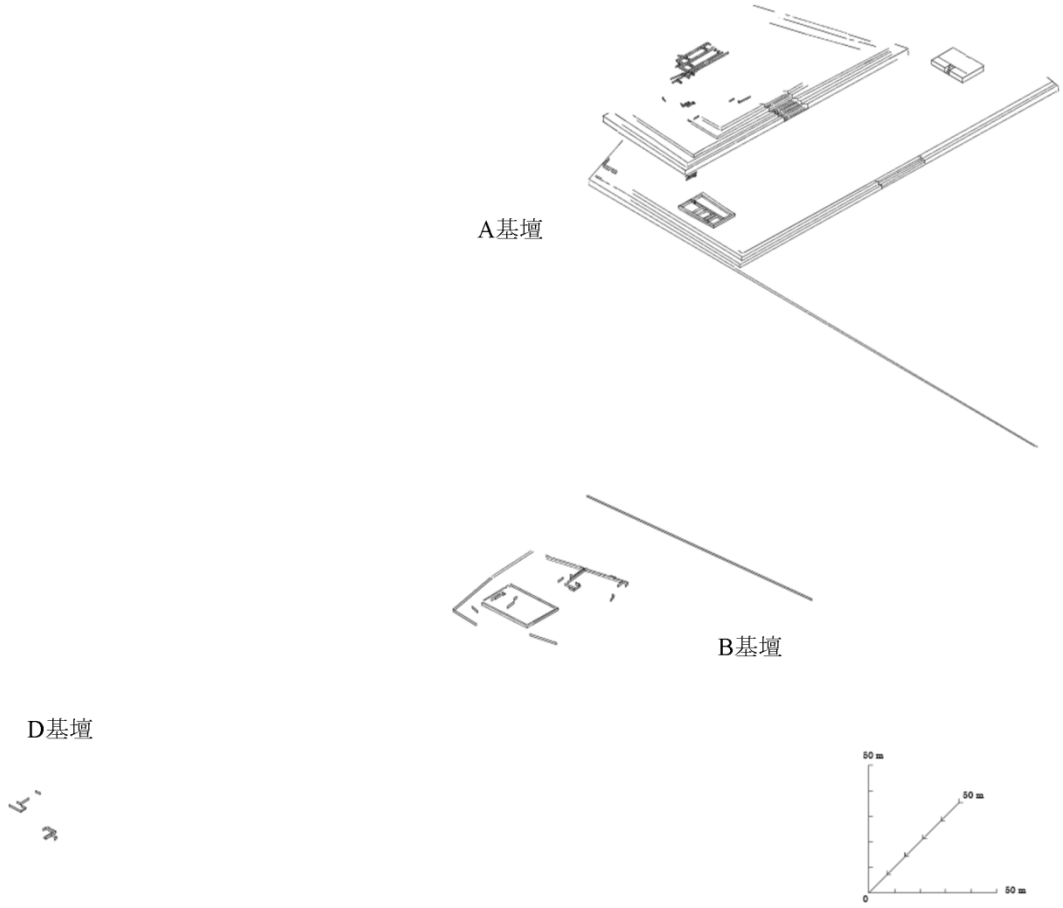


図4-23　インガタンボII期復元図

以上のように、本章では、インガタンボ遺跡の発掘調査からえられた建築データを、年代測定結果、ならびに遺跡地表面で観察可能な建造物の測量データと合わせて、建築活動の特徴を時期ごとに記した。次章以降では、本章で提示した建築データに対応する形で、出土した遺物について時期ごとに整理、記述していく。

第 5 章：インガタンボ遺跡の土器

一般的に発掘調査に際して、土器は他の遺物よりも出土量が多く、属性の変化によって時期ごとの変化も捉えやすいため、編年を打ち立てる際の重要なデータとなる。また、他の遺跡でも報告の多い資料であるため、遺跡間の比較検討を行ううえで最も適した資料であるといえる。さらに、交換財として使用される事例も確認されており[Bruhns 2003; Druc 1998, 2004]、地域間交流を考察する際に重要な要素となりうる。

本章では、はじめに土器分析の目的と方法について記述したうえで、建築時期ごとに出土土器を整理・記述する[1]。そして、時期ごとの変化を把握して、土器編年を確立したうえで、インガタンボ遺跡出土土器の諸特徴と全体像を明らかにする。また、本章の土器データは、第 8 章で行う周辺地域との土器の比較検討のための基礎データとなる。

5-1. 分類の方法とその目的

土器分類の方法は、分類の目的に即して多岐にわたる。アンデス考古学における土器研究の背景は、第 1 章でも述べたように、とくにアメリカにおける人類学や考古学の理論的動向と深く関連している。

アメリカ大陸における考古学史についてまとめたウィレーとサブロフが「分類＝記述期（1840-1914 年）」と称した時代、つまり単系進化論を軸にアメリカ大陸における人類の起源に関心が持たれていた時代には、過去の諸現象を注意深く記述することが考古学の目的であった。そして、記述を行うために遺構や遺物を分類することがはじまり、型式[2]（タイプ）分類が樹立された。この時代の終わりごろには分類において、遺構や遺物の空間的広がりという概念が導入されたが、編年への関心は欠如していた[ウィリー・サブロフ 1979: 118-119]。さらに、当時の考古学では、層位学的方法論[3]がとられていなかったことから、考古学的文化[4]の連続性を確立できず、時間の経過に伴った小規模な文化変化という概念が発展しなかった[ウィリー・サブロフ 1979: 125]。

ペルーに関するこの時期の研究としては、セリエーション[5]を用いたウーレの編年研究が

[1]出土遺物の写真、および図面に用いられた縮尺は、すべて一目盛が 1cm で計 5cm のものである。

[2]人工物に認められる共通した複数の属性（材質、技法、装飾、形態など）の組み合わせにもとづいて、研究者が分けたまとまりである[Dunnel 1986; 加藤 1976; Rice 1987: 276]。

[3]地質学的見地にもとづいて、堆積層の上下関係や切り合い関係などから、堆積の新旧関係を明らかにする方法である。

[4]遺構や遺物にみられる技術、図像表現といった物質的特徴の地域的・時期的な広がりをさす。時として、特定の属性、またはタイプの地域的・時間的なまとまりである様式と同一視される。

[5]複数の資料を時系列に配列することである。単純なものから複雑なものへという変化を前提とした進化的セリエーション、資料間の類似性を比較しながら変化を捉える類似的セリエーションが存在する[ウィリー・サブロフ 1979: 148-149]。

あげられる。この編年は、遺物の変化と複数の文化層の相対的序列関係を通じて行われたため、続く「分類＝歴史期」に先立つものと位置づけられる。

ウィリーとサブロフによれば、「分類＝歴史期」は大きく二分される。そして、単系進化論への批判に端を発する、文化の個別性や文化間相互の影響を重視する文化相対主義による批判を受けて、文化変化の通時的研究としてではなくデータの蓄積に特化した時代を、彼らは「分類＝歴史期 - 編年への関心（1914-1940 年）」と称した。この時代には、考古学の研究法が飛躍的に発展し、タイプに加えて、層位発掘[1]とセリエーションが導入された。これによって、各地の考古遺物が空間的・時間的枠組みのなかに位置づけられるようになり、層位中の遺物の上下関係から文化の連続性が考察され、編年研究の進展がみられた[ウィリー・サブロフ 1979: 159]。この時代における分類とは、文化を時間的、空間的に記録する手段であり、その結果としてタイプの設定にはとくに注意が払われた。そして、タイプは一つの時期指標とみなされるようになり、様々な文化の分類が行われ、多様な文化名が冠せられた。

この時代のペルーについての研究としては、第 1 章でも「チャビン問題」との関連のなかで触れたテーヨの研究があげられる[Tello 1960]。これは、チャビン・デ・ワンタル遺跡に特徴的な図像やモチーフのまとまりとしての「チャビン様式」が、中央アンデスの広範囲にみられることから、アンデス文明の起源としての「チャビン文化」を想定するものであった。また、クローバーは、セリエーションを用いて、上記の「チャビン文化」を「ホライズン[2]」の一つとした編年をうちたてた[Kroeber 1944]。

続く「分類＝歴史期 - 脈絡と機能への関心（1940-1960 年）」になると、放射性炭素年代測定法の導入によって編年研究が進むとともに、新進化主義の台頭から文化的・社会的行動を読み取ろうとする一般的理論への関心が高まるようになる[ウィリー・サブロフ 1979: 203]。セトルメント・パターン[3]や生態学的視点が取り入れられたこともこの時代の特徴である。また、考古学調査自体が増加し、様々な地域で編年の確立が進んだ。ホライズンの概念は、様式や技術の伝播と系譜関係に着目して、その背景を明らかにすることに応用され、編年と地域的総合が行われた。先述の「チャビン文化」における土器の形態や装飾、図像の諸要素の変化を用いた編年や、その伝播と系譜関係を論じたロウのセリエーション[Rowe 1967]は、ペルーに関するこの時代の代表的な研究である。なお、本論文で使用している編年体系である形成期という概念は、この時期の研究の成果である[Willey and Phillips 1958]。

第 2 章で述べた 1960 年代のプロセス考古学の展開以降は、ウィリーとサブロフによって「説明期」[ウィリー・サブロフ 1979]、または「現代期」と称される[Willey and Sabloff 1993]。

[1]各層を一つの時間の単位として、層位の重なり方を観察して時期決定を行う発掘手法である。層位区分には、人為的に層区分を決定する人工層位と発掘中に観察される堆積状況に応じて層区分を決定する自然層位の 2 通りが存在する。
[2]広範囲に一定の芸術様式が分布する時期のことをさす。
[3]特定地域における遺跡相互の機能的関連や生態系との関係を対象とした研究である。

そして、統計学的手法などに進展はみられるものの、土器の分析方法自体は大きく変化せず[Dunnel 1986]、型式学の時代が続くとされる[Orton et al. 1993: 8-13]。アメリカ考古学の最初期から現在までにおよぶ理論的動向、あるいは目的や方法論の転換を受けながら変遷してきた分類研究には、理論面における深化が不可欠であるが、現状では未だ不十分であるといえよう[Dunnel 1986]。その結果、1960 年以降においても、それまでに型式論についての研究が出尽くしたこともあって[加藤 1976: 269]、編年研究では、既述のタイプ、層位発掘、セリエーションにもとづく分析手法が引き続き用いられてきた。

このような状況のなかで重要なことは、全ての土器分類の根幹となったのが、土器の属性、および属性のセット関係からなるタイプ分類であったことである。しかし、土器のタイプ分類の方法は多様であり、調査者の目的に即して、土器の整理、記述の方法は大きく異なる。言い換えれば、タイプを構成するどの属性に着目するかによって、分析方法に差異が存在するということである。このことは、形成期の土器研究に絞ってみても明らかである。たとえば、胎土に着目する研究[Ulbert 1994]、器形に着目するもの[Fung 1975] 、製作工程を重視して、胎土や装飾の組み合わせに着目するもの[加藤 1976; 鶴見 2008a]、土器と製作者集団との対応関係に着目するもの[Lumbreras 1993]など、これまで様々な方法がとられてきた。

また、出土した土器 1 点ずつ記述していく研究[Elera 1998; Shimada et al. 1982]や、タイプ分類を行わずに個別の例を器形や胎土、装飾といった各属性に即して記述していく方法もある[Burger 1984]。

上記の諸研究の共通点は、どの属性を中心として土器が分析される場合も（タイプ分類が行われる場合とそうでない場合も）、最終的には分析の中心となる属性以外の諸属性についても総合的に検討されることである。そして、対象とした土器の時期的変化や共通点、もしくは相違点を見出すことで、先行研究との比較が行われており、それぞれの研究者の目的に則した分析と解釈が施されている。

タイプ分類を行わずに、属性を詳細に検討して属性相互の関連に着目した研究は、属性分析と呼ばれ[Burger 1984; Church 1996]、複数の属性からなるタイプ分類よりも、より個々の土器の詳細な変化や属性間の比較による類似性の問題を扱うことが可能とされる[Steadman 1995]。しかし、属性分析は、扱う資料の時期ごとの属性分布頻度ではなく、属性の有無にもとづいた分析であるため、遺跡全体における傾向を示すためにはサンプリングの問題が常に生じる点に課題を残す[Steadman 1995: 51]。この意味において、土器片群中のバリエーションや差異に加えて類似性に着目することで、多量のデータを分類するタイプ分類の方が、出土した土器片を中心として、先行研究の乏しい遺跡や地域の編年を組む際には有効であると考えられる。

このような点を考慮したうえで、日本のアンデス研究では、コトシュ遺跡の発掘以来、各調査遺跡における編年の確立を目的として、タイプ分類が実施されてきた[Izumi and Terada 1966, 1972, Onuki 1995; 大貫・藤井 1974; Terada and Onuki 1982]。この分類において

は、土器の各属性の組み合わせによって区別された特性をモードとし、層位ごとのモードの組み合わせをグループ化したものがタイプとされる。そして、タイプを層位状況と照らし合わせることで、各タイプを時間軸に配列し、層位とタイプの対応に意味を見出して、時期決定の手段とするのである。ここでいうモードとは、製作者の営為を支配するある種の標準、概念、もしくは慣習であって[Rouse 1960]、土器の製作過程における製作者の選択である。そして、分析者は、分析者の選択として、その目的により、いくつかのモードを選択することで、タイプを設定する[加藤 1976]。

本章で扱うインガタンボ遺跡の土器の分類目的は、各時期の土器構成を明らかにすることを通じて、①出土土器の全体的特徴を把握すること、②編年上の位置を明確に対応させて時期ごとの差異を表すこと、③そして周辺地域の先行研究で設定された土器タイプとの比較検討を行うための基礎をつくることである。したがって、ワンカバンバ川流域の周辺地域であるペルー北部で、最も堅実なデータと編年を確立している日本のアンデス調査団の研究データを有効に活用することを念頭に、タイプ分類を実施した。

そして、第一にアンデス調査団の手法を採用して、基本的に全ての土器片を対象とし、分類の基準を明確にすること[大貫 1998]を目指した。しかし、対象とする土器片は、器面が直径 1cm 以上あるものとし、それに満たない小片や器面の摩耗が激しく、分類基準を判断できないものは除去した。そして次に、製作工程を重視して様々な属性を設定し、その組み合わせを発掘による層位データと総合させてタイプを設定する加藤、鶴見の方法論を踏襲した。とくに鶴見の方法論は、本分析の基礎となっており、出土状況に応じて適宜修正を加えながら、分析を行った。以上の作業を通じて、個々の土器片の分析だけでは認識できない、インガタンボ遺跡の土器の全体像を把握することが可能になる。また、属性の組み合わせであるタイプにおける他の遺跡との共通性や差異をみることで、遺跡間の関係を考察できると考える。

しかしながら、インガタンボ遺跡における 2 シーズンの発掘調査を通じて採取した土器資料において、出土コンテクストの確かな土器の資料数は、時期的に大く偏る。そして、時期ごとに出土する土器の量も、基壇（発掘区）ごとに大きく異なる。たとえば、層位発掘の結果として、A 基壇ではポマワカ期に対応する層からの土器が極めて少ないが、インガタンボ期の出土量は多い。その一方で、B 基壇ではポマワカ期土器の出土量が多いのに対し、インガタンボ期に対応する層は後の時代の活動によって攪乱されており、コンテクストの良好な土器は採取されていない。このため、インガタンボ遺跡では、単一の地点でポマワカ I 期からインガタンボ II 期まで連続して土器の変化を追うことのできる場所は存在しない。また、遺跡の形成過程において、古い時期の土器が新しい時期に存在することが常に起こりうる。つまり、分析に際しては、出土コンテクストと層位を重視し、建築との関連のなかで各時期に該当する資料を同定しているが、実際にはインガタンボ期の資料としたものに、それより古いポマワカ期に対応する土器が混在する可能性はある。さらに、いくつかのタイプにおいては、ポマワカ期とインガタンボ期の土器の連続性が強く、両者

を明瞭に分けることは困難である。その結果、同様の分類基準をもつタイプが、両時期においてそれぞれ別のタイプとして存在することになっている。

このような状況のなかで、単に土器を整理して記述するだけでなく、時期ごとの土器の特徴を明らかにしたうえで土器編年をうちたてるために、分析では時期ごとの土器の差異をタイプ分類に反映させることに努めた。この際に重要なのは、どの属性、ならびにタイプがどの時期から現れるか、またはどの時期に消失するか、という点である。この結果として、ポマワカ期からインガタンボ期への変化は、タイプ数の大幅な増加や、各タイプにおける装飾、器形といった属性の増加として明確に認識され、インガタンボ遺跡における時期指標となっている。

これらのことをふまえたうえで、次節では、分類の基準となる属性とその組み合わせによるタイプについて詳述していく。

5-2. 土器の属性とタイプ一覧

分析では、肉眼、またはルーペを用いて器面と断面を観察し、計測した。主として、胎土・混和材、土器の色、表面調整、装飾、器形という五つの属性を設定し、副次的な属性として器壁の厚さという基準を設けて分類にあたった。そして、分類基準を段階的に設け、さまざまな属性の組み合わせとして、タイプを設定した（表 5-1）。表中の左側の欄（胎土・混和材）は全ての土器片において観察できる基準であり、実際の分析において最初に分類される項目となっている。したがって、最も多くの土器が同様の基準で分けられるため、複数のタイプにまたがっている。そして、左側から右側の欄（装飾）に向けて進んでいくにつれ、徐々に基準が狭まり、分類の個別的要素となっていくため、土器が次第に限定されていき、個別のタイプとなる。つまり、表中の左の欄から右の欄への流れは、実際の分析に際しての作業手順と同じである。ただし、実際の分類においては、胎土・混和材と色でタイプが決定され、器壁の厚さで細分化されたものも存在する。

また、属性の組み合わせがどのタイプにも属さず、単独のタイプを設定するほどの資料数もない場合は「未分類」とした。しかし、実際の資料数が少なくとも、周辺地域の土器分析においてタイプが設定されており、比較資料として有効なものは、後の論考に備えてタイプを設けた。

設定したタイプの名称は、調査地であるペルーにおける汎用性からスペイン語での使用を考慮しつつ設定しており、各タイプにはそれぞれ時期ごとに番号を与えている。タイプには、第一に、時期ごとの混乱をさけるために、対応する時期名称の略号を先頭に付しており、ポマワカ期のタイプには PM（Pomahuaca の略）、インガタンボ期には IG（Ingatambo の略）が冠せられている。第二に、器面の色が付与されており、オレンジ色（Anaranjado）、灰色（Gris）、黒色（Negro）、白色（Blanco）、赤色（Rojo）、褐色（Marrón）を分類では使用した。この流れは概ね、土器の資料数の少ない方から多い方へという流れとなっている。第三には、表面調整の方法と種類によって、磨研（Pulido）、平滑（Alisado）、平坦（Nivelado）、

粗整形（Tosco）の四つの基準を設けた。そして第四に、必要に応じて装飾の差異を基準として属性を設け、分析にあたった。なお、表の右端に器形という属性を設け、各タイプに属する器形の一覧を示しているが、この基準はあくまで下位区分である。タイプごとの器形の出現傾向は、分析する土器の資料数に大きく左右される可能性があるため、特定タイプに限定された器形しか存在しないような場合のみ、分類基準として有効となる。

また、分析に際しては、分析者が一定のルールに従って分類を進めるために必要なシステム[鶴見 2008a]として、タイプ中に上位タイプと下位タイプという細分を設けた。上位タイプは下位タイプの基礎となるものであり、上位タイプから下位タイプを分ける要素は、装飾の属性の有無、あるいはその差異である。たとえば、インガタンボ遺跡出土土器の一タイプである PM5-1（ポマワカ期褐色平滑：PM Marrón Alisado）は、胎土・混和材と色、表面調整の組み合わせから制定された上位グループであり、そこから装飾の有無とその種類によって、PM5-2（ポマワカ期褐色平滑刻線：PM Marrón Alisado Inciso）と PM5-3（ポマワカ期褐色平滑磨線：PM Marrón Alisado L.B.[1]）という下位グループに分けられる。さらに、PM5-2 は、焼成後に顔料を塗布するかどうか、という基準で PM5-4（ポマワカ期褐色平滑刻線・ポストコクション：PM Marrón Alisado Inciso P.C.[2]）に細分化される。したがって、PM5-1（ポマワカ期褐色平滑：PM Marrón Alisado）とした上位グループには、上位グループから派生した下位グループが含まれ、全体として PM5（ポマワカ期褐色平滑：PM Marrón Alisado）という大グループとなる。この方法は、分析者の一定のルールというだけでなく、本来なら下位タイプに属する土器が、その不完全さから固有の特徴を失った際にも同じグループ中における差異として捉える事が可能であるため、土器のタイプ分類に際して、非常に有効な手段であるといえる。

[1]「L.B.」とは Linea Bruñida（磨線）の略号である。
[2]「P.C.」とは Post-cocción（ポストコクション：焼成後顔料塗布）の略号である。

表5-1 インガタンボ遺跡出土土器のタイプ分類表

タイプ名				胎土・混和剤	色	表面調整	装飾
PMタイプ1		ポマワカ期白色 (PM Blanco)		やや緻密な胎土　混和剤少　雲母少	白色(明褐色、暗褐色)	平滑、研磨	刻線　彩色(白色)
PMタイプ2	タイプ2-1	ポマワカ期赤色磨研 (PM Rojo Pulido)	(Rojo Pulido)	緻密な胎土　混和剤少　雲母少	明赤色　暗赤色	高度に研磨(摩耗部有)	
	タイプ2-2		刻線 (Rojo Pulido inciso)				刻線
	タイプ2-3		多彩色(Rojo Polícromo)				刻線　彩色(赤色、白色,紫色)
PMタイプ3	タイプ3-1	ポマワカ期赤色平滑 (PM Rojo Alisado)	(Rojo Alisado Engobe)	やや緻密な胎土　混和剤やや少　雲母少	明赤色　暗赤色	平滑(整形痕有)	外面に彩色(赤色)
	タイプ3-2		刻線 (Rojo Alisado Inciso)			平滑(整形痕有)　マット面	外面に彩色(赤色)　刻線　切込線
	タイプ3-3		磨線 (Rojo Alisado L.B.)			平滑(整形痕有)	彩色(赤色)　磨線　刻線
	タイプ3-4		赤色・白色塗彩(Rojo y Blanco)				刻線　彩色(赤色、白色)
	タイプ3-5		赤色塗彩 (Rojo Pintado)				部分的に彩色(赤色)
	タイプ3-6		赤色塗彩・刻線 (Rojo Pintado Inciso)				部分的に彩色(赤色)　刻線
PMタイプ4		ポマワカ期褐色磨研 (PM Marrón Pulido)	(Marrón Pulido)	緻密な胎土　混和剤少　雲母極少	明褐色　暗褐色	高度に研磨	刻線
PMタイプ5	タイプ5-1	ポマワカ期褐色平滑 (PM Marrón Alisado)	(Marrón Alisado)	やや緻密な胎土　混和剤やや少　雲母やや少	明褐色　暗褐色 灰褐色　赤褐色 黄褐色	平滑(整形痕有)	
	タイプ5-2		刻線 (Marró Alisado Inciso)			平滑(整形痕有)　マット面	刻線　切込線　刺突文
	タイプ5-3		刻線・ポストコクション (Marrón Alisado Inciso P.C.)	緻密な胎土　混和剤少　雲母少			刻線　切込線　ポストコクション(赤色・刻線内、赤色・区画線内)
	タイプ5-4		磨線 (Marrón Alisado L.B.)			平滑(整形痕有)	磨線
PMタイプ6	タイプ6-1	ポマワカ期褐色平坦 (PM Marrón Nivelado)	A (Marrón Nivelado A)	ややしまりの悪い胎土　混和剤やや多　雲母やや少	明褐色　暗褐色 灰褐色　赤褐色 黄褐色	平坦(整形痕有)	押圧文　刺突文　スタンプ文　貼付文 彩色(赤色)
	タイプ6-2		B (Marrón Nivelado B: Aよりも器壁が厚い)	しまりの悪い胎土　混和剤多　雲母やや少			
PMタイプ7	タイプ7-1	ポマワカ期褐色粗整形 (PM Marrón Tosco)	A (Marrón Tosco A)	ややしまりの悪い胎土　混和剤やや多　雲母やや少	明褐色　暗褐色 赤褐色　黄褐色	粗整形(整形痕・摩耗部有)	
	タイプ7-2		B (Marrón Tosco B: Aよりも器壁が厚い)	しまりの悪い胎土　混和剤多　雲母やや少			
IGタイプ1	タイプ1-1	インガタンボ期オレンジ色 (IG Anaranjado)	(Anaranjado)	極めて緻密な胎土　混和剤極少　雲母極少	オレンジ色	平滑、研磨	
	タイプ1-2		オレンジ地赤彩 (Naranja y Rojo)				彩色(明赤色、暗赤色)
IGタイプ2		インガタンボ期灰色磨研(IG Gris Fino)		極めて緻密な胎土　混和剤極少　雲母極少	灰色	高度に研磨	刻線　切込線
IGタイプ3	タイプ3-1	インガタンボ期黒色磨研 (IG Nergo Pulido)	(Negro Pulido)	緻密な胎土　混和剤少　雲母少	黒色　暗褐色 灰黒色	高度に研磨(摩耗部有)	
	タイプ3-2		刻線 (Negro Pulido Inciso)				刻線　凹線　貼付文　刺突文　塑像
	タイプ3-3		黒鉛塗布 (Negro Grafitado)				刻線　凹線　黒鉛塗布　刺突文
IGタイプ4		インガタンボ期白色(IG Blanco)		やや緻密な胎土　混和剤少　雲母少	白色(明褐色、暗褐色)	平滑、研磨	刻線　彩色(白色)
IGタイプ5	タイプ5-1	インガタンボ期赤色磨研 (IG Rojo Pulido)	(Rojo Pulido)	緻密な胎土　混和剤少　雲母少	明赤色　暗赤色	高度に研磨(摩耗部有)	
	タイプ5-2		刻線 (Rojo Pulido inciso)				刻線　切込線
	タイプ5-3		多彩色 (Rojo Polícromo)				刻線　切込線　表面線 彩色(赤、白、紫、青、黒鉛)
	タイプ5-4		黒鉛塗布 (Rojo Grafitado)				刻線　黒鉛塗布
IGタイプ6	タイプ6-1	インガタンボ期赤色平滑 (IG Rojo Alisado)	(Rojo Alisado Engobe)	やや緻密な胎土　混和剤やや少　雲母少	明赤色　暗赤色	平滑(整形痕有)	外面に彩色(赤色、白色、黒色) 刺突文　塑像
	タイプ6-2		刻線 (Rojo Alisado Inciso)			平滑(整形痕有)　マット面	外面に彩色(赤色)　刻線 切込線　刺突文
	タイプ6-3		磨線 (Rojo Alisado L.B.)			平滑(整形痕有)	彩色(赤色)　磨線
	タイプ6-4		赤色・白色塗彩 (Rojo y Blanco)				刻線　彩色(赤色、白色)
	タイプ6-5		赤色塗彩 (Rojo Pintado)				部分的に彩色(赤色)
	タイプ6-6		赤色塗彩・刻線 (Rojo Pintado Inciso)				部分的に彩色(赤色)　刻線
IGタイプ7	タイプ7-1	インガタンボ期褐色磨研 (IG Marrón Pulido)	(Marrón Pulido)	緻密な胎土　混和剤少　雲母極少	明褐色　暗褐色	高度に研磨	彩色(明赤色)
	タイプ7-2		刻線 (Marron Pulido inciso)				刻線　切込線　表面線　凹線 ロッカースタンプ文　塑像
IGタイプ8	タイプ8-1	インガタンボ期褐色平滑 (IG Marrón Alisado)	(Marrón Alisado)	やや緻密な胎土　混和剤やや多　雲母やや少	明褐色　暗褐色 灰褐色　赤褐色 黄褐色	平滑(整形痕有)	刺突文　貼付文
	タイプ8-2		刻線 (Marró Alisado Inciso)			平滑(整形痕有)　マット面	刻線　切込線　刺突文　貼付文 ロッカースタンプ文
	タイプ8-3		刻線・ポストコクション (Marrón Alisado Inciso P.C.)	緻密な胎土　混和剤やや少　雲母少			刻線　切込線　表面線 ポストコクション(赤色、黄色) ロッカースタンプ文
	タイプ8-4		磨線 (Marrón Alisado L.B.)			平滑(摩耗部有)	磨線
IGタイプ9	タイプ9-1	インガタンボ期褐色平坦 (IG Marrón Nivelado)	A (Marrón Nivelado A)	やや緻密な胎土　混和剤やや多　雲母やや少	明褐色　暗褐色 灰褐色　赤褐色 黄褐色	平坦(整形痕有)	押圧文　刺突文　貼付文 スタンプ文　彩色(暗赤色)
	タイプ9-2		A (Marrón Nivelado B: Aよりも器壁が厚い)	やや緻密な胎土　混和剤多　雲母やや少			
IGタイプ10	タイプ10-1	インガタンボ期褐色粗整形 (IG Marrón Tosco)	A (Marrón Tosco A)	やや緻密な胎土　混和剤やや多　雲母少	明褐色　暗褐色 赤褐色　黄褐色	粗整形(整形痕・摩耗部有)	
	タイプ10-2		B (Marrón Tosco B: Aよりも器壁が厚い)	やや緻密な胎土　混和剤多　雲母やや少			
IGタイプ11		未分類		やや緻密な胎土　混和剤少　雲母少	明褐色	平滑	彩色(赤色)

ポマワカ期(サブフェイズI)

タイプ	壺全般	無頸壺	短頸壺	鉢全般	半球鉢	開口半球鉢	外傾鉢	外反鉢	開口円筒鉢	コップ形	高杯	ボトル全般	鐙型ボトル
PMタイプ1						X							
タイプ2-1													
タイプ2-2													
タイプ2-3													
タイプ3-1				X								X	
タイプ3-2													
タイプ3-3						X							
タイプ3-4													
タイプ3-5			X										
タイプ3-6													
PMタイプ4													
タイプ5-1	X					X							
タイプ5-2						X							
タイプ5-3													
タイプ5-4													
タイプ6-1	X		X		X								
タイプ6-2													
タイプ7-1	X			X									
タイプ7-2													

ポマワカ期(サブフェイズII)

タイプ	壺全般	無頸壺	短頸壺	鉢全般	半球鉢	開口半球鉢	外傾鉢	外反鉢	開口円筒鉢	コップ形	高杯	ボトル全般	鐙型ボトル
PMタイプ1													
タイプ2-1													
タイプ2-2													
タイプ2-3													
タイプ3-1	X				X								
タイプ3-2					X								
タイプ3-3													
タイプ3-4													
タイプ3-5						X							
タイプ3-6													
PMタイプ4													
タイプ5-1	X					X							
タイプ5-2						X							
タイプ5-3													
タイプ5-4						X							
タイプ6-1	X		X		X								
タイプ6-2	X												
タイプ7-1	X												
タイプ7-2	X												

ポマワカ期(サブフェイズIII)

タイプ	壺全般	無頸壺	短頸壺	鉢全般	半球鉢	開口半球鉢	外傾鉢	外反鉢	開口円筒鉢	コップ形	高杯	ボトル全般	鐙型ボトル
PMタイプ1													
タイプ2-1					X							X	
タイプ2-2													
タイプ2-3													
タイプ3-1	X		X			X		X				X	
タイプ3-2						X							
タイプ3-3													
タイプ3-4						X							
タイプ3-5			X			X							
タイプ3-6						X							
PMタイプ4													
タイプ5-1	X		X			X							
タイプ5-2						X	X	X					
タイプ5-3													
タイプ5-4						X							
タイプ6-1	X		X		X								
タイプ6-2	X												
タイプ7-1	X		X	X									
タイプ7-2	X												

ポマワカ期(サブフェイズIV)

タイプ	壺全般	無頸壺	短頸壺	鉢全般	半球鉢	開口半球鉢	外傾鉢	外反鉢	開口円筒鉢	コップ形	高杯	ボトル全般	鐙型ボトル
PMタイプ1					X	X						X	
タイプ2-1					X							X	
タイプ2-2						X						X	
タイプ2-3						X							
タイプ3-1	X		X		X	X	X					X	
タイプ3-2	X				X	X							
タイプ3-3					X	X							
タイプ3-4					X	X						X	
タイプ3-5	X				X	X		X					
タイプ3-6					X	X	X	X				X	
PMタイプ4					X	X							
タイプ5-1	X		X		X	X	X					X	
タイプ5-2	X				X	X	X	X					
タイプ5-3						X							
タイプ5-4	X		X	X									
タイプ6-1	X		X		X	X						X	
タイプ6-2	X			X									
タイプ7-1	X		X	X		X							
タイプ7-2	X		X										

インガタンボ期(サブフェイズI)

タイプ	壺全般	無頸壺	短頸壺	鉢全般	半球鉢	開口半球鉢	外傾鉢	外反鉢	開口円筒鉢	コップ形	高杯	ボトル全般	鐙型ボトル
タイプ1-1					X								
タイプ1-2					X								
IGタイプ2					X							X	X
タイプ3-1					X	X						X	
タイプ3-2					X							X	
タイプ3-3												X	
IGタイプ4				X									
タイプ5-1						X						X	
タイプ5-2													
タイプ5-3					X	X	X	X				X	
タイプ5-4					X	X							
タイプ6-1	X		X		X	X	X	X				X	
タイプ6-2	X					X							
タイプ6-3													
タイプ6-4					X	X		X					
タイプ6-5	X				X	X						X	
タイプ6-6					X	X							
タイプ7-1					X	X						X	
タイプ7-2					X								
タイプ8-1	X	X	X		X	X			X			X	X
タイプ8-2	X				X	X							
タイプ8-3					X	X			X				
タイプ8-4	X				X	X							
タイプ9-1	X		X		X	X							
タイプ9-2	X			X		X							
タイプ10-1	X		X		X	X							
タイプ10-2	X		X			X							
IGタイプ11					X								

インガタンボ期(サブフェイズII)

タイプ	壺全般	無頸壺	短頸壺	鉢全般	半球鉢	開口半球鉢	外傾鉢	外反鉢	開口円筒鉢	コップ形	高杯	ボトル全般	鐙型ボトル
タイプ1-1					X	X							
タイプ1-2					X							X	
IGタイプ2					X							X	X
タイプ3-1					X	X				X		X	X
タイプ3-2					X	X				X			
タイプ3-3					X	X						X	
IGタイプ4				X									
タイプ5-1					X	X		X				X	X
タイプ5-2						X							
タイプ5-3					X	X		X				X	
タイプ5-4					X	X						X	
タイプ6-1	X		X		X	X	X	X			X	X	
タイプ6-2	X				X	X		X				X	
タイプ6-3						X							
タイプ6-4						X							
タイプ6-5	X		X		X	X	X	X				X	X
タイプ6-6					X	X		X				X	
タイプ7-1					X	X						X	
タイプ7-2						X						X	
タイプ8-1	X		X		X	X		X	X			X	X
タイプ8-2	X				X	X	X	X				X	
タイプ8-3					X	X	X	X				X	
タイプ8-4	X				X	X		X					
タイプ9-1	X		X		X	X						X	
タイプ9-2	X		X	X		X							
タイプ10-1	X		X		X	X		X					
タイプ10-2	X		X			X							
IGタイプ11					X								

5-3. 属性の基準と分類

分析の基準となった属性を、①胎土・混和材、②色、③表面調整、④装飾、⑤器形の順に記述し、その基準を明確にする。

5-3-1. 胎土・混和材

胎土とは、土器の素地である。胎土には単に粘土だけでなく、粘性を調節し、可塑性を高めて、ひび割れを防ぐために様々な種類の混和材が加えられる場合が多い。混和材の種類は、ある特定のタイプのみに使用される場合も認められるなど、製作時の目的に即して選択されるものであると考えられる。胎土と混和材は全ての土器でみることが可能な属性であり、分類の基礎となるものである。しかし、逆にいえば、その一般的な性質のため、化学的な分析に頼らない観察だけでは、タイプを決定する明確な基準とすることは困難である。

インガタンボ遺跡の出土土器に関していえば、胎土と混和材のみで、タイプ分類の基準として有効であるのは、胎土が緻密で混和材をほとんど含まない IG タイプ 1 と IG タイプ 2 である。また、器壁の厚さという第六の副次的属性を考慮した場合、ポマワカ期とインガタンボ期から共通して出土する、胎土がもろく、混和材を多量に含む PM タイプ 6 と PM タイプ 7、IG タイプ 9 と IG タイプ 10 が、その他のタイプと識別可能である。

5-3-2. 色

第二の属性である色とは、土器の外面、および内面の色である。表面の摩耗が激しい場合には認識が困難であり、同じ色、たとえば褐色、と分類されたとしても暗褐色、明褐色などといったように、実際にはかなり多様性がある。

色は、胎土自体が焼成によって発色したものと、塗彩によるものに大別される。そして、後者はさらにプレコクション（焼成前塗彩）とポストコクション（焼成後塗彩）に分けられる。プレコクションとはスリップ（泥しょう）を器面に塗布するもの、ポストコクションは焼成後に顔料を塗布するものである。これらの塗彩法については、後述する装飾の属性に含まれるため、ここでは器面の色のみを対象とする。また、焼成技術によっても器面の色は変化し、焼成時に酸素が供給された場合には（酸化焼成）赤色などの明るい色になり、酸素があまり供給されない場合（還元焼成）には黒色などの暗い発色となる。

器面の色は、粘土を水に溶かしたスリップの色や、スリップがない場合は胎土の色から決定されている。属性として使用された色は、オレンジ色（Anaranjado）、灰色（Gris）、黒色（Negro）、白色（Blanco）、赤色（Rojo）、褐色（Marrón）である。土器のなかには、2 色以上の色が存在する場合があるが、この場合は他地域の先行研究との関連から、装飾の属性として分析している。

5-3-3. 表面調整

一般的に、調整とは土器の製作工程において形を整えていく一連の過程を指す。ここでいう第三の属性である表面調整とは、そのなかでもとくに全体的な形を作り上げた後に器面を整えたり、細部のつくりを念入りに行う仕上げである。

分析に際しては、とくに土器の器壁外面を重点的に分析し、器面の調整法を磨研（Pulido）、平滑（Alisado）、平坦（Nivelado）、粗整形（Tosco）に分類した[鶴見 2008a]。これらに加えて、器面にマット面とよばれるざらついた面を、あえて装飾的に残す、もしくはつくる場合もある。このマット面は、器面全体でなく、部分的に施されるため、ここでは装飾の一部として捉える。そして、絶対数が少なく、分類の基準とはならないことから、必要に応じて記述していく。

（１）磨研（Pulido）

高度な研磨によって、器面が均質に均されており、光沢を持つもので、一部の鉢やボトルにみられる。なかには、金属的な光沢を持つものもある。

（２）平滑（Alisado）

器面は均質に均されており、軽度に研磨されているが、やや調整痕が残っているため、全体として均質な光沢を持たないものである。大部分は、鉢やボトルにみられるが、壺などにみられる場合もある。

（３）平坦（Nivelado）

器面はやや不均質で、調整痕などが明確に残っているなど、やや粗い整形が施されたものである。平滑と後述する粗整形の中間的様相を示し、とくに壺などの大型土器に多くみられる。

（４）粗整形（Tosco）

器面は不均質で、調整痕に加えて凹凸やひび割れなど、非常に粗い整形のみが施されたものである。壺、とくに大型のものに多い。

5-3-4. 装飾

出土資料の大半は無文の土器片であり、装飾のあるものは少ない。しかし、装飾の方法は多様、かつ特徴的であるため、タイプ分類に適した属性といえる。以下、分類の属性となった装飾の技法について記述する。

（1）彩色

①スリップ

器面全体、もしくは部分的にスリップがかけられ、彩色されたものである。赤色、白色、紫色、青色などが確認されている。単色のものだけではなく、複数の色が組み合わされたものも存在する。

②ポストコクション（Post-cocción: 略号 P.C.）

スリップとは異なり、焼成後に顔料を塗布し、彩色が施されるものである。インガタンボ遺跡の例では、刻線の内部に彩色される例が多い。また、刻線内や器面に黒鉛を塗布する事例もある。

（2）刻線

器面に線を刻む装飾で、線の刻み方に応じて以下のように分類した。

①刻線（Inciso）

器面に幅 0.1cm 程度の線を刻んだものである。

②切込線（Inciso Cortante）

焼成前の器面が柔らかいうちに線を刻んだと考えられるもので、線の両側や交点の土が盛り上がっているものである。

③表面線（Inciso Superficial）

器面に鋭利な施文具で、幅 0.1cm 以下の細い線をひっかくように刻んだものである。

④凹線（Inciso Brillante）

先端が太く、鈍い施文具で、幅 0.3cm 程度の線を刻んだものである。刻線の内部は滑らかに均されており、光沢を持つ場合もある。

⑤磨線（Linea Bruñida：略号 L.B.）

表面調整の際に、部分的に強く磨かれることで、研磨箇所が個別の線として表れたものである。

（3）刺突

器面に施文具を押し付け、くぼみを造る装飾である。施文具、あるいはその使い方によって、以下の通りに細分される。

①押圧文

指や施文具を使い、器面を押し込んで、くぼみをもたせたものである。

②刺突文

棒状の施文具を器面に刺すように使うことで、輪郭のはっきりした点やくぼみを施したものである。

③スタンプ文

先のとがっていない施文具を押し付けて、文様を施したものである。インガタンボ遺跡の例では、方形や半円、円形状のものが確認される。

④ロッカースタンプ文

貝殻やヘラのように、先端が点ではなく、線となっている施文具をゆらすように交互に動かして、連続したジグザグの線をつくりだすものである。

（4）貼付

器面に様々な形態の粘土を貼り付けて装飾とするものである。

（5）塑像

器面自体の形に手を加えて、立体的に像をつくったものである。

5-3-5. 器形

出土資料の大半は無文の胴部破片であるが、口縁部破片や注口部破片などの形状から、器形を同定することが可能である。器形とは機能差にもとづいた属性であり、形状と出土状況から、もしくは類似した器形を有する他の時代や地域の事例と比較するなどして、その用途を推定する場合もある。ただし、類似した器形が全て同じ用途に用いられたかどうかは明らかではないため、器形のみでその問題を取り上げるのは困難である。

器形は壺、鉢、ボトルに大別され、その後、口縁部や器壁の形状などにより、細分化された。また、特定タイプと器形に相関がある場合には、タイプ分類の基準の一つとした。以下、分類の属性となった器形について記述する。

（1）壺

比較的大型で器壁が厚い土器で､ふくらみのある胴部にすぼまった頚部がつく有頚壺と、頚部のない無頚壺に分けられる。主として貯蔵や調理に用いられたと考えられ、つくりの粗いものが多い。

①無頚壺

頚部を持たない壺で、形状は球体の上部を切ったように丸みを帯びたものである。

②短頚壺

頚部の短い壺である。頚部の高さまではわからないことが多いが、有頚壺のなかで、口径が胴部径と比べて小さいものである。

（2）鉢

口径に比べて深さが浅い土器である。底部から口縁、または口縁に近い胴部上方に向けて開き、壺よりも丁寧に作られ、特徴的な装飾を施されているものが多い。主として盛り付けなどに用いられたと考えられる。

①半球鉢

器壁のほとんどが曲面となる半球形から球形に近い鉢で、口縁がすぼまるものである。最大径は口縁に近い胴部上方にあり、小型で器壁の薄い無頚壺の様相を呈するものもみられる。後述する開口半球鉢と比べて、閉じた器形であるため、器壁内面の整形が粗い場合が多い。

②開口半球鉢

半球鉢の口縁部が垂直に立ちあがるか、もしくは開いているものである。最大径は口縁部となる。

③外傾鉢

器壁全体が外側に向かってまっすぐに開くもので、器壁は直線的である。最大径は口縁部となる。

④外反鉢

器壁全体が外側に向かって反り返るように開くものである。最大径は口縁部となる。

⑤開口円筒鉢

器壁はほぼ垂直に立ちあがり、口縁部のみが外側に向かって開くものである。後述するコップ形との差異は、器高と器径がほとんど変わらないか、径の方が大きいことである。インガタンボ遺跡の発掘資料には含まれないが、器壁が胴部中央部から口縁部にかけて大きく外傾して開く朝顔鉢との差異は、胴部形状に帰せられる。

（3）ボトル

胴部から急激にすぼまった頚部（注口部）が細長く伸びて口縁部に至るものである。口径が狭く、閉じた器形であるため、内面の調整が困難で、鉢に比べて内面の調整が粗い。鉢と同様に、一般的につくりは壺に比べて丁寧で、特徴的な装飾があるものが多く、胴部の径は小さい。主として液体を入れていたと考えられる。注口部の形状によって、大きく二つに分類される。

①長頚ボトル

胴部から一本の注口部が口縁部まで伸びるものである。本論では、単にボトルとして表記する。

②鐙形ボトル

胴部から 2 本の注口部が伸びて、上方で合わさり、一つの注口となって口縁部に至るものである。注口部の形状が馬具の鐙に似ていることから、この名が冠せられた。

（4） その他

①コップ形

器壁がほぼ垂直に立ちあがるか、胴部のなかほどがやや内面に屈曲する。鉢と比べて口径が狭く、底部から口縁までの径はほぼ変わらない。口縁部がやや外側に広がり、取っ手が付くものもある。

②高坏

鉢形を呈する上部と脚台の下部からなる器形である。脚台、または脚台と胴部の接合部から特定される。用途は、主として、料理などの盛り付け用であったと考えられる。

5-4. ポマワカ期の土器タイプ

前節までに述べた属性の組み合わせによって、ポマワカ期の土器は 7 つの上位タイプと 20 の下位タイプに分類された。以下、分類された各タイプについて記述する。また、ポマワカ期だけでなくインガタンボ期の土器に関しても、タイプごとに周辺地域の事例との比較を行うが、地域ごとの土器の出典は以下の通りである。

1. エクアドル南部山地

カタマヨ複合[Guffroy 2004]

2. ペルー極北部海岸

トゥンベス川流域[Izumi and Terada 1966]、ピウラ川とチラ川流域[Lanning 1963]、中流域のセロ・ニャニャニケ遺跡とロマ・マカンチェ遺跡[Guffroy 1989, 1992, 1994;

Kaulicke 1998]

3. ペルー北部熱帯低地

セレサル遺跡とミチナル遺跡[Miasta 1979]、トメペンダ遺跡[Olivera 1993, 1998]、バグア複合[Shady 1973, 1974, 1987, 1992, 2002; Shady and Rosas 1979]

4. ペルー北部山地

パコパンパ複合[Flores 1975, 2005; Fung 1975, 2005; Kaulicke 1975, 2005a, 2005b; Morales 1980, 1998, 2005; Rosas and Shady 1970, 2005; 関 2010]、ラ・グランハ遺跡[Wester et al. 2000]、ポロポロ遺跡[Alva 1988b]、ワカロマ遺跡とライソン遺跡[Terada and Onuki eds. 1982, 1985, 1988]、セロ・ブランコ遺跡とクントゥル・ワシ遺跡[井口 2002a, 2007; Onuki ed. 1995]

5. ペルー北部海岸中流域

アマカス複合[鶴見 2008a]

6. ペルー北部海岸

ワカ・ルシーア遺跡[Shimada et al. 1982]、モロ・デ・エテン遺跡[Elera 1986, 1997]、プルレン遺跡[Alva 1988a]、プエマペ遺跡[Elera 1998]

5-4-1. PM タイプ 1（ポマワカ期白色：PM Blanco）

器面に白色スリップを塗布した土器で、つくりの良い鉢とボトルからなるタイプである。

①胎土・混和材

硬くしまっているが、後述する高度に研磨された土器と比べると、わずかに胎土が粗い。混和材は細かい砂を主体としており、粒子の直径は 1mm 以下で、雲母も少ない。

②色

スリップが塗布された部分は白色～灰色で、それ以外の地の部分や刻線内部は明褐色～暗褐色を呈する。

③表面調整

器壁外面は平滑、または研磨されており、器壁内面は平滑化されている。閉じた器形の場合は、器壁外面に比べて器壁内面の整形がやや粗い。

④装飾

白色塗彩が施されるだけの事例に加えて、刻線で幾何学文が施文された例もみられる。

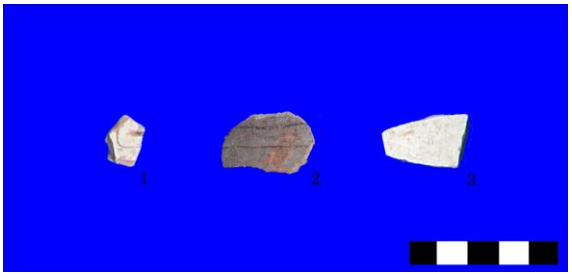
⑤その他

土器表面に白色スリップが塗布された事例は、ペルー北部山地一帯に類例がみられる。具体的には、極北部海岸中流域のセロ・ニャニャニケ、北部熱帯低地のバグア複合、ペルー北部山地のパコパンパ複合、ラ・グランハ複合、ワカロマ、クントゥル・ワシ、北部海岸のワカ・ルシーア、北部中流域のアマカス複合などで出土が認められる。刻線で幾何学文が施される事例が多い。

なお、後述するインガタンボ期にみられる同タイプの土器には、刻線の有無によって下位タイプを設けたが、ここでは出土量が極度に少ないため、細分化せずに PM タイプ 1 として一括している。

器形 1：半球鉢

装飾は刻線で平行線や幾何学文が施されている。



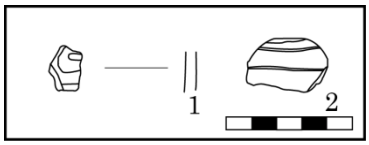
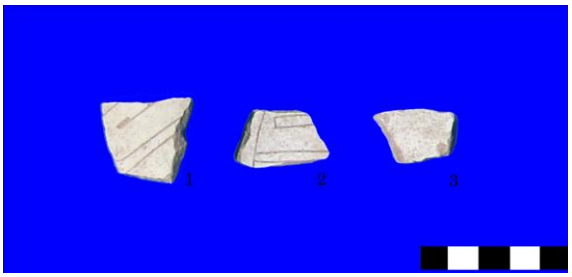


写真 5-1　PM タイプ 1 半球鉢（左）

図 5-1　PM タイプ 1 半球鉢（上）

器形 2：開口半球鉢

装飾は刻線で幾何学文が描かれる。



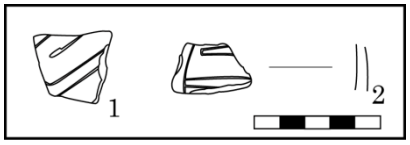


写真 5-2　PM タイプ 1 開口半球鉢（左）

図 5-2　PM タイプ 1 開口半球鉢（上）

器形 3：ボトル

1 点の無文の胴部破片が確認されるのみである。

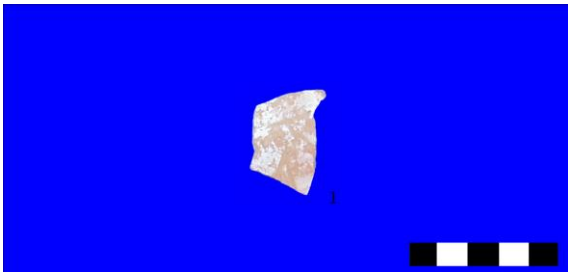


写真 5-3　PM タイプ 1 ボトル

5-4-2.　PM タイプ 2（ポマワカ期赤色磨研：PM Rojo Pulido）

赤色スリップが塗布された器面を持つ、つくりの良い鉢とボトルからなるタイプである。装飾の有無、あるいはその種類によって、上位タイプである PM タイプ 2-1（ポマワカ期赤色磨研：PM Rojo Pulido）と下位タイプである PM タイプ 2-2（ポマワカ期赤色磨研刻線：PM Rojo Pulido Inciso）、ならびに PM タイプ 2-3（ポマワカ期赤色磨研多彩色：PM Rojo Pulido

Polícromo）に分かれる。

（1）PM タイプ 2-1（ポマワカ期赤色磨研：PM Rojo Pulido）

①胎土・混和材

硬くしまった緻密な胎土である。混和材は細かい砂を主体としており、粒子の直径は 1mm 以下で、雲母も少ない。

②色

スリップがかけられた部分は明赤色～暗赤色を呈し、鉢の場合は内面にもスリップが塗布されている。

③表面調整

スリップがかけられた器壁は高度に研磨されている。部分的に摩耗もみられる。閉じた器形の場合は、器壁外面に比べて器壁内面の整形がやや粗い。

④装飾

赤色スリップが塗布される。

⑤その他

器面に赤色スリップが塗布され、研磨された事例は、ペルー北部山地のパコパンパ複合、ラ・グランハ複合、ワカロマ、クントゥル・ワシ、北部海岸のワカ・ルシーアやプルレン、北部中流域のアマカス複合、北部熱帯低地のトメペンダやセレサル、ミチナルなどで認められる。また、明確には確認できないが、極北部海岸中流域のセロ・ニャニャニケや北部熱帯低地のバグア複合にも類例が存在する可能性がある。

器形 1：半球鉢

全体的に閉じた器形を持つものに加えて、口縁部のみが内側にすぼまる事例がみられる。口縁部形状は、内側に肥厚するものや、やや内側に切れるものが確認されている。口唇部は丸みを帯びている。

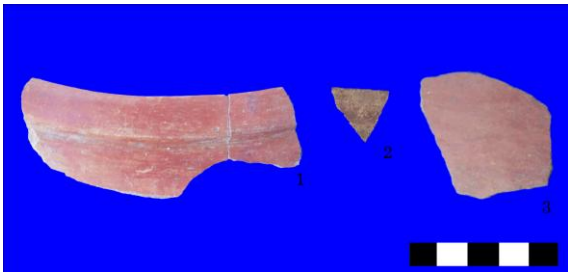


写真 5-4　PM タイプ 2-1 半球鉢

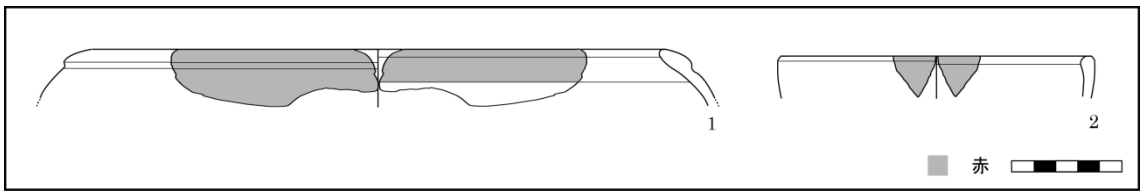
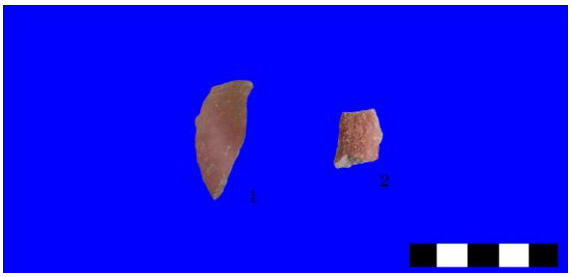


図 5-3　PM タイプ 2-1 半球鉢

器形 2：ボトル

口縁部はやや内側に切れており、口唇部は丸みを帯びている。



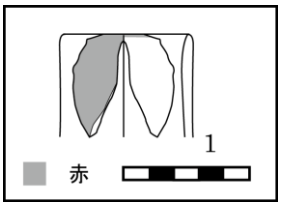


写真 5-5　PM タイプ 2-1 ボトル（左）

図 5-4　PM タイプ 2-1 ボトル（上）

（2）　PM タイプ 2-2（ポマワカ期赤色磨研刻線：PM Rojo Pulido Inciso）

①胎土・混和材、②色、③表面調整

PM タイプ 2-1 と同じである。

④装飾

刻線で幾何学文が施文される。

⑤その他

先述した PM タイプ 2-1 と同様の地域で類例がみられる。

器形 1：開口半球鉢

口縁部が先細りするものが確認されている。装飾は、刻線や平行線などで区画された範囲内に、平行斜線が描かれた事例がみられる。

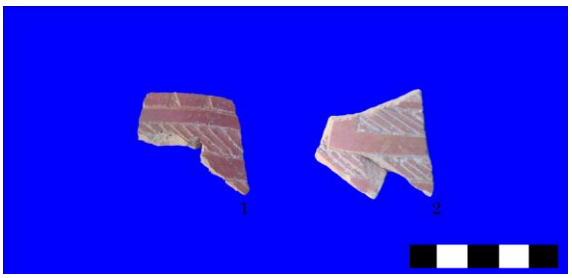


写真 5-6　PM タイプ 2-2 開口半球鉢

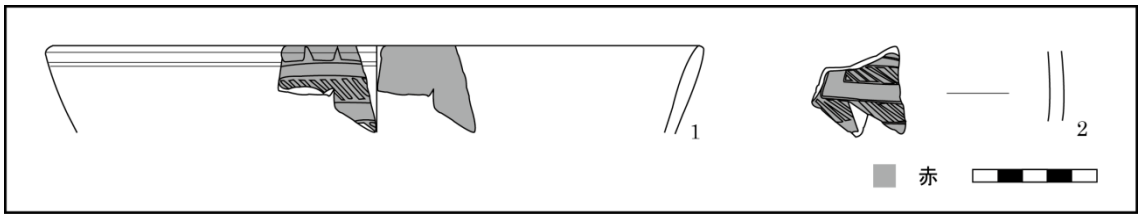


図 5-5　PM タイプ 2-2 開口半球鉢

器形 2：ボトル

胴部破片だけが確認されている。

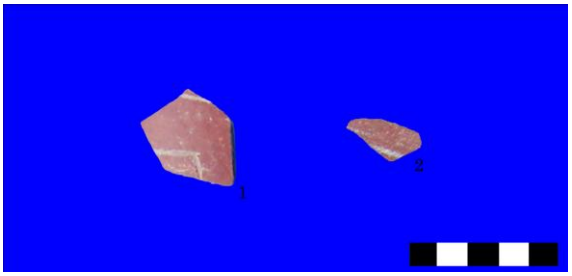


写真 5-7　PM タイプ 2-2 ボトル

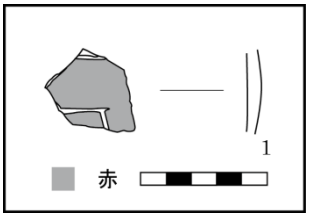


図 5-6　　PM タイプ 2-2 ボトル

（3）　PM タイプ 2-3（ポマワカ期赤色磨研多彩色：PM Rojo Polícromo）

①胎土・混和材

PM タイプ 2-1 と同じである。

②色

明赤色～暗赤色の赤色と白色、紫色、黒色で塗彩されている。白色顔料は、赤色部分に塗り重ねられる場合がある。

③表面調整

PM タイプ 2-1 と同じである。

④装飾

刻線を用いて区画された範囲に赤色、白色、紫色、黒色の塗彩が塗り分けられる。

⑤その他

ペルー極北部と北部を中心に分布し、極北部海岸中流域のセロ・ニャニャニケや北部熱帯低地のトメペンダ、セレサルとミチナル、バグア複合、北部山地のパコパンパ複合、セロ・ブランコ、北部中流域のアマカス複合、北部海岸のワカ・ルシーアに類例がみられる。極北部海岸中流域のセロ・ニャニャニケや北部熱帯低地のバグア複合では、刻線による区画がなく、器面に直接塗彩が施される事例が存在する。

器形 1：開口半球鉢

胴部破片のみ確認されている。刻線で区画された範囲内が赤色、白色、紫色、黒色で塗彩される。

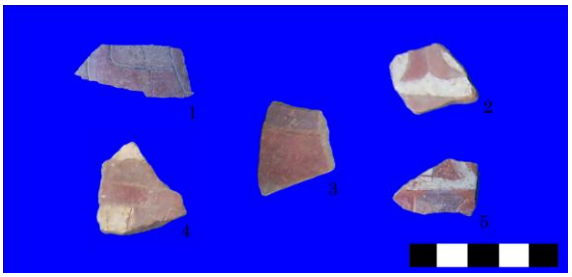


写真 5-8　PM タイプ 2-3 開口半球鉢

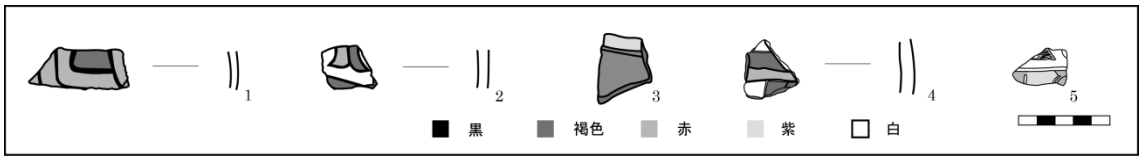


図 5-7　PM タイプ 2-3 開口半球鉢

5-4-3.　PM タイプ 3（ポマワカ期赤色平滑：PM Rojo Alisado）

赤色の器面を持つ、ややつくりの良い土器からなるタイプである。装飾の有無、またはその種類によって、上位タイプである PM タイプ 3 と、五つの下位タイプ（PM タイプ 3-2~3-5）に分けられる。

（1）　PM タイプ 3-1（ポマワカ期赤色平滑：PM Rojo Alisado）

①胎土・混和材

硬くしまっているが、既述の PM タイプ 2 と比して、やや粗い胎土である。混和材は細かい砂を主体としており、粒子の直径は 1mm 以下である。

②色

明赤色～暗赤色を呈する。

③表面調整

全体的に平滑であるが、筋状の整形痕が残っている場合がある。閉じた器形の場合は、器壁外面に比べて器壁内面の整形が粗い。

④装飾

赤色スリップが塗布されている。

⑤その他

エクアドル南部やペルー北部一帯の広い範囲で類例がみられる。

器形 1：短頚壺

口縁部が外側に張り出す器形と外反する器形が確認されている。口唇部は丸みを帯びている。

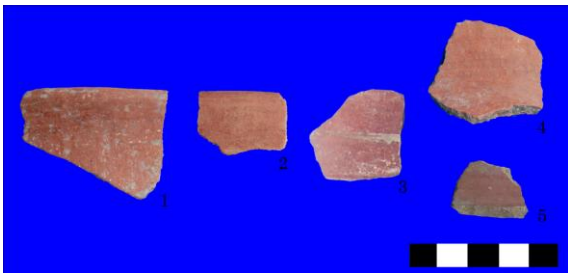


写真 5-9　PM タイプ 3-1 短頚壺

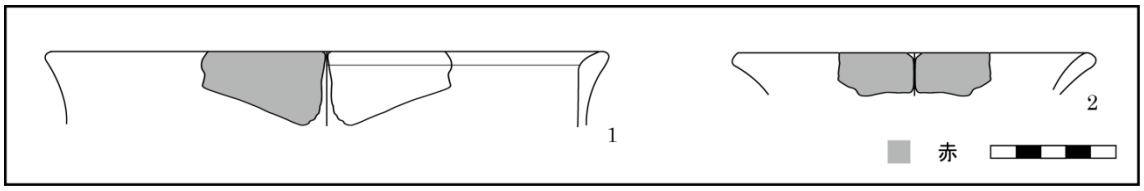


図 5-8　PM タイプ 3-1 短頚壺

器形 2：半球鉢

小型の無頚壺のような形状を呈する器形が確認されている。口縁部はやや先細りするものや、わずかに肥厚するものがみられる。口唇部は丸みを帯びるか、平らにならされている。

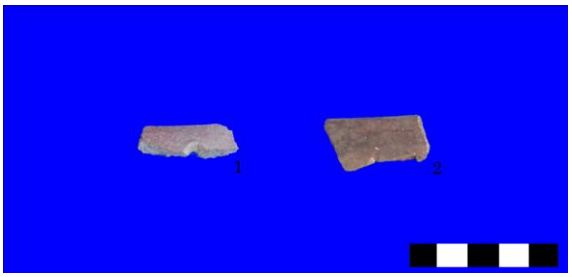


写真 5-10　PM タイプ 3-1 半球鉢

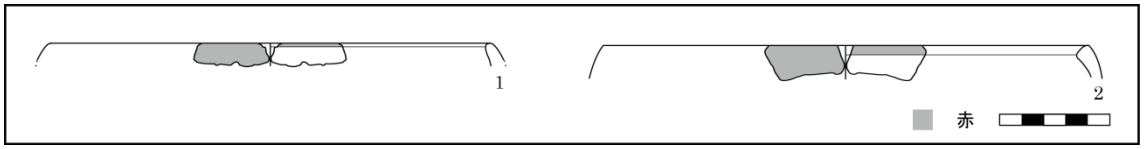


図 5-9　PM タイプ 3-1 半球鉢

器形 3：開口半球鉢

口縁部がやや外傾するものが確認されている。口唇部は丸みを帯びるか、やや外側に切れる。

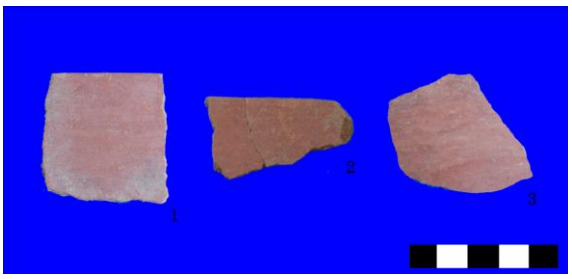


写真 5-11　PM タイプ 3-1 開口半球鉢

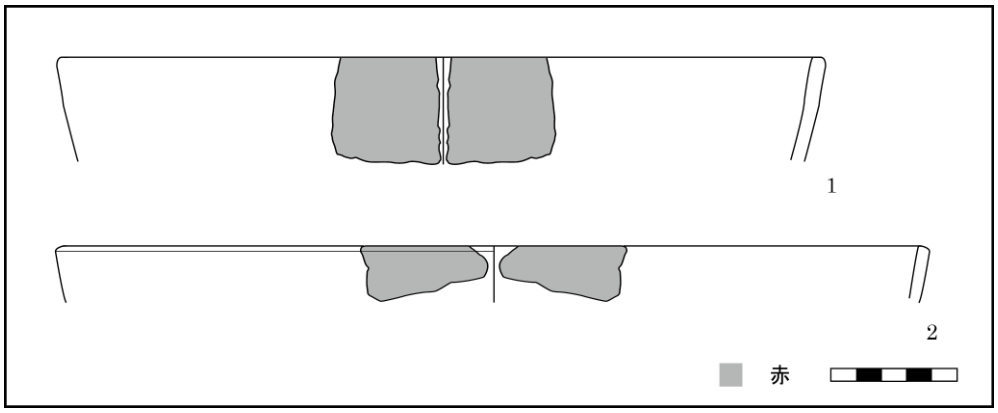


図 5-10　PM タイプ 3-1 開口半球鉢

器形 4：外傾鉢

口縁部はやや内側に切れており、口唇部が丸みを帯びたものが確認されている。

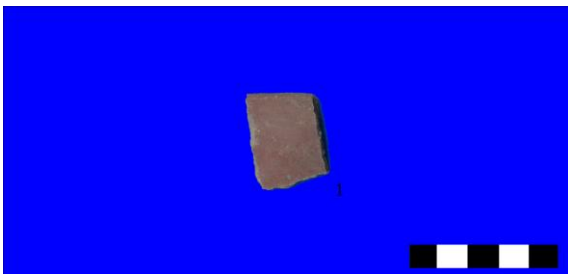


写真 5-12　PM タイプ 3-1 外傾鉢

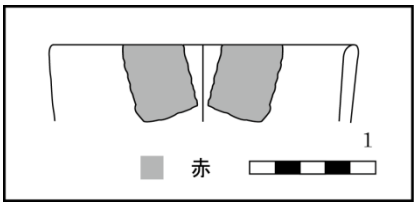


図 5-11　PM タイプ 3-1 外傾鉢

器形 5：外反鉢

口縁部はやや内側に切れる。口唇部は丸みを帯びるか、鋭い。

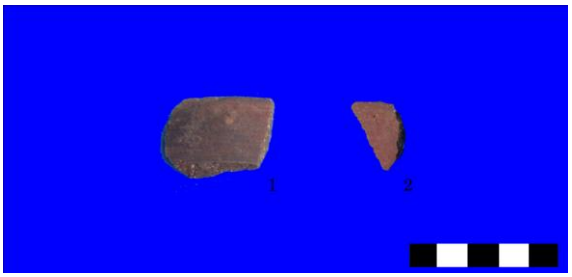


写真 5-13　PM タイプ 3-1 外反鉢

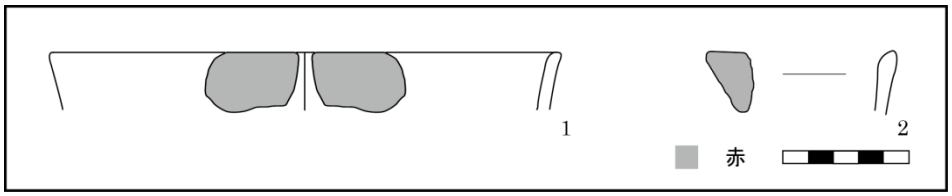


図 5-12　PM タイプ 3-1 外反鉢

器形 6：ボトル

胴部破片のみが確認されている。

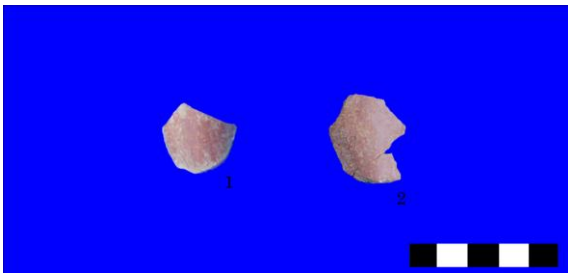


写真 5-14　PM タイプ 3-1 ボトル

（2） PM タイプ 3-2（ポマワカ期赤色平滑刻線：PM Rojo Alisado Inciso）

①胎土・混和材、②色、③表面調整

PM タイプ 3-1 と同じである。

④装飾

刻線や切込線で幾何学文が描かれる。刻線で文様帯をつくり、装飾が施される場合もある。文様帯内部がマット面となっているものもある。

⑤その他

PM タイプ 3-1 と同様の広い範囲で類例がみられる。

器形 1：壺

胴部破片のみ確認されている。

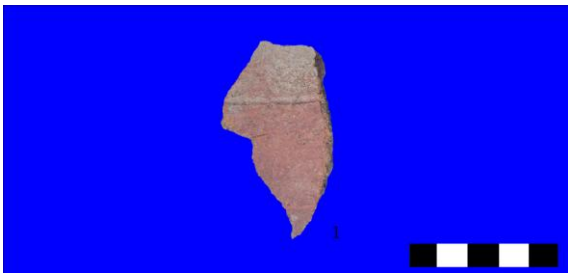


写真 5-15　PM タイプ 3-2 壺

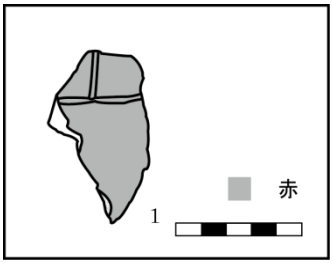


図 5-13　PM タイプ 3-2 壺

器形 2：半球鉢

胴部破片のみ確認されており、器壁外面に刻線で幾何学文が施される。

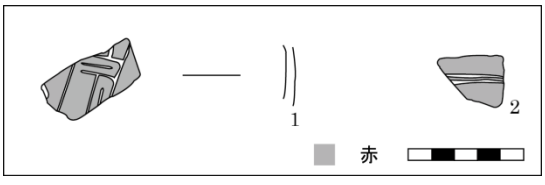


写真 5-16　PM タイプ 3-2 半球鉢（左）

図 5-14　PM タイプ 3-2 半球鉢（上）

器形 3：開口半球鉢

口縁部は、丸みを帯びたものや先細りするもの、もしくはわずかに内側に切れるものや変形口縁など多様性がみられる。口唇部は丸みを帯びるものが大半であるが、鋭くなるものも確認されている。装飾は、刻線や切込線で平行線や平行斜線、幾何学文などが施される。また、平行線などで区画された範囲内に斜線などの装飾が組みあわされた事例や、マット面に渦巻文が施された事例も確認される。

写真 5-17　PM タイプ 3-2 開口半球鉢

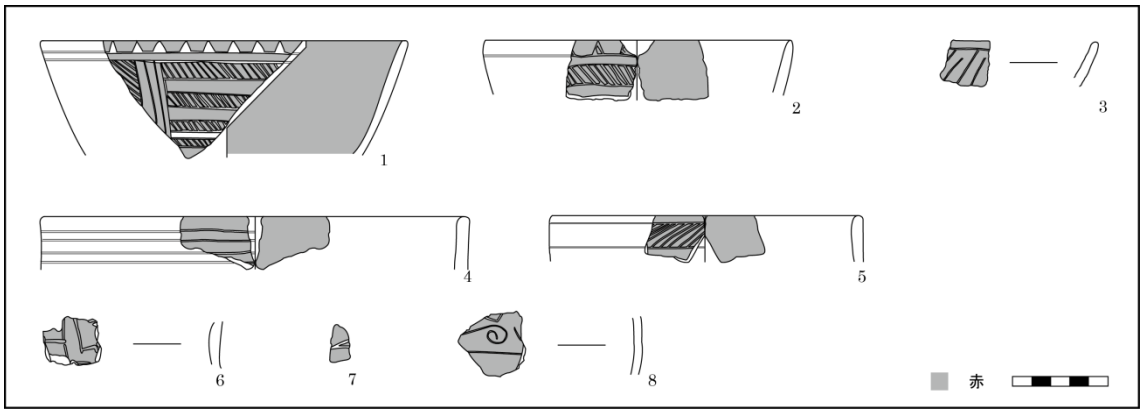


図 5-15　PM タイプ 3-2 開口半球鉢

（3）PM タイプ 3-3（ポマワカ期赤色平滑磨線：PM Rojo Alisado Linea Bruñida）

①胎土・混和材、②色、③表面調整

PM タイプ 3-1 と同じである。

④装飾

器壁外面に磨線が施されるものと、磨線と刻線の双方で施文される事例がある。

⑤その他

ペルー北部熱帯低地のセレサルやミチナル、北部山地のパコパンパ複合、ワカロマ、クントゥル・ワシやヘケテペケ川中流域のアマカス複合に類例がみられる。ただし、器壁外面に刻線と磨線が同時に施される例は、周辺地域には認められず、インガタンボ特有のものである。

器形 1：半球鉢

口縁部は、軽く内側に湾曲するか、外側に肥厚するものが確認されている。口唇部は、丸みを帯びたものがみられる。器壁外面に刻線が施されて区画された範囲がマット面となり、その部分に磨線で平行斜線が描かれる。

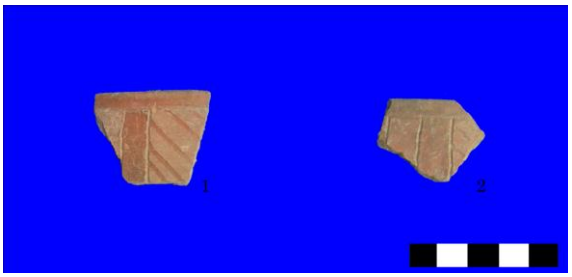


写真 5-18　PM タイプ 3-3 半球鉢

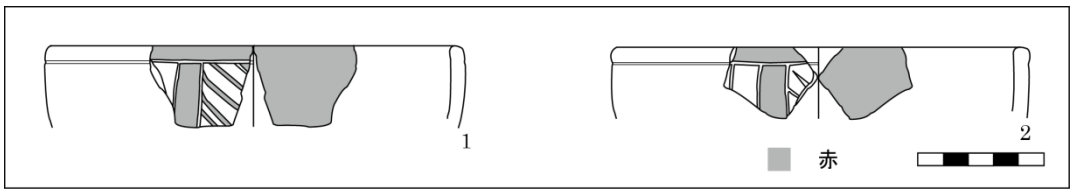


図 5-16　PM タイプ 3-3 半球鉢

器形 2：開口半球鉢

刻線を伴わず、器壁外面に磨線で平行線や格子が描かれる。

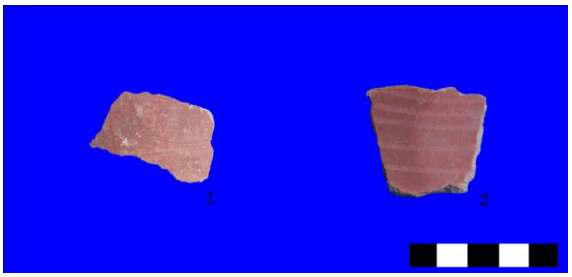


写真 5-19　PM タイプ 3-3 開口半球鉢

（4）PM タイプ 3-4（ポマワカ期赤色・白色塗彩：PM Rojo y Blanco）

①胎土・混和材

PM タイプ 3-1 と同じである。

②色

明赤色～暗赤色の赤色部分と白色～灰白色の白色部分の塗り分けがみられる。

③表面調整

PM タイプ 3-1 と同じであるが、部分的に研磨されている部分もある。

④装飾

基本的には赤色スリップの上に白色塗彩が施される。また、刻線で赤色部分と白色部分を区画したものや、白色部分に刻線で幾何学文が描かれる事例もある。

⑤その他

ペルー極北部海岸のセロ・ニャニャニケ、北部熱帯低地のバグア複合、トメペンダ、ミチナル、セレサル、北部山地のパコパンパ複合、ワカロマ、セロ・ブランコ、クントゥル・ワシ、北部中流域のアマカス複合に類例がみられる。

器形 1：半球鉢

口縁部には多様性があり、内側に肥厚するものや全体的に肥厚するもの、あるいは内側に軽く切れるものが確認されている。口唇部は丸みを帯びている。装飾については、器壁外面の口縁部下と胴部に、平行に刻線を入れて文様帯をつくり、白色塗彩が施される。白色塗彩が施された部分はマット面を呈するが、その部分に刻線で平行線や三角形状、幾何学文や圏点文などの文様が描かれる。

写真 5-20　PM タイプ 3-4 半球鉢

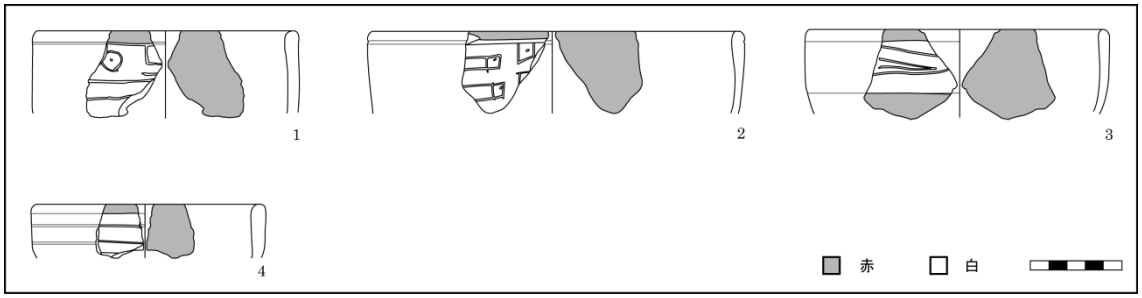


図 5-17　PM タイプ 3-4 半球鉢

器形 2：開口半球鉢

口縁部形状として、外側や内側に肥厚するもの、先細りするもの、軽く外側に切れるものが確認されている。口唇部は、丸みを帯びたものが大半であるが、やや鋭くなっているものもみられる。装飾は、半球鉢と同様に刻線で区画された範囲に白色塗彩が施され、その部分に刻線で文様が描かれる。刻線による装飾は幾何学文が中心であるが、渦巻文や斜線、平行線の組み合わせなどによって細かい装飾が施されたものも認められる。

写真 5-21　PM タイプ 3-4 開口半球鉢

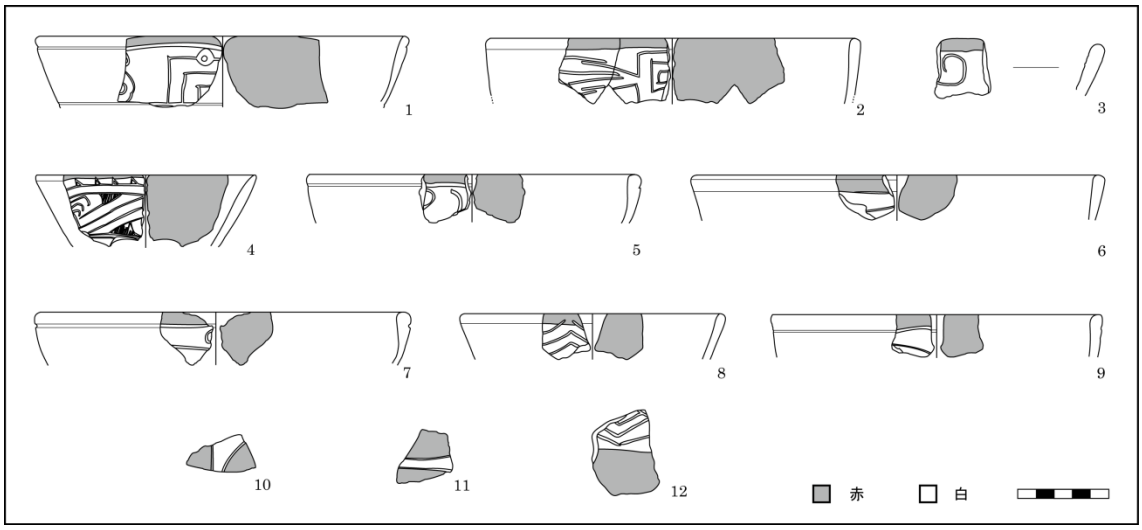


図 5-18　PM タイプ 3-4 開口半球鉢

器形 3：ボトル

胴部破片のみ確認されている。施文された装飾は器形 1 や器形 2 と同じである。

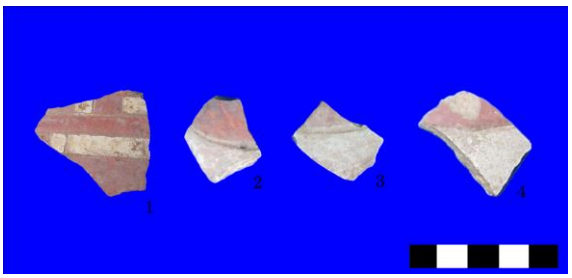


写真 5-22　PM タイプ 3-4 ボトル

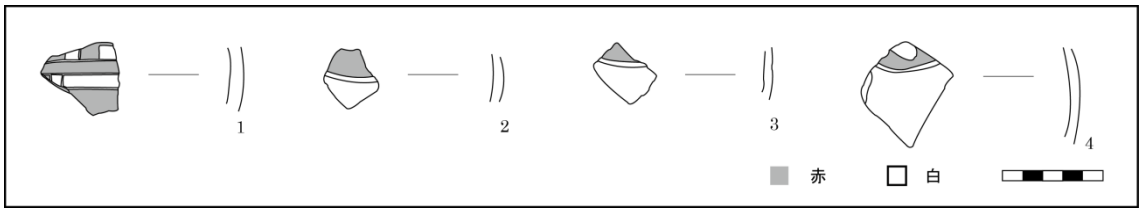


図 5-19　PM タイプ 3-4 ボトル

（5）　PM3-5（ポマワカ期赤色塗彩：PM Rojo Pintado）

①胎土・混和材

PM タイプ 3-1 と同じである。

②色

器壁内面から外面の口縁部にかけて赤色スリップが塗布される。それ以外の部分は明褐色～暗褐色の地の色が表出している。

③表面調整

基本的に PM タイプ 3-1 と同じであるが、地の部分が平坦の場合がある。閉じた器形の場合は、器壁外面に比べて器壁内面の整形がやや粗い。

④装飾

赤色塗彩が施されるだけである。PM タイプ 3-1 とはスリップが塗布された範囲が異なる。器壁内面、または内面から外面口縁部にかけて塗彩がみられるもの、もしくは器壁外面に部分的に彩色されるものを、このタイプとして分類している。

⑤その他

PM タイプ 3-1 とほぼ同様の範囲に類例がみられる。ペルー極北海岸沿岸部で多く認められる赤色塗彩の事例（パイタ様式）は、胎土や装飾の差異から PM タイプ 3-1 よりも、後述する PM タイプ 6-1 との共通性が強いと考えられる。

器形 1：短頚壺

口縁部は外反し、口唇部は丸みを帯びている。器壁外面の口縁部や器壁内面に赤色塗彩が施され、それ以外の部分は地の色を残している。

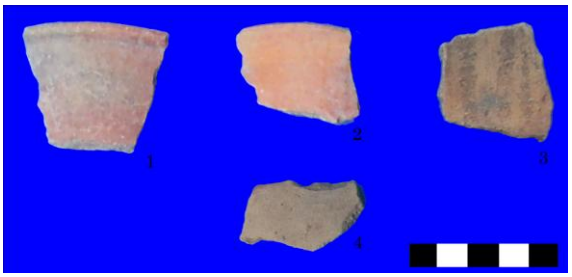


写真 5-23　PM タイプ 3-5 短頚壺

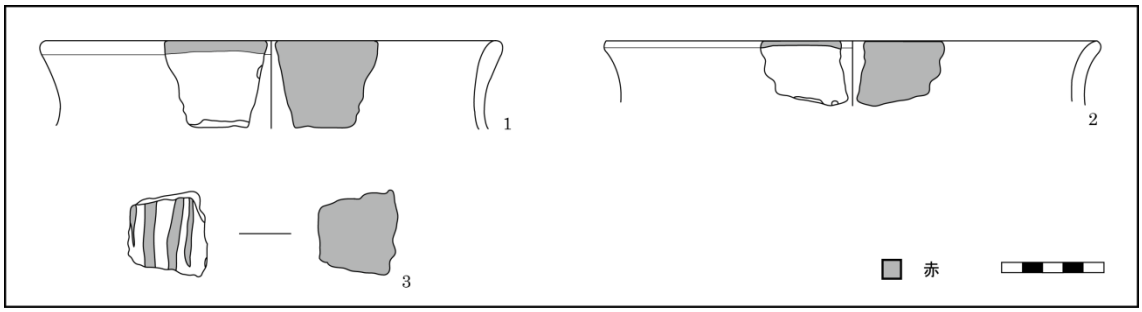


図 5-20　PM タイプ 3-5 短頸壺

器形 2：半球鉢

器形は、器壁全体が内湾するものと口縁部のみ内湾するものが存在する。口縁部形状は内側に肥厚するものがみられる。口唇部は丸みを帯びたものが大半であり、器壁内面と器壁外面の口縁部が塗彩される。

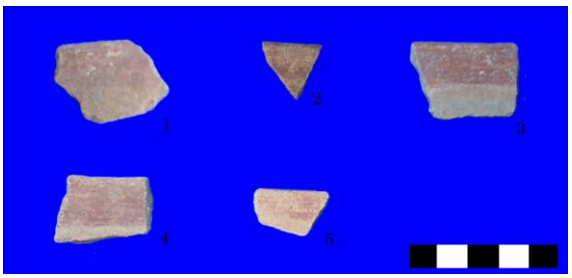


写真 5-24　PM タイプ 3-5 半球鉢

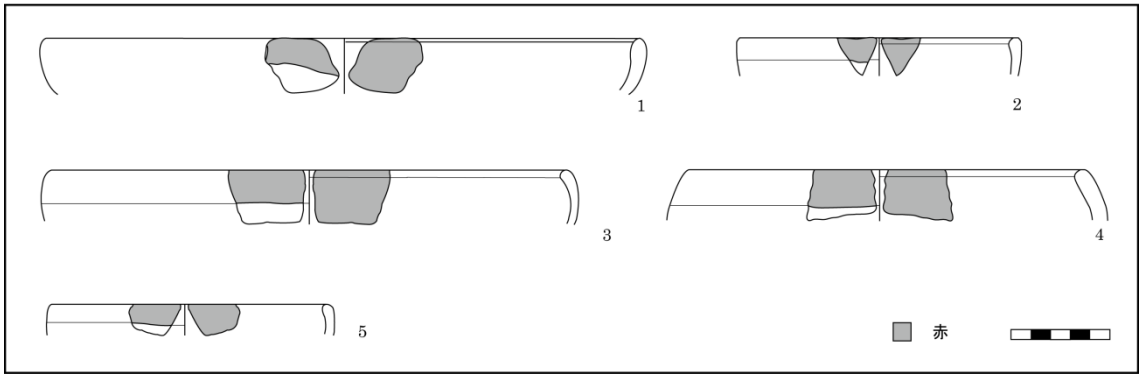


図 5-21　PM タイプ 3-5 半球鉢

器形 3：開口半球鉢

口縁部形状は、わずかに肥厚するものと内側に大きく肥厚するものが確認されている。口唇部は丸みを帯びている。塗彩の施し方は上述の半球鉢と同じである。

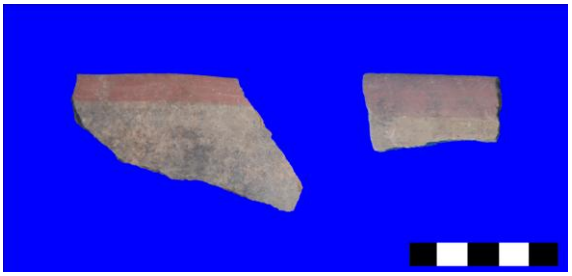


写真 5-25　PM タイプ 3-5 開口半球鉢

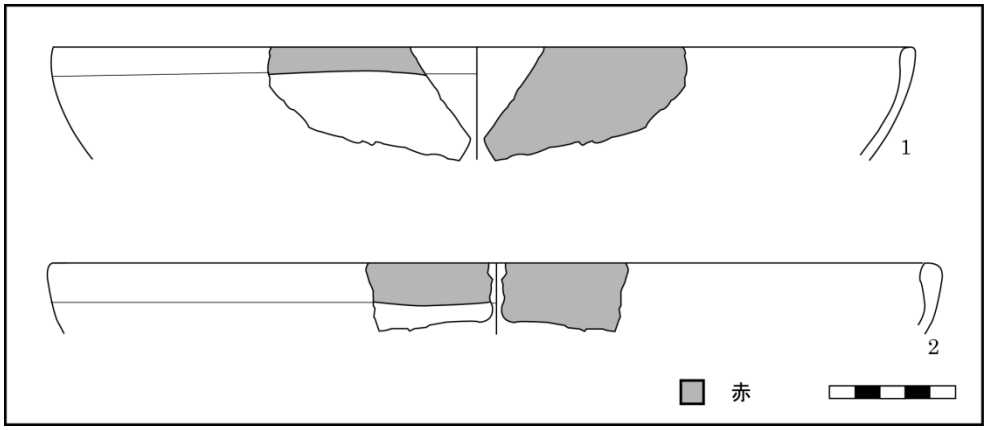


図 5-22　PM タイプ 3-5 開口半球鉢

器形 4：外反鉢

口唇部は丸みを帯びたものが確認されている。塗彩の方法は他の鉢と同じである。

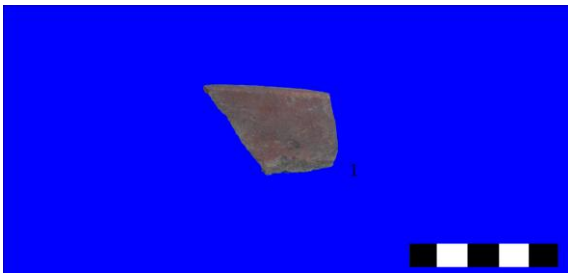


写真 5-26　PM タイプ 3-5 外反鉢

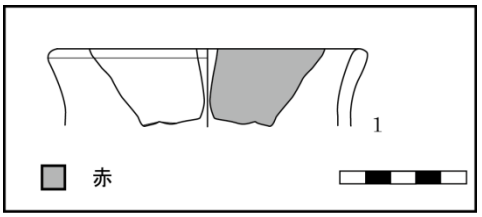


図 5-23　PM タイプ 3-5 外反鉢

（6）　PM タイプ 3-6（ポマワカ期赤色塗彩刻線：PM Rojo Alisado Pintado Inciso）

①胎土・混和材、②色、③表面調整

PM タイプ 3-5 と同じである。

④装飾

基本的には PM タイプ 3-5 と同じであるが、唯一の差異は刻線による施文の有無で、幾何学文や図像が描かれる。

⑤その他

PM タイプ 3-5 と同様の範囲に分布が認められる。

器形 1：半球鉢

胴部破片のみ確認されている。赤色塗彩は、基本的に器壁外面の刻線で区画された部分のみに施されるものの、塗彩が刻線による区画をはみ出す事例も確認されている。刻線には、牙を模したような図像表現が認められる。

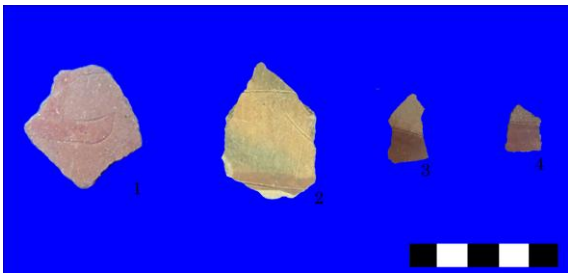


写真 5-27　PM タイプ 3-6 半球鉢

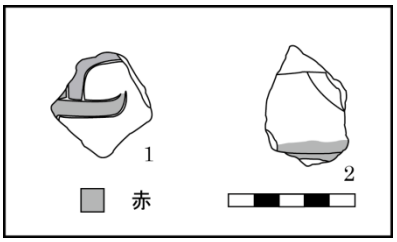


図 5-24　PM タイプ 3-6 半球鉢

器形 2：開口半球鉢

口縁部はやや内側に切れるもの、内側、または外側に肥厚するものがみられる。口唇部は丸みを帯びているものが多いが、軽く平らにならされたような例も確認される。装飾の大半は、器壁外面の口縁部下と胴部が刻線による平行線で区画され、それ以外の部分に赤色が塗彩される事例である。それ以外では、器壁外面の口縁部と器壁内面のみに赤色塗彩が施されるものも確認されている。刻線で区画された部分はマット面を呈し、そのなかに刻線で平行線や波状、渦巻文、幾何学文などが描かれる。また、具象的な図像表現が描かれる場合もある。

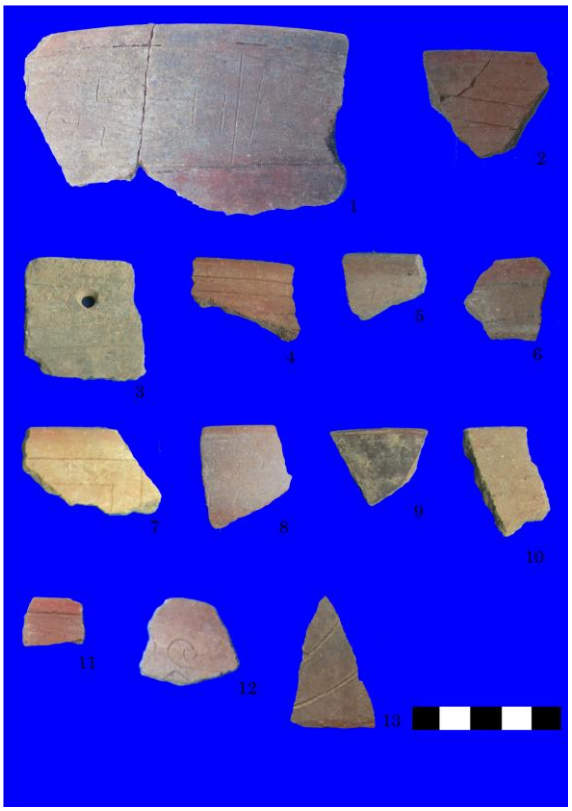


写真 5-28　PM タイプ 3-6 開口半球鉢

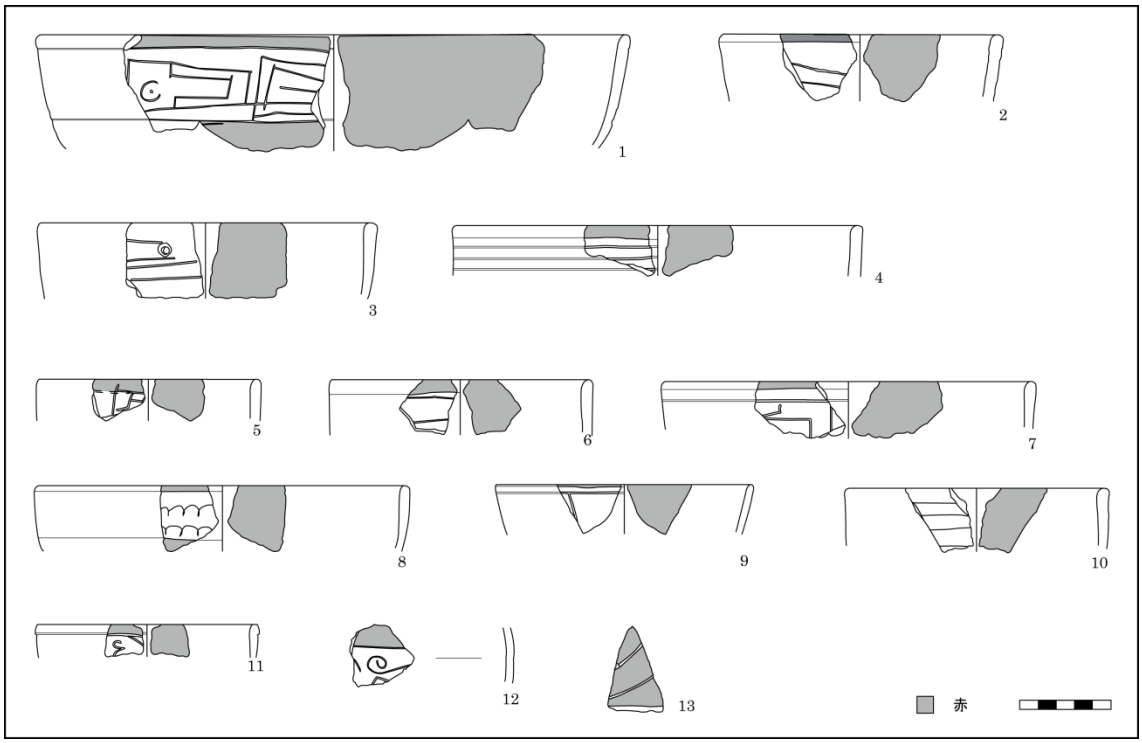


図 5-25　PM タイプ 3-6 開口半球鉢

器形 3：外傾鉢

内側に肥厚した口縁部と、丸みを帯びた口唇部を持つ事例が確認されている。赤色塗彩の方法は他の鉢と同じである。

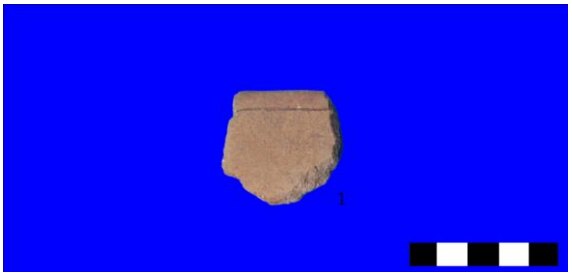


写真 5-29　PM タイプ 3-6 外傾鉢

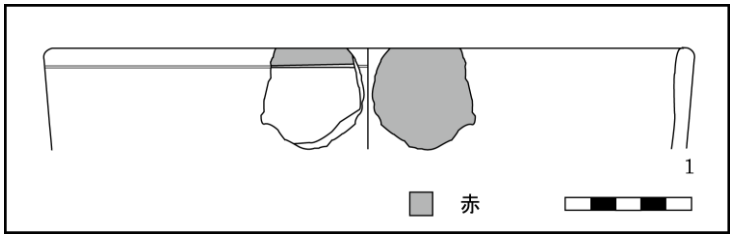


図 5-26　PM タイプ 3-6 外傾鉢

器形 4：外反鉢

口縁部がやや肥厚し、口唇部が丸みを帯びた事例が確認されている。赤色塗彩の方法は他の鉢と同じである。刻線による装飾では平行線や円文などがみられる。口縁部は内傾、あるいは丸みを帯びたものが存在する。

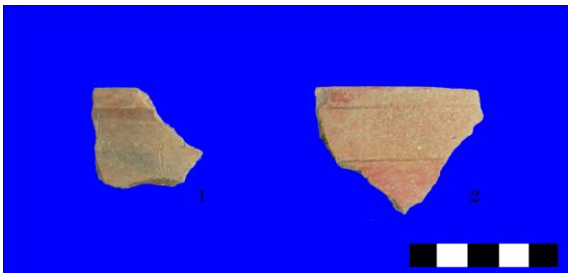


写真 5-30　PM タイプ 3-6 外反鉢

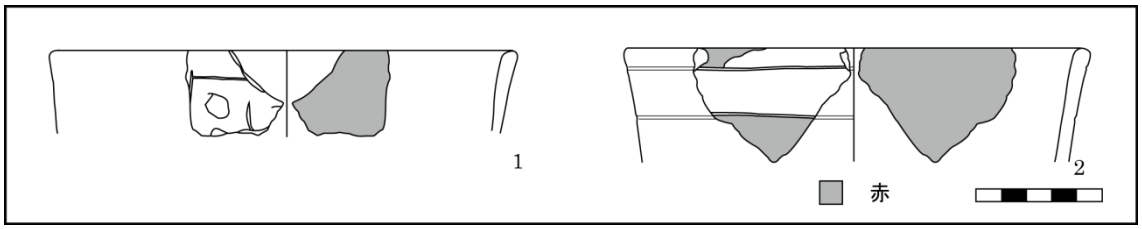


図 5-27　PM タイプ 3-6 外反鉢

器形 5：ボトル

胴部破片のみ確認されている。

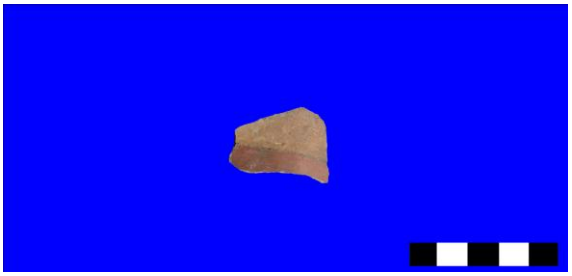


写真 5-31　PM タイプ 3-6 ボトル

5-4-4.　PM タイプ 4（ポマワカ期褐色磨研：PM Marrón Pulido）

褐色の器面を持つ、つくりの良い鉢からなるタイプである。

①胎土・混和材

硬くしまった緻密な胎土である。混和材は細かい砂を主体としており、粒子の直径は 1mm 以下で、雲母は極めて少ない。

②色

明褐色～暗褐色を呈する。

③表面調整

高度に研磨されている。

④装飾

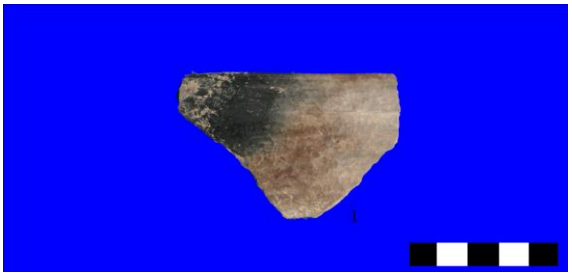
刻線で幾何学文が施されている事例がある。後述するインガタンボ期には、刻線を有する事例を下位タイプとして分類しているが、資料点数が極めて少ないことから、ここでは区分していない。

⑤その他

ペルー北部やエクアドル南部の広範囲で類例が認められるが、北部熱帯低地のバグア複合やセレサル、ミチナルでは明確に確認できない。

器形 1：半球鉢

全体的に高度に研磨されている。口縁部は外側に向かって切れている。



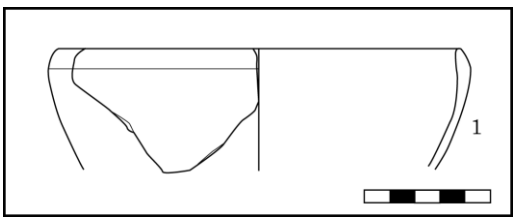


写真 5-32　PM タイプ 4 半球鉢（左）

図 5-28　PM タイプ 4 半球鉢（上）

器形 2：開口半球鉢

胴部破片のみ確認される。

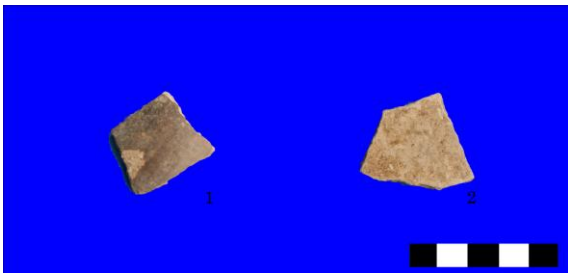


写真 5-33　PM タイプ 4 開口半球鉢

5-4-5.　PM タイプ 5（ポマワカ期褐色平滑：PM Marrón Alisado）

褐色の器面を持つ、ややつくりの良い土器である。装飾の有無、もしくは装飾の差異によって、上位タイプである PM タイプ 5（PM タイプ 5-1）をもとに、PM タイプ 5-2 と PM タイプ 5-3、PM タイプ 5-4 までの下位タイプに細分化される。

（1）PM5-1（ポマワカ期褐色平滑：PM Marrón Alisado）

①胎土・混和材

硬くしまったやや緻密な胎土である。混和材は細かい砂を主体としており、粒子の直径は 1mm 以下である。雲母の量自体はやや少なく、全体としての混和材の量は既述の PM タイプと比べて若干多い。

②色

明褐色～暗褐色に加えて、赤褐色や黄褐色の器面を有することも多い。

③表面調整

全体として平滑であるが、部分的に研磨されることもある。平滑が施された面には筋状の整形痕が残る場合がある。閉じた器形では、器壁外面に比べて器壁内面の整形が粗い。

④装飾

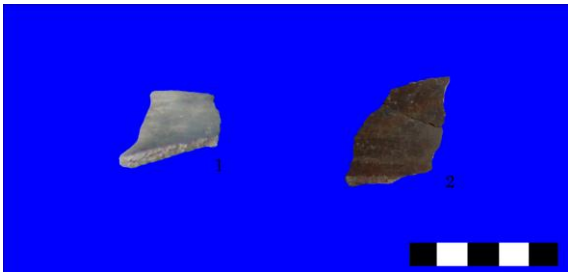
無文であり、PM タイプ 3 との差異はスリップの有無である。

⑤その他

ペルー北部やエクアドル南部の広範囲で類例が確認される。

器形 1：短頚壺

外反した口縁部と丸みを帯びた口唇部を有する事例が確認されている。



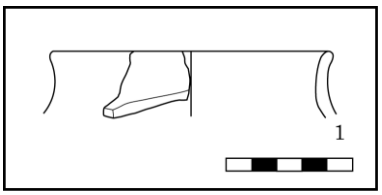


写真 5-34　PM タイプ 5-1 短頚壺（左）
図 5-29　PM タイプ 5-1 短頚壺（上）

器形 2：半球鉢

口縁部は、肥厚するものと先細りするものがみられる。口唇部は平らにならされたものと丸みを帯びたものが確認されている。

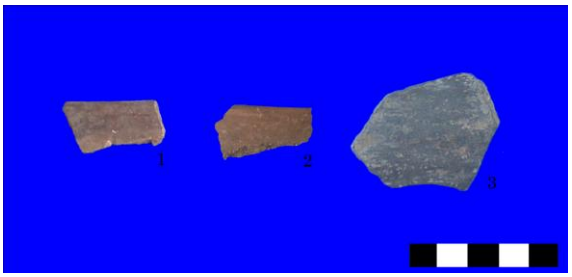


写真 5-35　PM タイプ 5-1 半球鉢

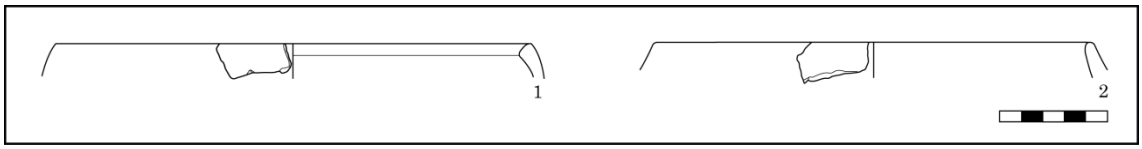


図 5-30　PM タイプ 5-1 半球鉢

器形 3：開口半球鉢

口縁部は、やや外側に肥厚するものや、先細るものがみられる。口唇部は丸みを帯びたものが大半であるが、やや鋭くなっている事例も確認される。

写真 5-36　PM タイプ 5-1 開口半球鉢

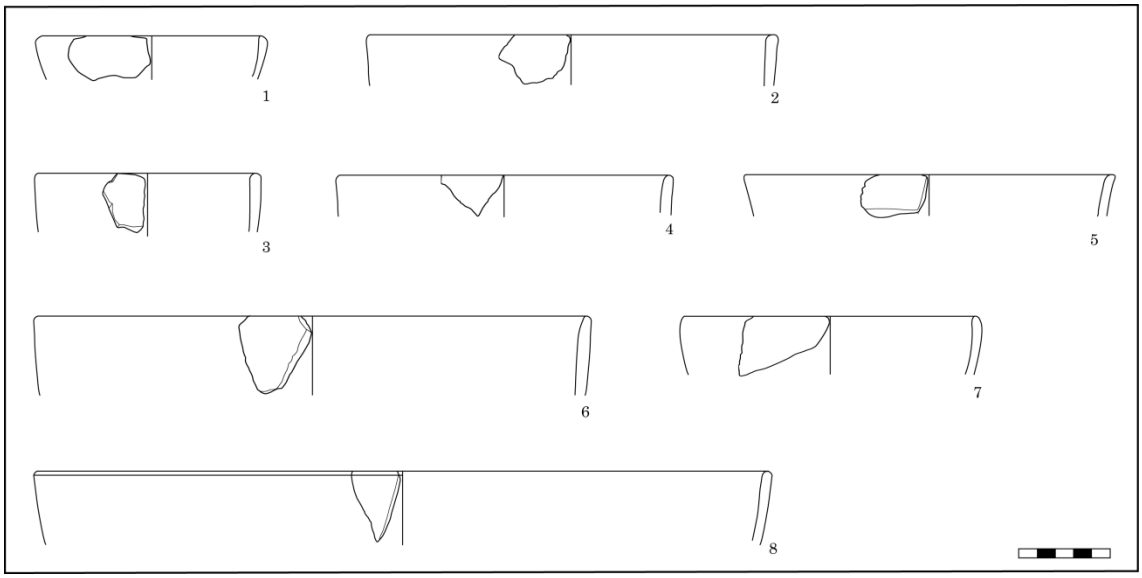
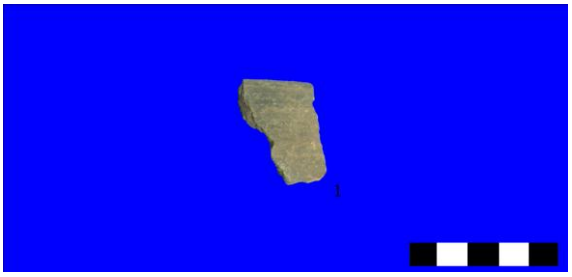


図 5-31　PM タイプ 5-1 開口半球鉢

器形 4：外傾鉢

口縁部がやや内側に切れるものが確認されている。口唇部は丸みを帯びている。



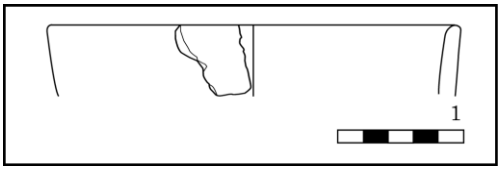


写真 5-37　PM タイプ 5-1 外傾鉢（左）

図 5-32　PM タイプ 5-1 外傾鉢（上）

器形 5：ボトル

胴部破片のみ確認されている。

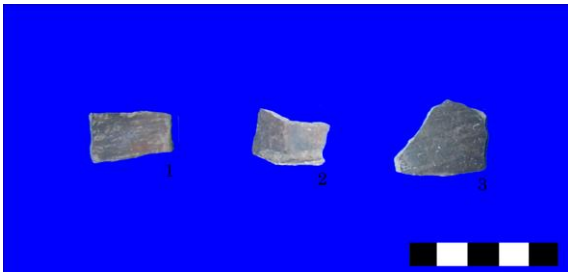


写真 5-38　PM タイプ 5-1 ボトル

（2）　PM タイプ 5-2（ポマワカ期褐色平滑刻線：PM Marrón Alisado Inciso）

①胎土・混和材、②色

PM タイプ 5-1 と同じである。

③表面調整

基本的に PM タイプ 5-1 と同じであるが、刻線で区画された範囲がマット面となる場合もある。

④装飾

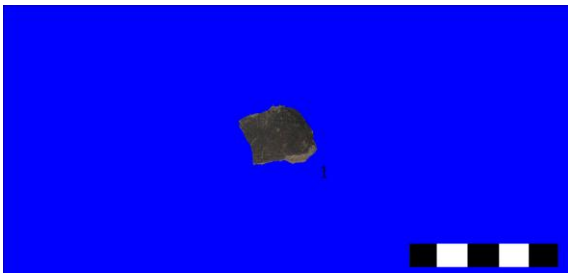
刻線や切込線で幾何学文や図像が描かれる。また、刻線と刺突、あるいはマット面の組み合わせが確認される。平行線で文様帯をめぐらせ、内部に装飾が施されるものもある。

⑤その他

PM タイプ 5-1 と同様の範囲で類例がみられる。ペルー北部やエクアドル南部の広範囲で類例が確認されている

器形 1：壺

胴部破片のみ確認されている。



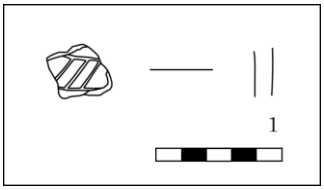


写真 5-39　PM タイプ 5-2 壺（左）

図 5-33　PM タイプ 5-2 壺（上）

器形 2：半球鉢

器形の大半は、口縁部のみがわずかに内側にすぼまるような事例である。器壁全体が内傾、もしくは内湾するような事例もみられる。口縁部はとくに内側に肥厚するものが多い。口唇部は、丸みを帯びたものに加えて、平らにならされたような事例も確認される。装飾は、刻線で平行線や円弧、階段、渦巻、鎖状や幾何学文が施されるほか、平行線と平行斜線が組み合わされたものも確認されている。

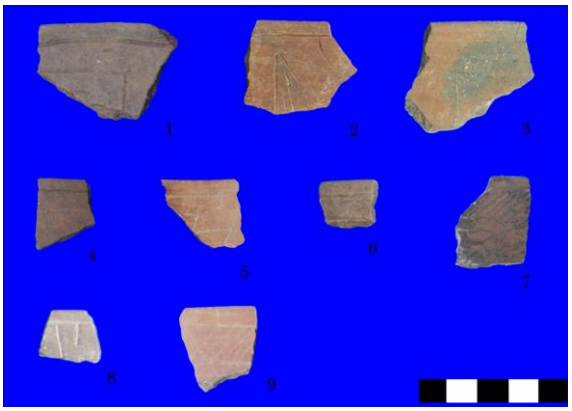


写真 5-40　PM タイプ 5-2 半球鉢

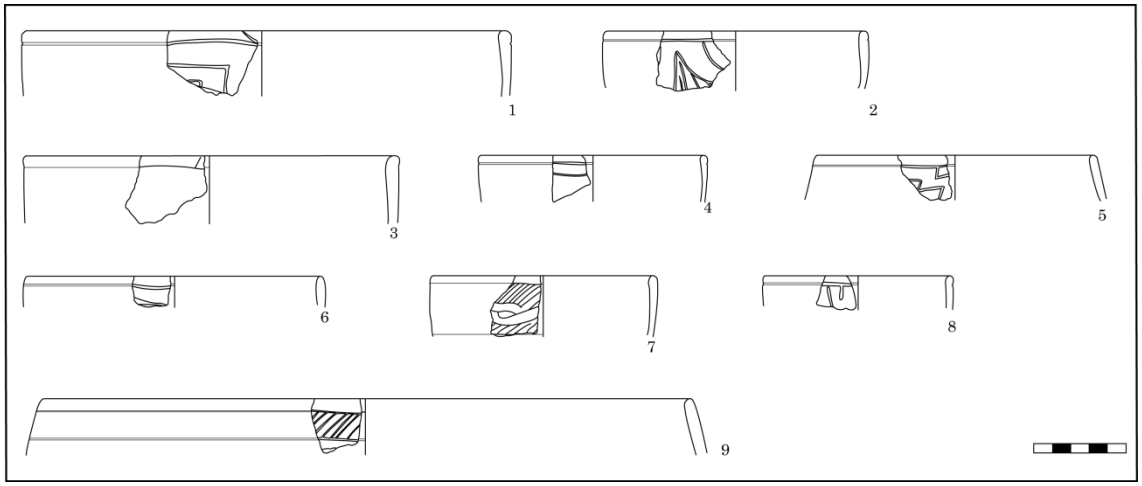
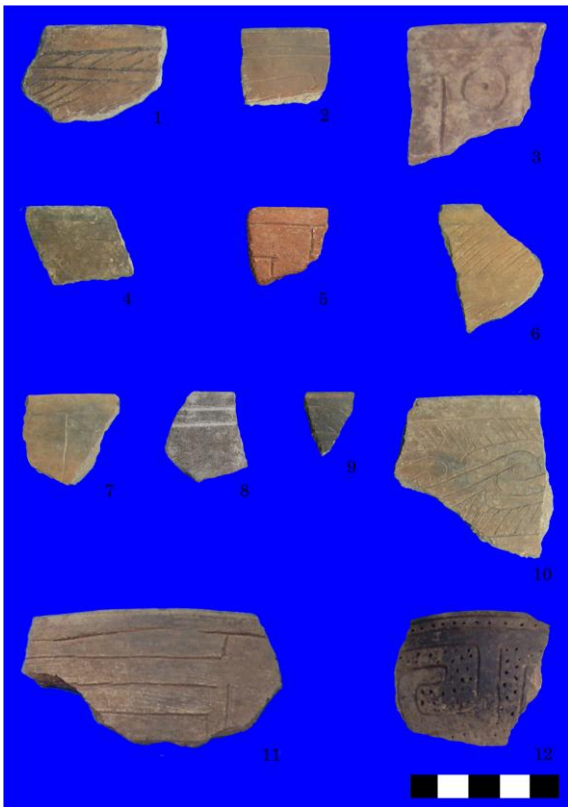


図 5-34　PM タイプ 5-2 半球鉢

器形 3：開口半球鉢

口縁部は、肥厚するものや、軽く内側、あるいは外側に切れるものが確認されている。口唇部は丸みを帯びたものが大半を占める。装飾では、刻線や切込線で平行線や平行斜線、圏点文、幾何学文が描かれる。刻線で文様帯を区画したうえで、そのなかに斜線を施すものや、平行線と平行斜線、または刻線と刺突文との組み合わせ、鎖状や櫛目文、目を表した図像なども確認されている。



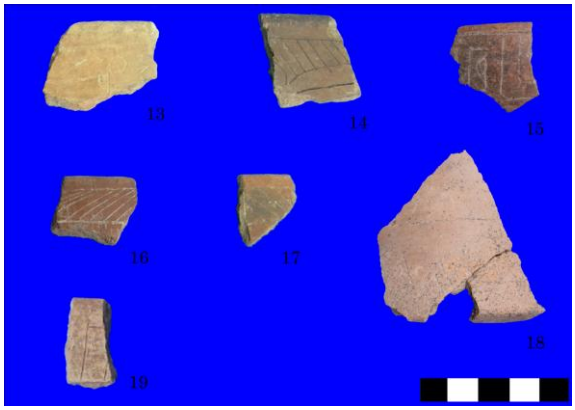


写真 5-41　PM タイプ 5-2 開口半球鉢 1（左）

写真 5-42　PM タイプ 5-2 開口半球鉢 2（上）

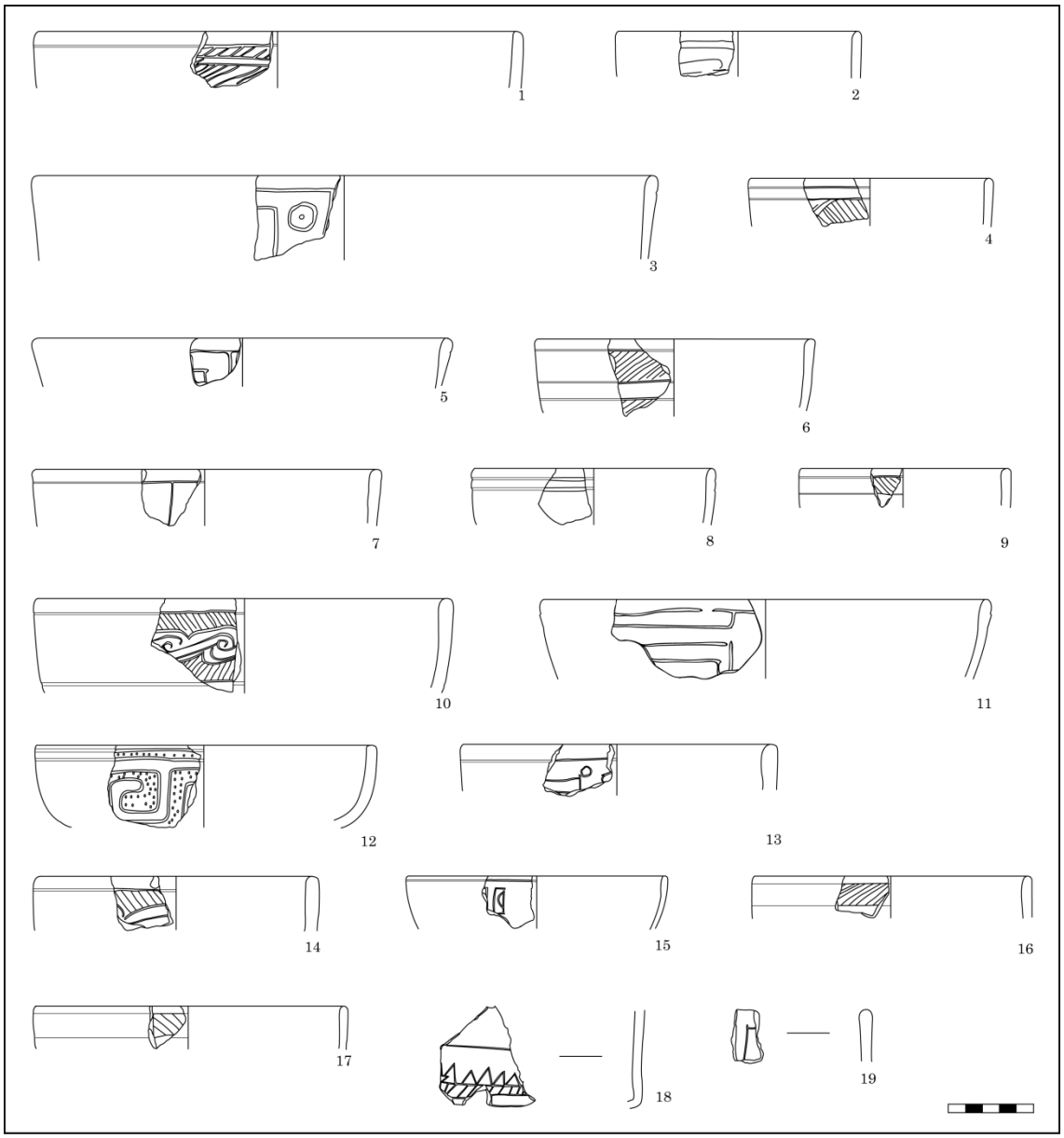


図 5-35　PM タイプ 5-2 開口半球鉢

器形 4：外傾鉢

器形は、器壁全体が外側にわずかに開くものと、大きく開くものが確認されている。口縁部は肥厚する事例がみられる。口唇部については、丸みを帯びたものと平らにならされたものが存在する。装飾は、刻線で平行線や円文、幾何学文が描かれる。

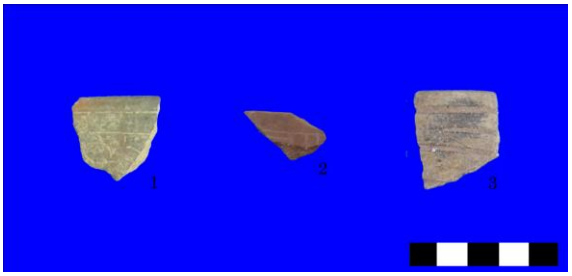


写真 5-43　PM タイプ 5-2 外傾鉢

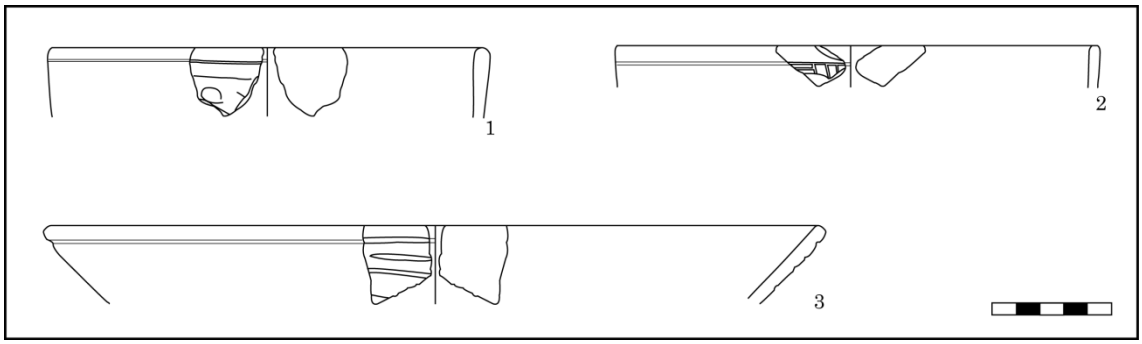


図 5-36　PM タイプ 5-2 外傾鉢

器形 5：外反鉢

口縁部は内側に肥厚する事例がみられる。また、口唇部は丸みを帯びている。装飾では、刻線で平行線や顔を表した図像が描かれる。

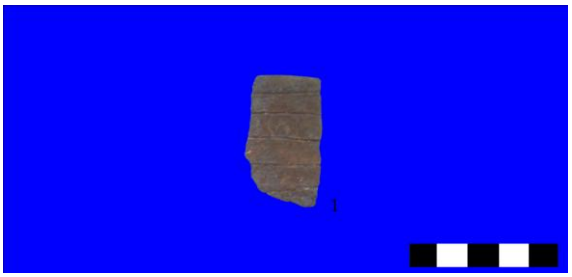


写真 5-44　PM タイプ 5-2 外反鉢 1

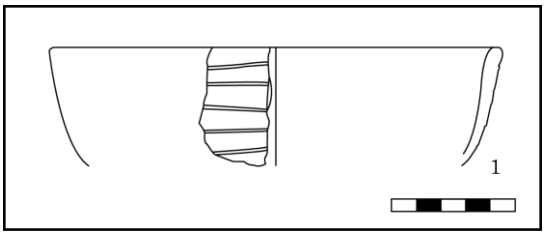


図 5-37　PM タイプ 5-2 外反鉢 1

写真 5-45　PM タイプ 5-2 外反鉢 2

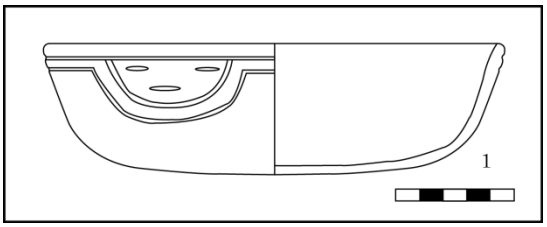


図 5-38　PM タイプ 5-2 外反鉢 2

（3） PM タイプ 5-3（ポマワカ期褐色平滑刻線・ポストコクション：PM Marrón Alisado Inciso Post-cocción）

①胎土・混和材

基本的には PM タイプ 5-1 と同じであるが、胎土はそれよりも若干緻密で混和材の量も少ない。

②色

PM タイプ 5-1 と同じである。

③表面調整

PM タイプ 5-1 と同じである。

④装飾

刻線や切込線で幾何学文が描かれ、大半は刻線内に赤色顔料が焼成後に充填される（ポストコクション彩色）。刻線で区画された範囲に顔料が塗布される事例は、1 点のみ確認されている。

⑤その他

胎土や混和材は、PM タイプ 4 と PM タイプ 5-1 の中間的様相を示すが、表面整形に関しては後者との類似性がより強い。刻線を伴うポストコクション彩色は、ペルー極北部海岸のピウラ川とチラ川流域、セロ・ニャニャニケ、北部山地のパコパンパ複合、ポロポロ、ワカロマ、セロ・ブランコ、クントゥル・ワシ、北部中流域のアマカス複合、北部海岸のワカ・ルシーア、プエマペに類例がみられる。しかし、インガタンボの事例は、刻線内に施されるポストコクション彩色が中心であるという点で、北部山地や北部海岸で広範囲に認められるものよりも、極北部海岸の事例との共通性が高い。

器形 1：開口半球鉢

胴部破片のみ確認されている。刻線や切込線で平行線や幾何学文が描かれ、その内部に赤色顔料が充填される。

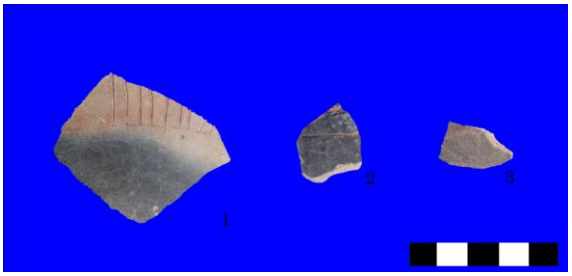


写真 5-46　PM タイプ 5-3 開口半球鉢

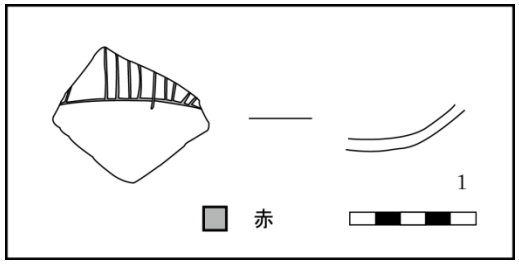


図 5-39　PM タイプ 5-3 開口半球鉢

（4） PM タイプ 5-4（ポマワカ期褐色平滑磨線：PM Marrón Alisado Linea Bruñida）

①胎土・混和材

PM タイプ 5-3 と同じである。

②色、③表面調整

PM タイプ 5-1 と同じである。

④装飾

磨線で幾何学文が施される。

⑤その他

ペルー北部熱帯低地のセレサルやミチナル、北部山地のパコパンパ複合、ワカロマ、クントゥル・ワシや北部中流域のアマカス複合に類例がみられる。

器形 1：鉢

胴部破片のみ確認されている。詳細は不明であるが、半球鉢と開口半球鉢と考えられる。

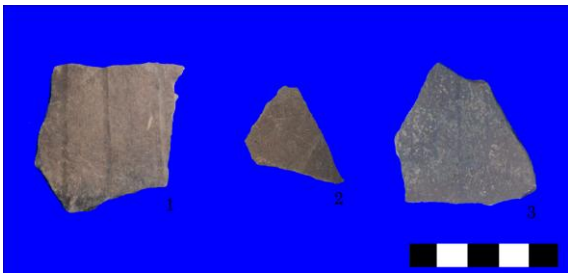


写真 5-47　PM タイプ 5-4 鉢

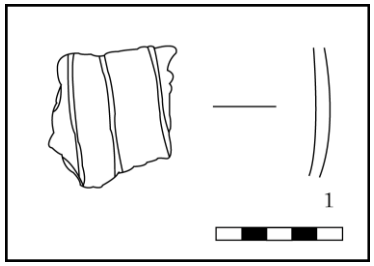


図 5-40　PM タイプ 5-4 鉢

5-4-6.　PM タイプ 6（ポマワカ期褐色平坦：PM Marrón Nivelado）

褐色の器面を持つ、ややつくりの粗い土器で、壺形土器の割合が非常に高いタイプである。

（1）　PM タイプ 6-1（ポマワカ期褐色平坦 A：PM Marrón Nivelado A）

①胎土・混和材

やや粗くてしまりの悪い胎土で、既述の PM タイプ 5 に比べてもろい。混和材は砂を主体としており、均質に混ざっているが全体量がやや多く、粒子の直径は 2mm 程度のものも含まれるなど PM タイプ 5 よりも大きい。雲母の含有量はやや少なめである。

②色

明褐色～暗褐色に加えて、赤褐色や黄褐色の器面を有することも多い。

③表面調整

基本的に平坦であるが、器壁内面が粗整形の場合も多い。

④装飾

無文のものが多いが、押圧文や刺突文、スタンプ文、貼付文が施される事例や赤色顔料が塗彩される事例もみられる。

⑤その他

日用土器と考えられる非精製土器で、比較の材料に乏しい。しかし、無頚壺がほとんど

存在せず、短頸壺が出土の中心であることは注目すべきである。このような出土傾向は、ペルー極北部海岸やエクアドル南部と類似している。なお、ペルー北部熱帯低地のバグア複合では、インガタンボ以上に無頸壺の出土がみられるが、割合としては短頸壺の方が多く、ペルー北部山地との差異が顕著である。

器形 1：短頸壺

器形は、口縁部が大きく外反するものが多いが、なかには頚部が外側に向かって明確に屈曲する事例も存在する。口縁部は肥厚するものや先細るものが存在する。口唇部は丸みを帯びるか、平らにならされている。装飾に関しては、口縁部や器壁外面に帯状に赤色塗彩が施されるものに加えて、刺突文やスタンプ文、貼付文と押圧文の組み合わせなどもみられる。

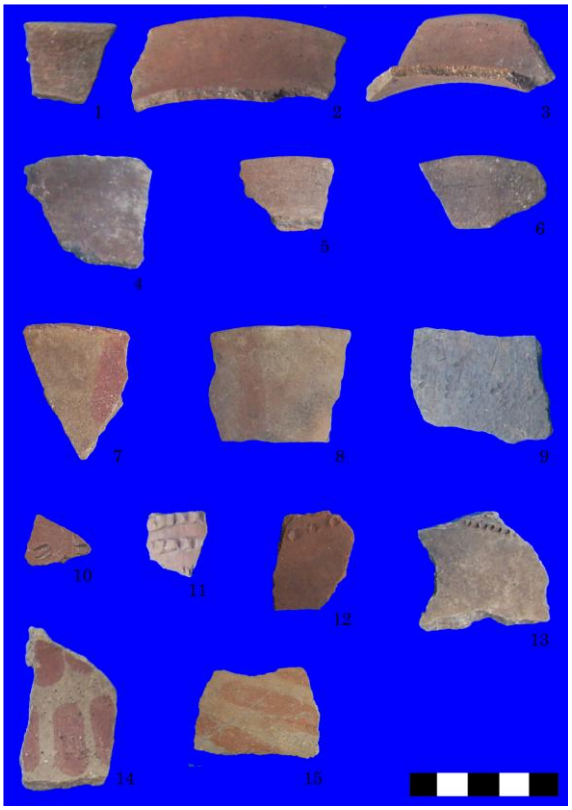


写真 5-48　PM タイプ 6-1 短頸壺 1

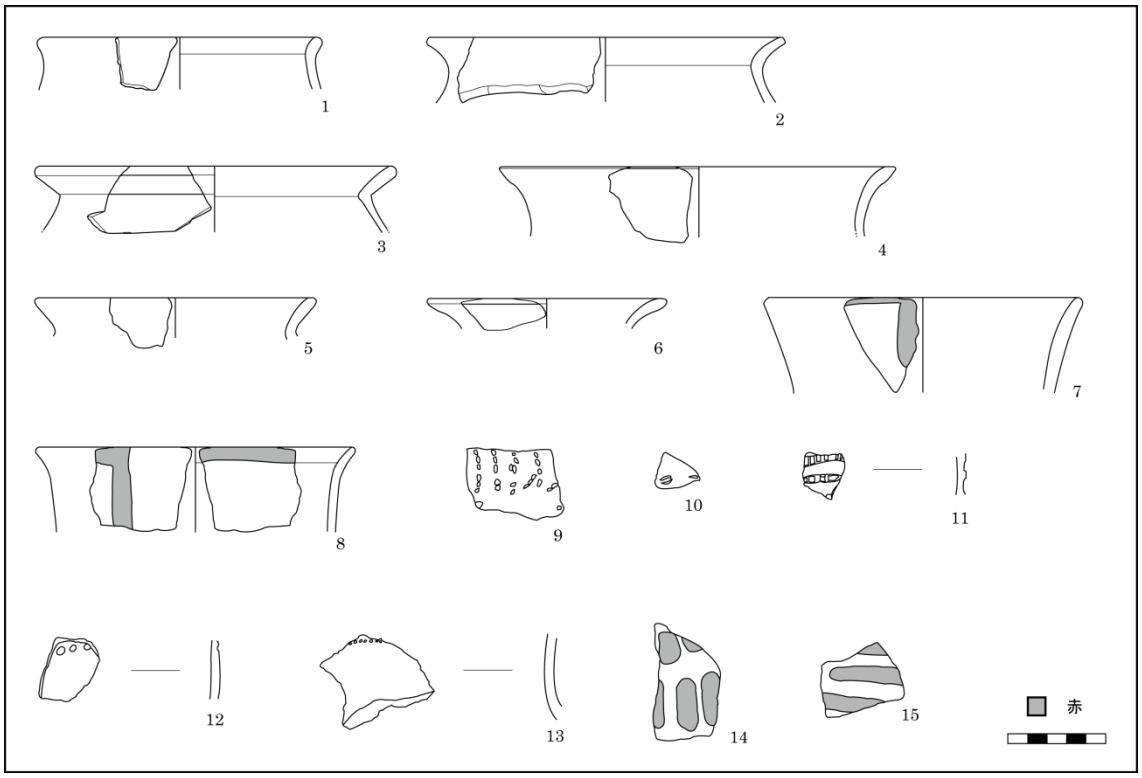


図 5-41　PM タイプ 6-1 短頸壺 1

写真 5-49　PM タイプ 6-1 短頸壺 2

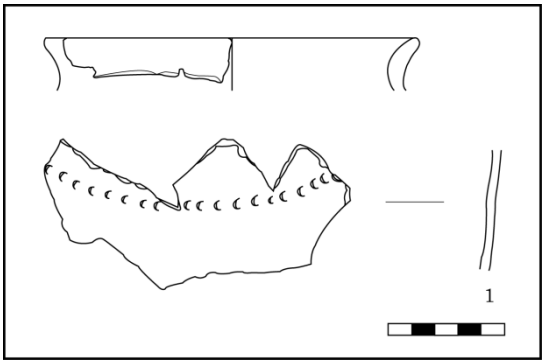


図 5-42　PM タイプ 6-1 短頸壺 2

器形 2：半球鉢

胴部破片のみ確認されている。

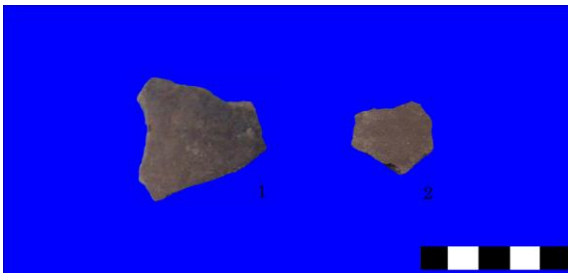
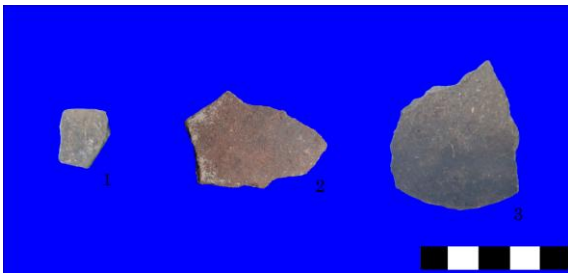


写真 5-50　PM タイプ 6-1 半球鉢

器形 3：開口半球鉢

胴部破片が大半であるが、丸みを帯びた口唇部を有する口縁部破片も確認されている。



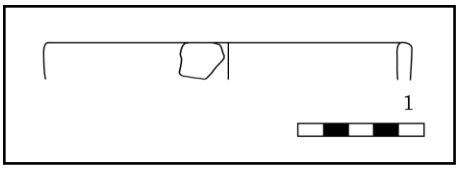


写真 5-51　PM タイプ 6-1 開口半球鉢

図 5-43　PM タイプ 6-1 開口半球鉢

器形 4：ボトル

胴部破片のみが確認されている。

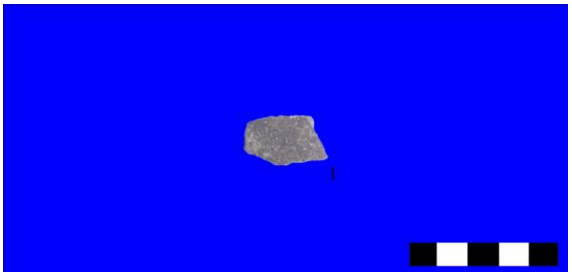


写真 5-52　PM タイプ 6-1 ボトル

（2）　PM タイプ 6-2（PM Marrón Nivelado B）

①胎土・混和材

粗く、しまりの悪い胎土からなり、多孔質でもろい。混和材の量は多く砂を主体としているが、混じり方はやや不均質で、直径 3mm を超えるような小石が混ざることもある。雲母の含有量はやや少なめである。

②色、③表面調整

PM タイプ 6-1 と同じである。

④装飾

無文である。

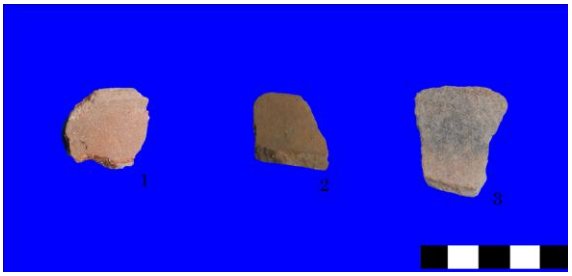
⑤その他

PM タイプ 6-1 よりも器壁が厚く、その大半が大型壺形土器の胴部破片であるが、大型の鉢も存在する。

器壁の厚さを一つの基準としてタイプ設定したため、比較する資料は極端に乏しいが、北部中流域のアマカス複合でも器壁の厚い大型土器が報告されている。

器形 1：短頚壺

器形は、口縁部が大きく外反するものが認められる。口縁部は肥厚し、口唇部は丸みを帯びている。



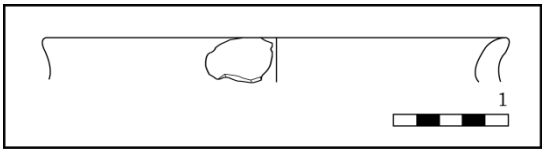


写真 5-53　PM タイプ 6-2 短頚壺

図 5-44　PM タイプ 6-2 短頚壺

器形 2：鉢

胴部破片のみ確認されている。

写真 5-54　PM タイプ 6-2 鉢

5-4-7.　PM タイプ 7（ポマワカ期褐色粗整形：PM Marrón Tosco）

褐色の器面を持つ、つくりの粗い土器で、壺形土器の割合が非常に高いタイプである。

（1）　PM タイプ 7-1（ポマワカ期褐色粗整形 A：PM Marrón Tosco A）

①胎土・混和材

やや粗くてしまりの悪い胎土である。既述の PM タイプ 5 に比べてつくりが悪く、もろい。混和材は砂を主体としており、均質に混ざっているが全体量がやや多く、粒子の直径は 2mm 程度のものも含まれるなど PM タイプ 5 よりも大きい。雲母の含有量はやや少なめである。

②色

明褐色～暗褐色に加えて、赤褐色や黄褐色の器面を有することも多い。

③表面調整

主として粗整形であるが、部分的に平坦とされている部分もある。

④装飾

無文である。

⑤その他

全体として、PM タイプ 6-1 との共通性が高く、両者の最大の差異は表面調整に帰せられるところが大きい。

PM タイプ 6 と同様に非精製土器で日用的用途が推測されるもので、比較の材料に乏しい。出土の中心は短頚壺であり、ペルー極北部海岸やエクアドル南部と類似した出土傾向

がみられる。

器形 1：短頚壺

器形は、口縁部が外反するものが大半である。口縁部は、肥厚するものが多いが、わずかに先細るものも確認される。口唇部は丸みを帯びるか、やや平らにならされている。

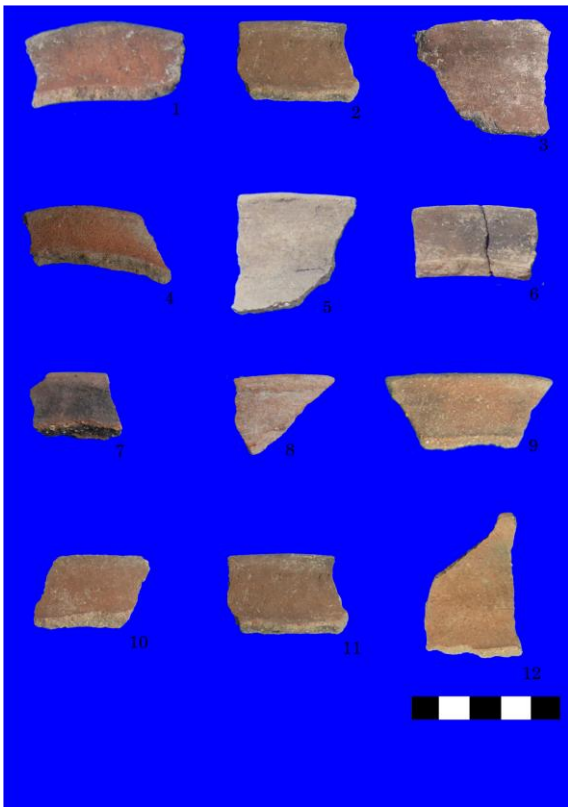


写真 5-55　PM タイプ 7-1 短頚壺

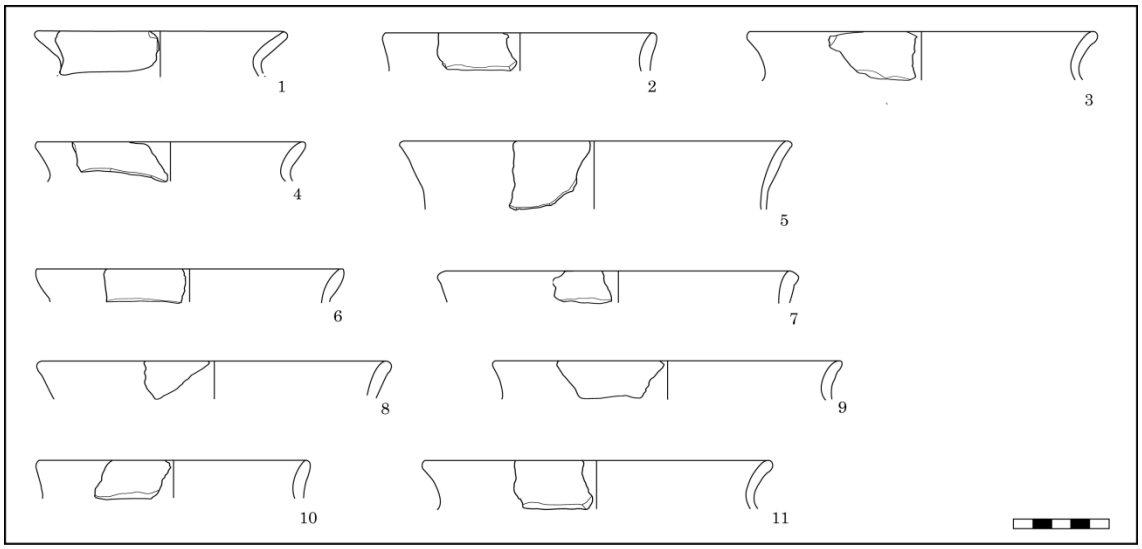


図 5-45　PM タイプ 7-1 短頚壺

器形 2：開口半球鉢

事例は極端に少ないが、丸みを帯びた口唇部を有する事例が確認される。

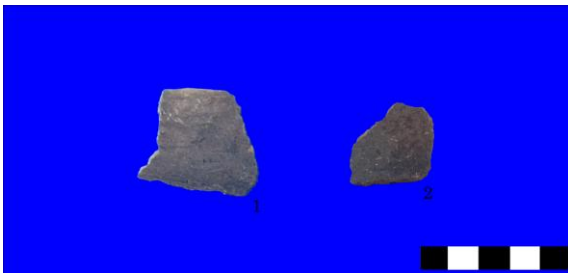


写真 5-56　PM タイプ 7-1 開口半球鉢

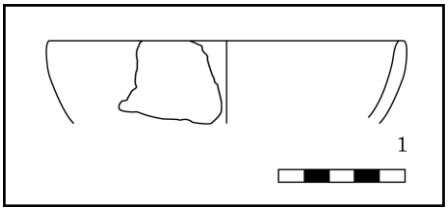


図 5-46　PM タイプ 7-1 開口半球鉢

（2）　PM タイプ 7-2（ポマワカ期褐色粗整形 B：PM Marrón Tosco B）

①胎土・混和材

粗く、しまりの悪い胎土からなり、多孔質でもろい。混和材の量は多く、砂を主体としているが、混じり方はやや不均質で、直径 3mm を超えるような小石が混ざることもある。雲母の含有量はやや少なめである。

②色、③表面調整、④装飾

PM タイプ 7-1 と同じである。

⑤その他

PM タイプ 7-1 と比して、器壁が厚い。壺形土器の胴部破片のみ確認されている。PM タイプ 6-2 と同様に、器壁の厚さを一つの基準としてタイプ設定したため、比較する資料は極端に乏しい。

器形 1：短頚壺

器形は、口縁部が外反する。口唇部は丸みを帯びている。

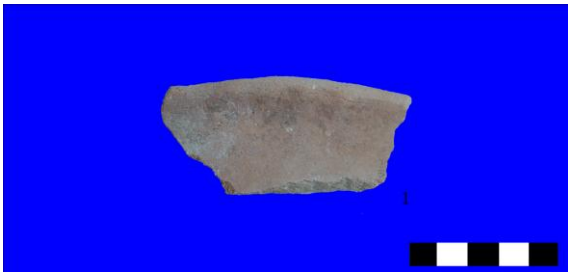


写真 5-57　PM タイプ 7-2 短頚壺

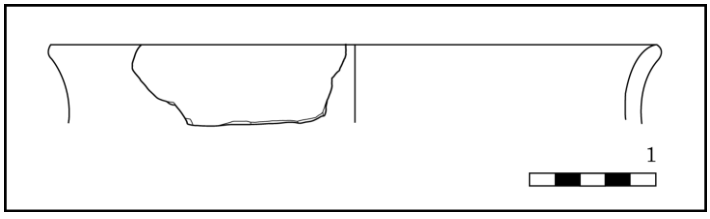


図 5-47　PM タイプ 7-2 短頚壺

5-5. インガタンボ期の土器タイプ

インガタンボ期の土器は 8 つの上位タイプと 27 の下位タイプに分類される。以下、分類された各タイプについて詳述する。また、最後に未分類となった資料についての記述も行う。

5-5-1. IG タイプ 1（インガタンボ期オレンジ色：IG Anaranjado）

オレンジ色の器面を持つ、極めてつくりの良い土器で、上位タイプの IG タイプ 1-1（インガタンボ期オレンジ色 IG Anaranjado）と下位タイプである IG タイプ 1-2（インガタンボ期オレンジ地赤彩：IG Anaranjado y Rojo）に分けられる。

（1）IG タイプ 1（ インガタンボ期オレンジ色：IG Anaranjado）

①胎土・混和材

非常に硬くしまっており、極めて緻密な胎土からなる。混和材は極めて少なく、砂を主体としており、均一に混ざっていて雲母も非常に少ない。

②色

オレンジ色を呈する。

③表面調整

基本的に平滑であるが、部分的に研磨されることもある。閉じた器形の場合は、器壁外面に比べて器壁内面の整形がやや粗い場合がある。

④装飾

無文である。

⑤その他

ポマワカ期に対応する形成期中期から、ペルー北部山地に特徴的な土器であり、インガタンボ期と平行して、北部山地のパコパンパ複合、ワカロマ、クントゥル・ワシに類例がみられる。

器形 1：半球鉢

胴部破片のみ確認されている。

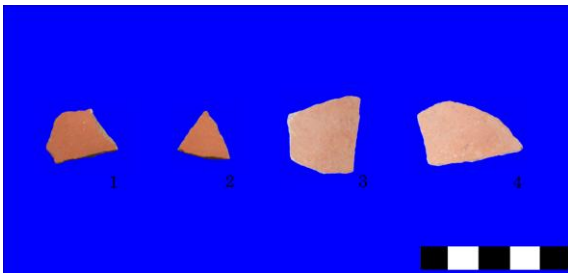


写真 5-58　IG タイプ 1-1 半球鉢

器形 2：開口半球鉢

胴部破片のみ確認されている。

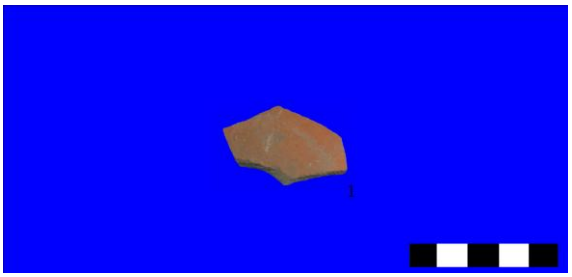


写真 5-59　IG タイプ 1-1 開口半球鉢

（2）　IG タイプ 1-2（インガタンボ期オレンジ地赤彩：IG Anaranjado y Rojo）

①胎土・混和材

IG タイプ 1-1 と同じである。

②色

基本的にはオレンジ色であるが、オレンジが発色せずに、器壁が明灰色を呈する場合もある。

③表面調整

IG タイプ 1-1 と同じである。

④装飾

オレンジ色の器壁の上に、赤色塗彩が施され、幾何学文が描かれる。

⑤その他

IG タイプ 1-1 と同様の地域に類例がみられる。

器形 1：半球鉢

器壁全体が大きく内湾する無頚壺のような閉じた器形と、口縁部のみが内湾する器形が存在する。口縁部は内側に肥厚し、口唇部は丸みを帯びている。閉じた器形の場合は、器壁外面に比べて器壁内面の整形がやや粗い。装飾は、口縁部や器壁外面に帯状や幾何学文、または圏点を呈する赤色塗彩がみられる。。

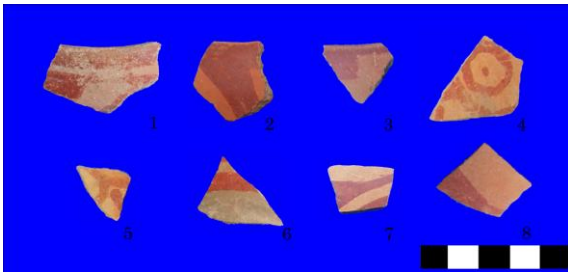


写真 5-60　IG タイプ 1-2 半球鉢

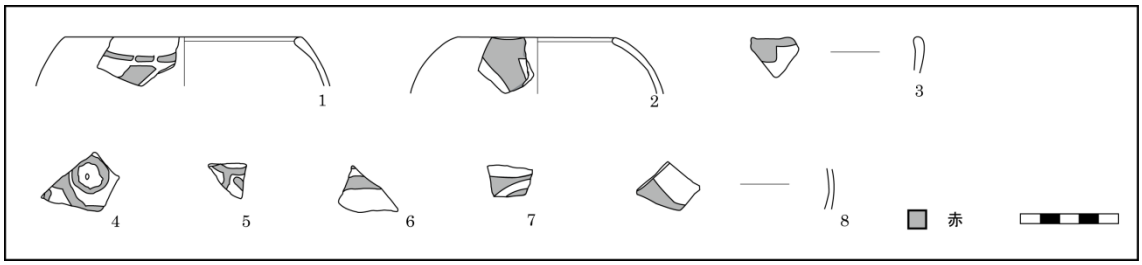


図 5-48　IG タイプ 1-2 半球鉢

器形 2：ボトル

口縁部は外側に張り出しており、段状になっている。また、口縁部に帯状の赤色塗彩が施されている。

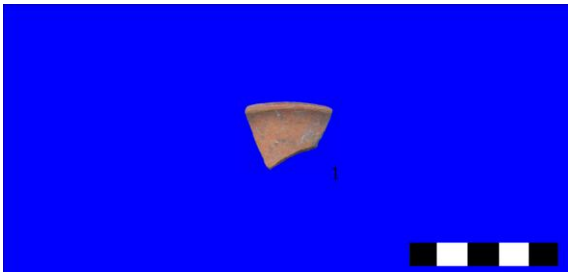


写真 5-61　IG タイプ 1-2 ボトル

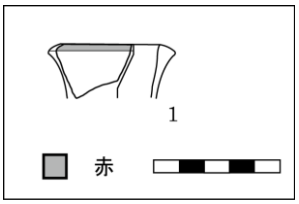


図 5-49　IG タイプ 1-2 ボトル

5-5-2.　IG タイプ 2（インガタンボ期灰色磨研：IG Gris Fino）

灰色の器面をもつ、極めてつくりの良い鉢とボトルからなるタイプである。

① 胎土・混和材

非常に硬くしまっており、極めて緻密な胎土からなる。混和材は極めて少なく、砂を主体として均一に混ざっていて、雲母も非常に少ない。

②色

明灰色～暗灰色を呈する。

③表面調整

高度に研磨されている。閉じた器形の場合は、器壁外面に比べて器壁内面の整形がやや粗い場合がある。

④装飾

刻線や切込線で幾何学文が施される。

⑤その他

形成期中期のペルー北部海岸に特徴的な土器であり、形成期中期後半から形成期後期にかけて、分布が山地へと移行する傾向がある。北部山地のパコパンパ複合、ラ・グランハ複合、クントゥル・ワシ、北部中流域のアマカス複合、北部海岸のモロ・デ・エテン、プ

エマペに類例がみられる。

器形 1：半球鉢

胴部破片のみ確認されている。刻線による装飾を有する事例もある。

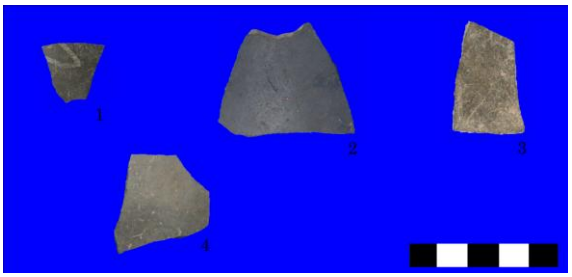


写真 5-62　IG タイプ 2 半球鉢

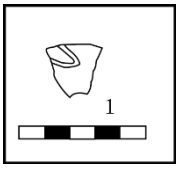


図 5-50　IG タイプ 2 半球鉢

器形 2：ボトル

胴部破片のみ確認されている。

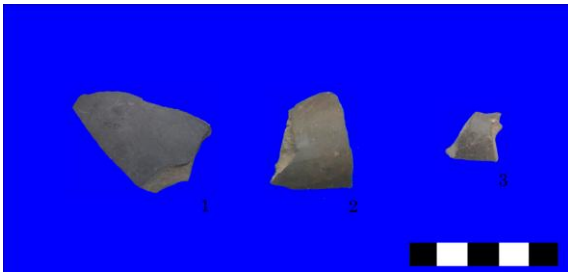


写真 5-63　IG タイプ 2 ボトル

器形 3：鐙形ボトル

注口部と胴部上側の破片が確認されている。胴部破片には短い切込線で装飾が施されている。

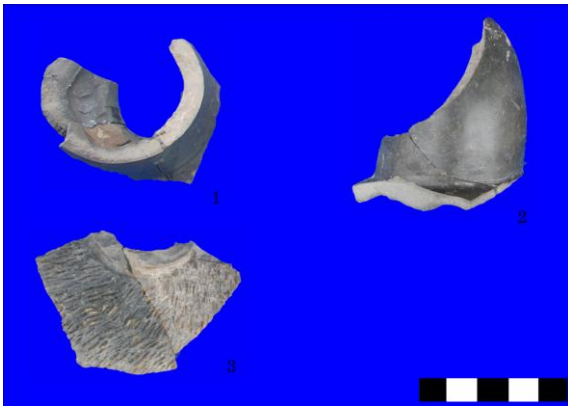


写真 5-64　IG タイプ 2 鐙形ボトル

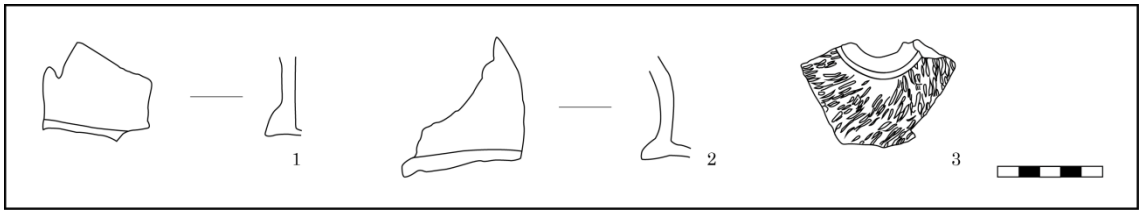


図 5-51　IG タイプ 2 鐙型ボトル

5-5-3.　IG タイプ 3（インガタンボ期黒色磨研：IG Negro Pulido）

黒色の器面を持ち、つくりの良い鉢やボトルからなるタイプである。装飾の差異によって、上位タイプとなる IG タイプ 3-1（インガタンボ期黒色磨研：IG Negro Pulido）が、下位タイプである IG タイプ 3-2（インガタンボ期黒色磨研刻線：IG Negro Pulido Inciso）と IG タイプ 3-3（インガタンボ期黒色磨研黒鉛塗布: IG Negro Grafitado）とに細分される。

（1）　IG タイプ 3-1（インガタンボ期黒色磨研：IG Negro Pulido）

①胎土・混和材

硬くしまった緻密な胎土からなる。混和材は細かい砂を主体としており、粒子の直径は 1mm 以下である。雲母の含有量も少ない。

②色

黒色～灰黒色、または暗褐色を呈する。

③表面調整

高度に研磨されている。閉じた器形の場合は、器壁外面に比べて器壁内面の整形がやや粗い。

④装飾

基本的には無文である。

⑤その他

形成期中期のペルー北部海岸に特徴的な土器であり、形成期後期には分布範囲が拡がる。北部山地のパコパンパ複合、ラ・グランハ複合、クントゥル・ワシ、北部海岸のモロ・デ・エテン、極北部海岸のセロ・ニャニャニケとペチチェで類例がみられる。

器形 1：半球鉢

胴部と平底の底部破片のみ確認されている。

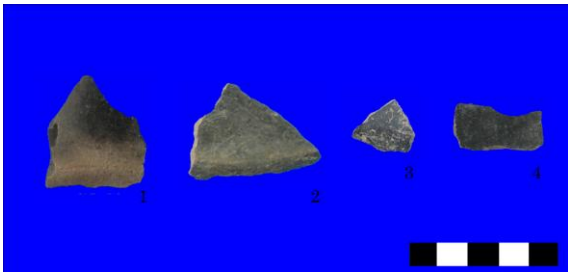


写真 5-65　IG タイプ 3-1 半球鉢

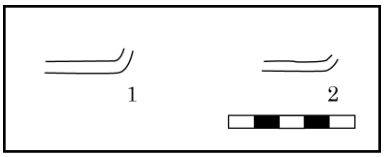


図 5-52　IG タイプ 3-1 半球鉢

器形 2：開口半球鉢

事例は少ないが、口縁部が外切れしたものが確認されている。

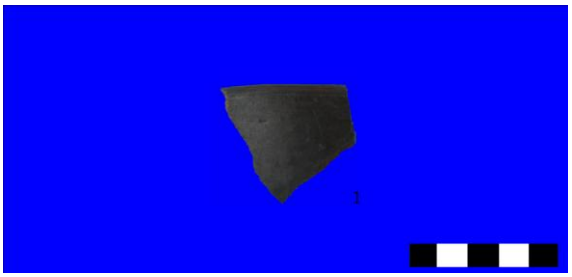


写真 5-66　IG タイプ 3-1 開口半球鉢

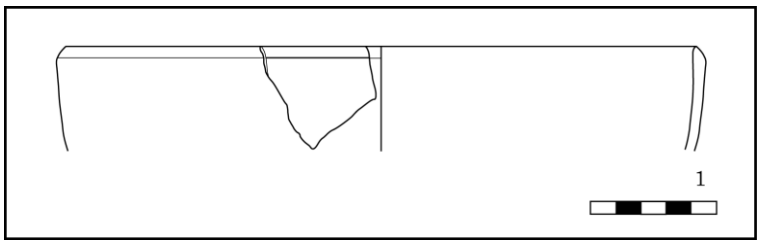


図 5-53　IG タイプ 3-1 開口半球鉢

器形 3：コップ形

垂直に立ち上がる器壁に、取ってがついてマグカップのような形状を呈する。

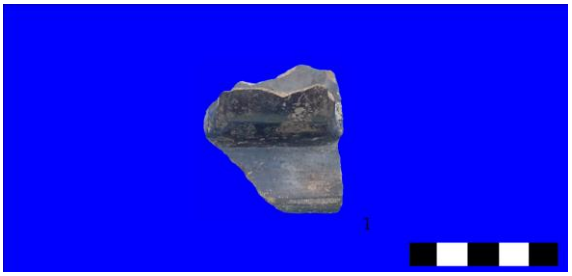


写真 5-67　IG タイプ 3-1 コップ形

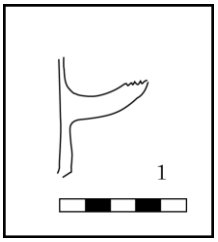


図 5-54　IG タイプ 3-1 コップ形

器形 4：ボトル

口縁部は外側に張り出し、段状を呈する。

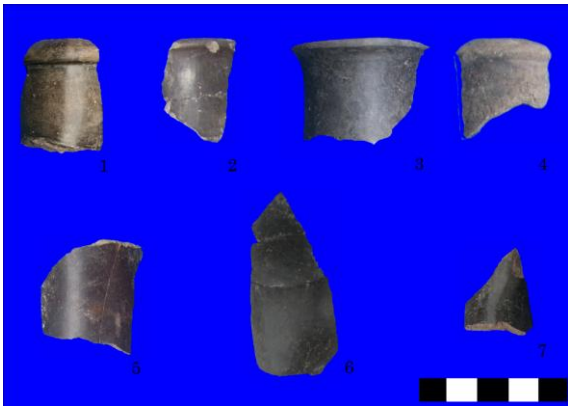


写真 5-68　IG タイプ 3-1 ボトル

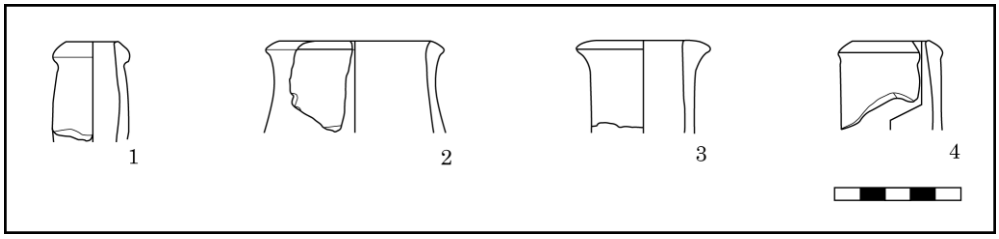


図 5-55　IG タイプ 3-1 ボトル

器形 5：鐙形ボトル

注口部と胴部上側の破片のみ確認されている。

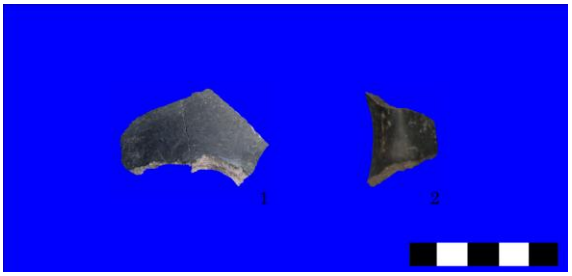


写真 5-69　IG タイプ 3-1 鐙形ボトル

（2）　IG タイプ 3-2（インガタンボ期黒色磨研刻線：IG Negro Pulido Inciso）

①胎土・混和材、②色、③表面調整

IG タイプ 3-1 と同じである。

④装飾

基本的には刻線で幾何学文が施されるが、凹線が用いられることもある。また、貼付文や刺突文、塑像が組み合わされることもある。

⑤その他

IG タイプ 3-1 と同様の地域で類例がみられる。

器形 1：半球鉢

胴部破片のみ確認される。装飾には多様性があり、刻線で短線や幾何学文を施したもの

や、刻線に塑像や貼付文、刺突文を組み合わせて立体的な意匠を施したものなどがみられる。

写真 5-70　IG タイプ 3-2 半球鉢

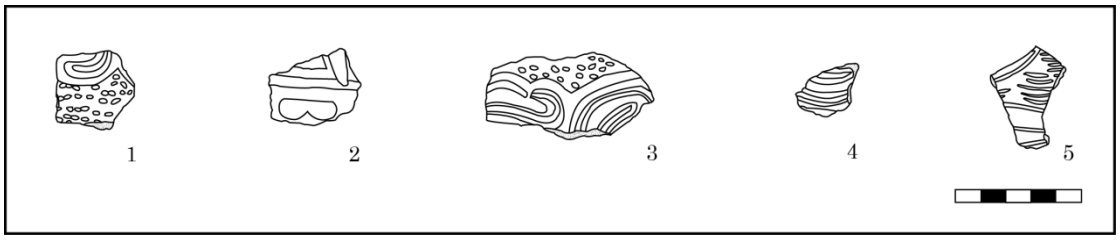
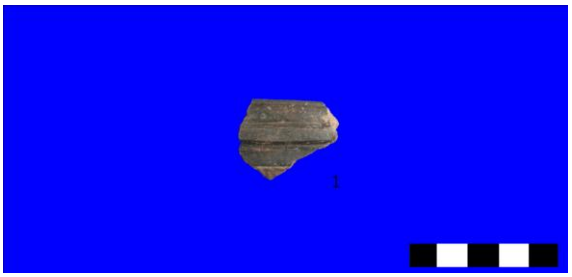


図 5-56　IG タイプ 3-2 半球鉢

器形 2：開口半球鉢

口縁部には塑像で帯状に凸帯がめぐらされ、その上下に刻線が施されることによって、立体的な表現が施された事例が確認されている。口唇部は丸みを帯びている。



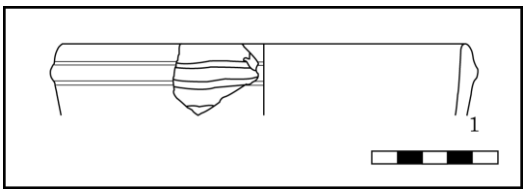


写真 5-71　IG タイプ 3-2 開口半球鉢

図 5-57　IG タイプ 3-2 開口半球鉢

器形 3：コップ形

口縁部は外側に張り出し、段状を呈する。口唇部は平らにならされている。凹線で圏点文が描かれる。

写真 5-72　IG タイプ 3-2 コップ形

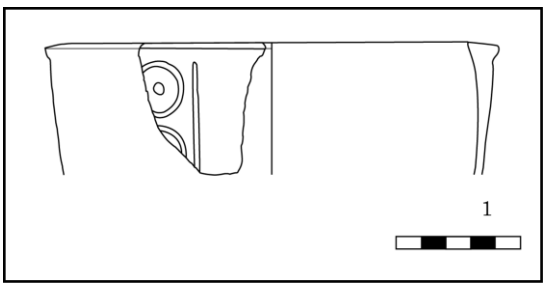


図 5-58　IG タイプ 3-2 コップ形

器形 4：ボトル

胴部破片のみ確認されている。装飾は、刻線で短線が刻まれた例がみられる。

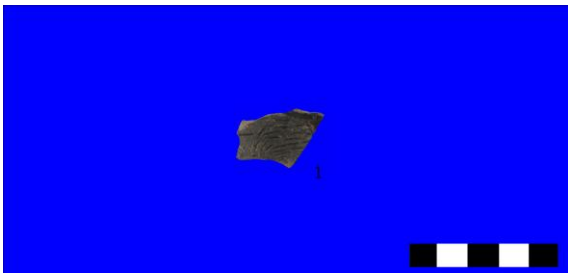


写真 5-73　IG タイプ 3-2 ボトル

（3）　IG タイプ 3-3（インガタンボ期黒色磨研黒鉛塗布：IG Negro Pulido Grafitado）

①胎土・混和材、②色、③表面調整

IG タイプ 3-1 と同じである。

④装飾

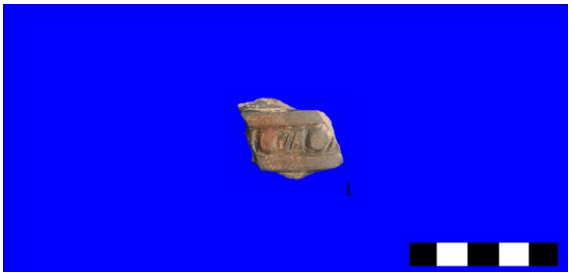
焼成後､刻線部分に黒鉛が塗布される｡刻線や凹線と刺突文との組み合わせも存在する。

⑤その他

ペルー北部山地のクントゥル・ワシ、ラ・グランハ複合、北部海岸のモロ・デ・エテンに類例がみられる。

器形 1：半球鉢

胴部破片のみ確認されている。塑像と刻線の組み合わせによって、立体的な意匠が施され、刻線部分に黒鉛が塗布される。



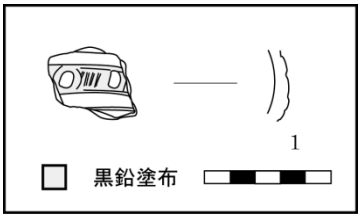


図 5-59　IG タイプ 3-3 半球鉢

写真 5-74　IG タイプ 3-3 半球鉢

器形 2：開口半球鉢

胴部破片のみ確認されている。塑像や貼付文と刻線の組み合わせや、凹線で立体的な表現が施される事例が認められる。刻線や凹線部分に黒鉛が塗布される。

写真 5-75　IG タイプ 3-3 開口半球鉢

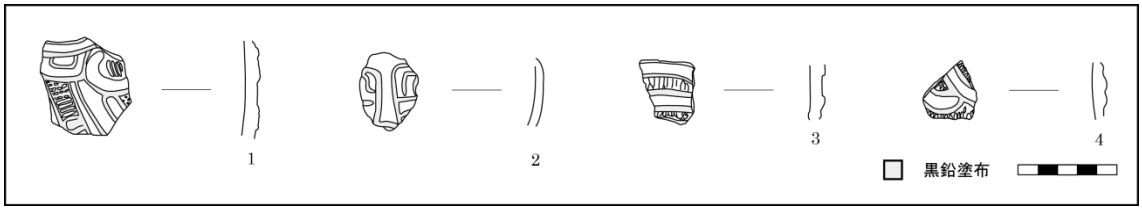


図 5-60　IG タイプ 3-3 開口半球鉢

器形 3：ボトル

胴部破片のみ確認されている。刻線で圏点文が描かれる事例と、刻線と刺突文、もしくは凹線と刺突文の組み合わせを有する事例が認められる。黒鉛は、刻線と凹線内部、または刺突文が施された面に塗布される。

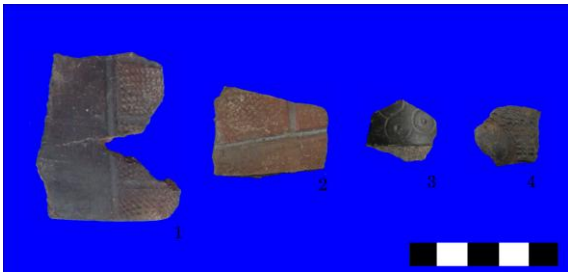


写真 5-76　IG タイプ 3-3 ボトル

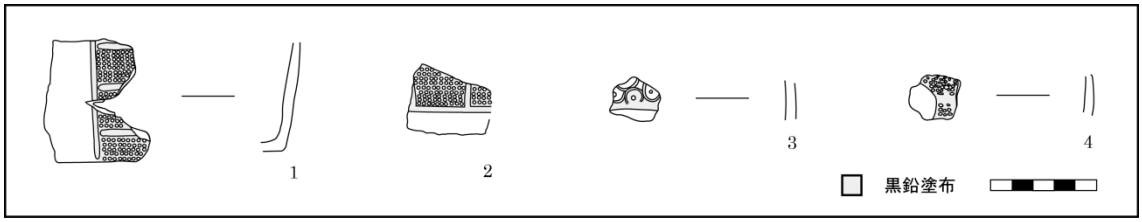


図 5-61　IG タイプ 3-3 ボトル

5-5-4.　IG タイプ 4（インガタンボ期白色：IG Blanco）

白色スリップが塗布された器面を持つ、つくりの良い鉢からなるタイプで、PM IG Blanco との共通性が極めて高い。

①胎土・混和材

硬くしまったやや緻密な胎土である。混和材は細かい砂を主体としており、粒子の直径

は 1mm 以下で、雲母も少ない。

②色

スリップが塗布された部分は白色～灰色で、それ以外の地の部分や刻線内部は明褐色～暗褐色を呈する。

③表面調整

器壁外面は平滑、もしくは研磨されている。器壁内面は平滑である。

④装飾

白色塗彩が施されるのみの事例もあるが、刻線で幾何学文が施文されることが多い。

⑤その他

土器表面に白色スリップが塗布された事例は、形成期中期にはペルー極北部海岸から北部熱帯低地、北部山地、北部海岸にかけて広範囲で認められる。続く形成期後期には、分布範囲は縮小し、中心が極北部海岸や北部熱帯低地へと移行する。北部熱帯低地のバグア複合、セレサル、ミチナルや極北部海岸ピウラ川、チラ川流域、セロ・ニャニャニケ、北部山地のパコパンパ複合、クントゥル・ワシ、北部海岸のモロ・デ・エテンで類例がみられる。

器形 1：鉢

胴部破片のみ確認されている。摩耗が激しいため詳細は不明であるが、半球鉢と開口半球鉢であると考えられる。

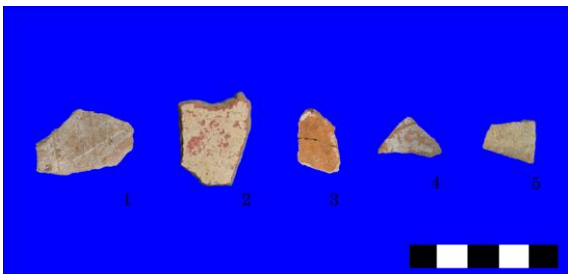


写真 5-77　IG タイプ 4 鉢

5-5-5.　IG タイプ 5（インガタンボ期赤色磨研：IG Rojo Pulido）

赤色スリップが塗布された器面を持つ、つくりの良い鉢とボトルからなるタイプである。装飾の有無や装飾の種類によって、上位タイプである IG タイプ 5-1（インガタンボ期赤色磨研：IG Rojo Pulido）と下位タイプである IG タイプ 5-2（インガタンボ期赤色磨研刻線：IG Rojo Pulido Inciso）、IG タイプ 5-3（インガタンボ期赤色磨研多彩色：IG Rojo Pulido Polícromo）、IG タイプ 5-4（インガタンボ期赤色磨研黒鉛塗布：IG Rojo Pulido Grafitado）とに分かれる。PM タイプ 2 との共通性が高い。

（1）IG タイプ 5-1（インガタンボ期赤色磨研：IG Rojo Pulido）

①胎土・混和材

硬くしまった緻密な胎土である。混和材は細かい砂を主体としており、粒子の直径は 1mm 以下で、雲母も少ない。

②色

スリップがかけられた部分は明赤色～暗赤色を呈し、鉢の場合は内面にもスリップが塗布されている。

③表面調整

スリップがかけられた器壁は研磨されており、部分的に摩耗がみられる。閉じた器形の場合は、器壁外面に比べて器壁内面の整形がやや粗い場合もある。

④装飾

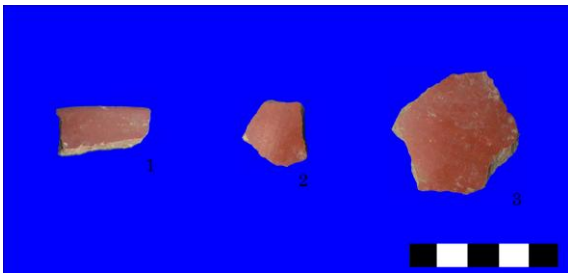
赤色スリップが塗布される。

⑤その他

土器表面に赤色スリップが塗布され、研磨された事例は、ペルー北部やエクアドル南部の多くの場所で確認されている。

器形 1：半球鉢

口縁部が内傾することで閉じた器形が確認されている。口唇部は丸みを帯びている。



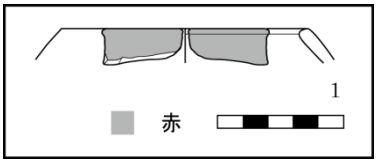
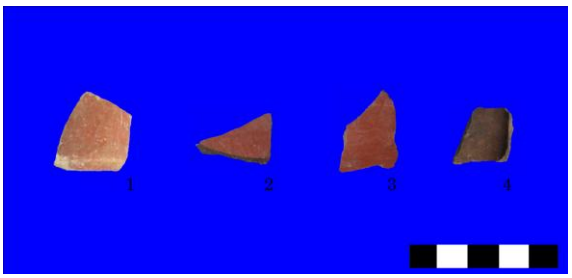


写真 5-78　IG タイプ 5-1 半球鉢

図 5-62　IG タイプ 5-1 半球鉢

器形 2：開口半球鉢

胴部破片のみ確認されている。



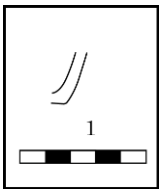
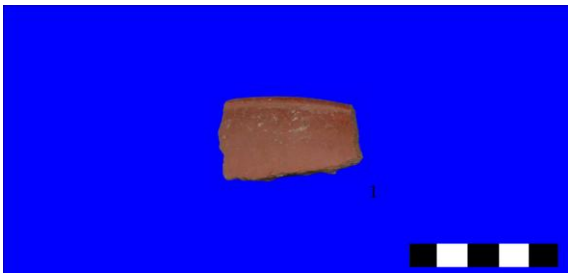


写真 5-79　IG タイプ 5-1 開口半球鉢

図 5-63　IG タイプ 5-1 開口半球鉢

器形 3 外反鉢

口縁部はやや肥厚する。口唇部は丸みを帯びている。



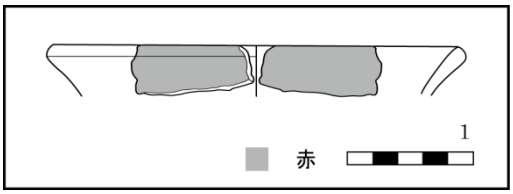
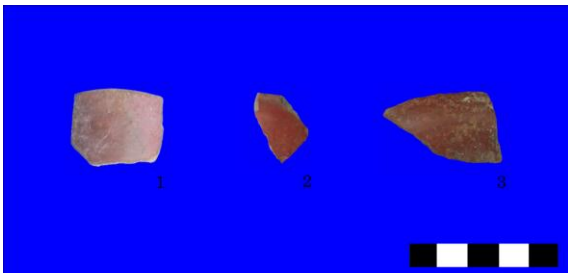


写真 5-80　IG タイプ 5-1 外反鉢（左）

図 5-64　IG タイプ 5-1 外反鉢（上）

器形 4：ボトル

口縁部が外傾してやや内側に切れるものと、外側に張り出した事例が確認される。口唇部はやや鋭いものと、平らにならされたものが認められる。



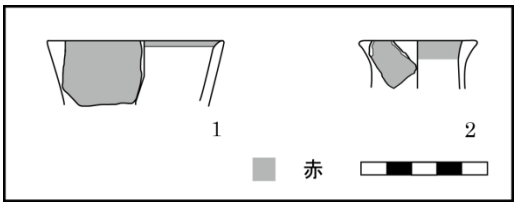


図 5-65　IG タイプ 5-1 ボトル

写真 5-81　IG タイプ 5-1 ボトル

器形 5：鐙形ボトル

摩耗が激しい注口部破片のみ確認される。

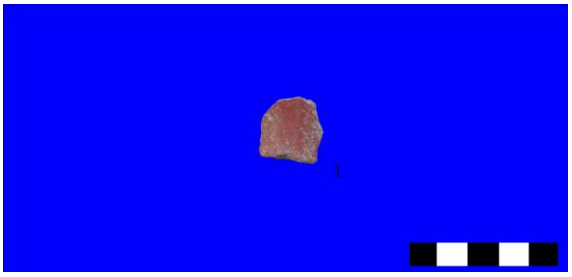


写真 5-82　IG タイプ 5-1 鐙形ボトル

（2）　IG タイプ 5-2（インガタンボ期赤色磨研刻線：IG Rojo Pulido Inciso）

①胎土・混和材、②色、③表面調整

IG タイプ 5-1 と同じである。

④装飾

刻線で幾何学文が施される事例が多いが、切込線が用いられる場合もある。

⑤その他

IG タイプ 5-1 と同様の地域に類例がみられる。

器形 1：開口半球鉢

口縁部はわずかに先細りするものや、やや肥厚して外切れするものなどが確認されている。口唇部は丸みを帯びている。口縁部だけに塗彩が施された事例と器壁内面のみに塗彩が施される事例が認められる。装飾は刻線による円弧の意匠や、重圏文と刺突文との組み合わせが存在する。

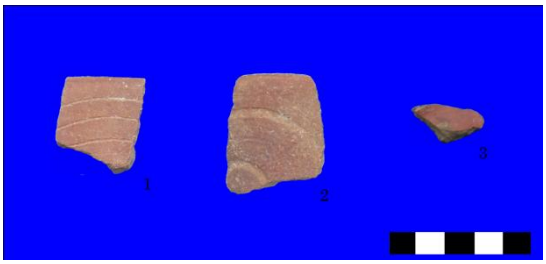


写真 5-83　IG タイプ 5-2 開口半球鉢

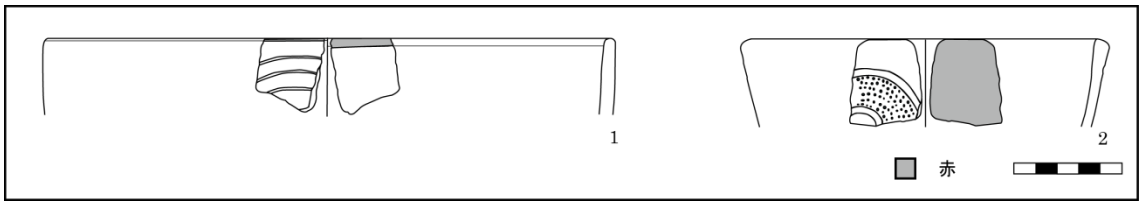


図 5-66　IG タイプ 5-2 開口半球鉢

（3）　IG タイプ 5-3（インガタンボ期赤色磨研多彩色：IG Rojo Pulido Polícromo）

①胎土・混和材

IG タイプ 5-1 と同じである。

②色

明赤色～暗赤色の赤色と白色、紫色、青色、黒色、黄色で塗彩されている。赤色部分を下地として、その他の色が塗り重ねられる場合もある。

③表面調整

IG タイプ 5-1 と同じである。

④装飾

刻線や切込線、表面線で区画された範囲に、赤色、白色、紫色、青色、黒色、黄色の塗彩が塗り分けられる。なお、黒色の塗彩には黒鉛が使用されることもある。

⑤その他

形成期後期には、分布地域が限定的となり、形成期中期よりも北部に移行する。ペルー極北部海岸のセロ・ニャニャニケ、ペルー北部熱帯低地のバグア複合やセレサル、ミチナル、北部山地のラ・グランハ複合、エクアドル南部山地のカタマヨ複合で類例が確認される。

器形 1：半球鉢

胴部破片のみ確認されている。刻線や表面線で区画された範囲が赤色、白色、もしくは黒色で塗彩される。黒色塗彩が施される代わりに、刻線で区画された部分へ面的に黒鉛が塗布される場合もある。

写真 5-84　IG タイプ 5-3 半球鉢

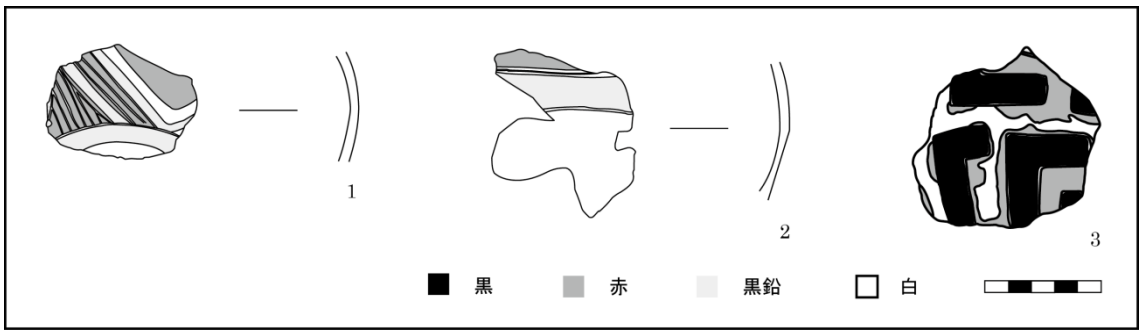


図 5-67　IG タイプ 5-3 半球鉢

器形 2：開口半球鉢

口縁部がわずかに内側に肥厚する事例が確認されている。口唇部は丸みを帯びているものが大半である。装飾に関しては、刻線や表面線で区画された範囲が赤色、白色、紫色や黒色、黄色で塗彩される。刻線では平行線や円文、幾何学文に加えて、花びらを表したような図像表現も認められる。

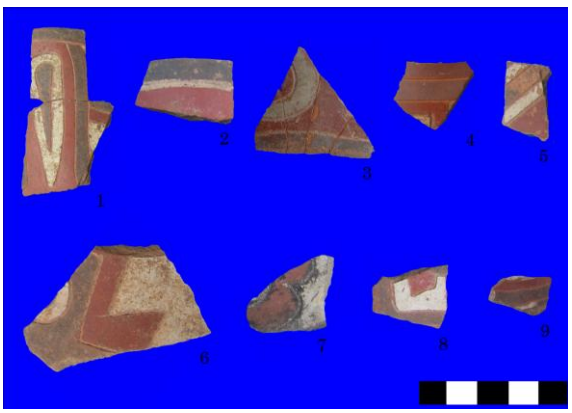


写真 5-85　IG タイプ 5-3 開口半球鉢

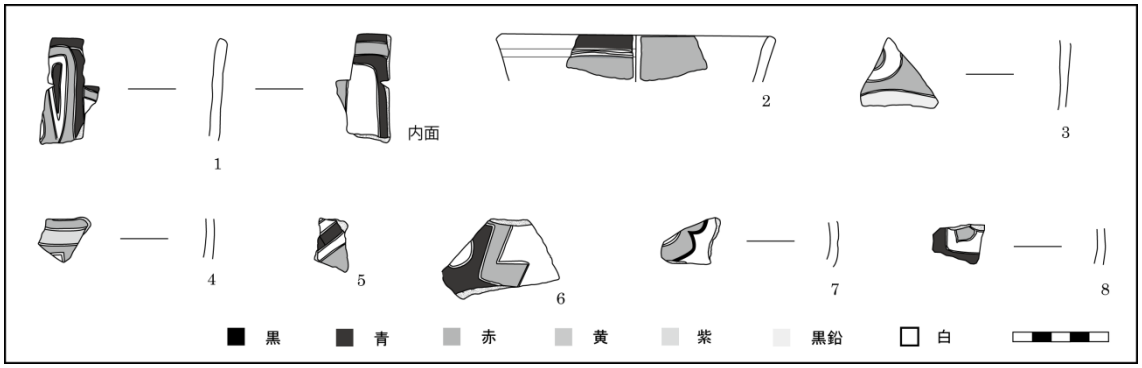


図 5-68　IG タイプ 5-3 開口半球鉢

器形 3：外傾鉢

事例は少ないが、変形口縁と考えられるものが確認されている。刻線で区画された範囲が白色、または青色で塗り分けられる。

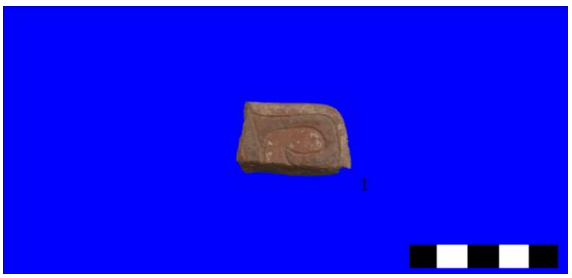


写真 5-86　IG タイプ 5-3 外傾鉢

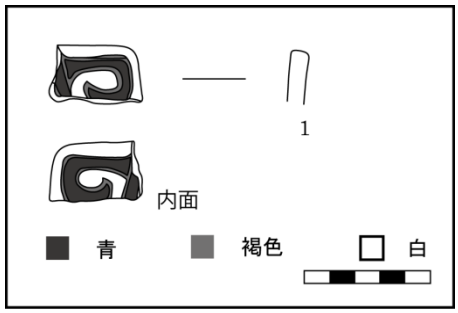


図 5-69　IG タイプ 5-3 外傾鉢

器形 4：外反鉢

胴部破片のみ確認されている。刻線で幾何学文が描かれ、それにより区画された部分が赤色と白色で塗り分けられる。塗彩を施さずに、地の色である褐色を残した部分も存在する。

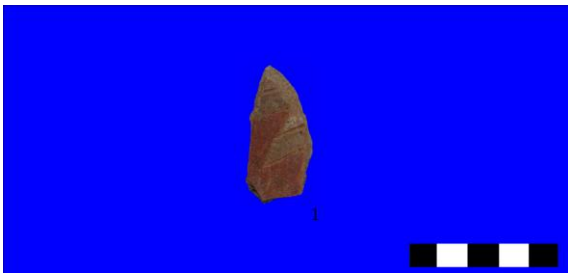


写真 5-87　IG タイプ 5-3 外反鉢

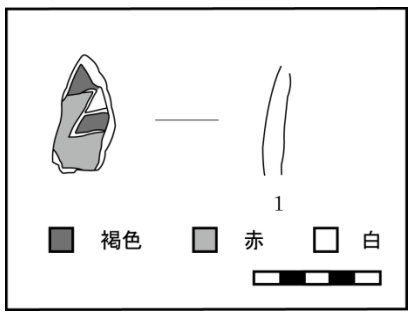


図 5-70　IG タイプ 5-3 外反鉢

器形 5：ボトル

胴部破片のみ確認されている。刻線で区画された範囲が赤色、白色、青色、黒色などで塗り分けられる。また、上述の外反鉢のように地の色が残されている部分も存在する。

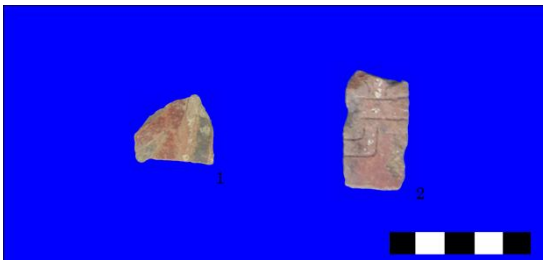


写真 5-88　IG タイプ 5-3 ボトル

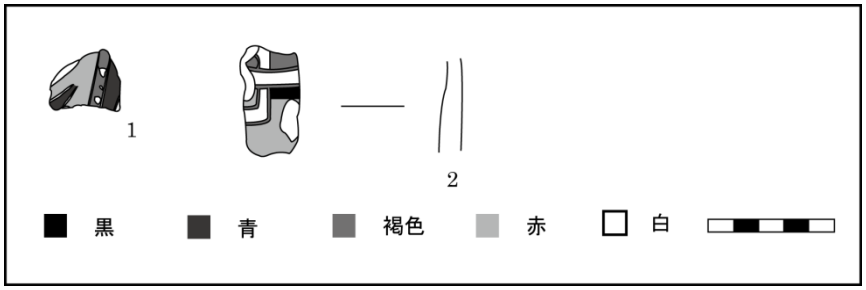


図 5-71　IG タイプ 5-3 ボトル

（3）IG タイプ 5-4（インガタンボ期赤色磨研黒鉛塗布：IG Rojo Pulido Grafitado）

①胎土・混和材

IG タイプ 5-1 と同じである。

②色

スリップがかけられた部分は明赤色～暗赤色を、地の色は明褐色～暗褐色を呈する。

③表面調整

IG タイプ 5-1 と同じである。

④装飾

刻線内、あるいは刻線で区画された範囲に黒鉛が塗布される場合が大半であるが、器壁に直接黒鉛が塗布される例もみられる。

⑤その他

ペルー北部山地を中心に確認される。北部山地のクントゥル・ワシ、パコパンパ複合などに類例がみられる。

器形 1：半球鉢

胴部破片だけが確認されている。研磨された器壁外面の刻線内に黒鉛が充填される。

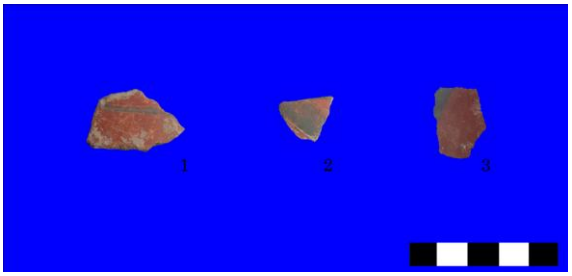


写真 5-89　IG タイプ 5-4 半球鉢

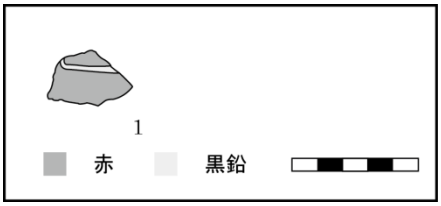


図 5-72　IG タイプ 5-4 半球鉢

器形 2：開口半球鉢

口縁部は肥厚し、外切れしている。器壁外面の口縁下が刻線で区画され、その部分全体に黒鉛が塗布される。出土例では、黒鉛が塗布された部分に刻線で重圏文が描かれている。

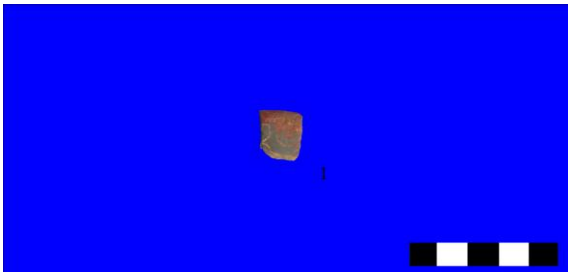


写真 5-90　IG タイプ 5-4 開口半球鉢

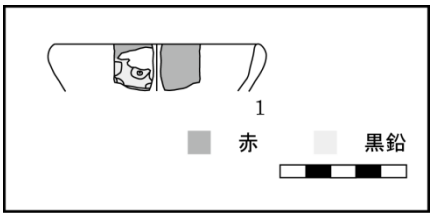


図 5-73　IG タイプ 5-4 開口半球鉢

器形 3：ボトル

胴部破片のみ確認されている。器壁外面が刻線で区画され、その部分に黒鉛が塗布される場合と、刻線を伴わずに器壁に直接黒鉛が塗布される場合が認められる。

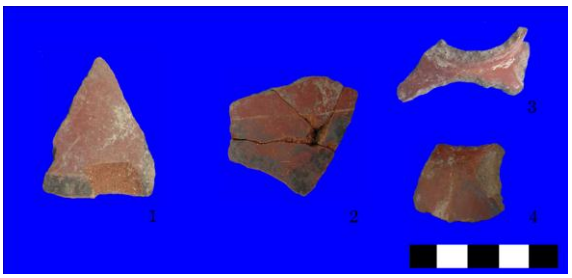


写真 5-91　IG タイプ 5-4 ボトル

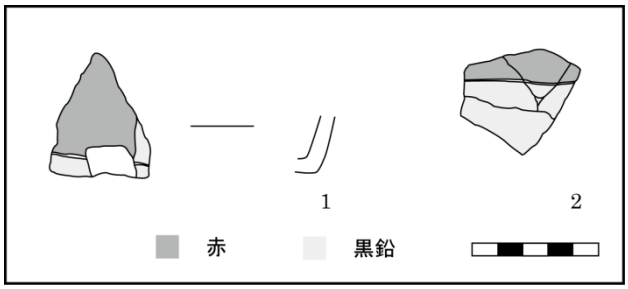


図 5-74　IG タイプ 5-4 ボトル

5-5-6. IG タイプ 6（インガタンボ期赤色平滑：IG Rojo Alisado）

赤色の器面を持つ、ややつくりの良い土器からなるタイプである。装飾の有無、またはその種類によって、上位タイプである IG タイプ 6-1（インガタンボ期赤色平滑：IG Rojo Alisado）と、五つの下位タイプとに分けられる。PM タイプ 5 との共通性が高い。

（1） IG タイプ 6-1（インガタンボ期赤色平滑：IG Rojo Alisado）

①胎土・混和材

硬くしまったやや緻密な胎土である。混和材は細かい砂を主体としており、粒子の直径は 1mm 以下で、雲母の量も少ない。

②色

明赤色～暗赤色を呈する。

③表面調整

全体的に平滑であるが、筋状の整形痕が残っている場合もある。閉じた器形の場合は、器壁外面に比べて器壁内面の整形がやや粗い。

④装飾

基本的に赤色スリップが塗布されるだけである。それ以外では、白色や黒色の塗彩や、刺突文が組み合わせた例がそれぞれ 1 点確認されている。

⑤その他

ペルー北部とエクアドル南部の広範囲に類例がみられる。

器形 1：短頚壺

器形は口縁部が外反するものが多い。口縁部は内側に肥厚し、口唇部は丸みを帯びているか、やや平らにならされている。装飾は、器壁外面と器壁内面の口縁部にかけて、赤色塗彩が施される。

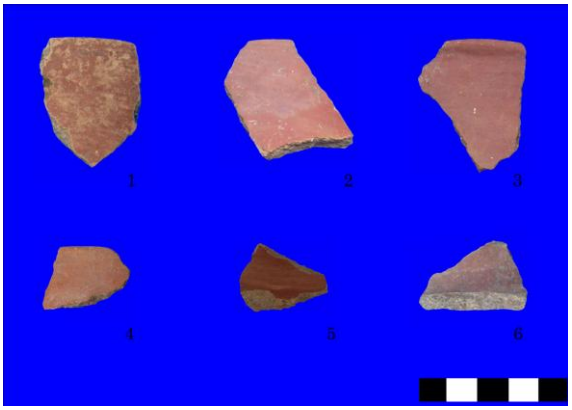


写真 5-92　IG タイプ 6-1 短頚壺

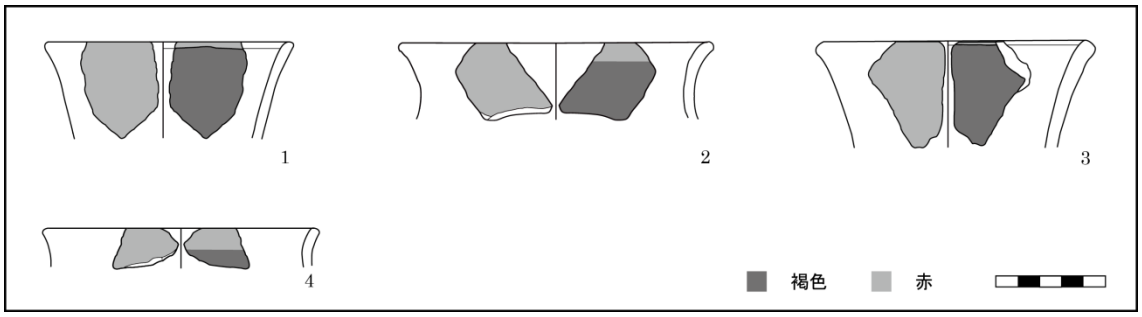


図 5-75　IG タイプ 6-1 短頸壺

器形 2：半球鉢

器壁全体が内湾する器形や、口縁部のみが内側にすぼまる器形が存在する。口縁部は肥厚するものが多く、ややうちに切れる。口唇部は丸みを帯びたものや平らにならされたものが認められる。装飾は、器壁外面と器壁内面の口縁部まで赤色塗彩が施されるほか、刺突文や塑像を用いた顔の表現がみられる。また、玉状に白色塗彩が施された事例も確認されている。

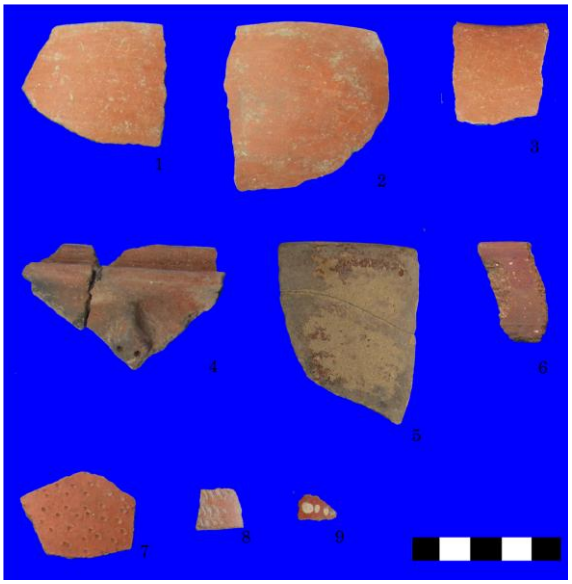


写真 5-93　IG タイプ 6-1 半球鉢

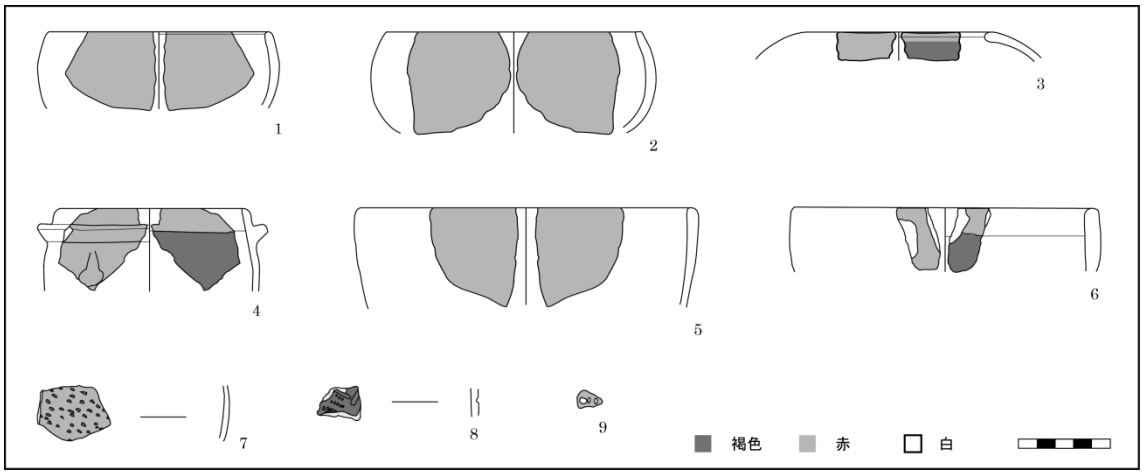


図 5-76　IG タイプ 6-1 半球鉢

器形 3：開口半球鉢

口縁部は肥厚するものや、やや先細りするもの、内側や外側に切れるものが確認されるなど多様性がある。口唇部は丸みを帯びるか、やや鋭い。装飾は器壁両面、もしくは器壁外面から器壁内面の口縁部にかけて赤色塗彩が施される。また、赤色の上から口唇部のみに黒色で楕円状に塗彩が施された事例も存在する。

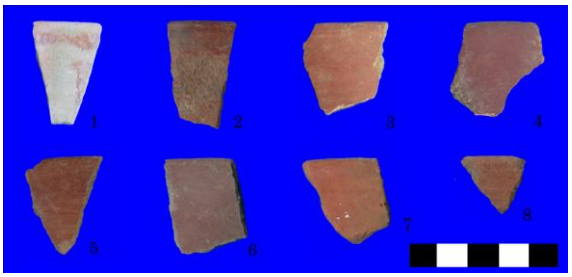


写真 5-94　IG タイプ 6-1 開口半球鉢

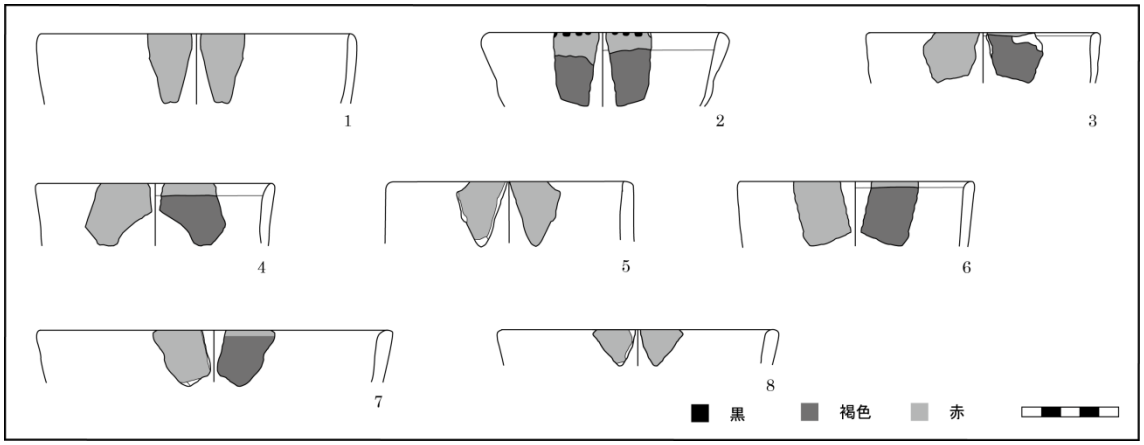
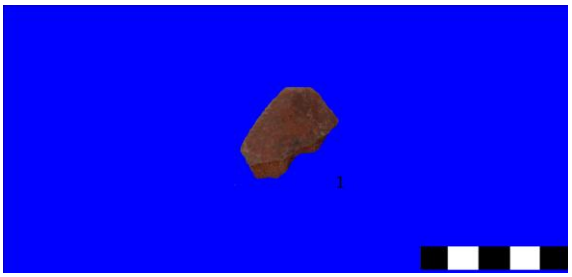


図 5-77　IG タイプ 6-1 開口半球鉢

器形 4：外傾鉢

口縁部はやや内側に切れ、口唇部は丸みを帯びている。器壁両面に赤色塗彩が施される。



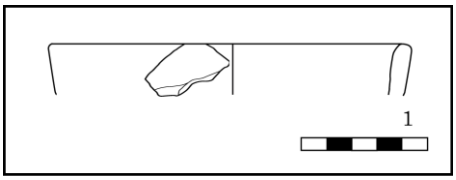
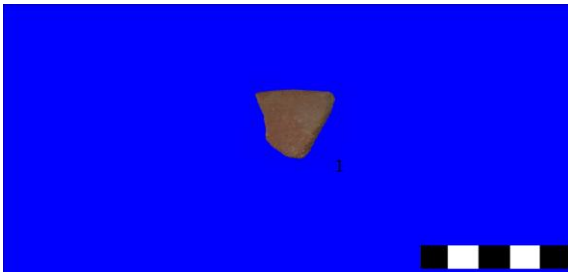


写真 5-95　IG タイプ 6-1 外傾鉢（左）
図 5-78　IG タイプ 6-1 外傾鉢（上）

器形 5：外反鉢

口縁部はやや肥厚し、口唇部は丸みを帯びている。器壁両面に赤色塗彩が施される。



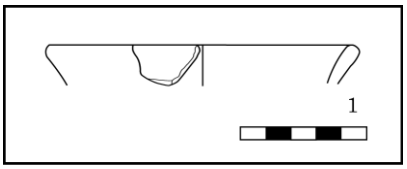


写真 5-96　IG タイプ 6-1 外反鉢（左）
図 5-79　IG タイプ 6-1 外反鉢（上）

器形 6：高坏

脚部破片のみ確認されている。器壁外面は平滑であるが、器壁内面は平坦、または粗整形を呈する。器壁外面だけに赤色塗彩が施される。

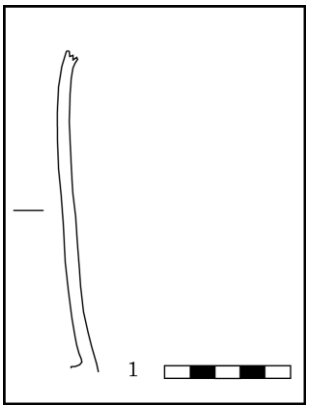


写真 5-97　IG タイプ 6-1 高坏（左）
図 5-80　IG タイプ 6-1 高坏（上）

器形 7：ボトル

胴部破片が主であるが、口縁部が外反する事例も確認されている。赤色塗彩は、器壁外面、あるいは器壁外面から器壁内面の口縁部にかけて施される。

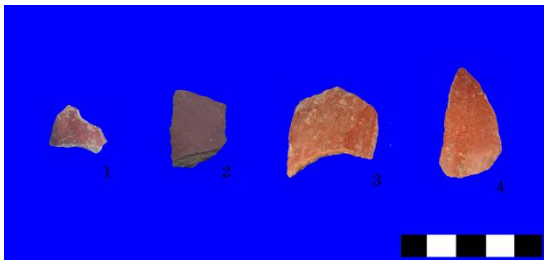


写真 5-98　IG タイプ 6-1 ボトル

（2）IG タイプ 6-2（インガタンボ期赤色平滑刻線：IG Rojo Alisado Inciso）

①胎土・混和材、②色、③表面調整

IG タイプ 6-1 と同じである。

④装飾

刻線や切込線で幾何学文が施される。刺突文や、刻線と刺突文との組み合わせもみられる。

⑤その他

IG タイプ 6-1 と同様に広範囲で類例がみられる。

器形 1：壺

胴部破片のみ確認されており、刻線で平行線が描かれる。

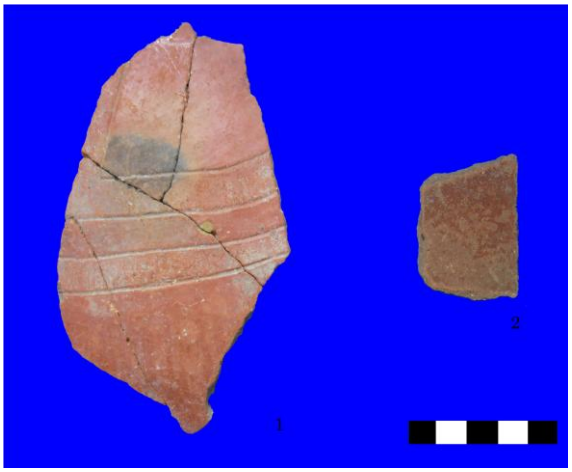


写真 5-99　IG タイプ 6-2 短頸壺

器形 2：半球鉢

器壁全体が内側に湾曲する器形や、口縁部のみがわずかに内側にすぼまる器形が確認されている。口縁部形状は、やや先細りするものや、肥厚するものがみられる。口唇部は、丸みを帯びているものが大半であるが、やや鋭くなったものも認められる。装飾は、器面両面、もしくは器壁外面のみに赤色塗彩が施される。また、器壁外面に、刻線や切込線で、平行線や平行斜面とその組み合わせ、波状や幾何学文が施される。

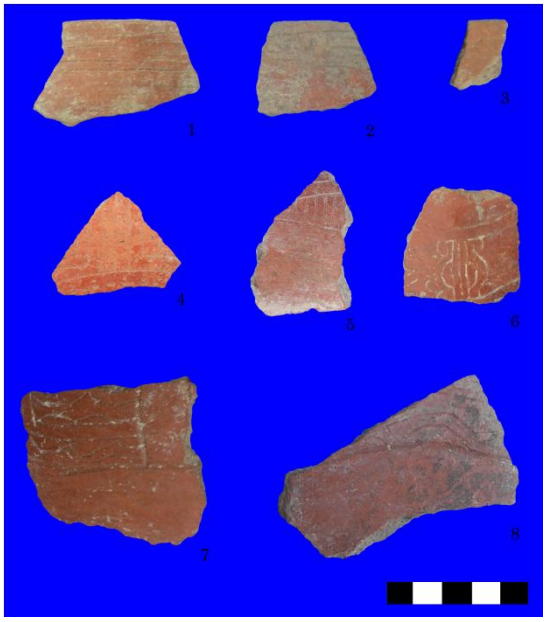


写真 5-100　IG タイプ 6-2 半球鉢

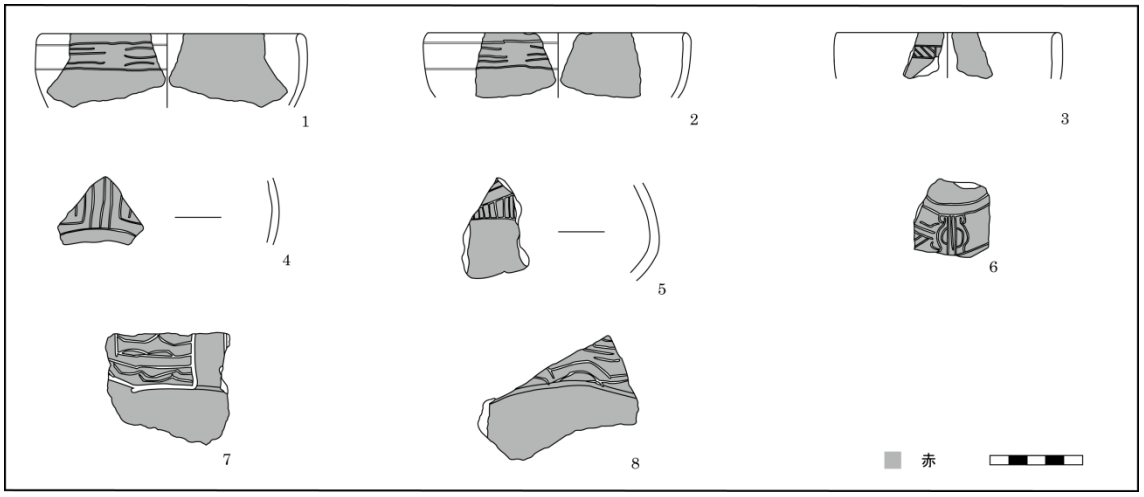


図 5-81　IG タイプ 6-2 半球鉢

器形 3：開口半球鉢

口縁部は、肥厚するものや、内側や外側にやや切れるもの、わずかに外反するものなどがみられる。口唇部は丸みを帯びたものが大半である。装飾は、刻線と切込線で半円や同心半円、平行線や幾何学文が描かれる。

写真 5-101　IG タイプ 6-2 開口半球鉢 1

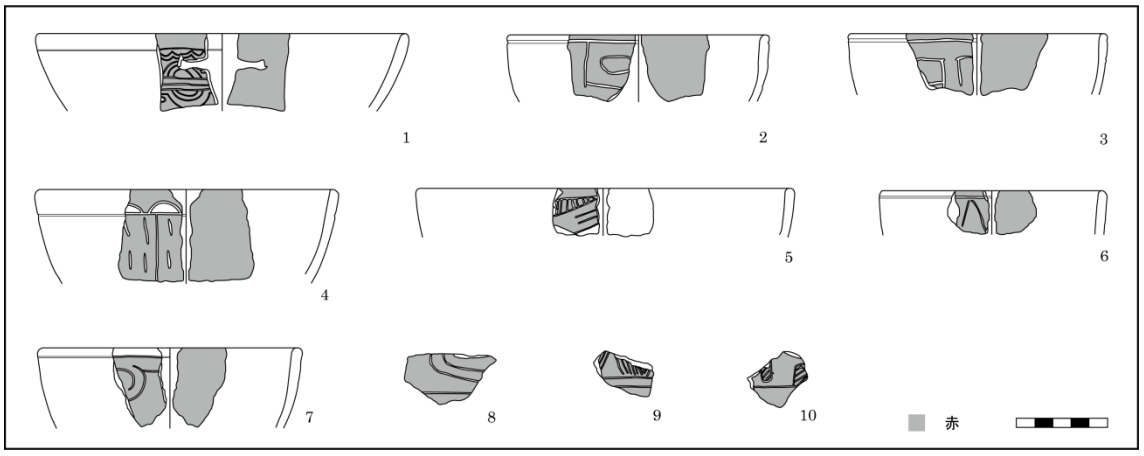


図 5-82　IG タイプ 6-2 開口半球鉢 1

写真 5-102　IG タイプ 6-2 開口半球鉢 2

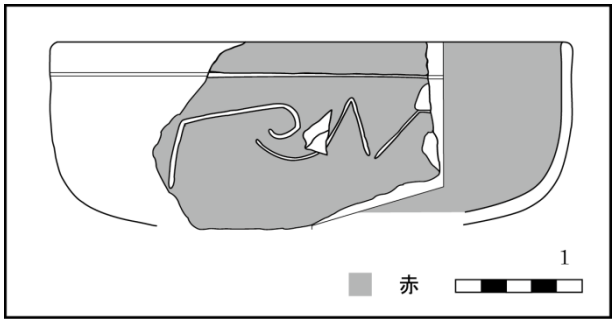
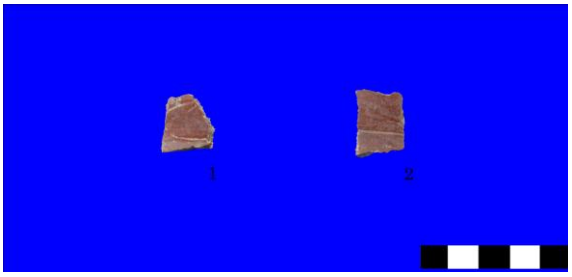


図 5-83　IG タイプ 6-2 開口半球鉢 2

器形 3：外反鉢

胴部破片のみ確認されている。器壁両面に赤色塗彩が施されている。



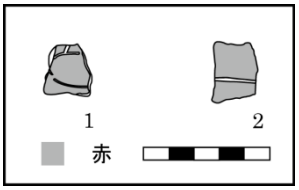
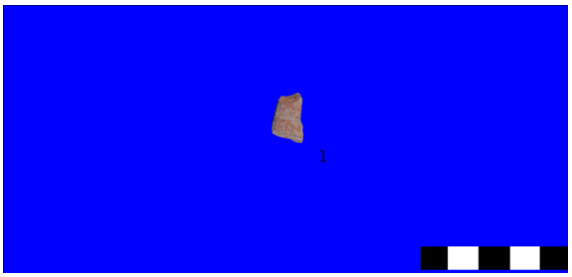


写真 5-103　IG タイプ 6-2 外反鉢（左）

図 5-84　IG タイプ 6-2 外反鉢（上）

器形 4：ボトル

胴部破片のみ確認されている。



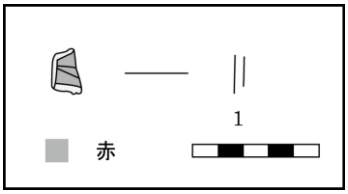


写真 5-104　IG タイプ 6-2 ボトル（左）

図 5-85　IG タイプ 6-2 ボトル（上）

（3）IG タイプ 6-3（インガタンボ期赤色平滑磨線：IG Rojo Alisado Linea Bruñida）

①胎土・混和材、②色、③表面調整

IG タイプ 6-1 と同じである。

④装飾

磨線で幾何学文が施される。

⑤その他

ペルー北部熱帯低地のセレサル、ミチナル、北部山地のパコパンパ複合、ラ・グランハ複合、クントゥル・ワシに類例がみられる。

器形 1：開口半球鉢

口縁部はやや外傾し、口唇部は丸みを帯びている。器壁外面のマット面に垂直方向に平行磨線が描かれる事例と、赤色塗彩が施された器壁外面に格子状に磨線が描かれる事例が確認されている。

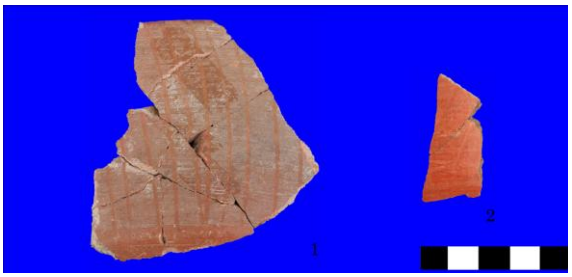


写真 5-105　IG タイプ 6-3 開口半球鉢

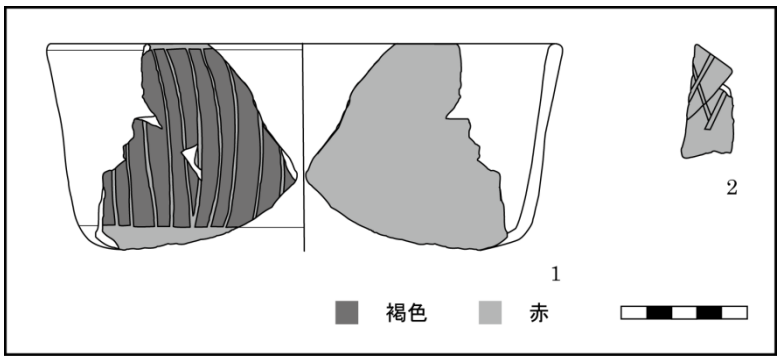


図 5-86　IG タイプ 6-3 開口半球鉢

（4）IG タイプ 6-4（インガタンボ期赤色・白色塗彩：IG Rojo y Blanco）

①胎土・混和材

IG タイプ 6-1 と同じである。

②色

明赤色～暗赤色の赤色部分と白色～灰白色の白色部分の塗り分けがみられる。

③表面調整

全体として平滑であるが、部分的に研磨されている場合もある。閉じた器形の場合は、器壁外面に比べて器壁内面の整形がやや粗い。

④装飾

基本的には赤色スリップの上に白色顔料で塗彩が施される。刻線で赤色部分と白色部分が区画されるが、白色部分に刻線で幾何学文が描かれる事例もある。

⑤その他

ペルー極北部海岸のセロ・ニャニャニケ、ピウラ川とチラ川流域、北部熱帯低地のバグア複合、セレサルとミチナル、北部山地のパコパンパ複合、クントゥル・ワシ、北部海岸のモロ・デ・エテンに類例がみられる。

器形 1：半球鉢

口縁部がやや内側にすぼまる器形が確認されている。口唇部は丸みを帯びる。装飾は、器壁外面の口縁下部と胴部に平行線をひいて文様帯をつくり、その内部に白色塗彩が施される事例が認められる。文様帯内部はマット面で、刻線で三角形状や波状、幾何学文が描かれる。

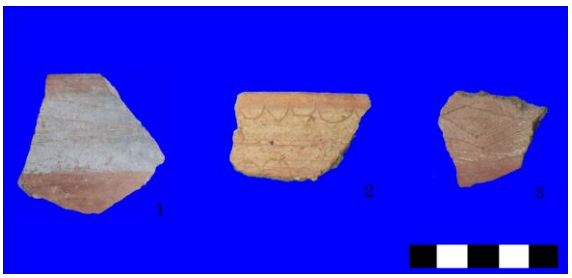


写真 5-106　IG タイプ 6-4 半球鉢

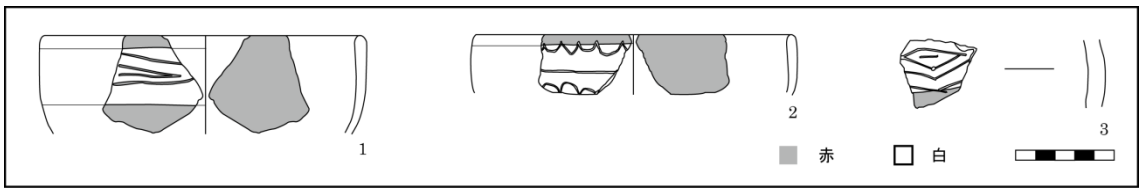


図 5-87　IG タイプ 6-4 半球鉢

器形 2：開口半球鉢

口縁部は肥厚するものが多いが、内側にわずかに切れるものも認められる。口唇部は、丸みを帯びたものが大半であるが、やや鋭くなった例も存在する。装飾は、半球鉢と同様に器壁外面に文様帯をつくり、白色塗彩を施した事例がみられる。文様帯はマット面を呈し、刻線で円文、格子、三角形、幾何学文が描かれるほか、ヘビと考えられる図像表現も施される。

写真 5-107　IG タイプ 6-4 開口半球鉢

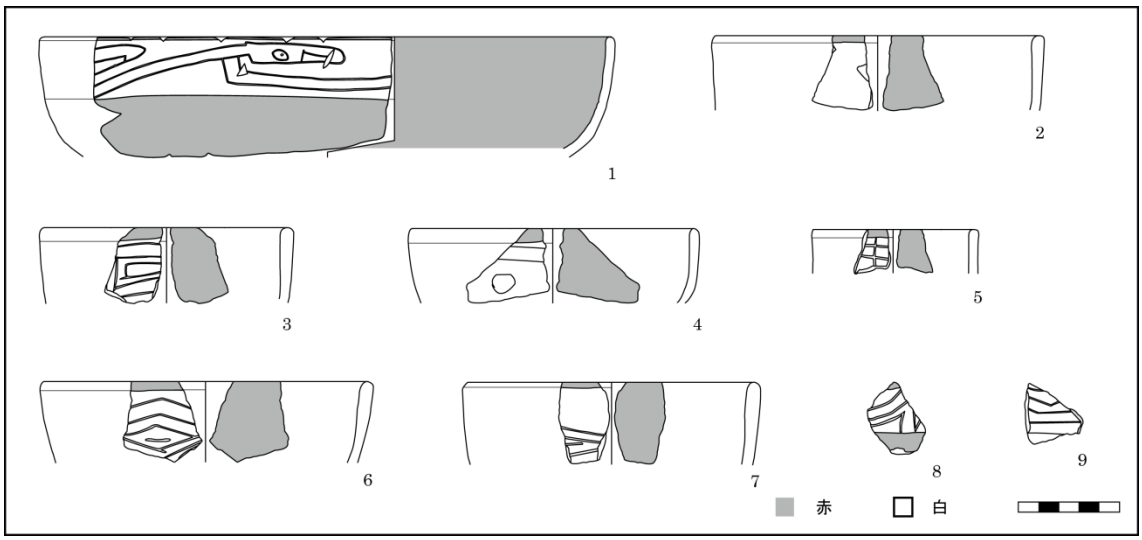


図 5-88　IG タイプ 6-4 開口半球鉢

器形 3：外反鉢

口縁部はわずかに内側に肥厚し、口唇部は丸みを帯びている。器壁外面の文様帯に、刻線で花びらに似た図像が描かれ、その内部や器壁外面が赤色と白色で塗り分けられる。

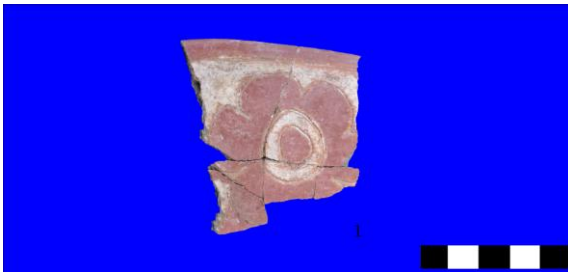


写真 5-108　IG タイプ 6-4 外反鉢

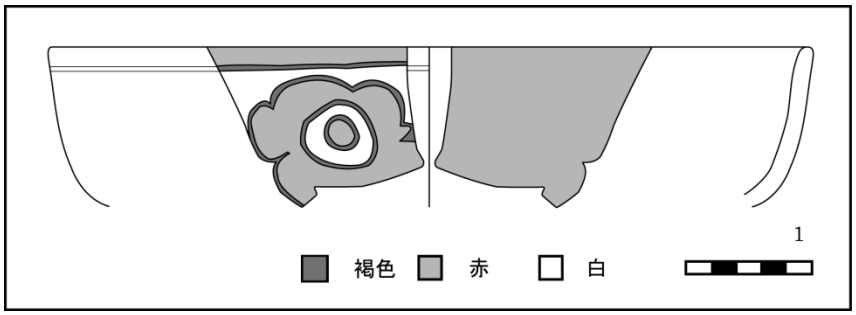


図 5-89　IG タイプ 6-4 外反鉢

（5）IG タイプ 6-5（インガタンボ期赤色塗彩：IG Rojo Alisado Pintado）

①胎土・混和材

IG タイプ 6-1 と同じである。

②色

器壁内面から外面の口縁部にかけて赤色スリップが塗布される。それ以外の部分は明褐色～暗褐色の地の色が表出している。

③表面調整

基本的に IG タイプ 6-1 と同じであるが、地の部分が平坦の場合もある。

④装飾

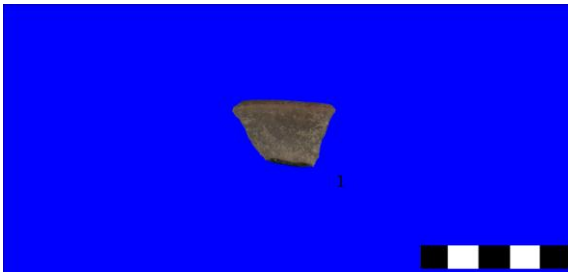
赤色塗彩が施されるだけである。IG タイプ 6-1 とはスリップが塗布された範囲が異なる。器壁内面のみ、もしくは内面から外面口縁部にかけて塗彩がみられるものや、器壁外面に部分的に赤色塗彩が施される場合をこのタイプとしている。

⑤その他

ペルー北部やエクアドル南部の広範囲で類例がみられる。

器形 1：短頚壺

口縁部は外に切れる。器壁外面の口縁部から器壁内面にかけて赤色塗彩が施される。



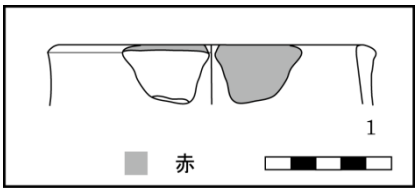


写真 5-109　IG タイプ 6-5 短頚壺

図 5-90　IG タイプ 6-5 短頚壺

器形 2：半球鉢

口縁部が大きく内湾する器形や、わずかにうちにすぼまる器形が認められる。口縁部形状は肥厚し、口唇部は丸みを帯びている。装飾については、口縁部と器壁内面、または器壁外面に部分的に帯状の赤色塗彩が施された例が存在する。

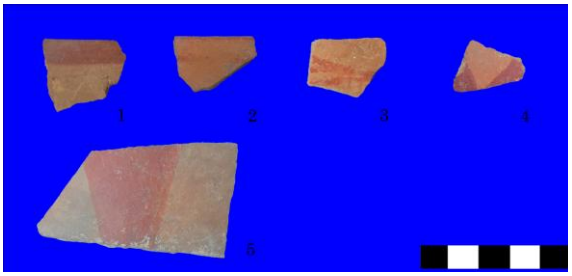


写真 5-110　IG タイプ 6-5 半球鉢

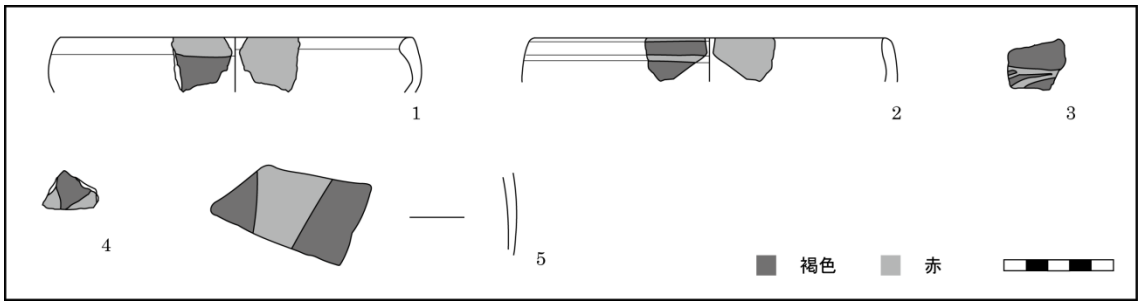


図 5-91　IG タイプ 6-5 半球鉢

器形 3：開口半球鉢

口縁部は肥厚するもの、やや平らにならされたものと、外切れするものが確認されている。口唇部は丸みを帯びている。装飾は、口縁部と器壁内面に塗彩がみられる事例に加えて、器壁両面の口縁部のみが塗彩されるもの、あるいは器壁内面の口縁部のみに塗彩が施される例が認められる。

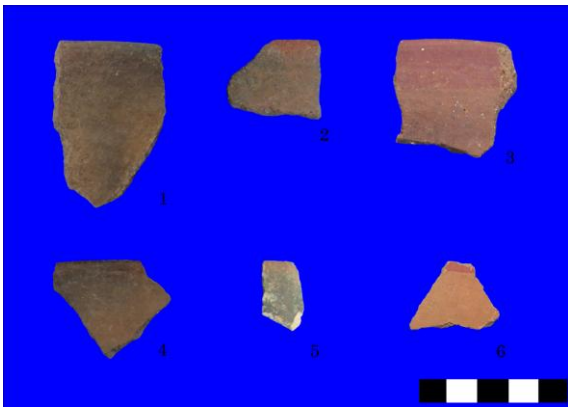


写真 5-111　IG タイプ 6-5 開口半球鉢

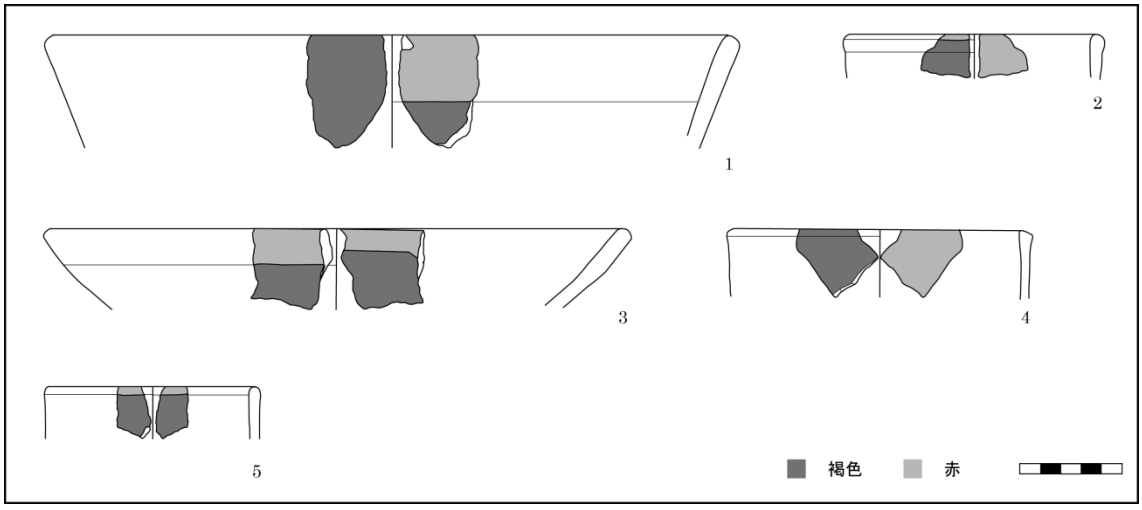


図 5-92　IG タイプ 6-5 開口半球鉢

器形 4：外傾鉢

口縁部は内側に肥厚するものや外側に切れるものが確認されている。口唇部は丸みを帯びるか、やや平らにならされている。装飾は、器壁外面の口縁部から器壁内面にかけて赤色塗彩が施される事例がみられる。

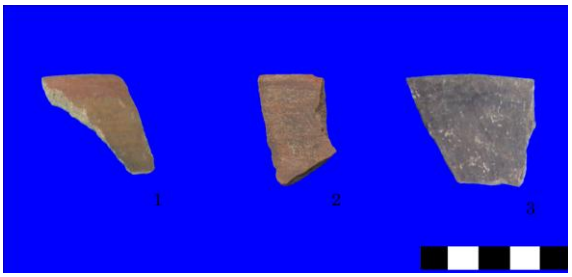


写真 5-112　IG タイプ 6-5 外傾鉢

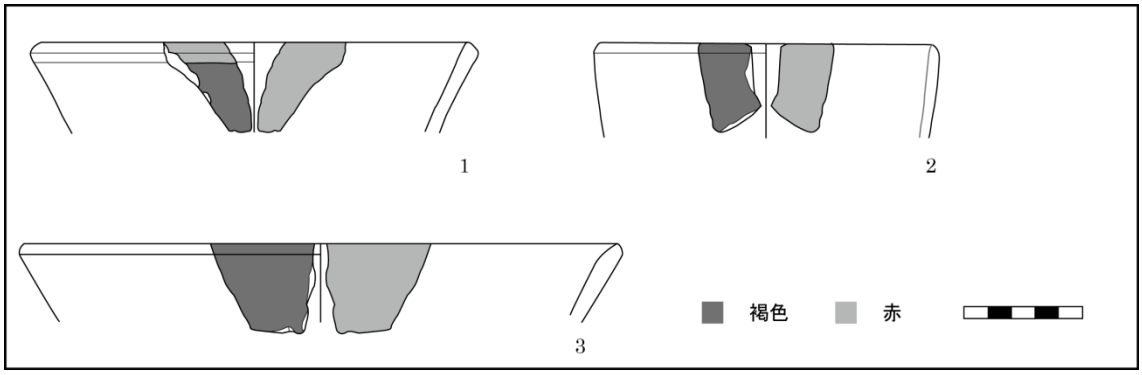


図 5-93　IG タイプ 6-5 外傾鉢

器形 5：外反鉢

口唇部は丸みを帯びる。器壁外面の口縁部下部から器壁内面にかけて塗彩が施される。

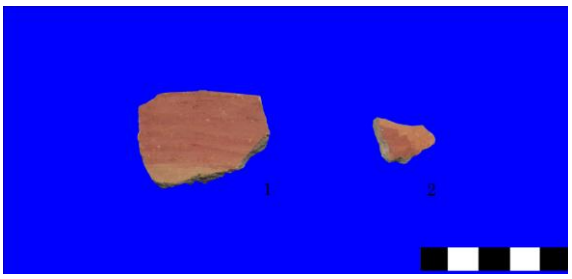


写真 5-113　IG タイプ 6-5 外反鉢

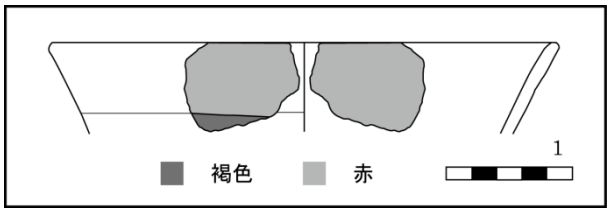


図 5-94　IG タイプ 6-5 外反鉢

器形 6：ボトル

口縁部はやや外に切れるか、外反する。口唇部は丸みを帯びている。器壁両面の口縁部のみに赤色塗彩が施される。

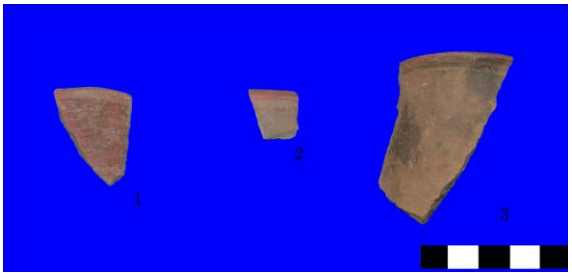


写真 5-114　IG タイプ 6-5 ボトル

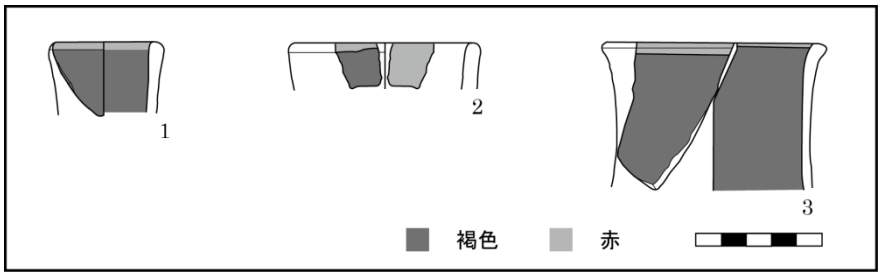


図 5-95　IG タイプ 6-5 ボトル

器形 7：鐙形ボトル

注口部のみ確認されている。胴部との接合面に赤色塗彩がみられる。

写真 5-115　IG タイプ 6-5 鐙形ボトル

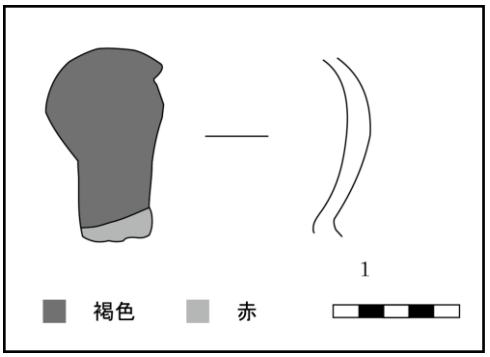


図 5-96　IG タイプ 6-5 鐙形ボトル

（6）IG タイプ 6-6（インガタンボ期赤色塗彩刻線：IG Rojo Alisado Pintado Inciso）

①胎土・混和材、②色、③表面調整

IG タイプ 6-5 と同じである。

④装飾

基本的には IG タイプ 6-5 と同じであるが、唯一の差異は刻線による施文で幾何学文や図像が描かれることである。

⑤その他

ペルー北部やエクアドル南部の広範囲に類例が認められる。

器形 1：半球鉢

器壁全体が大きく内湾する器形や、口縁部のみ内側にすぼまる器形が確認されている。口縁部は肥厚するものが多い。口唇部は丸みを帯びるか、やや平らにならされている。装飾は、器壁外面の口縁部から器壁内面にかけて塗彩が施されるものが大半である。また、器壁外面に刻線によって区画された文様帯がつくられ、それ以外の部分に赤色塗彩が施された事例や、刻線による区画を伴わずに帯状の塗彩がみられる例も存在する。刻線による装飾では、平行線や階段、鎖状、幾何学文などが描かれる。

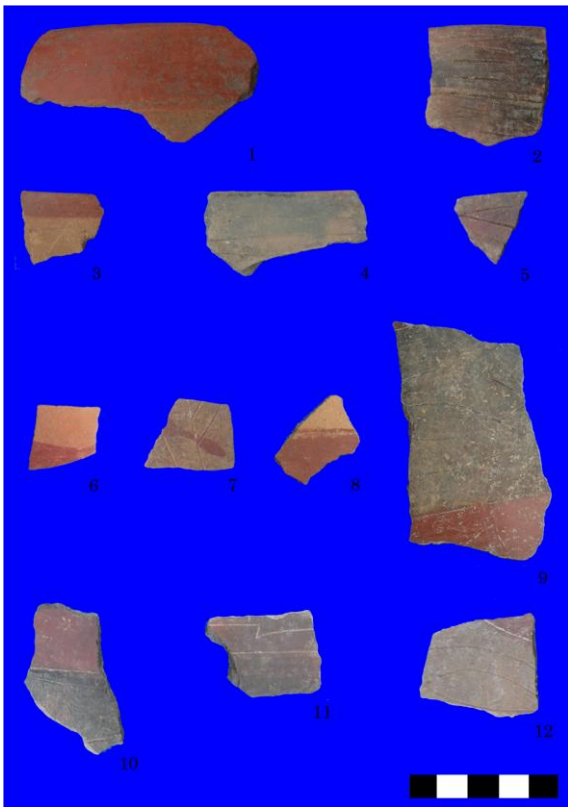


写真 5-116　IG タイプ 6-6 半球鉢

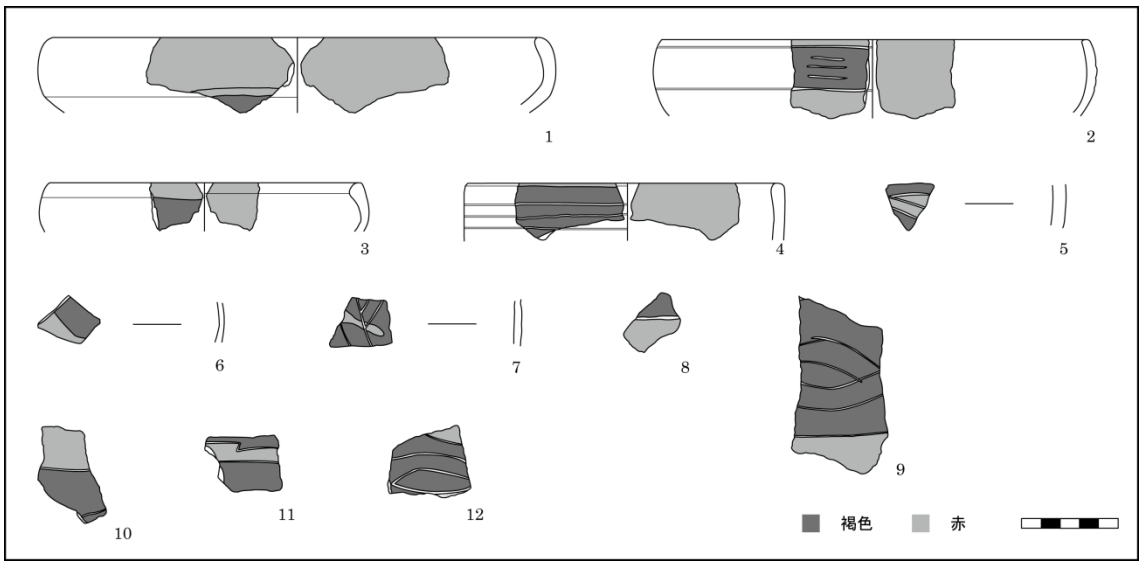
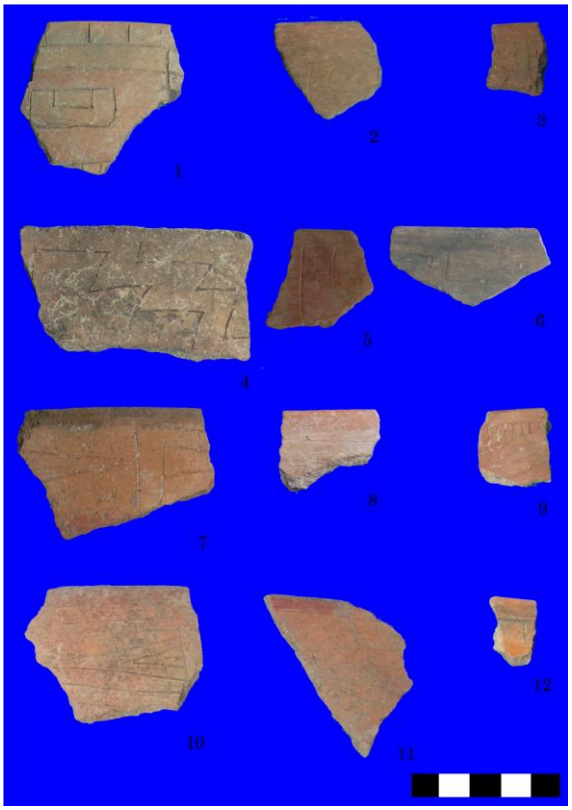


図 5-97　IG タイプ 6-6 半球鉢

器形 2：開口半球鉢

口縁部は、内側や外側に切れるもの、肥厚するもの、わずかに先細るものなどがみられる。口唇部は丸みを帯びたものが大半であるが、平らにされたものも確認される。装飾は、半球鉢と同様の方法で赤色塗彩が施される。また、刻線による装飾には多様性があり、平行線や平行斜線、三角形、階段、渦巻や幾何学文のほかに目を表した意匠もみられる。



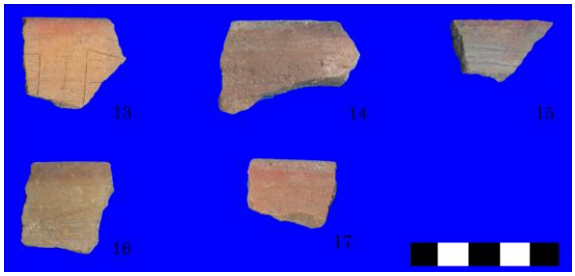


写真 5-117　IG タイプ 6-6 開口半球鉢 1(左)

写真 5-118　IG タイプ 6-6 開口半球鉢 2(上)

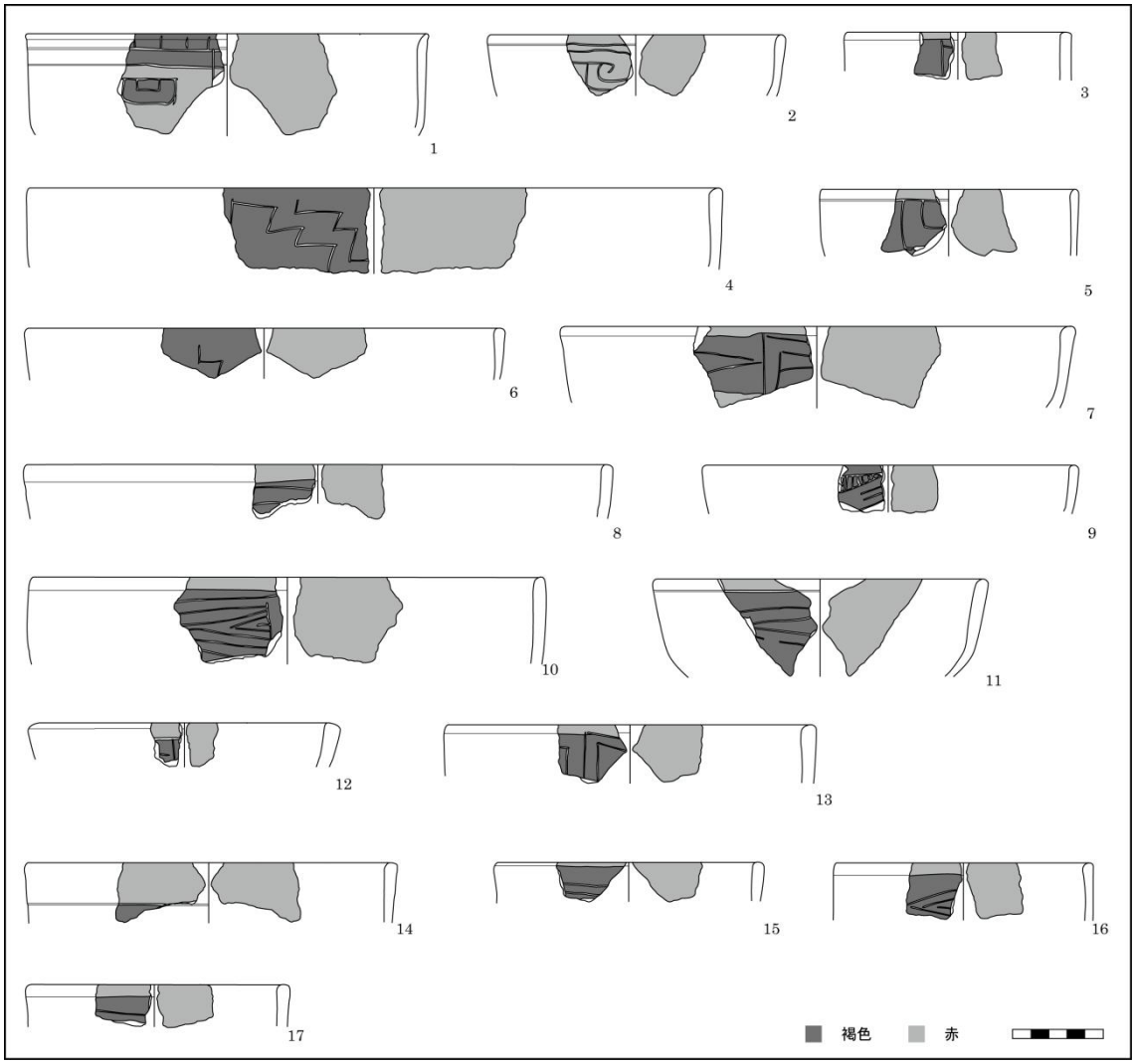
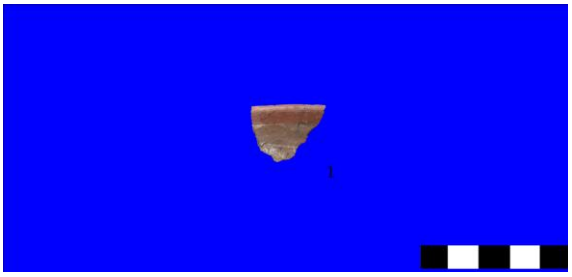


図 5-98　IG タイプ 6-6 開口半球鉢

器形 3：外反鉢

口唇部は丸みを帯びている。器壁外面の口縁部から器壁内面にかけて塗彩が施される。



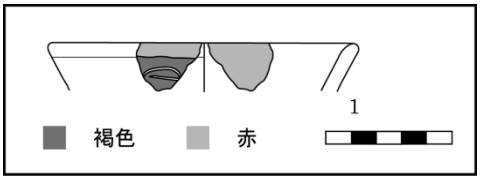


写真 5-119　IG タイプ 6-6 外反鉢（左）

図 5-99　IG タイプ 6-6 外反鉢（上）

器形 4：ボトル

胴部上側と注口部との接合部分に刻線をめぐらし、その部分に赤色塗彩を施す事例が確

認されている。

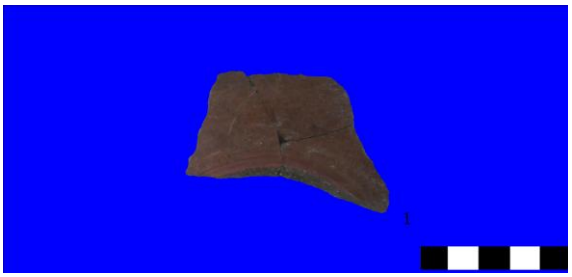


写真 5-120　IG タイプ 6-6 ボトル

5-5-7.　IG タイプ 7（インガタンボ期褐色磨研：IG Marrón Pulido）

褐色の器面を持つ、つくりの良い鉢とボトルからなるタイプである。刻線による装飾の有無によって上位タイプの IG タイプ 7-1（インガタンボ期褐色磨研：IG Marrón Pulido）と下位タイプの IG タイプ 7-2（インガタンボ期褐色磨研刻線：IG Marrón Pulido Inciso）とに分かれる。

（1）　IG タイプ 7-1（インガタンボ期褐色磨研：IG Marrón Pulido）

①胎土・混和材

硬くしまった緻密な胎土である。混和材は細かい砂を主体としており、粒子の直径は 1mm 以下で、雲母は極めて少ない。

②色

明褐色～暗褐色を呈する。

③表面調整

全体として高度に研磨されている。半球鉢やボトルといった閉じた器形の内面は、整形がやや粗い場合がある。

④装飾

基本的に無文であるが、赤色塗彩が施された土器片も出土している。

⑤その他

ペルー北部やエクアドル南部の多くの場所で類例がみられるが、北部熱帯低地では明確に確認できない。インガタンボでは、器壁外面に赤色塗彩が施された例が存在しており、クントゥル・ワシで報告された KW Beige との類似性が示唆される。

器形 1：半球鉢

器壁全体が大きく内湾して無頚壺と同様の形態をとる器形と、口縁部のみ内側にすぼまる器形が確認されている。口縁部は、内側に肥厚するものが多いが、口唇に向かって肥厚した後に先細りするものもみられる。口唇部は丸みを帯びる。また、平底の底部破片と帯状の赤色塗彩が施された事例も認められる。

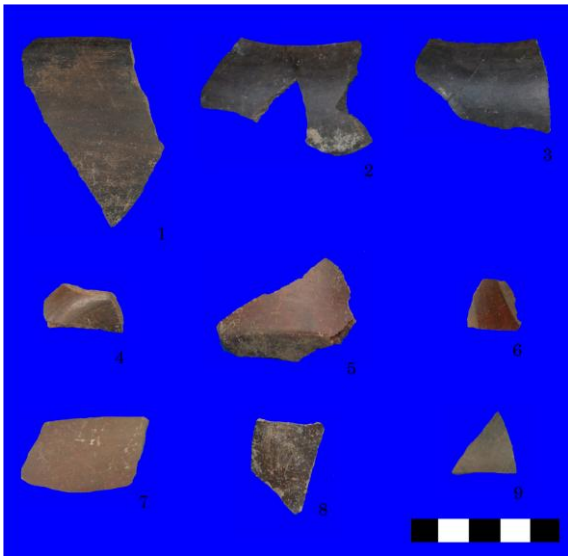


写真 5-121　IG タイプ 7-1 半球鉢

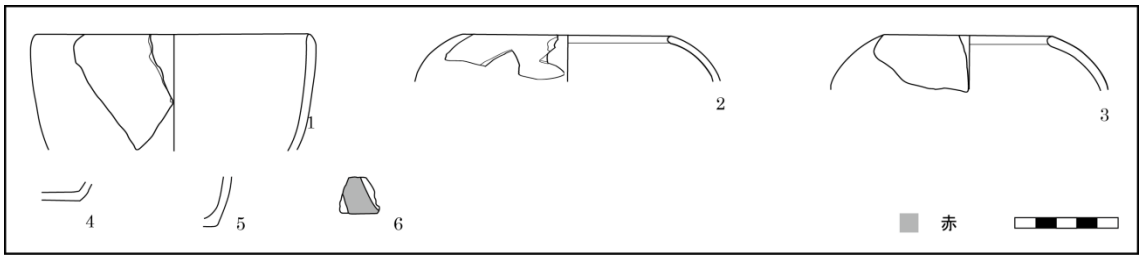


図 5-100　IG タイプ 7-1 半球鉢

器形 2：開口半球鉢

口縁部が外切れする事例が確認されている。

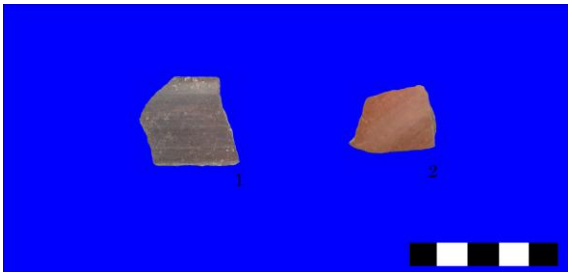


写真 5-122　IG タイプ 7-1 開口半球鉢

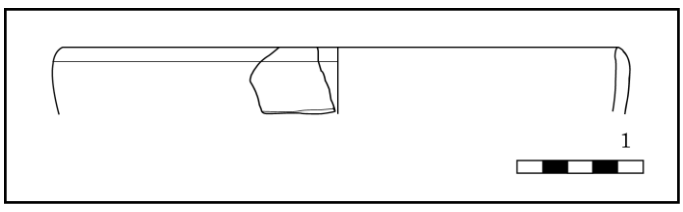


図 5-101　IG タイプ 7-1 開口半球鉢

器形 3：外反鉢

口縁部がやや肥厚する事例が確認されている。口唇部は丸みを帯びる。装飾については、帯状に赤色塗彩が施された事例がみられる。

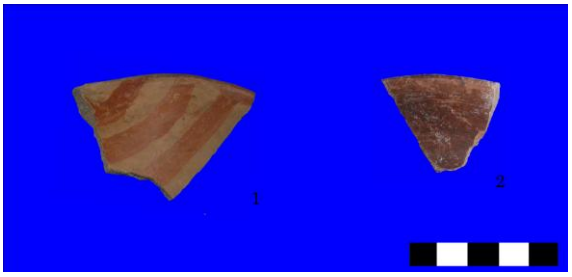


写真 5-123　IG タイプ 7-1 外反鉢

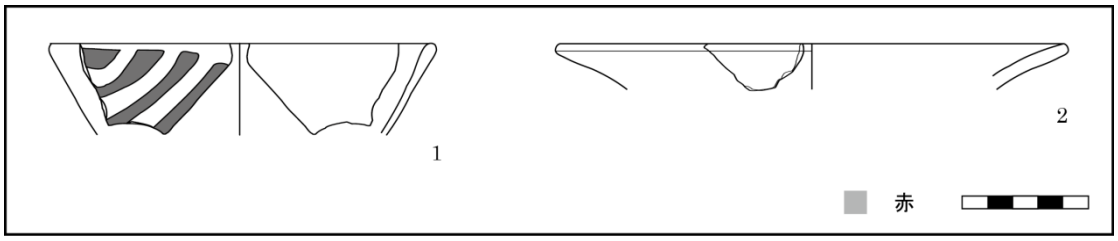


図 5-102　IG タイプ 7-1 外反鉢

器形 4：ボトル

口縁部が外側に張り出し、段状を呈する事例が確認されている。

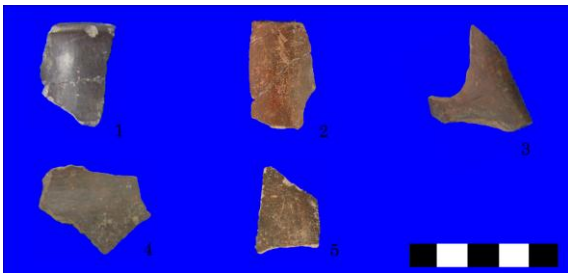


写真 5-124　IG タイプ 7-1 ボトル

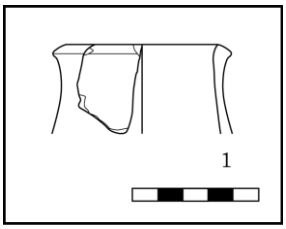


図 5-103　IG タイプ 7-1 ボトル

器形 5：鐙形ボトル

胴部破片のみ確認されている。

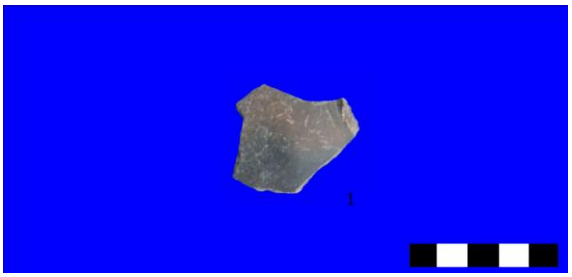


写真 5-125　IG タイプ 7-1 鐙形ボトル

（2） IG タイプ 7-2（インガタンボ期褐色磨研刻線：IG Marrón Pulido Inciso）

①胎土・混和材、②色、③表面調整

IG タイプ 7-1 と同じである。

④装飾

刻線や切込線、表面線、凹線で幾何学文が施される。ロッカースタンプ文や塑像が用いられる場合もある。

⑤その他

IG タイプ 7-1 と同様の範囲で類例がみられる。

器形 1：半球鉢

胴部破片のみ確認されている。刻線や切込線、表面線、ロッカースタンプ文などで、幾何学文が描かれることに加えて、塑像や貼付文との組み合わせによって立体的な表現を施した事例もみうけられる。

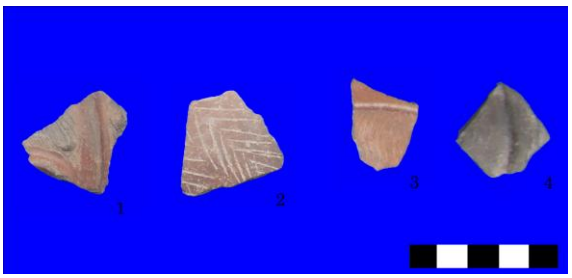


写真 5-126　IG タイプ 7-2 半球鉢

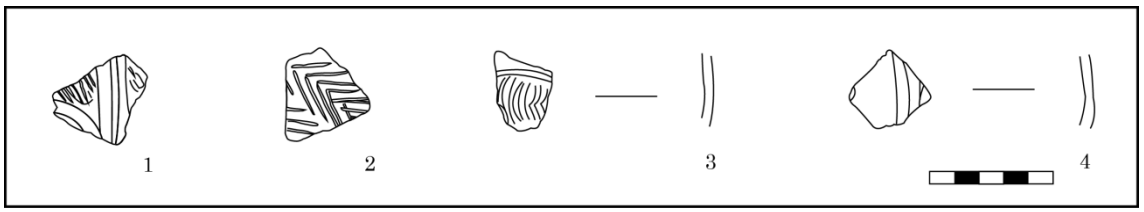


図 5-104　IG タイプ 7-2 半球鉢

器形 2：開口半球鉢

胴部破片のみ確認されている。凹線で圏点文や目を表した図像が描かれる。また、刻線で格子が描かれる事例も存在する。

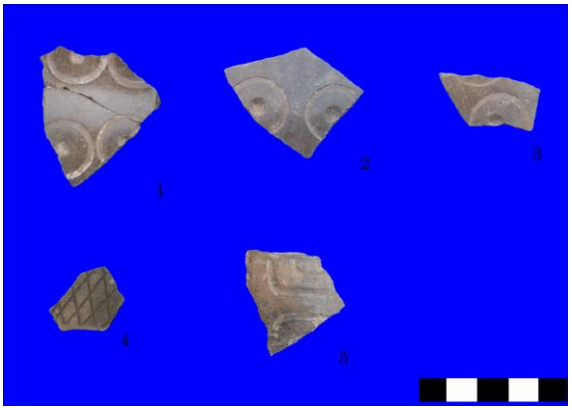


写真 5-127　IG タイプ 7-2 開口半球鉢

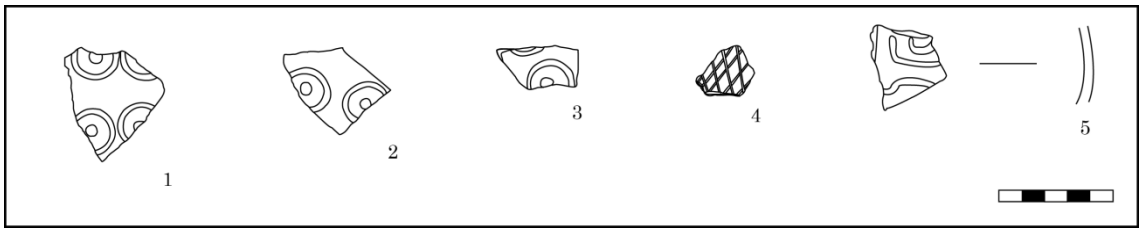


図 5-105　IG タイプ 7-2 開口半球鉢

器形 3：ボトル

胴部破片だけが確認されている。刻線と表面線、もしくは塑像を組み合わせた意匠がみられる。

写真 5-128　IG タイプ 7-2 ボトル

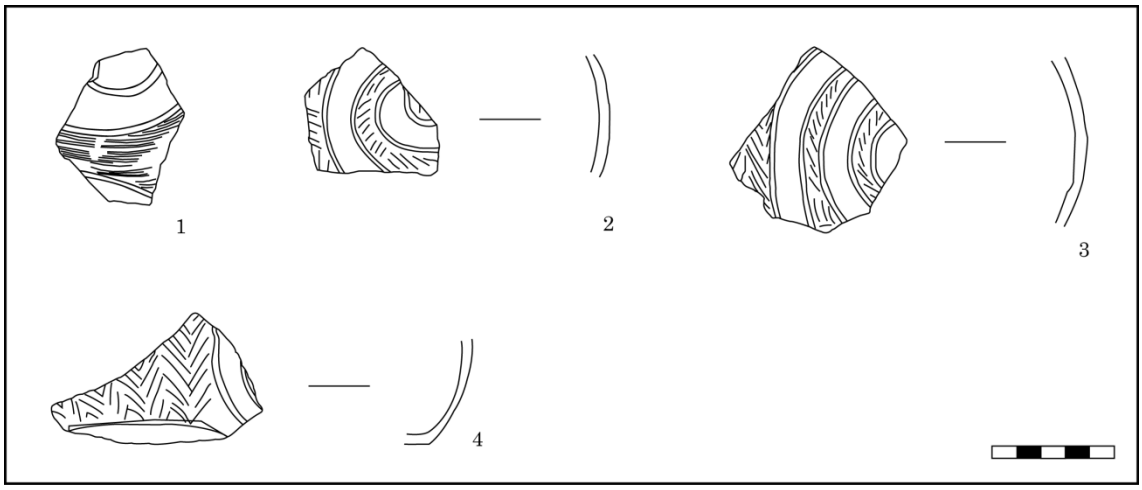


図 5-106　IG タイプ 7-2 ボトル

5-5-8.　IG タイプ 8（インガタンボ期褐色平滑：IG Marrón Alisado）

褐色の器面を持つ、ややつくりの良い土器である。装飾の有無、あるいは装飾の差異によって、上位タイプの IG タイプ 8-1（インガタンボ期褐色平滑：IG Marrón Alisado）から下位タイプの IG タイプ 8-2（インガタンボ期褐色平滑刻線：IG Marrón Alisado Inciso）、IG タイプ 8-3（インガタンボ期褐色平滑刻線・ポストコクション：IG Marrón Alisado Inciso Post-cocción）と IG タイプ 8-4（インガタンボ期褐色平滑磨線：IG Marrón Alisado Linea Bruñida）とに分けられる。

（1）　IG タイプ 8-1（インガタンボ期褐色平滑：IG Marrón Alisado）

①胎土・混和材

硬くしまったやや緻密な胎土である。混和材は細かい砂を主体としており、粒子の直径は 1mm 以下である。雲母の量自体はやや少なく、全体としての混和材の量は既述の IG タイプ 7 と比してやや多い。

②色

明褐色～暗褐色に加えて、赤褐色や黄褐色の器面を有することも多い。

③表面調整

全体として平滑であるが、部分的に研磨されることがある。平滑が施された面には筋状の整形痕が残る場合もある。閉じた器形のものは、器壁内面の整形が外面よりも粗い。

④装飾

基本的には無文であるが、刺突文や貼付文が施される場合もある。IG タイプ 6-1 との差異はスリップの有無である。

⑤その他

ペルー北部とエクアドル南部の広範囲で類例がみられる。

器形 1：無頚壺

口唇部は丸みを帯びている。

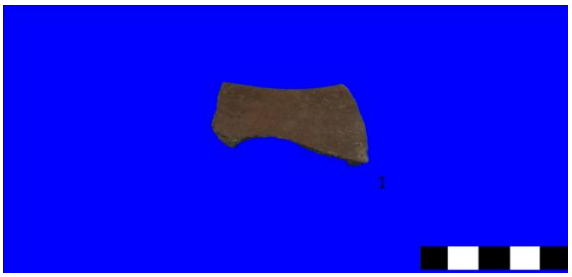


写真 5-129　IG タイプ 8-1 無頚壺

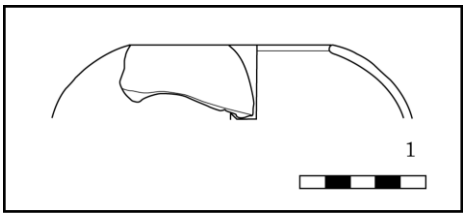


図 5-107　IG タイプ 8-1 無頚壺

器形 2：短頚壺

器形は、口縁部が外反するものが大半である。口縁部は肥厚するものが多い。口唇部は、丸みを帯びたものや、平らにならされたもの、内側に切れる事例などが確認されている。

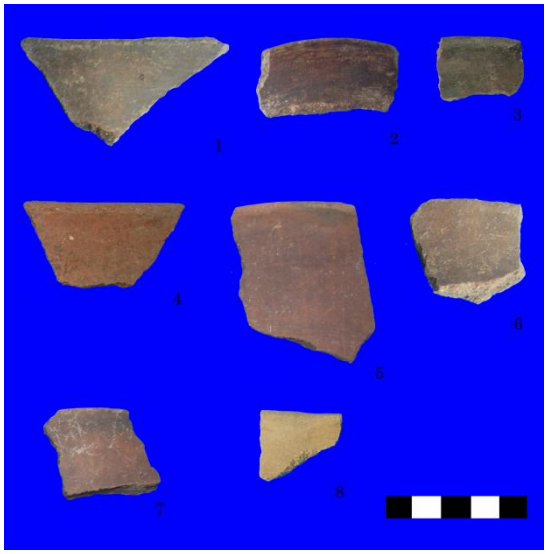


写真 5-130　IG タイプ 8-1 短頚壺 1

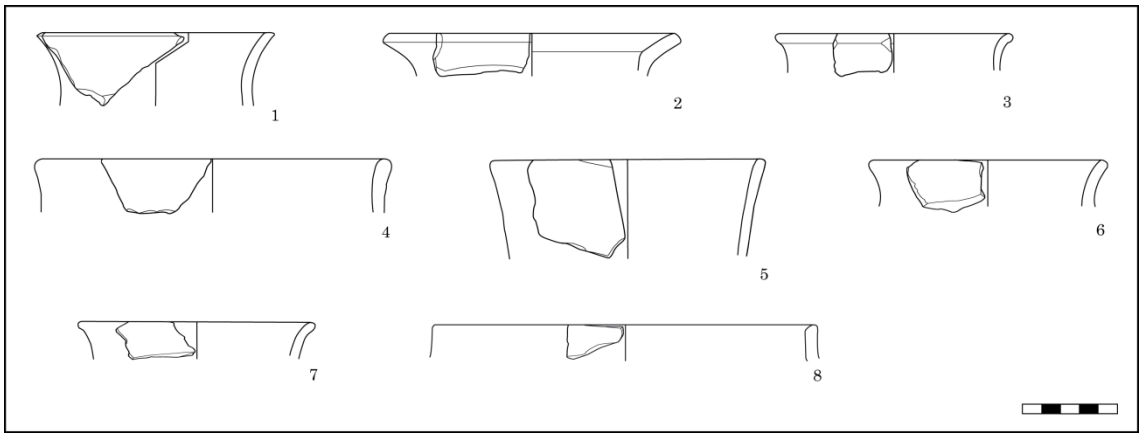


図 5-108　IG タイプ 8-1 短頚壺 1

写真 5-131　IG タイプ 8-1 短頚壺 2

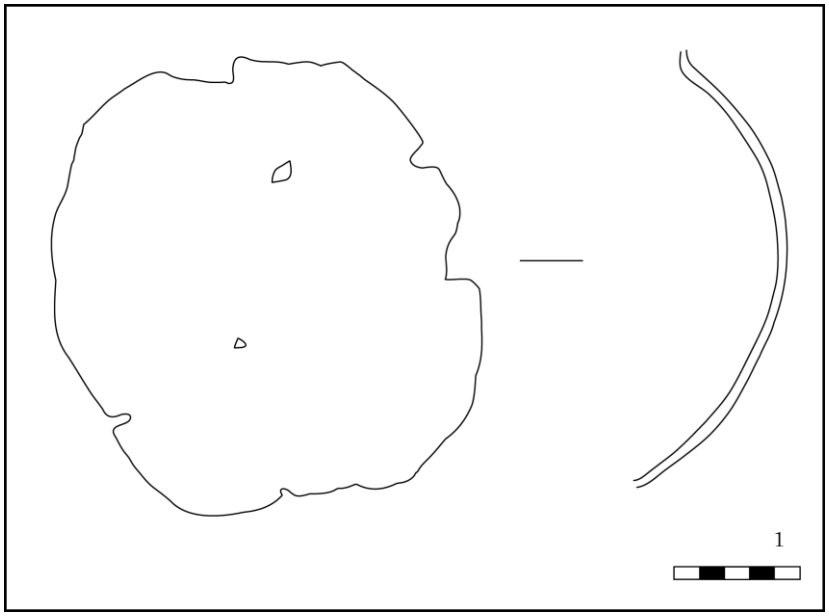


図 5-109　IG タイプ 8-1 短頚壺 2

器形 3：半球鉢

器壁全体が大きく内湾して無頚壺と似た形状を呈する器形と、口縁部のみが内側にすぼまる器形が確認されている。口縁部は内側に肥厚するものや、やや先細りするものが認められる。口唇部は丸みを帯びるか、平らにならされている。刺突文や貼付文で装飾が施される場合もある。

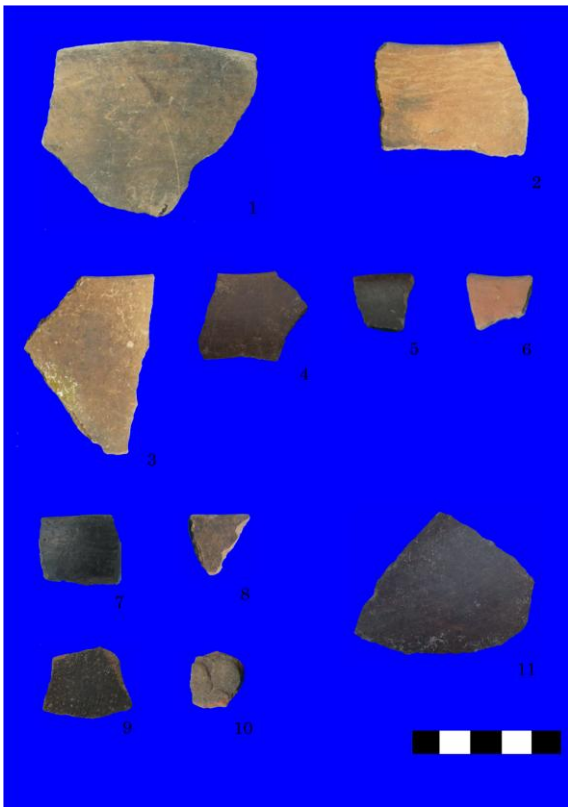


写真 5-132　IG タイプ 8-1 半球鉢

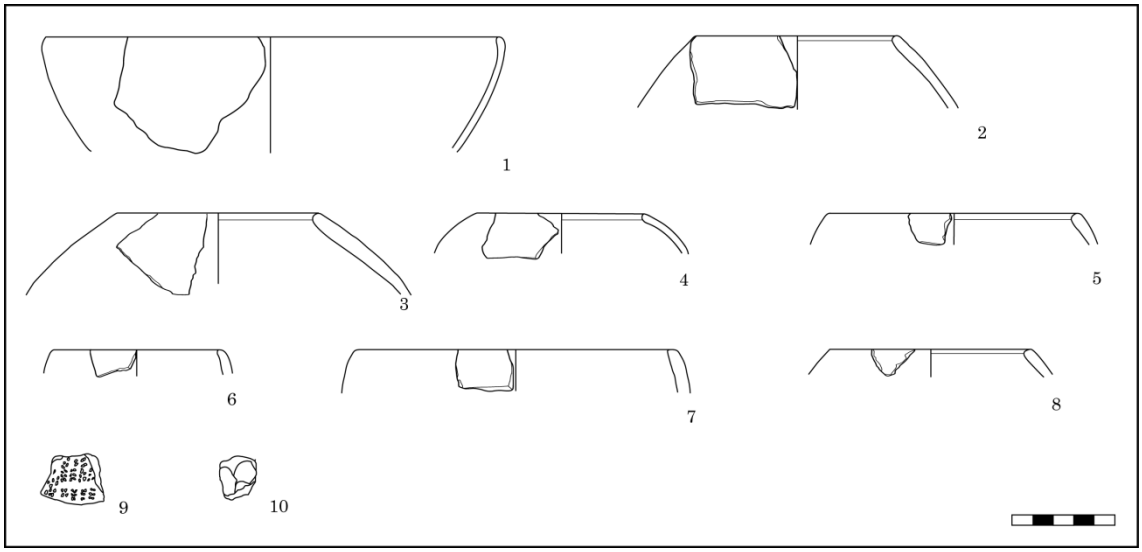


図 5-110　IG タイプ 8-1 半球鉢

器形 4：開口半球鉢

口縁部は肥厚するもの、やや先細るもの、内側や外側に切れるものが確認されている。口唇部は丸みを帯びたものと平らにならされたものが認められる。装飾では、刺突文が施された事例が存在する。

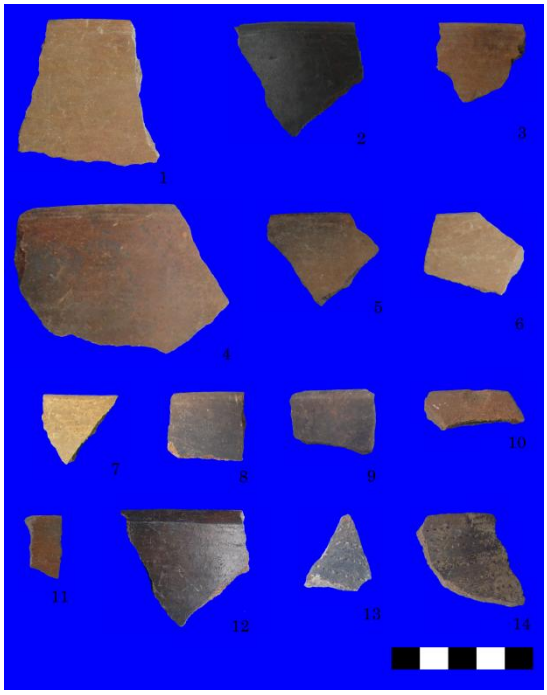


写真 5-133　IG タイプ 8-1 開口半球鉢

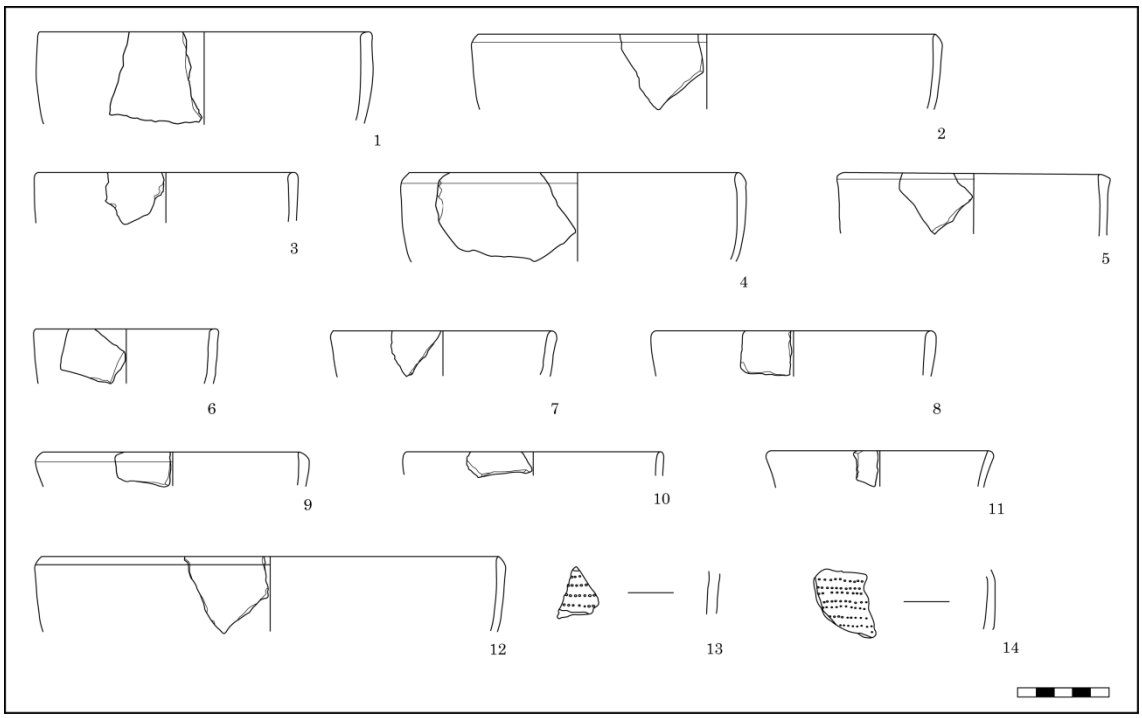


図 5-111　IG タイプ 8-1 開口半球鉢

器形 5：外反鉢

口縁部は外側にわずかに肥厚し、口唇部は丸みを帯びている。

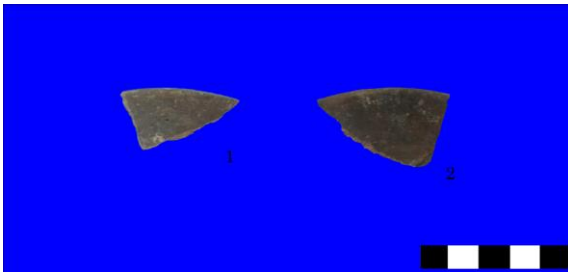


写真 5-134　IG タイプ 8-1 外反鉢

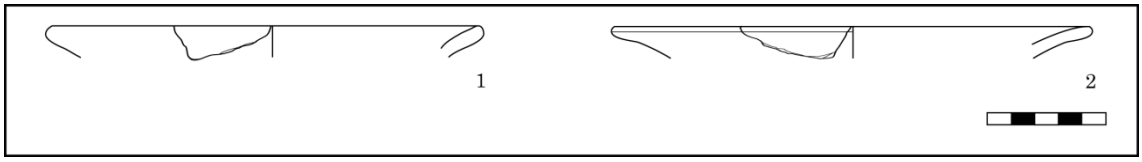


図 5-112　IG タイプ 8-1 外反鉢

器形 7：開口円筒鉢

口唇部は丸みを帯びている。

写真 5-135　IG タイプ 8-1 開口円筒鉢 1

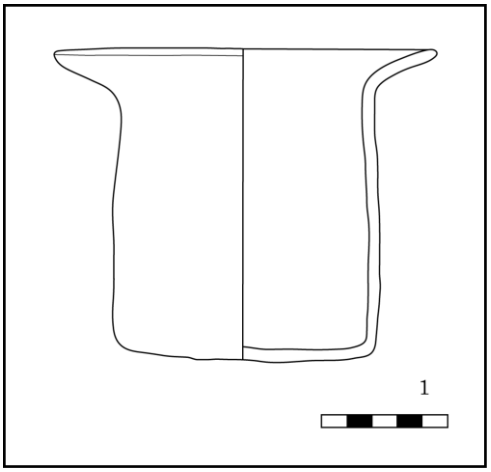


図 5-113　IG タイプ 8-1 開口円筒鉢 1

写真 5-136　IG タイプ 8-1 開口円筒鉢 2

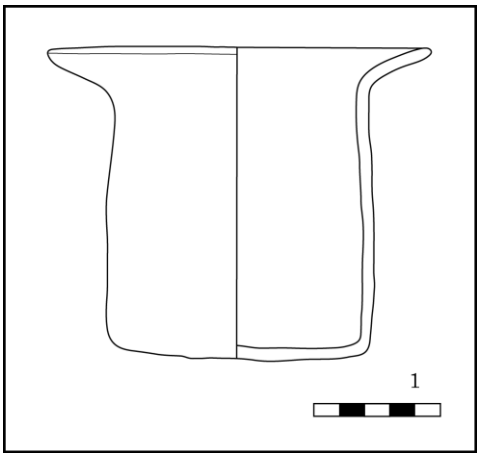


図 5-114　IG タイプ 8-1 開口円筒鉢 2

器形 8：ボトル

口縁部は外側に張り出すものが主である。段状を呈する場合も多い。

写真 5-137　IG タイプ 8-1 ボトル

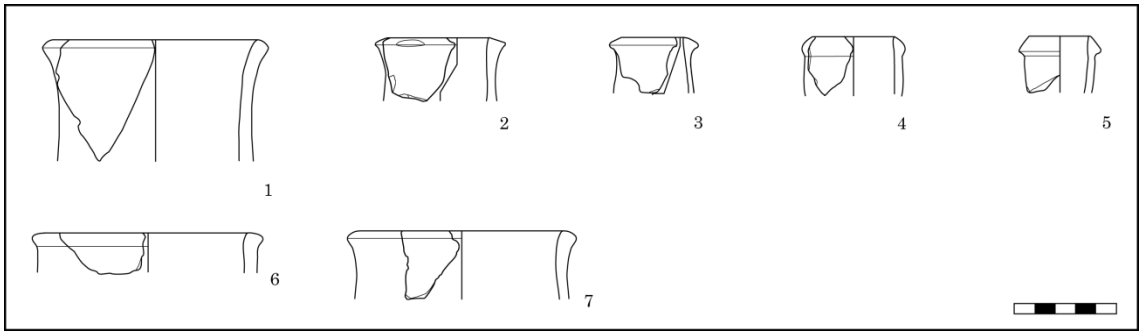


図 5-115　IG タイプ 8-1 ボトル

器形 9：鐙形ボトル

胴部破片のみ確認されている。

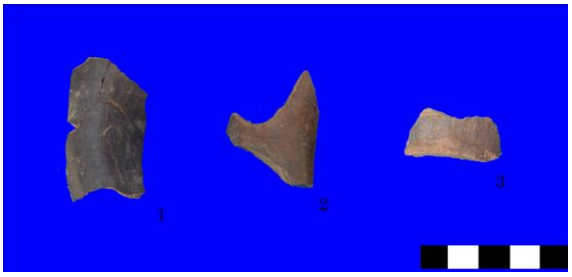


写真 5-138　IG タイプ 8-1 鐙形ボトル

（2）　IG タイプ 8-2（インガタンボ期褐色平滑刻線：IG Marrón Alisado Inciso）

①胎土・混和材、②色

IG タイプ 8-1 と同じである。

③表面調整

基本的に IG タイプ 8-1 と同じであるが、刻線で区画された範囲がマット面となる場合もある。

④装飾

刻線や切込線で、幾何学文や図像が描かれる。刻線と刺突文、貼付文、ロッカースタンプ文、もしくはマット面との組み合わせが認められる。また、平行線で文様帯を設け、内部に装飾が施される事例もある。

⑤その他

IG タイプ 8-1 と同様の範囲で類例がみられる。

器形 1：壺

胴部破片のみ確認されている。

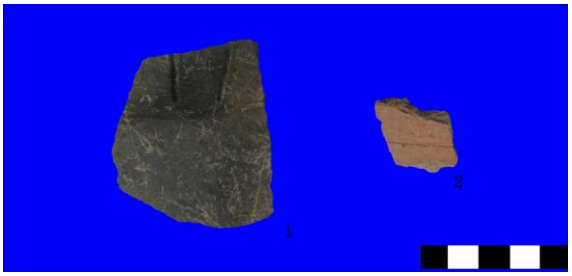


写真 5-139　IG タイプ 8-2 壺

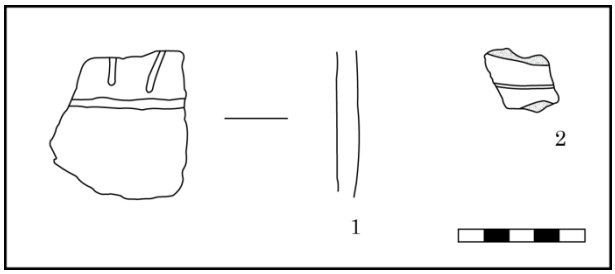


図 5-116　IG タイプ 8-2 壺

器形 2：半球鉢

　器壁全体が内側に湾曲した無頚壺のような形状を呈する器形と、口縁部だけが内側にすぼまる器形が確認されている。口縁部は肥厚するものと、内側に切れるものがみられる。口唇部は丸みを帯びている。装飾は刻線が主であるが、切込線や貼付文、刺突文やロッカースタンプ文、あるいはそれらの組み合わせなども認められる。刻線では平行線、円弧、渦巻、波状や幾何学文が描かれる。

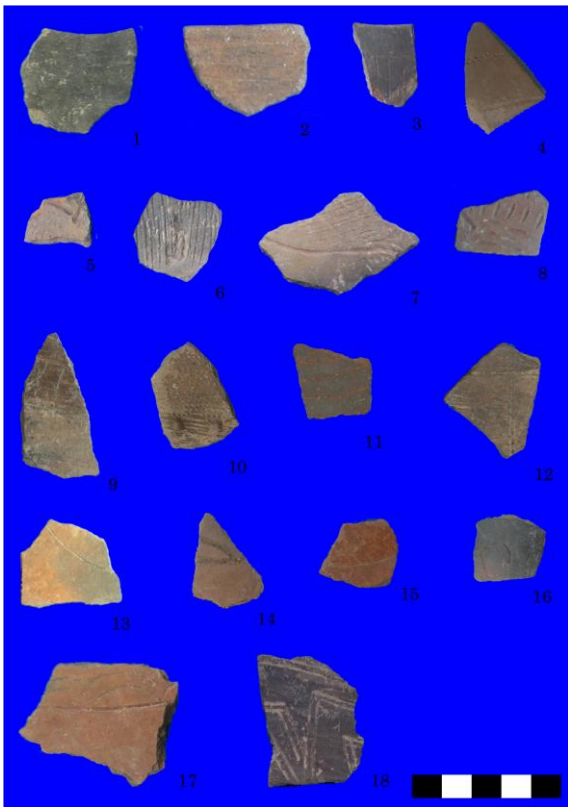


写真 5-140　IG タイプ 8-2 半球鉢

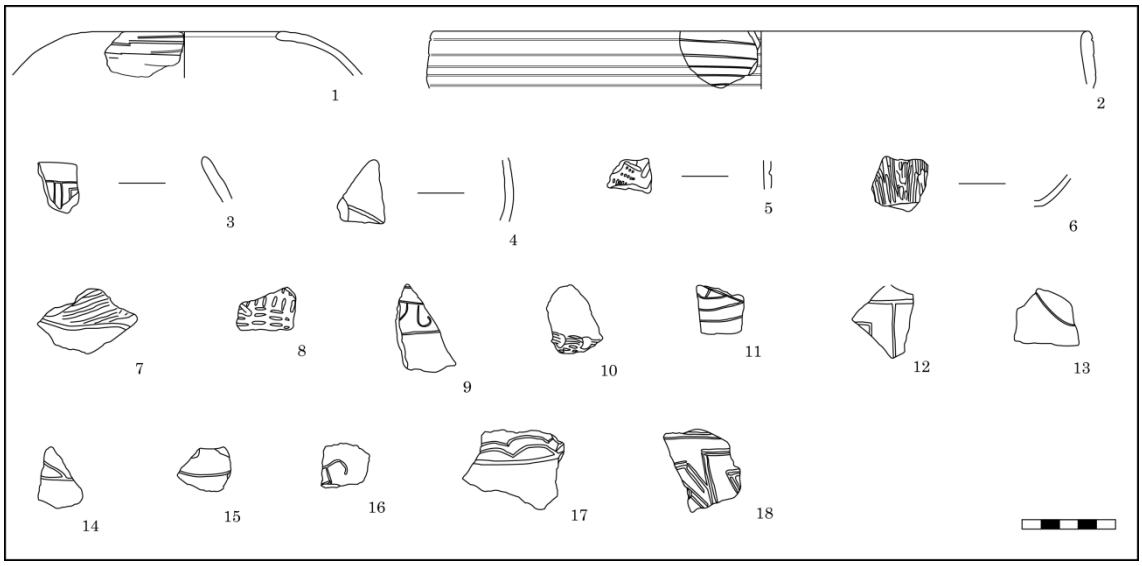


図 5-117　IG タイプ 8-2 半球鉢

器形 3：開口半球鉢

口縁部形状、および口唇部形状ともに多様である。口縁部は、肥厚するものや先細りするもの、内側や外側に切れるもの、外側に張り出すものに加えて、変形口縁が確認される。口唇部は、丸みを帯びたものや平らにされたものがみられる。装飾は、刻線を主として、

切込線、表面線、スタンプ文、刺突文や櫛目文、塑像、ならびにそれらの組み合わせによって施される。刻線では、平行線や平行斜線とその組み合わせ、円文、円弧、階段、渦巻、鎖状、重圏文、幾何学文や目を表した図像などが描かれる。

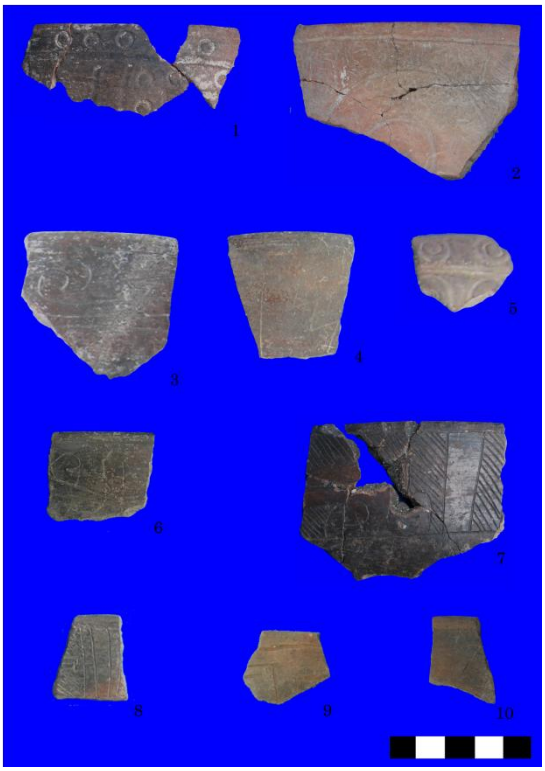


写真 5-141　IG タイプ 8-2 開口半球鉢 1

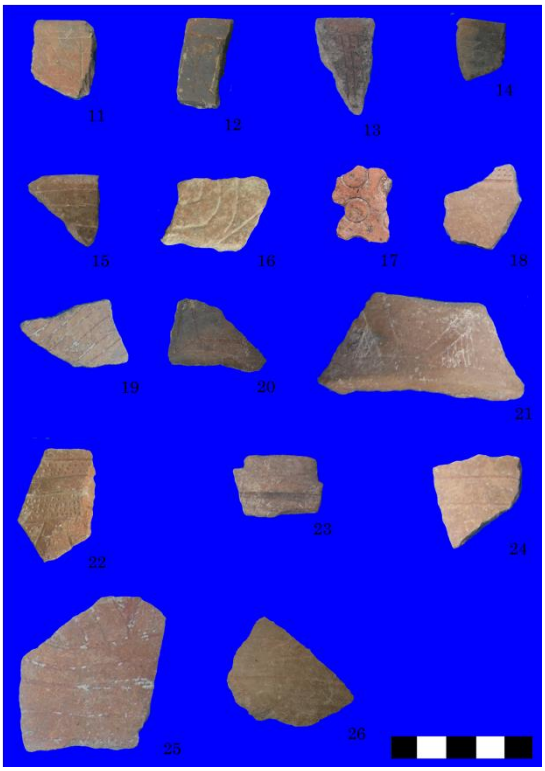


写真 5-142　IG タイプ 8-2 開口半球鉢 2

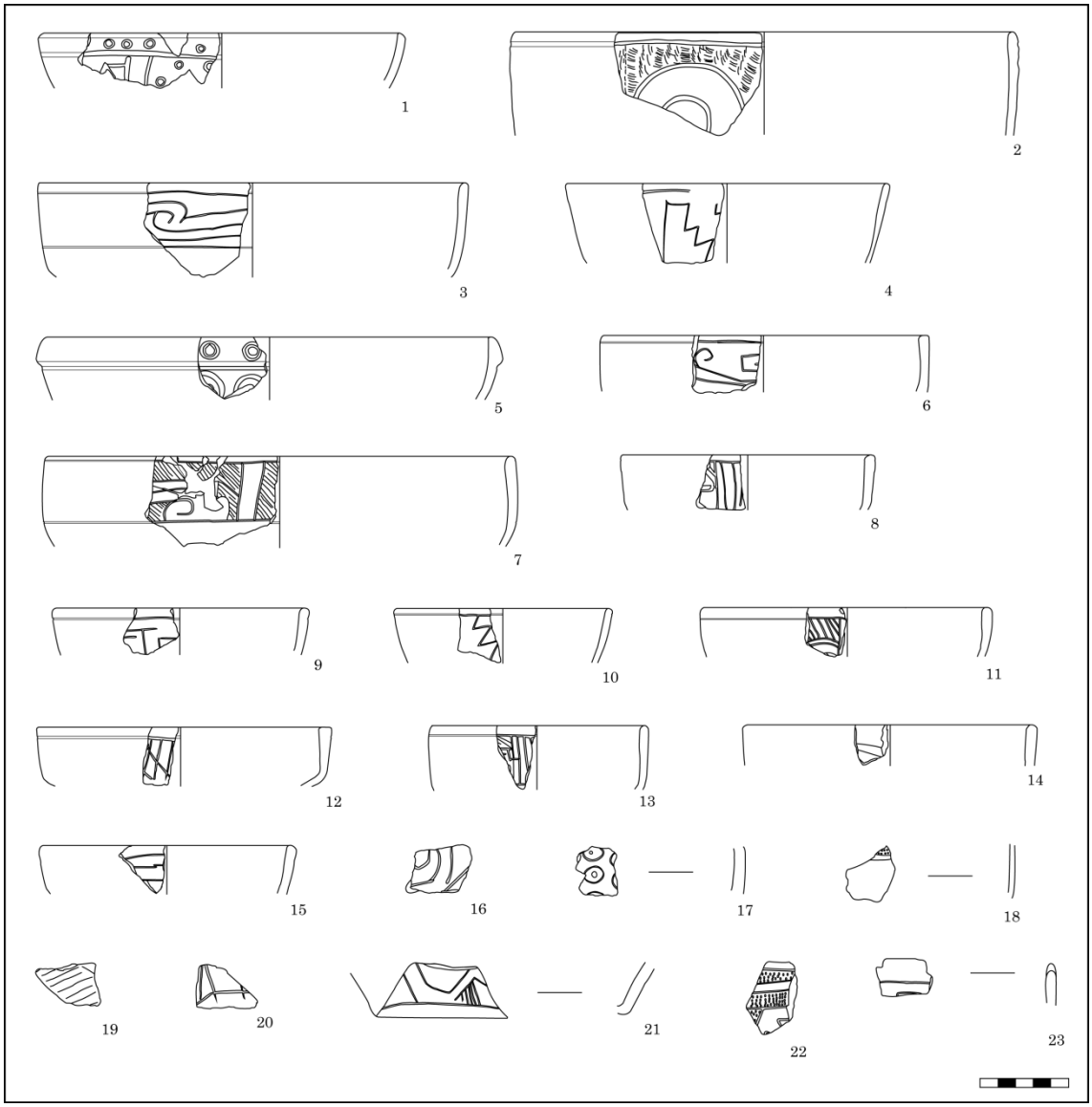


図 5-118　IG タイプ 8-2 開口半球鉢

器形 4：外傾鉢

口縁部は肥厚するものと、やや先細りするものが確認される。口唇部は丸みを帯びている。装飾は主として刻線によるもので、平行線や平行斜線、格子、幾何学文などが描かれる。

写真 5-143　IG タイプ 8-2 外傾鉢

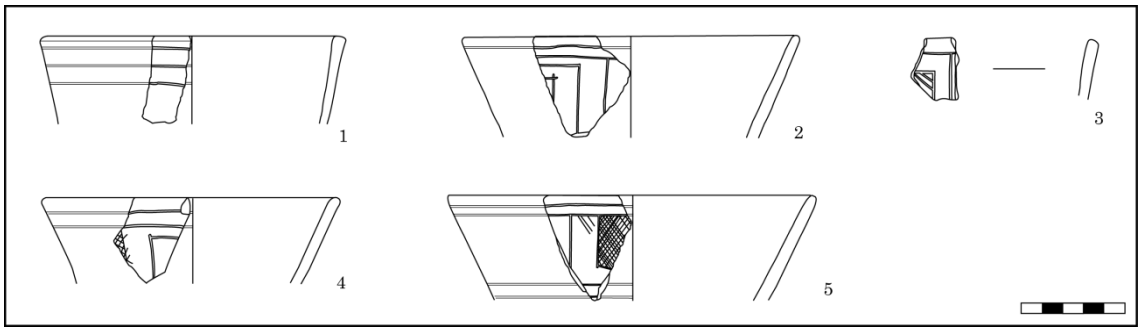


図 5-119　IG タイプ 8-2 外傾鉢

器形 5：外反鉢

口縁部はわずかに肥厚するものや、先細りするものが確認される。口唇部は丸みを帯びている。装飾は刻線で描かれ、口縁下に区画された文様帯のなかに平行斜線や短線が施される。

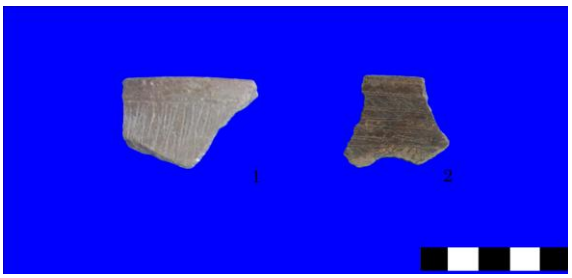


写真 5-144　IG タイプ 8-2 外反鉢

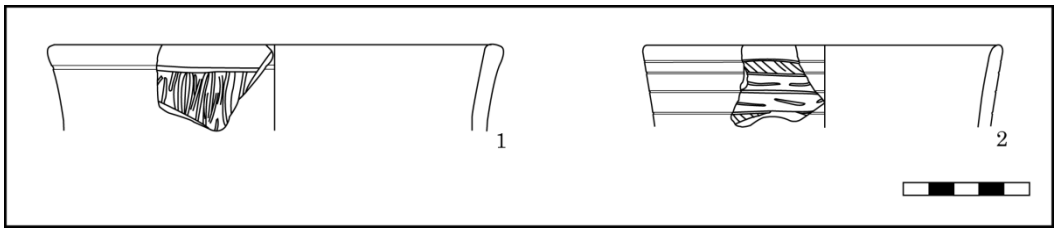


図 5-120　IG タイプ 8-2 外反鉢

器形 6：ボトル

胴部破片のみ確認されている。装飾は主として刻線によるもので、平行線や円弧、重圏

文、幾何学文が描かれる。また、刻線と塑像、刺突文、あるいは貼付文の組み合わせもみられる。装飾に、切込線が用いられた事例もある。

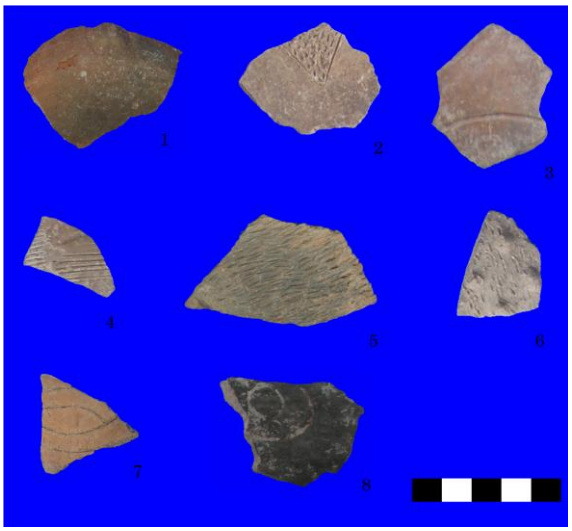


写真 5-145　IG タイプ 8-2 ボトル

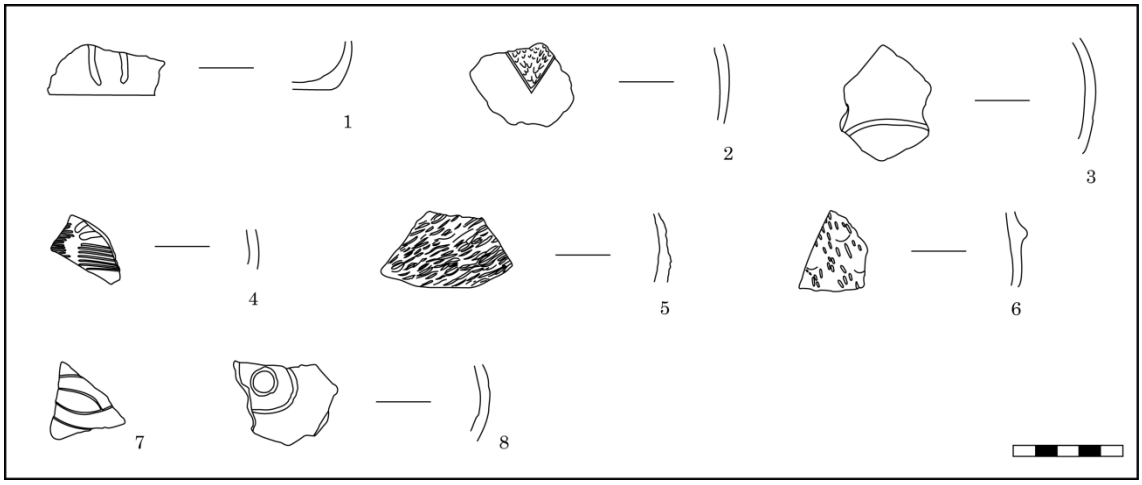


図 5-121　IG タイプ 8-2 ボトル

（3）　IG タイプ 8-3（インガタンボ期褐色平滑刻線・ポストコクション：IG Marrón Alisado Inciso Post-cocción）

①胎土・混和材

基本的には IG タイプ 8-1 と同じであるが、胎土はそれよりも若干緻密で混和材の量も少ない。

②色

IG タイプ 8-1 と同じである。

③表面調整

IG タイプ 8-2 と同じである。

④装飾

刻線、ときには切込線や表面線で幾何学文が描かれ、線内に赤色顔料や黄色顔料が充填

される。ロッカースタンプ文との組み合わせもみられる。

⑤その他

胎土・混和材は、IG タイプ 7-1 と IG タイプ 8-1 の中間的様相を示すが、表面整形に関しては後者との類似性が強い。形成期中期にはペルー北部の広範囲に類例がみられたが、形成期後期になると、より北部の地域へと分布が限定されるようになる。極北部海岸のセロ・ニャニャニケ、ピウラ川とチラ川流域、北部熱帯低地のバグア複合、北部山地のクントゥル・ワシ、北部海岸のモロ・デ・エテンなどで類例が認められる。

器形 1：半球鉢

口縁部は内側にすぼまるものや、肥厚、あるいは切れる事例が確認される。口唇部は丸みを帯びるか、やや平らにならされている。装飾については、刻線で区画された部分や刻線内に赤色顔料が塗布、充填される。また、刻線で格子や平行斜線が描かれた事例や、切込線やロッカースタンプ文で装飾が施された事例もみられる。

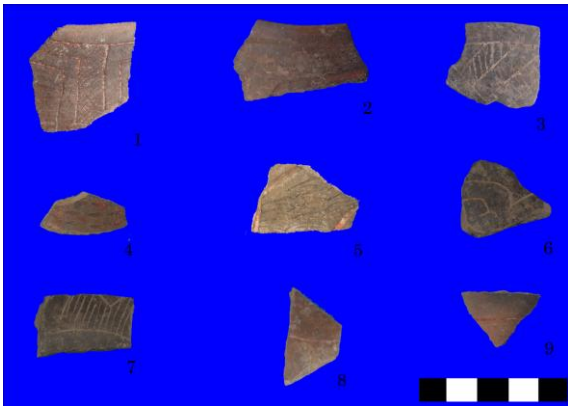


写真 5-146　IG タイプ 8-3 半球鉢

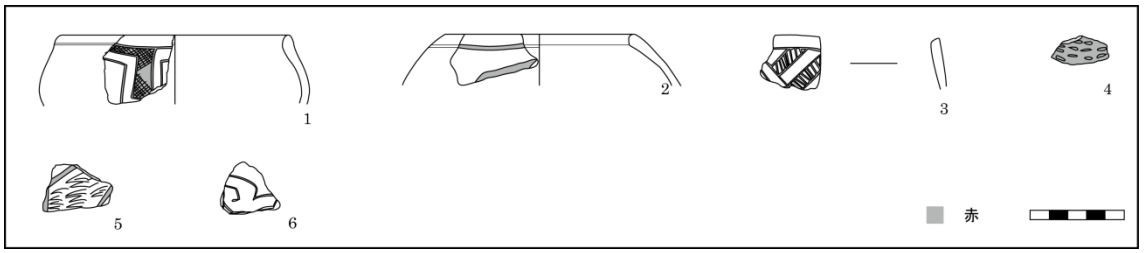


図 5-122　IG タイプ 8-3 半球鉢

器形 2：開口半球鉢

口縁部は、先細りするもの、内側に肥厚するもの、わずかに外反するものや内側に切れるものなどが確認される。口唇部は丸みを帯びたものが大半を占める。装飾は、刻線で平行線や平行斜線、格子、円文、鎖状、幾何学文が描かれ、刻線内に赤色顔料が充填される。

写真 5-147　IG タイプ 8-3 開口半球鉢

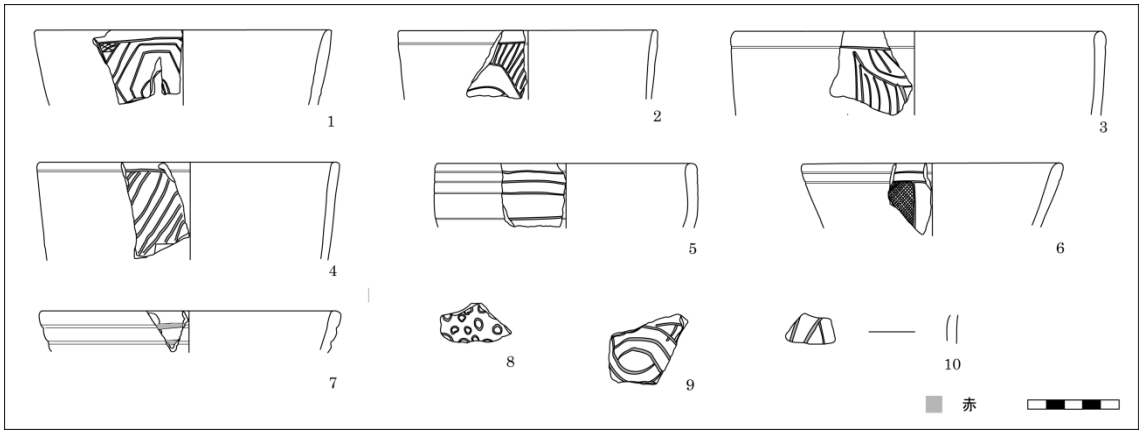


図 5-123　IG タイプ 8-3 開口半球鉢

器形 3：外傾鉢

刻線内、および刻線で区画された範囲内に赤色顔料が充填される。

写真 5-148　IG タイプ 8-3 外傾鉢

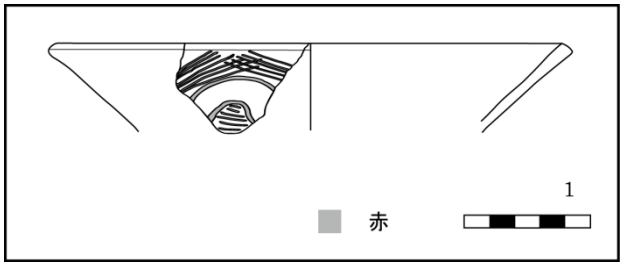


図 5-124　IG タイプ 8-3 外傾鉢

器形 4：外反鉢

口唇部は丸みを帯びている。刻線で幾何学文が描かれ、内部に赤色顔料が充填される。

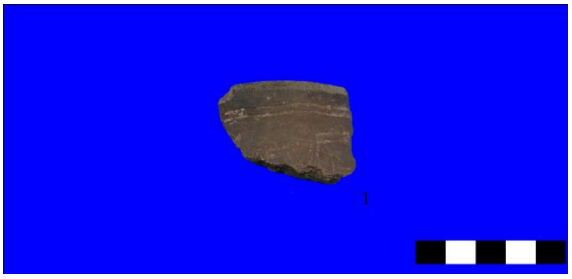


写真 5-149　IG タイプ 8-3 外反鉢

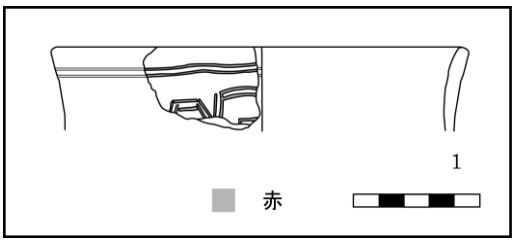


図 5-125　IG タイプ 8-3 外反鉢

器形 5：開口円筒鉢

刻線でネコ科動物の図像表現が描かれ、その内部が赤色顔料で充填される。

写真 5-150　IG タイプ 8-3 開口円筒鉢

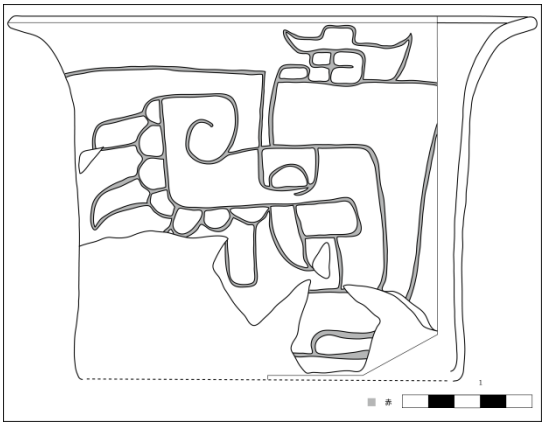


図 5-126　IG タイプ 8-3 開口円筒鉢

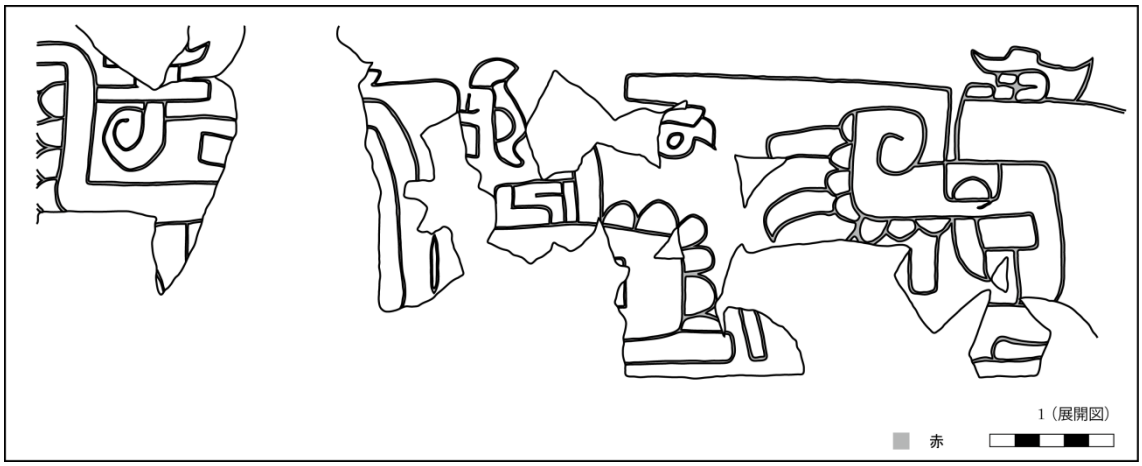


図 5-127　IG タイプ 8-3 開口円筒鉢展開図

器形 5：ボトル

胴部破片だけが確認されている。刻線で描かれた平行線や三角形、幾何学文の内部に、赤色顔料が充填される。

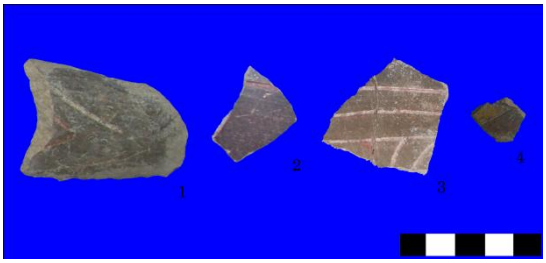


写真 5-151　IG タイプ 8-3 ボトル

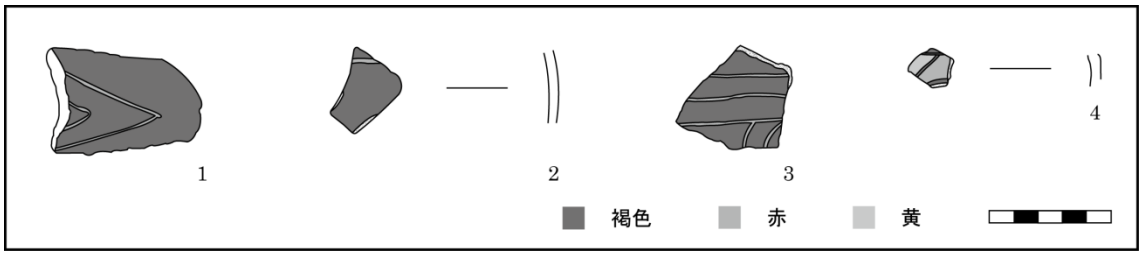


図 5-128　IG タイプ 8-3 ボトル

（4）　IG タイプ 8-4（インガタンボ期褐色平滑磨線：IG Marrón Alisado Linea Bruñida）

①胎土・混和材

IG タイプ 8-4 と同じである。

②色、③表面調整

IG タイプ 8-1 と同じである。

④装飾

磨線で平行線や格子が描かれる。

⑤その他

ペルー北部熱帯低地のセレサル、ミチナル、北部山地のパコパンパ複合、ラ・グランハ複合、クントゥル・ワシに類例がみられる。

器形 1：壺

胴部破片のみ確認されている。磨線で格子や平行線が描かれる。

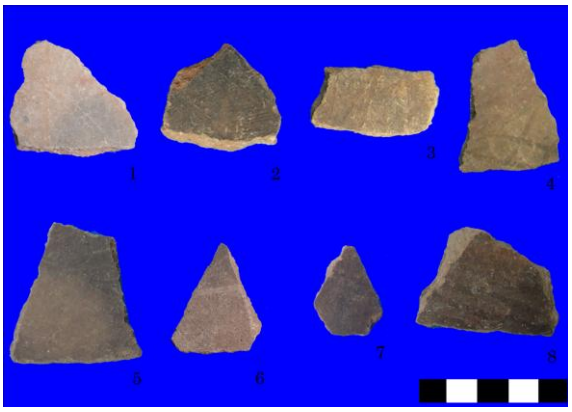


写真 5-152　IG タイプ 8-4 壺

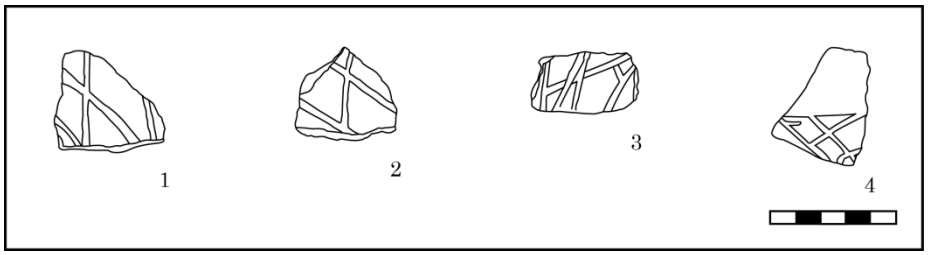


図 5-129　IG タイプ 8-4 壺

器形 2：半球鉢

口唇部は丸みを帯びている。磨線で格子や平行線が描かれる。

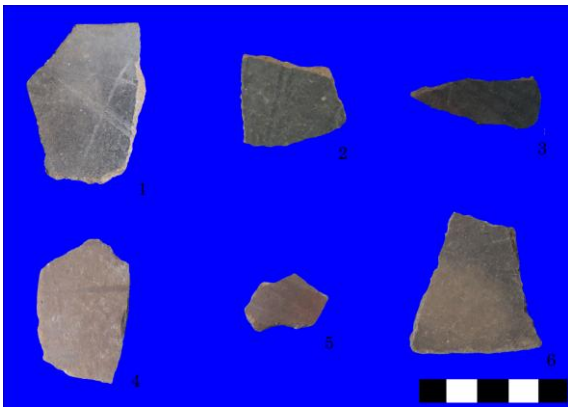


写真 5-153　IG タイプ 8-4 半球鉢

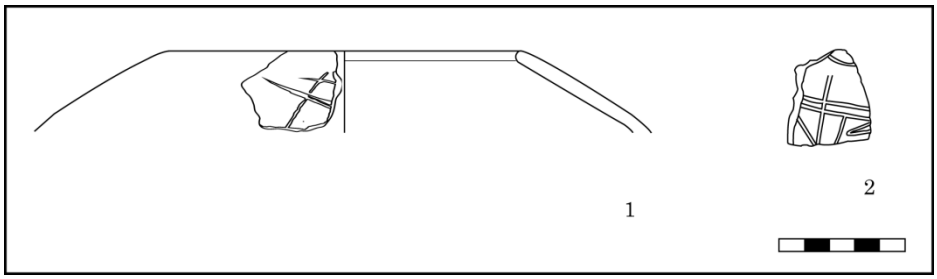


図 5-130　IG タイプ 8-4 半球鉢

器形 3：開口半球鉢

口唇部は丸みを帯びている。磨線で格子や平行線が描かれる。

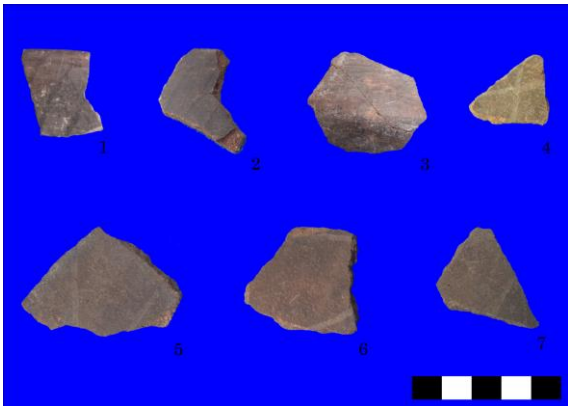


写真 5-154　IG タイプ 8-4 開口半球鉢

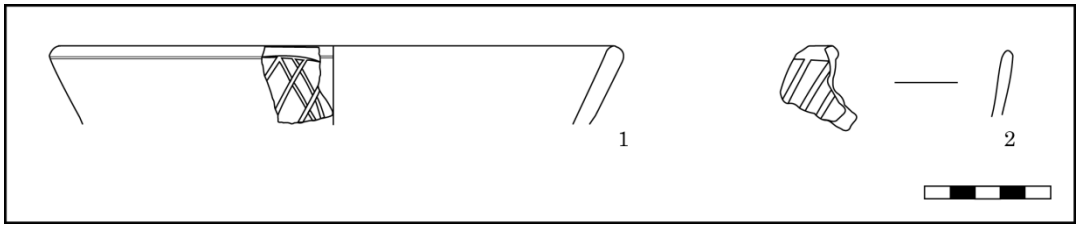


図 5-131　IG タイプ 8-4 開口半球鉢

器形 4：外反鉢

口縁部はやや外に切れる。器壁外面の口縁部下部から筋状に磨線が施される。

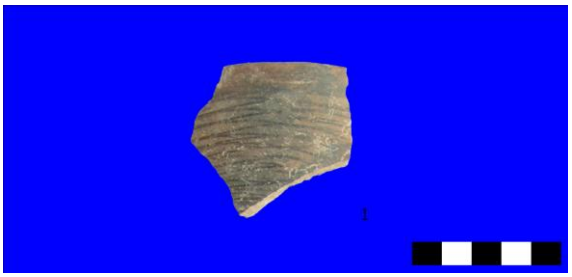


写真 5-155　IG タイプ 8-4 外反鉢

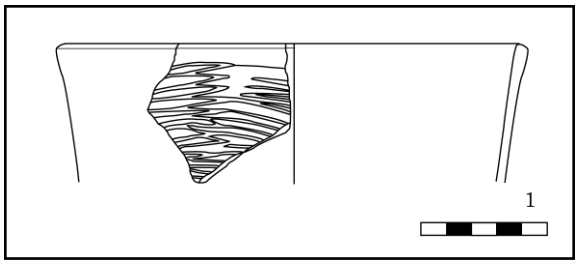


図 5-132　IG タイプ 8-4 外反鉢

5-5-9.　IG タイプ 9（インガタンボ期褐色平坦：IG Marrón Nivelado）

褐色の器面を持つ、ややつくりの粗い土器で、壺形土器の割合が非常に高いタイプである。PM タイプ 6 との共通性が高い。

（1）　IG タイプ 9-1（インガタンボ期褐色平坦 A：IG Marrón Nivelado A）

①胎土・混和材

やや粗くてしまりの悪い胎土からなり、IG タイプ 8 に比べてつくりが悪い。混和材は砂を主体とし、均質に混ざっているが、全体量がやや多い。粒子の直径が 2mm 程度のものも含まれる。雲母の含有量はやや少なめである。

②色

明褐色～暗褐色に加えて、赤褐色や黄褐色の器面を有することも多い。

③表面調整

基本的に平坦であるが、器壁内面が粗整形の場合も多い。

④装飾

無文のものが多いが、押圧文や刺突文、貼付文、スタンプ文が施されたり、赤色顔料が塗彩される事例もみられる。

⑤その他

PM タイプ 6 と同様に、非精製土器で日用的用途が推測されるもので、比較の材料に乏しい。ただし、出土傾向に目を向けると、壺型土器における出土の中心が短頚壺であることから、出土傾向にはペルー極北部海岸やエクアドル南部との共通性が認められる。

器形 1：短頚壺

口縁部が外反する器形が大半であるが、明確に屈曲する器形も存在する。口縁部は、内側や外側に肥厚するもの、外側に張り出すものが認められる。口唇部は、丸みを帯びたものと平らにならされたものがみられる。装飾は、櫛目文、スタンプ文、押圧文、刺突文や貼付文に加えて、赤色塗彩が施された事例が確認される。

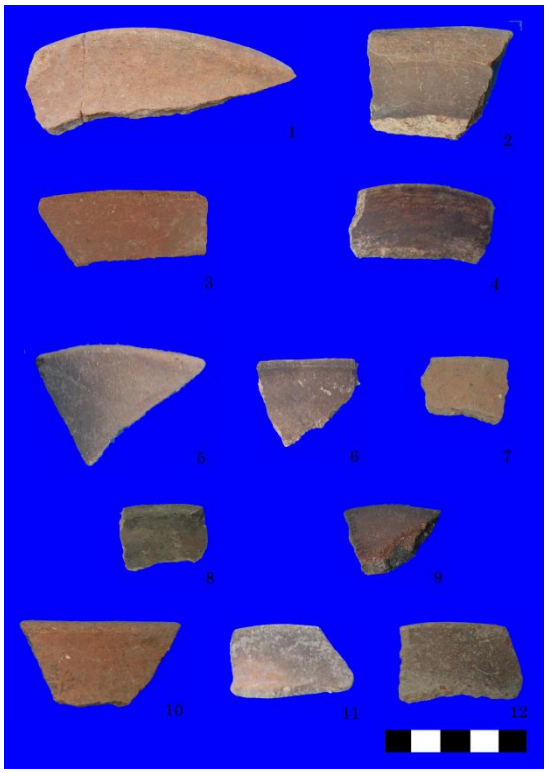


写真 5-156　IG タイプ 9-1 短頸壺 1

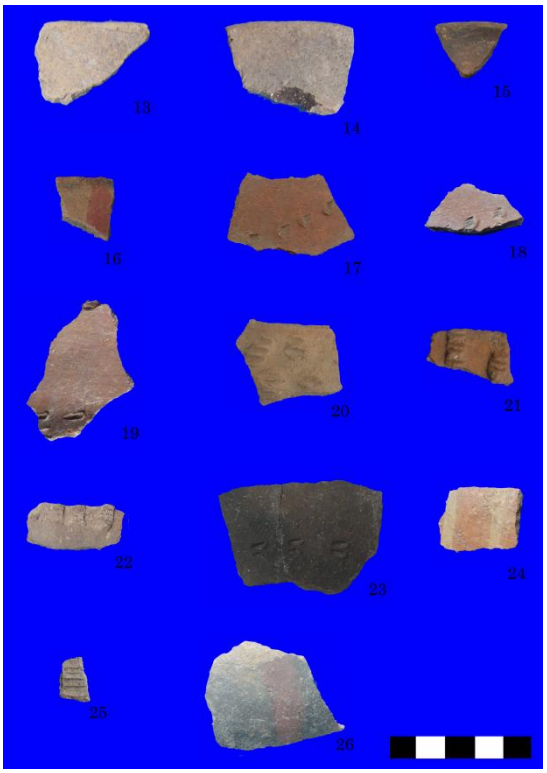


写真 5-157　IG タイプ 9-1 短頸壺 2

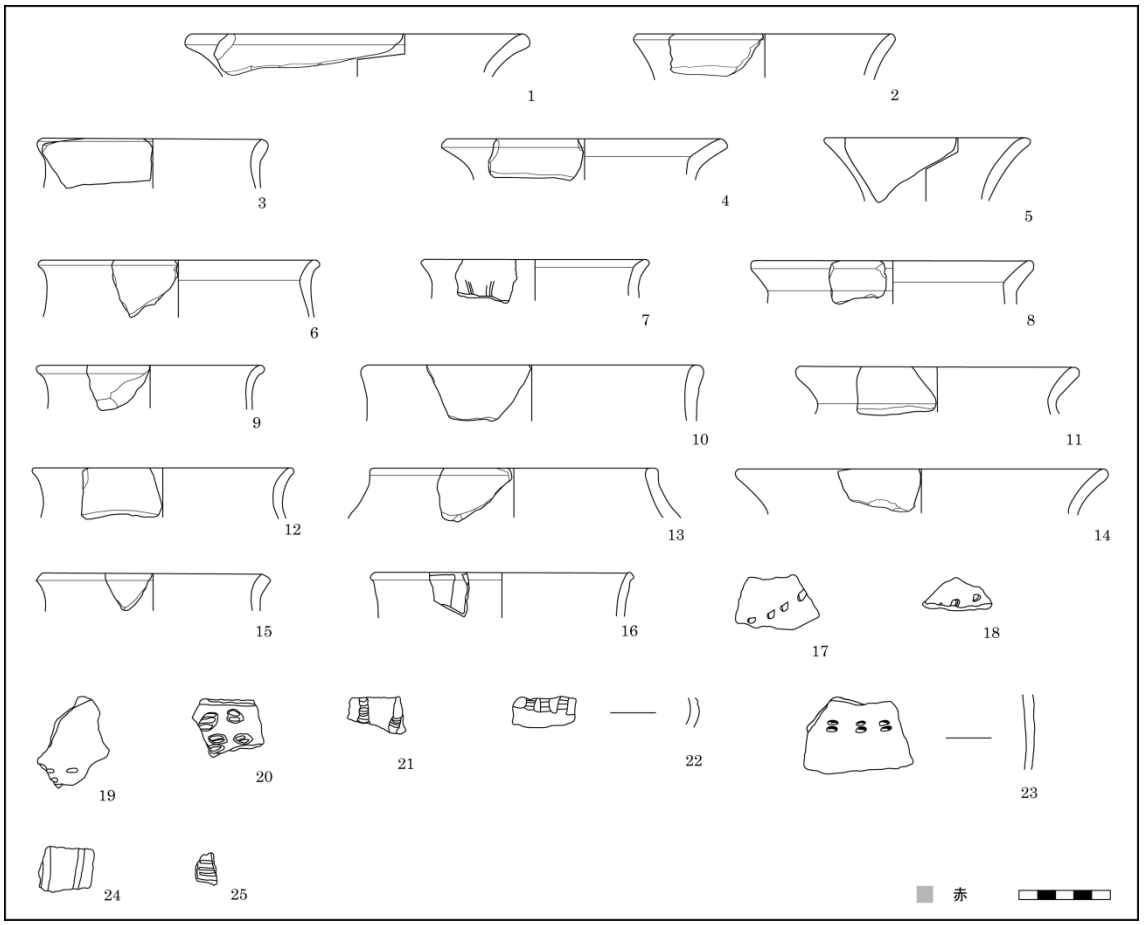


図 5-133　IG タイプ 9-1 短頸壺

器形 2：半球鉢

口縁部が内側にすぼまる器形が確認されている。口縁部形状は肥厚するか、わずかに外に張り出している。口唇部は丸みを帯びているものと、平らにならされているものが認められる。

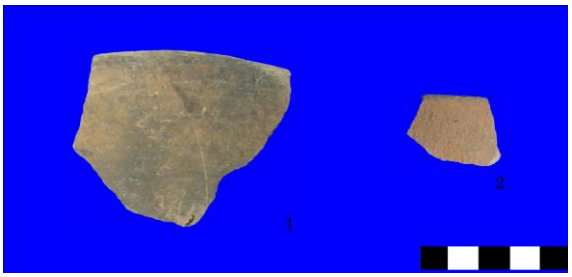


写真 5-158　IG タイプ 9-1 半球鉢

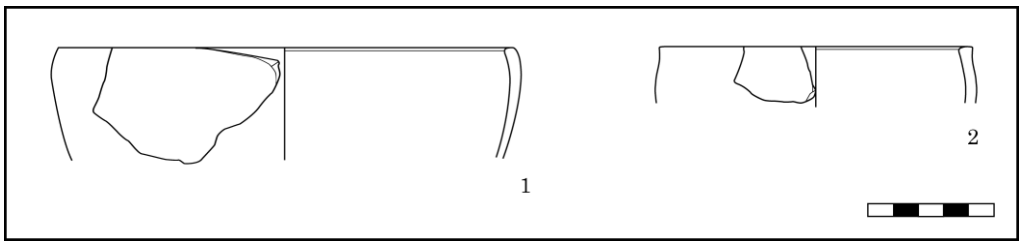


図 5-134　IG タイプ 9-1 半球鉢

器形 3：開口半球鉢

口縁部はわずかに外に張り出すものや、外に切れるもの、口縁部直下に段を有するものなどが確認されている。口唇部は丸みを帯びたものが主であるが、平らにならされた事例もみられる。

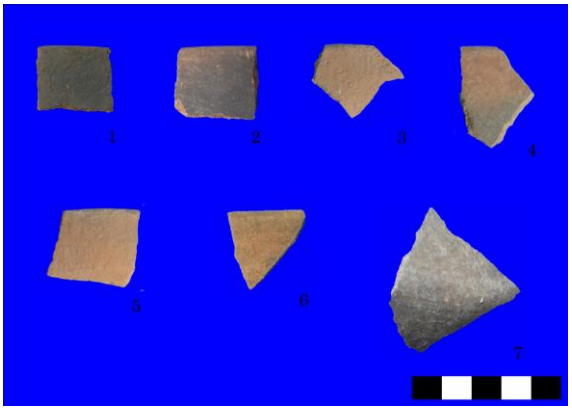


写真 5-159　IG タイプ 9-1 開口半球鉢

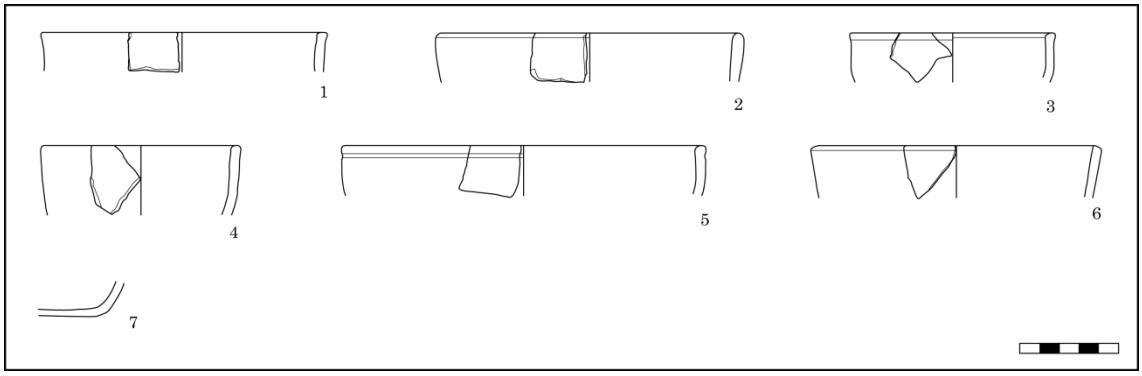


図 5-135　IG タイプ 9-1 開口半球鉢

器形 4：ボトル

胴部破片のみが確認されている。

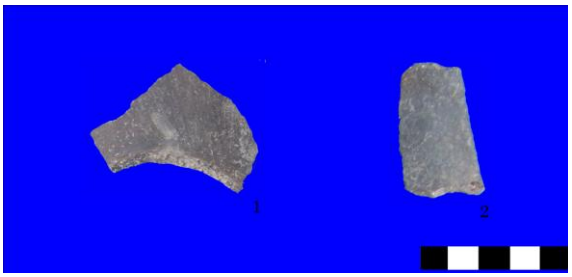


写真 5-160　IG タイプ 9-1 ボトル

（2）　IG タイプ 9-2（インガタンボ期褐色平滑 B：IG Marrón Nivelado B）

①胎土・混和材

粗く、しまりの悪い胎土からなり、多孔質でもろい。混和材の量は多く、混じり方はやや不均質である。砂を主体としているが、直径 3mm を超えるような小石が混ざることもある。雲母の含有量はやや少なめである。

②色、③表面調整

IG タイプ 9-1 と同じである。

④装飾

無文である。

⑤その他

IG タイプ 9-1 よりも器壁が厚く、その大半は大型壺形土器の胴部破片であるが、大型の鉢も存在する。

器壁の厚さを一つの基準としてタイプ設定したため、比較する資料は極端に乏しい。

器形 1：短頚壺

口縁部が外反した器形が認められる。口縁部形状は肥厚しており、口唇部は丸みを帯びるか、平らにならされている。

写真 5-161　IG タイプ 9-2 短頚壺

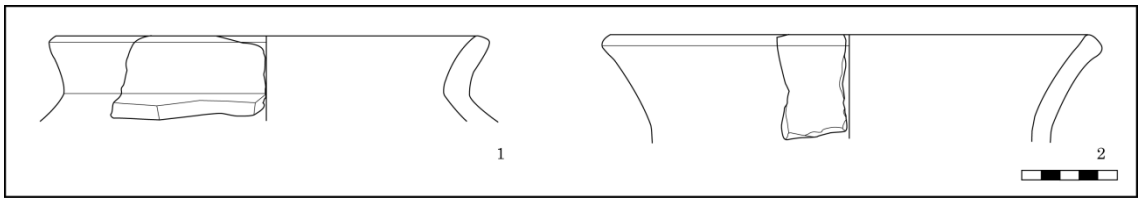


図 5-136　IG タイプ 9-2 短頚壺

器形 2：鉢

胴部破片のみ確認されている。

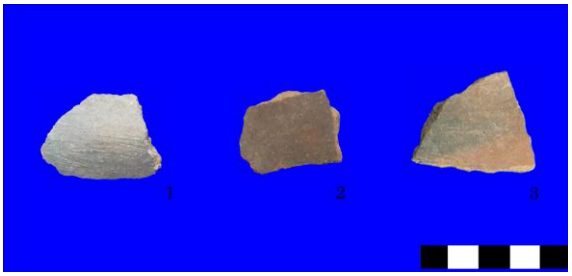


写真 5-162　IG タイプ 9-2 鉢

5-5-10.　IG タイプ 10（インガタンボ期褐色粗整形：IG Marrón Tosco）

褐色の器面を持つ、つくりの粗い土器で、壺形土器の割合が非常に高いタイプである。PM タイプ 7 との共通性が高い。

（1）　IG タイプ 10-1（インガタンボ期褐色粗整形：IG Marrón Tosco A）

①胎土・混和材

やや粗くてしまりの悪い胎土からなり、既述の IG タイプ 9-1 に比べてつくりが悪い。混和材は、砂が主体で均質に混ざっているものの、その全体量はやや多い。粒子の直径が 2mm 程度のものも含まれる。雲母の含有量はやや少なめである。

②色

明褐色～暗褐色に加えて、赤褐色や黄褐色の器面を有することも多い。

③表面調整

大部分が粗整形であるが、平坦にされている部分もある。

④装飾

無文である。

⑤その他

全体として、IG タイプ 9-1 との共通性が高く、両者の差異は表面調整に帰せられる。非精製土器で、日用的用途が推測されるものであるため、比較の材料には乏しい。しかし、出土した壺型土器が短頸壺中心であることから、ペルー極北部海岸やエクアドル南部と類似した出土傾向がみられる。

器形 1：短頸壺

口縁部が外反した器形が多い。口縁部形状は肥厚するものや、わずかに先細りするもの、外に張り出すものなどが確認される。口唇部は丸みを帯びたものが大半であるが、平らにならされたものもみられる。

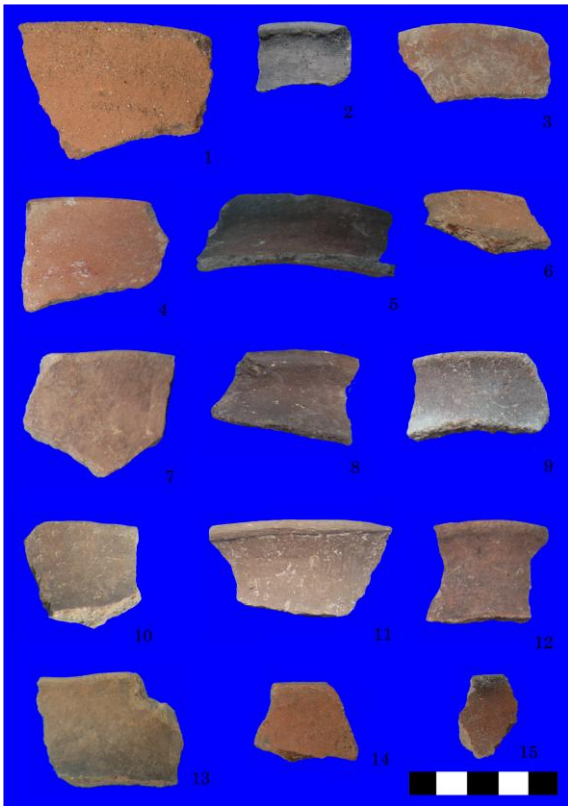


写真 5-163　IG タイプ 10-1 短頸壺

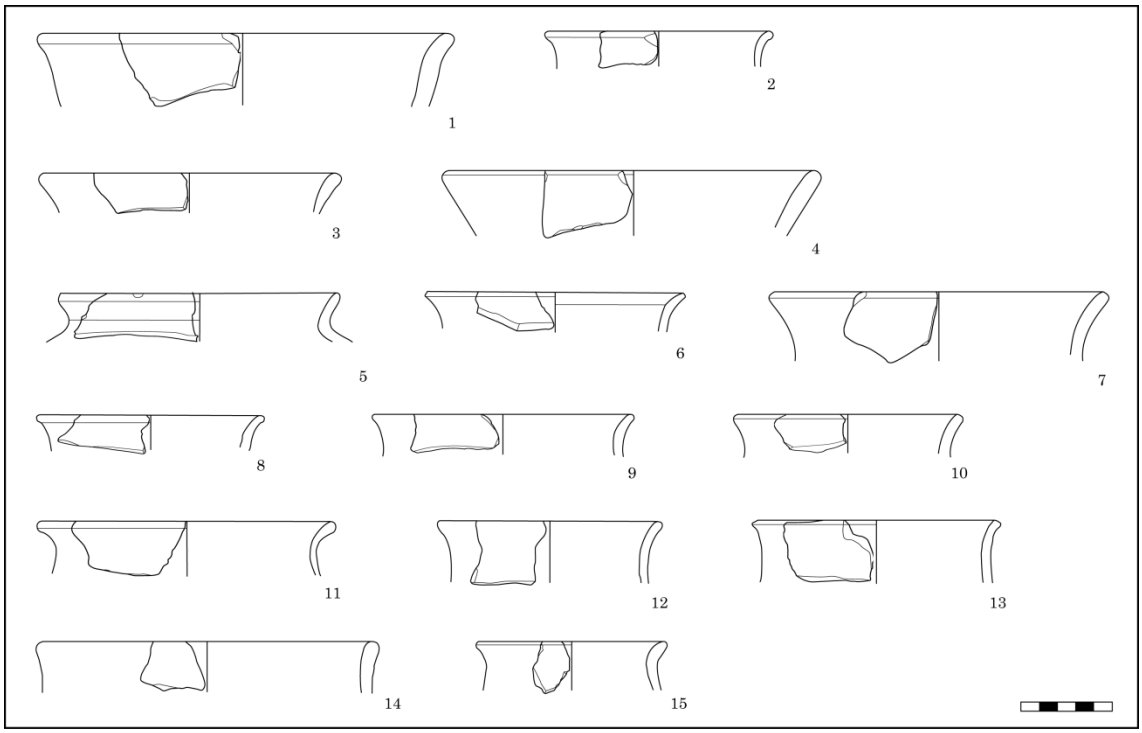


図 5-137　IG タイプ 10-1 短頚壺

器形 2：半球鉢

胴部破片のみ確認されている。

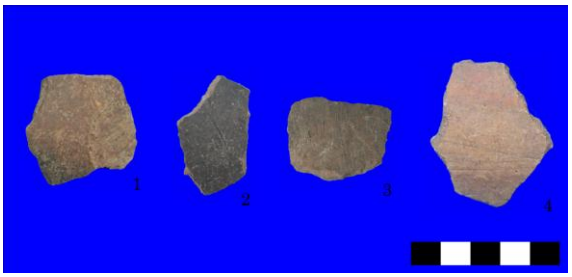
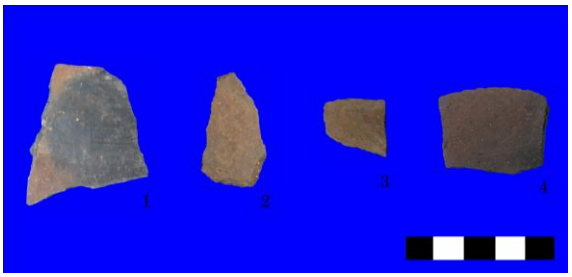


写真 5-164　IG タイプ 10-1 半球鉢

器形 3：開口半球鉢

口唇部はやや丸みを帯びている。



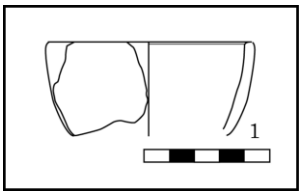


写真 5-165　IG タイプ 10-1 開口半球鉢（左）

図 5-138　IG タイプ 10-1 開口半球鉢（上）

（2）IG タイプ 10-2（インガタンボ期褐色粗整形 B：IG Marrón Tosco B）

①胎土・混和材

粗く、しまりの悪い胎土からなり、多孔質でもろい。混和材の量は多く、混じり方はやや不均質である。砂を主体としているが、直径 3mm を超えるような小石が混ざることもある。雲母の含有量はやや少なめである。

②色、③表面調整、④装飾

IG タイプ 10-1 と同じである。

⑤その他

IG タイプ 10-1 と比して、器壁が厚い。壺形土器の胴部破片のみ確認されている。 IG タイプ 9-2 と同様に、器壁の厚さを一つの基準としてタイプ設定したため、比較する資料は極端に乏しい。

器形 1：壺

胴部破片のみ確認されている。

写真 5-166　IG タイプ 10-2 壺

器形 2：鉢

胴部破片のみ確認されている。

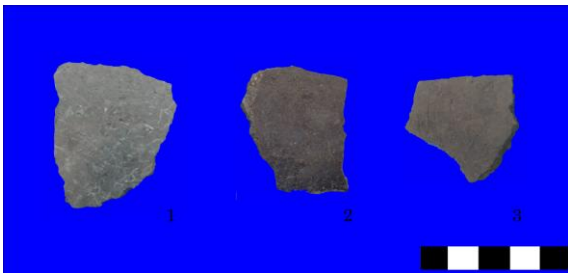


写真 5-167　IG タイプ 10-2 鉢

5-5-11.　IG タイプ 11（インガタンボ期未分類）

上記のいずれのタイプにも含まれず、資料数が極めて少ないこともあってとくにタイプを設定していない土器である。明褐色の器面を有するつくりの良い土器で赤色塗彩が施さ

れている。

①胎土・混和材

硬くしまったやや緻密な胎土である。混和材は細かい砂を主体としており、粒子の直径は 1mm 以下で、雲母は少ない。

②色

明褐色～暗褐色を呈する。

③表面調整

平滑である。

④装飾

口唇部と胴部に赤色顔料が塗彩される。

⑤その他

エクアドル南部山地のチャリュアバンバやカタマヨ複合で類例が認められる。ペルー北部熱帯低地のバグア複合でも類似した例が図面にみられるが、写真がないため、明確に確認できない。

器形 1：短頚壺

口縁部は内側に肥厚し、口唇部は丸みを帯びている。口縁部、ならびに胴部に帯状の赤色塗彩が施される。

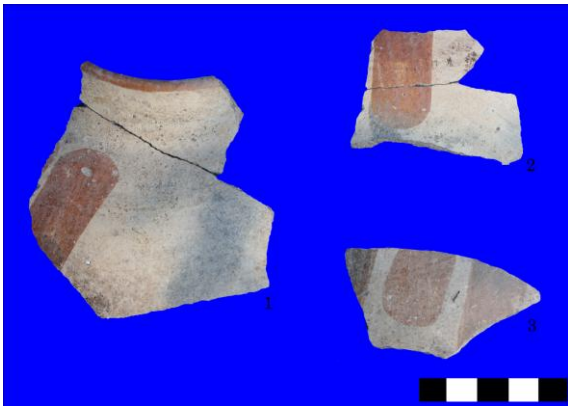


写真 5-168　IG タイプ未分類

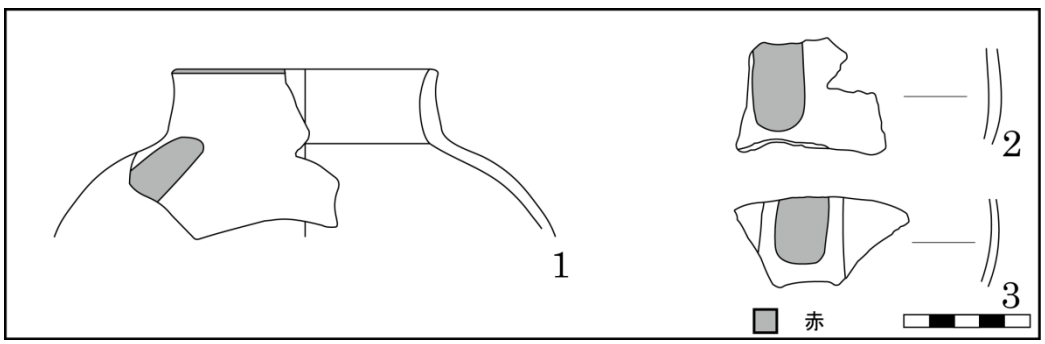


図 5-139　IG タイプ未分類

5-6.　インガタンボ遺跡出土土器の諸特徴との土器タイプ別構成比

これまでに記述してきた土器タイプと建築フェイズとの関係を示したのが、以下の表である。上段がポマワカ期、下段がインガタンボ期に対応している（表 5-2)。先述したように、インガタンボ遺跡の調査データの大きな問題としてあげられるのは、単一の発掘区においてポマワカ期（形成期中期）からインガタンボ期（形成期後期）まで連続して、一定数の土器が検出されないことである。事実、A 基壇において、ポマワカ期に対応する層位の土器が増加するのは、ポマワカ IV 期になってからである。また、表 5-2 上段最下部の出土地（基壇）別の出土割合をみても明らかなように、ポマワカ期の土器の大半は B 基壇から出土している。それに対し、インガタンボ期の土器は A 基壇のみから出土している（表 5-2 下段参照)。さらに、時期ごとの土器の出土量にも大きな差異が存在しており、ポマワカ期の資料数はインガタンボ期のものと比べて極端に少ない。このように、サンプル数の問題もあり、時期ごと、もしくは時期内のサブフェイズごとに土器の変化を統計的に示すことは困難である。しかし、各タイプの出土傾向を発掘区ごと、もしくは基壇ごとに表すことで、土器特徴全体の時期的変化や、各タイプの時期的な連続性や非連続性が浮かび上がってくる。

インガタンボ遺跡出土土器の特徴として、まずあげられることは、ポマワカ期からインガタンボ期にかけてみられる出土量の大幅な増加である。表 5-2 で示したように、後世の攪乱を受けていない出土コンテクストの確かな地点における出土土器の総点数は、ポマワカ期が 1661 点、インガタンボ期が 3903 点である。ポマワカ期の出土土器の大半は B 基壇からであるため、A 基壇のみで比較した場合、この差異はさらに顕著となる。

前章で指摘したように、インガタンボ遺跡において集中的な建築活動がみられるのは A 基壇である。したがって、ポマワカ期において A 基壇で土器の出土量が少ないという現象は、単にこの時期の A 基壇で神殿をめぐる諸活動が執り行われていないということを意味しない。それよりもむしろ、ポマワカ期（少なくともポマワカ III 期まで）には、更新時の A 基壇の盛り土に意図的に土器が混入されなかったという状況があったと考えられる。

その一方、ポマワカ期を通じて出土量が最も多い土器は、平滑、あるいは粗整形の土器である。それらに加え、資料数は少ないものの、高度に研磨された PM タイプ 2 と PM タイプ 4 も確認される。また、装飾における白色塗彩や赤色塗彩の利用（PM タイプ 1 や PM タイプ 3-4 など)、多彩色（PM タイプ 2-3)、ポストコクション（PM タイプ 5-3)、磨線（PM タイプ 3-3）などもみうけられる。すなわち、インガタンボ遺跡出土土器にみられる一般的な器面調整や装飾は、ポマワカ期においてすでにほぼ出揃っているといえる。

続くインガタンボ期になると、出土量の増加に合わせて、タイプ数が増加し、器形や特徴的な装飾を有する土器のバリエーションが急激に増加する。出土点数は少ないものの、黒色の磨研土器 (IG タイプ 3) が現れるとともに、IG タイプ 1 や IG タイプ 2 といった胎土の極めて緻密な土器や、黒鉛が塗布された IG タイプ 3-3 や IG タイプ 5-3 がみられるようになる。また、ポマワカ期からの連続性が強くみられる土器においても、表面線、凹線、

圏点文、ロッカースタンプ文など利用される装飾技法の多様性が大きく増す。さらに、無頚壺や開口円筒鉢、コップ形、高杯など器形のバリエーションも増加する。

ただし、出土量が最も多いのが、平滑、または粗整形の土器であることなど、ポマワカ期とインガタンボ期の両時期を通じた連続性も認められる。このような連続性は、装飾技法でもみられ、インガタンボでは、インガタンボ期においてもプレコクションの多彩色やポストコクションを有した土器が継続的に利用される。また、壺形土器においては、ポマワカ期からインガタンボ期を通じて、無頚壺がほとんどみられず、有頚の短頚壺の出土割合が極めて高い点は、インガタンボの大きな特徴の一つである。

表5-2 各時期における出土土器タイプ別構成表

タイプ名				ポマワカ期(サブフェイズI)				ポマワカ期(サブフェイズII)				ポマワカ期(サブフェイズIII)								ポマワカ期(サブフェイズIV)							
				A基壇主要基壇(A区)		B基壇		A基壇主要基壇(A区)		B基壇		A基壇主要基壇(A区)				B基壇				A基壇主要基壇(A区)				B基壇			
												上部小基壇		その他						上部小基壇		その他					
				点数	比率	点数	比率	点数	比率	点数	比率	点数	比率	点数	比率	点数	比率			点数	比率	点数	比率	点数	比率	点数	比率
PMタイプ1		ポマワカ期白色 (PM Blanco)				1	1.3%															2	0.5%	2	0.3%
PMタイプ2	タイプ2-1	ポマワカ期赤色磨研 (PM Rojo Pulido)	(Rojo Pulido)													1	0.4%	1	5.9%						
	タイプ2-2		刻線 (Rojo Pulido inciso)																					2	0.3%
	タイプ2-3		多彩色(Rojo Polícromo)																					4	0.5%
PMタイプ3	タイプ3-1	ポマワカ期赤色平滑 (PM Rojo Alisado)	(Rojo Alisado Engobe)			2	2.7%	2	33.3%	1	2.7%	18	30.5%	1	20.0%	11	4.3%	1	5.9%	59	13.5%	48	6.2%			1	0.1%
	タイプ3-2		刻線 (Rojo Alisado Inciso)							1	2.7%					3	1.2%	1	5.9%	7	1.6%	8	1.0%		
	タイプ3-3		磨線 (Rojo Alisado L.B.)			1	1.3%											2	11.8%						
	タイプ3-4		赤色・白色塗彩(Rojo y Blanco)													3	1.2%	1	5.9%	13	3.0%	15	1.9%		
	タイプ3-5		赤色塗彩 (Rojo Pintado)			1	1.3%			2	5.4					26	10.2%	2	11.8%	2	0.5%	30	3.9%		
	タイプ3-6		赤色塗彩・刻線 (Rojo Pintado Inciso)									1	1.7%			1	0.4%			3	0.7%	5	0.6%		
PMタイプ4		ポマワカ期褐色磨研 (PM Marrón Pulido)	(Marrón Pulido)																	2	0.5%	2	0.3%		
PMタイプ5	タイプ5-1	ポマワカ期褐色平滑 (PM Marrón Alisado)	(Marrón Alisado)			8	10.7%	1	16.7%	3	8.1	25	42.4%	1	20.0%	20	7.8%	1	5.9%	51	11.7%	74	9.6%		
	タイプ5-2		刻線 (Marró Alisado Inciso)			1	1.3%	1	16.7%	1	2.7					3	1.2%			40	9.2%	16	2.1%		
	タイプ5-3		刻線・ポストコクション (Marrón Alisado Inciso P.C.)																			1	0.1%		
	タイプ5-4		磨線 (Marrón Alisado L.B.)					1	16.7%			1	1.7%							3	0.7%	4	0.5%		
PMタイプ6	タイプ6-1	ポマワカ期褐色平坦 (PM Marrón Nivelado)	A (Marrón Nivelado A)			57	76.0%	1	16.7%	24	64.9	4	6.8%	3	60.0%	152	59.6%	2	11.8%	136	31.1%	423	54.9%		
	タイプ6-2		B (Marrón Nivelado B)							2	5.4	3	5.1%			2	0.8%			15	3.4%	21	2.7%		
PMタイプ7	タイプ7-1	ポマワカ期褐色粗整形 (PM Marrón Tosco)	A (Marrón Tosco A)			4	5.3%			2	5.4	7	11.9%			32	12.5%	5	29.4%	87	19.9%	99	12.9%		
	タイプ7-2		B (Marrón Tosco B)							1	2.7					1	0.4%			17	3.9%	15	1.9%		
		合計				75	100%	6	100%	37	100%	59	100%	5	100%	255	100%	17	100%	437	100%	770	100%		
		出土地(発掘区)別の出土割合		0	0%	75	100%	6	14.0%	37	86.0%	59	18.5%	5	1.6%	255	79.9%	17	1.4%	437	35.7%	770	62.9%		
		出土地(基壇)別の出土割合		0	0%	75	100%	6	14.0%	37	86.0%			64	20.1%	255	79.9%			454	37.1%	770	62.9%		

タイプ名				インガタンポ(サブフェイスI)										インガタンポ(サブフェイズII)											
				A基壇										A基壇											
				A基壇主要基壇(A区)				東部・小基壇		西基壇		主要階段		A基壇主要基壇(A区)						東部・部屋状構造(B区)		西基壇		主要階段	
				上部小基壇		その他		(B区)		(C区)		(D区)		上部小基壇		基壇北東角		その他				(C区)		(D区)	
				点数	比率	点数	比率	点数	比率	点数	比率	点数	比率	点数	比率	点数	比率	点数	比率	点数	比率	点数	比率	点数	比率
IGタイプ1	タイプ1-1	インガタンポ期オレンジ色 (IG Anaranjado)	(Anaranjado)	2	0.2%											16	2.3%	9	1.2%						
	タイプ1-2		オレンジ地赤彩 (Naranja y Rojo)	1	0.1%											11	1.6%								
IGタイプ2		インガタンポ期灰色磨研 (IG Gris Fino)		4	0.5%					1	4.5%	1	2.0%			9	1.3%	1	0.1%	2	0.6%			1	0.3%
IGタイプ3	タイプ3-1	インガタンポ期黒色磨研 (IG Nergo Pulido)	(Negro Pulido)	12	1.4%	1	0.3%	3	8.8%			1	2.0%	22	4.8%	16	2.3%	6	0.8%	4	1.2%			7	2.3%
	タイプ3-2		刻線 (Negro Pulido Inciso)	3	0.3%	1	0.3%							3	0.6%	2	0.3%			1	0.3%				
	タイプ3-3		黒鉛塗布 (Negro Grafitado)			1	0.3%							7	1.5%	2	0.3%	3	0.4%						
IGタイプ4		インガタンポ期白色 (IG Blanco)		6	0.7%	2	0.6%							1	0.2%			2	0.3%						
IGタイプ5	タイプ5-1	インガタンポ期赤色磨研 (IG Rojo Pulido)	(Rojo Pulido)	4	0.5%											2	0.3%			6	1.9%			1	0.3%
	タイプ5-2		刻線 (Rojo Pulido inciso)													2	0.3%								
	タイプ5-3		多彩色 (Rojo Polícromo)	18	2.1%	1	0.3%							1	0.2%	3	0.4%			2	0.6%			2	0.7%
	タイプ5-4		黒鉛塗布 (Rojo Grafitado)	6	0.7%											2	0.3%	3	0.4%	1	0.3%				
IGタイプ6	タイプ6-1	インガタンポ期赤色平滑 (IG Rojo Alisado)	(Rojo Alisado Engobe)	147	17.0%	71	21.2%	4	11.8%	5	22.7%	6	12.2%	36	7.8%	46	6.6%	65	8.4%	24	7.5%	4	26.7%	35	11.5%
	タイプ6-2		刻線 (Rojo Alisado Inciso)	2	0.2%	2	0.6%			2	9.1%	1	2.0%			2	0.3%	4	0.5%					2	0.7%
	タイプ6-3		磨線 (Rojo Alisado L.B.)													2	0.3%								
	タイプ6-4		赤色・白色塗彩 (Rojo y Blanco)	3	0.3%	7	1.9%							1	0.2%			2	0.3%					1	0.3%
	タイプ6-5		赤色塗彩 (Rojo Pintado)	14	1.6%	8	2.2%	2	5.9%			3	6.1%	6	1.3%	19	2.7%	21	2.8%	8	2.5%			15	4.9%
	タイプ6-6		赤色塗彩・刻線 (Rojo Pintado Inciso)	4	0.5%	5	1.4%									1	0.1%	13	1.7%					1	0.3%
IGタイプ7	タイプ7-1	インガタンポ期褐色磨研 (IG Marrón Pulido)	(Marrón Pulido)	18	2.1%	1	0.3%							6	1.3%	20	2.9%			1	0.3%			8	2.6%
	タイプ7-2		刻線 (Marron Pulido inciso)					1	2.9%					1	0.2%	6	0.9%								
IGタイプ8	タイプ8-1	インガタンポ期褐色平滑 (IG Marrón Alisado)	(Marrón Alisado)	193	22.3%	34	9.4%	4	11.8%	1	4.5%	5	10.2%	101	21.9%	128	18.3%	111	14.5%	28	8.7%	1	6.7%	72	23.6%
	タイプ8-2		刻線 (Marró Alisado Inciso)	12	1.4%	21	5.8%	5	14.7%	4	18.2%	3	6.1%	2	0.4%	18	2.6%	30	3.9%	9	2.8%	4	26.7%	16	5.2%
	タイプ8-3		刻線・ポストコクション (Marrón Alisado Inciso P.C.)	3	0.3%							2	4.1%	2	0.4%	9	1.3%	4	0.5%	5	1.6%			2	0.7%
	タイプ8-4		磨線 (Marrón Alisado L.B.)	23	2.7%	5	1.4%							1	0.2%	11	1.6%	10	1.3%					1	0.3%
IGタイプ9	タイプ9-1	インガタンポ期褐色平坦 (IG Marrón Nivelado)	A (Marrón Nivelado A)	271	31.3%	78	21.5%	6	17.6%	9	40.9%	21	42.9%	104	22.5%	183	26.2%	246	32.2%	82	25.5%	6	40.0%	50	16.4%
	タイプ9-2		B (Marrón Nivelado B)	18	2.1%	10	2.8%							50	10.8%	12	1.7%	35	4.6%	4	1.2%			23	7.5%
IGタイプ10	タイプ10-1	インガタンポ期褐色粗整形 (IG Marrón Tosco)	A (Marrón Tosco A)	86	9.9%	89	24.5%	4	11.8%			6	12.2%	105	22.7%	147	21.0%	176	23.0%	124	38.5%			59	19.3%
	タイプ10-2		B (Marrón Tosco B)	15	1.7%	26	7.2%	5	14.7%					12	2.6%	29	4.1%	24	3.1%	21	6.5%			9	3.0%
IGタイプ11		未分類		2	0.2%									1	0.2%	1	0.1%								
		合計		867	100%	363	100%	34	100%	22	100%	49	100%	462	100%	699	100%	765	100%	322	100%	15	100%	305	100%
		出土地(A基壇内発掘区)別の出土割合		867	64.9%	363	27.2%	34	2.5%	22	1.6%	49	3.7%	462	18.0%	699	27.2%	765	29.8%	322	12.5%	15	0.6%	305	11.9%

第 6 章：インガタンボ遺跡出土の石器、貝製品、土製品、骨角器

本章では、インガタンボ遺跡出土の土器以外の人工遺物について記述する。土器以外の人工遺物は、資料数が絶対的に少なく、定量的な分析を行うには不十分である。そのため、土器と同じように編年の指標とはなり難い。しかし、特定の遺物には、インガタンボ遺跡独自の特徴が表されており、その出土も時期的に偏重する。また、資料数の少なさにも関わらず、時期ごとの出土傾向に顕著な差異がみられる場合もあり、こうした差異は通時的な変化を反映したものと想定することもできよう。

以下、石器、貝製品、土製品、骨角器の順に整理し、記述していく。

6-1. 石器

石器の分析に際しては、土器と同様に肉眼、またはルーペによって表面を観察し、計測した[1]。しかし、出土量が少ないため、定量的な統計処理は行っていない。今後、資料数の増加とともに分析を精緻化していく必要はあるが、本節ではこれまで実施した分析結果とその特徴を提示する。

6-1-1. 分類と石器一覧

分析では、各資料の使用目的や機能を明らかにするため、形態的特徴によって分類を行った。また、インガタンボ遺跡における石器の特徴と時期的傾向を明らかにすることも分類目的の一つであった。時期ごとの分類結果は、表 6-1 の通りである。

表6-1　インガタンボ遺跡出土、石器分類表

		ワンカバンバ I	ワンカバンバ II	ワンカバンバ III		ワンカバンバ IV		ポマワカ I			ポマワカ II		ポマワカ III			ポマワカ IV			インガタンボ I						インガタンボ II					
		A基壇主要基壇（A区）	A基壇主要基壇（A区）	A基壇主要基壇（A区）	B基壇	A基壇主要基壇（A区）	B基壇	A基壇主要基壇（A区）	B基壇	D基壇	A基壇主要基壇（A区）	B基壇	A基壇主要基壇（A区）上部・部屋状構造	A基壇主要基壇（A区）その他	B基壇	A基壇主要基壇（A区）上部・部屋状構造	A基壇主要基壇（A区）その他	B基壇	A基壇 主要基壇 上部・部屋状構造	A基壇 主要基壇 その他	A基壇 主要基壇 東部・小基壇（B区）	A基壇 西基壇（C区）	A基壇 主要アクセス（D区）	B基壇	A基壇 主要基壇 上部・部屋状構造	A基壇 主要基壇 その他	A基壇 主要基壇 東部・部屋状構造（B区）	A基壇 西基壇（C区）	A基壇 主要アクセス（D区）	B基壇
石鉢								5			1		1	2			1				2									
装身具	玉製品																1	1		2										
	管玉													2						1										
	その他										1	1								1										
剥片								1	1									1	1		3						1			
	石英							1																						
	黒曜石																									2				
砕片				1		2		3	1			1				1					1									
	石英	3	1	2		4		9	2		1			1			1	1			11					2		1	
研磨具		1		2		2		2		2				6				1	3			5				2				
	石錘																										1			
すり石			1	2		2		2	20	2	4		1	17	6		4	7	4	2	6	1	1			3	2	1	1		
石錘																								4		1				

[1]石器の分析は、主としてペルー国立サン・クリストバル・デ・ワマンガ大学のジェニー・オチョアが担当し、共同で作業を進めた。

6-1-2. 石鉢

計 12 点の石鉢の口縁部、あるいは胴部破片が出土している（写真 6-1, 6-2）。全ての資料は、A 基壇の主要基壇から採取された。鉢の形態は基本的に半球鉢、もしくは開口半球鉢の様相を呈し、全ての破片は研磨されている。そのなかには、刻線で装飾が施されたものが 3 点存在する（写真 6-3）。とりわけ、1 点は完形の石鉢で動物が表象されている（写真 6-4）。

出土傾向には時期的な偏りがみられる。ポマワカ I 期 5 点、ポマワカ II 期 1 点、ポマワカ III 期 3 点、ポマワカ IV 期 1 点、インガタンボ I 期 2 点と、出土資料の大半がポマワカ期に属しているのである。また、インガタンボ I 期の 2 点に関しても、それらの出土コンテクストは、インガタンボ I 期の神殿が造られる際の埋め土である。したがって、ポマワカ期の終わり、あるいはインガタンボ期の最初期のものと考えられるため、基本的に石鉢はポマワカ期に特徴的な遺物であると結論づけられる。

なお、第 4 章で述べたように、完形の石鉢は、ポマワカ III 期の A 基壇の主要基壇上部に建設された低層基壇の改築に伴う奉納品であると考えられる。

石鉢の類例は、北部熱帯低地のワユルコ[Rojas 1985]、バグア複合[Shady 2002]、北部山地のワカロマ[Terada and Onuki 1985]、クントゥル・ワシ[Onuki ed. 1995]で報告されている。この他にも、北部熱帯低地のハエン市の博物館やバグア市の個人コレクション[Olivera 2008]、もしくは、エクアドル南部熱帯低地のチンチペ川上流域サンタ・アナ - ラ・フロリダ[Valdez 2007, 2008a, 2008b]や海岸部のバルディビアにおいて確認される[Meggers et al. 1965]。ハエン市やバグア市、サンタ・アナ - ラ・フロリダ遺跡の石鉢のなかには、インガタンボ遺跡出土の石鉢よりも高度に研磨され、刻線などで動物が表象されるものも存在する。

石鉢の分布の中心がワユルコをはじめとした北部熱帯低地であることから、北部熱帯地域を調査したロサスやシャディ[Rosas and Shady 1974; Shady 2002; Shady and Rosas 1982, 1987]、その上流域を調査したバルデス[Valdez 2007, 2008a, 2008b: 175]は、石鉢の生産と流通の中心として、チンチペ川を南に下った場所にあるワユルコ遺跡を想定している。製作地と考えられているワユルコ自体の編年が不明瞭ではあるが、インガタンボの出土状況を考慮すると、石鉢の製作はポマワカ期（形成期中期）を中心に行われたと考えられる。今後は、編年問題も含めた精査が必要である。また、インガタンボ出土資料だけでなく、上記の諸遺跡の出土資料も石材鑑定が行われていないため、石材の産地や製作地を同定するのは困難である。しかしながら、石鉢の分布の中心を考慮すると、インガタンボを含めた北部熱帯低地の諸遺跡で製作が行われたこと、そして同地域の遺跡間に製作に関わる技術や情報、あるいはイデオロギーについての地域間交流が存在した可能性は示唆される。

写真6-1　石鉢①

写真6-2　石鉢②

写真6-3　石鉢③

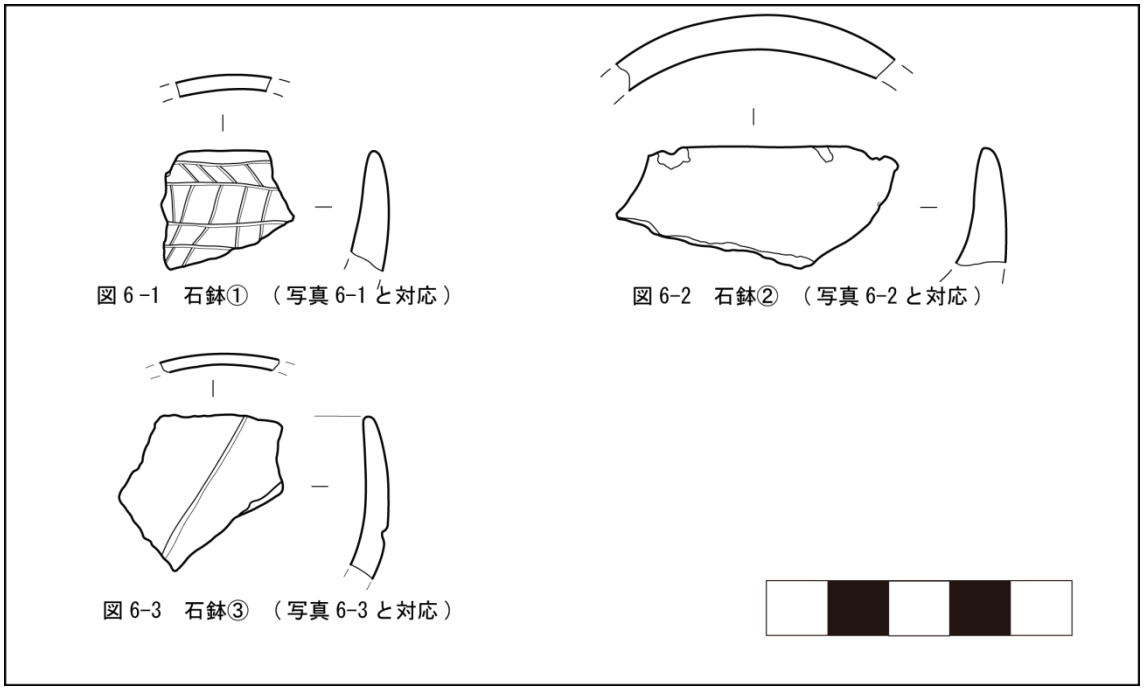


図 6-1　石鉢①　（写真 6-1 と対応）

図 6-2　石鉢②　（写真 6-2 と対応）

図 6-3　石鉢③　（写真 6-3 と対応）

写真6-4-1　石鉢④

写真6-4-2　石鉢④

写真6-4-3　石鉢④

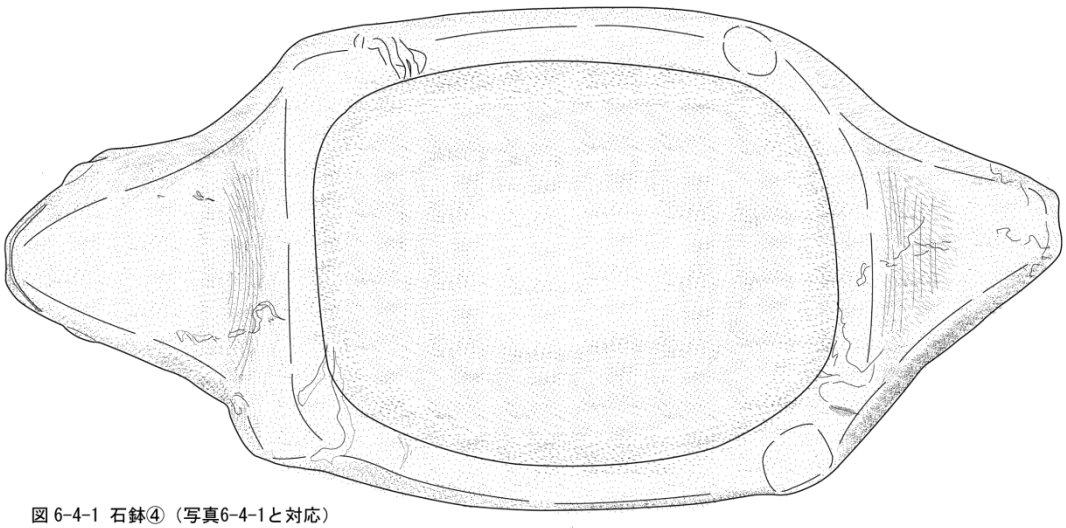


図 6-4-1 石鉢④（写真6-4-1と対応）

図 6-4-2 石鉢④（写真6-4-2と対応）

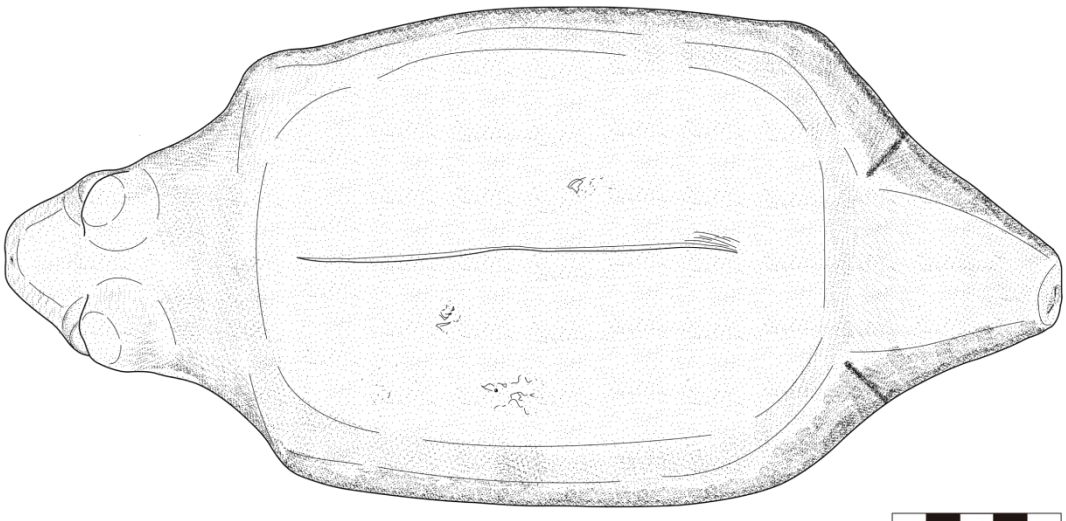


図 6-4-3 石鉢④（写真6-4-3と対応）

6-1-3. 装身具

資料数が極めて少なく、発掘を通じて採集したコンテクストの確かな資料はわずかに 11 点のみである。

ポマワカ期の事例の多くは、主要基壇の盛り土から出土している。その内訳は、ポマワカ II 期に対応する層から出土した穿孔途中の未製品 1 点（写真 6-5)、ポマワカ III 期の管玉 2 点（写真 6-6)、ポマワカ IV 期の玉製品 1 点である。また、B 基壇では、ポマワカ II 期とポマワカ IV 期のコンテクストから、ペンダントと考えられる未製品と玉製品が、それぞれ 1 点ずつ出土している（写真 6-7)。

インガタンボ期になると、A 基壇主要基壇においてインガタンボ I 期に対応する層から、円盤状製品 1 点（写真 6-8）と玉製品 2 点（写真 6-9～6-10)、管玉 1 点（写真 6-11）が出土している。

また、A 基壇の西基壇では、インガタンボ II 期の珪孔雀石製と考えられる玉製品 1 点が確認された（写真 6-12)。珪孔雀石製の玉製品は、北部海岸から北部山地にいたるヘケテペケ川流域に報告例が多いが[Terada and Onuki 1988; Seki 1997; 鶴見 2008a]、出土時期が対応するのはクントゥル・ワシの事例である[Onuki ed. 1995]。

さらに、第 2 章で述べたインガタンボより出土したとされるポマワカ市博物館蔵の首飾りには、方ソーダ石が含まれている。ポマワカ期にあたる時期の方ソーダ石の出土例は、北部山地のセロ・ブランコ[Onuki ed. 1995]とヘケテペケ川中流域のラス・ワカス[鶴見 2008a]、北部海岸のプエマペ[Elera 1998]、北部熱帯低地のトメペンダ[Olivera 1998]に認められる。その一方、インガタンボの出土例と同時期である形成期後期の事例は、珪孔雀製石製品と同様にクントゥル・ワシ[Onuki ed. 1995]だけである。

このように、装身具の類例は、ペルー北部、とくに北部山地と北部海岸に多くみられる。出土コンテクストが遺構を伴う明確な事例は少ないが、既述の諸地域との間に、製作技術、もしくはイデオロギーに関わる情報を共有するような交流が存在した可能性はある。

6-1-4. 剝片・砕片

インガタンボでは、ワンカバンバ期に対応するコンテクストから 13 点の砕片、ポマワカ期において 4 点の剝片と 21 点の砕片、インガタンボ期には 7 点の剝片と 15 点の砕片が出土しており、全時期を通じて確認されている。資料数が少ないため、断定は困難ではあるが、とくにポマワカ I 期とインガタンボ I 期の出土例が多いようである。剝片、砕片ともに石英製の例が認められるが（写真 6-13～6-14)、石英製品を利器として使用する状況は、北部海岸ヘケテペケ川中流域のラス・ワカスと同様である[鶴見 2008a]。

また、剝片で注意すべきは黒曜石の存在である。インガタンボ遺跡ではわずか 2 点の黒曜石が出土している。それぞれインガタンボ II 期に対応する層位から出土しており、出土コンテクストは､A 基壇最上部の部屋状構造物内と A 基壇北東角の部屋状構造物内である。分析の結果、これらの産地はペルー南部山地のキスピシーサであることが判明した（写真

6-15～6-16)[1]。北部山地のパコパンパ複合[Burger 1984]やクントゥル・ワシ[関 2006]では、形成期後期に黒曜石の存在が報告されており、黒曜石の産地はキスピシーサとなっている[Burger 1984; 坂井・清水 2002]。

6-1-5. 研磨具

全ての時期を通じて出土する。ワンカバンバ期に 5 点、ポマワカ期に 11 点、インガタンボ期に 11 点と、出土傾向には時期的な特徴はとくにみられない。インガタンボ II 期には、A 基壇東側の部屋状構造物群で石錐のような形状を持つものが 1 点出土している（写真 6-17)。土器や貝製品の加工などに際して利用されたと考えられるが、詳細は不明である。

6-1-6. すり石

インガタンボ遺跡の石器で最も出土量が多いのが、すり石である。全ての時期を通じて出土するが、ワンカバンバ期に 5 点、ポマワカ期に 63 点（写真 6-18)、インガタンボ期に 21 点と、とくにポマワカ期の出土量が多い。すり痕、敲打痕の両方がみられるものもあり、粉砕具としても利用されたと考えられる。また、顔料の一部が表面に残る事例からは、A 基壇主要基壇上部の部屋状構造部分で検出したような、赤色、白色、黄色からなる多彩色壁画の製作にも利用されたことが推測される。

6-1-7. 石錘

インガタンボ I 期に 4 点、インガタンボ II 期に 1 点の石錘が確認されている（写真 6-19～6-20)。次章で後述するように、インガタンボ遺跡ではワタが出土していることから、横を流れるワンカバンバ川で川漁が行われた可能性がある。

[1]リチャード・バーガー教授の協力のもと、ミズーリ大学の研究施設（The Archaeometry Laboratory at the University of Missouri Research Reactor: MURR）で産地同定を実施した。分析方法は、蛍光 X 線による破壊分析（X-Ray Fluorescence: XRF）で、分析者はマイケル・グラスコック教授である。

写真6-5　石製装身具未製品（ポマワカ期）

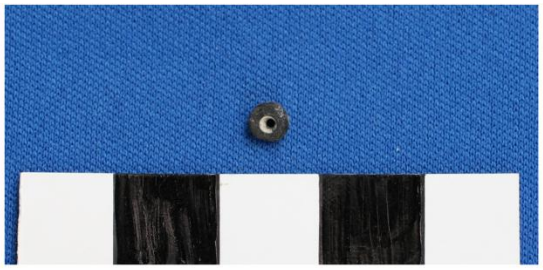


写真6-9　石製玉製品（インガタンボ期）

写真6-6　石製管玉（ポマワカ期）

写真6-10　石製玉製品（インガタンボ期）

写真6-7　石製装身具未製品（ポマワカ期）

写真6-11　石製管玉（インガタンボ期）

写真6-8　石製円盤状製品（インガタンボ期）

写真6-12　石製玉製品（インガタンボ期）

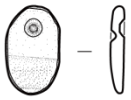


図 6-5　石製装身具未成品　（写真 6-5 と対応）

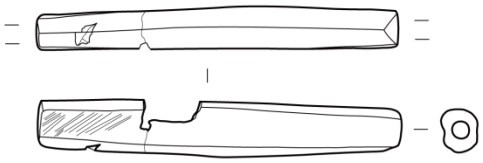


図 6-6　石製管玉　（写真 6-6 と対応）

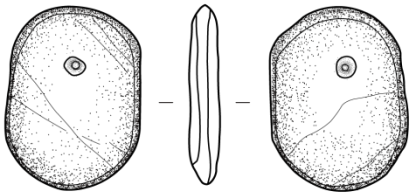


図 6-7　石製装身具未成品　（写真 6-7 と対応）

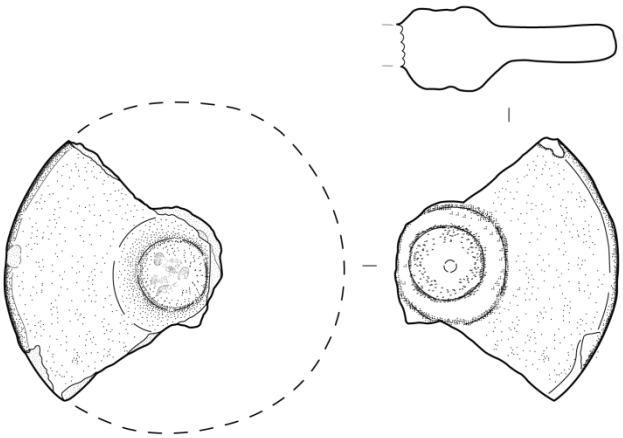


図 6-8　石製円盤状製品　（写真 6-8 と対応）

図 6-8　石製玉製品　（写真 6-9 と対応）

図 6-10　石製管玉　（写真 6-11 と対応）

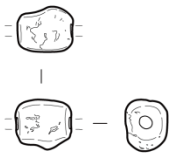


図 6-11　石製玉製品　（写真 6-12 と対応）

写真6-13　石英製剥片①

写真6-14　石英製剥片②

写真6-15　黒曜石製剥片①

写真6-16　黒曜石製剥片②

写真6-17　錐状石器

写真6-18　すり石

写真6-19　石錘①

写真6-20　石錘②

図 6-12　黒曜石製片①（写真 6-15 と対応）

図 6-13　黒曜石製片②（写真 6-16 と対応）

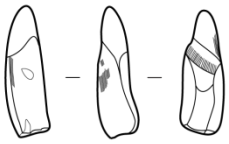


図 6-14　錐状石器（写真 6-17 と対応）

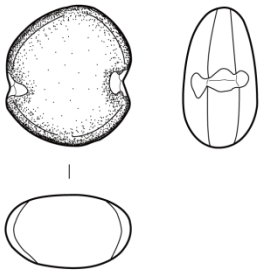


図 6-16　石錘①（写真 6-19 と対応）

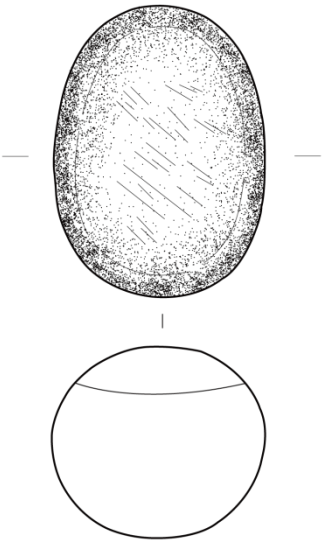


図 6-15　すり石（写真 6-18と対応）

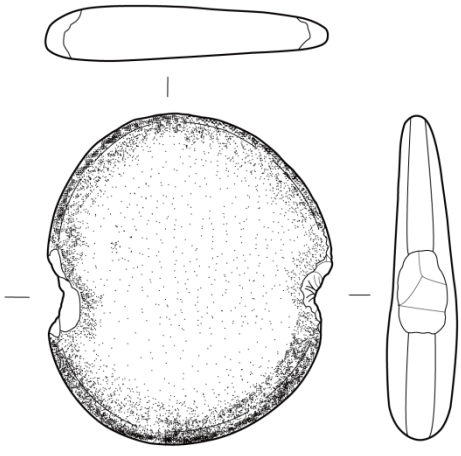


図 6-17　石錘②（写真 6-20 と対応）

6-2.　貝製品

インガタンボ遺跡では､海水生種と陸生種の 2 種の貝を使用した貝製品が出土しており、それらの時期ごとの出土傾向を示したものが表 6-2 である。また、海水生種の貝を利用した製品の資料数が、陸生種の貝を利用した事例よりも明らかに多い。以下、海水生種、陸生種の順に整理し、その特徴を記述する。出土した貝製品のなかには、ペルー国立トゥルヒーヨ大学のビクトル・バスケス教授とテレサ・ロサレス教授に分析を依頼して、種同定を

行ったものがある[Vásquez and Rosales 2008, 2009]。同定を行ったものに関しては、必要に応じて記述する。

表6-2　インガタンボ遺跡出土、貝製品分類表

		ワンカバンバ I	ワンカバンバ II	ワンカバンバ III		ワンカバンバ IV		ポマワカ I		ポマワカ II		ポマワカ III			ポマワカ IV			インガタンボ I					インガタンボ II			
		同定資料数																								
		A基壇主要基壇（A区）	A基壇主要基壇（A区）	A基壇主要基壇（A区）	B基壇	A基壇主要基壇（A区）	B基壇	A基壇主要基壇（A区）	B基壇	A基壇主要基壇（A区）	B基壇	A基壇主要基壇（A区）上部・部屋状構造	A基壇主要基壇（A区）その他	B基壇	A基壇主要基壇（A区）上部・部屋状構造	A基壇主要基壇（A区）その他	B基壇	A基壇 主要基壇 上部・部屋状構造	A基壇 主要基壇 その他	A基壇 主要基壇 東部・小基壇（B区）	A基壇 西基壇（C区）	B基壇	A基壇 主要基壇 上部・部屋状構造	A基壇 主要基壇 その他	A基壇 主要基壇 東部・部屋状構造（B区）	B基壇
海水生種	装身具			1					1			3			1	4	2		1	13	1		1		4	
	不明							1		2			2			2			1	3			1		1	
陸生種	装身具															1								1		

6-2-1. 海水生種

ワンカバンバ期からインガタンボ期まで全ての時期において、海水生種の貝を利用した人工遺物の出土が認められた。その大半は装身具であるが、なかには加工の痕跡はみられるものの、用途不明のものもあり、それらは便宜上「不明」として分類している。なお、ここでいう装身具とは、玉製品、板状玉製品、管玉、ペンダントのことである。

ワンカバンバ期には、ワンカバンバ III 期に海水生種の貝製品の出土が 1 点確認される。出土コンテクストは A 基壇主要基壇で、製品はイタガヤイ科の貝（*Argopecten* sp.）を利用した円形の板状玉製品、あるいはペンダントである（写真 6-21）[1]。

ポマワカ期になると資料数の増加がみられる。発掘面積が広い結果でもあると考えられるが、その大半は主要基壇から出土している。主要基壇では、ポマワカ I 期に 1 点（不明 1 点）、ポマワカ II 期に 2 点（不明 2 点）、ポマワカ III 期に 5 点（不明 2）、ポマワカ IV 期に 7 点（不明 2 点）の貝製品が確認された。全ての貝製品の種同定を実施していないものの、ペルー極北部海岸のパイタを生息域の南限とする暖流系のイタガヤイ科の貝（*Argopecten* sp.）とウグイスガイ科（*Pteriidae*）の貝、エクアドルのサンタ・エレーナ付近を生息域とするウミギクガイ（*Spondylus* sp.）が認められる。ウグイスガイ科

[1] *Agropecten* sp.の特定種と *Trachycardium procerum* は、エル・ニーニョの影響をあまり受けないとされる。そのため、比較的温暖な海水であれば生息可能であり、ペルーの広範囲にわたる分布がみられる[Días and Otrlieb 1993; Elera et al. 1992; Victor Vásquez 私信]。

（*Pteriidae*）の貝の一部は、アコヤガイ属（*Pinctada mazatlanica*）と同定されている。

装身具として分類されたものは、ポマワカ III 期（写真 6-22～6-24）とポマワカ IV 期（写真 6-25～6-26）のいずれも板状玉製品である。それ以外の用途不明な事例は、両面が研磨され、刻線で装飾が施されたもの（写真 6-27（PMIII））や、加工途中とみられる未製品（写真 6-28）である。なお、未製品としたもののなかには、貝の縁辺部の離痕や穿孔痕が、整形によるのか、自然によるのか判断がつきにくいものもある。これらは、加工途中のものというよりも、むしろ原料に近い事例である。しかし、それらが海水生種であること、および遠隔地よりもたらされ、主要基壇から検出されるという出土状況をふまえて、あくまで加工を目的として海岸部よりインガタンボにもたらされた点を重視し、加工製品の一部として位置づけている。また、B 基壇では、ポマワカ I 期に 1 点のペンダント（写真 6-29）、ポマワカ IV 期に暖流系のウミギクガイ（*Spondylus* sp.[1]）製の玉製品と管玉が各 1 点出土している（写真 6-30～6-31）。

インガタンボ期には、ポマワカ期と比して資料数がさらに増加する。そして、インガタンボ I 期には 19 点（不明 4 点）、インガタンボ II 期には 7 点（不明 2 点）の海水生種の貝が確認されている。これらの貝の内訳は、ポマワカ期までと同様に、イタガヤイ科（*Argopecten* sp.）とウグイスガイ科（*Pteriidae*）、ウミギクガイ（*Spondylus* sp.）である。また、ウグイスガイ科（*Pteriidae*）の貝のなかには、属レベルまで同定されているものもある。ちなみに、同定されたのは、アコヤガイ属（*Pinctada mazatlanica*）である。

この時期の海水生種の貝は、A 基壇だけで確認されている。なかでも、インガタンボ I 期では 16 点（不明 3 点）が、インガタンボ II 期では 5 点（不明 1 点）の貝製品が、A 基壇東側の部屋状構造物群から出土している。とくに、インガタンボ I 期の事例の大半は、部屋状構造物群を支える基壇の建設時に、基壇の盛り土にまとめて混入されていることから、更新に伴う儀礼的奉納であったと考えられる。

ポマワカ期と同様に装身具の大半は板状玉製品であるが、インガタンボ期の貝製品のなかにはポマワカ期よりも精巧な仕上げが施されたものが多く、その傾向はインガタンボ I 期の遺物に顕著である（写真 6-32～6-34）。また、インガタンボ I 期では、詳細な用途は不明であるが高度に研磨された貝（写真 6-35）や未製品がみられる（写真 6-36）。さらに、A 基壇の西基壇では、この時期に対応する層からウミギクガイの玉製品が 1 点出土している（写真 6-37）。

インガタンボ期後半（インガタンボ II 期）に入ると、後代の活動による層位の攪乱や盗掘によって、出土コンテクストの明確な資料が少ないこともあり、出土量は減少する。しかしながら、以前と同様に板状玉製品やペンダント（写真 6-38～6-40）、研磨された貝（写真 6-41）が確認されるなど、全体的な出土傾向に変化はみられない。また、この時期にはメキシコカガミ（*Dosinia dunkeri*）を用いた製品もみられるようになっており（写真 6-42）、より多様な種の貝の加工が行われていた。

[1] *Astraea olivacea* の可能性もある。

ウミギクガイの出土例は、形成期前期にはヘケテペケ川中流域のモンテグランデ[Ulbert 1994]にみられる。また、形成期中期には、北部山地のセロ・ブランコとクントゥル・ワシ[Onuki ed. 1995]、ヘケテペケ川中流域のラス・ワカス[鶴見 2008a]と北部海岸のプエマペ[Elera 1998]で確認されている。そして、形成期後期になると、北部山地のクントゥル・ワシとラ・グランハ複合[Westel et al. 2000]、パコパンパ複合[1]、北部海岸のモロ・デ・エテン[Elera 1986, 1992]で、それぞれウミギクガイの出土が認められる。こうした状況のなかで重要なことは、インガタンボよりも産地に近い、ペルー極北部海岸部中流域のセロ・ニャニャニケでは、報告例がほとんどないことである[Guffroy 1989, 1992]。その一方で、エクアドル南部山地のカタマヨ複合では、建造物を造り変える際に埋納されたと考えられる大量のウミギクガイが確認されている[Guffroy 2004; Uhle1922:4-5]。インガタンボでは、ポマワカ期からウミギクガイの利用がみられるが、より北方に位置するセロ・ニャニャニケでは出土が稀であることから、インガタンボにとってのウミギクガイの入手先は、カタマヨ複合に展開した社会であると考えられる。当該地域における地域間交流の諸相については、第 10 章で詳述するが、貝製品の出土状況を鑑みると、ポマワカ期以降のインガタンボは、ペルー北部におけるウミギクガイをはじめとした暖流系の貝の入手地であり、地域間交流の要衝であったと考えられる。

いずれにしても、形成期前期（ワンカバンバ期）には、インガタンボではウミギクガイが出土していない。そのため、その当時、ペルー北部に展開した社会は、インガタンボを介することなく、他の社会を通じて、暖流系の貝を入手した可能性がある。なお、北部熱帯低地のバグア複合 [Shady and Rosas 1979: 128]や、セレサルとミチナル[Miasta 1979]では、海水生種の貝の存在が報告されるが、詳細は不明である。

[1]とくに出土コンテクストなどの記述はないが、存在自体は指摘されている[Kaulicke 2005: 205]。

写真6-21　貝製板状玉製品
（ワンカバンバ期）

写真6-22　貝製板状玉製品①
（ポマワカIII期）

写真6-23　貝製板状玉製品②
（ポマワカIII期）

写真6-24　貝製板状玉製品③
（ポマワカIII期）

写真6-25　貝製板状玉製品①
（ポマワカIV期）

写真6-26　貝製板状玉製品②
（ポマワカIV期）

写真6-27　用途不明貝製品
（ポマワカIII期）

写真6-28　貝製未製品
（インガタンボ期）

写真6-29　貝製ペンダント
（B基壇、ポマワカI期）

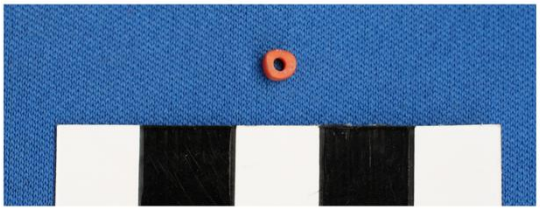


写真6-30　ウミギクガイ製玉製品
（B基壇、ポマワカIV期）

写真6-31　ウミギクガイ製管玉
（B基壇、ポマワカIV期）

写真6-32　貝製板状玉製品①
（インガタンボI期）

写真6-33　貝製板状玉製品②
（インガタンボI期）

写真6-34　貝製板状玉製品③
（インガタンボI期）

写真6-35　用途不明貝製品
（インガタンボI期）

写真6-36　貝製未製品
（インガタンボI期）

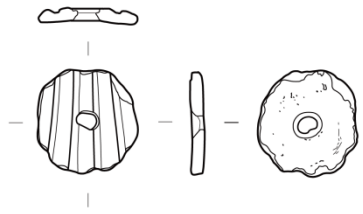


図 6-18　貝製板状玉製品　（写真 6-21 と対応）

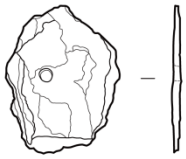


図 6-19　貝製板状玉製品②
（写真 6-23と対応）

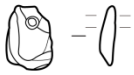


図 6-20　貝製板状玉製品③
（写真 6-24 と対応）

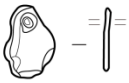


図 6-21　貝製板状玉製品①
（写真 6-25 と対応）

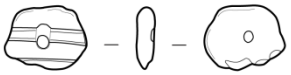


図 6-22　貝製板状玉製品②
（写真 6-26 と対応）

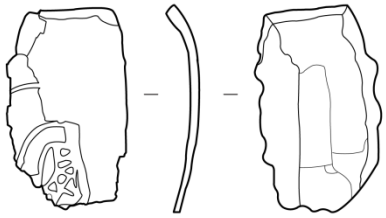


図 6-23　用途不明貝製品　（写真 6-27 と対応）

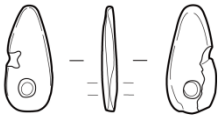


図 6-24　貝製ペンダント（写真 6-29 と対応）

図 6-25　ウミギクガイ製玉製品
（写真 6-30 と対応）

図 6-26
ウミギクガイ製管玉
（写真 6-31 と対応）

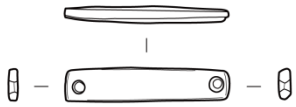


図 6-27　貝製板状玉製品①（写真 6-32と対応）

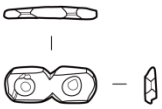


図 6-28　貝製板状玉製品②
（写真 6-33 と対応）

図 6-29　貝製板状玉製品③
（写真 6-34 と対応）

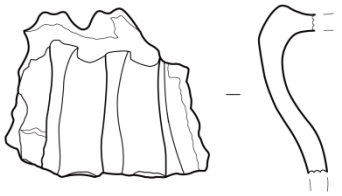


図 6-30　用途不明貝製品（写真 6-35 と対応）

写真6-37　ウミギクガイ製玉製品
（インガタンボI期）

写真6-38　貝製ペンダント
（インガタンボII期）

写真6-39　ウミギクガイ製玉製品
（インガタンボII期）

写真6-40　ウミギクガイ製玉製品
（インガタンボII期）

写真6-41　用途不明貝製品
（インガタンボII期）

写真6-42　貝製ペンダント
（インガタンボII期）

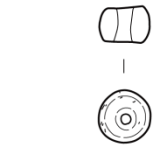


図 6-31　ウミギクガイ製玉製品
（写真 6-37 と対応）

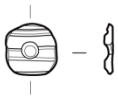


図 6-32　貝製ペンダント
（写真 6-38 と対応）

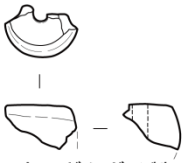


図 6-33　ウミギクガイ製玉製品
（写真 6-39 と対応）

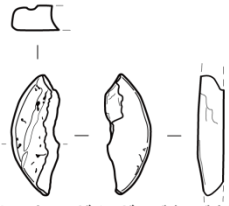


図 6-34　ウミギクガイ製玉製品　（写真 6-40 と対応）

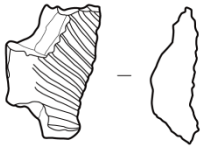


図 6-35　用途不明貝製品（写真 6-41 と対応）

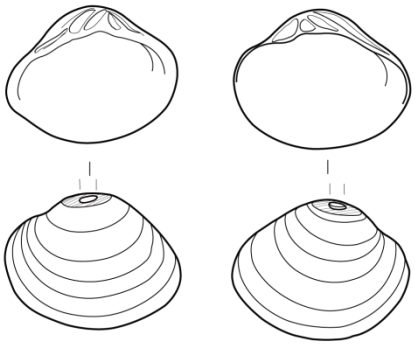


図 6-36　貝製ペンダント
（写真 6-42 と対応）

6-2-2. 陸生種

ポマワカ IV 期、インガタンボ II 期の各時期において、トウガタマイマイ科（*Bulimulidae*）の陸生種の貝殻を利用した装身具が 1 点ずつ出土している。ポマワカ IV 期の製品（*Thaumastus* sp.）には焼かれた痕跡があり、表面には刻線と刺突で装飾が施されている（写真 6-43）。また、インガタンボ期の装身具（*Bulimulus* sp.）には穿孔が施されており、ペンダントであると考えられる（写真 6-44）。

写真6-43　陸生貝製品（用途不明）

写真6-44　陸生貝製ペンダント

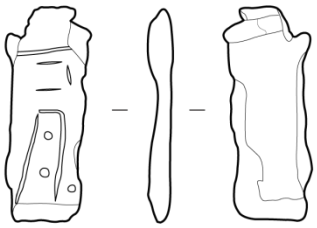


図 6-37　陸生貝製品
（写真 6-43 と対応）

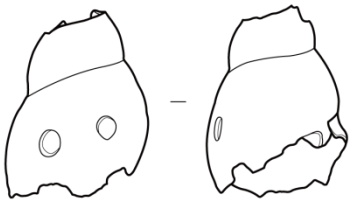


図 6-38　陸生貝製ペンダント
（写真 6-44 と対応）

6-3.　土製品

出土した土製品はわずかに 1 点のみで、A 基壇でインガタンボ II 期に相当する層から、紡錘車が出土している（写真 6-45）。

6-4.　骨角器

骨角器も出土量が少ない。ポマワカ III 期に針、またはピン 1 点（写真 6-46）、ポマワカ IV 期には磨かれた管状の製品（チューブ）1 点（写真 6-47）、インガタンボ II 期に針またはピンと磨かれた骨片（写真 6-48）が 1 点ずつ出土しただけである。なお、貝製品と同様に、ペルー国立トゥルヒーヨ大学のビクトル・バスケス教授とテレサ・ロス教授に種の同定を依頼した結果、ポマワカ III 期とインガタンボ II 期の針は、それぞれラクダ科動物の骨から製作されたことが明らかとなっている。

写真6-45　土製品

写真6-47　骨製チューブ
（ポマワカIV期）

写真6-46　骨製ピン（ポマワカIII期）

写真6-48　骨製ピン
（インガタンボII期）

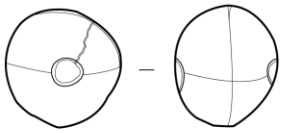


図 6-39　土製品　（写真 6-45 と対応）

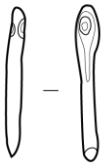


図 6-40　骨製ピン　（写真 6-46 と対応）

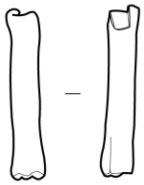


図 6-41　骨製チューブ（写真 6-47 と対応）

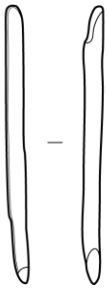


図 6-42　骨製ピン（写真 6-48 と対応）

6-5. 小括：出土遺物の特徴と時期的変遷

6-5-1. 出土遺物の特徴と時期的変遷

インガタンボ遺跡では、土器を含めて基本的に人工遺物の出土量が少ない。発掘対象が神殿であることや、発掘期間と発掘範囲を考慮しても、北部山地のクントゥル・ワシ遺跡や北部海岸ヘケテペケ川中流域のラス・ワカス遺跡などとの出土量の差は歴然としている。これに関しては、ポマワカ期以前には神殿建設時の盛り土へ遺物の混入が少ないこと、つまりは、神殿内部に廃棄物がほとんどみられない点が原因であると考えられる。しかし、この状況はインガタンボ期に変化し、土器をはじめとした遺物の出土量は大きく増加する。

石器に関しては、出土した石器の大半がいわゆる河原石であることから、横を流れるワンカバンバ川や遺跡の背後に存在するケブラーダ[1]などで、石材を必要に応じて入手し、使用していたことが想定される。また、出土状況を鑑みると、石器が利用された後は、神殿の内部にではなく、その周囲に放棄されたと考えられる。

こうした状況のなかで、他の製品と比べて、海水生種の貝製品の出土量が多いことは特筆すべき点であり、インガタンボ特有の現象である。これまで述べてきたように、インガタンボ遺跡は、海岸部から直線距離でも 100 ㎞以上離れた北部山地と北部熱帯低地の狭間にある。したがって、原材料としての海水生種の貝やそれを利用した製品の入手には、ワンカバンバ川流域社会と海岸部の社会との地域間交流が不可欠である。そのため、海水生種の貝の出土が、ポマワカ期から顕著になることは、ポマワカ期以降に海岸部との関係が密接になっていったことを示唆する。とくに、暖流を産地とするウミギクガイは、ペルー北部地域に出土例がみられる一方で、極北部海岸中流域のセロ・ニャニャニケにおいて出土例が少ない。このことからは、ペルーにおけるウミギクガイの獲得に際して、海岸部ではなく山地、つまりはインガタンボやワンカバンバ川流域周辺地域を介した地域間交流が行われていた可能性が示唆される。

なお、海水生種の貝製品、とくに暖流系の貝製品の出土について論じるためには、気候変動について一考しておく必要がある。アンデスでは、常に、エル・ニーニョ（ENSO: El Niño Southern Oscillation）と呼ばれる現象が、生態系に大きな影響をおよぼすことが論じられる。エル・ニーニョとは、南から赤道へと吹く貿易風が弱まると同時に、寒流のフンボルト海流の北上する勢いが弱まることで、赤道から流れる暖流が平常時よりも勢いを増して南下し、ペルー沖の海水温度が上昇する現象である。そしてこの結果、高温で水分を蓄えられた空気がアンデス山脈へと流れ込むことで大雨をもたらし、とくに海岸部においては、ロマスとよばれる草原地帯の繁茂や拡大、洪水などが引き起こされる。このエル・ニーニョの影響は、ペルーの北部ほど強く、南にいくにつれて弱まる [Wells 1990: 1134]。また、エル・ニーニョに際しては、海水の温度、塩分濃度、酸素濃度や湧昇作用が変化して、生態系、とくに水産資源のバランスが大きく崩れ、寒流に生息する魚介類が死滅し、熱帯種が

[1]一般に涸れ谷のことを指すが、常に水が流れているもの、季節的に水が流れるもの、大雨などの際のみに水が流れるもの、などが存在する。

入り込んでくるともいわれる[Diaz and Ortlieb 1993: 73]。さらに、エル・ニーニョは、定期的に生じるものではないものの、現状を鑑みると数年ごとに起こる現象であり、数十年周期でメガ・ニーニョとも呼ばれる大規模なものも起こるという。

しかしながら、エル・ニーニョの先史学における影響について議論が活発に行われはじめたのは、1983 年に生じた大規模な災害をもたらしたエル・ニーニョ以降である。そしてこれまでに、エル・ニーニョが原因と考えられる洪水や氾濫の存在や[Kaulicke 1993; Sandweiss 1986]、気候変動と社会変化の関係などが論じられてきた[Moseley and Feldman 1982; Shimada et al. 1991]。

本論で対象とする形成期に関しても、エル・ニーニョの痕跡とされる事例が報告されている。たとえば、北部中央海岸のカスマ川流域にあるセロ・セチン遺跡では、神殿の床面にぬかるみを歩いたような足跡と、その上を覆う土砂の層が確認されている[1][Fuchs 1997, Maladonado 1992]。また、カスマ川流域の南に位置するケブラーダ・リオ・セコにおいても、1030±40B.C.頃の洪水の痕跡が認められる[Wells 1990]。さらに、北部海岸のプエマペ遺跡を調査したエレーラは、形成期後期（インガタンボ遺跡のインガタンボ期）に相当する紀元前 500 年頃に洪水が起こり、神殿や墓地が削られ、土砂に覆われたことを報告している[Elera 1993, 1997]。そのうえ、エレーラは、続く形成期末期にはエル・ニーニョの影響を受けて、廃棄場所からそれ以前よりも多くの暖流系の貝が出土することを指摘している[2]。つまり、暖流系の貝が、この時期のペルー北部地域で採集された可能性を示唆したのである。しかしながら、現状において、エル・ニーニョとそれがもたらす水産資源、とくに貝類の生息域の変化との関係はいまだ不明瞭である。1983 年と 1986 年に生じたエル・ニーニョの比較を通じて、エル・ニーニョ時における貝の分布域や種構成を調査した研究によれば、確かにイタヤガイ科の *Argopecten circularis* では分布域の南下がみられる[Días and Ortlieb 1993]。しかし、暖流系の貝の代表ともいえるウミギクガイ（*Spondylus princeps*）の生息域には変化が認められない。つまり、その生息域は、エル・ニーニョ時においても極北部海岸のセチューラ湾以北なのである[Gorriti 2000:11] 。そのため、プエマペ遺跡において出土した暖流系の貝が、その場で採集されたのか、それともより北部の地域（極北部海岸以北）から持ち込まれたかは、一考の余地がある。いずれにせよ、先述したインガタンボ遺跡出土の暖流系の貝は、ウミギクガイをはじめ、エル・ニーニョの影響をあまり受けないものとされることから、ペルー極北部海岸以北からもたらされたものであると考えられる。

その一方で、インガタンボ期に入って出土した 2 点の黒曜石は、いずれも南部山地のキスピシーサ産である。ごく限られた出土量や石核の不在などから、これらが遠隔地から直接的に搬入されたとは考え難い。そのため、ワンカバンバ川流域より南に位置する諸社会との交流を通じて、黒曜石が入手されたことが推測される。

---

[1]この土砂層の上下にある墓の年代は、1410±50B.C.と 1150±50B.C.であるため、形成期中期（ポマワカ期）に相当する。

[2]エレーラが気候変化の指標とした暖流系の貝は、インガタンボ遺跡では出土していない。

なお、北部熱帯低地を分布の中心とする石鉢の出土がポマワカ期（形成期中期）に集中していることは注目すべき現象である。なぜならば、このことは、単にインガタンボと熱帯低地との地域間交流の存在を示唆するだけでなく、インガタンボのデータから、これまで編年が不明瞭であったワユルコやハエン市の博物館収集資料の編年的位置づけを再検討できる可能性を持つためである。

6-5-2. インガタンボ遺跡における工芸品製作

第 4 章では、神殿における建設活動と儀礼について取り上げてきたが、神殿における活動はそれだけにとどまるものではない。そのため、本項では、神殿を中心とした工芸品の製作活動について論じる。なお、土器の製作については第 8 章にて後述する。

ポマワカ期には、土器以外にもワンカバンバ川流域では入手不可能な希少材を利用した奢侈品が大幅に増加する。その顕著な例は貝製品である。とくに、ワンカバンバ期には海水生種の貝製品が 1 点出土しただけであったのに対し、ポマワカ期になると加工品の出土量が増加するだけでなく、穿孔途中のものなど多量の未製品も現れるようになる。さらに、ポマワカ期には 4 つのサブフェイズが確認されているが、サブフェイズごとの貝製品の出土量は一定ではない。具体的には、未製品に関してはポマワカ II 期が他よりも少なく、加工品はポマワカ IV 期で他よりも多くみられるのである。なお、ポマワカ III 期の特徴は、次章でふれるように大量のウミギクガイ片がみつかるなど、エクアドル湾岸起源、もしくはペルー極北部海岸を南限とするような暖流系の貝の出土が目立つ点である。

続くインガタンボ期になると、出土する（インガタンボ I 期）海水生種の貝のほとんどは暖流系となり、その傾向はポマワカ期よりも顕著となる。また、貝製品の大半はインガタンボ期前半(インガタンボ I 期)における神殿更新時の灰層から出土している。これらの製品に加えて、未製品も確認されるが、その出土量はポマワカ期よりも減少しており、インガタンボ II 期へ入るとさらに下回る。

このようにして、インガタンボでは、破片ではあるが、加工途中の海水生種の貝が確認される。そのため、インガタンボでは、製作址や貝製品の加工具の存在は不明瞭なものの、すでに加工された製品を搬入しただけではなく、原料自体を入手して、貝製品の加工が行われたと考えられる。なお、暖流系をはじめとして、海水生種の貝の出土量が顕著となるのは、神殿の規模や形態が大きく変化し、土器の出現がみられるポマワカ I 期と、主要基壇頂上部に部屋状構造物が築かれるようになるポマワカ III 期、ならびにポマワカ IV 期、そしてインガタンボで最も大規模な更新活動が行われたインガタンボ I 期である。多くの製品や未製品（あるいは廃棄物）は基壇の盛り土部分から出土している、そして、床面を張り直す際には火を用いた痕跡があり（灰層、および焼土層として検出)、その内部からは焼かれた貝も確認されている。したがって、それらの貝は、建造物や配置の大きな変更を伴うような神殿更新時に、儀礼的に埋納されたものと考えられる。

石製品については、インガタンボではポマワカ期を中心に石製容器の出土がみられ、ポ

マワカ期の基壇更新時には、動物象形が施された完形の石鉢も奉納された。これらの石製品の加工については、貝製品と同様にその詳細は不明である。しかし、未製品が出土していることから、インガタンボにおいて、その製作が行われていた可能性がある。また、先述したように、石鉢の分布の中心は、北部熱帯低地のワユルコ周辺に集中している。そのため、製作に関わる技術や情報が地域間交流を介してインガタンボにもたらされた結果、インガタンボでも石製品が製作されたことが推測される。

なお、インガタンボ期には、ペルー南部山地のキスピシーサを産地とする黒曜石の剝片も 2 点出土している。出土量が極めて少ないうえ、石核も確認されないことから、黒曜石製石器はインガタンボで製作されたのではなく、他地域から製品として持ち込まれたものであると考えられる。現時点で搬入先に関する明確な根拠はないが、出土量や出土状況などを考慮すると、北部山地のパコパンパ複合やクントゥル・ワシ[Burger 1984; 坂井・清水 2002]から持ち込まれたことが想定される。

以上のように、インガタンボでは、石製品や貝製品の出土がポマワカ期より顕著となる。これらの製品は、象徴性が付与されたような装飾や出土コンテクスト、素材などを考慮すると、日用的用途というよりも儀礼用品、もしくは奢侈品としての意味合いを備えていたと考えられる。こうした製作活動は、イデオロギーや製作に関わる情報や技法、あるいは原材料などを他地域との交流を通して獲得したのちに、流域社会で行われたものであると推測される。したがって、これらの製作活動とは、ワンカバンバ川流域社会の人々、とくに神殿の建設活動や儀礼にみられたリーダーの意図や戦略を反映した結果であると考えられる。

また、インガタンボ期には、基本的にポマワカ期の状況が継続するものの、土器や黒曜石といった他地域からの搬入品が増加するという変化がみられる。この際、ワンカバンバ川流域で製作された石製品や貝製品などの奢侈品、またはその原材料は、他地域との交換資源となったと考えられる。しかし、仮に他地域からもたらされた物資が、インガタンボ神殿への奉納品であった場合、周辺地域の諸社会との間に不均衡な交換関係が成立していた可能性もある。つまり、インガタンボ神殿で執り行われる儀礼や建設活動などに際して使用されることを目的として、他地域の人々が積極的に奉納を行った場合、物資による等価的な見返りがない状況が生じるのである。この仮説は、インガタンボでとくに貝の出土が多いことからも支持される。というのは、バーガーも指摘したように、輸送コストの高い貝を東斜面まで運ぶには、生存のための食料としての重要性以上に、儀礼的な価値があったことが想定されるためである[Burger 1998:239-242]。このようにして、インガタンボ期には、リーダーの戦略が、製作活動だけでなく、交流を通じた搬入品の獲得やその利用にも向けられるようになっていったと考えられる。

第 7 章：インガタンボ遺跡の自然遺物

本章では、発掘によって獲得した自然遺物のデータを整理し、記述する。インガタンボ遺跡出土の自然遺物は、気温が高いうえに多雨多湿という生態環境の影響もあって、海岸部の乾燥地帯や山地と比べても資料数が極めて限られている。分析に際しては、発掘の一区画（単一地点）でワンカバンバ期からインガタンボ期までの堆積が認められる場所を中心に、サンプルを抽出した。この目的は、各時期における種のバリエーションを把握することである。

7-1. 資料の採集方法と種の同定

自然遺物の採集方法は 2 通りある。一つは、発掘現場で直接採取する方法と、もう一つは、発掘現場で土壌サンプルを抽出し、その後でフローテーション[1]を行って採取する方法である。インガタンボ出土の自然遺物は、肉眼で認識可能な一部の貝類や植物、甲殻類、鳥獣骨を除いて、大半の資料は後者の方法で獲得されている。また、植物の澱粉は全て土器片から採取した。

抽出したサンプルは、ペルー国立トゥルヒーヨ大学のビクトル・バスケス教授とテレサ・ロサレス教授に分析を依頼し、種の同定を行った[Vásquez and Rosales 2008, 2009]。

7-2. 貝類

同定したサンプルは全て貝殻である。出土した貝殻は、保存状態の良好なものを予め選別したうえで、その一部の種同定を実施した。なお、下記の表の数値は同定破片数（NISP）を示している。上記のように、サンプル抽出時の制約があるため、サンプル数にはワンカバンバ期 18 点、ポマワカ期 193 点、インガタンボ期 25 点と時期ごとの差が大きい。この要因には、種のバリエーションを把握するために予備観察の時点で恣意的にサンプルを抽出したこと、インガタンボ期の堆積が後代の活動によって部分的に攪乱されていること、ポマワカ期の堆積が他の時期のそれと比べて厚いこと、などがあげられる。同定の結果は以下の通りである（表 7-1, 7-2）。

分析の結果、出土した貝殻の内訳は、海水生種 94 点（ポマワカ期 83 点、インガタンボ期 11 点）、淡水生種 15 点（ワンカバンバ期 1 点、ポマワカ期 13 点、インガタンボ期 1 点）、陸生種 117 点（ワンカバンバ期 17 点、ポマワカ期 87 点、インガタンボ期 13 点）である。

インガタンボの立地を考慮すると、海から隔たれた地域にも関わらず、海水生種が多いことは、前章で触れた貝製品と同様に、特筆すべき傾向である。前章で指摘したように輸

[1]フローテーションでは、9mm と 6mm のふるいを使用して、土壌から砂利などを除去した後で水に落とし、水面の浮遊物を 0.3mm の、こしきですくい取り、貝殻や魚骨、種子などを採集した。さらに、水中に沈澱した土をかき出し、乾燥させた後に再度、残存物を確認した。

送コストなどを考慮すると、基本的には加工用であったと考えられる。しかし、ピコナーダと呼ばれるザルガイ（*Trachycardium proceum*）（写真 7-1）、ハマグリ（*Dosinia dunkeri*）とチリイガイ（*Choromytilus chorus*）という食用にも適した貝が出土することから、海水性種は装身具といった加工用としてだけでなく、食用としても利用された可能性はある。サンプル数の問題もあり、断定はできないが、海水生種に増加傾向がみられるのはポマワカ期からである。

表7-1　インガタンボ遺跡出土、マキガイ種同定一覧

インガタンボ遺跡出土　貝類・マキガイ				ワンカバンバ I	ワンカバンバ II	ワンカバンバ III		ワンカバンバ IV		ポマワカ I			ポマワカ II		ポマワカ III			ポマワカ IV			インガタンボ I				インガタンボ II			
				同定資料数																								
				A基壇主要基壇（A区）	A基壇主要基壇（A区）	A基壇主要基壇（A区）	B基壇	A基壇主要基壇（A区）	B基壇	A基壇主要基壇（A区）	B基壇	D基壇	A基壇主要基壇（A区）	B基壇	A基壇主要基壇（A区）		B基壇	A基壇主要基壇（A区）		B基壇	A基壇				A基壇			
																					A基壇主要基壇（A区）		B基壇	A基壇主要基壇（A区）			
綱	科	種、または属	生息域												上部・部屋状構造	その他		上部・部屋状構造	その他		上部・部屋状構造	その他	東部・小基壇（B区）		上部・部屋状構造	その他	東部・部屋状構造（B区）	
マキガイ綱	サザエ科	*Astraea olivacea*	海水												3						1							
	モノアラガイ科	コシダカヒメモノアラガイ属 *Lymnaea* sp.（種同定不可）	淡水							3					1			1	3						1		
	サカマキガイ科	サカマキガイ属 *Physa sp.*（種同定不可）	淡水												1													
	ヒラマキガイ科 *Planorbidae*	（属・種同定不可）	淡水					1		1	1		1					1										
	アカマイマイ科 *Systrophiidae*	（属・種同定不可）	陸生	1						1																		
		Drepanostomella sp.（種同定不可）																						2				
		（属・種同定不可）		3				8		15			2		6	1		5	8		2		1	3				
		Bostryx vilchezi（種同定不可）						1																				
		Bostryx sp.（種同定不可）								1		3			1			2		1								
	トウガタマイマイ科 *Bulimulidae*	ガダルーペトウガタマイマイ属 *Bulimulus* sp.（種同定不可）				4				3									1			1		2				
		Drymaeus cf. fucatus（種同定不可）																										
		ミカンマイマイ属 *Drymaeus sp.*（種同定不可）																										
		ホソナガマイマイ属 *Thaumastus* sp.（種同定不可）								11						27			3									
	ヤマキサゴ科	*Helicina* sp.								1																		
	サナギガイ科 *Pupillidae*	（属・種同定不可）																								2		
	キバサナギガイ科	*Gastrocopta* sp.（種同定不可）								3						2												

表7-2　インガタンボ遺跡出土、ニマイガイ種同定一覧

インガタンボ遺跡出土　貝類・ニマイガイ				ワンカバンパ I	ワンカバンパ II	ワンカバンパ III		ワンカバンパ IV		ポマワカ I		ポマワカ II		ポマワカ III			ポマワカ IV		インガタンボ I				インガタンボ II			
				同定資料数																						
綱	科	種、または属	生息域	A基壇主要基壇（A区）	A基壇主要基壇（A区）	A基壇主要基壇（A区）	B基壇	A基壇主要基壇（A区）	B基壇	A基壇主要基壇（A区）	B基壇	D基壇	A基壇主要基壇（A区）	B基壇	A基壇主要基壇（A区）上部・部屋状構造	A基壇主要基壇（A区）その他	B基壇	A基壇主要基壇（A区）上部・部屋状構造	A基壇主要基壇（A区）その他	B基壇	A基壇			B基壇	A基壇			
																					主要基壇（A区）上部・部屋状構造	東部・小基壇（B区）			主要基壇（A区）上部・部屋状構造	その他	東部・部屋状構造（B区）	
ニマイガイ綱 *Bivalvia*		（属・種同定不可）	*海水*							6						3				3								
	イガイ科	チリイガイ *Choromytilus chorus*								1																		
	ウグイスガイ科 *Pteriidae*	（属・種同定不可）								2							9							1			
		Pinctada mazatlanica								1			2			1	13					3						
	イタヤガイ科	*Argopecten* sp.																							1			
	ウミギクガイ科	*Spondylus* sp.								1						31					4							
	ザルガイ科	メキシコナガザルガイ *Trachycardium procerum*								3											1							
	マルスダレガイ科	メキシコカガミ *Dosinia dunkeri*								2	2																	

また、加工の痕跡を残さない暖流系のウミギクガイ（*Spondylus* sp.）がポマワカ III 期のコンテクストから多数出土しているが、これは破片を計上しているためであると考えられる。製品としてのウミギクガイが増加するのはインガタンボ期になってからであるが、このような状況をみる限り、少なくともポマワカ期から暖流系種へのアクセスが次第に増加していったことが読み取れる。この考えを支持するかのように、ポマワカ III 期には、暖流系のサザエ科の貝（*Astraea olivacea*）（写真 7-2）が出土している。この貝の生息域は、メキシコのアカプルコからエクアドルのサンタ・エレーナと言われており、ウミギクガイの生息域と重なる。これら二つの暖流系種が同時に出土するのは、ポマワカ III 期とインガタンボ I 期であり、この時期にエクアドルの社会との交流が強まったと考えられる。それ以外にも、加工品を含めると、ウグイスガイ科の貝（Pteriidae）（写真 7-3：写真は加工品）、同科のアコヤガイ（*Pinctada mazatlanica*）（写真 7-4：写真は加工品）とイタヤガイ科（*Argopecten* sp.）（写真 7-5：写真は加工品）という暖流系の貝が、ポマワカ期とインガタンボ期から出土している。これらの生息域の南限は、ペルー極北部海岸ピウラのパイタである。このように、暖流系の出土が顕著な貝の出土組成は、北部海岸のワカ・ルシーアの組成[Shimada et al. 1982: 197]とは異なり、インガタンボに特有のものであると考えられる。

その一方、出土した淡水生種の貝は全て微小貝であり、食用や加工用として利用されたのではなく、近くを流れる川やケブラーダでの活動の結果、神殿の埋土にまぎれこんだものと想定される。陸生種に関しても同様の傾向がみられる。前章で指摘したように人為的な加工が施されたものも出土しているが、それら以外の大半は微小貝であり、とくに食用

とされたような証拠は見当たらない。人為的な加工がみられる陸生種は、トウガタマイマイ科の 2 種（*Bulimulus* sp.と *Thaumastus* sp.）である（写真 7-6, 7-7）。

7-3. 植物

植物遺存体のサンプルは 2 通りの方法から、採取、同定された。一つは、肉眼、あるいはフローテーションで採取された種子を、低倍率の顕微鏡で観察して種を同定する方法である。もう一方は、土器片に付着した炭化物を高倍率の顕微鏡で観察し、澱粉から種を同定する方法である。なお、澱粉の付着が確認された土器は、壺形土器の胴部破片である。また、ワンカバンバ期に相当する土層からは、植物遺存体は出土しておらず、種が同定されたのは、ポマワカ期とインガタンボ期のサンプルだけである（表 7-3）。

分析の結果、マニオク（*Manihot esculenta*）、ワタ（*Gossypium barbadense*）、ジャガイモ（*Solanum tuberosum*）、トウモロコシ（*Zea mays*）の 4 種が確認された。マニオクは、インガタンボ II 期のコンテクストしか検出されていないが、マニオクの生育環境とワンカバンバ川流域の生態環境を考慮すると、古くから利用されていた可能性も否定できない。その一方で、ジャガイモとトウモロコシは、ポマワカ期とインガタンボ期の両時期で確認されている。とくにトウモロコシに関しては、インガタンボ II 期のコンテクストから検出された澱粉に、発酵したような痕跡を示すものがあり（写真 7-8）、トウモロコシの醸造酒であるチチャが飲まれていたことが示唆される。

また、ポマワカ期にはワタも出土している。ワタの用途に関しては、衣服への利用なども考えられるが、海岸部では形成期早期からワタを利用した漁網の利用が増加していくことが明らかとなっている[Bird and Hyslop 1985; Pozorski and Pozorski 1979]。前章で述べたように、インガタンボ期のコンテクストから石錘が出土していることと合わせると、インガタンボにおいて、網を用いた川漁が行われていた可能性はある。

写真7-1　インガタンボ遺跡出土、ザルガイ

写真7-2　インガタンボ遺跡出土、サザエ科

写真7-3　インガタンボ遺跡出土、
ウグイスガイ科

写真7-4　インガタンボ遺跡出土、アコヤガイ科

写真7-5　インガタンボ遺跡出土、イタヤガイ科

写真7-6　インガタンボ遺跡出土、
トウガタマイマイ科①

写真7-7　インガタンボ遺跡出土、
トウガタマイマイ科②

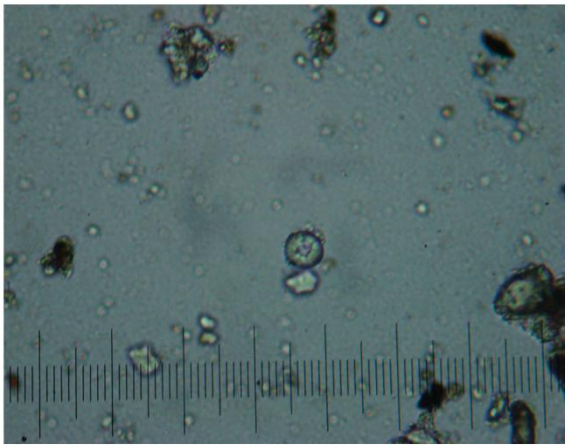


写真7-8　インガタンボ遺跡出土、
トウモロコシの澱粉

表7-3　インガタンボ遺跡出土、植物依存体一覧

インガタンボ遺跡出土　植物		ポマワカ	ポマワカ	ポマワカ	ポマワカ		インガタンボ		インガタンボ		
		I	II	III	IV		I		II		
		同定資料数					同定資料数				
							A基壇		A基壇		
科	種、または属	A基壇主要基壇（A区）	A基壇主要基壇（A区）	A基壇主要基壇（A区）	A基壇主要基壇（A区）	B基壇	主要基壇（A区）	東部・小基壇（B区）	主要基壇（A区）		東部・部屋状構造（B区）
				上部・部屋状構造	上部・部屋状構造		上部・部屋状構造		上部・部屋状構造	基壇北東角	
トウダイクサ科	マニオク *Manihot esculenta*								澱粉		
アオイ科	ワタ *Gossypium barbadense*				炭化種子2						
ナス科	ジャガイモ *Solanum tuberosum*					澱粉	澱粉		澱粉	澱粉	澱粉
イネ科	（属・種同定不可）					澱粉		炭化種子2		種子2 澱粉	
	トウモロコシ *Zea mays*	澱粉		種子3		澱粉			炭化種子4 澱粉	澱粉	

7-4. 甲殻類、魚類

植物遺存体と同様に、甲殻類、および魚類に関してもワンカバンバ期からはサンプルがえられなかった。しかし、甲殻類についてはポマワカ期に 7 点、インガタンボに 2 点が、魚類についてはポマワカ期に 19 点､インガタンボ期に 4 点のサンプルがえられた(表 7-4)。

甲殻類は、いずれも淡水生種で発掘時にハサミの部分が出土しており、淡水生のカニ(*Hypolobocera* sp.)とエビ(*Macrobrachium* sp.)である。

魚類に関しては、全ての試料をフローテーションで採集した。海水生種としてはマイワシ(*Sardinops sagax sagax*)とハマギギ科(*Galeichthys peruvianus*)が、淡水生種としてはカラシン科(*Brycon* sp.)が確認されている。

甲殻類、魚類ともにポマワカ期からインガタンボ期まで食用として利用されていたと考えられる。このうちのマイワシ属の魚（*Sardinops* sp.）については、ペルー北部海岸のワカ・ルシーアでも確認されている。そのため、インガタンボからの距離や立地を考慮すると、ワカ・ルシーアがインガタンボへの搬入元であった可能性がある。

表7-4　インガタンボ遺跡出土、甲殻類、魚類一覧

インガタンボ遺跡出土　甲殻類、魚類				ポマワカ I			ポマワカ II		ポマワカ III				ポマワカ IV				インガタンボ I						インガタンボ II					
				同定資料数													同定資料数												
				A基壇主要基壇（A区）	B基壇	D基壇	A基壇主要基壇（A区）	B基壇	A基壇 主要基壇（A区）			B基壇	A基壇 主要基壇（A区）			B基壇	A基壇						A基壇					
																	主要基壇（A区）		東部・小基壇（B区）	B基壇			主要基壇（A区）		東部・部屋状構造（B区）	B基壇		
網	目・科	種、または属	生息域						上部・部屋状構造	その他			上部・部屋状構造	その他			上部・部屋状構造	その他					上部・部屋状構造	その他				
甲殻網		（科・属・種同定不可）	淡水	1					1																			
	Pseudothelphusidae	*Hypolobocera* sp.（種同定不可）				3								1						1	1							
	テナガエビ科	*Macrobrachium* sp.（種同定不可）												1														
魚網	ニシン科	マイワシ *Sardinops sagax sagax*	海水		2																2							
	ハマギギ科	*Galeichthys peruvianus*		7																								
		（科・属・種同定不可）	淡水											7														
	カラシン科	*Brycon* sp.		1	2																2							

7-5.　鳥獣骨

同定が行われた鳥獣骨は全て発掘時に採取された。種の同定に際しては、採取した全資料を対象としたわけではなく、ワンカバンバ期からインガタンボ期に至る一連の流れを追うことができる発掘区を中心にサンプルを抽出した。また、予備観察でラクダ科動物（*Camelidae*）の可能性がある資料は、重点的にサンプル数を増やした経緯がある。対象となったサンプルは、ワンカバンバ期 35 点、ポマワカ期 204 点、インガタンボ期 51 点である（表 7-5）。

クイ（*Cavia porcellus*）などの齧歯類がサンプルの大半であり、その利用はワンカバンバ期より認められる。また、イヌ（*Canis*）やシカ（*Odocoileus virginianus*）は、ポマワカ期から出土している。注目すべきはラクダ科動物の出現時期であり、形成期中期に相当するポマワカ期から確認される。北部山地のワカロマ遺跡[Terada and Onuki eds. 1988]、パコパンパ遺跡[関 2010]、もしくは北部海岸のワカ・ルシーア遺跡[Shimada et al. 1982]では、形成期中期からラクダ科動物が現れるが、インガタンボ遺跡でも同様の傾向がみられることになる。鳥類に関しては、サンプル数が極めて少ないが、ワンカバンバ期からインガタンボ期まで出土している。

また、ワンカバンバ川流域の生態的特徴を反映した結果であると推測されるが、ヒキガエル（*Bufo* sp.）とグリーンイグアナ（*Iguana Iguana*）が確認されている。全ての時期を通じて検出された訳ではないが、おそらく食用として利用されていたのであろう（表 7-6）。

表7-5　インガタンボ遺跡出土、鳥獣骨一覧

インガタンボ遺跡出土　鳥獣骨			ワンカバンバ I	ワンカバンバ II	ワンカバンバ III	ワンカバンバ IV	ポマワカ I		ポマワカ II		ポマワカ III			ポマワカ IV			インガタンボ I				インガタンボ II			
			同定資料数																					
																	A基壇				A基壇			
			A基壇主要基壇（A区）	A基壇主要基壇（A区）	A基壇主要基壇（A区）	A基壇主要基壇（A区）	A基壇主要基壇（A区）	B基壇	A基壇主要基壇（A区）	B基壇	A基壇主要基壇（A区）		B基壇	A基壇主要基壇（A区）		B基壇	主要基壇（A区）		東部・小基壇（B区）	B基壇	主要基壇（A区）		東部・部屋状構造（B区）	B基壇
											上部・部屋状構造	その他		上部・部屋状構造	その他		上部・部屋状構造	その他			上部・部屋状構造	その他		
網	目・科	種、または属																						
哺乳網 *Mammalia*		（目・科・属・種同定不可）	4		2	2	31	5	4		4			6	14	10	1	1	1		7	1		
	ネズミ目 *Rodentia*	（科・属・種同定不可）			5								2								1			
	ネズミ科 *Muridae*	（属・種同定不可）				10	30					1		1	1	4	2				7	1		
	テンジクネズミ科 *Caviidae*	クイ *Cavia porcellus*	1			9	1	22	1			1				1	1					1		
	チンチラ科 *Chinchillidae*	ヤマビスカッチャ *Lagidium peruanum*									10											3		
	イヌ科 *Canis*	（属・種同定不可）					4										1				2			
	シカ科 *Cervidae*	オジロジカ *Odocoileus virginianus*					1				3			1							10			
	ラクダ科 *Camelidae*	（属・種同定不可）					15		1			3									1			
		Lama sp.（種同定不可）					6				4	8					1				8			
鳥網		（目・科・属・種同定不可）	1														1							
	ハト科	*Eupelia* sp.（種同定不可）									10													

表7-6　インガタンボ遺跡出土、両生類、爬虫類一覧

インガタンボ遺跡出土　両生類・爬虫類			ワンカバンバ I	ワンカバンバ II	ワンカバンバ III	ワンカバンバ IV	ポマワカ I			ポマワカ II		ポマワカ III			ポマワカ IV			インガタンボ I				インガタンボ II			
			同定資料数																					
																	A基壇				A基壇			
			A基壇主要基壇（A区）	A基壇主要基壇（A区）	A基壇主要基壇（A区）	B基壇	A基壇主要基壇（A区）	B基壇	D基壇	A基壇主要基壇（A区）	B基壇	A基壇主要基壇（A区）		B基壇	A基壇主要基壇（A区）		B基壇	主要基壇（A区）		東部・小基壇（B区）	B基壇	主要基壇（A区）		東部・部屋状構造（B区）	B基壇
												上部・部屋状構造	その他		上部・部屋状構造	その他		上部・部屋状構造	その他			上部・部屋状構造	その他		
網	目・科	種、または属																						
両生網	ヒキガエル科	*Bufo* sp.（種同定不可）								1				2							1			
爬虫網		（属・種同定不可）			5																1			
	イグアナ科	グリーンイグアナ *Iguana Iguana*																				6		

7-6. 小括：インガタンボ遺跡から出土した自然遺物の特徴と時期的変遷

7-6-1. 自然遺物の特徴と時期的変遷

インガタンボ遺跡から出土した自然遺物の分析結果は、サンプル数の問題や、とくに貝において種のバリエーションを把握するために意図的に多様なものを集めたことから、定量的に通時的な変化を検討できる性格のものではない。しかし、それにも関わらず、時期ごとの出土傾向に顕著な特徴や差異がみられる場合には、これを通時的な変化が反映されたものと想定することもできよう。なお、この分析結果から、ある時期に特定の種が存在したことを定性的に示すことには、全く問題はないと考えられる。

インガタンボ遺跡の自然遺物の特徴として、まずあげられるのは水産資源の豊富さである。加工用、あるいは食用として、ワンカバンバ期より貝類、甲殻類、魚類などの利用が認められる。しかし、とくに海産資源の利用が顕著なのはポマワカ期からであり、現在のエクアドルを生息域とする貝類のほか、ペルー極北部海岸のパイタを生息域の南限とする暖流系の貝が出土するようになる。この傾向はインガタンボ期に入っても同様に認められるため、インガタンボではポマワカ期から、海岸部、とくにペルー極北部以北との地域間交流が活発に行われたことが指摘できる。そのなかでも、ペルー極北部海岸とは、次章で詳述するように神殿や土器の特徴にも高い共通性がみられることから、単なる物資の搬入、もしくは交換だけではなく、イデオロギーと関わる部分においても、積極的に交流が行われたのであろう。なお、海産資源に関しては、インガタンボと同じアンデス東斜面に位置するカハマルカの諸遺跡やチャビン・デ・ワンタル遺跡などでも、その利用が認められている[Burger 1998; Burger and Burger 1985; Grieder et al. 1988]。こうした状況のなかでバーガーは、栄養学的見地から、山地の諸遺跡で海産資源（魚類など）が必要とされたと述べている[Burger 1985: 276]、しかし、インガタンボでは、貝の出土量が他の水産資源よりも抜きんでており、その大半は海水生種、かつ暖流系である。つまり、インガタンボで出土した貝は、基本的に加工を目的として搬入されたものと推測されるのである。こうした出土傾向は、ペルー北部海岸のワカ・ルシーア遺跡や北部海岸中流域のラス・ワカス遺跡のそれとは大きく異なる[Shimada et al. 1982; 鶴見 2008a]。したがって、バーガーも論じたように、輸送コストの高い貝類を東斜面まで運んだことに関しては、単なる食料としてではなく、儀礼的な価値があったためだと考えられる[Burger 1998: 239-242]。そのため、インガタンボにおける貝は、イデオロギーと関わる価値を有していたことが示唆される。

また、出土量は少ないものの、海水生種だけでなく、淡水生種の資源も川漁を通じて獲得することで、食糧基盤として利用していたようである。

ここで植物利用に目を向けると、トウモロコシやジャガイモの出土がポマワカ期より認められることなどから、谷の底部だけでなく、河川両岸にそびえる山々の頂上部までを耕作地として利用していたことが想定される。また、発酵の痕跡が認められたトウモロコシに関しては、分析した土器片が基壇上部の部屋状構造物から検出されていることに注目する必要がある。なぜならば、アンデスにおいてトウモロコシは、政治的作物とされ[関 1995,

1998a; 山本 2004]、儀礼や祝宴のなかで利用されることで、集団の紐帯を強化するためにしばしば用いられるためである[関 1995, 1998a; 山本 2004]。つまり、単なる食用としてだけではなく、儀礼に際しても利用されたのである。これに関して、ハストーフとヨハンセン[Hastorf and Johannessen 1993]、ならびにその解釈を援用した関は[関 2007]、土器の器形と石製品の出土状況からチチャの製造を推定した。これらに従えば、インガタンボにおいても、ポマワカ期より、チチャ製造に必要とされる短頚壺や口径の広い大型の壺、すり石の利用が認められる。したがって、上記の出土状況を考慮すると、インガタンボでチチャが飲まれた蓋然性は高いといえる。

以上のことから、ワンカバンバ川流域の社会、少なくともインガタンボを中心とした社会は、多様な環境を利用してその生産物を食糧基盤としていた。また、海水生種、とくに暖流系の貝の出土は、海岸部に展開していた社会との交流、あるいはそれらの資源を獲得するためのネットワークがすでに存在していたことを示唆している。そして、その輸送には、ポマワカ期より出土しはじめるラクダ科動物が徐々に利用されるようになっていったと考えられる。

7-6-2. 生業と食糧基盤

インガタンボでは、マニオク、ワタ、ジャガイモ、トウモロコシの 4 種類の植物遺存体が確認されている。このうち、マニオク以外は、ポマワカ期からその利用が認められ、とくにトウモロコシは、単なる食料ではなかった可能性が示唆された。形成期におけるトウモロコシの出土例は、ワンカバンバ期に対応する形成期早期のペルー中央海岸のロス・ガビラーネス[Bonavia 1982]や、北部海岸のワカ・プリエタが最古の事例である[Grobman et al. 2012]。その後、トウモロコシは、アンデス北部の各地で検出されるようになることから、インガタンボの事例に関しても、こうした流れのなかでトウモロコシの利用がはじまったのであろう。しかし、食糧に占めるトウモロコシの割合は、形成期においてあまり高くないとされることから[関・米田 2004]、トウモロコシについては、むしろ政治的意味合いが強かったと考えられる。

その一方、ワタは衣服に加えて、漁網として利用されていたと考えられる。前章で述べたように、インガタンボでは糸を撚るために使用する紡錘車はほとんど確認されていないが、石錘の出土が認められる。また、極めて少量ではあるが、川に生息する魚と甲殻類が出土していることから、インガタンボでは生業の一部として川漁が実施された可能性がある。なお、現在においても、ワンカバンバ川では、網を用いて魚類が捕られており、甲殻類に関しては手掴みでも捕獲される。

ジャガイモに関しては、南部山地で栽培科が進み、その後に各地で耕作が展開されたと考えられている[山本 1993: 33-34]。そして、アンデスの海岸部においても、形成期早期にはロス・ガビラーネス[Bonavia 1982]や、北部中央海岸のワイヌナー[Pozorski and Pozorski 1987]で出土例が報告される。インガタンボやワンカバンバ川流域においても、形成期には

周囲の山々で、とくに山頂部を利用して耕作が行われていたと考えられる。このような状況は、現在においてもみうけられる。

さらに、マニオクに関しては、栽培起源がアマゾンの熱帯低地と距離的に近く、気候も類似していることもあり、ペルー北部ではサーニャ川流域[Dillehay et al. 2005]やヘケテペケ川流域[鶴見 2008a]において、形成期早期、もしくはそれ以前からの利用が報告される。そのため、ワンカバンバ川流域社会でも古くから利用されていた食物であった可能性はある。また、マニオクには有毒種と無毒種があるが、有毒種を食すためには、毒抜きのための一定のプロセスが必要であることから[山本 1993]、ワンカバンバ期より出土するすり石や剝片、砕片はそのために使用されたかもしれない。なお、現在においても、マニオクはワンカバンバ川流域の多くの場所で栽培されている。このような状況をふまえると、出土量は少ないものの、マニオクは形成期のワンカバンバ川流域において主要作物であった可能性はある。しかし、マニオクだけでは、炭水化物以外の栄養価をほとんど摂取できないことから、マニオクを主食とした場合、動物性のタンパク質を大量に補う必要があるといわれる[山本 1993:45]。これに関して、ワンカバンバ川流域社会では、狩猟具の存在は明らかではないものの、動物骨の分析に示されるように、クイやシカ、ラクダ科動物、あるいは川魚の利用によって、動物性タンパク質を補っていたと考えられる。

このように、食肉を確保するためにアンデス北部山地では、形成期、もしくはそれ以前からシカ猟が行われ、それが次第にラクダ科動物の家畜化へ交替していったと考えられている。ラクダ科動物の家畜化については、ペルー中央山地のフニン高原周辺ではじまり[Wheeler 1995]、その後、単純な拡散ではないものの、形成期中期ごろからは、ペルー北部海岸[Shimada and Shimada 1985]と北部山地で認められるようになる[鵜澤 2007b]。これらのことを考慮すると、インガタンボにおいても、形成期を通じて、シカ猟を主体としながら徐々にラクダ科動物の利用が高まっていった可能性がある。ただし、ワンカバンバ川流域は、インガタンボの南側にそびえる山々の南方に広がる土地以外に、ラクダ科動物の飼育には適していない。そのため、ラクダ科動物に関しては、インガタンボで成育されていたのではなく、より南の社会からもたらされたと考えられる。この問題については、第 10 章で改めてとりあげる。なお、アンデス南部山地では、ジャガイモのような根菜類の栽培化と、ラクダ科動物の家畜化が相互関連しながら進行したことが指摘されている[山本 2004: 61-64]。インガタンボでは、ジャガイモとラクダ科動物は同時に現れるが、ワンカバンバ川流域の生態を考慮すると、この時期にワンカバンバ川流域で根菜類の栽培化とラクダ科動物の家畜化がはじまったというよりも、神殿や土器と同様に、より南に広がる地域の影響がみられはじめたことに要因があると考えられる。

クイについては、形成期早期のコトシュ遺跡に最古の事例が認められる[Wing 1972]。その後、ペルー北部の諸遺跡でクイが確認されることから、インガタンボでもこの動きにあわせて形成期のはじめから利用されたと考えられる。しかし、クイの肉量は極めて少ないため、主要なタンパク源とはなりえなかったとされる。これを支持するように、形成期早

期のコトシュ遺跡では、クイの肉は消費された動物性タンパク質の 1%に満たないのである[Wing 1972]。

最後に、海産資源を食用として利用した可能性について検討しておきたい。繰り返し述べてきたように、ワンカバンバ川流域と海岸部との地域間交流の存在は明らかである。こうした状況のなかで、ワンカバンバ期（III 期）には主に装飾品として利用されるものの、食用にもなる海水生種のイタヤガイ（1 点）が出土している。検出されたイタヤガイには明確な加工がみられ、装飾品として利用されているが、加工以前に貝肉の利用があったかもしれない。また、ポマワカ期に入ると、海水生種の貝の出土が目立つようになり、海水生種の魚類や甲殻類もごく僅かではあるが出土するようになる。そして、出土した貝には、食用にも適したザルガイ、ハマグリ、チリイガイなどが含まれている。貝の運搬に関しては、海藻や海水に浸したバッグを利用することで、約 2〜3 日の間、食用として保存することが可能であるという[Quilter 1989: 22]。しかしながら、ワンカバンバ川流域はアンデス山脈東斜面に位置しており、最も隣接したペルー北部海岸でも直線距離で 100km 以上離れている。そのため、インガタンボにおける貝の利用は、あくまで貝殻の加工が主であったと考えられる。

以上のように、ワンカバンバ川流域社会における生業と食糧基盤について検討し、海岸部から物資が搬入されたことを指摘してきたが、海岸部との交流において、逆に何がワンカバンバ川流域からもたらされたのであろうか。ワンカバンバ川流域の生態環境を考慮した場合、とくに重要とされるような固有の生態資源などはみうけられない。ワンカバンバ川流域で栽培可能な作物は、周辺の山地や熱帯低地でも栽培が可能である。また、形成期においてたびたび交易対象としてあげられる黒曜石や辰砂、あるいは金といった資源はワンカバンバ川流域の踏査範囲には分布しておらず[IMGEMMET 1987]、その利用例も現在まで報告されていない。海岸部社会のリーダーやエリートの権威を高めるような在地産の奢侈品や[Burger 1985: 286]、土器[鶴見 2008a: 232]が交換資源であった可能性もあるが、少なくともワンカバンバ期にはそのようなデータは皆無である。つまり、アンデスの特徴として指摘される、異なる生態系に位置する集団間の相互補完的関係は、とくに食糧資源に関して、ワンカバンバ川流域とその周辺地域の間で成立しているようにはみうけられない。したがって、上記の食糧資源は、前章でも触れたように、ワンカバンバ川流域社会、とくにインガタンボ神殿への奉納品であった可能性がある。また、海岸部と熱帯低地との狭間に位置するワンカバンバ川流域が、その地政学上の利点を活かして地域間交流の結節点となっていたとも考えられる。この問題については、第 8 章と第 10 章で詳しく検討する。

これまでにみてきたように、インガタンボは、マニオクをはじめとした農耕、シカなどの狩猟や川漁、もしくは海産資源の搬入にもとづいた多様な食糧基盤を有していた。これらの作物からは、ワンカバンバ川流域の人々は、第 3 章で述べた単一の生態学的ゾーンだけでなく、周囲の多様な環境を複合的に利用していたことが示唆される。そのなかでもとくに重要なことは、ポマワカ期から海産資源の利用が顕著になることである。これは、ポ

マワカ期から地域間交流が盛んになることで、インガタンボ社会が様々な情報や知識、技術に加えて、多くの物資を入手できることになったことを示している。

第 8 章：インガタンボ遺跡の建築、および出土資料からみる地域間交流

第 4 章から前章では、インガタンボ遺跡発掘データを整理し、詳細に記述してきた。本章では、それらをもとにして、周辺地域の先行研究との比較検討を行う（図 8-1）。そして、地域間にみられる差異、あるいは類似性から、インガタンボの独自性と他地域との共通性を明らかにして地域間関係について論じる。

8-1. 建築

インガタンボ遺跡の建築は、基壇、テラス、広場といったように、アンデスで広く認められる建築特徴を有している。しかしながら、それらはあくまで普遍的な形成期の建築特徴であるため、それだけでは比較資料として不十分である。したがって、本節では、インガタンボ神殿の建築要素である「基壇」、「広場」とその組み合わせである「配置」、および建築細部の形態を周辺地域の神殿と比較検討する。そして、インガタンボの独自性と周辺地域との共通性を明らかにすることを通じて、建築特徴から地域間関係を論じていく。なお、ここでは基本的に、建築要素と配置の分布が認められる場合、要素よりも配置における類似性に、地域間交流の度合い（密接さ）を読み取っていく。なぜならば、配置は各建築要素の組み合わせからなる全体であり、全体を構成するには明確なプランが必要なためである。また、第 2 章で述べたように、神殿にはそれを建設した社会の宗教的、経済的、政治的活動が集約されていると考えられる。したがって、各地の神殿に形態差や規模差が認められたとしても、神殿の存在自体がイデオロギーを介した社会的連関の一つのあり方を示唆するものとなる。また、その場合、神殿にみられる共通性はイデオロギーに関わる地域間交流の度合いを示し、多様性は神殿を支える各社会の独自性を示すものと考えられる。

8-1-1. 基壇

一般的に、ペルー北部における形成期の神殿をみると、柱の有無といった差異はあるものの、基壇上に石壁やアドベ（日干しレンガ）で築かれた部屋状構造物が載る構造が多くみられる。また、基壇上に部屋状構造物が確認されない場合には、部屋や柱、屋根などの上部構造が植物などの有機物で建造され、時間の経過によって失われた可能性を考慮する必要がある。そのため、たとえ現状では確認できずとも、基壇上に構造物がなかったことを断定するのは困難であり、基壇上の構造としては部屋状構造物などが存在したことを想定する方が蓋然性は高いと考えられる。なお、第 1 章でも述べたように、エクアドルの形成期には、ペルーにおいて神殿とされるような大規模な基壇建造物はみつかっていない。ただし、ペルー北部においても形成期早期の神殿は、北部海岸のセロ・ベンタロン遺跡のみで、形成期前期でさえ、セロ・ベンタロン遺跡、ならびにヘケテペケ川中流域のアマカス複合で確認されるだけである（図 8-2）。こうした状況は、形成期中期になって大きく変化する。大規模神殿の北限がより北上して、ペルー極北部海岸のセロ・ニャニャニケ遺跡、

ペルー北部熱帯低地のセレサル遺跡、トメペンダ遺跡、そしてその中間に位置するワンカバンバ川流域のインガタンボ遺跡に至るのである。形成期後期に入っても、神殿分布域に形成期中期からの大きな変化は認められない。なお、エクアドル南部海岸のラ・エメルヘンシア遺跡では、形成期早期から形成期前期にかけて小基壇が[Staller 2001]、ペルー極北部海岸ピウラ川沿岸部のアビク遺跡では形成期前期に小基壇が [Cardenas et al. 1991] 確認されているが、規模の面で上記の諸神殿遺跡との差異は大きい。

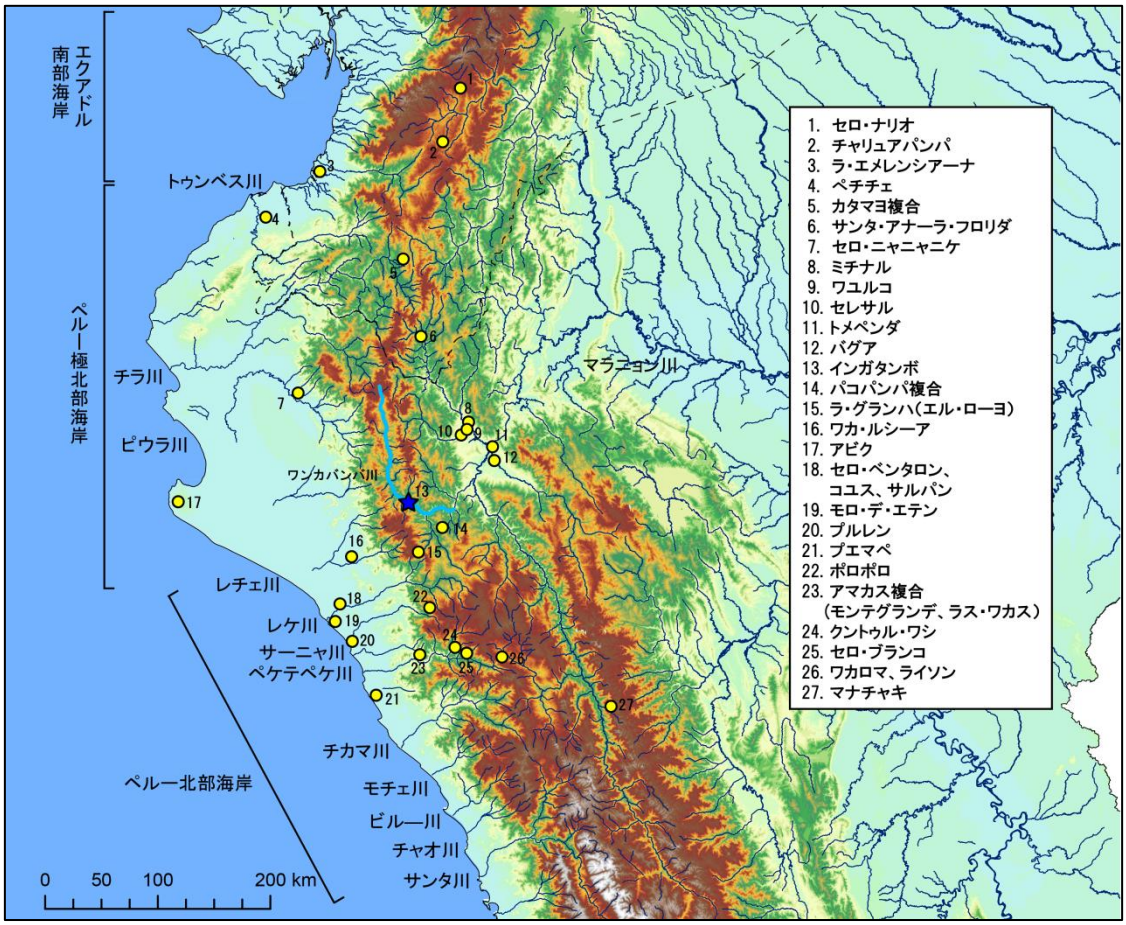


図 8-1　　インガタンボ遺跡、および比較対象となる遺跡位置

これまでみてきたように、ワンカバンバ期のインガタンボでは、漆喰の構造物が載る小基壇が建設された。周辺地域では、北部海岸のセロ・ベンタロンで、基壇上に多彩色壁画を伴う部屋状構造物を有する神殿が確認されているが[Alva 2008; Alva Meneses 2010]、両者を比較した場合、規模やつくり、精巧さなどといった点で著しい差異がみられる。この背景には、両地域間で、神殿を中心とした社会の成立、もしくは神殿への労働投下といった点に明瞭な差があったことが推測される。この時期のインガタンボの事例と最も近いものは極北部海岸部の事例であり、アビクなどがそれに該当する。また、この時期に対応する建造物についてはほとんど報告例がないものの、近年に行われた北部熱帯低地の調査成果によると[Quirino Olivera 私信]、ペルー北部熱帯低地とエクアドル南部熱帯低地におけ

る建築には、類似性が認められる。

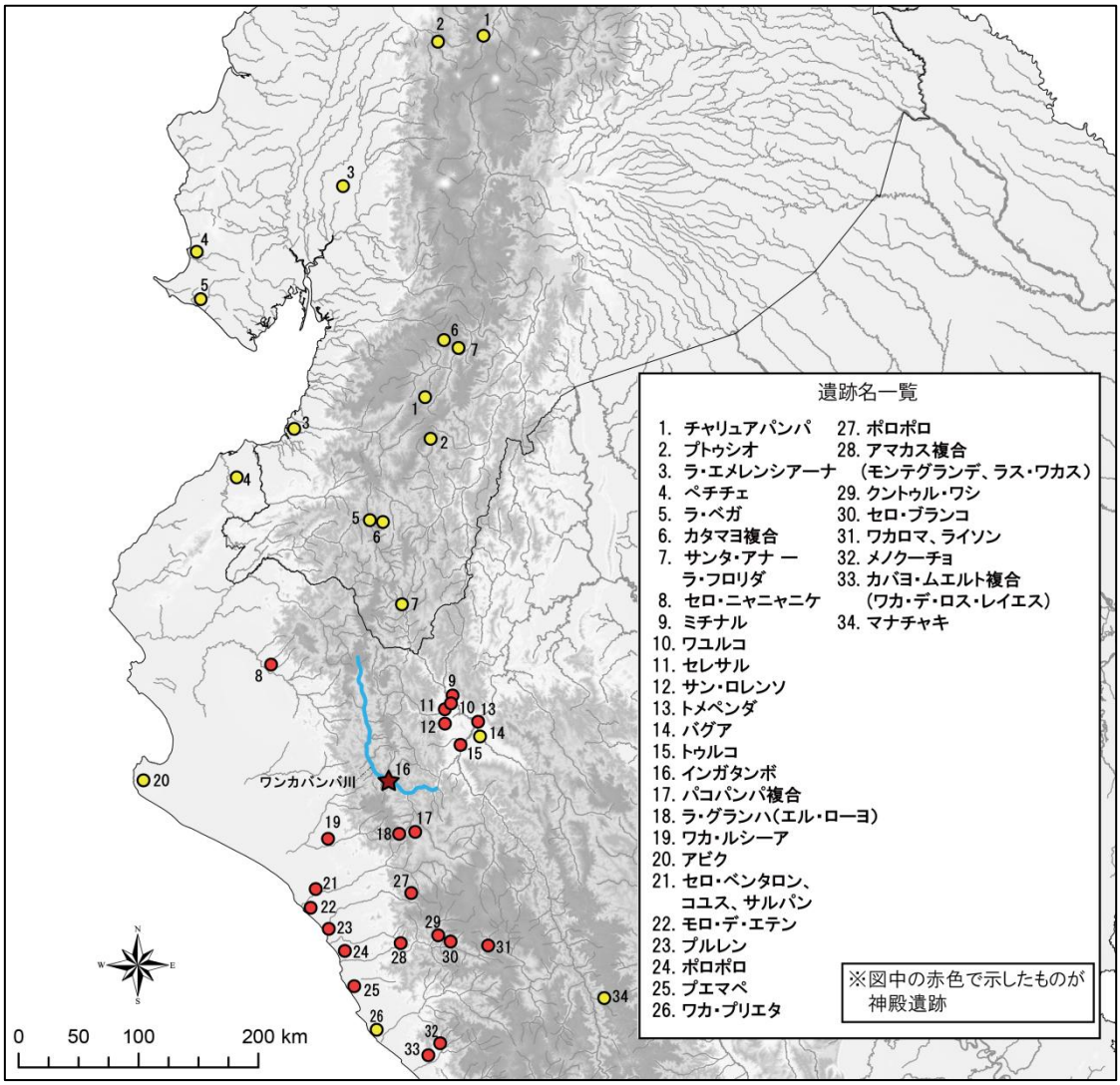


図 8-2　　中央アンデス北部における形成期の神殿の分布

以上を除くと、ワンカバンバ期（形成期早期から形成期前期）の神殿の事例は極めて数が限られている。たとえば、形成期早期には、エクアドル南部熱帯低地のサンタ・アナ - ラ・フロリダで、神殿とは認められないような小規模な部屋状構造物が確認される[Valdez 2007, 2008a, 2008b]。また、形成期前期には既述のアマカス複合のモンテグランデ[Tellenbach 1986]やラス・ワカス[鶴見 2008a]などで神殿がみられる一方で、ペルー北部山地ではワカロマで部屋状構造物が確認されている[Terada and Onuki 1982, 1985, 1988]。なお、芝田は、モンテグランデにみられる基壇上に載る部屋状構造物と前庭の組み合わせを「方形室ユニット複合」と称し、カスマ川流域の建築特徴との共通性を指摘している[Shibata 2004: 85-87]。

ポマワカ期になると、インガタンボでは前時期に建設された小基壇（主要基壇）が埋められ、その上に新たな建造物が建てられて大規模化する。そして同時に、他の基壇（B 基壇、C 基壇、D 基壇）においても建設活動が開始される。また、更新活動の過程において、

基壇上部に泥漆喰で精巧に仕上げられた部屋状構造物が配置されるようになる（ポマワカ III 期以降）。

さらに、形成期中期（ポマワカ期に対応）に入ると、形成期早期と比べて、周辺地域のデータも大きく増加する。たとえば、この時期に入って新たに神殿が築かれ、基壇上に部屋状構造物を有する例は、北部山地のパコパンパ複合[Flores 1975, 2005, Fung 1975, Morales 1977, 1980, 1998; Rosas and Shady 1970; 関 2010; Seki et al. 2010]、クントゥル・ワシ[Onuki ed. 1995]、ワカロマ、北部海岸のワカ・ルシーア[Shimada et al. 1982]とプルレン[Alva 1988a]、ヘケテペケ川中流域のモンテグランデ、ラス・ワカス、極北部海岸のセロ・ニャニャニケ[Guffroy 1989,1992, 1994; Guffroy et al. 1989, Kaulicke 1998]などで確認される。その一方で、北部熱帯低地のセレサル[Miasta 1979]やトメペンダ[Olivera 1998, 2008]では、神殿は築かれるものの、基壇上に部屋状構造物の存在は認められていない。また、これ以外の遺跡においても、北部熱帯低地のミチナル[Miasta 1979]、北部山地のポロポロ[Alva 1988b]、北部海岸のコユス、サルパン[Alva Meneses 2010]などでは、新たに神殿が築かれる。

総じて、基壇や部屋状構造物の形態には地域的多様性が大きいが、建材という点からみれば、インガタンボやセロ・ニャニャニケ、トメペンダでは、主として小型の加工石材が用いられており、アドベを使用する北部海岸の事例や、大型の切り石を利用する北部山地の事例とは異なる。建築の仕上げに関していえば、30~50cm 四方の小型の加工石材を積み上げ、石の間に目地土を充填させる壁のつくりや、壁の表面を泥漆喰で仕上げる方法など、とくにインガタンボとトメペンダの間には酷似した要素が多い。

続く形成期後期（インガタンボ期に対応）になると、インガタンボでは更新によって A 基壇が建設され、その上に主要基壇と複数の小基壇が築かれる。また、主要基壇上には、複数の部屋状構造物が建設される。このような構造は、北部山地のパコパンパ複合、ラ・グランハ複合（エル・ローヨ遺跡）[Wester et al. 2000]、クントゥル・ワシ、極北部海岸のセロ・ニャニャニケなどでも確認される。しかし、北部山地の諸遺跡では建築の基礎となる大基壇が方形に区画、整形されるのに対し、インガタンボやセロ・ニャニャニケでは、基本的に自然の地形を利用しながら基壇が建造されるため、全体的な形状は上記の遺跡とは異なり、ややいびつである。

以上のように、インガタンボの基壇には、ポマワカ期からインガタンボ期を通じて、極北部海岸や北部熱帯低地との共通性が強くみられる。とくに、建材や仕上げの面で類似性は強いものの、細部には差異が存在している点にはインガタンボの独自性がみうけられる。

8-1-2. 広場

ワンカバンバ川流域で広場が確認できるのは、インガタンボのみである。形成期の建築特徴としてあげられる広場は、一般的に「半地下式広場」であり、形状に応じて「円形半地下式広場」と「方形半地下式広場」に分けられる。その一方で、インガタンボの事例は、

方形を呈するが半地下式ではなく、周囲に壁も存在しない。むしろ、四方を基壇や構造物などで囲まれた広場状開放空間である。しかし、広場を大人数が集まるためのスペースであると捉えた場合、基本構造は同じであり、かつ多くの人を集めることができるという意味で、広場と同様の機能を有する空間であると考えられる。インガタンボでは、ポマワカ期に入って基壇上に開放空間がみられるようになるが、他の遺跡にもみられるような大規模な広場状開放空間が出現するのは、インガタンボ期になってからである。

周辺地域の事例において、神殿の配置に広場が組み込まれる事例は多いが、ワンカバンバ川流域以南の地域では半地下式広場が主流である。たとえば、ペルー北部のヘケテペケ川中流域のアマカス複合では、形成期前期から方形半地下式広場が認められる。また、方形半地下式広場は、形成期中期に入ると、北部山地のクントゥル・ワシやパコパンパ複合、ポロポロ、北部海岸のプルレンでも確認される。さらに、形成期後期には、北部山地のクントゥル・ワシやパコパンパ複合、ラ・グランハ複合（エル・ローヨ）などでも事例がみられる。その一方で、極北部海岸のセロ・ニャニャニケや北部熱帯低地のセレサルなどでは、方形広場は存在するものの、半地下式広場[1]は存在しない。また、円形半地下式広場に至っては、形成期後期のクントゥル・ワシのみで確認されている。

以上のように、インガタンボの広場は、半地下式ではないという点において、極北部海岸と北部熱帯低地との共通性が高く、これらは前項で述べた神殿の分布域の北限、または建築細部の類似性を示す地域と重なりをみせる。

8-1-3. 配置

基壇や広場の配置については、これまで先行研究においてもたびたび取り上げられており、その類似性や差異から地域間関係が論じられてきた[Burger 2009; 加藤 1993; Williams 1985]。アンデスにみられる代表的な配置としては、広場の三方を基壇、または建造物が囲み、一方が開く「U 字形配置」や、中心軸を重視した構造を持ち、一方向へ向かって次第に高さを増しながら、基壇や広場が直線状に繰り返される「線形配置」、それらを組み合わせた「線形U字形配置」などがあげられる。

ワンカバンバ期のインガタンボでは、基壇のみ確認されている。しかし、北部海岸のモンテグランデでは、形成期前期から線形配置が認められ、テラスが繰り返されて、その頂上部に基壇が載るような形態がみられる。また、同流域のラス・ワカスでも中心軸を重視した建築が認められる。

ポマワカ期のワンカバンバ川流域では、基壇とテラスを有する複数の神殿がみられる。それらの配置は U 字形配置や線形配置のいずれにも該当せず、あくまでも基壇とテラスのセット関係が存在するのみである。流域内の他の遺跡よりも詳細な建設過程が明らかとなっているインガタンボでは、二つの基壇が関連を持たずに併存しており、上記の配置のみ

[1]セロ・ニャニャニケ遺跡では、基壇上に載る方形の半地下式小広場（plazuela hundida）の存在が報告されている[Guffroy 1989]。

でなく、形成期中期のワンカバンバ川以南の事例とも大きく異なっている。一つの遺跡に複数の基壇が併存する「基壇複合」という点においては、北部熱帯低地のセレサルやトメペンダ、極北部海岸のセロ・ニャニャニケとの類似性がみられる。しかし、いずれもインガタンボより大規模、かつ多数の基壇から構成されるという差異が認められる。また、ポマワカ期のインガタンボにおいては、B 基壇と C 基壇、D 基壇が中央の空間を囲むように建設されるが、中心に広場が存在するかどうかは明確ではなく、かつ既述の 3 基壇の関係が不明瞭であることから U 字形配置とは一線を画する。これら以外に、この時期のペルー北部海岸では、プルレンやラス・ワカスで U 字形配置、あるいはそれと線形構造の組み合わせである線形 U 字形配置がみられる。

続く形成期後期になると、この状況に変化がみられる。インガタンボでは、大規模な更新が行われ、A 基壇上に基壇と構造物によって広場状開放空間を囲むような構造がみられるようになる。つまり、先述の U 字形配置とは異なるものの、大基壇（A 基壇）上に基壇（主要基壇と西基壇）や部屋状構造物（基壇上部東側の部屋状構造物）、広場状開放空間が築かれているのである。規模や円柱の存在、建築の仕上げなどに多くの差異は存在するものの、このような A 基壇の配置は、形成期中期において北部海岸のプルレン[Burger 1992: 94]、そして形成期後期の北部山地の神殿にみられた配置と構造的に類似している。また、この時期のインガタンボでは、ポマワカ期までに互いに独立して存在していた A 基壇と B 基壇の関係が重視されるようになり、両基壇の間に大規模な広場状開放空間や低層基壇が築かれることで、全体として一つの基壇・広場複合が形成される。この全体配置はあくまで特殊な形態であり、他に類例はみられない。また、形成期後期のペルー極北部海岸や北部熱帯低地では、形成期中期と同様に基壇複合がみられ、北部山地のパコパンパ複合では線形配置が、クントゥル・ワシでは、U 字形配置と線形配置の組み合わせである線形U字形配置が認められる。

8-1-4. インガタンボの建築からみる地域間関係

本節では、各遺跡の建築を構成要素や配置、もしくは建材や建築技法から比較検討してきた。これまでに述べてきた形成期早期と形成期前期（ワンカバンバ期）、形成期中期（ポマワカ期）、形成期後期（インガタンボ期）の各時期における神殿の建築特徴とその分布を示したものが、それぞれ図 8-3[1]、図 8-4[2]、図 8-5 である。その結果、特定の建築特徴の地域的、あるいは時期的な分布が明らかとなった。不動性を有する建築の類似は、神殿間

[1]セロ・ニャニャニケでは、形成期前期の活動の証拠はこれまでに報告されていない。しかし、流域の遺跡分布調査で確認されたワンカバンバ期に対応する諸遺跡の位置が不明瞭であるため、ここでは便宜的にセロ・ニャニャニケの位置を用いている。

[2]北部熱帯低地のトゥルコとサン・ロレンソは、先行研究において報告されていない遺跡であるが、ハエン市在住の考古学者からの情報と、彼と筆者らによる踏査で基壇の存在が確認されている。

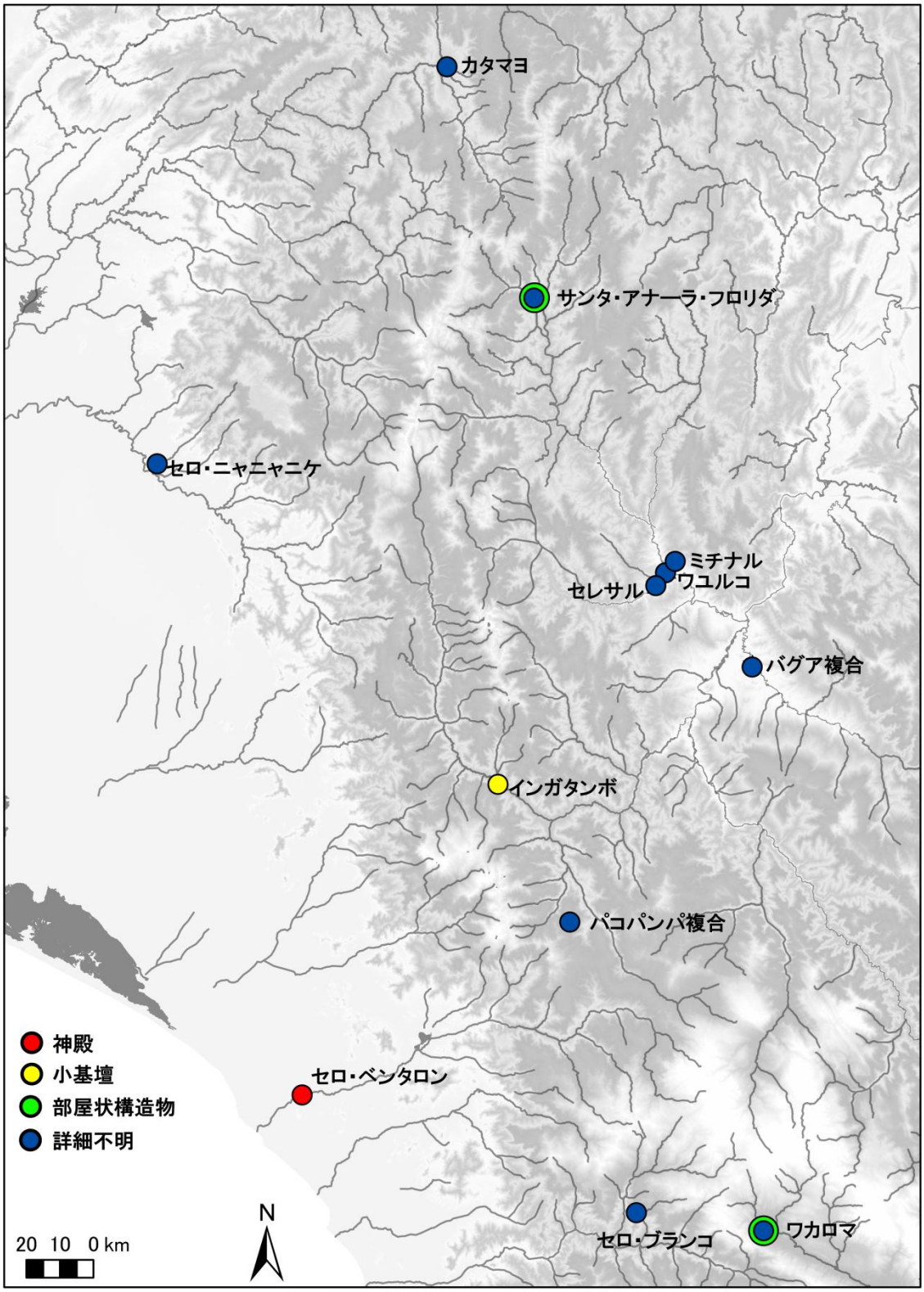


図8-3　形成期早期と形成期前期における神殿の建築特徴とその分布

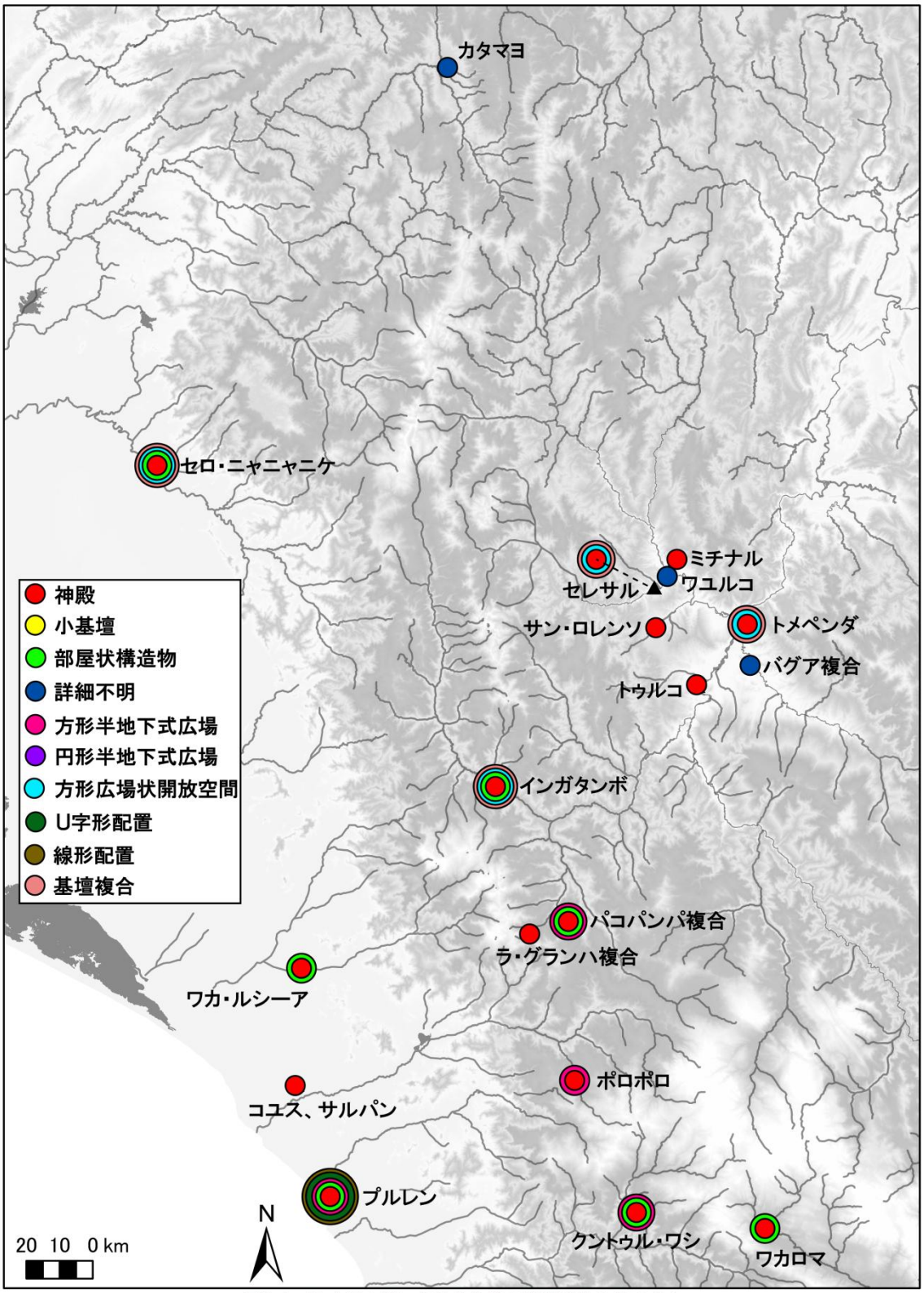


図8-4　形成期中期における神殿の建築特徴とその分布

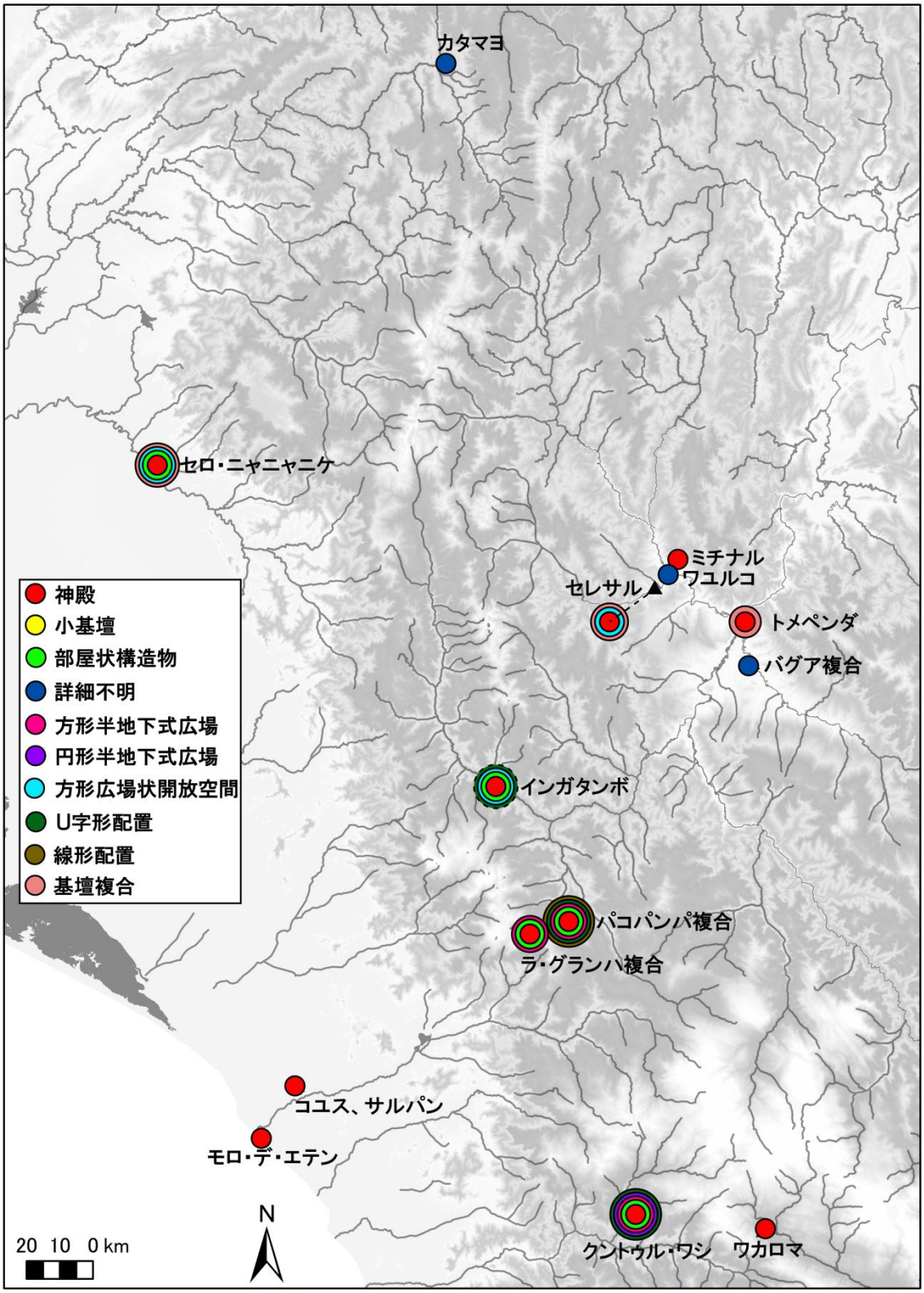


図8-5　形成期後期における神殿の建築特徴とその分布

で人の移動を含めた交流が存在した証拠となるものであり、全体プランや細部にまでいたる共通性は、技術やイデオロギーの共有、もしくは建築に直接たずさわる人々の移動を推測させる。つまり、上記の共通性を通じて、神殿建設やその場で行われる儀礼に関わる特定の人々の移動を伴うような、技術、情報、イデオロギーと連なる交流が行われたと考えられるのである。

形成期早期と形成期前期については、比較データが乏しく、詳細は不明な点が多い。また、神殿分布の北限はペルー北部海岸のセロ・ベンタロンで、インガタンボでは小基壇が築かれただけである。したがって、各社会で居住用ではない特殊な建造物が建設されたということ以外に、インガタンボとセロ・ベンタロン、あるいは周辺諸遺跡との共通性は明瞭ではない。しかし、この時期のインガタンボの建築には、規模などの面でペルー極北部海岸の事例（アビク）との類似性が存在することには注意が必要である。なぜならば、インガタンボと極北部海岸の遺跡との建築にみられる共通性は、形成期中期に入るとより顕著になるためである。

形成期中期には、神殿の分布が北上して、インガタンボをはじめ、極北部海岸や北部熱帯低地でも神殿がみられるようになる。また、インガタンボと上記の2地域の遺跡間には、建築配置、もしくは建築技法などに関しても、高い共通性が認められる。なかでも、インガタンボとセロ・ニャニャニケとの建築特徴の一致は、特筆すべきものである。そのため、当該地域間において、人の移動を含む交流が存在し、技術やイデオロギーが共有されたことが示唆される。とくに、インガタンボと極北部海岸や北部熱帯低地の諸神殿では、建築配置までに至る高い類似が示されることから、当該地域間において密接な交流が存在したと考えられる。ただし、共通性が認められる一方で、確かな独自性が存在する点については、インガタンボ社会における社会成員の行為主体性、とくに建設活動の指導者（リーダー）の活動と戦略を考慮する必要があるだろう。たとえば、芝田は、ネペーニャ川流域の発掘調査をもとにして、神殿の指導者間に存在する、その支持者獲得をめぐる強い競合関係を想定した[芝田 2011]。この見方によれば、インガタンボの建築にみられた独自性は、イデオロギーを共有する社会間において、より多くの人々をインガタンボに引きつけようとするリーダーの戦略の一部として捉えることが可能となる。つまり、インガタンボにみられた独自性とは、リーダーによって実施された他地域の神殿との差異化を図る活動の結果であると考えられるのである。

こうした状況は、形成期後期に入ると大きく変化する。たとえば、インガタンボの建材や仕上げといった建築技術においては、極北部海岸や北部熱帯低地との共通性が保持され続ける。その一方で、インガタンボの全体配置は確かに独自性に富むものの、基壇（A 基壇）上の構造に関しては、形成期中期の北部海岸にあるプルレン、または形成期後期の北部山地の神殿との共通性がみられるようになるのである。このような形成期中期の海岸部の神殿と、形成期後期の山地の神殿との形態的類似性は、北部山地のクントゥル・ワシなどでも認められる現象である。そして、クントゥル・ワシでは、この時期に海岸部からの直接的な人の移動を含む地域間交流があったことが示唆されている[加藤・井口 1998]。そ

のため、形成期後期のインガタンボにおいても、同様に海岸部からの人の移動が存在した可能性はある。しかし、先述したように、インガタンボの全体配置に関しては、共通性のなかにも独自性が強くみられる。これは、インガタンボの神殿社会、とくに神殿建設を統御するリーダーが、神殿建設に際して、建築の形態や全体プランについての情報を単純に他地域から導入したのでなく、地域間交流を通じてもたらされた様々な情報や神殿に関わるイデオロギーを独自に解釈し、取り込んでいった結果であると考えられる。

以上のように、本節では、インガタンボの建築データを周辺地域と比較することで、その独自性と他地域との共通性を明らかにして、建築の観点から地域間交流について論じてきた。その結果、インガタンボと周辺地域の諸遺跡との間では、建設活動に直接的にたずさわる人の移動を含む地域間交流が存在し、技術やイデオロギーに関わる情報なども授受されていたことが示唆された。しかしながら、不動性を有する建築の分析だけでは、地域間交流を論じるには不十分であり、実際に社会間で行われた物資のやりとりを検討する必要がある。また、当該社会のイデオロギーが体現されたのは、神殿建築だけにはとどまらない。そのため、各考古資料の特性に応じて、その獲得や使用に関与した人々の活動や戦略を捉えていかなければならない。これらのことから、次節以降では、神殿出土遺物の分析を行い、インガタンボの独自性と他地域との共通性について、検討を進めていく。

8-2.　土器

本節のねらいは、インガタンボ遺跡と周辺地域の諸遺跡との土器の比較検討を通じて、インガタンボ遺跡出土土器の特徴を明らかにし、土器から示唆される地域間交流を質的に論じることである。しかしながら、周辺地域の研究状況は、地域によってその進捗状況が異なり、分析の基盤となる土器編年すら不明瞭な場合がある。そのため、以下の比較に際しては、研究の先進地域であり、層位学的な発掘調査にもとづいて編年が確立されているペルー北部山地を中心に、議論を進める。この分析は、第 9 章、および第 10 章における生態学的要因を重視した地域間ルートの分析とあわせて、地域間ルートと地域間交流の通時的変化を論じる際の礎ともなる。

土器は、一般的に出土量が最も多い資料であり、比較資料としては建築データより豊富である。前節では、建築特徴から地域間関係について指摘したが、建築と異なる土器の最大の特徴はその可搬性にある。周辺地域の先行研究における土器分析では、調査者の視点や目的が異なるため、全ての遺跡間で同様の基準（第 5 章で記述したタイプ分類）を用いた比較を行うことはできない。したがって、分析に際しては、各遺跡で報告された土器をタイプ分類に用いた胎土、器面調整、装飾、器形といった属性レベルにまで掘り下げる。そして、それらの組み合わせを地域ごと、あるいは時期ごとにみていくことで、地域間関係を検討する（表 8-1～表 8-3）。表 8-1 と表 8-2 は、ワンカバンバ川流域の周辺地域における土器装飾の分布について、表 8-3 は土器器形の分布に関して、遺跡ごとにその有無を記したものであり、以下の記述の基礎と

表8-1　比較対象地域における土器装飾一覧①

					装飾																						
					胎土・整形				刻線																		
時期区分		地域区分	遺跡名	時期名称	灰色磨研	黒色磨研	赤色磨研	褐色磨研	図像	幾何学	櫛目	平行線	平行斜線	平行線＋平行斜線	格子	三角形状	円弧	同心半円	渦巻	鎖状	刻線＋刺突文（刻線区画内）	磨線	磨線平行	磨線格子
ワンカバンバ期	形成期早期・前期	エ・南部山地	カタマヨ複合	カタマヨA				○				○	○	○							○			
		ペ・極北部海岸部	トゥンベス川流域	サン・フアン								○									○			
		ペ・極北部海岸部	ピウラ川、チラ川流域	パイタA								○												
		ペ・極北部海岸部	ピウラ川、チラ川流域	パイタB						○	○	○	○	○	○		○	○						
		ペ・北部熱帯低地	バグア	モレリーヤ							○	○									○	○	○	
		ペ・北部山地	パコパンパ	パンダンチェ							○		○								○			
		ペ・北部山地	ワカロマ,ライソン	前期ワカロマ							○					○					○			
		ペ・北部山地	セロ・ブランコ	ラ・コンガ													○				○			
		ペ・北部海岸部中流	アマカス複合	アマカス						○	○		○	○	○	○	○				○			
		ペ・北部海岸部	プエマペ	前期プエマペ						○	○	○					○							
ポマワカ期	形成期中期前半	エ・南部山地	カタマヨ複合	カタマヨB				○																
		ペ・極北部海岸	ピウラ川、チラ川流域	パイタC						○		○	○		○									
		ペ・極北部海岸中流	セロ・ニャニャニケ	ニャニャニケ		?	?	○	○	○	○	?	?		○	○	?		?	○				
		ペ・北部熱帯低地	セレサル、ミチナル		?		○			○		○	○	○			○	○		○	○	○		
		ペ・北部熱帯低地	トメペンダ				○	?	○	○		○	○	○						○	○			
		ペ・北部熱帯低地	バグア	バグアI	?		?	?	○	○		△	△	△	○				△	○	○			
		ペ・北部山地	パコパンパ	パコパンパI		○	○	○	○	○	○	○							○	○	○			
		ペ・北部山地	ワカロマ・ライソン	後期ワカロマ		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○	○		○	○	○	○
		ペ・北部山地	セロ・ブランコ	セロ・ブランコ		○	○	○	○	○		○	○	○							○	○		○
		ペ・北部海岸部中流	アマカス複合	テンブラデーラI		○	○	○	○	○		○	○	○	○		○			○	○	○	○	○
		ペ・北部海岸部	ワカ・ルシーア		○	○	○	○	○	○	○		○		○	○					○			
		ペ・北部海岸部	プルレン				○		○	○											○			
	中期後半	ペ・北部山地	ポロポロ		○		○			○	○				○			○			○			
		ペ・北部山地	クントゥル・ワシ	イドロ	○		○	○	○	○		○	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○
		ペ・北部山地	セロ・ブランコ	(埋葬のみ)	○	○		○	○	○														
		ペ・北部海岸部中流	アマカス複合	テンブラデーラII	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○		○			○	○	○	○	○
		ペ・北部海岸部	プエマペ	中期プエマペ	○		○		○	○		○	○	○	○	○		○		○	○			
インガタンボ期	形成期後期前半	エ・南部山地	カタマヨ複合	カタマヨC			○	○		○		○	○	○					○	○	○			
		ペ・北部熱帯低地	バグア	バグアII	?		○		○	○		○	△	△				○	△	△	○			
		ペ・北部熱帯低地	セレサル、ミチナル				○		○	○		○	○	○			○	○		○	○	○		
		ペ・北部山地	パコパンパ	パコパンパII	○	○	○		○	○		○	○	○	○	○			○		○	○	○	○
		ペ・北部山地	ラ・グランハ		○	○	○	○	○	○	○	○	○	?	○	○					○	○	○	○
		ペ・北部海岸部	モロ・デ・エテン		○	○	○	○	○	○	?	○			○				○		○			
		ペ・北部山地	クントゥル・ワシ	クントゥル・ワシ	○	○	○	○	○	○		○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
		ペ・北部海岸部中流	アマカス複合	レチューサス	○					○		○									○			
		ペ・北部海岸部	プエマペ	後期プエマペ	○					○					○									
		ペ・極北部海岸	トゥンベス川流域	ペチチェ		○	○	○	○	○		○	○	○	○	○					○			
		ペ・極北部海岸中流	セロ・ニャニャニケ・ロマ・マカンチェ	パネシージョ		?	○	?	○	○	?	?	○		○		○		○	○	○			
		ペ・極北部海岸	ピウラ川、チラ川流域	パイタD			○			○			○								○			
	後期後半	エ・南部山地	カタマヨ複合	カタマヨD			○	○	○	○		○									○			
		ペ・極北部海岸	ピウラ川、チラ川流域	セチューラA			○	○		○			○		○						○			
		ペ・極北部海岸中流	セロ・ニャニャニケ	ラ・エンカンターダ		?	○	?		○			○		○				○					
		ペ・北部熱帯低地	バグア	ラ・ペカ	?		○			○		△	△	△	○				△	△	○		?	
		ペ・北部熱帯低地	バグア	エル・サラード	?					○		○				○				○	○			
		ペ・北部山地	ワカロマ・ライソン	EL		○	○	○		○	○	○	○	○	○	○		○	○		○	○	○	○
		ペ・北部山地	クントゥル・ワシ	コパ			○		○	○		○	○	○	○	○	○	○	○		○	○	○	

○は出土例あり、△は出土例はあるが時期不明、?は記述はあるものの図面や写真で明確に確認できない例

表8-2　比較対象地域における土器装飾一覧②

時期区分	地域区分	遺跡名	時期名称	装飾																								
				彩色																	押圧、刺突、貼付、塑像								
				黒色磨研＋グラファイト塗彩	赤色磨研＋グラファイト塗彩	グラファイト塗彩	オレンジ地赤彩	ベージュ地赤彩	赤色スリップ塗布	赤色・黒色塗彩	赤色・白色塗彩	白色スリップ塗布	白色・黒色塗彩	赤色塗彩	灰色塗彩	白色塗彩	多彩色（刻線区画内）	多彩色（刻線による区画なし）	ポストコクション（刻線内）	ポストコクション（刻線区画内）	口縁部連続刺突	重圏文	圏点文	ロッカースタンプ	帯状貼付	ボタン状貼付	貼付・押圧、刺突、刻線	塑像（人＋動物）
ワンカバンバ期	形成期早期・前期	エ・南部山地	カタマヨ複合	カタマヨA										○					○									
		ペ・極北部海岸部	トゥンベス川流域	サン・フアン					○																○		○		
		ペ・極北部海岸部	ピウラ川、チラ川流域	パイタA					○					○											○		○		
		ペ・極北部海岸部	ピウラ川、チラ川流域	パイタB					○					○							○		○		○		○		
		ペ・北部熱帯低地	バグア	モレリーヤ																					○		○		
		ペ・北部山地	パコパンパ	パンダンチェ																○				○	○	○		
		ペ・北部山地	ワカロマ,ライソン	前期ワカロマ																○				○		○		
		ペ・北部山地	セロ・ブランコ	ラ・コンガ																○				○	○	○		
		ペ・北部海岸部中流	アマカス複合	アマカス					○											○				○	○	○		
		ペ・北部海岸部	プエマペ	前期プエマペ					○															○		○		
ポマワカ期	形成期中期前半	エ・南部山地	カタマヨ複合	カタマヨB					○																			
		ペ・極北部海岸	ピウラ川、チラ川流域	パイタC					○	○				○					○	○					○		○		
		ペ・極北部海岸中流	セロ・ニャニャニケ	ニャニャニケ					○		○	○		○	○	○	○	○	○						○	○	○	?
		ペ・北部熱帯低地	セレサル、ミチナル						○		○	○		○		○	○			?					○	○	○	
		ペ・北部熱帯低地	トメペンダ						○			○				○	○											○
		ペ・北部熱帯低地	バグア	バグアI					○		○	○		○		○	○	○			△							
		ペ・北部山地	パコパンパ	パコパンパI			○		○		○	○		○		○	○			○		○	○		○		○	○
		ペ・北部山地	ワカロマ・ライソン	後期ワカロマ		○	○		○		○	○		○			○		○	○	○	○		○	○	○		
		ペ・北部山地	セロ・ブランコ	セロ・ブランコ					○		○	○		○			○		○	○				○		○		
		ペ・北部海岸部中流	アマカス複合	テンプラデーラI					○		○	○		○			○		○	○	○		○	○	○	○	○	○
		ペ・北部海岸部	ワカ・ルシーア				○		○	○	○	○		○		○	○		○					○	○	○	○	
		ペ・北部海岸部	プルレン																									
	中期後半	ペ・北部山地	ポロポロ						○										○					○		○	○	
		ペ・北部山地	クントゥル・ワシ	イドロ		○		○	○	○	○	○		○		○	○		○	○	○	○	○	○	○	○		
		ペ・北部山地	セロ・ブランコ	(埋葬のみ)					○					○					○	○								○
		ペ・北部海岸部中流	アマカス複合	テンプラデーラII				○	○		○	○		○			○		○	○	○	○		○	○	○	○	○
		ペ・北部海岸部	プエマペ	中期プエマペ					○										○	○		○	○		○	○	○	○
インガタンボ期	形成期後期前半	エ・南部山地	カタマヨ複合	カタマヨC										○					?					○	○	○	?
		ペ・北部熱帯低地	バグア	バグアII					○	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○	△				○	○		
		ペ・北部熱帯低地	セレサル、ミチナル						○		○	○		○		○	○			?		○	○		○	○	○	
		ペ・北部山地	パコパンパ	パコパンパII		○		○		○			○	○		○				○		○	○	○	○		○	○
		ペ・北部山地	ラ・グランハ		?				○	○	○	○		○			○					○	○	○	○	○	○	○
		ペ・北部海岸部	モロ・デ・エテン		○		○			○	○		○		○	○		○	○			○	○	○	○	○	○	○
		ペ・北部山地	クントゥル・ワシ	クントゥル・ワシ	○	○	○	○	○	○			○	○					○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
		ペ・北部海岸部中流	アマカス複合	レチューサス						○													○			○		
		ペ・北部海岸部	プエマペ	後期プエマペ																								
		ペ・極北部海岸	トゥンベス川流域	ペチチェ						○	○	○			○		○					○	○		○	○	○	○
		ペ・極北部海岸中流	セロ・ニャニャニケ・ロマ・マカンチェ	パネシージョ						○		○	○		○	?	○	○	○	○			○			?			○
		ペ・極北部海岸	ピウラ川、チラ川流域	パイタD			○			○	○		○		○					○					○		○	○
	後期後半	エ・南部山地	カタマヨ複合	カタマヨD						?	○				○		○	○		○		○					○	○
		ペ・極北部海岸	ピウラ川、チラ川流域	セチューラA			○			○		○	○		○		○									○			
		ペ・極北部海岸中流	セロ・ニャニャニケ	ラ・エンカンターダ						?			○	?												○		○	○
		ペ・北部熱帯低地	バグア	ラ・ペカ				?			○	○	○	○	○			○	○	○	○						○		
		ペ・北部熱帯低地	バグア	エル・サラード							○	○	○	○	○	?		○	○	○						○	○	○	○
		ペ・北部山地	ワカロマ・ライソン	EL			○	○			○	○			○					?	○	○	○	○	○	○	○	○	
		ペ・北部山地	クントゥル・ワシ	コパ						○		○	○		○		○			○		○	○		○	○	○	○

○は出土例あり、△は出土例はあるが時期不明、?は記述はあるものの図面や写真で明確に確認できない例

表8-3　比較対象地域における土器器形一覧

時期区分		地域区分	遺跡名	時期名称	器形																	口縁部意匠
					壺			鉢								その他			ボトル			
						有頸壺																
					無頸壺	短頸壺	広口壺	コンポジット鉢	半球鉢	開口半球鉢	外傾鉢	外反鉢	浅鉢	朝顔鉢	開口円筒鉢	コップ形	高杯	焙烙	ボトル	鐙型ボトル	口縁部外ぎれ
ワンカバンバ期	形成期早期・前期	エ・南部山地	カタマヨ複合	カタマヨA		○						○									
		ペ・極北部海岸部	トゥンベス川流域	サン・フアン																	
		ペ・極北部海岸部	ピウラ川、チラ川流域	パイタA		○				○											
		ペ・極北部海岸部	ピウラ川、チラ川流域	パイタB		○															
		ペ・北部熱帯低地	バグア	モレリーヤ		○				?											
		ペ・北部山地	パコパンパ	パンダンチェ	○	○		○	○			○									
		ペ・北部山地	ワカロマ,ライソン	前期ワカロマ	○	○	○	○	○	○		○									
		ペ・北部山地	セロ・ブランコ	ラ・コンガ	○			○	○												
		ペ・北部海岸部中流	アマカス複合	アマカス	○	○	○	○	○			○							○		
		ペ・北部海岸部	プエマペ	前期プエマペ	○				○												
ボマワカ期	形成期中期前半	エ・南部山地	カタマヨ複合	カタマヨB		○													○		
		ペ・極北部海岸	ピウラ川、チラ川流域	パイタC	○	○				○	○	○									○
		ペ・極北部海岸中流	セロ・ニャニャニケ	ニャニャニケ		○	○		○	○	○	○	○			○			○		
		ペ・北部熱帯低地	セレサル、ミチナル		?	○		?	○	○	○	○							○		
		ペ・北部熱帯低地	トメペンダ						○	○	○					○				○	
		ペ・北部熱帯低地	バグア	バグアI	△	○	○		○	○	○	○	△						○	?	
		ペ・北部山地	パコパンパ	パコパンパI	○	○	○		○	○	○	○			○	○		○	○	○	
		ペ・北部山地	ワカロマ・ライソン	後期ワカロマ	○	○	○	○	○	○	○	○	○						○	○	
		ペ・北部山地	セロ・ブランコ	セロ・ブランコ	○	○		○	○	○	○	○	○						○	○	
		ペ・北部海岸部中流	アマカス複合	テンプラデーラI	○	○	○	○	○	○	○	○	○				○		○	○	
		ペ・北部海岸部	ワカ・ルシーア		○	○			○	○	○								○	○	○
		ペ・北部海岸部	プルレン		○	○													○	○	
	中期後半	ペ・北部山地	ポロポロ		○	○		○	○	○			○		○					○	
		ペ・北部山地	クントゥル・ワシ	イドロ	○	○			○	○	○	○				○			○	○	
		ペ・北部山地	セロ・ブランコ	(埋葬のみ)		○				○	○	○					○			○	
		ペ・北部海岸部中流	アマカス複合	テンプラデーラII	○	○	○	○	○	○	○	○	○				○		○	○	
		ペ・北部海岸部	プエマペ	中期プエマペ	○	○		○	○	○	○	○				○		○	○	○	○
インガタンボ期	形成期後期前半	エ・南部山地	カタマヨ複合	カタマヨC		○					○	○							○		
		ペ・北部熱帯低地	バグア	バグアII	△	○				○	○	○	△						○	○	
		ペ・北部熱帯低地	セレサル、ミチナル		?	○		?	○	○	○	○							○	○	?
		ペ・北部山地	パコパンパ	パコパンパII	○	○	○		○	○	○	○	○		○	○			○	○	○
		ペ・北部山地	ラ・グランハ		○	○			○	○	○	○	○			○			○	○	○
		ペ・北部海岸部	モロ・デ・エテン		○	○			○	○	○	○		○		○		○	○	○	○
		ペ・北部山地	クントゥル・ワシ	クントゥル・ワシ	○	○	○		○	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○
		ペ・北部海岸部中流	アマカス複合	レチューサス			○		○										○	○	
		ペ・北部海岸部	プエマペ	後期プエマペ						○	○		○		○				○	○	○
		ペ・極北部海岸	トゥンベス川流域	ペチチェ	○	○	○		○	○	○	○				○	○				○
		ペ・極北部海岸中流	セロ・ニャニャニケ・ロマ・マカンチェ	パネシージョ		○	○		○	○	○	○				○			○		
		ペ・極北部海岸	ピウラ川、チラ川流域	パイタD	○	○	○		○		○	○							○		
	後期後半	エ・南部山地	カタマヨ複合	カタマヨD	○	○			○		○	○							○	○	○
		ペ・極北部海岸	ピウラ川、チラ川流域	セチューラA	○	○			○			○	○								
		ペ・極北部海岸中流	セロ・ニャニャニケ	ラ・エンカンターダ					○	○	○										○
		ペ・北部熱帯低地	バグア	ラ・ペカ	△	○			○	○	○	△	○						○	○	○
		ペ・北部熱帯低地	バグア	エル・サラード		○			○	○	○	○						○	○	○	
		ペ・北部山地	ワカロマ・ライソン	EL	○	○	○		○	○	○	○	○						○	○	○
		ペ・北部山地	クントゥル・ワシ	コパ	○	○	○		○	○	○	○		○			○	○	○	○	○

○は出土例あり、△は出土例はあるが時期不明、?は記述はあるものの図面や写真で明確に確認できない例

なっている。この際に注意しなければならないことは、各土器属性が共有されることの意味である。たとえば、胎土と器面調整の共通性は、土器製作における技術レベルでの地域間交流の存在を示唆するものであると考えられる。その一方、装飾、とくに精製土器にみられる装飾の共通性は、製作の技術レベルだけにとどまらず、土器が使用されたと考えられる儀礼コンテクストと関連するイデオロギーレベルでの地域間交流を示唆する。さらに、器形は、土器の機能差と関わる属性であるため、その共通性は用途の類似性を伺わせる。

なお、比較をする際の、属性や複数の属性の組み合わせといった分類基準は、インガタ

ンボの発掘データを中心に設定された。また、分析において、刻線による平行線や短線といった属性が組み合わされ、全体として特定の図像や幾何学文を描くような場合は、個々の属性（平行線や短線）としてではなく、図像や幾何学文として分類している。

8-2-1. ペルー北部山地

ペルー北部山地において比較対象としてあげるのは、パコパンパ複合（パコパンパとパンダンチェ）[Flores 1975, 2005; Fung 1975; Kaulicke 1975, 2005a, 2005b; Morales 1980, 1998, 2005; Rosas and Shady 1970, 2005]、ワカロマ[Terada and Onuki 1982, 1985]、ライソン[Terada and Onuki 1985]、クントゥル・ワシ[Inokuchi 1998; 井口 2002a, 2007; Onuki ed. 1995]、セロ・ブランコ[Onuki ed. 1995]、ラ・グランハ複合[Wester et al. 2000]、ならびにポロポロ[Alva 1986]の 7 遺跡である。

ペルー北部山地では、形成期前期（ワンカバンバ期後半相当）に、中央アンデスで最も古い部類の土器が報告されている[1]。パコパンパ複合のパンダンチェ期、ワカロマの前期ワカロマ期、セロ・ブランコのラ・コンガ期がこれに該当し、無頚壺や短頚壺、半球鉢、外反鉢に加え、コンポジット鉢などが主な器形としてみられる。コンポジット鉢とは、底部から外側に開きながら立ちあがった器壁が、胴部のなかほどから屈曲してすぼまりつつ口縁部に至り、最大径が胴部の屈曲点となるもので、インガタンボでは確認されていない。装飾に関しては、帯状、あるいはボタン状貼付文に押圧文を加えたものが多いが、それに加えて櫛目文や刻線と刺突文の組み合わせも認められる。なお、セロ・ブランコでは、刻線で円弧を描く装飾もみられる。これらの土器は、後述するペルー北部ヘケテペケ川沿岸部のプエマペや中流域のアマカス複合、ペルー北部熱帯森林地帯のマナチャキ、北部熱帯低地のバグア複合に類例が確認される。

ポマワカ期に対応する形成期中期には、近年、調査の進展がみられるヘケテペケ川流域を中心に、形成期中期と形成期後期を前半と後半に細分化することが試みられている[鶴見 2008a; 鶴見・吉田・米田 2007]。細分の指標となるのは、ワカロマの後期ワカロマ期やクントゥル・ワシのイドロ期にみられる緻密な胎土を有し、オレンジ色の器面に赤色塗彩が施された土器（オレンジ地赤彩）や、灰色磨研土器である。これらは、それぞれ形成期中期後半から出土する傾向があることが指摘されている[鶴見 2008a; 鶴見・吉田・米田 2007]。とりわけ灰色磨研土器は、「クピスニケ」とよばれるこの時期の海岸部に代表される土器であり、緻密な胎土と表面調整が特徴的である。しかしながら、発掘調査によって、形成期中期と形成期後期が細分化できる遺跡は、現状では限られているため、本論では細分可能な場合にのみ区分する。形成期中期前半に対応するのは、セロ・ブランコのセロ・ブランコ期、形成期中期後半に相当するのはクントゥル・ワシのイドロ期である。パコパンパ複合のパコパンパⅠ期、ワカロマの後期ワカロマ期、ポロポロでは、この区分を明確に適用

[1]パンダンチェに先行する時期の土器の存在は指摘されているものの[Guffroy 2004: 89]、これまで詳細に議論されておらず、不明確なままである。

できないため、ここでは形成期中期全般に相当するものとしておく。

形成期中期に入ると、各遺跡で器形のバリエーションが大幅に増加する。開口半球鉢や外傾鉢、焙烙、鐙形ボトル、コップ形土器や開口円筒鉢がみられるようになる一方で、形成期前期に特徴的であったコンポジット鉢はあまり確認されなくなる。また、装飾のバリエーションが増し、中心的な装飾要素である刻線による意匠が多様化して、図像や幾何学文が描かれることが多くなる。さらに、刻線と刺突文との組み合わせや、焼成後に顔料を充填するポストコクションとの組み合わせ、その逆に焼成前に顔料を塗彩する多彩色のプレコクション（多彩色：赤色、白色、紫色）との組み合わせも認められる。刻線とポストコクションの組み合わせには、土器表面を刻線で区画した範囲に顔料を充填する場合と、刻線内に顔料を充填する場合の 2 パターンがみられる。これらに加えて、塑像や貼付文と刻線などを組み合わせる立体的な表現や、表面調整の際に部分的に強く磨くことで研磨箇所を線として表した磨線も現れる。彩色に関しては、赤色、もしくは白色のスリップ塗布や塗彩、その組み合わせなどがみうけられる。また、形成期前期とは異なり、高度に研磨された土器（黒色、赤色、褐色、灰色）が出現するようになる。

なお、この時期のパコパンパ複合では、短頚壺の器形に関してペルー極北部海岸のピウラとの類似が示唆される[Rosas and Shady 2005: 59]。さらに、それ以外の土器についても、パコパンパ複合と北部熱帯低地のバグア複合や北部山地のワカロマ、セロ・ブランコ、クントゥル・ワシとの類似性が様々な研究者から指摘される[Inokuchi 1998; Kaulicke 1975, 2005a; Morales 1980, 2005; 関 1990; Seki 1998]。

ポロポロでは、刻線で幾何学文が複雑に描かれた土器がみられるなど、後述するペルー極北部地域のセロ・ニャニャニケとの類似性が認められる。なかでも、刻線による装飾には、波状、格子、同心半円の繰り返しなど独特の表現がみられる。調査者であるアルバは、ポロポロの土器と、ペルー北部山地のワカロマやパコパンパ複合、ペルー北部熱帯低地のバグア複合、エクアドル南部山地のセロ・ナリオとの類似性を指摘している[Alva 1986: 348]。

以上のように、ペルー北部山地における形成期中期の土器をみると、形成期前期と比して器形や装飾のバリエーションが増加するという傾向がみられる。とりわけ、白色や赤色の塗彩や塗布、あるいはその組み合わせの利用や刻線による装飾、多彩色塗彩などにおいて、当該地域の遺跡間で高い共通性が認められる。このことは、当該地域において、土器の交換、もしくは土器製作に関する技術や情報の交換を含む地域間交流が存在したことを示唆する。また、高い共通性がみられる土器が精製土器であることから、イデオロギーと連なる情報も交換、および共有されていたと考えられる。そのなかで、土器の細部にみられる遺跡ごとの差異は、各社会の独自性を示すものである。

インガタンボ期に対応する形成期後期の活動がみられるのは、パコパンパ複合、ワカロマ、ライソン、クントゥル・ワシ、ラ・グランハ複合である。そのうちのクントゥル・ワシでは、形成期中期でみられたように、形成期後期が前半と後半に細分化されている。

形成期後期に入ると、全体的な傾向として、北部山地の諸遺跡では土器に大きな変化がみられ、器形と装飾のバリエーションが大幅に増加する。また、形成期中期に典型的であった刻線による区画とポストコクション彩色の組み合わせや、多彩色のプレコクションは、ほとんどみられなくなる。かわりに、器面が高度に研磨された土器（黒色、灰色、赤色、褐色）や焼成後に黒鉛が塗布された土器が確認されるようになる。さらに、形成期中期後半から現れるオレンジ地赤彩土器が増加するとともに、ロッカースタンプ文などの新たな装飾技法が出現する。そして、刻線や磨線、刺突文による意匠が増し、圏点文や重圏文が多く認められるようになる。そのうえ、図像表現が多様化して、塑像や貼付文と刻線の組み合わせによって、立体的な表現が施されるようになる。これに対し、形成期後期後半には、高度に研磨された土器が少なくなり、単純な幾何学文が多くなるなど、図像表現が変化する。

以上のように、形成期後期になると、土器の器形と装飾のバリエーションが増す。この時期の北部山地の神殿間における土器の類似性はこれまでにも言及され[Wester et al. 2000]、地域間交流の存在が示唆されてきた。とりわけ、クントゥル・ワシでは、還元焼成の磨研土器や鐙形ボトル、黒鉛の塗布や図像の立体的表現が増加するなど、形成期中期にペルー北部海岸でみられたクピスニケとの高い共通性が指摘される[Inokuchi 1998; 加藤・井口 1998; Onuki ed. 1995]。このような傾向は、パコパンパ複合やラ・グランハ複合でもみられ、北部山地の諸神殿がペルー北部海岸と強い結びつきを持ったことが想定される。高い共通性を示す土器、とくに灰色磨研土器やオレンジ地赤彩土器の胎土は極めて特徴的である。そのため、こうした土器が各地でみられることは、地域間交流を通じた土器製作やイデオロギーに関わる技術や情報だけではなく、製作地から各地の神殿へと土器そのものが搬入されたことが推測される。なお、製作地は明確ではないものの、灰色磨研土器は北部海岸、オレンジ地赤彩土器は北部山地にその分布の中心がある。しかしながら、北部海岸との距離がより離れたワカロマでは、上記の 3 遺跡でみられたような北部海岸との強い結びつきは認められない。また、パコパンパ複合では、帯状の赤色塗彩などエクアドル海岸部に展開したマチャリージャとの共通性も指摘されているが[Rosas and Shady 2005: 59]、これはあくまで赤色塗彩の使用といった一般的特徴における類似にとどまる。

最後に、ペルー北部山地の諸神殿とインガタンボとの関係について整理しておく。形成期中期の土器をみると、ペルー北部山地の諸神殿間で共通性が認められた土器は、インガタンボのポマワカ期出土土器との類似性も強い。ただし、ポマワカ期の土器資料数が少ないことに由来する可能性はあるものの、インガタンボにおける器形や装飾、とくに精製土器のバリエーションは、上記の諸神殿と比べて圧倒的に少ない。これは、インガタンボにおける土器を介したイデオロギーの操作が脆弱であった可能性を示唆するものである。そのうえ、形成期中期の前半と後半を分かつ指標とされた装飾技法に関しては、インガタンボでは確認されていない。さらに、インガタンボの壺形土器の中心的器形は短頚壺であり、無頚壺を中心とするペルー北部山地とは全く異なる状況がみられる。これらのことから、

インガタンボは北部山地の諸神殿と交流を有していたものの、その度合いは後述する極北部海岸や北部熱帯低地と比べて低かったと考えられる。

こうした状況は形成期後期に入ると変化する。器形や装飾のバリエーションの増加や、刻線を中心とした図像表現の多様化、還元焼成の磨研土器や黒鉛を塗布する土器の存在など、とくに精製土器において、インガタンボと北部山地の諸神殿の土器との類似性が極めて強くみられるようになるのである。しかし、インガタンボでは器形に無頚壺がほとんどみられない点や、多彩色やポストコクション彩色がこの時期においても中心的な装飾として利用される点など、北部山地との明確な差異も存在している。これらのことは、神殿建築にも認められたように、この時期のインガタンボ社会にとって、形成期中期までにみられた極北部海岸や北部熱帯低地の各社会との関係に加えて、イデオロギーと深く関わる北部山地との交流が、重要性を増すようになった結果であると考えられる。

8-2-2. ペルー北部海岸

ペルー北部海岸で比較対象となるのは、ワカ・ルシーア[Shimada et al. 1982]、プルレン[Alva 1988a]、モロ・デ・エテン [Elera 1986, 1997]である。また、ヘケテペケ川沿岸部のプエマペ[Elera 1998]と中流域のアマカス複合[Tellenbach 1986; 鶴見 2008a; Ulbert 1994]は、第 10 章で行うルート分析の範囲外ではあるが、他の北部海岸の形成期遺跡とは異なり、発掘にもとづいた堅固な編年が確立されているため、補足的にとりあげる。

ワンカバンバ期（形成期早期と形成期前期）に対応する遺跡としては、セロ・ベンタロンがあげられるが[Alva 2008; Alva Meneses 2010]、土器を含めた詳細なデータは現状では提示されていない。その一方、ヘケテペケ川沿岸部のプエマペと中流域のアマカス複合では、形成期前期の活動が明らかにされており、それぞれ前期プエマペ期、アマカス期の名が冠せられている。アマカス複合の土器の器形をみると、無頚壺と短頚壺に加えて、コンポジット鉢や外反鉢といった器形が報告されており、北部山地のワカロマの前期ワカロマ期やセロ・ブランコのラ・コンガ期との類似性がみてとれる[鶴見 2008a; Ulbert 1994]。また、装飾においても、帯状の貼付文と押圧文や刺突文の組み合わせなど、北部山地との共通性は高いが、櫛目文や刻線による幾何学文、刻線と刺突文との組み合わせなど、装飾技法はより多様である。プエマペの前期プエマペ期は、資料数は少ないものの、アマカス複合との類似性が非常に高く、器形と装飾はほぼ同じである。

形成期中期になると、北部山地の事例と同様に、北部海岸では土器の器形や装飾のバリエーションが増加する。

たとえば、ワカ・ルシーアでは、器種構成は基本的に北部山地と同じであるが、緻密な胎土から成る還元焼成の鐙形ボトルなどに代表されるクピスニケとよばれる土器の出土が顕著である。装飾に関しては、刻線で図像や幾何学文が描かれるほか、磨線、赤色や白色のスリップ塗布、または塗彩とそれらの組み合わせ、刻線と多彩色やポストコクション彩色、刺突文の組み合わせなどがみられる。また、オレンジ地赤彩土器や、磨研土器（灰色、

黒色、赤色、褐色）も確認される。なお、白色スリップと刻線の組み合わせには、北部山地のパコパンパ複合、刻線と多彩色の組み合わせには北部熱帯低地のバグア複合、オレンジ地赤彩には北部山地のワカロマやクントゥル・ワシとの類似性が示唆されている[Shimada et al. 1982: 146]。

プルレンに関しては、土器に関するデータが乏しく、詳細は不明であるが、ワカ・ルシーアと同様に刻線で図像や幾何学文が描かれた土器が報告されている。

これに対して、ヘケテペケ川中流域アマカス複合では、テンブラデーラ期になると器形や装飾のバリエーションが増す。具体的には、形成期前期の器種構成にボトルと鐙形ボトルや高杯が加わり、刻線や磨線による装飾も多様化していく。その一方、形成期前期の代表的な器形であったコンポジット鉢はあまりみられなくなる。なお、北部山地の事例で先述したように、刻線と多彩色、あるいはポストコクション彩色の組み合わせと、オレンジ地赤彩や灰色磨研の有無によって、形成期中期が前半と後半に細分されている。

ヘケテペケ川沿岸部に位置するプエマペでも、中期プエマペ期にはアマカス複合と同様の傾向がみられる。しかしながら、プエマペでは、装飾に圏点文がみられ、塑像や貼付文、刻線を組み合わせた立体的な図像表現が現れるようになる。また、還元焼成の磨研土器が土器の大半を占める点や、オレンジ地赤彩がみうけられず、ネガティブ技法的な装飾が存在するなどの相違点もみられる。さらに、新たな器形としてコップ形が出土する点は、プエマペに独自のものである。なお、鉢の口縁部が外側に鋭角に切れる口縁部形状の意匠がみられるが、これはワカ・ルシーアでも認められる。

以上のように、形成期中期には、北部海岸の社会間で土器の共通性がみられるようになり、地域間交流の存在が強く伺えるようになる。なかでも、アマカス複合とプエマペの土器は、同じヘケテペケ川流域にある北部山地のセロ・ブランコやクントゥル・ワシの土器との高い類似性も示すことから、沿岸部だけではなく、山地に存在した社会との強いつながりがあったと考えられる。また、白色スリップや刻線と多彩色の装飾などに目を向けると、ワカ・ルシーアや北部山地のパコパンパ複合、北部熱帯低地のバグア複合、そしてインガタンボとの間で共通性が認められる。さらに、プエマペでみられるコップ形の器形は、北部山地のパコパンパ複合とクントゥル・ワシ、北部熱帯低地のトメペンダでも出土している。したがって、この時期には、ペルー北部の広範囲にわたって、土器の交換や土器製作、もしくはイデオロギーに関わる技術や情報の交換を伴う地域間交流が存在していたことが想定される。ただし、プエマペでは分布の中心を北部山地とするオレンジ地赤彩が出土しない一方で、同じ北部海岸にあるワカ・ルシーアではオレンジ地赤彩が存在するなど、隣接した社会間においても土器に差異がみられる。また、プエマペでみられた六角形の幾何学文のなかに図像が描かれる装飾技法は、パコパンパ複合やワカロマとの高い共通性を示す。したがって、地域間交流は、単に地理的な隣接地域間で行われていたようなものではなく、各地の神殿を中心に、それぞれの社会において選択的に相手を選んで実施されていたと考えられる。

形成期後期になると、海岸部では神殿が減少する傾向にある[Onuki 1993]。このような状況のなかで、形成期後期の活動がみられるモロ・デ・エテンでは、無頚壺や短頚壺に加えて、外反鉢や外傾鉢、焙烙や鐙形ボトル、コップ形など形成期中期にすでに現れていた器形が引き続き利用され、口縁部の外切れも確認される。装飾に関しては、刻線による装飾や刻線とポストコクションの組み合わせなど、形成期中期に多用された技法がみられる。その一方で、磨研土器に刻線で図像や幾何学文が描かれたほか、圏点文や重圏文、ロッカースタンプ、塑像や貼付文と刻線を組み合わせた立体的な図像表現が認められる。また、土器表面を刻線で区画せずに直接彩色する多彩色の土器や、黒鉛が塗布された土器も現れる。コップ形は、形成期中期からペルー北部地域で確認されているが、モロ・デ・エテンで確認されたものは、器高と器幅の割合が形成期中期のそれとは異なる。この器形は、取っ手の有無という差異は存在するものの、インガタンボでみられた開口円筒鉢との類似を示す。また、刻線を有さずに多彩色が施された鉢に関しては、北部熱帯低地のバグア複合、エル・サラード期（形成期後期後半から形成期末期）の土器との類似性が指摘されているが[Elera 1986: 128-129]、時期的な関係を考慮すると、バグア II 期やペカ期との関連を考えた方がよいであろう。さらに、鉢の口縁部の一方だけが外切れし、もう一方は注口となっている片口の土器が報告されており、器形だけをみるとパコパンパ複合で出土した片口の黒色磨研土器との類似性がみられる[関 2010: 159]。なお、北部山地のクントゥル・ワシやパコパンパ複合の土器との共通性も指摘されるが、最も類似点が多いのは、同じ北部海岸のチョンゴヤペである[Elera 1986]。

アマカス複合のレチューサスでは、ロッカースタンプが施された鐙形ボトルが報告され、貼付文と刻線の組み合わせによる立体的な表現がみられる。その一方で、プエマペの後期プエマペ期には、立体的な表現がみられなくなり、刻線による幾何学文に変化する。また、口縁部の外切れを有する鉢や開口円筒鉢など、北部山地でみられる属性が確認される。プエマペのほかで開口円筒鉢が認められるのは、北部山地のパコパンパ複合（形成期中期と形成期後期）とクントゥル・ワシ(形成期後期)、そしてインガタンボ（インガタンボ期）だけである。

以上のように、形成期後期には、広範囲におよぶ地域間交流が存在したことは明らかである。ただし、各神殿における出土土器の多様性を考慮すると、この時期の地域間交流も形成期中期と同様、選択的に相手を選んで実施されていたことが示唆される。そして、交流を通じて、神殿間で土器の授受が行われると同時に、土器製作やイデオロギーに関わる技術や情報の交換が実施されたと考えられる。また、この時期のインガタンボでは、還元焼成による黒色、あるいは灰色磨研土器が現れはじめる。そして、装飾や器形のバリエーションが急増するとともに、インガタンボで一般的なものとは明らかに異なる胎土や装飾を有する土器がみられるようになる。これらのことは、前節で述べた北部山地の諸遺跡と同じく、インガタンボに北部海岸で展開した社会からの土器の搬入、もしくは北部海岸の社会との技術や情報の交換を含めた地域間交流が存在したことを示すものである。

最後に、ペルー北部海岸の諸神殿とインガタンボとの関係について整理しておく。北部山地との関係にもみられたように、形成期中期においては、インガタンボと北部海岸の諸神殿との交流は、極北部海岸や北部熱帯低地と比べて密接ではなかったと考えられる。しかし、その状況は形成期後期に入って大きく変化し、インガタンボ社会にとって北部海岸の諸社会との交流が、次第に重要になっていくのである。

8-2-3. ペルー極北部海岸、エクアドル南部山地

ペルー極北部海岸、あるいはエクアドルの南部地域では、ペルー北部山地や北部海岸と比べて、発掘調査が実施された遺跡は少なく、これまでに明確な編年は確立されていない。ここでは、限られた発掘調査の事例に遺跡踏査の報告を加え、データを補っていく。比較対象とするのは、ペルー極北部海岸のセロ・ニャニャニケ[Guffroy 1989, 1992, 2008; Kaulicke 1998]、トゥンベス川流域のペチチェとガルバンサル[Izumi and Terada 1966]、エクアドル南部山地のカタマヨ複合[Guffroy 1981, 2004]であり、これにピウラ川とチラ川流域遺跡踏査のデータ[Guffroy et al. 1989; Hocquenghem and Kaulicke 1995; Lanning 1963; Ravines 1988, 2008]を加える。

エクアドルでペルーに先立って土器の利用が開始されたことは、第 2 章で指摘した通りである。ワンカバンバ期前半（ワンカバンバ I-II 期）に相当する形成期早期にはすでに、エクアドル南部海岸のラ・エメレンシアーナ[Staller 2001]、南部山地のカタマヨ複合やチャリュアバンバ[Grieder 2009a, 2009b]で、土器の利用が報告されている。

カタマヨ複合のカタマヨ A 期は、形成期早期から形成期前期にわたる時期である。この時期の主な器形は、胴部が球形の短頚壺で、外反鉢も確認されている。装飾に関しては、刻線による平行線の組み合わせや刻線と刺突文の組み合わせ、赤色塗彩や刻線内に赤色と白色顔料を施した事例が認められる。カタマヨの土器は、同時期のエクアドル海岸部に展開したバルディビアや、南部山地のセロ・ナリオ、チャリュアバンバの土器とは明確に異なり、器種構成も含めて独自性が強い[Guffroy 2008: 898]。ただし、刻線と刺突文の組み合わせなど、エクアドル南部海岸のラ・エメレンシアーナやペルー極北部海岸のガルバンサルのものと類似する装飾もみうけられる。また、カタマヨ A 期は、ワンカバンバ期後半（ワンカバンバ III-IV 期）に相当する形成期前期の初頭まで続くが、カタマヨ複合はその後一時的に放棄されたようで、再び活動がみられるのは形成期中期になってからである。

形成期前期になると、ペルーで土器の利用がはじまる。その最古の事例の一つが、ペルー極北部海岸のトゥンベス川流域とピウラ川・チラ川沿岸部である。形成期前期に相当するトゥンベス川流域のガルバンサルのサン・フアン期には、焼成や仕上げの粗い短頚壺がみられ、装飾では刻線による平行線や赤色塗彩、帯状貼付文と押圧文の組み合わせが認められる。トゥンベス川流域の土器は、個々の属性において基本的に同時期のペルーの土器よりもエクアドルの土器と類似しているなど、全体として極めて独自性の強い土器である[Izumi and Terada 1966: 77]。このことから、当該地域の土器製作は、バルディビアやラ・

エメレンシアーナといったエクアドル南部海岸との交流のなかで成立したものと考えられる。

ピウラ川とチラ川沿岸部のパイタ A 期とパイタ B 期には、この時期のペルーで[1]代表的な器形であるコンポジット鉢のように、胴部が算盤形に屈曲した短頚壺が報告されている。装飾では、刻線による平行線や帯状の貼付文と押圧文の組み合わせに加えて、赤色のスリップ塗布や顔料塗彩が確認される。また、パイタ B 期には、刻線による装飾が多様化する。パイタ A 期とパイタ B 期（ラニングのパイタ 1 期）の土器の類例は、ペルーではなく、エクアドル南部山地のセロ・ナリオや海岸部に展開したマチャリージャに認められる[Lanning 1963]。胎土が乾ききらないうちにひかれた刻線の平行線など、先述のサン・フアン期との類似性も指摘できるのは、そのためである。

形成期中期になると、ペルー極北部海岸のピウラ川中流域[2]でセロ・ニャニャニケが築かれる。なお、この中流域では現在までワンカバンバ期に対応する遺跡は報告されていない。

セロ・ニャニャニケでは、胎土や装飾などの差異から、発掘者によって四つのグループに土器が分類されている。そのうちの二つは在地で製作されたもので、残りはピウラ川・チラ川沿岸部に特徴的なベージュや褐色の器面に赤色塗彩が施されたパイタ様式と、他地域からの搬入品と想定される[Guffroy 1989]。形成期中期に対応するニャニャニケ期[3]の器形は、短頚壺といった有頚壺と、半球鉢や開口半球鉢などの鉢、コップ形とボトルから構成される。最も出土量が多い短頚壺のなかには、胴部が算盤状に張り出したコンポジット鉢のような形状をとるようなものもあり、既述のパイタ様式、後述するトゥンベス川流域のガルバンサルやペチチェの土器との類似性が指摘できる。装飾は、赤色や白色のスリップ塗布と顔料塗彩に加え、赤色スリップの上に白色や灰色、または明るい赤色顔料を塗彩するものや、多彩色のプレコクション、刻線内に顔料が充填されたポストコクション彩色が報告されている。また、多彩色のプレコクションには、刻線による区画を有するものと、刻線を伴わず器壁に直接彩色する二つのパターンがみられる。刻線による装飾も多様であり、赤色や褐色の磨研土器に、複雑な図像、もしくは格子や鎖状、櫛目文などの幾何学文が描かれる。器種構成をみると、短頚壺が大半を占め、無頚壺はみうけられない。

ピウラ川とチラ川沿岸部では、ラニング編年のパイタ C 期とパイタ D 期、リチャードソ

---

[1]ラニングによれば、チラ川・ピウラ川の形成期は、ネグリート期、パイタ期（A-D 期）の 5 時期からなる [Lanning 1963]。しかし、近年の調査成果をうけて、リチャードソンは、資料数の少なさからネグリート期の存在を否定し、新たにパイタ期（1-3 期）を設定した[Richardson et al. 1990]。ただし、ラニングの編年との関係については、明確ではない[Hocquenghem and Kaulicke 1995: 234]。なお、上記の二つの編年は、いずれも十分な発掘調査を根拠とするものではないため、今後の検討が不可欠である。以下、本論では、上記の問題を考慮し、土器に関する記述や図面がより豊富なラニング論文を中心にすえる。

[2]沿岸部との対比から、中流域以上を「アルト（高い）・ピウラ」とも称する。

[3]ホッケンヘムは、ギュフロワによるセロ・ニャニャニケのニャニャニケ期（形成期中期）とパネシージョ期（形成期後期）の編年区分が明確ではないことを批判的に指摘している[Hocquenghem 1990]。

ン編年のパイタ 3 期が、形成期中期から形成期後期前半に対応するものとされる。しかし、セロ・ニャニャニケのニャニャニケ期には、パイタ C 期とパイタ D 期の土器が同時に出土することが指摘されている[Hocquenghem and Kaulicke 1995: 234]。したがって、両者の明確な区分は困難であるが、形成期後期前半に相当するパネシージョ期にはパイタ D の土器が中心的となるようである。この時期の器形の特徴は、鉢が増加し、口縁部の外切れが認められることである。また、装飾では、パイタ A 期とパイタ B 期に特徴的であった刻線による装飾に加えて、赤色塗彩の土器が増加し、黒色塗彩やポストコクション彩色もみられるようになる。さらに、パイタ D 期には、器形にボトルや橋付注口が加わるとともに、装飾においてもネガティブ技法や塑像が確認されるようになる。そのうえ、顕著に表れる赤色塗彩にはカタマヨなどのエクアドル南部山地との類似性が、刻線による装飾にはペルー北部地域との共通性が認められる[Lannning 1963: 208]。このようにして、周辺に存在する様々な地域から、多様な装飾や器形がピウラへもたらされたと考えられる。

以上のように、セロ・ニャニャニケやピウラ川・チラ川沿岸部では無頚壺がみられず、短頚壺が壺形土器の出土の中心となっている。一般的にペルーでは無頸壺、エクアドルでは有頸壺の出土量が多いことが報告される[DeBoer 2003]。したがって、無頚壺を主様な器種とするペルー北部海岸や北部山地の事例とは大きく異なっているといえる。こうしたペルー極北部海岸やエクアドル南部山地で認められる、壺形土器における短頚壺の優位性（短頚壺の出土割合＞無頚壺の出土割合）は、インガンタンボや後述する北部熱帯低地においても確認される地域的特徴である。これは、当該地域間における交流の存在を明確に示すものである。前節で述べた神殿建築に認められる類似性や、後述する海水生種の貝の流通も考慮すると、単に土器製作に関する情報がやりとりされた以上に、直接的な人の移動を含む密接な交流が存在していたと考えられる。また、土器の器形に共通性がみられることから、とくに土器導入期において土器の用途が類似していた可能性もある。

上記の短頚壺の優位性が認められる分布傾向は、パイタ様式の土器の分布範囲からもみることが可能であり、ペルー極北部海岸に加えて、エクアドル南部のセロ・ナリオやマチャリージャ、カタマヨ複合などで報告されている。しかしながら、刻線による装飾や白色塗彩と刻線との組み合わせ、もしくは刻線とプレコクションの多彩色との組み合わせや、赤色と白色塗彩の組み合わせなどは、ペルー極北部海岸以南に展開した社会との地域間交流の存在を示唆する。そのなかでもとくに、ペルー北部熱帯低地のバグア複合やトメペンダ、インガタンボ、北部山地のパコパンパ複合やクントゥル・ワシ、北部海岸のワカ・ルシーアなどの土器との類似性が強く認められる。なお、形成期中期において、刻線による区画を伴わない多彩色の事例が報告されるのは、セロ・ニャニャニケ以外ではペルー極北部海岸のペチチェと北部熱帯低地のバグア複合だけである。これらのことからも、先述の短頚壺の優位性にみられたように、極北部海岸と北部熱帯低地に存在した社会間の緊密な関係が示される。

このような状況のなかで、形成期中期のエクアドル南部山地では、器形や装飾が多様化

する。具体的には、器形では短頚壺、外傾鉢、外反鉢、ボトルなどが確認され、装飾では平行線や鎖状などの幾何学文、赤色塗彩、刻線とポストコクション、貼付文と押圧文、塑像などが認められるようになる。カタマヨ C 期のカタマヨ複合では、ペルー北部地域やエクアドル南部海岸との類似点は確かにみられるものの、それにも増してエクアドル南部山地のセロ・ナリオやチャリュアバンバとの高い共通性が示される。そして、セロ・ニャニャニケでもみられたように、周辺地域の遺跡間で器形や装飾技法に共通点が多くみうけられるようになる一方で、各地の土器には多様性も存在することが指摘される [Temme 2002: 133]。

以上のことをふまえて、セロ・ニャニャニケでは形成期中期に周辺地域と類似した土器が多くみられることから、ギュフロワはここをルートの結節点であると位置づけた[Guffroy 1989]。この時期のセロ・ニャニャニケでは、ラクダ科動物の出土がみられるようになるため、東西南北方面へ地域間交流が促進されたと考えたのである。ただし、ネガティブ装飾やパイタ様式の有無、多彩色や赤色と白色塗彩との組み合わせにおける差異などからみて、地域間交流には地域的な偏りがあったと考えられる。つまり、土器製作やイデオロギーと関わる技術や情報に関して、より積極的に交流を行った地域（北部熱帯低地）とそうではない地域が存在したことが想定されるのである。

その一方で、形成期後期になると、セロ・ニャニャニケの土器には変化がみられるようになる。それまでにみられた図像表現の変化に加えて、より南方に位置する社会からの搬入土器が増加するのである[Guffroy 1989: 186, 2008: 895]。セロ・ニャニャニケでは、パネシージョ期とラ・エンカンターダ期の 2 時期が形成期後期に対応するとされ、それぞれが形成期後期前半と後半に位置づけられるものと考えられる。器形にはニャニャニケ期からの変化はとくに認められないが、口縁部の外切れが確認されるようになる。また、装飾は、刻線による重圏文がみられるようになるなど多様化し、六角形の外枠のなかに図像や幾何学文が描かれるようになる。六角形と図像の組み合わせは、北部海岸のプエマペや北部山地のパコパンパ複合、ワカロマでもみうけられるが、後者ではジャガーなどの図像が描かれるという差異がある。この六角形と図像との組み合わせは、北部海岸のチョンゴヤペや北部山地のクントゥル・ワシ、極北部海岸のロマ・マカンチェの金製品にみられる図像表現でもある。

さらにギュフロワは、セロ・ニャニャニケにみられるペルー北部からの搬入品と考えられる土器を、北部海岸のランバイェケやサーニャ川流域辺りの集団によって搬入されたものと捉えた[Guffroy 1992:104]。その一方、カウリケは上記の土器を搬入品とする根拠が乏しいことを指摘し、ピウラ川流域以南、とくに北部海岸の影響を受けて在地で製作されたものとした[Kaulicke 1998: 31]。この問題については、胎土分析を含めた今後の分析の精緻化と検証が必要である。しかし、そのなかで重要なことは、先述したパネシージョ期の土器にみられるペルー北部との高い類似性である。なぜならば、これはインガタンボのインガタンボ期にもみられた特徴であり、ペルー極北部の広範な地域に軌を同じくして、

北部海岸、および北部山地との共通性が現れるようになることを意味するためである。つまり、この時期には、ペルー北部一帯において、地域間交流が活性化したことが想定される。そして、土器の製作やイデオロギーに関わる技術や情報だけでなく、土器そのものも交流を通じて授受されたと考えられる。なお、セロ・ニャニャニケとインガタンボの共通性は、ペルー北部では徐々にみられなくなるプレコクションの多彩色土器が、形成期後期においても継続的に、かつ主要な土器として利用される点からも認められる。また、この共通性は後述するペルー北部熱帯低地のバグア複合との間にもみられる。したがって、それ以前からみられたように、この時期においても、極北部海岸、北部熱帯低地の諸社会とインガタンボとの間には、強固な地域間関係が存続していたと考えられる。

形成期後期におけるピウラ川・チラ川沿岸部では、パイタ D 期の土器が主流となる。しかし、中流域のセロ・ニャニャニケのパネシージョ期には、パイタ様式の土器がみられるものの[Guffroy 1989, 1992, 2008; Kaulicke 1998]、沿岸部ではセロ・ニャニャニケと類似した土器の出土はとくに認められない[Hocquenghem and Kaulicke 1995; Ravines 1988]。また、セロ・ニャニャニケで確認されるプレコクションの多彩色は、沿岸部では確認されない一方で、沿岸部でみられるグラファイト塗彩などもセロ・ニャニャニケではみられない。

続く形成期後期後半にあたるセロ・ニャニャニケのラ・エンカンターダ期になると、それ以前にみられていた図像が消失し、装飾にネガティブ技法が加わるなどの変化が表れる。ピウラ川・チラ川沿岸部のセチューラ A 期でも土器に変化がみられ、赤色スリップの上に白色塗彩が施された土器やトリコロールと称される三色に塗り分けられた土器、ネガティブ技法を用いて装飾された土器が多くみられるようになる。こうしたネガティブ技法や三色に塗り分けられた多彩色土器は、エクアドル起源であると考えられている[Lanning 1963: 209]。

このように、ピウラ川・チラ川沿岸部とピウラ川中流域では、形成期後期に土器が変化する。こうした変化は、トゥンベス川流域ペチチェのペチチェ期でもみられる。先述したように、トゥンベス川流域の土器は、基本的にエクアドルとの共通性を示す。しかし、ペチチェ期の土器には、エクアドル海岸部のチョレーラと山地のセロ・ナリオとの強い類似性だけでなく、部分的にペルー北部地域の影響をみることができる[Izumi and Terada 1966: 85]。器形としては、無頚壺と短頚壺などの壺や、外形鉢、外反鉢などの鉢に加え、高杯やコップ形土器、ボトルの注口部に取っ手がついたような橋付注口が確認される。装飾では、赤色スリップの上に白色塗彩が施されるものや、ポストコクション彩色、刻線でジャガー的な図像や圏点文、あるいは重圏点文などの幾何学文が描かれるものがみられる。こうした土器装飾は、ペルー北部海岸、もしくは北部山地に展開した社会との地域間交流の存在を示唆するものである。そのなかでも、刻線による図像を伴う土器は、セロ・ニャニャニケで在地製作されたといわれる土器との類似性を示す。しかし、ネガティブ技法の存在などをみると、ペチチェの土器は、エクアドルとペルーの折衷的要素を有する独自性

の強いものであると考えられる。

また、エクアドル南部山地カタマヨ複合（カタマヨ D 期）においても、土器には大きな変化がみられる。そして、これまで出土量の大半を占めた短頚壺に加えて、無頚壺が出現するようになると同時に、半球鉢や鐙形ボトルも確認されるようになる。装飾では、刻線による図像表現、赤色と黒色の塗り分け、刻線で区画されたプレコクションの多彩色、刻線内のポストコクション彩色や塑像による立体的表現などがみうけられる。無頚壺は、分布や利用の中心がペルー北部以南にあるが[DeBoer 2003: 305-308]、ペルー極北部海岸や北部熱帯低地ではあまり確認されないため、ペルー北部以南に特徴的な土器であるといえる。さらに、多彩色や刻線による図像表現、ポストコクション彩色の存在などから、ペルー北部、とくに北部山地のパコパンパ複合との類似性が指摘される [Guffroy 2008: 896]。ただし、プレコクションの多彩色やポストコクション彩色は、形成期後期には、ペルー北部熱帯低地のバグア複合やインガタンボ、ペルー極北部海岸のセロ・ニャニャニケを除いてほとんど利用されなくなる。したがって、カタマヨ D 期の事例と相関関係をもつのは、パコパンパ複合よりもむしろバグア複合やインガタンボ、セロ・ニャニャニケである。これを支持するように、インガタンボでも、この時期にはじめて無頚壺がみられるようになる。なお、調査者であるギュフロワは、刻線による図像表現などから、カタマヨ D 期とは、ペルー北部に展開した社会の影響がみられるようになる時期であり、「チャビン」の影響下にあった時期と論じている[Guffroy 2004]。さらに、器形に関しては、ペルー北部の熱帯森林地帯にあるマナチャキとの類似性も指摘される[Church 1996: 405]。

エクアドル南部山地のチャリュアバンバでは、還元焼成による黒色磨研土器や、塑像と刻線を組み合わせた装飾などが確認されており [Gomis 1999; Hocquenghem et al. 1993]、ペルー北部、とくに北部海岸からの搬入品とされている。しかし、エル・デスカンソでは、鐙形ボトルが報告されているものの[Collier and Murra 1943]、鐙形と刻線の組み合わせといった基礎的な装飾技法以外は、ペルー北部の鐙形ボトルとの類似性は低い。このことから、交流は存在するものの、搬入品ではなく、ペルー北部の影響を受けて在地で製作されたものであると考えられる。

ペルー極北部海岸のピウラ川中流域では、形成期末期に相当するチャピカ期に入ると、赤色塗彩の有頚壺に加えて、無頚壺が現れるようになり、エクアドル南部のカタマヨ複合との共通性を強く示すようになる。同様に、ピウラ川・チラ川沿岸部のセチューラ B 期でも無頚壺が確認されるようになるが、それ以上に白色と桃色のスリップを使用した装飾が目立ち、形成期後期以前とは明らかに異なる土器が主流となっていく。このような現象は、次項で述べる北部熱帯低地バグア複合のエル・サラード期にも認められる。

最後に、ペルー極北部海岸、ならびにエクアドル南部山地の諸遺跡とインガタンボとの関係について簡潔に整理しておく。インガタンボで土器が利用されはじめるポマワカ期(形成期中期）より、とくに極北部海岸との間に緊密な結びつきが存在したことが明らかである。その結びつきは精製土器だけでなく、粗製の壺形土器においても認められる。こうし

た状況は、インガタンボ期（形成期後期）に入っても存続するが、先述したようにインガタンボでは、より南に位置するペルー北部地域との交流が徐々に重要性を帯びていく。

8-2-4. ペルー北部熱帯低地、エクアドル南部熱帯低地

ペルー北部熱帯低地の事例として取り上げるのは、バグア複合[Shady 1973, 1974, 1987, 2002; Shady and Rosas 1979]、セレサルとミチナル[Miasta 1979]、トメペンダ[Olivera 1998, 2008]である。そのなかでも、バグア複合は北部熱帯低地の指標となる遺跡である。しかし、実際には小規模な発掘調査が行われただけであり、放射性炭素年代測定も不足しているため、編年に関して検討の余地は大きい。

当該地域において、ワンカバンバ期（形成期早期と形成期前期）に相当する時期の情報は限られている。バグア複合のモレリーヤ期がこれに対応するとされるが、土器資料は極めて少なく、その位置づけは不明瞭である[Shady 1987: 464, 2002: 205]。器形に関しては鉢と短頚壺、装飾では櫛目文や口縁部の帯状貼付文と押圧文の組み合わせ、刻線と刺突文、あるいは磨線との組み合わせが報告されている。モレリーヤ期の土器は、ペルー北部山地のパンダンチェやワカロマ、ペルー北部ヘケテペケ川中流域のモンテグランデだけでなく、エクアドルのバルディビアとの類似性も示唆される[Shady 1987: 474]。このことは、上記の諸地域において、土器の導入期に、土器製作技術に関する情報が共有されていたことを想定させる。そして、それが製作に関わる人々の移動を含めた交流の結果であった可能性は否定できない。しかしながら、インガタンボやペルー北部山地のパコパンパ複合などといった近隣遺跡の発掘調査では、モレリーヤ期のものとされる属性の一部が形成期中期になってから確認されるため、議論を発展させるためには編年の精緻化が必要である。

なお、バグア複合では、形成期中期に対応するバグアⅠ期に入って状況が大きく変化する。土器資料数に加えて、器形や装飾のバリエーションが増加するのである。中心的な器形は有頚壺で、なかには口縁部形状に折り返しの意匠が確認されるものもある。装飾の大半は、刻線で図像や幾何学文が描かれたものである。ほかにも、刻線が鎖状に連続する事例や、焼成前に顔料を塗彩する多彩色と刻線の組み合わせ、赤色や白色スリップの塗布、もしくは赤色、白色、黒色顔料を用いた装飾などがみうけられる。さらに、刻線によって区画することなしに、土器表面に多彩色の顔料が塗彩された土器も報告される。総じて、バグアⅠ期の土器は、ペルー北部山地だけでなく、ペルー中央山地から熱帯低地へと下る途中に位置するコトシュのワイラヒルカ期や、熱帯低地のトゥティシュカイニョ、エクアドル南部山地のセロ・ナリオとの類似性が指摘されている[Shady 1987: 480]。

続くバグアII期になると、有頚壺のバリエーションが増加するとともに、鐙形ボトルが確認されるようになる。装飾に関しては、バグアⅠ期から連続して、白色、赤色、あるいは黒色の塗彩や、白色や赤色スリップの塗布、プレコクションの多彩色（刻線あり、刻線なし）がみられる。その一方で、刻線による文様が多様化するとともに、刻線と刺突文との組み合わせなども認められるようになる。また新たに、刻線で区画された内部を塗彩す

るか、もしくは刻線自体の内部を塗彩するポストコクション彩色が使われはじめる。バグア II 期は紀元前 800-600 年という年代が与えられており、形成期後期前半（インガタンボのインガタンボ期）に相当する。そして、白色塗布や刻線による装飾などにおいて、バグア複合とインガタンボの土器には高い共通性がみられる。先述したように、北部熱帯低地や極北部海岸の諸遺跡、そしてインガタンボの間には、土器に多くの共通性が認められることから、緊密な地域間関係が存在したことが示唆されている。これに加えて、北部熱帯低地の諸遺跡は、パコパンパ複合をはじめとするペルー北部山地の諸遺跡とも多くの共通性を有しているため、当該地域間においては、交流を通じて土器製作やイデオロギーに関わる技術や情報の交換が行われていたと考えられる。なお、シャディとロサス論文では、バグア期のものとして無頚壺が少数報告されているが [Shady and Rosas 1979]、バグア I 期とバグア II 期のどちらに属するかは不明である。なお、調査者であるシャディも指摘するように、バグア II 期の土器の装飾には、形成期中期に対応するコトシュのコトシュ・コトシュ期や[Shady 1987: 481]、ペルー北部山地パコパンパ複合のパコパンパ I 期、ペルー極北部海岸セロ・ニャニャニケのニャニャニケ期[Shady 2002: 208]との類似性も強くみられる。このような状況は、インガタンボにもみられ、ポマワカ期にみられた土器特徴の多くが、インガタンボ期にも引き続き認められる。

同じく形成期後期に相当する時期であるラ・ペカ期になると、バグア複合では再び土器に大きな変化がみられ、ペルー北部地域との共通性が高くなる [Shady and Rosas 1979: 470]。とくに、パコパンパ複合のパコパンパ II 期、セロ・ニャニャニケのパネシージョ期の土器との類似性が指摘されており、インガタンボのインガタンボ期との関係が伺える。土器の装飾に関しては、インガタンボでも確認された多彩色やポストコクション、白色や赤色塗布と塗彩に加えて、白色塗布と黒色、赤色塗彩の組み合わせが確認される。また、詳細は不明であるがベージュや褐色地に赤色塗彩が施された土器も報告されており、インガタンボ期で未分類とした土器との類似性が指摘できる。また、口縁部の外切れといった口縁部形状の意匠も共通する。この時期のバグア複合では、前時期と同様に、ペルー北部のなかでも、とくにインガタンボやセロ・ニャニャニケと土器装飾、および器形の細部にいたる共通性がみられる。ただし、インガタンボで顕著にみられたような北部海岸や北部山地からの土器特徴の流入は、それほどみられず、土器には強い地域的独自性がみられる。

続くエル・サラード期には、注口部に取っ手のようなものがついた橋付の注口を有する土器や焙烙などが出現する。装飾に関しては、プレコクションの多彩色やポストコクションなど前時期との連続がみられる一方で、圏点文や円文、あるいはネガティブ技法的装飾も加わる。また、エル・サラード期の土器は、ペルー極北部海岸のペチチェやパイタ D 期の土器との共通性が高いとされる[Shady 2002]。確かに装飾などの諸属性には、インガタンボのインガタンボ期や、ペルー北部地域で形成期後期後半とされるクントゥル・ワシのコパ期との共通性も認識されるが、土器自体の独自性は極めて強い。これらのことをふまえると、エル・サラード期とは形成期後期から形成期末期におよぶ時期であると考えられ

る。しかし、ペルー北部山地では、形成期後期と形成期末期との土器特徴に明白な差がある。そのため、北部熱帯低地にみられた北部山地との土器の差異が、地域差を示すのか、もしくは土器編年研究の不十分さに由来するのかは、今後の検討が必要である。

北部熱帯低地では、バグア複合以外にセレサル、ミチナル、トメペンダといった遺跡が存在する。これらの遺跡のデータは極めて限定的であるが、出土遺物の図面や写真などから、セレサルとミチナルは形成期中期と形成期後期に、トメペンダは形成期中期に属するものとみられる。これらの 3 遺跡の土器は、既述のバグア複合の土器との類似性が非常に高く、基本的な特徴は同じである。しかし、セレサルとミチナルでは、刻線による波状や鎖状の装飾、口縁部の押圧文や刻みが特徴的である。また、海水生種の貝の存在も報告されている[Miasta 1979]。残念ながら、セレサルとミチナルでは、建築に対応して時期決定が行われたわけではないうえに、地層ごとに土器のタイプ別構成が示されているだけであるため、時期ごとの土器の変化を考察することは困難である。

トメペンダでは、刻線と多彩色の組み合わせや、刻線による鎖状や雷文などの多様で複雑な装飾を有する土器が確認されている。さらに器形も特徴的で、注口部形状が特異な鐙形ボトルなど、他に類例をみない独自性の強いものや、北部海岸と北部山地でみられたコップ形がみうけられる。調査者であるオリベーラは、より東側に存在するアマゾン低地の土器や上記のバグア複合バグア期の土器との共通性を指摘しているが[Olivera 1998: 111]、刻線で複雑な幾何学文が描かれる点などは、ペルー極北部海岸のセロ・ニャニャニケ[Guffroy 1989,1992; Guffroy et al. 1989, Kaulicke 1998] との類似性が強い。

なお、チンチペ川流域のワユルコでは、黒色磨研土器が報告されており[Lathrap 1970]、形成期後期対応と考えられている。この土器には形成期中期の特徴も認められるが、データが乏しく、編年への位置づけは困難である。ただし、バグア複合やインガタンボにも認められたように、形成期中期の土器特徴が形成期後期まで続くことが、北部熱帯低地の地域的特徴である可能性は指摘しておく。

また、ワンカバンバ川周辺地域のみを対象とした本論における土器の比較検討では除いているが、ペルー北部熱帯森林地帯に位置するマナチャキでは、形成期前期から出土土器にペルー北部山地や北部熱帯低地の土器との類似性がみられ、地域間交流の存在が指摘されている[Church 1996; Church and Hagen 2008]。とりわけ形成期中期末（紀元前 900 年頃）には、エクアドル南部やより東側のアマゾンの熱帯低地との関係が強化されるという。以上のデータを総合的に解釈するならば、北部熱帯低地はペルー北部にとって、より北方、あるいは東方の社会との地域間交流の要衝であり、土器や熱帯を原産とする物資の導入経路の一つであったと考えられる。

最後に、ペルー北部熱帯低地、ならびにエクアドル南部熱帯低地の諸遺跡とインガタンボとの関係について簡潔に整理しておく。前項では、形成期中期より、インガタンボと極北部海岸との間に緊密な結びつきが存在したことを指摘したが、このような密接な地域間関係は、インガタンボと北部熱帯低地の諸遺跡との間にも認められる。

8-2-5. インガタンボにおける土器製作

第 4 章では神殿における建設活動と儀礼について、第 6 章では神殿における工芸品製作について取り上げてきた。先行研究を鑑みると、本節で分析の対象としてきた土器の製作活動もまた、神殿を中心として取り組まれた活動の一つであったと考えられる。そこで、本項では、前項までの土器の比較から明らかとなったインガタンボ出土土器の独自性についての考察をふまえて、インガタンボにおける土器製作と土器の果たした役割について論じていく。

報告例は少ないものの、多くの研究者が神殿、もしくはその周囲で神殿に関わる活動の一部として、土器が製作されたことを想定しており、製作址の存在が指摘される事例もある[Shimada et al. 1994]。鶴見は、そこから一歩ふみ込んだ議論を展開し、神殿の建設と在地での土器製作の開始を結びつけて、社会変化を論じた[鶴見 2008a]。鶴見によれば、他の地域に比べて、ヘケテペケ川流域アマカス平原における神殿の出現時期は遅く、在地での土器製作の開始と同時であるという。ワンカバンバ川流域の場合、インガタンボで明らかとなったように、小規模の神殿（小基壇）建設は、先土器期である形成期早期よりはじまる。特筆すべきは、その状態が長期間継続することである。つまり、周辺地域では、形成期前期以降、次第に大規模化していく神殿を中心に土器製作が展開されるなか、インガタンボでは土器を利用せずに、小規模の神殿が築かれていた時期が続くのである。そのため、他地域のように、神殿の建設活動と在地での土器製作が相互に関連しながら、急激に社会が展開していくような状況は、インガタンボのワンカバンバ期には認められない。

一般的に、土器の役割としては、その利用によって煮炊きが可能となり、食材の加熱処理が行われて摂取方法が変化することや、食材を柔らかくすることを通じて食生活（とくに老人や幼児の）が改善されること [大貫 1995: 103; 鶴見 2008a.: 231-232]、あるいは様々な物資の貯蔵や長距離運搬が可能となったことなどが指摘される[Church 1996]。また、土器が周辺地域との交換財として利用されることなども、古くから指摘される議論の一つである[Druc 2004]。では、インガタンボ、もしくはワンカバンバ川流域社会において、長期間にわたって土器が利用されなかった状況や、周辺地域社会との間で土器の導入時期に差が存在することは、何を意味するのであろうか。

インガタンボの土器導入時（形成期中期：ポマワカⅠ期）には、日用土器と考えられるようなつくりの粗い、煮炊きや貯蔵に適した壺と鉢が出土土器の大半を占める。そのため、土器の導入により、前章で述べたマニオクの調理方法の変化などが起こり、食生活が改善された可能性はある。なお、土器と器形、あるいは器種構成において、インガタンボと高い類似性がみられるのは、ペルー極北部海岸中流域や北部熱帯低地の事例である。単純な類推は避ける必要があるが、土器特徴から考察すると、ワンカバンバ川流域社会における土器の利用開始は、比較的類似した生態環境を有するワンカバンバ川流域以北、もしくは以東の社会との関係に由来するものと考えられる。なぜならば、土器の器形は、土器の使用法と関連する属性であり、両地域で食生活に関わる土器の用途に共通性が存在した可能

性が示唆されるためである。こうした状況のなかで注目すべきは、インガタンボにおいては、少数ではあるが、土器の導入時から日用土器に加えて、刻線や彩色などの装飾が施されたつくりの良い鉢やボトルが認められることである。このことから、ワンカバンバ川流域社会では、土器製作の開始期より、煮炊きにとどまらず、土器の可塑性を利用した象徴性の付与が重視されていたと考えられる。そして、これを支持するかのように、インガタンボでは土器の利用が開始されるのと軌を同じくして、神殿の建設活動が急激に活発化し、神殿の空間構造が複雑化していくのである。

これに対して、極北部海岸のピウラ川、チラ川流域[Lanning 1963]や北部山地のパコパンパ複合[Kaulicke 1975, 2005b]では、ワンカバンバ川流域における土器の導入に先立ち、形成期前期（紀元前 1500 年頃）から土器が利用されている。そして、時が経るとともに、つくりの粗い、煮炊きや貯蔵に適した壺と鉢から、徐々に象徴性が付与された土器が増加していくという現象がみられる。出土する精製土器の装飾、とくにその図像表現などを考慮すると、こうした変化は、単に土器の製作技術が向上したというだけでなく、土器という媒体に象徴性を付与することが重視された結果であると考えられる。つまり、土器の象徴性が増していくことと、神殿の建設活動の活性化が漸次的に進行していくのである。

このような状況を鑑みると、ワンカバンバ川流域社会における土器の利用開始とは、年代的に大きく先行する周辺地域から土器が搬入されたことに加えて、製作技術やイデオロギーに関わる情報の伝達が契機となったものと考えられる。また、土器の導入時より、日用土器だけでなく、精製土器も出現し、器形や装飾の面で周辺地域と多くの共通性が認められるため、周辺地域からインガタンボへと土器製作に直接関与した人々の移動があったことが推測される。ただし、インガタンボでは、ワンカバンバ川流域の在地のものと想定される褐色系や赤色系の胎土を利用した土器が出土量の大半を占める[1]。また、インガタンボのポマワカ期の土器には、土器の器種構成ではペルー極北部海岸と北部熱帯低地、装飾面では上記の 2 地域に加えて北部山地との間にも高い共通性がみられながら、細部においては確かな独自性が存在する。したがって、他地域より製作技法がもたらされたあとで、その情報や技術をもとにして流域社会で独自に土器製作が行われたことが推測される。こうした土器にみられる独自性は、建築の分析を通じても示唆されたように、インガタンボ社会が、他の神殿を有する社会と交流を持ちながらもそれらとの差異を打ち出し、交流を通じてもたらされた様々な情報やイデオロギーを独自に解釈して、取り込んでいった結果であると考えられる。

なお、インガタンボでは、インガタンボ期になるとポマワカ期にみられた上記の諸状況に変化が表れる。この時期には、刻線や彩色など装飾が施されたつくりの良い鉢やボトルが大量に出土するようになり、装飾や器形のバリエーションも大幅に増加するのである。ただし、出土量の大半を占める日用土器は、ポマワカ期と同様に極北部海岸や北部熱帯低

[1]第 5 章で述べたように、肉眼やルーペを用いた観察による。2012 年より蛍光 X 線を用いた胎土分析を実施している。

地の土器との共通性が高い。その一方、精製土器には、器形や装飾において、とくに北部熱帯低地と北部海岸、北部山地との強い類似性が認められ、在地のものとは明らかに異なる胎土の土器もみられるようになる。これらのことは、形成期後期のワンカバンバ川流域で、在地社会での土器製作に加えて、交流を通じた周辺地域からの搬入品が増加したことを示唆する。

8-2-6. インガタンボ遺跡出土土器からみる地域間関係

本項では、これまでに論じてきた土器の類似性と差異を通じて、ワンカバンバ川流域を中心としたペルー北部地域とエクアドル南部地域における地域間交流、ならびにその様相について総括する。

各遺跡で報告された土器を、タイプ分類時に用いた属性レベルにまで掘り下げて比較検討した結果、各表に示した全ての属性ではないものの、地域的、あるいは時期的に特徴のある分布傾向を示す複数の属性の存在が明らかとなった。これらのデータは、単に土器の様式的類似性から地域間交流の存在を指摘するだけではなく、そこから一歩ふみ込んで、交流のあり方について論じるための基礎となりうるものである。

形成期前期（ワンカバンバ期後半）には、エクアドル南部はもとより、ペルー北部一帯で土器が現れるが、インガタンボ、およびワンカバンバ川流域では、まだ土器は存在しない。図 8-6 は、ワンカバンバ川流域を中心とした研究対象地域における形成期前期の土器特徴の分布を示したものである（図 8-6）。装飾における土器特徴の地域的傾向は顕著ではないが、土器の器形、とくに無頚壺とコンポジット鉢の分布域がペルー北部山地、ペルー北部海岸中流域で重なりをみせる。前述したように、これらの地域では器形だけでなく、装飾面における類似性も指摘される。しかし、胎土をみると、無頚壺やコンポジット鉢は、主として各地域、もしくは各遺跡で製作されたものと考えられる。これらのことは、当該地域において、土器製作、あるいは土器装飾と連なる情報や技術が共有されていたことを示唆するものである。つまり、ペルー北部山地と北部海岸中流域の間では、とりわけ土器の利用開始時において、神殿を中心とした土器製作に関わる人々の移動、もしくは製作者間で技術や情報、イデオロギーが授受された可能性がある。

ただし、無頚壺のなかには、河川中流域と山地で同様の胎土が利用された事例や、装飾に地域差がみられる事例が指摘される[関・坂井 1998; 鶴見 2008a]。したがって、土器のなかには、神殿の周辺で製作されたのちに、地域間交流を通じて他の神殿へと搬出されたものも存在したと考えられる。この場合、各地の神殿にみられる土器の多様性は、土器製作者による搬入品の模倣、あるいは搬入品との差異化の過程として解釈することができる。

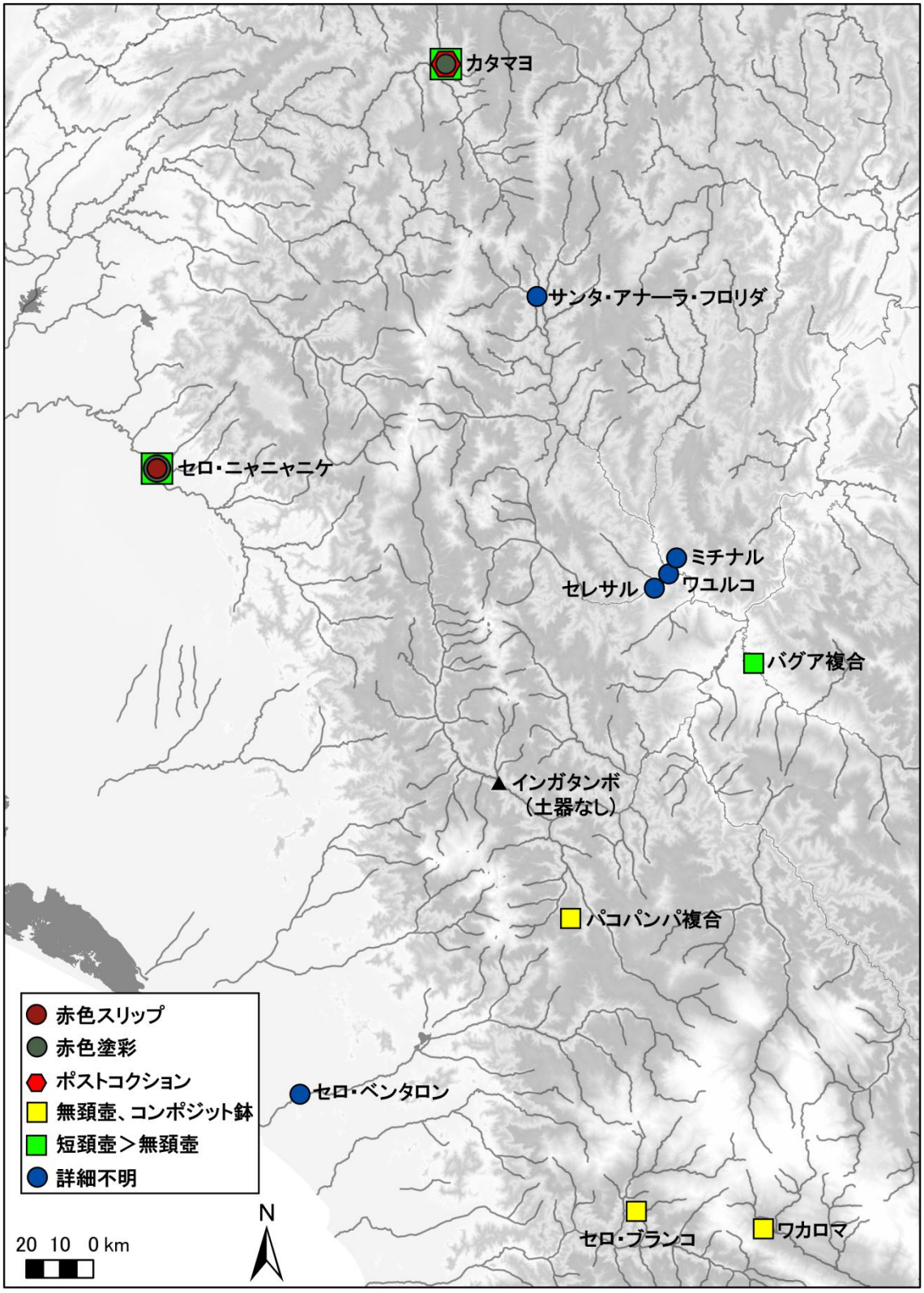


図8-6　形成期前期における土器特徴の分布

その一方、無頚壺とコンポジット鉢の分布域（有無）は、壺型土器における短頚壺と無頚壺の出土割合（短頚壺＞無頚壺）の境界線と一致している。先述したように、無頚壺の分布域であるペルー北部山地とペルー北部海岸中流域では、土器製作、もしくはイデオロギーに関わる情報や技術が共有されていたと考えられる。また、その分布域は、本章で指摘した神殿の分布範囲とも重なりをみせる。そのため、胎土や装飾に関する情報は少ないものの、ペルー極北部海岸とペルー北部熱帯低地以北においても同様に、技術やイデオロギーを共有するような社会が存在していた可能性が示唆される。

続く形成期中期（ポマワカ期）に入ると、各地で土器のバリエーションが増加するとともに、インガタンボで土器が利用されはじめる。インガタンボの土器の器形や装飾技法は、周辺地域において広く認められるものであるが、とくに極北部海岸や北部熱帯低地との共通性が高い。また、こうしたインガタンボと上記の 2 地域との共通性は、神殿建築においても認められる。これらのことは、インガタンボにおける土器の利用開始時において、交流に伴い、土器製作に関わる人々の移動、あるいは製作、とくに精製土器の装飾と紐づくイデオロギーに関わる技術や情報が伝達された可能性を示す。ただし、共通性と同時に、胎土や装飾の細部には多様性が認められることから、周辺地域よりもたらされた技法をもとにして、インガタンボでは、独自に土器製作が行われていたと考えられる。

ここで、研究対象地域における形成期中期に特徴的な土器属性の分布をみると（図 8-7）、形成期前期と比べて、多くの要素が各地で共有されるようになっていることがわかる。また、それと同時に、各地域において土器の多様性が増す。つまり、この時期には、地域間交流が活発になることで、より多くの土器製作、とくに精製土器の装飾と結びついたイデオロギーと関わる技術や情報が伝達されるようになる。そして、それとともに、同じ技術やイデオロギーを基礎としながらも、土器製作者、もしくはその指揮者（リーダー）によって、他地域の土器との差異化が図られるようになることで、共通性と同時に多様性が生じたと考えられる。

たとえば、形成期中期には、形成期前期にみられた短頚壺と無頚壺の出土割合（短頚壺＞無頚壺）の分布範囲は変化しないものの、無頚壺の分布域が北部熱帯低地や極北部海岸にまで拡大する。さらに、この時期から顕著にみられる鐙形ボトルの分布域は、上記二つの分布範囲とほぼ重なりをみせており、ペルー北部海岸を中心として、北部山地や北部熱帯低地までの広い範囲にみられる。その一方、コップ形土器の分布は、ヘケテペケ川流域を中心に、出土範囲が限られている。また、開口円筒鉢は、北部山地（パコパンパ複合、ポロポロ遺跡）と北部海岸（プエマペ遺跡）のみで確認される。

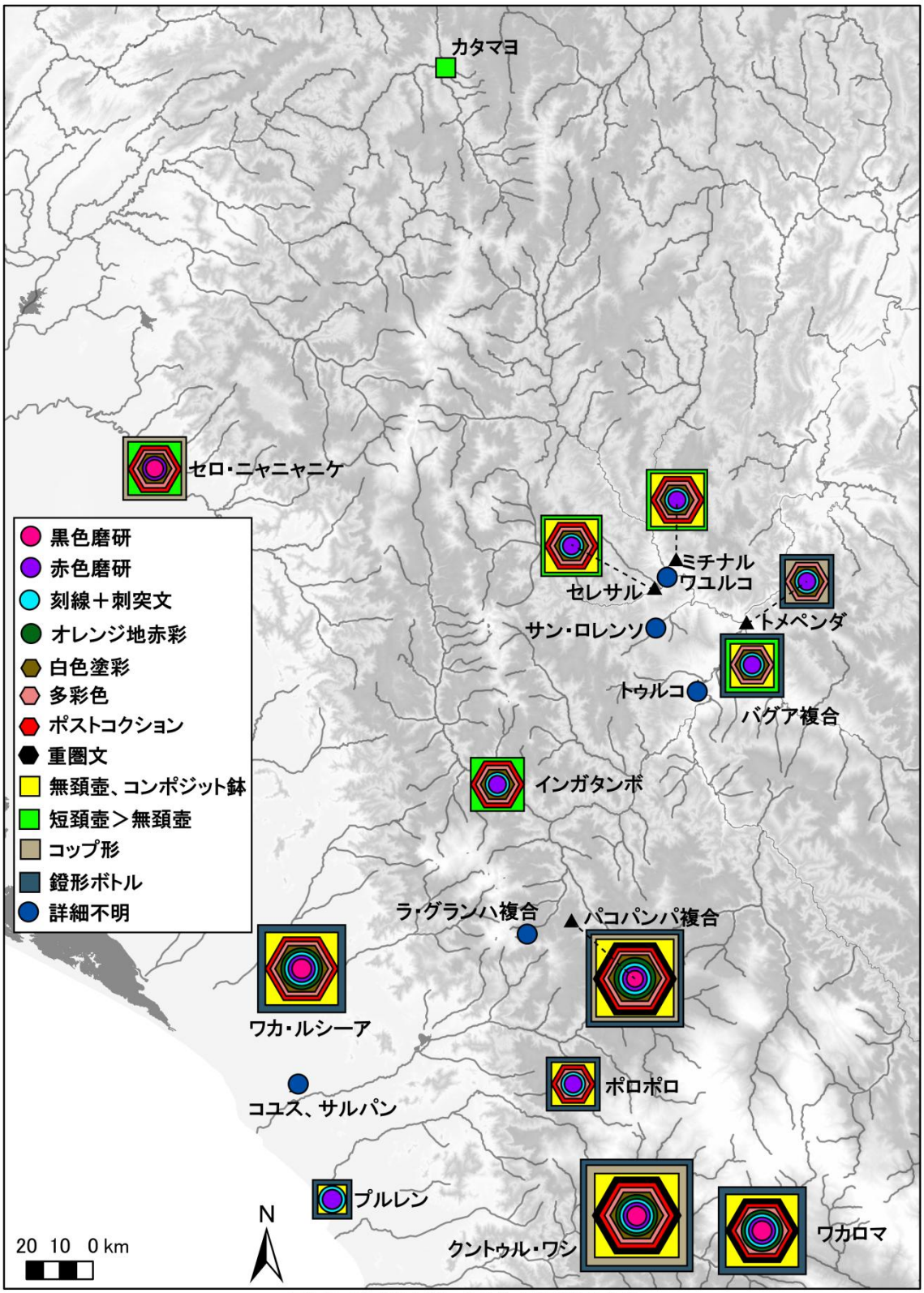


図8-7　形成期中期における土器特徴の分布

さらに、土器の表面調整や装飾に目を向けると、この時期に特徴的な赤色磨研やポストコクション彩色、プレコクションの多彩色などが広範囲で確認される。なお、ポストコクション彩色やプレコクションの多彩色には、その技法において地域差がみられる。その一方、黒色磨研は北部海岸と北部山地と極北部海岸の一部に、白色塗彩は北部熱帯低地を中心として極北部海岸と北部山地に出土が限られる。

以上のことは、形成期前期にみられた土器製作、あるいはイデオロギーに関わる情報や技術を共有するような社会間のつながり、もしくはその範囲が、形成期中期になって地域間交流を通じ、変化したことを示している。とくに、精製土器における装飾の類似は、土器製作の技術だけにとどまらず、イデオロギーと深く関連する地域間交流が存在したことを示唆する。つまり、より多くの属性を共有する地域間では、単に土器製作に関わる技術や情報の交換、あるいは土器自体の交換が行われただけではなく、神殿で行われた建設活動や儀礼などを含む諸活動とも直接的に関与するような社会的なつながりが存在したと考えられるのである。ただし、装飾の細部には地域差、もしくは遺跡差が認められる。そのため、土器製作に関わる人々が神殿間を移動した可能性はあるが、交流を通じて、技術や情報が交換されるとともに、土器製作者、あるいはそのリーダーによって、土器の模倣や差異化が行われ、多様性を有した土器の製作が行われたことが示唆される。また、より多くの土器特徴を共有する神殿は、地理的な隣接地域だけにとどまらず、離れた地域においてもみられる。そのため、交流の相手社会は、地理的な距離ではなく、あくまで選択的に当該社会の戦略に応じて決定されたと考えられる。このことは、土器の多様性、つまりは各地の土器の独自性が、それぞれの社会における製作者やリーダーの戦略を反映した結果であることを示唆する。こうして、インガタンボでは、極北部海岸と北部熱帯低地との高い共通性をみせながらも、独自性を有した土器が製作されたと考えられる。

形成期後期になると、インガタンボでは土器出土量が増し、それと同時に土器のバリエーションが大幅に増加する。それは、ポマワカ期からの継続的な利用が認められる土器タイプにおいても同様であり、圏点文や黒鉛塗布、ロッカースタンプ文などといった装飾技法、もしくはコップ形や開口円筒鉢などといった器形が新たにみられるようになる。総じて、この時期には、形成期中期において北部海岸を中心に分布がみられた土器属性が、インガタンボにも現れるのである。

ここで、研究対象地域における形成期後期に特徴的な土器属性の分布をみてみると（図 8-8）、インガタンボでみられたように各地で土器のバリエーションが増え、以前よりもさらに多くの要素が各地で共有されていることがわかる。全体的な傾向としては、形成期中期までに北部海岸に存在した多くの土器特徴が北部山地でみられるようになる一方で、形成期中期までに北部山地でみられた諸特徴が、インガタンボにおいても確認されるようになることが指摘できる。

第 2 章で述べたように、この時期はアンデスにおいて、大きな社会変化が生じた時期とされる。より具体的には、各地の神殿を中心として、集団内の社会的差異が顕在化し、生

業面や冶金などの技術面に向上がみられるとともに、地域間交流が活発化する時期といわれる。そのなかで、これまで以上に土器製作やイデオロギーに関わる技術と情報が交流を通じて伝達され、また、製作された土器が各地に持ち運ばれることで、広範囲にわたって土器の共通性が認められるようになったと考えられる。こうした土器のなかには、胎土が極めて特徴的であるものが多く、インガタンボで大多数を占める赤色、あるいは褐色系の胎土とは明らかに異なる。インガタンボで搬入されたと考えられる土器としては、胎土が緻密なオレンジ地赤彩（インガタンボ期オレンジ色：IG Anaranjado）や灰色磨研（インガタンボ期灰色磨研：IG Gris Fino）、黒色磨研土器に黒鉛が塗布されたもの（インガタンボ期黒色磨研黒鉛塗布: IG Negro Grafitado）や赤色磨研土器に黒鉛が塗布されたもの（インガタンボ期赤色磨研黒鉛塗布：IG Rojo Pulido Grafitado）があげられる。これらの土器は、ペルー北部山地（パコパンパ複合、ラ・グランハ複合、ワカロマとライソン、クントゥル・ワシ）や北部海岸（モロ・デ・エテン、プエマペ）で確認されている。これらのことから、インガタンボ期のインガタンボにおける土器のバリエーションの増加に際して、製作に関わる情報や技術の伝達だけではなく、前出の 2 地域から土器が搬入された可能性が示唆される。また、これらの土器は精製土器で装飾も類似している。そのうえ、これらの土器の大半が出土したのは、第 4 章でも述べたように、A 基壇の主要基壇北東角に建設された部屋状構造物内であり、その出土コンテクストは極めて限定的である。これらのことを考慮すると、上記の搬入土器は、単なる物資のやりとりというだけではなく、神殿における儀礼と深く関連するイデオロギーと紐づくような交流を通じて、インガタンボにもたらされたと考えられる。

さらに、この時期の土器には広範囲にわたって共通性がみられる一方で、地域間、もしくは遺跡間には明確な差異も認められ、形成期中期にも増して各地で多様性がみられるようになる。たとえば、インガタンボでは独自の土器特徴が顕著に現れ、搬入土器でもその関係が指摘されたように、北部山地や北部海岸の土器との共通性が高まる。そのうえ、インガタンボでは、形成期後期のペルー北部地域では北部熱帯低地のバグア複合や極北部海岸のセロ・ニャニャニケを除いて類例が認められない、プレコクションの多彩色やポストコクションを有した土器の継続的利用が確認される。つまり、北部山地や北部海岸との関係が重要視されていく一方で、形成期中期からみられた極北部海岸や北部熱帯低地との関係も維持され続けるのである。

なお、第 5 章で未分類としたインガタンボ期の土器は、ペルー北部熱帯低地のバグア複合、とりわけエクアドル南部山地のチャリュアバンバやカタマヨ複合に類例がみられる土器である。つまり、インガタンボとエクアドル南部山地との地域間交流が、土器からも明確に示唆されるようになるのである。

次に器形に目を向けると、インガタンボではポマワカ期からインガタンボ期を通じて、ペルー北部山地（パコパンパ複合、ラ・グランハ複合、ポロポロ、ワカロマとライソン、セロ・ブランコ、クントゥル・ワシ）や北部海岸（アマカス複合、ワカ・ルシーア、プエ

マペ）で認められる無頚壺がほとんどみられず、短頚壺の出土割合が極めて高い。これも、ペルー北部熱帯低地のバグア複合や極北部海岸のセロ・ニャニャニケ、あるいはエクアドル南部山地のカタマヨ複合やチャリュアバンバでみられる傾向である。

また、形成期後期になると、インガタンボでコップ形や開口円筒鉢などの特徴的な器形が現れる。コップ形は、形成期中期にペルー極北部海岸（セロ・ニャニャニケ）、北部熱帯低地（トメペンダ）、北部海岸（プエマペ）、北部山地（パコパンパ複合、クントゥル・ワシ）で認められており、報告例の多さを考慮すると、分布の中心は北部海岸や北部山地にあると考えられる。この分布範囲は形成期後期になっても変化せず、北部海岸（モロ・デ・エテン）、北部山地（ラ・グランハ複合、クントゥル・ワシ）と極北部海岸（ペチチェ、セロ・ニャニャニケ）で確認される。また、開口円筒鉢は、北部山地のパコパンパ複合、ならびに北部海岸のプエマペにみられる。インガタンボ出土のコップ形や開口円筒鉢は、整形技法や装飾技法などの点で、とくに北部山地のものと類似している。そのため、これらの土器は北部山地の社会との交流を通じて、インガタンボにもたらされたと考えられる。

以上のように、インガタンボの出土土器からは、装飾技法や器種構成においてペルー北部やエクアドル南部との共通性を認識することができる。そのなかでもとくに、器種構成の面ではペルー北部熱帯低地や極北部海岸、エクアドル南部山地との関係が強い。その一方、装飾技法をみると、形成期中期にはペルー北部熱帯低地と極北部海岸、もしくは北部山地との共通性が高く、形成期後期になると、とくに北部海岸や北部山地との高い共通性がみられるようになる。

そして、その結果として、土器のバリエーション（器形、および装飾）が大幅に増加し、新たな土器タイプが現れる。ただし、プレコクションの多彩色や、ポストコクション彩色のポマワカ期からの継続的利用や出土割合の高さなどから、ペルー極北部海岸や北部熱帯低地との関係は引き続き重要なものであったと考えられる。

このようにして、インガタンボ出土土器には、ペルーとエクアドルにまたがって、海岸部と山地、あるいは熱帯低地の各地域と共通する属性がみられる。そして、こうした状況のなかで、交流によってもたらされた土器製作やイデオロギーに関わる技術や情報の交換、もしくは土器の授受などを通じて、周辺地域の土器特徴を折衷しつつも、他地域の土器との差異化を図るなかで、インガタンボ固有の土器特徴が形成された。また、土器の利用開始が周辺地域と比べて時期的に遅れる点も、インガタンボの極めて独自的な現象の一つである。

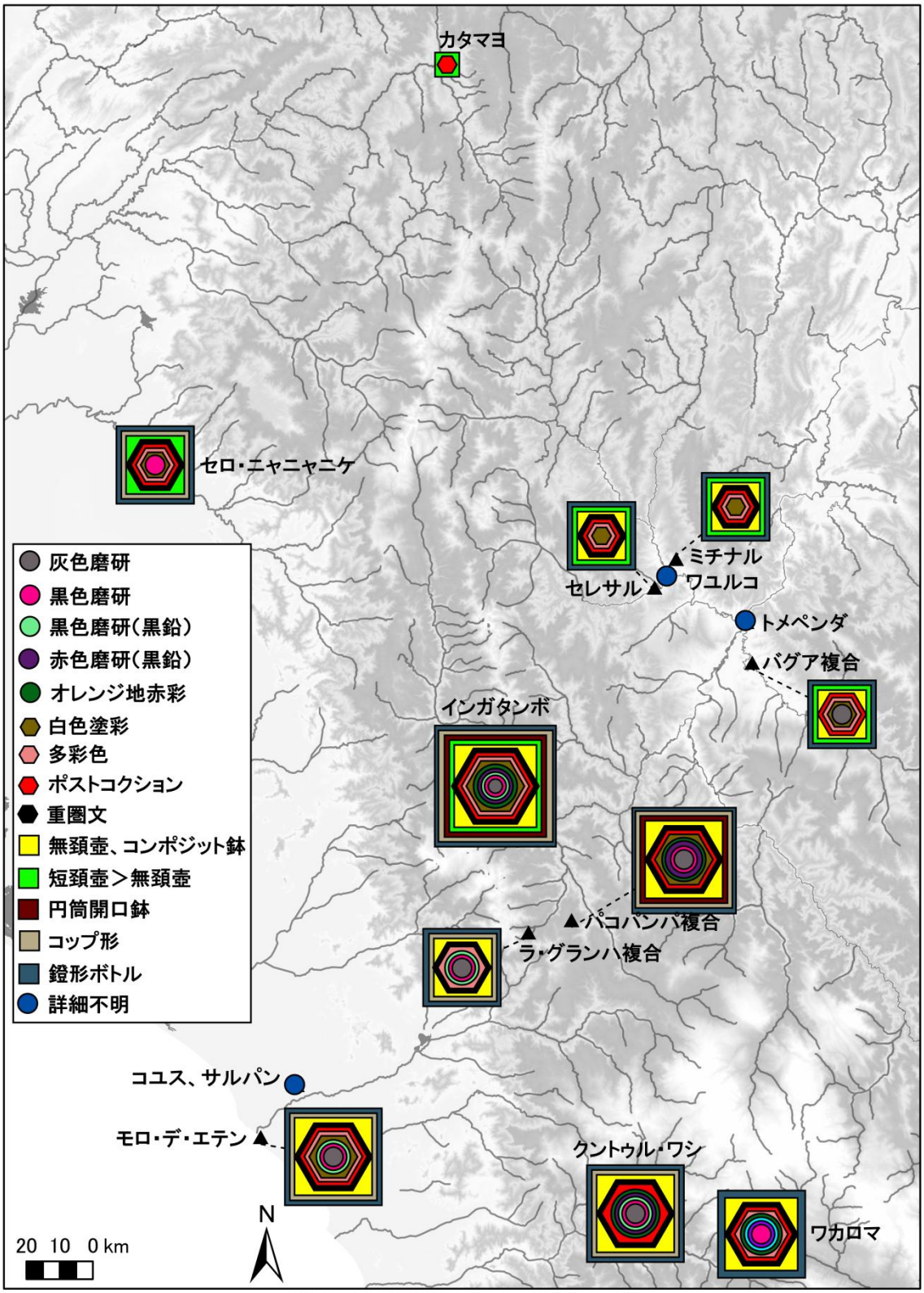


図8-8　形成期後期における土器特徴の分布

以上のように、本節では土器資料の比較検討を通じて、インガタンボの独自性と他地域との共通性について検討したうえで、インガタンボと周辺地域との地域間交流について論じてきた。次節では、インガタンボから出土した土器以外のデータを用いて、この問題について検討する。

8-3. 土器以外の人工遺物と自然遺物

本節では、建築と土器以外のインガタンボ出土資料（第 6 章と第 7 章）についてまとめ、周辺地域との比較検討を通じて、地域間交流を論じる。本節で取り上げる資料は、建築や土器と比べてデータ量は少ない。しかし、比較だけでなく、種同定や産地同定といった分析をふまえることで、建築や土器に認められる類似性にもとづく議論とは異なる視点から、地域間交流について検討することが可能となる。

土器以外の出土遺物で、地域間交流を論じる際に最も具体的な証拠となるのは、海水生種の貝である。そのなかでも、生息域が限定される暖流系の貝、とりわけウミギクガイは、先行研究に記述されることも多く、第 2 章で述べたように、形成期早期や形成期前期においてすでにペルー北部海岸や中央海岸で出土している。ただし、インガタンボでは形成期前期に対応するワンカバンバ期後半から暖流系の貝が出土するものの、ウミギクガイの出土は認められない。そのため、形成期早期と形成期前期において、ペルー北部地域、あるいはそれ以南で出土例が認められる神殿は、インガタンボやワンカバンバ川流域社会を介することなく、ウミギクガイを入手したと考えられる。

その一方、インガタンボでは、ポマワカ期（形成期中期）になるとウミギクガイを含む暖流系の貝の出土が顕著になる。そして、未製品のほか、加工の痕跡を残さない原材料と思われる貝殻も出土するようになる。そのため、こうした貝、とくに遠隔地からもたらされる暖流系の貝は、インガタンボでの製作を念頭において、海岸部より持ち込まれたと考えられる。しかし、インガタンボよりも産地に近い、ペルー極北部海岸部中流域のセロ・ニャニャニケでは、ウミギクガイの出土例がほとんどみられない[Guffroy 1989, 1992]。このことは、エクアドルからペルーへと暖流系の貝がもたらされる際に、セロ・ニャニャニケが位置する極北部海岸中流域が、あまり利用されていなかったことを示唆する。

ポマワカ期にみられた上記の状況は、インガタンボ期（形成期後期）に入っても同様に認められる。そして、海水生種の貝の大半が、更新の際に部屋状構造物群を支える基壇の盛り土に混入されていることから、それらがイデオロギーと深く関わる儀礼体系との関連のなかでインガタンボ社会に必要とされ、獲得されたものであると考えられる。さらに、インガタンボ期には、ペルー北部海岸で採取可能な暖流系以外の貝の出土も多数認められ、貝製品として用いる貝のバリエーションが増加する。

その一方で、インガタンボでは甲殻類や魚類についても、海水生種の出土が認められる。したがって、イデオロギーに関わる部分だけではなく、生業基盤の一部としても海岸部、とくに近接したペルー北部海岸に存在した社会との交流が存在したと考えられる。

次に、石器について検討してみたい。インガタンボでは、ポマワカ期を中心に石鉢の出土が認められる。石鉢の分布は、ペルー北部熱帯低地やエクアドル南部熱帯低地に多くみられ、製作地として北部熱帯低地のワユルコが想定されている[Valdez 2008b: 175]。これらのことから、インガタンボと北部熱帯低地の社会間には、石鉢の製作に関わる技術や情報、イデオロギーと連なる交流が存在した可能性はある。

しかし、北部熱帯低地で出土する石鉢のなかには、インガタンボより精巧なものも多く、イデオロギーと関わる表象や研磨などの技術に関して差異がある。そのため、インガタンボの石製品に関しては、北部熱帯低地からインガタンボへと技術や情報が持ち込まれた後で、インガタンボにおいて独自に製作されたことが示唆される。

石材を利用した装身具に関しては、データが極めて乏しいが、第 6 章で指摘したように、ペルー北部山地と北部海岸にインガタンボ出土事例との類例が認められる。そのため、インガタンボとそうした地域との間で、イデオロギーに関わる情報を共有するような交流が存在した可能性は否定できない。

また、石器で注目すべきは、インガタンボ期のみに出土する黒曜石である。これらの黒曜石の産地は、ペルー南部山地のキスピシーサである。ただし、出土数が限られており、出土例がいずれも剥片であることから、インガタンボとキスピシーサ周辺に存在した社会が直接物資を授受したのではなく、その中間に位置する北部山地の神殿を介してインガタンボに搬入されたと考えられる。

こうしてインガタンボでは、ポマワカ期より周辺地域との地域間交流が活性化するが、それと同時に、荷駄獣であるラクダ科動物の出土も認められるようになる。生態環境を考慮すると、ワンカバンバ川流域はラクダ科動物の成育に適さないため、流域以南の北部山地からもたらされたことが推測される。

以上のように、インガタンボでは、ワンカバンバ期より周辺地域との地域間交流が存在し、イデオロギーや製作活動に関わる情報や技術、もしくは原材料などが入手された。そのなかでもとくに、海水生種の貝や魚類、甲殻類からは、海岸部に展開した社会との交流の存在が明らかとなった。また、インガタンボにおける交流は、イデオロギーに関わるものだけに限られたわけではなく、海産資源などの食料も周辺地域との交流を通じて、インガタンボにもたらされた。ここで重要なことは、地域間交流を通じて獲得された物資や情報、技術、イデオロギー、ならびにそれらを用いて製作された製品が、インガタンボ社会を支えるだけではなく、インガタンボと他地域の社会との交流時において交換財ともなった可能性である。それに加え、インガタンボがその地政学上の利点を活かして、ペルー北部における地域間交流の要衝となった可能性も考慮する必要がある。こうして、インガタンボでは地域間交流を下地とした、物資などの獲得と製作、流通が繰り返されることで、地域間交流がさらに促進されることになったと考えられる。

8-4.　小括：インガタンボ遺跡の建築、および出土資料からみる地域間交流

本章では、インガタンボ遺跡の建築と出土資料を、周辺地域に存在する諸遺跡の先行研究データと比較することを通じて、インガタンボの物質文化にみられる独自性と周辺地域との共通性を明らかにしてきた。そして、そのうえでペルー北部地域とエクアドル南部地域における地域間交流を、インガタンボを中心に検討してきた。本節では、これまでの論考を総括し、インガタンボにおける地域間交流の時期的変遷について論じる。

8-4-1.　形成期早期（ワンカバンバ期前半）

インガタンボでは小規模な神殿の建設が開始されるが、その形態や規模などにおいて周辺地域との差異は顕著である。また、出土遺物に関しても、周辺地域との地域間交流を示す具体的な証拠はない。ただし、社会の核となる神殿を築くという行為自体は、ペルー北部海岸などで確認されているため、緩やかではあるが地域間でイデオロギーが共有されていたとも考えられる。

8-4-2.　形成期前期（ワンカバンバ期後半）

インガタンボにおける神殿の形態的特徴は、前時期からとくに変化しない。また、エクアドル南部だけでなく、ペルー北部においても広く土器が利用されるようになるが、インガタンボでは土器の利用は認められない。この時期の地域間交流を示すデータは極めて少なく、海水生種の貝のみである。このことから、インガタンボと周辺地域との地域間交流は、海岸部に展開した社会との間にわずかに認められるのみである。そして、周辺地域に存在した社会と交流を持たなかった結果として、インガタンボでは土器の利用がみられないといった周辺地域社会とは異なる社会状況がみられる。

8-4-3.　形成期中期（ポマワカ期）

インガタンボの神殿に形態や規模、あるいは配置の面で大きな変化が生じ、ペルー極北部海岸や北部熱帯低地との高い共通性を示すようになる。また、インガタンボで周辺地域との類似性を有する土器の利用がはじまる。そのなかでも注目すべきは、神殿にみられた傾向と同様に、土器においても極北部海岸や北部熱帯低地との間に極めて高い類似性が認められることである。さらに、海産資源が急増し、加工目的を主とした貝だけでなく、食用となる海水生種の魚類や甲殻類も出土するようになる。これらのことは、インガタンボが、周辺地域のなかでも、とくに海岸部に展開した社会と積極的に交流を行ったということを示している。

その一方、ウミギクガイをはじめとしたエクアドルを産地とする暖流系の貝は、ペルー極北部海岸（セロ・ニャニャニケ）で出土例があまりみられない。つまり、インガタンボでは、ペルー極北部やエクアドル南部の社会との直接的な交流を介して、それらを入手したと考えられる。こうしてインガタンボは、ペルー北部において、儀礼体系に関わる暖流

系の貝の入手先として、地域間交流の重要地となったのである。なお、地域間交流を示すデータの増加とともに、荷駄獣であるラクダ科動物が出土しはじめることから、インガタンボにおける地域間交流の活性化とラクダ科動物を伴う新たな輸送手段の利用開始は深く関連していることが示唆される。この問題に関しては、次章で詳しく検証していく。

このように、インガタンボの神殿建築や土器をはじめとした出土資料からは、神殿間で密接な地域間交流が存在したことが明らかである。ただし、全ての社会が均一に交流を有していたわけではなく、考古データの類似性や多様性にみられたように、各社会の結びつきは、各社会の状況に応じて選択的に決定されたと考えられる。また、神殿建築や土器の器形や、装飾の細部にいたる共通性をみると、神殿建設や神殿で行われる儀礼といった諸活動に直接関わる特定の人々（リーダーや製作者）の移動を伴うような交流が行われ、物資だけでなく、技術やイデオロギーに連なる情報の交換が積極的に行われたと考えられる。

8-4-4. 形成期後期（インガタンボ期）

インガタンボの神殿や土器に大きな変化が生じる。そして、形成期中期にみられたようなペルー極北部海岸や北部熱帯低地との共通性に加えて、北部海岸と北部山地との高い共通性が認められるようになる。依然として、暖流系を含む海水生種の貝の出土が顕著であることから、海岸部、もしくはペルー極北部やエクアドル南部に展開した社会との密接な地域間交流が存在したと考えられる。しかし、これらと同時に、黒曜石が出土するようになるなど、神殿建築や土器特徴で認められた傾向と同様に、ワンカバンバ川流域より南方に存在した社会との地域間交流が活発化したことが示唆される。また、ペルー北部山地のクントゥル・ワシでは、この時期に海岸部から人の流入があったことが指摘されるが、インガタンボでも同様の現象が生じた可能性はある。ただし、神殿建築や海水生種の貝、あるいは土器のなかには、確かに北部海岸からインガタンボへもたらされたと考えられるものがあるが、同様に北部山地からインガタンボへの流入を示唆する資料も存在する。

このように、インガタンボ神殿における諸活動を支える人々（とくにリーダーや製作者）は、上記の地域間交流を通じて、物資や技術、イデオロギーに関わる情報を入手した。また、交流を介して獲得された物資やそれをもとにした製品が交換財となることで、インガタンボは交流の要衝となり、地域間交流はさらに活発化していった。ポマワカ期と同様に、インガタンボ期でも神殿間で活発な地域間交流が存在したことは明らかである。しかし、交流の方向性、つまりは重視される交流相手先が変化するなど、その内実には大きな変化が認められる。こうした地域間交流の変化は、インガタンボ社会、とくにリーダーの戦略によるものと考えられるが、同時に周辺地域の社会状況にも大きく左右される。そのため、インガタンボという一遺跡のデータだけではなく、より包括的な視点からもこの問題に取り組んでいく必要がある。

以上のように、本章では、インガタンボの建築、ならびに出土遺物を通じて、インガタ

ンボにおける地域間交流の諸相について論じてきた。しかし、地域間交流の実態、そして地域間交流とインガタンボ社会の変化との関連を解明していくためには、インガタンボだけではなく、より広いコンテクストからも地域間交流について考察されなければならない。また、インガタンボにおける様々な活動を理解するためには、インガタンボと同時にワンカバンバ川流域に存在した社会との関係を考察する必要もある。このことをふまえて、次章では、ワンカバンバ川流域全体の社会的状況について論じていく。

第 9 章：ワンカバンバ川流域のセトルメント・パターン

これまで、発掘調査データをもとにしてインガタンボを中心とするワンカバンバ川流域の編年を確立し、インガタンボという特定遺跡における形成期の社会変化の諸相を明らかにしてきた。しかし、ワンカバンバ川流域では同時期に複数の遺跡が存在しており、インガタンボを支えた人々がそれらの遺跡を支えた人々との関係を全く持たずに、独自に活動したとは考えにくい。このことから、本章では、インガタンボを含む流域社会全体の動態を捉えるため、遺跡分布調査によってえられたワンカバンバ川流域のデータを提示し、セトルメント・パターンについて論じる。このデータは、次章で地域間関係を隣接地域との関係のなかで検討する際の基礎ともなる。

より具体的には、遺跡分布調査時にえられたデータを整理したうえで、地表面観察で獲得した建築データと発掘調査により確立した編年、およびインガタンボの建築データを用いて、各遺跡を形態的特徴から分類し、遺跡間の関係性を明らかにする。そして、生態学的知見から隣接地域へ抜ける地域間ルートに関する情報を整理し、流域内における遺跡分布との関係を考察することを通じて、ワンカバンバ川流域の形成期におけるセトルメント・パターンの通時的変化を捉える。さらに、神殿の立地、あるいは神殿と居住施設の関係について、生態環境をふまえながら論じる。

9-1. ワンカバンバ川流域の遺跡分布とその一般的特徴

遺跡分布調査の結果として登録した遺跡数は、調査以前にペルー文化庁に登録されていた 2 遺跡を含めて、128 遺跡である[1]。本調査による登録遺跡の分布状況を図示したものが図 9-1 と図 9-2 であり、表 9-1 は登録遺跡の緯度、経度、標高といった地理的情報と各遺跡が属する時期を示したものである。表 9-1 には遺跡ごとに番号を記してあるが、この遺跡番号は図 9-1 と図 9-2 中にふられた番号と対応している。

ワンカバンバ川流域の遺跡分布の一般的特徴は、遺跡の大部分がワンカバンバ川本流やワンカバンバ川に注ぎ込む河川、またはケブラーダ近くの台地や丘陵上にあり、標高 1,300 m程度の高さまでに位置していることである。その一方、谷の両側にそびえる山の頂上部付近には遺跡がほとんどなく、標高 1,750m以上に位置するのはわずかに 5 遺跡である（表 9-2）。

なお、登録した遺跡のうち、本論の対象となる形成期に属するものは 62 遺跡で（表 9-3）、そのほとんどがポマワカ市周辺に集中している。各遺跡で表面採集した土器を、周辺地域の先行研究やインガタンボの発掘データ比較検討した結果、62 の全ての遺跡が形成期中期（図 9-1、ならびに図 9-2 のポマワカ期に対応）に属することが確認された。

[1]分布調査時に設定した東端の集落であるチプレ周辺で 1 遺跡を登録しているため、踏査時に登録した遺跡総数は実際には 129 であるが、本論では第 3 章で述べた地域区分を使用するため、128 遺跡となる。

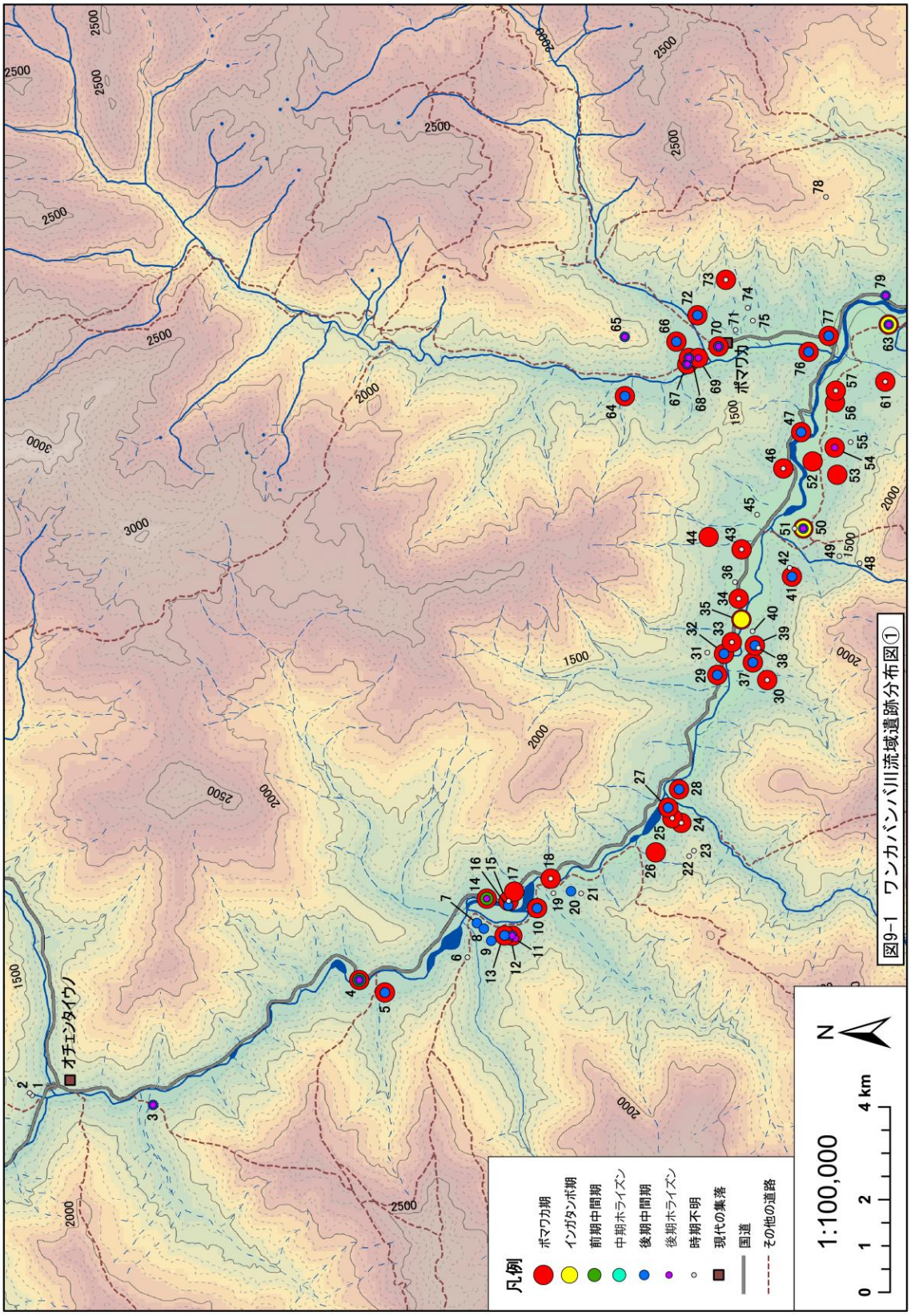


図9-1 ワンカバンバ川流域遺跡分布図①
凡例
ポマワカ期
インガタンボ期
前期中間期
中期ホライズン
後期中間期
後期ホライズン
時期不明
現代の集落
国道
その他の道路
1:100,000
0 1 2 4 km
N
オチェンタイウノ
ポマワカ

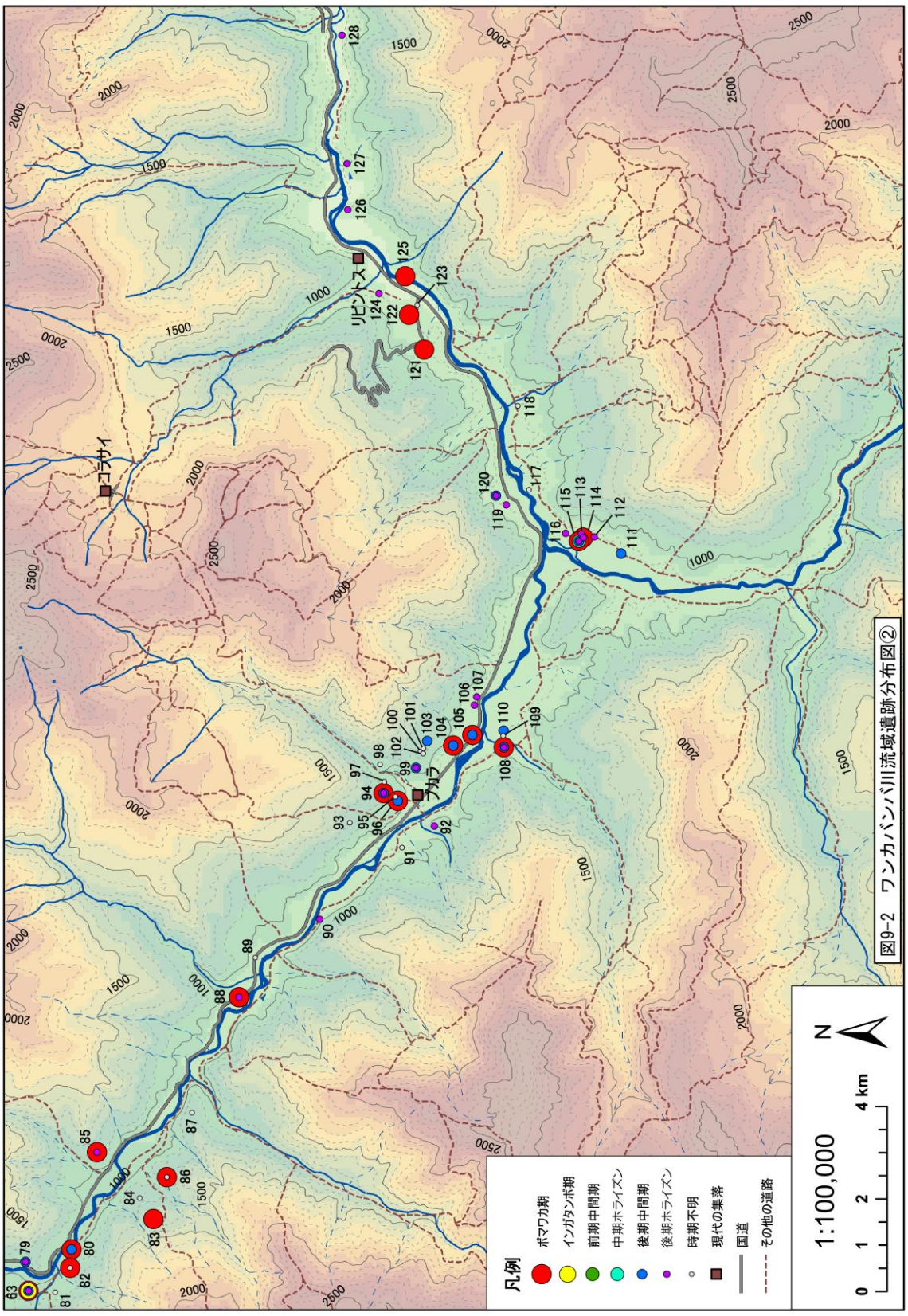


図9-2　ワンカバンバ川流域遺跡分布図②
凡例
ポマワカ期
インガタンボ期
前期中間期
中期ホライズン
後期中間期
後期ホライズン
時期不明
現代の集落
国道
その他の道路
1:100,000
0 1 2 4 km
N
コラサイ
リビントス
プカラ

表9-1　遺跡踏査登録遺跡リスト①（全時期）

遺跡番号	遺跡名	位置			時期							
							形成期以降					
		緯度	経度	標高	形成期中期	形成期後期	時期不明	前期中間期	中期ホライズン	後期中間期	後期ホライズン	年代不明
1	ロマ・デ・ヘンティル 1	05°47’ 46.6”	79°22’ 33.1”	1,065 m			○					
2	ロマ・デ・ヘンティル 2	05°47’ 44.8”	79°22’ 31.4”	1,086 m			○					
3	タサヘーラス	05°49’ 11.5”	79°22’ 39.6”	1,204 m						○	○	
4	グァヤボ	05°51’ 36.1”	79°21’ 11.5”	1,240 m	○			○		○	○	
5	サポタル	05°51’ 54.1”	79°21’ 20.2”	1,168 m	○					○		
6	サウサル	05°52’ 52.9”	78°20’ 55.3”	1,275 m			○					
7	セロ・リモン 1	05°52’ 58.6”	79°20’ 31.3”	1,197 m						○		
8	セロ・リモン 2	05°53’ 03.5”	79°20’ 35.2”	1,212 m						○		
9	セロ・リモン 3	05°53’ 08.7”	79°20’ 43.7”	1,276m						○		
10	セロ・リモン 4	05°53’ 40.9”	79°20’ 20.7”	1,152 m	○					○		
11	リモン 1	05°53’ 25.8”	79°20’ 41.9”	1,194 m							○	
12	リモン 2	05°53’ 23.5”	79°20’ 40.1”	1,171 m	○					○	○	
13	リモン 3	05°53’ 18.1”	79°20’ 39.9”	1,150 m	○					○		
14	リモン・セコ 1	05°53’ 05.5”	79°20’ 14.1”	1,164 m	○			○			○	
15	リモン・セコ 2	05°53’ 20.8”	79°26’ 15.7”	1,141 m.	○		○					
16	リモン・セコ 3	05°53’ 20.6”	79°20’ 18.9”	1,131 m						○		
17	ペドレガル 1	05°53’ 24.7”	79°20’ 09.1”	1,137 m	○							
18	ペドレガル 2	05°53’ 50.3”	79°19’ 59.9”	1,177 m	○		○					
19	ティエラ・ブランカ 1	05°53’ 52.3”	79°20’ 10.1”	1,171 m			○					
20	ティエラ・ブランカ 2	05°54’ 04.6”	79°20’ 08.7”	1,277 m						○		
21	ティエラ・ブランカ 3	05°54’ 11.7”	79°20’ 10.3”	1,305 m								○
22	イェルマ 1	05°55’ 27.5”	79°19’ 43.8”	1,498 m			○					
23	イェルマ 2	05°55’ 30.9”	79°19’ 40.0”	1,502 m			○					
24	イェルマ 3	05°55’ 21.9”	79°19’ 20.5”	1,277 m	○		○					
25	イェルマ 4	05°55’ 15.6”	79°19’ 17.2”	1,204 m	○		○					
26	イェルマ 5	05°55’ 04.1”	79°19’ 41.3”	1,238 m	○							
27	イェルマ 6	05°55’ 12.7”	79°19’ 09.8”	1,126 m	○					○		
28	モジェ	05°55’ 20.3”	79°18’ 57.0”	1,201 m	○					○		
29	アラビスカ 1	05°55’ 47.0”	79°17’ 36.6”	1,104 m	○					○		
30	アラビスカ 2	05°56’ 22.0”	79°17’ 40.1”	1,224 m	○		○					
31	アラビスカ 3	05°55’ 39.9”	79°17’ 20.9”	1,328 m								○
32	エル・アレナル 1	05°55’ 51.6”	79°17’ 21.7”	1,152 m	○					○		
33	エル・アレナル 2	05°55’ 57.1”	79°17’ 13.6”	1,090 m	○		○					
34	エル・アレナル 3	05°56’ 01.8”	79°16’ 43.0”	1,084 m	○		○					
35	エル・アレナル 4	05°56’ 03.7”	79°16’ 57.6”	1,066 m	○	○						
36	エル・アレナル 5	05°55’ 59.2”	79°16’ 31.4”	1,095 m			○					
37	セロ・ラ・パス	05°56’ 11.9”	79°17’ 27.7”	1,279 m	○					○		
38	サン・ホセ・デ・オブレーロ 1	05°56’ 15.7”	79°17’ 17.5”	1,160 m								○
39	サン・ホセ・デ・オブレーロ 2	05°56’ 13.3”	79°17’ 15.9”	1,132 m	○					○		
40	サン・ホセ・デ・オブレーロ 3	05°56’ 11.6”	79°17’ 05.8”	1,136 m			○					
41	ピエドラ・パラーダ 1	05°56’ 39.1”	79°16’ 27.4”	1,269 m	○					○		
42	ピエドラ・パラーダ 2	05°56’ 37.5”	79°16’ 21.2”	1,259 m			○					
43	パタコン 1	05°56’ 03.7”	79°16’ 08.4”	1,123 m	○		○					
44	パタコン 2	05°55’ 40.5”	79°15’ 59.7”	1,302 m	○							
45	パタコン 3	05°56’ 14.5”	79°15’ 44.0”	1,075 m			○					
46	パタコン 4	05°56’ 32.8”	79°15’ 11.5”	1,118 m.	○		○					

表9-1　遺跡踏査登録遺跡リスト②（全時期）

遺跡番号	遺跡名	位置			時期							
							形成期以降					
		緯度	経度	標高	形成期中期	形成期後期	時期不明	前期中間期	中期ホライズン	後期中間期	後期ホライズン	年代不明
47	パタコン 5	05°56’45.3”	79°44’46.0”	1,072 m	○					○		
48	カニャリアッコ 1	05°57’26.6”	79°16’17.9”	1,567 m			○					
49	カニャリアッコ 2	05°57’12.4”	79°16’12.9”	1,381 m			○					
50	カニャリアッコ 3	05°56’47.0”	79°15’53.6”	1,165 m	○	○				○	○	
51	カニャリアッコ 4	05°56’40.9”	79°15’53.6”	1,119 m			○					
52	サポテパンパ 1	05°56’53.4”	79°15’06.5”	1,086 m	○							
53	サポテパンパ 2	05°57’10.7”	79°15’15.8”	1,246 m	○							
54	サポテパンパ 3	05°57’08.9”	79°14’56.7”	1,201 m	○						○	
55	ナランホ 1	05°57’20.0”	79°14’52.9”	1,164 m			○					
56	ナランホ 2	05°57’09.0”	79°14’25.0”	1,069 m.	○							
57	ナランホ 3	05°57’09.5”	79°14’16.8”	1,063 m	○		○					
58	ニナパンパ	05°58’39.7”	79°15’12.0”	2,063 m								○
59	ラ・クエバ 1	05°58’31.1”	79°14’54.8”	1,885 m							○	
60	ラ・クエバ 2	05°58’34.8”	79°14’53.7”	1,817 m								
61	エル・レホ	05°57’44.2”	79°14’10.3”	1,276 m	○		○					
62	リモンパンパ	05°58’02.8”	79°14’02.3”	1,307 m	○					○		
63	インガタンボ	05°57’46.5”	79°13’30.3”	1,066 m	○	○	○			○	○	
64	ランパラン	05°54’41.4”	79°14’21.1”	1,285 m	○					○		
65	セロ・マンドラ	05°54’41.2”	79°13’39.5”	1,757 m						○	○	
66	ロマ・デ・サポテパンパ	05°55’17.4”	79°13’42.7”	1,179 m	○					○		
67	ワカ・デ・サポテパンパ 1	05°55’25.1”	79°13’58.5”	1,153 m	○					○	○	
68	ワカ・デ・サポテパンパ 2	05°55’26.2”	79°13’54.1”	1,158 m	○					○	○	
69	ワカ・デ・サポテパンパ 3	05°55’32.9”	79°13’54.2”	1,106 m	○						○	
70	ワカ・マヨール	05°55’47.1”	79°13’46.0”	1,156 m	○					○	○	
71	チャパワキージャ	05°55’59.0”	79°13’34.4”	1,133 m			○					
72	アルガロボ 1	05°55’32.2”	79°13’24.2”	1,221 m	○					○		
73	アルガロボ 2	05°55’52.1”	79°12’59.2”	1,399 m	○		○					
74	パンパ・グランデ	05°56’07.5”	79°13’18.9”	1,216 m			○					
75	パンパ・コロラード	05°56’11.1”	79°13’27.8”	1,194 m								○
76	カサ・ケマーダ	05°56’50.3”	79°13’49.6”	1,041 m	○					○		
77	ラス・フンタス	05°57’04.4”	79°13’38.3”	1,068 m	○					○		
78	ルーヤ	05°57’02.2”	79°12’00.8”	1,902 m								○
79	アルンブレ	05°57’44.3”	79°13’09.9”	1,076 m						○	○	
80	ピエドラ・グランデ	05°58’16.7”	79°13’01.1”	1,028 m	○					○		
81	モンテ・グランデ 1	05°58’05.3”	79°13’31.2”	1,046 m			○					
82	モンテ・グランデ 2	05°58’15.8”	79°13’14.0”	1,018 m	○		○					
83	ワランゴ・パンパ 1	05°59’14.3”	79°12’39.5”	1,283 m	○							
84	ワランゴ・パンパ 2	05°59’04.6”	79°12’24.8”	1,203 m			○					
85	サン・アントニオ	05°58’34.4”	79°11’52.6”	1,223 m	○						○	
86	セロ・サン・クリストバル	05°59’23.7”	79°12’10.0”	1,244 m	○		○					
87	ラ・ボーラ	05°59’41.2”	79°11’24.6”	1,196 m			○					
88	チャウペ 1	06°00’14.1”	79°10’03.3”	1,030 m	○						○	
89	チャウペ 2	06°00’25.5”	79°09’35.4”	978 m			○					
90	インガタンボ・デ・リシーナス	06°01’10.8”	79°09’08.3”	953 m							○	
91	リシーナス	06°02’08.6”	79°08’17.7”	938 m								○
92	プカラ・ピエッホ	06°02’31.4”	79°08’02.5”	1,051 m							○	

表9-1　遺跡踏査登録遺跡リスト③（全時期）

遺跡番号	遺跡名	位置			時期								
							形成期以降						年代不明
		緯度	経度	標高	形成期中期	形成期後期	時期不明	前期中間期	中期ホライズン	後期中間期	後期ホライズン		
93	ワランゴ	06°01’ 31.8”	79°08’ 00.3”	1,103 m			○						
94	アルカパロッサ 1	06°01’ 55.5”	79°07’ 39.4”	1,101 m	○					○	○		
95	アルカパロッサ 2	06°02’ 03.8”	79°07’ 41.9”	1,099 m			○						
96	アルカパロッサ 3	06°02’ 05.5”	79°07’ 44.8”	1,065 m	○					○			
97	アルカパロッサ 4	06°01’ 56.0”	79°07’ 31.5”	1,043 m			○						
98	サン・ミゲル	06°01’ 52.9”	79°07’ 19.2”	1,104 m			○						
99	ワランゴパンパ・デ・プカラ 1	06°02’ 18.2”	79°07’ 21.5”	1,105 m						○	○		
100	ワランゴパンパ・デ・プカラ 2	06°02’ 21.4”	79°07’ 10.0”	1,136 m			○						
101	ワランゴパンパ・デ・プカラ 3	06°02’ 23.3”	79°07’ 11.4”	1,136 m			○						
102	ワランゴパンパ・デ・プカラ 4	06°02’ 23.5”	79°07’ 07.9”	1,134 m			○						
103	ワランゴパンパ・デ・プカラ 5	06°02’ 26.1”	79°07’ 02.7”	1,147 m						○			
104	ミラドール	06°02’ 44.4”	79°07’ 05.8”	942 m	○					○			
105	サン・ホセ 1	06°02’ 57.9”	79°06’ 58.3”	915 m	○					○			
106	サン・ホセ 2	06°02’ 59.3”	79°06’ 37.3”	904 m							○		
107	サン・ホセ 3	06°03’ 00.9”	79°06’ 31.5”	909 m							○		
108	チンゲル	06°03’ 20.1”	79°07’ 06.9”	910 m	○					○	○		
109	エル・パライソ 1	06°03’ 19.7”	79°06’ 58.8”	920 m			○						
110	エル・パライソ 2	06°03’ 19.9”	79°06’ 55.2”	908 m						○			
111	ワンカス 1	06°04’ 42.3”	79°04’ 50.3”	883 m						○			
112	ワンカス 2	06°04’ 23.3”	79°04’ 38.6”	904 m							○		
113	ラ・ワカ 1	06°04’ 14.3”	79°04’ 36.5”	906 m							○		
114	ラ・ワカ 2	06°04’ 15.5”	79°04’ 39.2”	902 m	○						○		
115	ラ・ワカ 3	06°04’ 12.5”	79°04’ 41.7”	883 m	○				○	○	○		
116	パランコ	06°04’ 03.1”	79°04’ 36.2”	897 m							○		
117	トゥピカイパ	06°03’ 37.2”	79°04’ 05.7”	891 m			○						
118	プエンテ・テチン	06°03’ 29.2”	79°03’ 06.7”	910 m			○						
119	リモナル 1	06°03’ 21.2”	79°04’ 16.4”	883 m							○		
120	リモナル 2	06°03’ 14.0”	79°04’ 09.9”	821 m						○	○		
121	ラス・バルサス	06°02’ 23.0”	79°02’ 27.3”	948 m	○								
122	プラヤ・アスール 1	06°02’ 12.3”	79°02’ 02.9”	891 m	○								
123	プラヤ・アスール 2	06°02’ 18.0”	79°01’ 56.0”	858 m			○						
124	プラヤ・アスール 3	06°01’ 51.0”	79°01’ 48.0”	874 m							○		
125	マタラ 1	06°02’ 09.5”	79°01’ 35.8”	860 m	○								
126	マタラ 2	06°01’ 28.9”	79°00’ 49.2”	914 m							○		
127	ニュルペ	06°01’ 28.2”	79°00’ 16.8”	854 m							○		
128	リビントス	06°01’ 24.2”	78°58’ 46.5”	755 m							○		

表 9−2　標高と登録遺跡数の関係

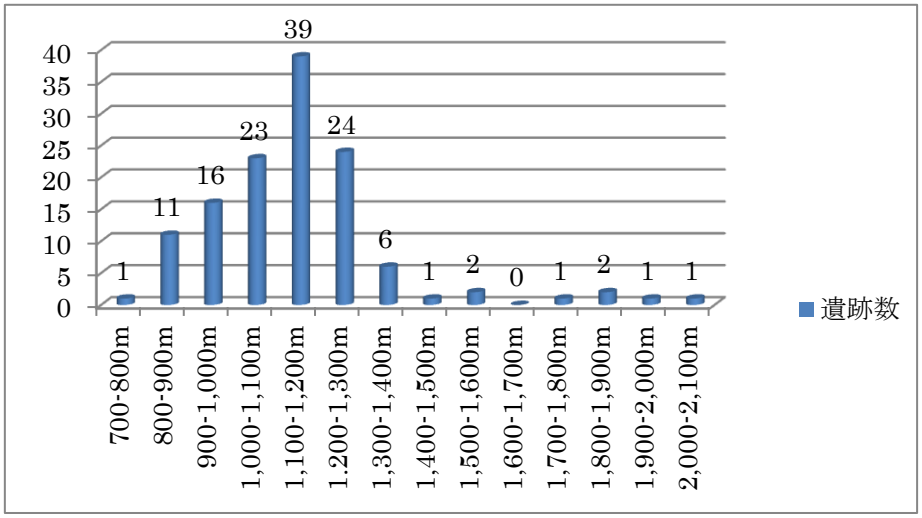
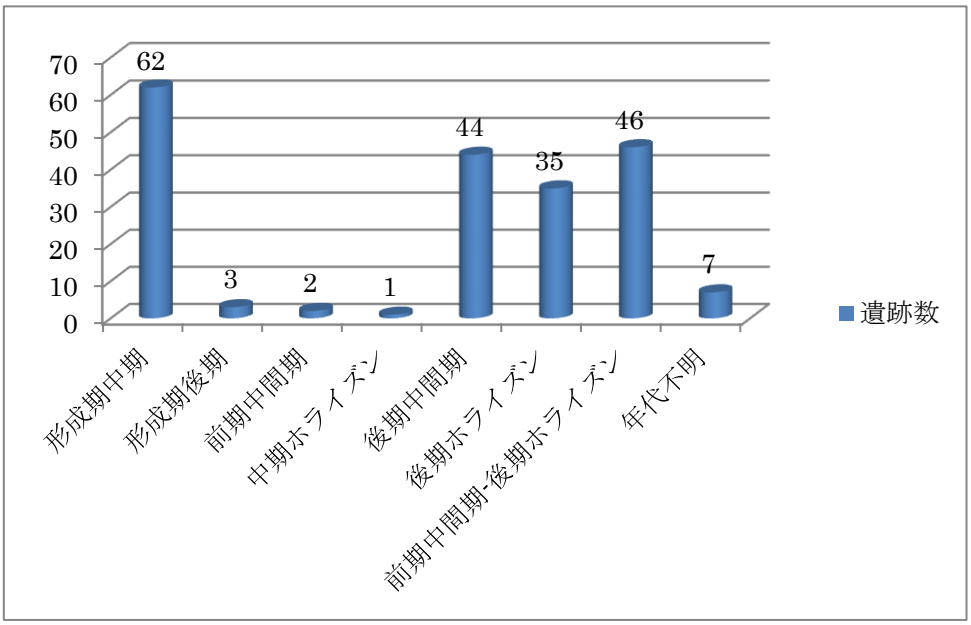


表 9−3　時期ごとの遺跡数



また、そのうちの 3 遺跡は、形成期後期（図 9-1、および図 9-2 のインガタンボ期に対応）まで継続的に利用された。遺跡分布調査では、形成期早期と形成期前期、ならびに形成期末期に属すると考えられる遺跡は確認されていない[1]。そのため、上記以外の登録遺跡は、形成期以降の時期に属するものである。登録された多くの遺跡では、地表面採集された土器の分析から、複数の時期にわたる活動の痕跡が認められている。

[1]第 3 章で述べたように、遺跡分布踏査はインガタンボ遺跡の発掘調査に先駆けて実施された。そのため、各遺跡の時期決定は、発掘によってえられた資料と確立した編年をもとに、後に再検討されたものである。

最後に、この踏査時には、ポマワカ市の中心地からやや北に向かった場所（図 9-1 の遺跡番号 66 のやや北東）で行われていた土木作業中に、完形の石皿が偶然検出された（写真 9-1）。その後、出土したと言われる場所に赴いて現地を確認したものの、その出土コンテクストは明確ではなく、また、周囲に遺跡と認定できる場所も存在しなかった。なお、この石皿は、サイズは一回り小さいものの、ペルー北部山地のチャビン・デ・ワンタル遺跡で出土した石皿[Lumbreras 1993]と形態的特徴が酷似している。

写真9-1　ポマワカ市近郊出土の石皿

9-2. ワンカバンバ川流域の形成期遺跡の形態的分類

遺跡踏査時に記録した建築データから、ワンカバンバ川流域における形成期遺跡の性格を明らかにすることを目的として、形態的特徴をもとに各遺跡を分類した（表 9-4）。表 9-4 の遺跡番号は、表 9-1 の遺跡番号と対応しているが、表 9-4 では形成期以外に属する遺跡は扱っていない。分類に際しては、形成期における建築の形態研究[加藤 1993; Moore 1996; Williams 1985, 1988]を参照し、まず建築の構成要素として「基壇」、「広場」、「テラス」、「部屋状構造物」、「部屋状構造物群」を、そしてそれらの下位レベルの建築要素として「壁（土留め壁と壁）[1]」を設定した。次いで、複数の建築要素の組み合わせである配置を、上位レベルのカテゴリーとして設けた。具体的には、「基壇・広場・テラス複合」と「基壇・テラス複合」がこれに相当する。なお、分類では、建築の構成要素の組み合わせである配置が明確に認識されない場合、確認される構成要素を遺跡全体の形態を表す指標として捉えている。また、踏査時において、地表面に建築が確認できず、土器片の存在だけを基準に登録した遺跡が数多く存在することから、「土器のみ」というカテゴリーを別に設け、これに対処した。

上記の分類の特徴としてあげられるのは、下位レベルのカテゴリーは、常に上位レベル

[1]カテゴリーにおいては、「土留め壁」と「壁」を合わせて「壁」としている。これは地表面の観察だけでは両者の差が時として明確ではないため、それぞれを個別のカテゴリー項目として分ける必要がないと考えられたためである。

のカテゴリーに含まれる可能性があることである。そのため、「基壇・広場・テラス複合」には、それよりも下位レベルにある「壁」が含まれている。ただし、「部屋状構造物」と「部屋状構造物群」は、建築の構成要素でありながら、それ自体が一つの遺跡形態、すなわち遺跡の建設プラン（配置）ともなりうる。そのため、より上位レベルのカテゴリーである「基壇・広場・テラス複合」と「基壇・テラス複合」には、「部屋状構造物」と「部屋状構造物群」は必ずしも含まれない。

以下、分類した各タイプの特徴と、インガタンボの発掘データ、および先行研究から想定されるタイプそれぞれの性格について記述する。

①「基壇・広場・テラス複合」

基壇、広場、テラスの複合形態である。1 遺跡のみ該当する。

②「基壇・テラス複合」

基壇、テラスの複合形態である。8 遺跡[1]がこれに該当する。

③「基壇」

基壇の存在のみが確認できる遺跡をこのカテゴリーとした。1 遺跡のみがこれに該当する。地表面を覆う草木の影響もあり、他の建築要素は確認されていない。発掘調査が行われず、表面観察のみに依拠しているため詳細は不明であるが、今後の調査によって他の建築の構成要素が確認され、「基壇・テラス複合」となるような可能性もある。

④「テラス」

テラスの存在のみが確認できる遺跡をこのカテゴリーとした。「基壇」として分類された遺跡と同様の理由から、このカテゴリーに分類された遺跡も、将来的に「基壇・テラス複合」となる可能性はある。3 遺跡がこれに該当する。

これらの四つのカテゴリーの遺跡は、神殿遺跡であった可能性がある。それは、形成期の神殿の指標とされる「基壇」や「テラス」といった建築特徴の存在、建造物の規模、もしくは非居住的性格などが、これらの遺跡に認められるためである。なお、ワンカバンバ川流域では、第 4 章で詳述したインガタンボの事例のように、その立地や仕上げなどから非居住的性格の強い部屋状構造物が基壇上に配置される場合がある。このように、部屋状構造物が神殿に組み込まれている場合には、それは神殿の一要素として捉える。

[1]インガタンボでは、発掘調査によってポマワカ期には「基壇・テラス複合」、インガタンボ期には「基壇・広場・テラス複合」が存在したことが明らかであるが（P.312）、ここではインガタンボは後者に属するものとして遺跡数を数えている。

表9-4　ワンカバンバ川流域における形成期の諸遺跡と建築の形態的分類、および土器分布範囲面積

遺跡番号	遺跡名	時期		遺跡の形態とカテゴリー									土器分布範囲面積（m²）
				1	2	3	4	5	6	7		8	
		ポマワカ期	インガタンボ期	基壇・広場・テラス複合	基壇・テラス複合	基壇	テラス	部屋状構造物群	部屋状構造物	土留め壁	壁	土器のみ	
4	グァヤボ	○			○	○	○			○	○		1332.8
5	サポタル	○										○	600
10	セロ・リモン 4	○							○		○		45.1
12	リモン 2	○							○	○	○		286.9
13	リモン 3	○							○		○		739.8
14	リモン・セコ 1	○			○	○	○		○		○		5626.5
15	リモン・セコ 2	○										○	596.3
17	ペドレガル 1	○					○		○		○		803.8
18	ペドレガル 2	○										○	591.7
24	イェルマ 3	○							○	○	○		147.2
25	イェルマ 4	○							○	○	○		610.9
26	イェルマ 5	○						○	○		○		1434.7
27	イェルマ 6	○			○	○	○			○	○		13526
28	モジェ	○						○	○	○	○		1971.6
29	アラビスカ 1	○							○	○	○		973.6
30	アラビスカ 2	○							○	○	○		343.6
32	エル・アレナル 1	○									○		839.2
33	エル・アレナル 2	○										○	415.4
34	エル・アレナル 3	○										○	282.5
35	エル・アレナル 4	○	●						○ ●		○ ●		337.7
37	セロ・ラ・パス	○					○		○		○		1797.5
39	サン・ホセ・デ・オブレーロ 2	○							○		○		2584.4
41	ピエドラ・パラーダ 1	○				○			○		○		1488.4
43	パタコン 1	○									○		776
44	パタコン 2	○								○	○		791
46	パタコン 4	○										○	723.8
47	パタコン 5	○										○	1391.7
50	カニャリアッコ 3	○	●		○ ●	○ ●	○ ●			○ ●	○ ●		5704.4
52	サポテパンパ 1	○							○	○	○		1861
53	サポテパンパ 2	○									○		337.7
54	サポテパンパ 3	○										○	387.9
56	ナランホ 2	○										○	407.7
57	ナランホ 3	○									○		1899.6
61	エル・レホ	○			○	○	○		○	○	○		2249.3
62	リモンパンパ	○								○	○		315.6
63	インガタンボ	○	●	●	○ ●	○ ●	○ ●	○ ●	○ ●	○ ●	○ ●		290433.8
64	ランパラン	○			○	○	○			○	○		2379.8
66	ロマ・デ・サポテパンパ	○										○	4180.5
67	ワカ・デ・サポテパンパ 1	○										○	433.5
68	ワカ・デ・サポテパンパ 2	○			○	○	○				○		2600.3
69	ワカ・デ・サポテパンパ 3	○										○	601.3
70	ワカ・マヨール	○					○						1563.3
72	アルガロボ 1	○										○	589.7
73	アルガロボ 2	○										○	183.3
76	カサ・ケマーダ	○										○	178.1
77	ラス・フンタス	○										○	788.5
80	ピエドラ・グランデ	○							○		○		352
82	モンテ・グランデ 2	○										○	107.4
83	ワランゴ・パンパ 1	○										○	337
85	サン・アントニオ	○			○	○	○			○	○		1913.5
86	セロ・サン・クリストバル	○									○		228.5
88	チャウペ 1	○										○	162.7
94	アルカパロッサ 1	○							○	○	○		3997.4
96	アルカパロッサ 3	○										○	2205
104	ミラドール	○										○	228
105	サン・ホセ 1	○										○	176.4
108	チンゲル	○							○		○		874.8
114	ラ・ワカ 2	○									○		3822
115	ラ・ワカ 3	○						○	○		○		2448
121	ラス・バルサス	○										○	1183.1
122	プラヤ・アスール 1	○										○	360.7
125	マタラ 1	○										○	332.9

○はポマワカ期　●はインガタンボ期

⑤「部屋状構造物群」

様々な規模の複数の部屋状構造物が確認できる遺跡をこのカテゴリーとした。構造物の確認作業は、発掘調査ではなく、あくまで地表面観察にもとづくものであるため、構造物間の関係性が明瞭でない場合が多い。したがって、複数の部屋の全体的配置、すなわち構造物の全体プランは、とくに考慮していない。5 遺跡がこれに該当する。

⑥「部屋状構造物」

単体の部屋状構造物が確認できる遺跡をこのカテゴリーとした。このカテゴリーに属する遺跡は、調査の進展によって「部屋状構造物群」に含まれるようになる可能性がある。18 遺跡がこれに該当する。

⑦「壁」

基壇や部屋状構造物などを形成してはいないが、壁や土留め壁が地表面に確認できる遺跡をこのカテゴリーとした。14 遺跡がこれに該当する。

⑧「土器のみ」

地表面で建造物を確認できず、土器の存在のみから登録した 25 遺跡がこれに該当する。

これらの四つのカテゴリーの遺跡は、居住遺跡であったと考えられる。それは、形成期の神殿の指標とされる建築特徴がみられず、建造物の規模や形態的特徴から、神殿と比較した際に住居的性格が想定されるためである。

表 9-4 の右欄は、各遺跡の規模を示したものである。この規模は、各遺跡の地表面で視認できる建造物の範囲、あるいは地表面における土器の分布範囲から推定されている。なぜならば、遺跡踏査に際しては、建造物が残存していない場合においても、地表面の考古遺物の存在から遺跡として認定、かつ登録を行ったたためである。また、建造物の保存状況が悪く、数本の壁のみが存在するような場合、もしくは広範囲に石列が散見される場合も同様に、遺構が存在する地点だけではなく、その周囲における土器の分布範囲を含めて一つの遺跡として記録した。この場合、現代の諸活動により、遺跡の破壊が進んでいるような状況では、遺跡の規模が実際よりも極度に小さく想定される可能性がある。

さらに、形成期に属する大半の遺跡では、地表面に形成期以降の時期の土器が確認されることから、現在、地表面で確認される構造物の範囲は形成期だけではなく、形成期以降の時期に対応することも考えられる。これらの問題には、発掘調査を実施したインガタンボ遺跡における建材や建築技法、あるいは他地域の先行研究との比較を通じて、形成期と形成期以降に属する建造物とを判別することで対処した。

以上の点に留意しつつ、次に、建造物の形態と規模の関係について検討する。カテゴリ

ー1 の「基壇・広場・テラス複合」とカテゴリー2 の「基壇・テラス複合」に属する遺跡は、分類項目ともなった建築の構成要素が組み合わされた配置を有する。そのため、他のカテゴリーに属する諸遺跡よりも必然的に規模が大きい。実際に、「基壇・広場・テラス複合」を有するインガタンボ遺跡は、その建築的複合性によって、流域内で最大規模を誇っている。インガタンボ遺跡に続くのは、「基壇・テラス複合」を有する遺跡であるが、単純に規模だけを比較した場合、「基壇・テラス複合」に属する諸遺跡に交じって、「部屋状構造物群」や「部屋状構造物」、もしくは「土器のみ」に属する遺跡が上位に位置づけられる場合がある。

この理由としては、現代の耕作や居住活動の影響などもあって、土器の分布範囲が広くみられること（ロマ・デ・サポテパンパ、アルカパロッサ 3、パタコン 5、ラス・バルサス）や、形成期と形成期以降に属する構築物が混在しながら、広範囲に存在するために、遺跡の表面積が拡大したこと（アルカパロッサ 1、ラ・ワカ 2、サン・ホセ・デ・オブレーロ 2、ラ・ワカ 3、モジェ、ナランホ 3、サポテパンパ 1、イェルマ 5、アラビスカ 1、チンゲル、エル・アレナル 1）が考えられる。とくに注目すべきは、部屋状構造物を有するほぼ全ての遺跡で、形成期以降の活動が確認されることである。これらの部屋状構造物の築造法は、インガタンボ遺跡の発掘調査から検出された形成期の部屋状構造物とは、建材や石積み、あるいは壁の上塗りなどといった仕上げの点で異なっている。

アンデス形成期における遺跡全体を貫く建築プランとしての「部屋状構造物群」の事例は、形成期後期のカスマ川流域[Brennan 1978, 1980]と形成期末期のモチェ川流域[Pozorski and Pozorski 1987]で報告されている。しかし、ワンカバンバ川流域の遺跡踏査では、形成期に属したうえで、部屋状構造物を遺跡の全体プランとする遺跡は確認されない。たとえば、イェルマ 5 遺跡の部屋状構造物群は、ペルー文化庁による遺跡地図の作成に際して、他地域の事例との比較をもとに後期中間期のものと位置づけられている[Ravines 1983]。したがって、詳細については個々の遺跡における発掘調査の実施を待たなければならないものの、今回の分類に際しては、イェルマ 5 遺跡と同様の建築特徴を有するインガタンボ遺跡以外の「部屋状構造物群」は、後期中間期に属するものとした。

その一方で、表中の遺跡規模を比較すると、「基壇・テラス複合」に属する遺跡と「基壇」、あるいは「テラス」に属する遺跡間では、明確ではないものの、全体的に前者が後者よりも大規模であるという傾向が認められる。「基壇・テラス複合」のグアヤボ遺跡は小規模ではあるが、これは遺跡が現代の舗装道路によって破壊されており、実際よりも遺跡範囲が小さく算出されていることに原因があると考えられる。

表面採集による土器の分析によると、神殿遺跡と想定される（カテゴリー1～カテゴリー4）13 遺跡中の 11 遺跡は、ポマワカ期（形成期中期）においてのみ活動が認められる。このように、特定地域内に複数の神殿が近接して存在する要因としては、ヘケテペケ川中流域アマカス複合の事例のように、近接地へと神殿が移転を繰り返す「移転型神殿更新」[鶴見 2008a]が考えられる。しかし、鶴見が移転型神殿更新を論じた際に根拠とした、限定さ

れた地域内での神殿の密集状況や神殿間の建築軸の一致、または移転を繰り返した神殿間相互の可視的な関係は、ワンカバンバ川流域では確認できない。たとえば、インガタンボとイェルマ 6、リモン・セコ 1、カニャニアッコ 3 といったワンカバンバ川流域内で規模の大きな神殿の建築軸は、それぞれ異なっている。そして、インガタンボの場合、互いに視認できるような神殿は、最も近接した神殿であるエル・レホのみであり、他の神殿はみることができない。さらに、アマカス複合の事例では、移転の要因としてワイコ(Huayco)と呼ばれる鉄砲水、もしくは土石流の影響が推測される。それに対して、ワンカバンバ川流域の全ての神殿は、河川から一段高い台地や丘陵上に建設されている。また、現在の状況を鑑みると、神殿の建設された場所は、河川両側の山から派生するワイコの影響をうけない地点であるだけでなく、ワンカバンバ川の氾濫時にも浸水しない[1]。このことは、ワンカバンバ川流域の神殿建設に際して、はじめからワイコや水害の影響を受けにくい場所が選定されたことを示唆する。このように、ワンカバンバ川流域の神殿の立地状況は、アマカス複合のそれとは大きく異なる。したがって、ポマワカ期に複数の神殿が認められるという現象は、移転の結果ではなく、全ての神殿が同時に存在した結果であると推測される。

なお、ワンカバンバ川流域の諸遺跡を建築的特徴から分類したところ、実際には登録遺跡の大半はカテゴリー7 の「壁」とカテゴリー8 の「土器のみ」に属していることが明らかとなった。これらの遺跡の詳細は不明であるが、いずれも単純なマウンドであり、その規模も他のカテゴリーの遺跡と比べて極めて小規模である。

9-3. ワンカバンバ川流域における遺跡間の関係

本節では、前節で行った形態的分類にもとづいて、ポマワカ期とインガタンボ期におけるワンカバンバ川流域社会の遺跡間関係について論じる。

議論の基礎となるのは、主として遺跡踏査データである。基本的に、遺跡地表面の観察では、その遺跡に存在した全ての時期の人間活動の痕跡、つまりは様々な時期の建築や土器などの考古遺物が散見される。そのため、複数の時期の建築が地表面で重なり合うことによって、視認できる建造物と遺跡で採集される土器との時期的関係を把握することが困難な場合もある。しかしながら、前節で述べたように形成期とそれ以外の時期では、同じ「部屋状構造物群」であっても建築プランや築造法などに差異がある。そのため、発掘調査を伴わないという限界はあるにしても、上記の差異を考慮し、かつ前節の分類を用いることで、建築特徴とその規模から遺跡間関係を論じることが可能であると考える。

インガタンボ遺跡では、発掘調査にもとづいて 3 時期（ワンカバンバ期、ポマワカ期、インガタンボ期）におよぶ建設過程が明らかとなっている。そして、インガタンボ期においては「基壇・広場・テラス複合」、ポマワカ期には「基壇・テラス複合」、ワンカバンバ

[1]2009 年には、ペルー北部山地における降水量が多く、その結果、ワンカバンバ川が氾濫して、ワンカバンバ川流域では家や橋、田畑が流されるなどの大きな被害が生じた。しかし、その際にも、神殿が立地している場所では、水害の影響は全く認められなかった。

期には「基壇」が確認されるという時期的な建築の変化も明らかとなっている。したがって、インガタンボ遺跡においては、各時期で建築分類に差を設ける必要がある。

以下の記述ではこれを考慮しながら、ワンカバンバ期から時期ごとに議論を進める。この際、注目されるのは、各時期における遺跡数や遺跡規模、建築的特徴による分類のバリエーションとその分布状況である。

まず、神殿遺跡についてである。ワンカバンバ川流域でワンカバンバ期の活動が明らかとなっているのは、現状ではインガタンボだけである。小規模ではあるが、「基壇」の存在が確認されており、当該時期の流域内で唯一の神殿であったと考えられる。しかし、基壇の規模を考慮すると、あくまで小集団の利用にとどまったものと思われる[1]。

続くポマワカ期になると、62 遺跡で活動が確認されるようになるなど、ワンカバンバ川流域の社会的状況は大きく変化する（表 9-5; 図 9-3, 9-4)。表 9-5 は、各神殿遺跡の形態的特徴と遺跡分布調査時に記録した土器分布範囲面積、つまりは遺跡面積の概算を示したものである。また、図 9-3 と図 9-4 は、前節で実施した分類にもとづくポマワカ期における遺跡分類分布図である。これらによれば、ポマワカ期では、カテゴリー1「基壇・広場・テラス複合」は確認されない。しかし、カテゴリー2「基壇・テラス複合」が 9 遺跡、カテゴリー3「基壇」が 1 遺跡、カテゴリー4「テラス」を有する 3 遺跡の存在が認められる。つまり、神殿の総数が 13 遺跡、そして形態のバリエーションが大きく 3 タイプと、前時期と比べて、神殿の数やバリエーションが大きく増加するのである。

また、興味深いことに、流域内の全ての神殿が、現在のポマワカ市周辺に集中している。これらの神殿は、ほぼ等間隔に 4km 前後という一定の距離[2]をおいて位置するものの、地形や植生の影響もあって、神殿間の立地にお互いを視認できるような関係は認められない。

さらに、一概に神殿と称しても、それぞれの神殿の規模や形態は多様である。たとえば、インガタンボ、イェルマ 6、カニャリアッコ 3、リモン・セコ 1 は、他の神殿よりも大規模である。そして、そのなかでもとくにインガタンボ、続いてイェルマ 6 の規模が突出している。ただし、上記の 4 神殿以外の神殿の規模はほぼ一様である。この要因としては、建築の増改築、すなわち神殿更新回数の差や利用期間の差、または神殿間のヒエラルキーの存在など様々な背景が考えられる。確かにインガタンボは、ワンカバンバ川流域内で唯一、ワンカバンバ期からの活動が認められる遺跡であり、その利用期間は他よりも長い。また、流域内で三番目に大規模なカニャリアッコ 3 遺跡も、ポマワカ期とインガタンボ期の利用がみられる。しかしながら、二番目の規模を誇るイェルマ 6 は、表面調査によれば、ポマワカ期の活動しか確認されない。さらに、二時期の利用が認められるカニャリアッコ 3 と三番目に大きく、ポマワカ期のみに利用されたリモン・セコ 1 との規模差はほとんどない。

[1]第 4 章で述べたように、ワンカバンバ期では、主要基壇のみで建設活動がみられる。そのため、神殿建築の総面積は、インガタンボ期に築かれた A 基壇全体の半分以下である。
[2]「基壇・テラス複合」の遺跡間の最大距離は約 6.7km であるが、その中間には「基壇」や「テラス」を有する遺跡が存在している。

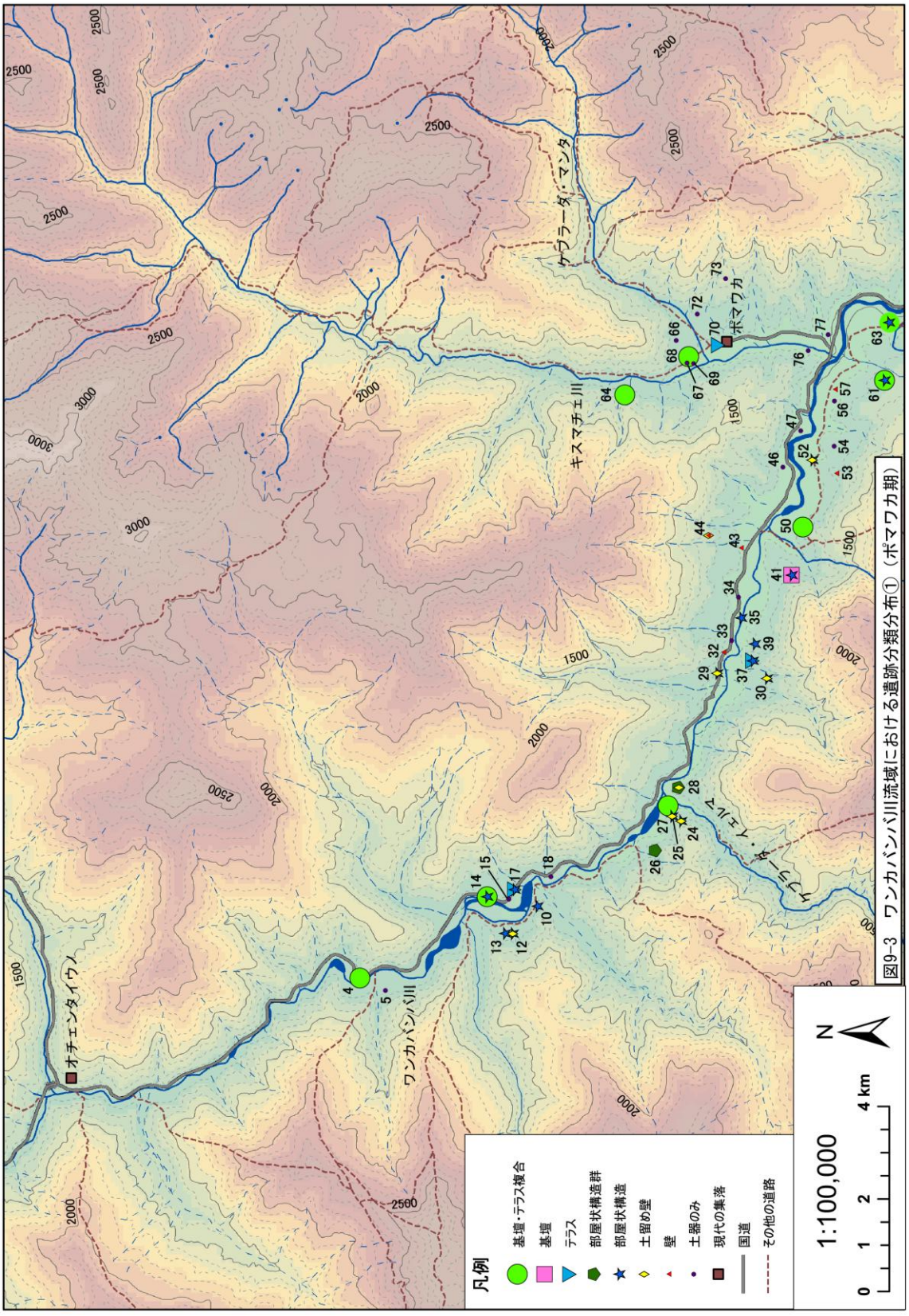


図9-3　ワンカバンバ川流域における遺跡分類分布①（ポマワカ期）

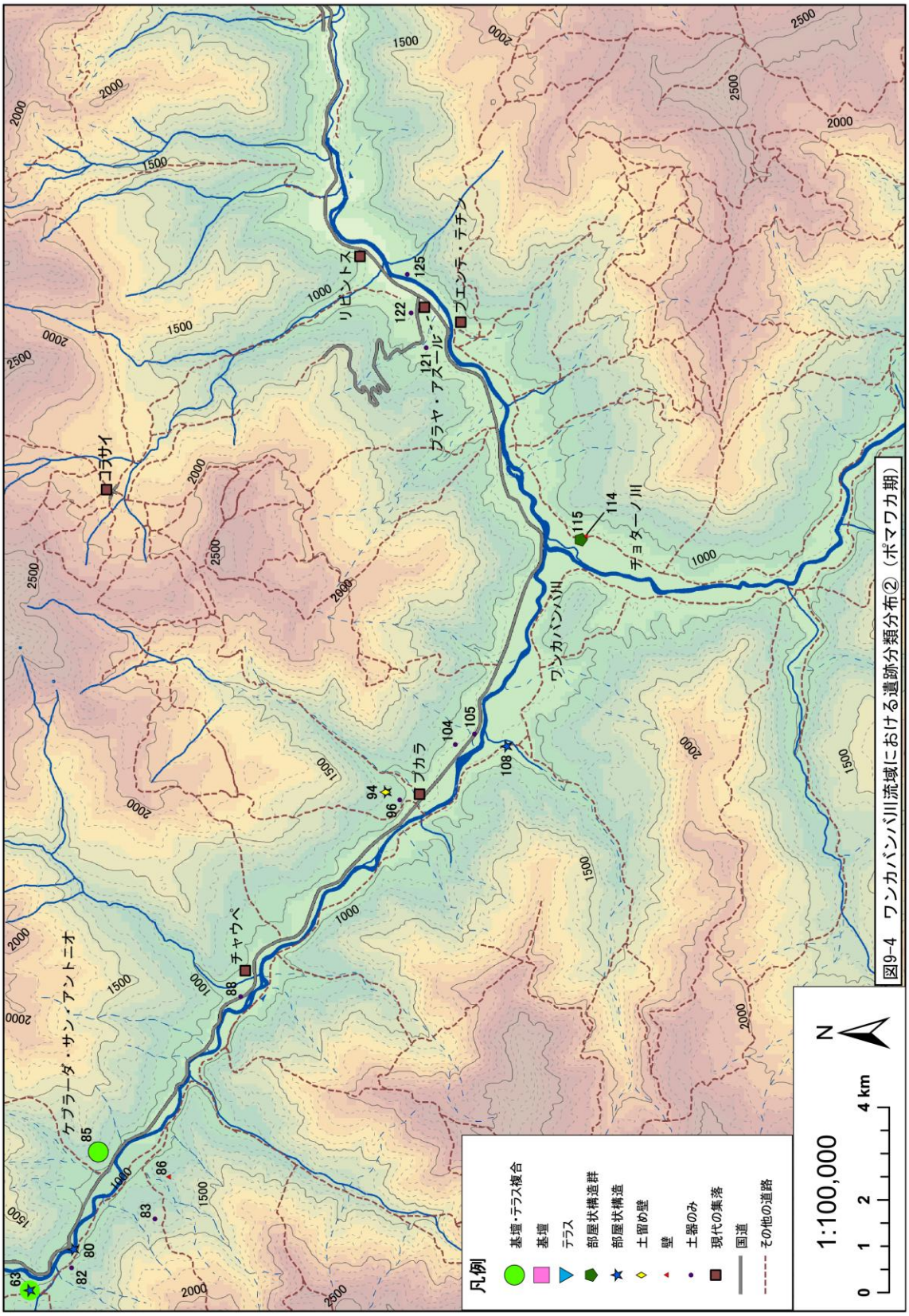


図9-4　ワンカバンバ川流域における遺跡分類分布②（ポマワカ期）

表9-5　ワンカバンバ川流域における形成期神殿とその形態的特徴

遺跡番号	遺跡名	時期		遺跡形態				土器分布範囲面積（㎡）
				カテゴリー1	カテゴリー2	カテゴリー3	カテゴリー4	
		ポマワカ期	インガタンボ期	基壇・広場・テラス複合	基壇・テラス複合	基壇	テラス	
63	インガタンボ	○	●	●	○			290433.8
4	グァヤボ	○			○			1332.8
14	リモン・セコ 1	○			○			5626.5
27	イェルマ 6	○			○			13526
50	カニャリアッコ 3	○	●		○ ●			5704.4
61	エル・レホ	○			○			2249.3
64	ランパラン	○			○			2379.8
85	サン・アントニオ	○			○			1913.5
68	ワカ・デ・サポテパンパ 2	○			○			2600.3
41	ピエドラ・パラーダ 1	○				○		1488.4
17	ペドレガル 1	○					○	803.8
37	セロ・ラ・パス	○					○	1797.5
70	ワカ・マヨール	○					○	1563.3

○はポマワカ期　　●はインガタンボ期

そして、インガタンボの利用期間は、確かに他の神殿より長期的であるものの、他との規模差は極めて大きい。これらのことを考慮すると、神殿の利用期間の差は、イェルマ 6 とリモン・セコ 1 を除く、ポマワカ期だけの活動が認められる神殿の規模がほぼ同じであることの一つの要因となっているようにみえる。しかし、流域内で極端に突出した規模を持つインガタンボや、ポマワカ期のみの活動が確認されながらも突出した規模を持つイェルマ 6 の存在を鑑みると、神殿間の規模差には、利用期間の差以外の要因が関与していることが示唆される。

それでは、神殿の規模差は何を表しているのだろうか。結局のところ、神殿規模の差とは、建設活動における労働投下量の差が反映されたものである。また、現状ではポマワカ期に存在した神殿間において、利用期間の差は明白ではないため、以下では、神殿間の規模差について、労働投下量という点から検討していく。

第 4 章でも指摘したように、ポマワカ期のインガタンボでは、A 基壇と B 基壇という二つの「基壇・テラス複合」が隣接して建設されている。そのため、個々の基壇をそれぞれ固有の神殿とし、独立した存在としてみた場合、神殿建築の分布面積は A 基壇と B 基壇が広場を介して組み合わされたインガタンボ期の半分以下となる。仮にポマワカ期の面積が、インガタンボ期の 2 分の 1 程度と考えても、ワンカバンバ川流域で二番目に大規模であるイェルマ 6 の約 2 倍である。つまり、遺跡の表面積、ならびにその形態的複雑性を考慮すると、インガタンボが、ポマワカ期のワンカバンバ川流域内で最も労働投下量の多い神殿であることが明白である。そして、次にイェルマ 6、それ以外の「基壇・テラス複合」、続いて「基壇」、あるいは「テラス」を有する神殿が並ぶ。

これらのことから、遺跡の表面積、およびその形態的複雑性を考慮すると、ポマワカ期のワンカバンバ川流域内の神殿のうち、中心的役割を果たしたのが、カテゴリー2「基壇・テラス複合」であり、これにカテゴリー3 の「基壇」とカテゴリー4 の「テラス」が続くことになる。ただし、インガタンボとイェルマ 6 のように、同カテゴリーに位置づけられる遺跡間で明確な規模差が確認されるようになることから、流域内の神殿間にもヒエラルキーが存在し、他の神殿よりも集中的に労働が投下される神殿が現れるようになった可能性はある。

その一方で、ポマワカ期のワンカバンバ川流域では、複数の神殿がほぼ等間隔に隣接して建設されているため、流域全体を統合するような単一の集団は存在せず、神殿を核として小規模な集団が複数存在していたと考えられる。しかし、それらの神殿のなかでもインガタンボは、神殿を支える集団の規模が大きく、より多くの労働力を有していた。確かに、インガタンボの神殿利用期間は、他の神殿よりも長期間におよぶものの、他の神殿とは異なり、遺跡内に大規模で独立した複数の基壇が同時に建設されていることからも、インガタンボへの労働投下量の大きさは明らかである。このことは、インガタンボが当該時期のワンカバンバ川流域における社会的統合に際して、より中心的な役割を果たしていた神殿であったことを示唆する。

次に、神殿間の関係だけでなく、神殿と神殿を支えた人々が生活した居住施設の関係について検討したい。ポマワカ期のインガタンボでは、神殿内に部屋状構造物が確認される。しかし、第 4 章でも指摘したように、その配置や仕上げなどから、それは単なる居住施設であったとは考えられない。また、その規模を考慮しても、神殿における活動を支えた全ての人々が居住可能な空間ではない。したがって、神殿における諸活動を支える集団は、基本的に神殿の外に居住していたことになる。アンデス形成期研究において、神殿とそれを支える居住施設の関係は、あまり明確ではなく、報告例も限られている。数少ない事例であるペルー北部ヘケテペケ川中流域のアマカス複合（モンテ・グランデ[Tellenbach 1986]とラス・ワカス[鶴見 2008a]）では、神殿に近接して居住区が確認されている。ただし、これらの居住区は、その立地や仕上げなどから、一般成員の住居ではなく、神殿で執り行われた儀礼のリーダーのためのものであったと考えられている。そして、鶴見は、神殿の至近や同じ高度の段丘上にも居住施設が認められないことから、一般成員の居住域を耕作地に近い、谷底と仮定して、神殿と居住施設の分化が存在したことを論じた[鶴見 2008a:280]。これまでにも述べてきたように、インガタンボでは神殿の至近に居住区は確認されていない。これに対して、居住遺跡（カテゴリー5〜カテゴリー8）は、とくにイェルマ 6 遺跡からインガタンボ遺跡の間において、谷底に近い耕作地を利用できる場所に集中してみられる。これらのことを総合すると、ポマワカ期のワンカバンバ川流域においても、神殿、もしくはそれに近接して居住したのは極めて限られた人々だけであった可能性が示唆され、神殿と居住域という空間分化が生じはじめたことが推測される。

その一方で、インガタンボ期になると、ワンカバンバ川流域では遺跡数が大幅に減少するとともに、ポマワカ期までに存在した神殿の大半で活動がみられなくなる（図 9-5, 9-6）。図 9-5 と図 9-6 は、前節で実施した分類にもとづくインガタンボ期における遺跡の分類分布図である。この図からも明らかなように、インガタンボ期において利用が認められる神殿は、インガタンボとカニャリアッコ 3 のみである。

また、これらの 2 遺跡以外に、エル・アレナル 4 で部屋状構造物が確認されているが、現代の居住による破壊が極めて進んでおり、詳細は不明である。

インガタンボ期の特徴は、ポマワカ期までにみられた複数の中規模（カテゴリー2）、ならびに小規模（カテゴリー3 とカテゴリー4）神殿の大部分が放棄されることである。そして、その代わりに、巨大な建築複合であるカテゴリー1「基壇・広場・テラス複合」がインガタンボに現れる。

すでにポマワカ期にその傾向がみられたものの、この時期のインガタンボは規模の面において他の神殿を圧倒しており、インガタンボ以外の唯一の神殿であるカニャリアッコ 3 は、インガタンボの 1/5 程度の規模しか持たない。つまり、インガタンボ期には、ワンカバンバ川流域における神殿建設活動に関わる人的エネルギーが、インガタンボへ集中したことが認められるのである。また、インガタンボでは、ポマワカ期までにみられた独立した複数の基壇が、更新による大規模化とともに広場を挟んで繋がり「基壇・広場・テラス複合」複合が形成されており、単なる労働投下量の増大だけでなく、建築の洗練、および統一がみられる。これらのことから、ワンカバンバ川流域では、インガタンボを核として流域内を統合するような社会が出現したと考えられる。

次に、神殿と居住施設の関係について述べてみたい。流域内で遺跡数が減少したこともあり、インガタンボ期には、居住施設と考えられる遺跡がエル・アレナル 4 以外に確認されていない。しかしながら、インガタンボで神殿が大規模化することから、神殿更新に際して、ポマワカ期以上の大規模な労働力が投下されたことが推測できる。単純な類推は避ける必要があるものの、インガタンボの規模はエル・アレナル 4 の約 860 倍である。それを考慮すると、居住遺跡は確認されていないものの、この時期のワンカバンバ川流域で人口が極端に減少したとは考えにくい。この状況に関しては、遺跡の保存状態や現代の集落の存在などによって、単にこの時期に属する遺跡（とくに居住施設）が、現状では確認できないだけである可能性がある。なぜならば、水利や農耕との関係において、形成期に居住に適していた土地が、現在においても居住地や耕作地として適しており、継続的に利用されていることは十分に考えられるからである。あくまでも仮定ではあるが、ポマワカ期と同様にインガタンボ期においても、神殿と居住域といった空間分化が存在したとすれば、耕作地へのアクセスに適した現代の諸集落と同様の場所が、居住域として選択されていたことが推測される。

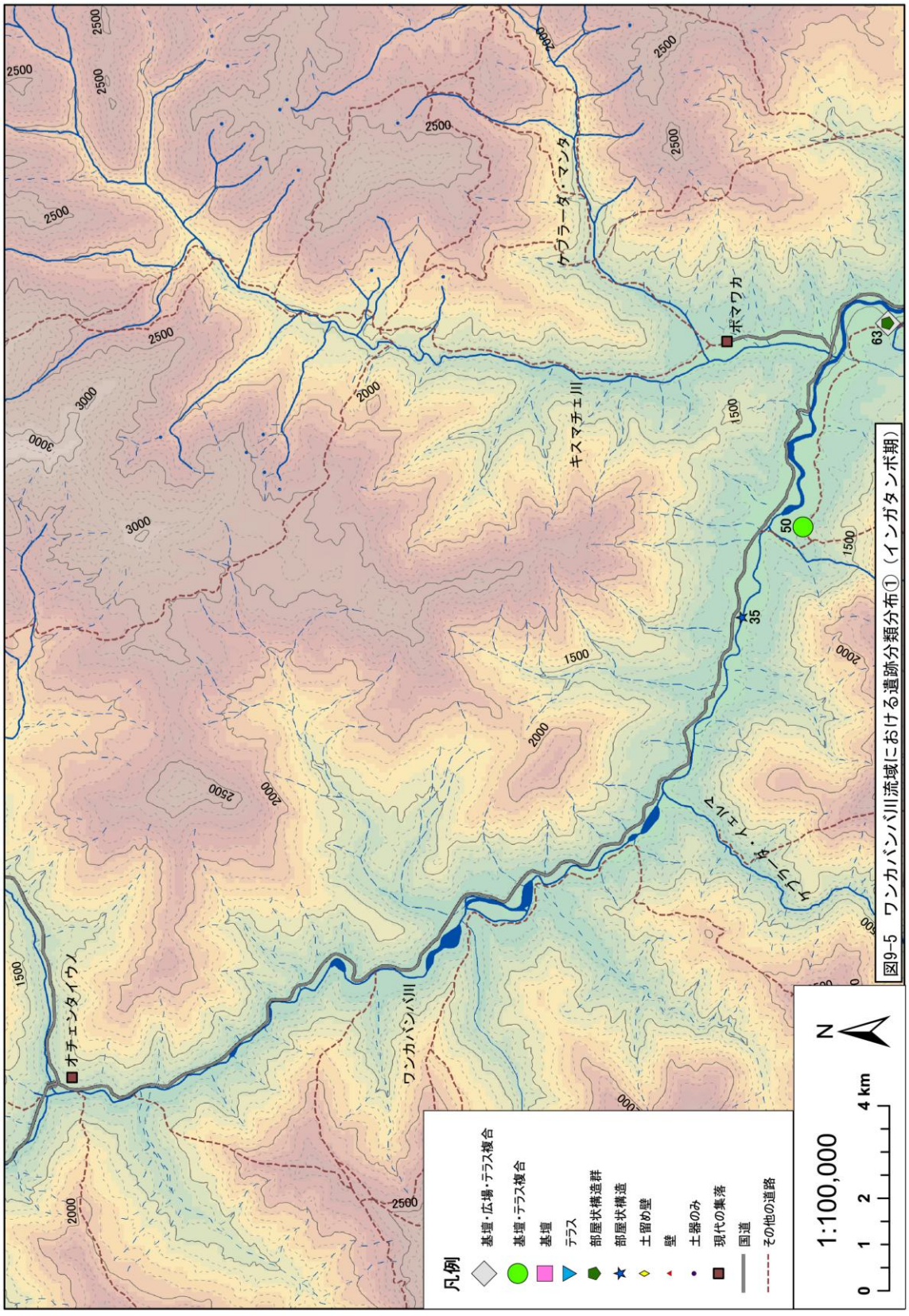


図9-5　ワンカバンバ川流域における遺跡分類分布①（インガタンボ期）

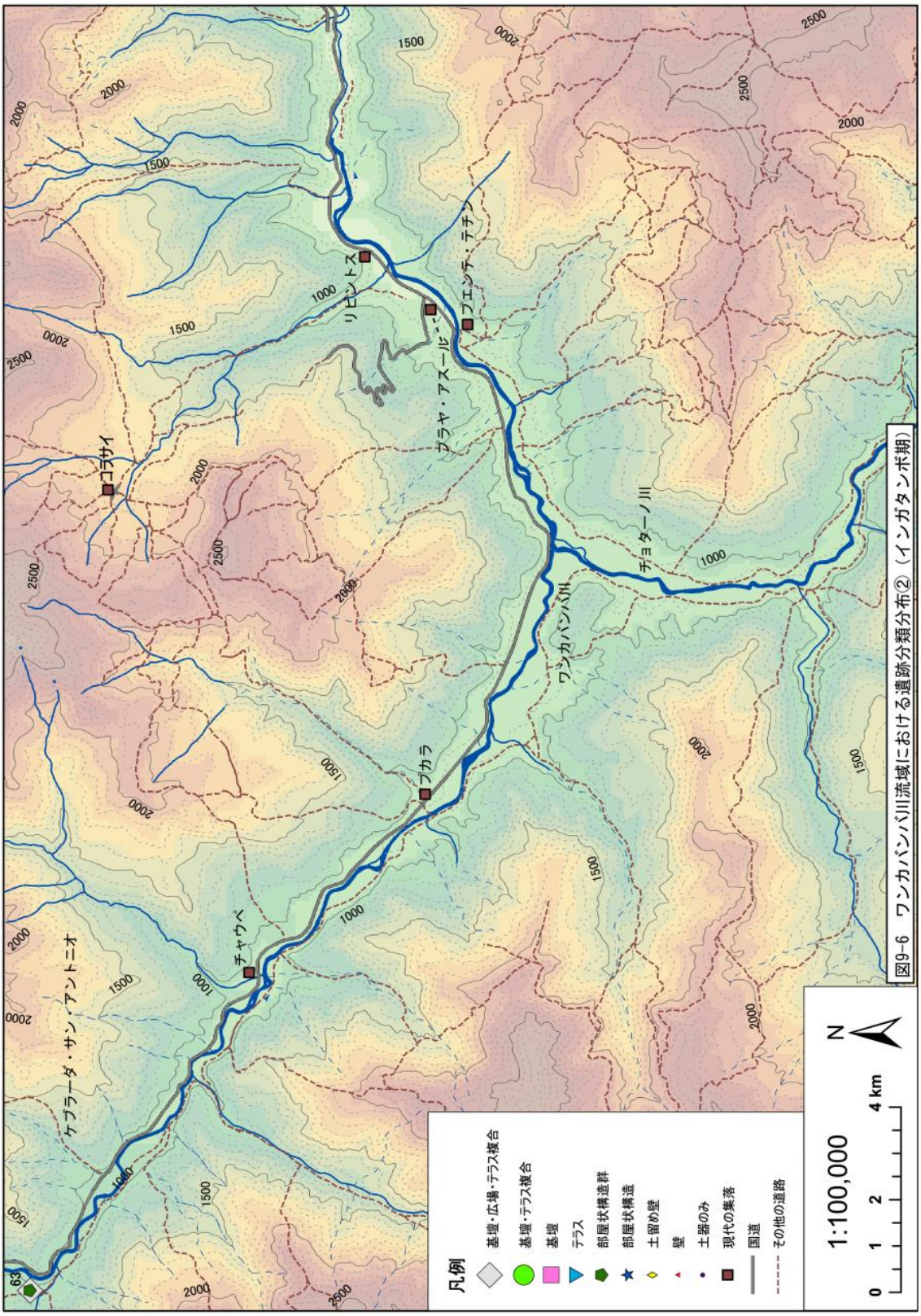


図9-6　ワンカバンバ川流域における遺跡分類分布②（インガタンボ期）

9-4. ワンカバンバ川流域における地域間ルート

前節までに述べてきたように、ワンカバンバ川流域では、ポマワカ期から複数の神殿が現れるが、各神殿の形態、ならびに規模には多様性がある。したがって、本節では、その多様性の背景について、とくに流域内の特定の神殿が他の神殿よりも大規模化する要因について、ワンカバンバ川流域の生態環境との関連から論じていく。

ワンカバンバ川流域の遺跡の大半は、水源となるワンカバンバ川やワンカバンバ川に注ぎ込む支流、またはケブラーダ近くに位置している。これは、水源となる河川からの距離が重要視された結果であると考えられる。こうした遺跡立地には、ワンカバンバ川流域の東に位置する北部熱帯低地のバグアの遺跡立地との類似が認められる。そして、バグアを調査したシャディは、農耕や川漁など人々の生活における水の重要性をその要因にあげている[Shady 1973: 91, 1974: 582]。また、ワンカバンバ川の河谷底部と両側にそびえる山の斜面は、現在、主として耕作地として利用されている。本章で指摘したように、遺跡の大半は標高 1,300m までの場所に集中しており、山の斜面だけでなく、河谷底部の耕作地を効率的に利用できる位置にある。そのため、形成期においても農耕に適したそれらの土地が耕作地として利用されてきたことが想定される。これを支持するように、ワンカバンバ川流域の遺跡分布を概観すると、遺跡の多くは流域内でも谷幅が広く、かつ耕作地に適した谷底の面積が広いポマワカ市やプカラ市周辺に密集している。なかでも、遺跡分布がより集中するのは、現代のポマワカ市の周囲である。その一方で、ポマワカ市よりも河谷底部の耕作地面積が広大なプカラ市周辺は、形成期のセトルメントがほとんどみられないだけでなく、神殿にいたっては皆無である。したがって、ワンカバンバ川流域社会における神殿建設に際しては、水利と農耕以外の要因が重要視されていた可能性がある。ここで注目したいのがワンカバンバ川流域の全ての神殿が、ワンカバンバ川と支流やケブラーダとの合流点、あるいは現代においても山を越えた隣接地域への徒歩移動の際に使用される小路との合流点に位置することである。なぜならば、一般にアンデスでは、複雑で高低差の激しい地形の影響をうけて、山の尾根や河川流域を地域間ルートとして利用することが多いためである。後述するように、現代の事例を鑑みると、ワンカバンバ川流域においても同様の傾向がみられるようである。

このようにして、遺跡分布から導き出された上記の仮説を明らかにするために、本節ではまず、遺跡踏査の結果と地形、および地域住民へのインタビューから想定されるワンカバンバ川流域における地域間ルート[1]について論じる。この際、本論では、現在のルートの存在も考慮するが、ルートはそれを建設した社会の政治的、経済的要因を反映するため[Topic and Topic 1983]、現在の事例をそのまま適用することはできない。ただし、現代において徒歩移動や動物を伴う徒歩移動の際に利用されている道の多くは、河川や山の尾根

[1]インカ道のように石造りの舗装がされているものだけでなく、踏み固められただけの小径（path）も含む。これは、インカ道のようなフォーマルな道とは異なり、小規模でプランニング等はみられず、必要性の結果生じ、重複するという特徴を持つ[Trombold 1990]。

沿いに位置しており、形成期においても使用されていた可能性を考慮する必要はある。また、特定の目的地への移動に際して、移動の目的や状況に応じて複数のルートが存在する可能性にも注意を払わなければならない。

先史においてルートを考察する際に重要なのが、①どの時期に、②どのルートが主要ルートであり、③どの地域との交流が重要視されていたのか、ということである。これらのことを通じてはじめて、当該社会における地域間交流の実態に迫ることができると考えられる。より広域的でマクロな視点にたった地域間ルートの分析は次章に委ねることとし、以下ではミクロな視点、つまりはワンカバンバ川流域内にみられる流域から東西南北方向へ抜ける地域間ルートを検討する。ルートについては、まず地形と河川から移動可能な地点を特定したうえで、先行研究によって明らかになっているインカ道の存在、ならびに現代の利用状況をふまえて、その存在を推測する。さらに、推測されたルートに、形成期の遺跡分布を重ねることを通じて形成期のルートを特定していく。そして、それをもとにして、地域間ルートとセトルメント、とくに神殿の立地との関係について論じる。

9-4-1. 北方面ルート

ワンカバンバ川流域から北へ抜けるためのルートとしては、全部で六つのルートが想定される。図 9-7 と図 9-8 は、ワンカバンバ川流域の遺跡分布と地域間ルートの位置関係を示したものである。図中の赤線は以下で詳述するルートとなっているが、それぞれのルートには方向と番号を付しており、たとえば北方面の第一ルートは北①と記されている。なお、図中の「その他の道路」とは、隣接地域への徒歩移動の際に使用される小路やそれを利用して造られた道で、現在では車の通行が可能なものもある。

第一のルートは、ポマワカ市からキスマチェ川を登って山の尾根を通り、北西方向に進むルートである。このルートはその先、ピウラ県ワンカバンバ市を通って、極北海岸のピウラ地方まで達する。このルートはインカ道と同じ経路をとっている[1]。

第二のルートは、ポマワカ市からケブラーダ・マンタを登った後に、山の谷間を抜けてワンカバンバ川流域の北方に広がるワイリャバンバ川に入り、北進するルートである。このルートは現代でも徒歩移動の際に使用されることがあり、カハマルカ県チョンタリ市という山間の町へと通じる。なお、チョンタリ市からは、山間部を通るか、もしくは東を流れるチンチペ川へ降りて北へ進むことで、エクアドルとの国境付近まで到達することが可能である。このルートはエクアドル方面へ抜けるルートの一つであると考えられ、それを肯定するように、ルート沿いに形成期に属すると思われる石彫や土器を有する遺跡が分布している[Kauffman 1991][2]。このルートは、エクアドル南部へ到達するという同じ目的で

[1]インカ道は、極北部海岸のピウラ川中流域へは降りずに、アヤバカ市などの山間地域を通って、エクアドルへ通じる。

[2]学術的遺跡踏査や発掘調査は行われていないが、表面採集や盗掘された土器などの考古資料をカハマルカ県ハエン郡ハエン市や同県サン・イグナシオ郡サン・イグナシオ市の博物館でみることができる。

ありながら、インカ道とは違う経路をとっているが、ルートの選択にはそれを使用する社会の政治的、経済的、あるいは宗教的側面が反映するため、形成期とインカ期（後期ホライズン）で差異が生じることは十分に考えられる。

第三のルートは、サン・アントニオ遺跡の脇のケブラーダ・サン・アントニオを登り、ワイリャバンバ川流域に入るルートである。なお、このルートはワイリャバンバ川に達する以前に、第二のルートと合流する。

第四、第五、第六のルートは、いずれもワンカバンバ川流域から北へ抜け、カハマルカ県コラサイ市へ到達した後で、進路を東にとりワイリャバンバ川へ入るルートである。なお、これらのルートは、ワイリャバンバ川流域へ入った後で、第二、および第三のルートと合流する。ちなみに、ワンカバンバ川からの登り口は、それぞれカハマルカ県に属する現代の町や集落であるチャウペの南東、プカラ市、そしてプラヤ・アスールに存在する。

次に、想定された六つのルートに、形成期の遺跡分布、とくに神殿の分布を重ねてみると、そのうちの第一〜第三のルートの周囲に遺跡が集中していることがわかる。このことは、第一〜第三のルートが、形成期において北方へ抜ける主要ルートとして利用されていた可能性が高いことを示唆する。

なお、現在ではほとんど利用されていないものの、ここで指摘したルート以外にも、ケブラーダや小路を利用して北方へ抜けるルートが存在した可能性はある。たとえば、「基壇・テラス複合」を有する神殿であるグアヤボやリモン・セコ 1 は、そのような地点に位置している。しかし、このようなケブラーダや小路を利用したルートは、あくまでワンカバンバ川からの入口（あるいはワンカバンバ川への出口）として利用されるだけであり、その後は既述の第一ルートに合流して組み込まれるため、あくまで補助的なルートであったと考えられる。

9-4-2. 南方面ルート

ワンカバンバ川流域から南へ抜けるルートとしては、計四つのルートが想定される。

第一のルートは、イェルマ 6 遺跡からワンカバンバ川に注ぎ込むケブラーダ・イェルマの谷を抜けて南西に進むものである。このルートは、その後、山間部の集落であるランバイェケ県キリチマを通って海岸地域の同県フェレニャッフェ市まで達する。このルートは、現在においてもワンカバンバ川流域から山間部へ抜けるルートとして、徒歩移動の際に利用される。

第二のルートは、インガタンボ遺跡の西からニナバンバ山の東斜面を通り、南へ抜けるルートである。このルートは現代においても徒歩や家畜を伴う移動の際に使用されるルートで、ランバイェケ県のカニャリス市やインカワシ市へと通じる。また、このルートはインカワシ市付近で東西に分岐しており、東へ向かえば海岸のフェレニャフェ市へ、西へ進めば山地のカハマルカ県ケロコト市へ抜けることができるという。なお、第一のルートとは、登り口は異なるものの、山間地域で合流することが可能である。

第三のルートは、プカラ市からワンカバンバ川へ注ぐチョターノ川を登り、南進するものである。このルートは、その後、山地のケロコト市を通ってカハマルカ県チョータ市へと達する。インカ道と同じ経路をとっており、前述したピウラ地方へ抜ける北方面第一ルートと一連のものである。

第四のルートは、現在の集落であるプエンテ・テチンから山間部に入り、南へ進むルートである。このルートは、その後、現代の集落であるカハマルカ県ケロマルカへ達し、さらに南進する。

ここで、上記の四つのルートとワンカバンバ川流域における形成期の遺跡分布を重ね合わせてみると、第三と第四のルートが存在するプカラ市周辺では、形成期の居住施設はほとんど確認されず、神殿に至っては全くみられない。そのため、形成期においてワンカバンバ川流域から南進するためのルートとしては、第一と第二のルートが主要ルートとして利用されていたと考えられる。

北方面ルートの項で述べたように、上記以外の補足的なルートも存在しうる。「基壇・テラス複合」を有する神殿であるカニャニアッコ 3 は、南からワンカバンバ川に注ぐ支流の脇に位置している。ただし、この地点から南方へ抜けるためには、急峻な崖を登る必要があるため、このルートは、現在ではほとんど利用されない。

9-4-3. 東西方面ルート

東西方面へ抜けるルートとして、第一にあげられるのはワンカバンバ川の川筋である。なぜならば、川筋を利用した移動は、流域内で東西方向への移動を行う際に、最も高低差が少ないためである。これは、インカ道の経路からも伺うことができ、ポマワカ市とプカラ市を結ぶ東西のルートは川沿いに設置されている。また、現在の状況も同様で、川筋に沿って海岸部と熱帯低地を結ぶ幹線道路が存在している。ただし、現代の幹線道路がワンカバンバ川の北岸を通過するのに対し、インカ道は南岸を通過するという相違がある。現代における徒歩移動ルートは、北岸と南岸の両岸にみられるものの、インカ道と大規模な神殿が南岸に位置していることから、本論では南岸が主要ルートであったと想定する。

この他、北方面に抜ける第二～第六のルートは、先述のワイリャバンバ川流域へ入った後で川筋、もしくは山間部を東に進むことでマラニョン川流域に達するルートともなる。また、南方面に抜ける第一、ならびに第二ルートに関しても、前述したようにワンカバンバ川流域から山間地域に入った後に東西に分岐しており、東西移動の際にも利用される。

上記のように、形成期の神殿の分布状況を鑑みると、ワンカバンバ川流域内の移動に際しては、主として川筋が利用されたと考えられる。その一方、ワンカバンバ川流域から東西方向の隣接地域への移動に関しては、川筋を利用した可能性は十分にあるものの、南北に抜ける主要ルートを利用しながら、その後で東西方面へアクセスした可能性が示唆される。なぜならば、遺跡踏査範囲のすぐ東、あるいは西に広がる地域では、これまでに形成期の遺跡が確認されていないためである。

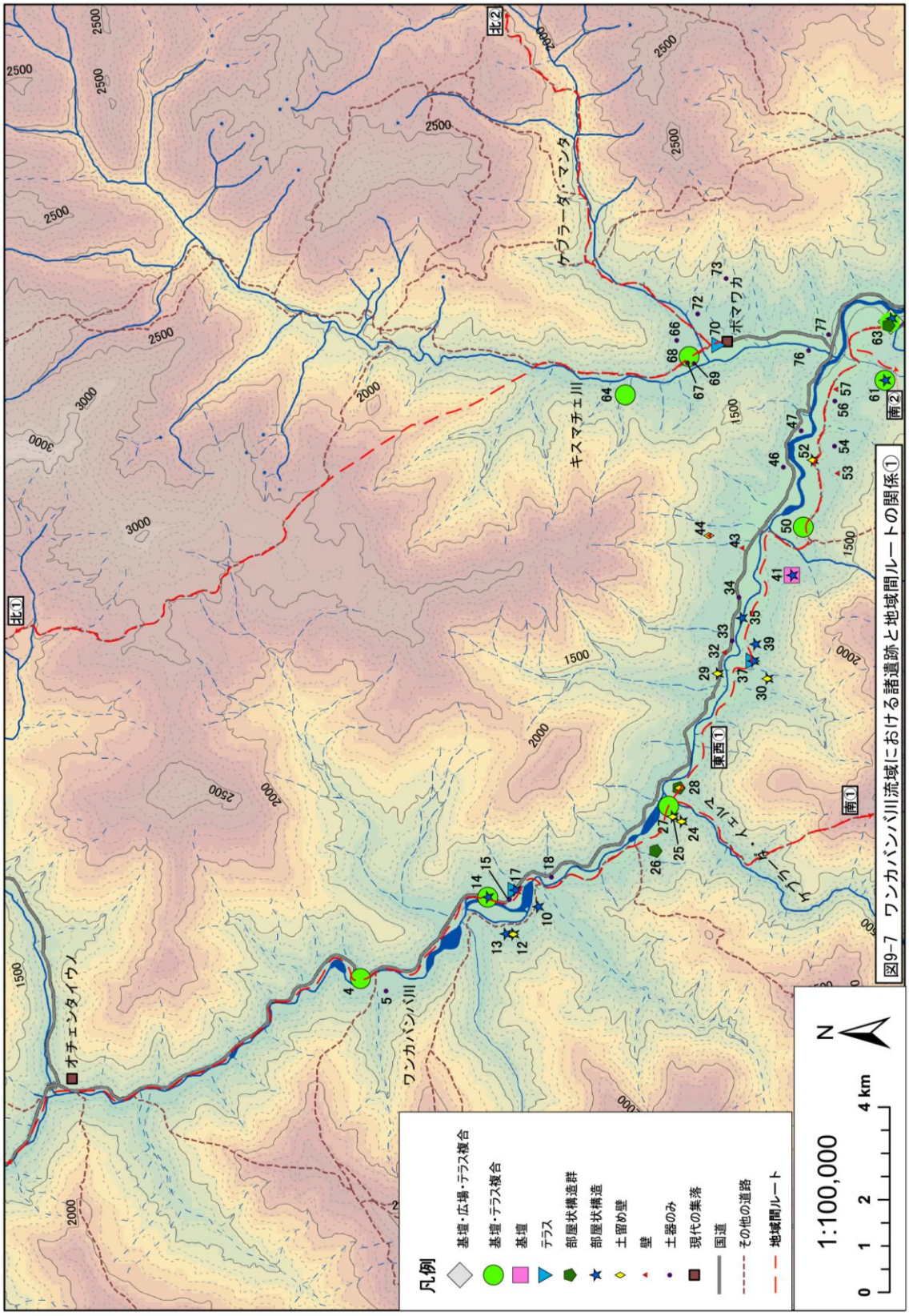


図9-7　ワンカバンバ川流域における諸遺跡と地域間ルートの関係①

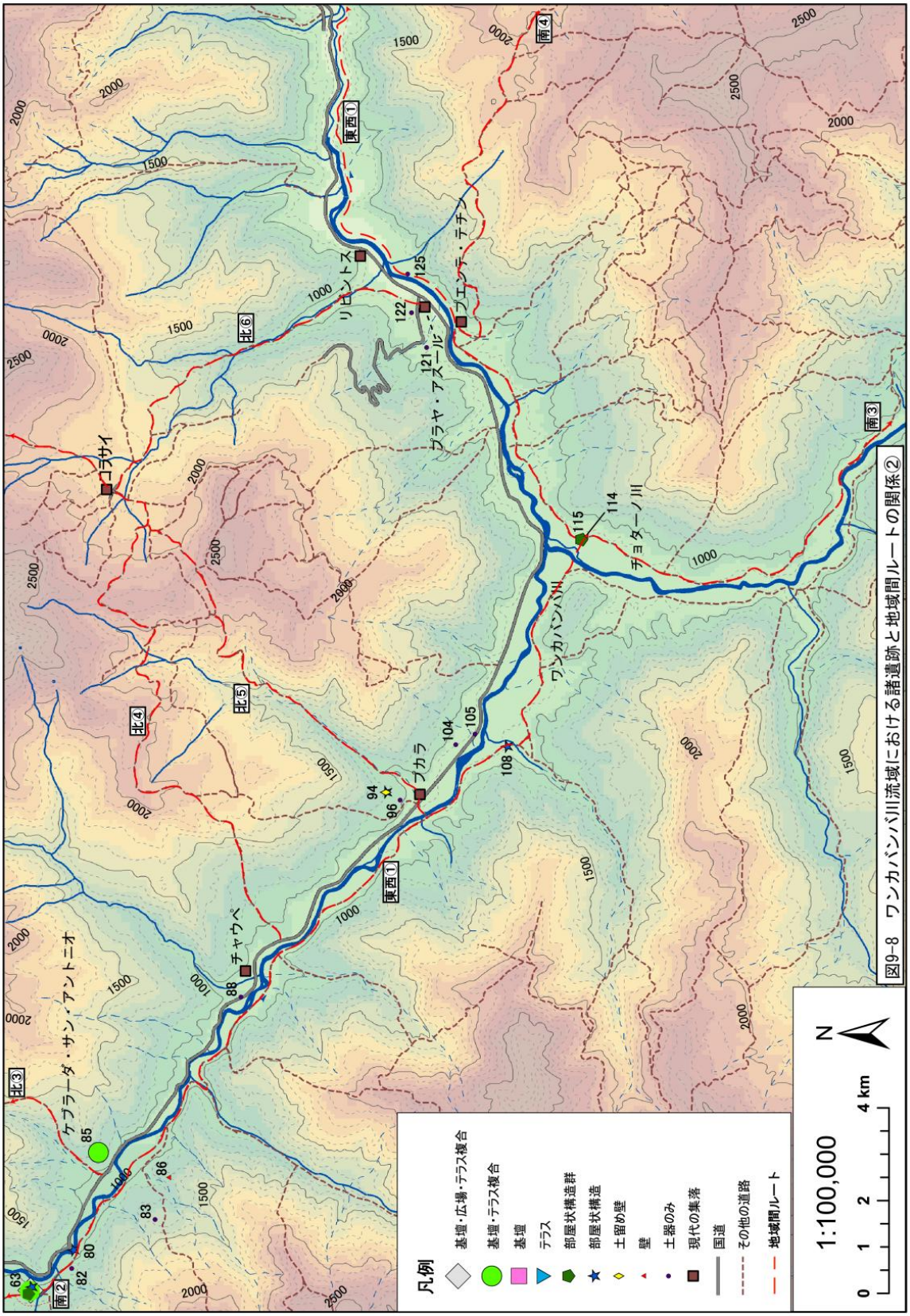


図9-8　ワンカバンバ川流域における諸遺跡と地域間ルートの関係②

9-5. 小括：ワンカバンバ川流域のセトルメント・パターンとその時期的変遷

ワンカバンバ川流域の踏査では、インガタンボ遺跡の発掘で確認したワンカバンバ期（形成期早期と前期）の遺跡を確認していない。したがって、ここでは発掘調査の成果と周辺地域の先行研究を加味しながら、ワンカバンバ川流域における形成期のセトルメント・パターンの通時的変化を論じる。

9-5-1. ワンカバンバ期前半（形成期早期）

他地域の先行研究でも明らかなように、先土器期に相当する。そのため、遺跡踏査では確認できなかったが、発掘調査によるとインガタンボでは小基壇が建設された[1]。

9-5-2. ワンカバンバ期後半（形成期前期）

遺跡踏査では認められず、インガタンボの発掘調査によって確認された小基壇が唯一の事例である。そのため、インガタンボを支えた人々は小集団であったと考えられる。ワンカバンバ川の南に位置するチョターノ川流域では、この時期に対応するパンダンチェ（パコパンパ複合の一部）が確認されているが、チョターノ川とワンカバンバ川の合流点では、この時期の遺跡はみられない。ワンカバンバ川からパンダンチェまでは、徒歩で数日の距離であり、現代でも往来が認められる隣接地域である。しかし、パンダンチェではすでに土器が存在していることから、ワンカバンバ川流域とパンダンチェ周辺では、社会の展開に明確な差異がみられる。

9-5-3. ポマワカ期（形成期中期）

遺跡数が大幅に増加し、全部で 62 遺跡が確認されるようになる。また、13 の神殿がワンカバンバ川流域内に出現することから、ワンカバンバ川流域で急激な社会変化が生じたことが想定される。

神殿遺跡をはじめとした大半の遺跡は、ワンカバンバ川とそれに注ぎ込む支流やケブラーダ付近に位置している。そのため、セトルメントの決定に際して、水利の重要性が強く認識された可能性はある。また、ポマワカ市とプカラ市周辺は、谷底の幅が広く、耕作に適した土地が多いが、そのなかでも谷底の面積が広いのは後者である。しかしながら、この時期のセトルメント、とくに神殿の分布は前者に集中している。これらのことから、神殿建設に際して耕作地との近接関係（距離）以外の要因が作用していたと考えられる。

ここで、ワンカバンバ川流域に存在する神殿の分布状況をみてみると、それぞれの神殿がほぼ一定の間隔を保ちながら分布していることが明らかである。それに加えて、全ての神殿が南北（その後で東西にも移動可能）に抜ける地域間ルート沿いに位置している。このため、神殿の建設時には、水利や農耕との関係はもちろんであるが、それらよりもむしろ、隣接地域との地域間交流、つまり地域間交流ルートへのアクセスと交流に際しての効

[1]この地域では、石器など土器以外の考古遺物の編年は確立していない。

率性が重視されていたと考えられる。

その一方、各神殿の形態的特徴と遺跡規模の比較によれば、インガタンボ、イェルマ 6、カニャリアッコ 3、リモン・セコ 1 が他よりも大規模であるが、なかでもインガタンボ、続いてイェルマ 6 の規模が抜きんでている。したがって、インガタンボとそれに続くイェルマ 6 の神殿が、当該時期のワンカバンバ川流域における社会的統合に際して、より中心的な役割を果たしていた神殿であったことが想定される。しかし、複数の神殿が流域内に同時に存在することから、この時期では規模が突出する神殿はあったとしても、ワンカバンバ川流域全体を統合する単一集団は存在せず、各神殿を中心として複数の集団が併存していたと考えられる。なお、インガタンボとイェルマ 6 の大規模神殿は、それぞれ南、あるいはその後で東西方向へと抜ける地域間ルート付近に存在するが、とくにインガタンボは、東西南北の全方面に抜ける形成期の主要ルートが交差する交通の要衝に位置している。このことから、地域間交流は、神殿建設時に重要視されただけではなく、神殿、つまりは神殿を支える社会が大規模化していくための要因ともなっていたと考えられる。こうした状況のなかで、ワンカバンバ川流域の南に存在した諸神殿社会との交流は、神殿を中心に展開する新たな技術や情報、イデオロギーと深く関連するため、流域社会の変化に際して、とりわけ重要であった。そのため、南の社会との交流における地政学的重要地に位置する、インガタンボとイェルマ 6 では、他の神殿よりも労働力の集中がみられたと考えられる。

これに対して、居住施設とルートとの間には、遺跡分布状況をみる限り、明確な関係は認められない。また、居住施設は、神殿の周囲に分布しているものの、その分布には特定のパターンは存在しない。ただし、既述の大規模神殿の周囲には、より多くの居住施設が密集してみられる傾向がある。こうした居住施設の数、もしくは集中状況は、神殿で行われる諸活動に参加した人々の数や、建設に関わる労働力と対応していると考えられる。なお、居住施設は、河谷底部へのアクセスが容易な標高の低い場所に集中的に分布していることから、神殿と居住域との分化が進んで、社会成員の大半が耕作地付近で生活するようになったことが示唆される。

9-5-4. インガタンボ期（形成期後期）

遺跡数が急激に減少し、わずかに 3 遺跡のみで活動が確認される。また、この時期には、ペルー海岸部で遺跡数が減少するとともに、神殿の分布が山地へと移行して神殿が巨大化することが指摘されている [Burger 1992; Onuki 1993]。そのため、ワンカバンバ川流域でも同様の現象が生じた可能性がある。つまり、神殿数が激減すると同時に、ポマワカ期から流域社会で社会的統合の中心的役割を有していたインガタンボが、神殿を大規模化させ、流域内で唯一の「基壇・広場・テラス複合」へと変化したということである。また、もう一つの神殿であるカニャリアッコ 3 は、「基壇・テラス複合」であるが、その規模はインガタンボと比べると極めて小さい。さらに、この時期に活動がみられる神殿は、いずれもポマワカ期からインガタンボ期まで継続して利用されており、新たに建設された神殿は存在

しない。これらのことは、ワンカバンバ川流域における神殿をめぐる活動への労働力が、インガタンボへ集中した結果であると考えられる。そして、ワンカバンバ川流域において、インガタンボの神殿を中心として地域内を統合するような社会が出現したことが示唆される。

なお、先行研究ではこの時期のアンデスにおける地域間交流の活発化が指摘されるが、これまでに述べたように、インガタンボは地域間交流における地政学的重要地に位置している。そのため、汎アンデス的な地域間交流の活性化に応じて、ワンカバンバ川流域へと至る全ての地域間ルートにアクセス可能なインガタンボが、流域内のルート、すなわち地域間交流を独占した結果として、大規模化を遂げたことが示唆される。こうして神殿における諸活動にみられたリーダーの戦略のなかで、地域間交流の重要性が増していったのである。このことから、ワンカバンバ川流域という限定された地域内の社会動態は、地域間ルートの存在を介して、流域外の社会動態と密接に関連していたと考えられる。

9-5-5. 神殿の立地と生態環境

人が生活を営む限り、周囲の環境は人に影響を与え、また、人は環境に影響を与える。この点において、人間活動は常に生態環境の制約を受けており、神殿建設をめぐる諸状況を理解するためには、生態環境との関係を考察しておくことが必要である。

それでは、ワンカバンバ川流域に神殿が建設されたとき、その立地はいかにして選択されたのであろうか。先述したようにワンカバンバ川流域の諸神殿は、段丘上や河川の両側にそびえる山の中腹に位置しており、河川の氾濫時においても水害やワイコの影響を受けない。さらに、インガタンボ遺跡での発掘においても、土層断面中に水害を受けた痕跡はとくに確認されていない。このことは、ワンカバンバ川流域において、神殿建設に先立って入念に場所の選定が行われたことを示唆する。雨季、乾季を問わず、豊富な水をたたえるワンカバンバ川流域社会では、生活に際して常に水に関するリスクが考慮されていたものと考えられる。この状況は、ワイコといった自然災害に応じて神殿の立地を変化させた、ヘケテペケ川中流域のアマカス複合の事例とは大きく異なる[鶴見 2008a]。

その一方で、ワンカバンバ川流域の神殿の分布には地理的な偏りがある。神殿は、流域内でも川幅が広く、谷底のなだらかな空間を利用した農耕に適した地域である現代のポマワカ市周辺に集中しているのである。しかしながら、単純に谷底の面積だけをみると、神殿の分布がみられないプカラ市周辺の方がポマワカ市周辺よりも大きい。このことは、ワンカバンバ川流域社会における神殿建設に際して、谷底に広がる耕作地との近接関係以外の要因が強く作用し、ポマワカ市周辺地域が重視された結果を示していると考えられる。

それでは、他の要因とは何であろうか。ここで、地域間ルートと神殿が建設された方向軸について考えてみたい。ワンカバンバ川流域では、東西南北に抜ける複数のルートが存在している。そして遺跡の分布状況からは、少なくともそのうちの複数本（北に 3 本、南に 2 本、東西には南北ルートを利用して進む）が、形成期において利用されていたと推測

される。また、ポマワカ期には、全ての神殿が上記のルート沿いに位置しており、とくに最大規模を誇るインガタンボでは、東西南北方面に抜ける全てのルートが交差している。さらに、インガタンボ以外の神殿における活動の詳細は不明であるものの、海水生種の貝の出土から示されるように、インガタンボではワンカバンバ期から海岸部の社会との接触がみられる。これらのことを考慮すると、ワンカバンバ期にインガタンボの立地が選択された要因の一つとして、その場所が海岸部、あるいは山地へ抜けるルート上であったことが想定される。加えて、インガタンボは、ワンカバンバ川流域のなかでも谷が開け、谷底部の耕作地を利用できるだけではなく、南側にそびえる山の斜面、もしくは頂上部から南に広がる比較的なだらかな土地を最も効果的に利用できる場所にある。ルートの選択には、社会的、経済的、政治的、あるいは宗教的要因が関連するが、実際の移動の可否やその効率は生態的要因に大きく作用されるため、その意味でインガタンボの立地は理想的である。

次に、神殿が建設された方向軸についてみてみると、ルートとの関係を支持するように、大規模な神殿建築を有するインガタンボやイェルマ 6 の建築軸は、谷の底部ではなく、隣接地域との地域間ルートへと向かって開いている。それに対して、他の神殿では谷底からのアクセスが重視されるように建築軸が設定されている。このことは、大規模神殿であるインガタンボとイェルマでは神殿の建設当初から流域内だけでなく、流域外からのアクセスが、それら以外の神殿では流域内からのアクセスが、重視された結果であると考えられる。また、流域内で神殿の数が増加し、インガタンボの神殿が大規模化すると同時に、荷駄獣であるラクダ科動物がみられるようになることからも、神殿とルートとの関連が強く示唆される。

印東は、単なる生物資源ではなく、自然環境や人間活動を含む、ある生態系に包括されるもののうち、そこに生活する人間が有用であると認識した自然物や現象すべてを「生態資源」とし、それに何らかの社会的意味が付与されることを「生態資源の象徴化」と定義した [印東 2007]。このような視点にたつと、生態環境に応じて人が選択した地域間ルートも生態資源とみなされるべきであり、そこには社会的意味や役割が付与されていたと考えられる。そのため、神殿の立地や建築軸とルートとの関係に示されるように、神殿の建設に際して地域間ルートが重視され、それが神殿の立地や建設軸の選択・決定を左右したのである。

このようにして、ワンカバンバ川流域のセトルメントは、人間による生態環境への単なる適応ではなく、生態環境と人間との相互関連のなかで構築されてきた。そのため、セトルメントには様々な形で人間の行為や思考が介在することになったのである。この視点に立てば、建造物、とくに神殿の建設とは生態資源を人為的に変化させることで、イデオロギーを物質化していく行為となる。これは、神殿やその立地に対する空間認識の問題でもある。つまり、神殿の建設活動とは、水害への対応や耕作地との関係、あるいは地域間ルートへのアクセスを管理することを通じて、周囲の生態環境を神殿という景観のなかに取り込んでいく過程とも考えられるのである。

本章で述べてきたように、ワンカバンバ川流域のセトルメントをみると、ポマワカ期には流域内に複数の神殿が併存し、各神殿を中心とした複数の集団が存在していたことが想定された。しかし、この状況はインガタンボ期に変化し、神殿をめぐる活動は、流域内で最大規模を誇るインガタンボへと収斂して、インガタンボがワンカバンバ川流域の社会的統合の中心となったと考えられる。また、神殿の立地と地域間ルートには強い相関関係があり、ワンカバンバ川流域の社会動態には、インガタンボのデータにも認められたように、流域外部社会の影響が強くみられることが示唆された。したがって、次章では、GIS を用いて地域間ルートの分析を行い、周辺地域を含んだよりマクロな視点から地域間間交流について考察することで、ワンカバンバ川流域の社会動態を、従来とは異なる切り口から捉えていく。

第 10 章： ペルー北部とエクアドル南部における地域間交流の動態

前章で示したように、ワンカバンバ川流域のセトルメント、とくに神殿の立地には、流域内から他地域へ抜ける地域間ルートとの関係が認められた。また、第 8 章において、建築や土器、貝製品や黒曜石の検討を通じて指摘したように、流域社会は常に流域外の社会とのつながりを有していた。とりわけインガタンボは、ルートの結節点に位置するとともに、ルートへのアクセスを独占していくことによって、大きな変化を遂げた。これらのことから、流域外部社会との交流が、ワンカバンバ川流域社会の展開に影響をおよぼしていたことは明らかである。

そのため、本章では、GIS による最小コスト（加重）ルートの分析を通じて、形成期のペルー北部とエクアドル南部における地域間主要ルートの全体像とその変遷を明らかにする。より具体的には、まず、アンデスにおけるルート研究を概観し、本研究の位置づけとその意義を明確にする。そして次に、GIS による最小コストルートの分析から、形成期の地域間主要ルートを特定していく。これは、次章において、実際に交流を行う行為主体としての人々の存在を重視しながら、地域間交流の動態を論じ、かつ周辺地域の社会動態と連動した動きとして、ワンカバンバ川流域社会の動態を追究するうえで、重要なデータとなる。なぜならば、ルートは、地域間交流に関わる社会の状況に応じて選択的に決定されるものであり、そこには社会を構成する人々の活動や戦略が深く関与すると考えられるためである。

10-1．アンデス形成期における地域間交流とルート研究

10-1-1． 地域間交流とルート研究の関係

第 1 章と第 2 章で述べたように、地域間交流に関する議論は、形成期研究の主要テーマの一つである。地域間関係をどう捉えるのかは、研究者や研究対象によって大きく 2 通りの立場に分かれる。一つは、インタラクション領域など、共通性を有する遺構や遺物分布の空間的な拡がりから地域間関係を捉えるものである[Burger 1984, 1992, 2008; Church 1996]。そして、もう一つは、地域間関係を遺跡同士の点の結びつきであるネットワークとして捉えるものである[加藤 2007; Pozorski and Pozorski 1987]。これら二つの視点は重層的関係にあり、分析の対象、および地域間関係を議論するスケールに応じて使い分けられるとともに、状況に応じて同時に考慮されるべきものである。また、各地での調査の蓄積から地域的な多様性が明らかになっている現在では、地域間交流を考察する際に、各地域の社会的状況に即して、詳細な分析や論考を行うことが不可欠となっている。

こうした状況のなかで、先行研究においては、主として考古遺物や様式の共通性の有無、あるいは共通性の度合いに応じて、遺跡間や地域間の関係が論じられてきた。第 8 章で行なった議論もこれと同様のものである。このように、遺物の比較研究を用いて地域間交流を論じる場合、交流の有無を明らかにしたうえで、より多くの共通性を持つ地点間に密接な交流が存在することを指摘することに議論の中心がおかれてきた。もちろん、遺物の比較を通

じて、地域間交流を論じる上記の従来的な定性的研究は重要である。しかし、こうした研究では、実際に交流を行い、遺跡間や地域間を移動した人々の存在はあまり考慮されてこなかった。そのため、隣接地域、あるいは特定地域内で共通性の有無に差異が認められる現象やその背景について、交流の度合い（密接さ）を指摘する以上に、各社会や社会を支える人々の行為選択や戦略と絡めて、議論を深化させることはできなかったのである。

また、これまでの研究においては、地域間交流時の移動手段にほとんど関心が向けられてこなかった。しかし、移動手段に応じて、物資の運搬量や効率性に変化が生じ、地域間交流の特性が大きく変化することは明白である。そのため、本論では移動手段に着目することで、地域間交流の実態を新たな側面から追及していく。

さらに、従来の比較研究では、遠く離れた 2 地点を直接的に結び付け、その中間に位置する社会の存在を考慮してこなかった。つまり、地域間交流を論じるにあたって、実際にどの場所を通って交流が行われたのかという地域間ルートの問題は、これまでほとんど取り上げられてこなかったのである。アンデスにおけるルート研究は、インカの主要幹線であるインカ道研究に代表されるように、主として形成期以降の社会において実施されてきたのが現状である[Topic and Topic 1983; Hyslop 1984]。なぜならば、ルートの痕跡は、インカ道のように舗装が施されない場合には、特定困難なためである。そのうえ、形成期のルートの大半は、地面を踏み固めただけのルート[1]（小径）であったと考えられる。これらのこともあって、現在までに形成期のルートとして痕跡を伴って確認されているものは、チャビン・デ・ワンタル遺跡付近の石橋[Diessl 2004]と、北部海岸部のモチェ川とチカマ川の間の道[Beck 1990]だけである。

以上のように、形成期における具体的な「道」を確認することは困難である。しかし、地形や GIS による分析などからルートは想定できる。そして、ルートの存在を介することによって、距離を問わずに遺物や様式の共通性のみで考察されてきた地域間関係の議論から一歩ふみ込んで、地域間を動く人々の行為や戦略の結果として、地域間関係を捉えることが可能になる。また同時に、移動手段についても、具体的なルートの存在をふまえて検討することができるようになる。このような理由から、本論では、地域間交流を議論するにあたって、地域間の交流ルートを検討し、遺跡間や地域間を実際に動いた人々の存在を考慮したうえで、考古遺物の共通性について考察する。

10-1-2. アンデスにおけるルート研究

ルート研究は遺跡間の空間の研究であり、主として二つの研究に分けられる。一つはインカ道の研究に代表されるように、ルート自体の形態や技術、そして建設、維持のための労働投資、プランニングなどから、その役割や建設した社会の複雑性にアプローチするものである。もう一つは、ルートと関連するポイント相互の関係性を明らかにし、ルートの役

[1]トロンボールドによれば、ルートは、フォーマルな道（road）とインフォーマルな小径（pass）に分けられるとする [Trombold 1990]。

割について考察するものである[Trombold 1990]。本論でいうルート研究は、地域間相互の結びつきを検討し、その背景を考察する点で、両者の折衷的要素を呈している。ただし、これまでのルート研究では、ルート上を動く人の存在がほとんど考慮されていないのに対して、本研究は移動手段や交流の様態の分析を通じて、人の存在を強く意識する点で大きく異なる。

アンデスにおけるルート研究の代表例としては、ヒースロップによるインカ道の踏査があげられるが[Hyslop 1984]、ポイント相互の結びつきを考察するようなルート研究は、これまであまり多くない。

たとえば、トピックらは、ペルー北部における海岸部と山地との間のルート分析を通じて、海岸部と山地の地域間関係を検討した[Topic and Topic 1983]。そして、「最適なルート」とは、ルートの建設コストと移動コストによって決定されると考えた。ここでいう移動コストが最も低いルートとは、①非居住空間を通るルートの距離が最短であり、②ルートにおける高度の変化が最小限であって、③ルートそのものの長さが最短、とされるものである。また、移動時間については、環境の影響を強く受けるため、移動中の高度変化が少ないほど時間がかからないとした。つまり、彼らは、海岸部の移動、山地での移動、海岸部と山地間の移動、の順に高度差が大きくなって移動が困難になるため、同じ距離を進むためにより多くの移動時間を費やすものと考えたのである[1]。そして、これらの想定をもとに、四つのネットワークモデルとの比較検討を通じて（図 10-1）、北部海岸部と北部山地における地方発展期以降の地域間関係を論じた。

この研究は、ペルー北部におけるルートに関する開拓的研究として、評価することができるが、想定したルートに地形や標高などが十分に加味されていないこと、ルートの始点や通過点、終点となるポイントが不明瞭であることなど、多くの問題を含んでいる。したがって、本研究では、後述するように、GIS による分析によって地形や標高についての情報を加味し、神殿をポイントとすることを通じて、詳細なルートを検討しつつ、この問題に対処する。

さらに、トピックらはルートの想定時に、移動手段として徒歩移動とラクダ科動物を伴う徒歩移動の二つを想定しているものの、ルート分析に際しては両者の区別を行っていない。しかしながら、実際のルートは、移動手段によって大きく影響を受けるものであり、その結果として、移動手段に応じてルートが変化することが推測される。そのため、本研究では、徒歩による移動とラクダ科動物を伴う徒歩移動を明確に区分してルート分析を行う。

このようにして、実際の移動手段を考慮することは、特定社会における交流の様態を考察していくうえで重要である。なぜならば、交流の様態は、交流を行う社会の諸状況やその背景を大きく反映すると考えられるためである。

---

[1]5km を移動するために、水平な土地では 1 時間必要であるが、1,000ｍの高低差を進むごとに必要な時間として 1.5 時間が加えられる。これによると、移動時間の割合は、海岸での移動を 1 とした時に山地間の移動が 1.3、海岸部と山地間の移動では 1.46 となる[Topic and Topic 1983: 243)。

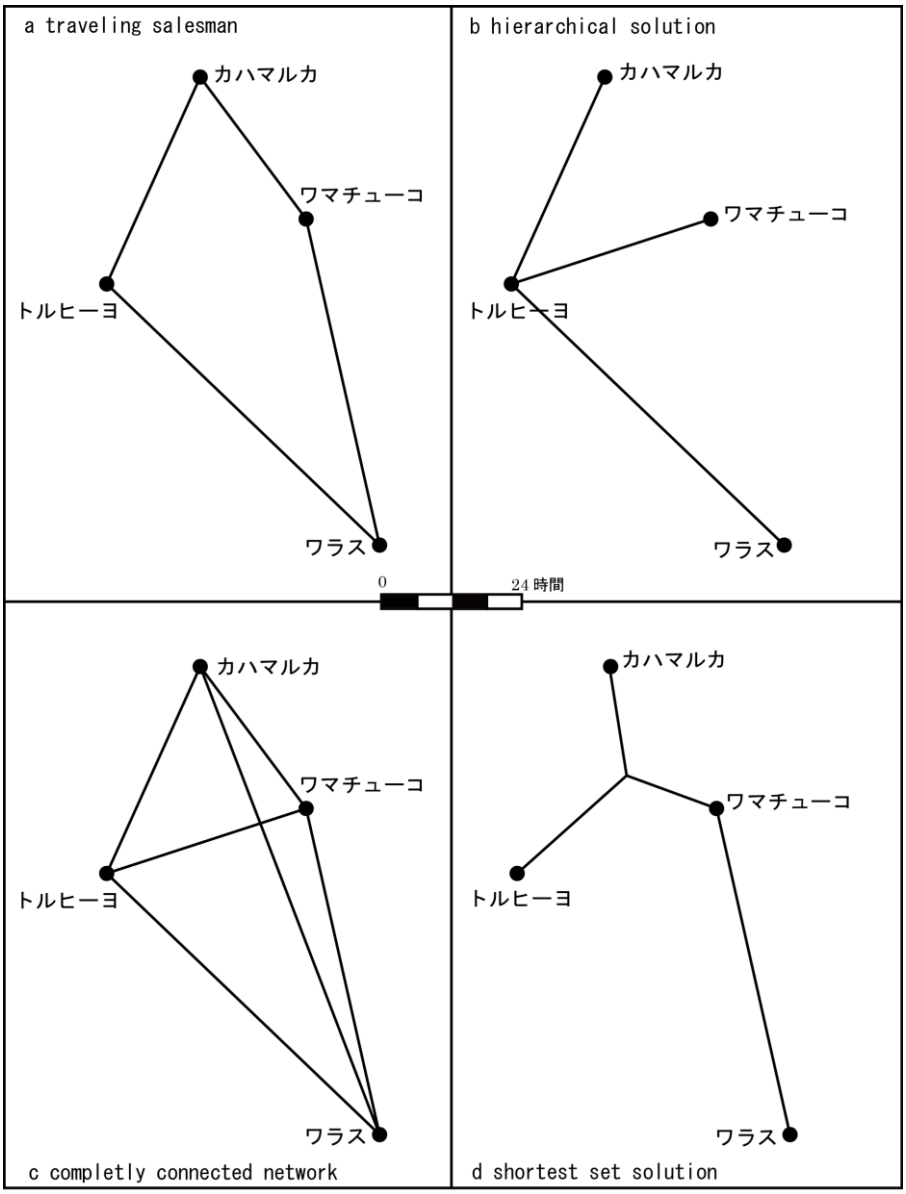
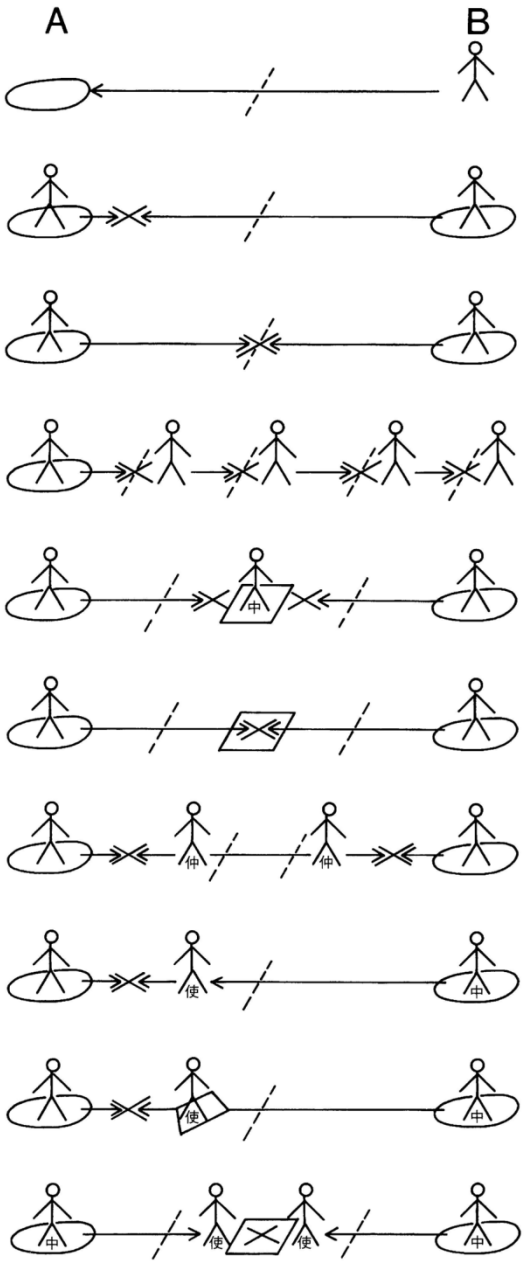


図10-1　トピックらによるネットワークモデル概念図
[Topic and Topic 1983より改変]
※図中の●とカタカナ表記は
ペルー北部地域の4つの中心地を示す

たとえば、レンフリューは、交換の様態と社会組織の複雑度との関係を対比させ、それをモデル化した[Renfrew 1975, 1984]。より具体的には、地中海や西アジアにおける黒曜石、あるいはウミギクガイの分布状況や出土状況を、産地からの距離との関連を通じて、交換のモード（様態、戦略、メカニズム）としてモデル化したのである（図 10-2）。



[直接獲得] B は A の関与なしに産地に直接物資を取りに行く。もし領域の境があったとしても、とがめられずにこれを超えることができる。交換の交渉は一切ない。

[互酬（居住地型）] B は A の居住地を訪ね、互いが管理するそれぞれの物資を交換する。

[互酬（境界型）] A と B は互いの境界で物資を交換する。

[互酬連鎖交換] 居住地型互酬ないしは境界型互酬の交換が連続した形態（図では明確にするために一方向のみを示した）。物資は連続的な交換により、領域の境を連続的に越えて移動する。

[中心地再分配] A は中心人物への貢物として、生産品を中心地に持って行く（疑いなくその時か後に、交換として何かを受け取る）。B も同様にして中心地に行き、A の生産品などを受け取る。

[中心地市場交換] A は生産品を中心地に持って行き、そこで直接 B と交渉してそれを B の生産品と交換する。この交渉の中では、中心人物は取引に直接関与しない。

[フリーランス（仲介者）交易] 仲介者が A、B とそれぞれ交換するが、仲介者は A や B の管理下にはない。

[使者交易] B はその管理下にある使者を送り、A と物資を交換させる。

[租界交易] B はその使者に A のそばに租界をつくらせて、A と物資を交換させる。

[交易港交易] A、B ともそれぞれの使者を中心地（交易港）に送り、交易させる。交易港は A、B の支配下にはない。

物資の産地　交換交渉　中心的人物
中心地　領域の境　仲介者
租界　取引に携わる人　使者

図10-2　レンフリューによる交換のモード
［レンフリュー・バーン2007］

このレンフリューの研究については、常木による詳細な検討がある[常木 1990, 1991]。それによれば、このモデルの特徴とは、進化主義的な視点を有しており、互酬による交換（図 10-2 の上からみて直接獲得～互酬連鎖交易までがこれに該当する）と、中心地を想定した再分配（中心地再分配～交易港交易までが該当する）に大別されることである。ただし、「フリーランス交易: Middleman」は、後者に含まれるものの、交流の仲介者は交換を行ういずれかの社会に属した存在ではないため、互酬的な性格を有しているとも考えられる。また、各交換のモードは、周囲の生態環境によっても大きく影響されるものであり、モードごとに物資や情報が交換される量や効率は異なる。なお、物資だけではなく、技術や情報をやりとりするためには、仲介者などを介さずに、直接相手の居住地を訪れる交換モードの方がより効果的である。これらのことをふまえて、各交換モードと実際の考古遺物の分布パターンを照らし合わせると、互酬による交換では産地からの距離に応じて遺物の出土量が次第に減少するのに対して、中心地を持つ交換の場合は物資が集積される特定の場所での遺物量が増加し、単純な減少傾向を示さないとされる[1]。

レンフリューの研究は、モデル化を通じて、考古学における交流（交換）と社会組織の関連を論じた重要な研究である。しかし、実際の物資や情報の交換は、提示された単一のモードだけでは、説明しきれない。つまり、実際の交流に際しては、交流される物資や交流の相手社会に応じて、それぞれ異なるモードがとられる可能性があるため、複数のモードの組み合わせを考慮しながら、交流を論じていかなければならないのである。アンデス形成期には、各地の神殿それぞれが当該社会の社会的統合の核であったと考えられており、広範な地域にわたって分布する複数の神殿を統合するような中心地の存在は、現状では想定することはできない。したがって、形成期における地域間交流を考察する場合、まず個々の神殿相互の関係を追究する必要がある。

これらのことをふまえて、本論では、形成期の地域間交流に際して、基本的には、レンフリューのいう互酬ベースの交換を想定して論を進める。これは、形成期の地域間交流が、「互酬連鎖交換: Down-the-line」、あるいは「フリーランス交易: Middleman」をとるという先行研究をふまえたものでもある[Church 1996; Martin 2001; Tripcevich 2007][2]。

その一方、アンデスにおけるこれまでのルート研究では、ルートや地域間交流の存在は指摘されるものの、交換される物資に応じた多面的な検討を通じて、交流を行う社会間の関係性が論じられるような研究は、ほとんどされてこなかった。これは、セロ・ニャニャニケ

[1]交換される物資の特性により、異なる減少傾向がみられ、希少材の交換においてはより緩やかな減少傾向を示すとしている[常木 1991: 183-184]。

[2]チャーチは、この時期の交換のメカニズムとしては「互酬連鎖交易：Down-the-line」、あるいは「フリーランス交易：Middleman」のいずれかのモードが考えられるが、地域内の様式の分布は、「互酬(居住地型)：Home-Base Reciprocity」による儀礼の装身具などの奢侈品の交換に影響されたものであるとしている[Church 1996: 597-598]。なお、マーティンはウミギクガイの交換が、トリプセビッチは黒曜石の交換が、それぞれ「互酬連鎖交易」によって実施されたとしている[Martin 2001, Tripcevich 2007]。

[Guffroy 1989: 180、1992：103; Hocquenghem 1990, 1993; Kaulicke 1998: 20]や、北部山地のラ・ガルガーダ[Grieder and Bueno 1988:106, Shady 1993:116]などの遺跡の特徴を、ルートの結節点や交通の要衝という表現だけで論じてきたことからも明らかである。

これに対して、ホッケンヘムは、ペルー極北部海岸の調査をもとにして、エクアドル南部からペルー北部を結ぶウミギクガイの交換ルートの研究を行った。そして、海流の影響を考慮した結果、形成期のルートは陸上であったと仮定した[Hocquenghem 1993] （図 10-3）。これによれば、形成期においてウミギクガイは、一度エクアドルの海岸部から山地へと運ばれたあと、極北部海岸ピウラ川中流域に位置する神殿であるセロ・ニャニャニケを通過して、ペルー北部地域へもたらされる。たしかに、インカ道の存在に目を向けてみると、エクアドルとペルーを結ぶルートには大きく 2 通りあり、一つは、ホッケンヘムが指摘したように、国境地帯の海岸部から砂漠を避けてピウラ川中流域を通過し、ペルー北部海岸中流域へ抜けている。しかし、もう一つ、エクアドルの山地からペルーの山地へと入り、ピウラ川中流域には降りずに、山地を通って直接的にワンカバンバ川流域へ通じるものがある。ちなみに、後者のルートは前章で指摘したワンカバンバ川流域から北部方面へ抜ける第一ルートと同じものである。

ホッケンヘムは分析に際して、後者のルートの存在をとくに重要視していないが、山地ルートが通るアヤバカ地方のエル・トルドとサマンガでは、形成期のものと考えられる多数のペトログリフ（岩の表面に施された線刻画）が報告されている[Polia 1995]。ペルー北部海岸では、地域間ルートとペトログリフの分布の相関関係が指摘されており[鶴見 2008b]、ペルー極北部地域においても、南北の移動時に山地のルートが利用されていた可能性は否定できない。また、セロ・ニャニャニケでは、産地であるエクアドル沿岸部からの距離が比較的近いにもかかわらず、ウミギクガイの出土が極めて稀であることも[Guffroy 1989: 193]、形成期における山地ルートの利用を支持する。ただし、このことは、セロ・ニャニャニケが、エクアドルとペルーをつなぐルート[1]に関与していなかったことを意味するのではない。ここで指摘するのは、あくまで、エクアドル南部山地からペルー北部へのウミギクガイの輸送において、山地ルートが主要ルートであった蓋然性の高さである。なぜならば、ウミギクガイ以外の物資、たとえば土器に関しては、ギュフロワが指摘するように、セロ・ニャニャニケとロハやカタマヨ複合といったエクアドル南部山地との強い関連が示唆されるからである[Guffroy 1989: 203]。そのため、先述の通り、地域間交流を論じる際には、交換されるものの特性に応じて、交流の様態やその戦略を考察する必要が生じるのである。

[1]地域間ルートに関しては、多雨多湿なエクアドルでは河川を利用した移動も想定されるのに対し、ペルーでは主に陸上移動のみが想定される[Zeidler and Isaacson 2003]が、これは、両地域の生態環境の差異が反映したものと考えられる。

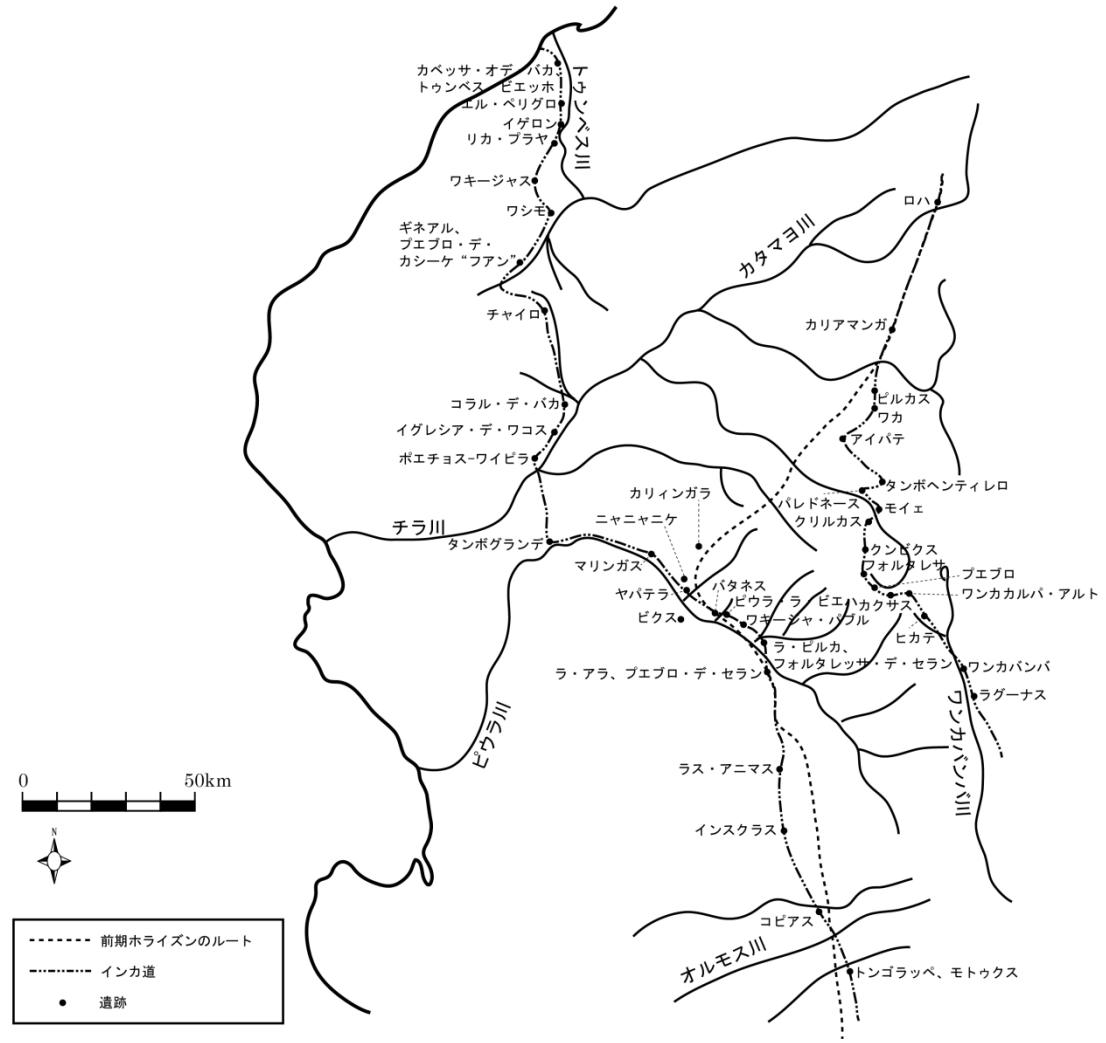


図10-3　ホッケンヘムによるウミギクガイの交換ルート
[Hocquenghem 1993より改変]

これらに対し、近年、ペルー南部山地において、ラクダ科動物のキャラバンを通じて行われる黒曜石の獲得、および消費と、当該地域の社会的不平等の生成といった通時的な社会変化との関連を論じる研究が提示された[Tripcevich 2007]。この研究は、GIS を用いて黒曜石を中心とした考古遺物の分布をおさえたうえで、交流（インタラクション）の通時的変化を考察した点で新規的な研究である。また、交流の空間的レベル（ローカル、あるいは長距離）に応じて、交流のモードが変化することを論じているなど、本論に有益な視座を与える。しかしながら、キャラバンが利用するルートについては、民族誌などを前提として無批判に議論のなかで用いられているだけであり、ルートそのものの蓋然性についての検討は行われていない。ルートの選択や決定は、地域間交流に関連する各社会の状況に応じて選択的に行われるものである。したがって、交流のモードの変化に応じて、あるいは時期ごとに、ルー

ト自体が変化する可能性もある。そのため、本論では、地域間交流を論じる際に、GIS を利用したルート分析を実施することで、ルートそのものについての検討を行う。ここに、本研究のルート分析の最大の意義があると考えられる。

なお、GIS を用いたルート研究には、ペルー北部一帯で形成期を対象に、チャビン・デ・ワンタルのインタラクションを論じたコントレラスによる研究がある[Contreras 2011]。この研究は、最小コストルート分析を用いて、チャビン・デ・ワンタルを中心とした神殿間の関係について論じた開拓的研究の一つである。分析対象が広範囲におよぶマクロな研究であり、形成期の全体的な動向を掴むうえで重要な研究といえる。しかし、交流がチャビン・デ・ワンタル中心で考察される点や、遠く離れた点と点を直接的に結び、その中間にある社会を考慮していない点、輸送手段についても分析の対象としていない点など、問題点も多い。また、インタラクションや交流の実態を明らかにしていくためには、生態環境をふまえたより詳細でミクロなルート分析が必要であり、GIS を用いる分析の最大の利点はここにある。そのため、本論では、生態環境を十分に加味することができる比較的限定された範囲を対象にして、ルート分析を行う。

以上のことからわかるように、ルート研究において最も注意しなければならないのは、「各地の神殿はルートで結ばれており、長距離交易が行われていた」という程度の結論であれば、それ以上に積極的にルートを議論する意義はない[鶴見 2008b]、ことである。もちろん、特定の神殿が周辺地域と交流を持っていたことを明らかにすることは重要であるが、ある神殿を中心に東西南北の様々な方向に、多様なルートが存在することは自明である。鶴見が指摘するように、ルート研究において重要なのは、どれが主要ルートで、どのような交流が行われ、それが各地の社会展開にいかに関わっていたかを明らかにすることである。つまり、想定されるルートと、そこに連なる社会との間に通時的な相互関係をみいだし、整合性のある説明を与えることが、ルート研究の目的であるといえる[鶴見 2008b]。本研究は、これと同じ立場にあり、形成期社会における主要ルートとその社会的意味や役割、およびルートと社会変化との動態的相互関係を捉えることを重視する。

また、バンディが論じたように、ルート上の戦略的な地点を占拠している社会が、中継地としてのメリットを活かして利益を享受することで権力を確立する例など、ルートの維持や管理の問題は社会変化を考察するうえでも重要である[Bandy 2005]。なぜならば、ルートには、交流を行う社会間の諸状況が大きく作用されることから、ルートの選択、あるいはその維持や管理は、当該社会の戦略にもとづいたものであったと考えられるためである。このことをふまえて、本論では、ルートの通時的分析を介して、特定社会内部の社会動態にもアプローチしていく。

10-2. 輸送システムと地域間ルート

第 8 章で詳述したように、インガタンボ遺跡出土資料からは、周辺地域あるいは遠隔地との地域間交流が示唆される。では、アンデス東斜面に位置するワンカバンバ川流域への物

資の輸送はどのようにして行われたのであろうか。海産資源の搬入には、量を一度に、かつ効率的に運搬するために土器などの容器が必要であると考えられるが、それ以外に重要なのが、輸送システムの確立である。

アンデスにおいて、人間の移動とともに考えなくてはいけないのは、ラクダ科動物を伴う移動である。そして、ラクダ科動物と地域間交流の関係は、これまでも多くの研究者によって指摘されてきた[加藤・関編 1998; Miller and Burger 1995; 鵜澤 2007a]。この際、ラクダ科動物、とくにリャマは、荷駄獣として利用されることで、運搬の効率を大幅にあげたと考えられている。アンデスのラクダ科動物の家畜化は、ペルー中央山地のフニン高原周辺で開始され[Wheeler 1984; Wing 1983]、その後、各地へ拡散したと想定される。しかし、その拡散のあり方は、フニンを中心としてより離れた地域へと放射状に段階的に拡がっていったわけではない。ラクダ科動物の飼育の拡散は、フニンからの距離という地理的条件に加え、遺跡のおかれた生態環境にも影響を受けながら進行した[鵜澤 2007a]。また、ラクダ科動物の導入に関しては、受入先の生態環境に加えて、在地社会の戦略が大きく関わっていたことは想像に難くない。

ペルー北部では、海岸部のワカ・ルシーア[Shimada et al. 1982]と山地のパコパンパ複合[関 2010; Uzawa 2010]で、ポマワカ期に対応する形成期中期からラクダ科動物が出現する。同じペルー北部山地でも、ラクダ科動物の導入には時期差があり、ワカロマでは形成期前期（ワンカバンバ期後半）にあたるワカロマ前期から[Shimada and Shimada 1985]、クントゥル・ワシでは形成期後期（インガタンボ期）のクントゥル・ワシ期にラクダ科動物の利用がはじまっている[鵜澤 2007a, 2007b, Uzawa 2010]。また、コンテクストは不明瞭ではあるが、極北部海岸のセロ・ニャニャニケでは、ポマワカ期に対応するニャニャニケ期に[Guffroy 1989: 193, 1992: 102]、北部熱帯低地のミチナルとセレサルではインガタンボ期以降（形成期後期か末期）に、ラクダ科動物が現れた可能性がある [Miasta 1979: 59, 81]。その一方、エクアドル南部地域では状況が大きく異なり、ラクダ科動物は紀元前後にその利用が開始された[Bruhns et al. 1990; Miller and Burger 1995; Miller and Gill 1990]。このようにして、ラクダ科動物の利用開始にペルーとエクアドルで時間差がみられる要因としては、エクアドルに顕著なパラモと呼ばれる多雨多湿の草原・低木地帯がさほど古くから利用されていなかったためであるとも考えられている[Miller and Gill 1990]。

議論の根拠となるインガタンボ遺跡の動物骨データは、質、量ともに十分とはいえず、そのため、家畜化に関する議論には適さない。また、高温多雨といったワンカバンバ川流域の生態環境を考慮すると、一般に高地適応とされるラクダ科動物の成育に適した環境とは考えにくい。ワンカバンバ川流域で飼育可能と考えられる唯一の場所は、ワンカバンバ川の南側にそびえる山の頂上部から南に広がる土地であるが、調査例がないため、形成期の遺跡分布については不明である。いずれにせよ、ワンカバンバ川流域は、ラクダ科動物の自然分布域外にあり、少なくともラクダ科動物の狩猟が行われた可能性はない。このような状況のなかで、ワンカバンバ川流域社会は、いかにしてラクダ科動物を入手したのであろうか。

鵜澤は、稲村が提示したアンデスにおける二つの牧畜モデル[稲村 1995]を参照しつつ、形成期社会におけるラクダ科動物の拡散過程を、クントゥル・ワシ遺跡の動物骨の分析を通じて論じた。そして、クントゥル・ワシ期におけるラクダ科動物の出現を、現代の牧畜モデルには当てはまらない、シカ狩猟からラクダ科動物の家畜利用への転換として捉えた[鵜澤 2007a; Uzawa 2010]。また、この背景として、①農耕に加えて行っていたシカ狩猟の比重を弱め、代わりにラクダ科動物の飼育をはじめた可能性と、②農牧複合型の牧畜を営む集団との物資の交換によって、ラクダ科動物を入手した可能性をあげ、クントゥル・ワシの事例は前者に相当するとした。鵜澤が指摘したように、大半の形成期遺跡では、時期ごとにラクダ科動物の利用が増加しているため、ペルー北部地域でも形成期にラクダ科動物の家畜化が進展した可能性はある。しかし、ワンカバンバ川流域の生態環境は、ラクダ科動物の成育には適していないことから、流域社会へのラクダ科動物の導入は、むしろラクダ科動物の飼育を行っていた集団との資源交換の結果であると想定される。古環境復元データが存在しないため、あくまで現状における推測の域を出ないが、交換先の社会として最も有力なのは、ワンカバンバ川に隣接し、同時期にラクダ科動物の利用が開始されはじめ、より飼育に適した生態環境を有するパコパンパ複合の周辺地域、あるいは両者の中間地域であると考えられる。

第 7 章で指摘したように、インガタンボのデータでは、時期ごとにラクダ科動物の出土状況の量的な変化を示すことはできない。しかし、ポマワカ期からみられる海産資源の増加といったポマワカ期の社会的背景を考察すると、地域間の資源輸送に際して、ラクダ科動物が重要な役割を果たした可能性はある。そしてその結果として、地域間ルートが徐々に変化し、次第にラクダ科動物を伴う徒歩移動が主要移動手段となることで、地域間交流がより効率的、かつ活発に行われるようになったことが想定される。このことから、ワンカバンバ川流域社会におけるラクダ科動物の導入に際しては、とくに資源運搬との関わりが重要であったと考えられるのである。

また、インガタンボでポマワカ期から出土するようになる土器は、海水生種の魚や貝の運搬にも利用されたと推測される。先行研究では、ラクダ科動物の家畜化とトウモロコシ栽培の同時期性が指摘されるが[関 1999; 鵜澤 2007a]、インガタンボにおいてもラクダ科動物の出現とトウモロコシの利用開始時期は同じである。これについては、ラクダ科動物を利用した輸送システムが次第に確立されることで、地域間交流の活発化が促され、ペルー北部で様々な物資の交換がおこった結果であると考えられる。そして、地域間交流が各地の社会を中心に展開されるなかで、地政学上の重要地にあるインガタンボは、近接するパコパンパ複合周辺地域からもたらされるラクダ科動物を伴う地域間交流を管理する存在の一つとして、重要な役割を果たすようになったことが示唆される。

このようにして、ポマワカ期に生じたラクダ科動物の導入と輸送システムの確立は、単に地域間交流を活性化するだけではなく、地域間ルートの選択や交流のあり方を大きく左右した。そして、様々な研究者が指摘するように集団間の交流において、物資だけでなく、情報やイデオロギーに関わる概念や実践も伝達されたと考えられる[Valdez 2008a]。その結果、

地域間交流は、当該社会の社会組織や階層化の展開にも大きく関与することになったのである。

10-3. GIS を用いたルート分析の目的と意義、および方法

前節までに、アンデスにおけるルート研究の問題点を指摘して、本研究のルート分析の位置づけを明らかにした。それをふまえたうえで、本節では、GIS を用いたルート分析の目的と意義、およびその分析方法について記述する。

10-3-1. GIS を用いたルート分析の目的と意義

一般に、アンデスの環境特性としてあげられるのは、高度差によって生じる多様な生態環境や複雑な地形が、狭い地理的範囲内に存在することである。そのような様々な生態的条件は、人々がそのなかで生活を営むとき、必然的に人間社会に大きな影響を与える。そのため、アンデスでは、複雑な生態的条件を同時、かつ最大限に利用しようとする人々の活動が、これまでも研究の中心テーマの一つとされてきた。こうした環境特性や研究状況を考慮すると、アンデスとは、ルート研究に最適なフィールドであると考えられる。なぜならば、前節で述べたように、ルート研究とは所与の生態環境のなかで人や物資の動きを対象として、それらの動きと社会展開との相互関連を捉えようとする研究と位置づけられるためである。

しかしながら、ルート研究においては、通行の可否、移動時間、移動コストを解析するために、地形や河川流量などといった生態環境データを考慮せねばならない。そのため、これまではアンデスの入り組んだ地形や著しい高度差が、逆に分析の足かせとなってきた。つまり、海岸砂漠、河川中流域、山地、熱帯低地などといった区分や、ハビエル・プルガル・ビダルの地理区分を用いて生態環境を考慮する論考が主流であり、かつ限界ともなっていたのである。

ところが近年、地形データのデジタル化が急速に進み、SRTM（Shuttle Radar Topography Mission:スペースシャトル立体地形データ）にも容易にアクセスできるようになった。そのため、これまでのルート研究では困難であった地形や標高、あるいは河川データを含めたルート分析が可能となった。このようにして、地理情報を考慮したうえで、生態的アプローチからルートを分析することは、以前と比べてより実状に近いルートを仮説的に提示することができる点において、極めて重要である。そしてこの分析を通じて、前章までに指摘してきたインガタンボの社会変化と地域間交流との関係や、ワンカバンバ川流域における神殿社会の成立、およびその展開と地域間ルートとの関係を、新たな切り口から検証することができよう。また、GIS による分析は、データの解釈における研究者の主観やバイアスを避けることができるため、データを提示する際に客観性を維持できるという利点もある[金田・津村・新納 2001]。つまり、トピックらが行ったように、様々なネットワークのモデルを用いたうえで、地域間ルートを解釈する必要はなく、遺跡間をつなぐルートを直接的に図示することができるのである。ただし、今回の分析では、地形データに植生などの属

性を十分に組み込むことができなかった。したがって、本章で提示するルートも一つの可能性に過ぎず、データの拡充をふまえた精緻化が必要であることはいうまでもない。

10-3-2. GIS を用いたルートの分析方法

本項では、本研究で実施したルート分析の方法論と、その手順について記述する。

本研究では、分析に先立ち、まず、対象地域の地形の 3 次元モデルを作成した。地形は SRTM の地形データ（SRTM-3: 3 秒メッシュ（約 90m））を用い、河川などの水系に関してはペルー国土地理院（Instituto Geográfico Nacional）作成の数値地図を使用している。

分析に使用したプログラムは、ArcGIS 9.3.1、およびプラグインの Spatial Analyst で、それらを用いて、ペルー北部とエクアドル南部に位置する遺跡間の最小（加重）ルートコスト解析を行った。

最小ルートコスト解析とは、任意の 2 点間を結ぶ最もコストの低い（効率性のよい)ルートを算出するものであり、ルートの決定に際して経済的側面を重視したものである。ルート解析に際しては、あらかじめ任意のコストを設定する必要があり、使用するコストが複数存在する場合は、そのうちのどのコストを、どれだけ重視するのかという比率も先に決定しておかなければならない。今回の分析に際しては、コストとして、斜度、水中、標高の三つを設定しており、各コストの詳細な設定とコスト間の比率は、以下の通りである。

斜度コストの設定では、傾斜角によって地形を①0～5°、②5～12°、③12～19°、④19～26°に細分した。これにより、分類された 4 タイプの土地のなかから、基本的には同タイプで、なるべく傾斜角の少ない土地を通るように、ルートが選択されるようになる。なお、26°以上の傾斜角を持つ場所は、基本的に移動不可能であると考えられるため、ルートの選択肢からは予め除外している。このようにして、傾斜角を分析に加えることによって、特定 2 点間のルートは、両者を結ぶ一本のルートとしてではなく、それぞれの地点からお互いに移動しやすい傾斜面を選んで導かれる双方向的な 2 本のルートとして解析される。

次に、水中コストは、マラニョン川のような基本的には渡河が不可能な河川と、一般河川とを区別して設定した。河川の水中コストとは、陸地と比した水中移動の困難さを示したものであり、陸地を 1 とした場合、一般河川はその 100 倍、マラニョン川は 1000 倍、通行が困難なものとしている。これは、河川流域を移動する際に、過度に頻繁な渡河を行うような直線的なルートが解析される可能性を排除するためである。ただし、マラニョン川を横切る移動に関しては、遺跡の立地と現代の地域住民へのインタビューから、2 点の渡河ポイントが想定されたため、この 2 点のみをルート分析に組み込んでいる。

標高コストに関しては、500m の等高線ごとに地形を区別した。これは、この区分を用いることで､高低差の激しい移動をあえて行わないように､ルート選択を制限するためである。

こうして最後に、斜度、水中、標高の三つのコストを合算し、ルート解析（加重ルート分析）を行った。この際、コストの割合（コスト間の相対的関係）を決める必要があるが、今回の分析では 2 通りのコスト割合を定めた。まず一つは、「斜度コスト 50%、水中コスト

50%」で、標高コストを考慮しないものである。この場合、各遺跡から出発したルートは、地形の傾斜と河川の分布のみを考慮しながら選択される。つまり、遺跡間でなるべく傾斜変化や渡河回数が少ない最短のルートが選ばれるのである。本論では、このルートを、徒歩による移動ルートとして仮説的に捉えている。もう一つは、「斜度コスト 10%、水中コスト 10%、標高コスト 80%」で、標高コストの割合を高くしたものである。これによって、前者とは異なり、各ルートは遺跡間でなるべく特定の標高の場所を意識的に選択しながら、かつそのなかで傾斜変化や渡河回数が少ない最短のルートが選ばれる。本論では、このルートを、ラクダ科動物を伴う徒歩移動ルートとして仮説的に定めている。その理由の一つは、一般にラクダ科動物は高地に適応した生物であり、標高の低い場所で気温が高すぎる場合に、動物が死亡するリスクが生じると考えられることである。そして第二に、ラクダ科動物飼育にとって理想的な条件が水と牧草に恵まれた冷涼な高原[鵜澤 2007b:106]であることから、ラクダ科動物を伴う移動では、通常の徒歩移動と比べて、より標高の高い場所が意図的に選択されたと推測されるためである。なお、今回の分析に際しては、分析範囲全域を網羅する気温データの入手が不可能であったため、標高を気温の目安として代用している。このようにして想定されたルートは、あくまで生態環境にもとづいたルートであるが、これに神殿の建築特徴や考古遺物の共通性などの考古学データを加味することで、当該時期の社会状況をふまえたルートにより近づくことができると考えられる。

10-4. ペルー北部とエクアドル南部における最小コスト地域間ルート

本節では、前節で述べた方法を用いて、ワンカバンバ川流域、とくにインガタンボ遺跡を中心とした最小コスト地域間ルートを算出する。この分析によって提示されたルートは、既述の諸条件下（コスト＝傾斜、水中、標高）で最も移動しやすい（コストが低い）ルートとなっている。そして、ルート上のポイントとなっているのは、いずれも形成期の神殿や小規模な基壇建造物である。

先行研究によれば、形成期の地域間交流は、各地域の神殿を中心として行われていたと考えられる。また、形成期において、特定社会、あるいは物資の運搬に関わる特定の専業者集団が、ペルー北部の地域間交流全体を統御したとは考えにくい。これらのことから、分析に際しては、どれか一つの遺跡のみを起点としたルート解析を行うのではなく、同様の基準で全ての遺跡間を結ぶルートを解析した。そして、各遺跡間を結ぶルートとして、徒歩による移動とラクダ科動物を伴う徒歩移動を想定した2種類のルートを分析した(図 10-4, 10-5)。なお、図中の赤線は、インガタンボ遺跡と周辺遺跡を結ぶ徒歩ルート（以下、インガタンボ徒歩ルートとする)、青線はインガタンボを除いた周辺遺跡間を結ぶ徒歩ルート（以下、周辺遺跡間徒歩ルートとする）を示している。また、緑線はラクダ科動物を伴う徒歩移動時のインガタンボルート（以下、伴ラクダ：インガタンボルートとする)、黄線はラクダ科動物を伴う徒歩移動時の周辺遺跡間ルート(以下、伴ラクダ:周辺遺跡間ルートとする)を示す。徒歩による移動ルートとラクダ科動物を伴う徒歩移動ルートでは、通過する場所が異なり、

後者ではより標高の高い場所が選ばれていることにその特徴がある。

さらに、これに合わせて、インガタンボを中心として、日速 30km[1]と 20km[2]で移動した場合における一日の移動範囲を色の塗り分けによって示した（図 10-6, 10-7）。図中の各色の差異は、一日の移動範囲を表しており、色が変化するごとにインガタンボからの移動日数が増加することとなる。もちろん、実際の移動速度は、一定ではなく、状況に応じて変化しうる。今回の分析では、日速 30km と 20km の 2 通りを考慮したが、30km と 20km という前提自体も、ルートが通る場所の生態環境などに応じて今後の検証が必要であろう。ただし、上記のような問題が残るとしても、仮説的に移動速度を示すことによって、ルートに沿った移動時間を概略的に、かつ相対的に把握することが可能となる。そして、これを通じて、より具体的に地域間ルートを提示することができる点に、移動速度を設定して図示するメリットがあると考えられる。要するに、このような手続きをふまえて行われるルート分析とは、遺跡間の関係、すなわち地域間交流を、遺物の比較研究を用いて定性的に分析するだけでなく、そこから一歩ふみ出して、人の動きを重視しながら、地域間ルートの存在を通して、定量的に分析するための試みである。

以上のような分析を通じて明らかとなったインガタンボ遺跡から各遺跡への移動時間概算は、表 10-1 の通りである。この表からは、単に直線距離を測っただけでは把握することのできない、地形や標高差を加味したルートに沿って移動した際の移動時間が示されており、より実状に即した移動の容易さ、あるいは困難さが把握できる。注目すべきは、周辺地域と一口に述べても、ペルー北部山地と北部熱帯低地、北部山地の諸遺跡よりも、ワンカバンバ期から交流の存在が指摘されたペルー極北部海岸の遺跡の方が、より多くの移動時間が必要とされる点である。このことからも、実際の交流には、単純な距離ではなく、交流を行う社会の、社会的、宗教的、または政治的状況が反映されていることが明白である。

なお、現在のバグア市やハエン市から 2 日でパコパンパ複合まで到着可能であるという記述もあるが[Shady and Rosas 1979: 125]、ここではあくまで相対的な目安として、移動時間を提示している。

[1]ワンカバンバ川流域遺跡分布調査時の住民へのインタビューから、現代の住民の 1 日の移動距離を考慮して、徒歩による移動速度を日速 30km とした。

[2]現代のキャラバンの移動速度を考慮して、長期間の移動（2 ヵ月から 4 ヵ月）に関する最も遅い部類の移動時間を便宜的に採用した。1 週間程度の移動の場合は、1 日で 25km から 30km 移動することもある[Berenguer 2004: 54]。

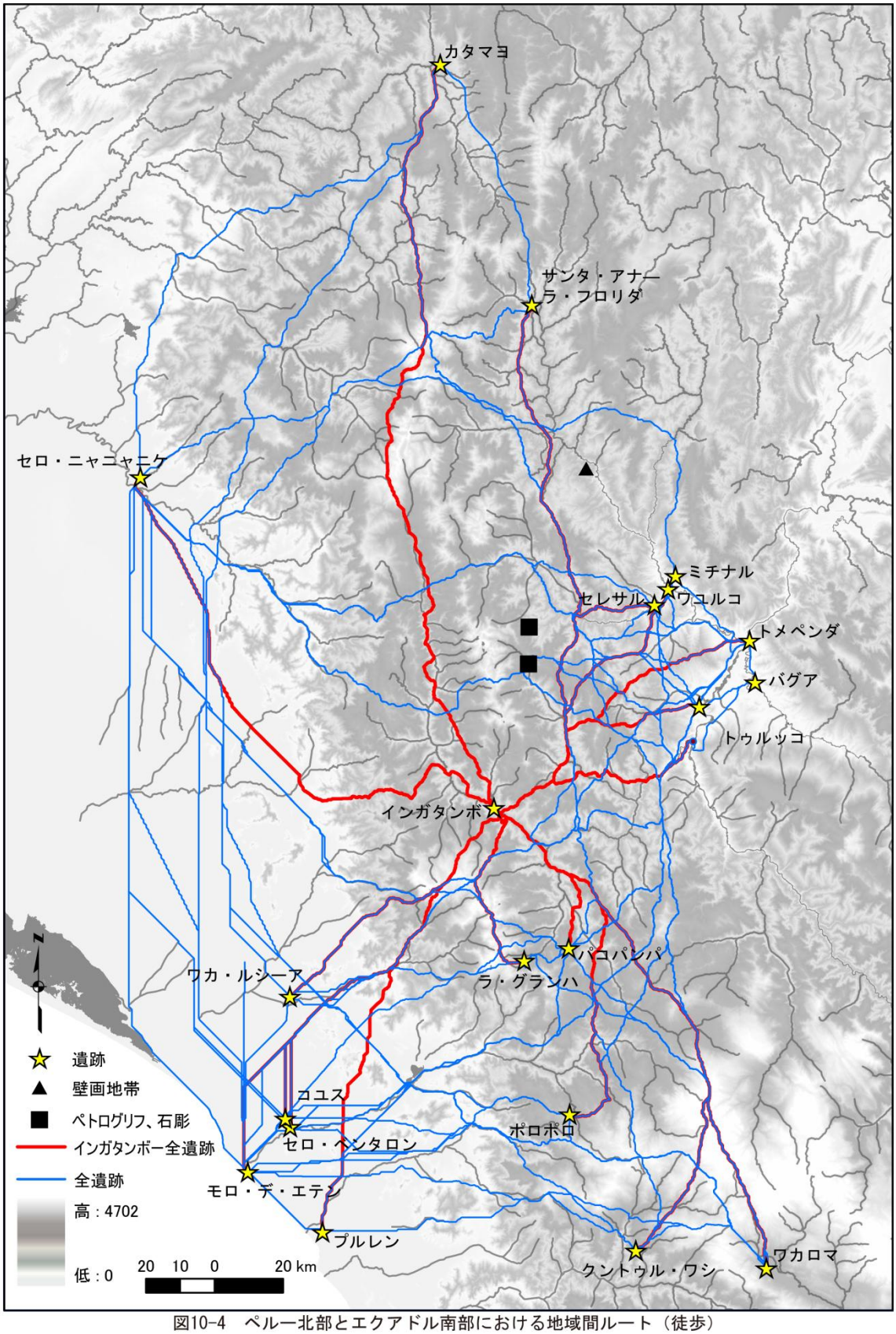


図10-4　ペルー北部とエクアドル南部における地域間ルート（徒歩）

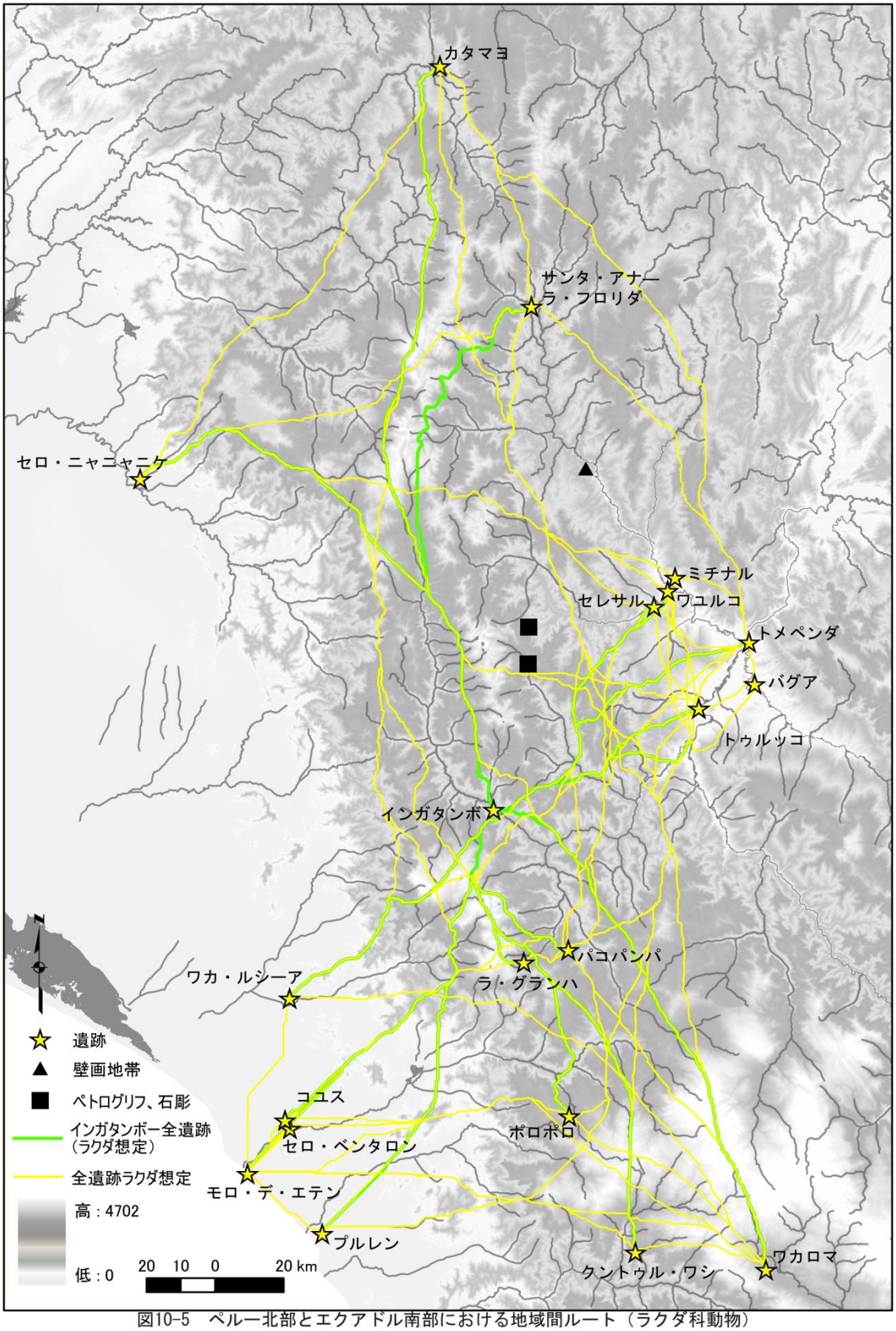


図10-5　ペルー北部とエクアドル南部における地域間ルート（ラクダ科動物）

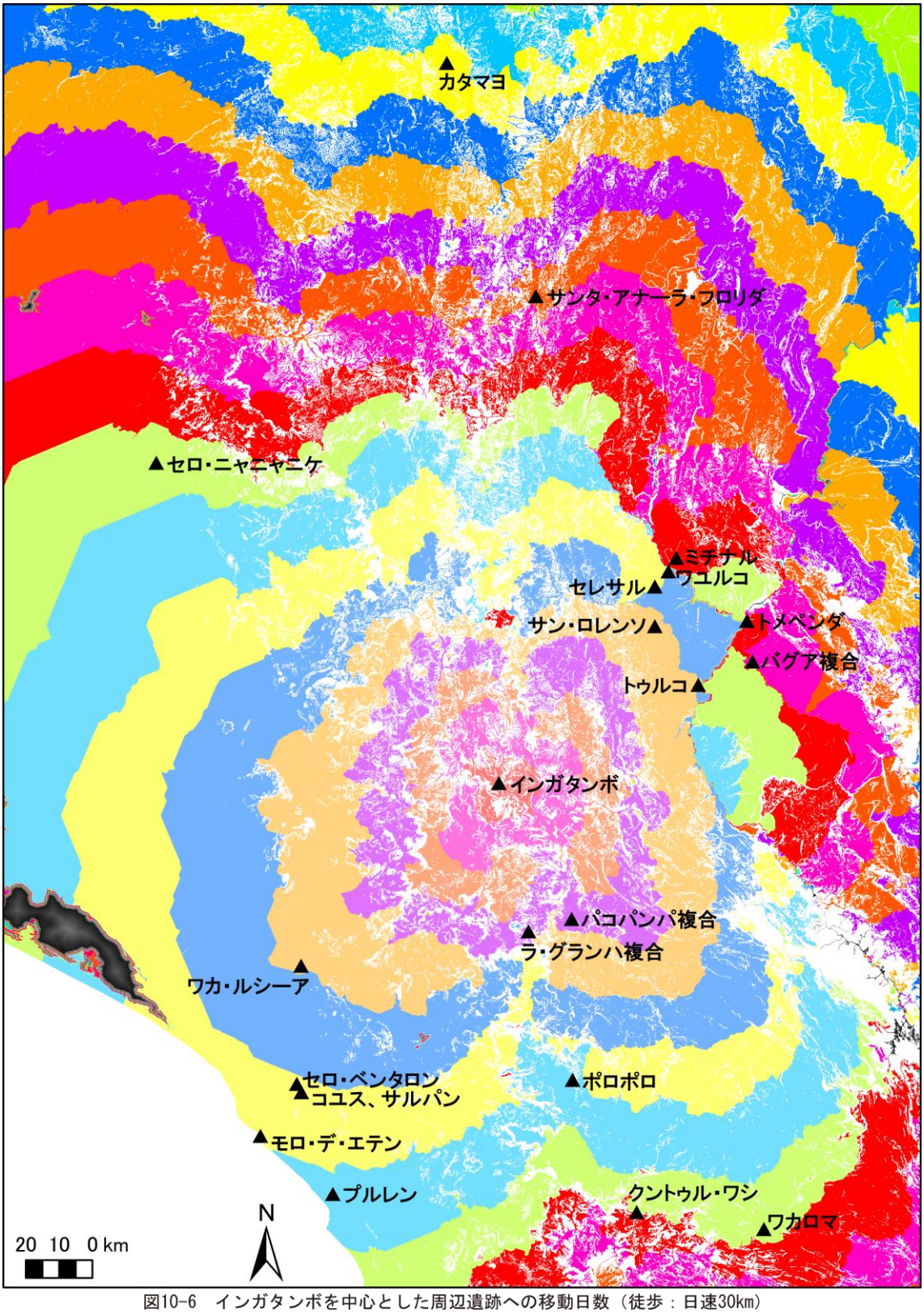


図10-6　インガタンボを中心とした周辺遺跡への移動日数（徒歩：日速30km）

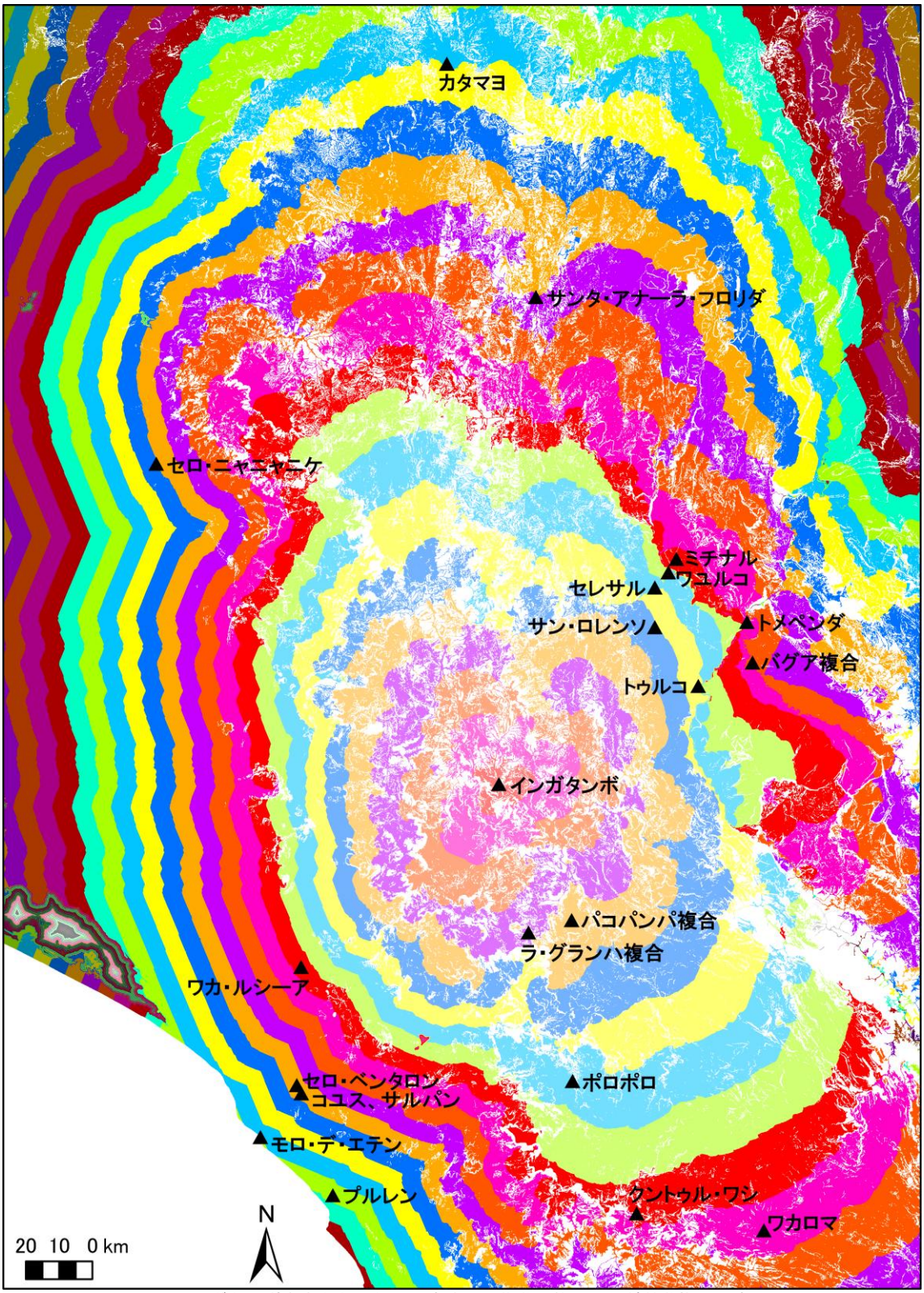


図10-7　インガタンボを中心とした周辺遺跡への移動日数（ラクダ科動物：日速20km）

表 10-1　インガタンボ遺跡から周辺諸遺跡への移動日数

遺跡名	最小移動日数	
	徒歩移動(日速30km)	ラクダを伴う移動(日速20km)
カタマヨ	16日目に到着	17日目に到着
サンタ・アナ―ラ・フロリダ	12日目に到着	13日目に到着
セロ・ニャニャニケ	9日目に到着	15日目に到着
ミチナル	10日目に到着	10日目に到着
ワユルコ	7日目に到着	9日目に到着
セレサル	6日目に到着	7日目に到着
サン・ロレンソ	5日目に到着	6日目に到着
トメペンダ	6日目に到着	9日目に到着
トゥルコ	5日目に到着	7日目に到着
バグア	9日目に到着	11日目に到着
パコパンパ	5日目に到着	5日目に到着
ラ・グランハ	4日目に到着	4日目に到着
ワカ・ルシーア	5日目に到着	10日目に到着
セロ・ベンタロン	7日目に到着	14日目に到着
コユス、サルパン	7日目に到着	14日目に到着
モロ・デ・エテン	7日目に到着	17日目に到着
プルレン	8日目に到着	18日目に到着
ポロポロ	8日目に到着	8日目に到着
クントゥル・ワシ	9日目に到着	10日目に到着
ワカロマ	9日目に到着	11日目に到着

次に、各遺跡の活動時期に応じて、ワンカバンバ期(形成期早期と形成期前期)、ポマワカ期（形成期中期)、インガタンボ期（形成期後期）に対応する時期別のルート図を作成した（図 10-8～10-11)。この地域間ルートは、神殿あるいは基壇建造物を有する遺跡を起点として算出されているため､時期的にそれらの分布が認められない地域にはルートがひかれていない。しかし、このことは、その地域に地域間交流が存在しなかったことを意味するわけではない。これまでにも繰り返し述べてきたように、形成期の地域間交流は、社会的統合の中心である神殿を軸として行われてきたと想定されるため､ルートがひかれていない地域は、あくまで当時の地域間交流の主要ルートではなかったと考えられるだけである。

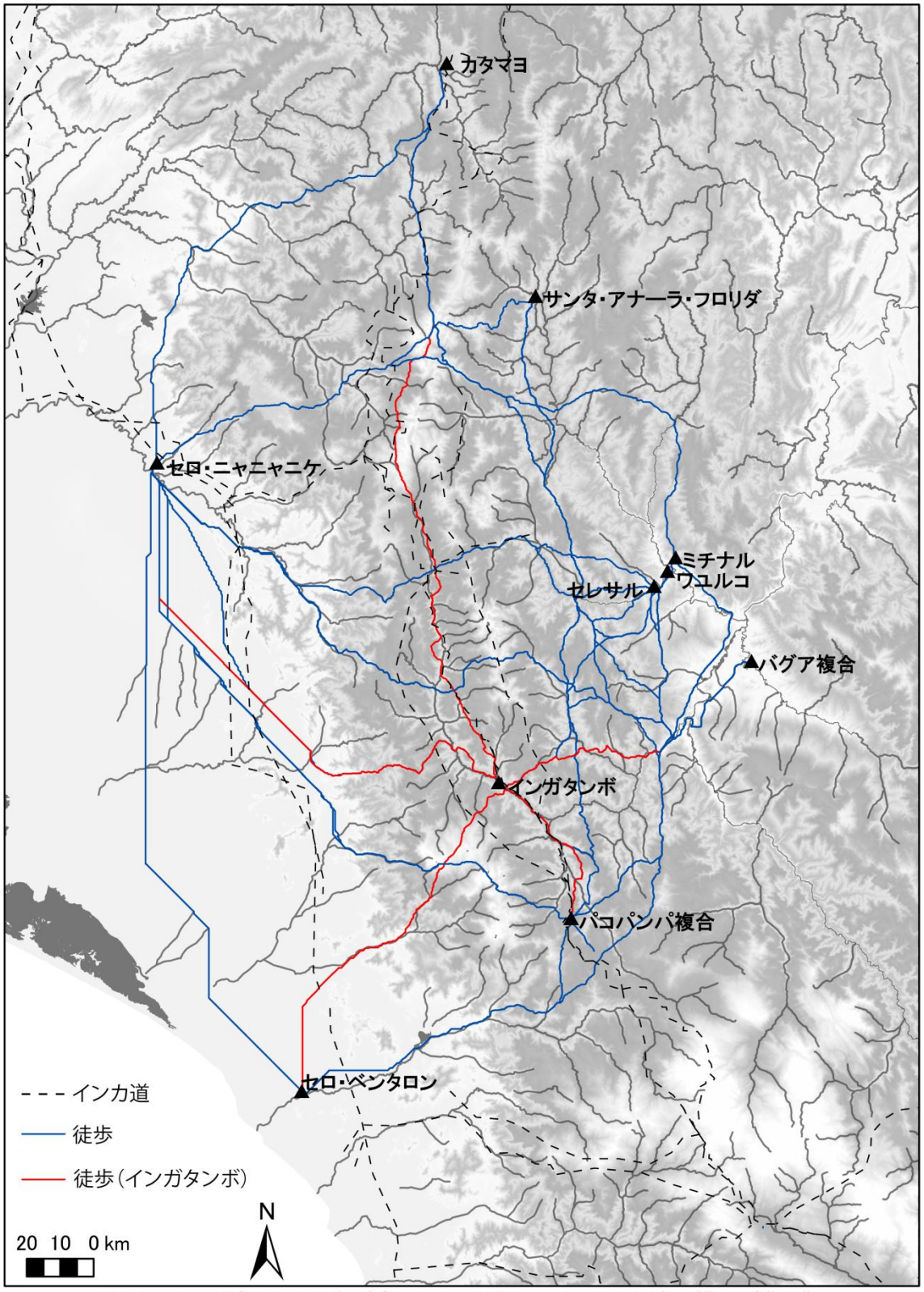


図10-8　ペルー北部とエクアドル南部における地域間ルート（ワンカバンバ期=形成期早期）

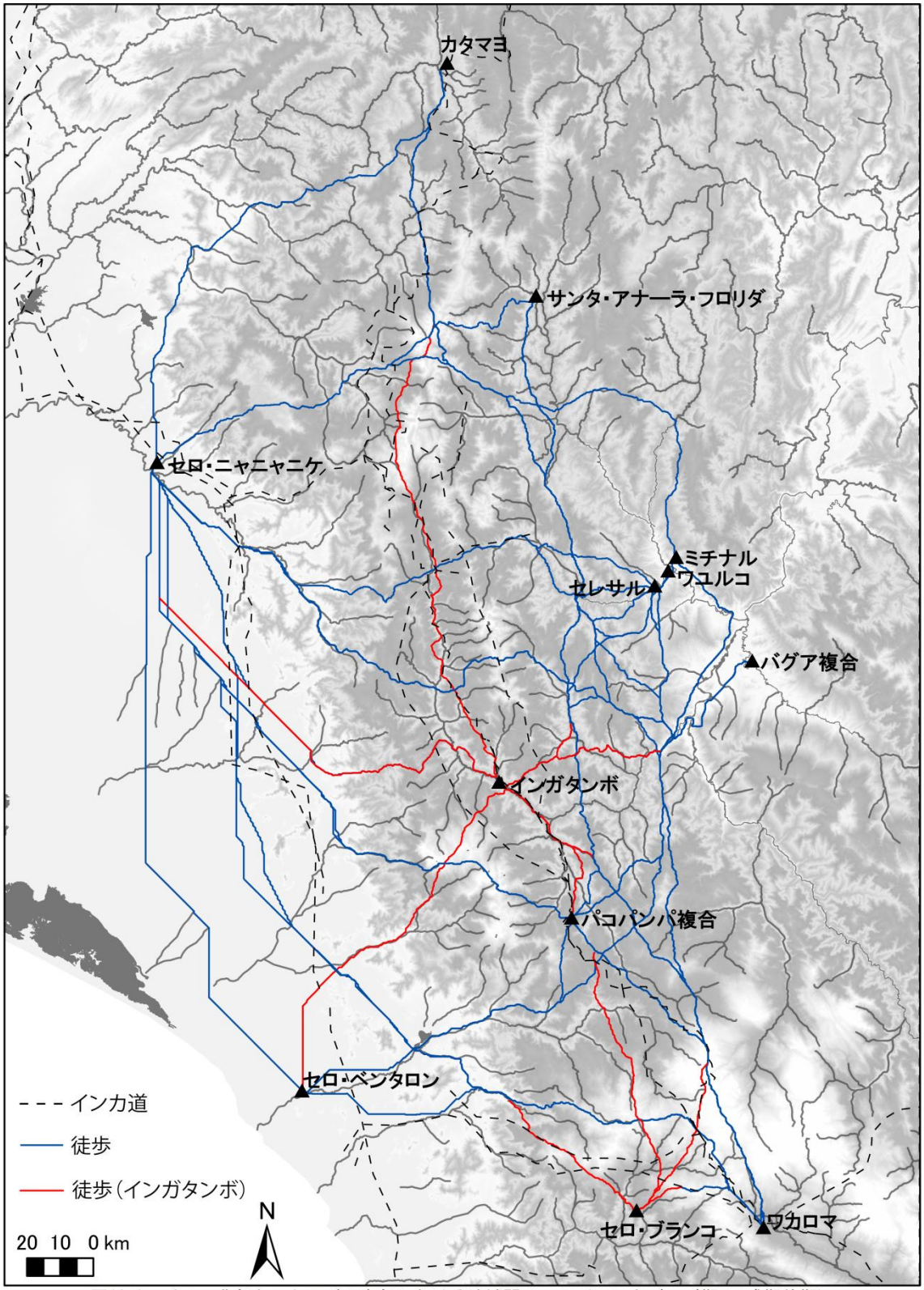


図10-9　ペルー北部とエクアドル南部における地域間ルート（ワンカバンバ期=形成期前期）

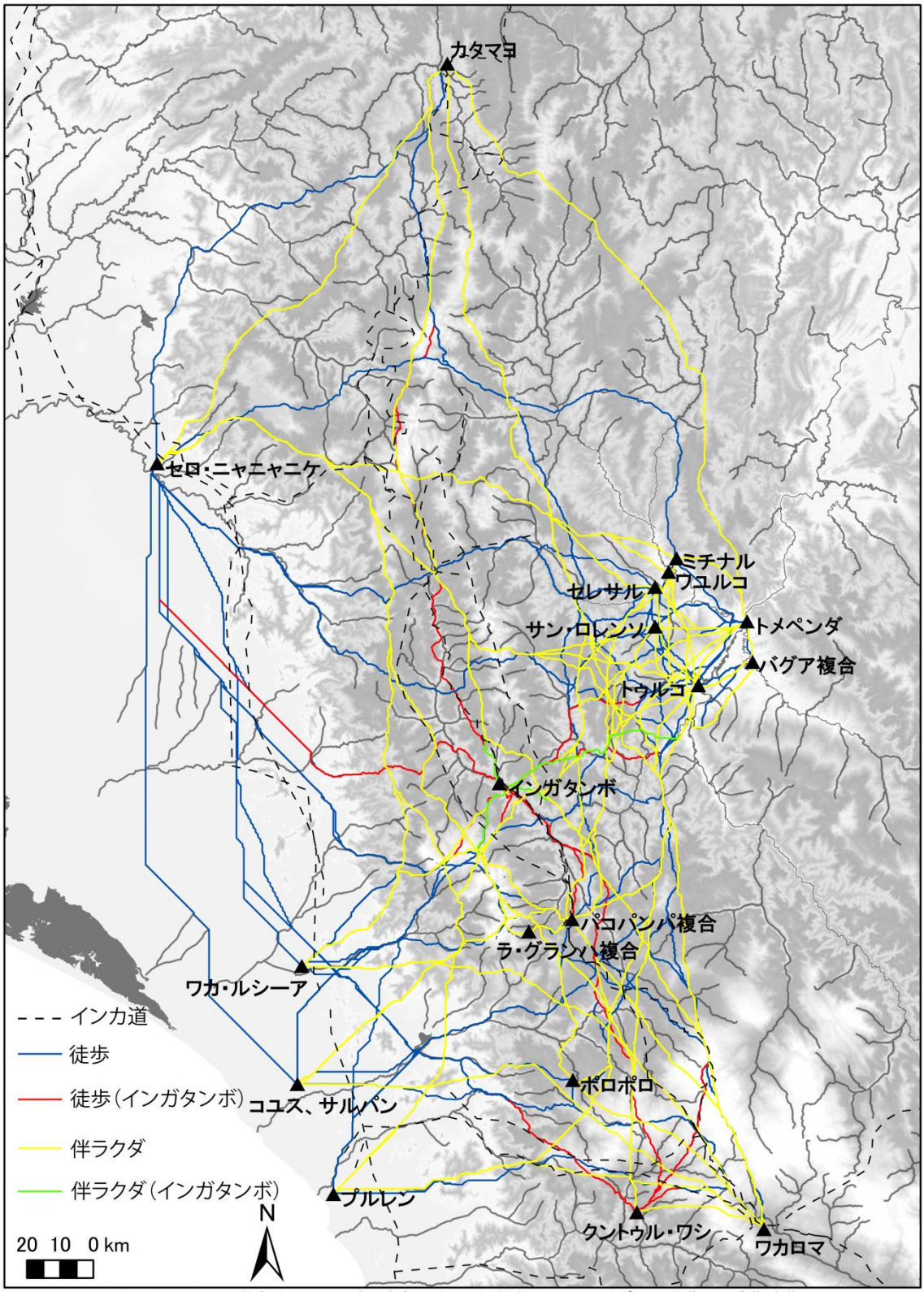


図10-10　ペルー北部とエクアドル南部における地域間ルート（ポマワカ期=形成期中期）

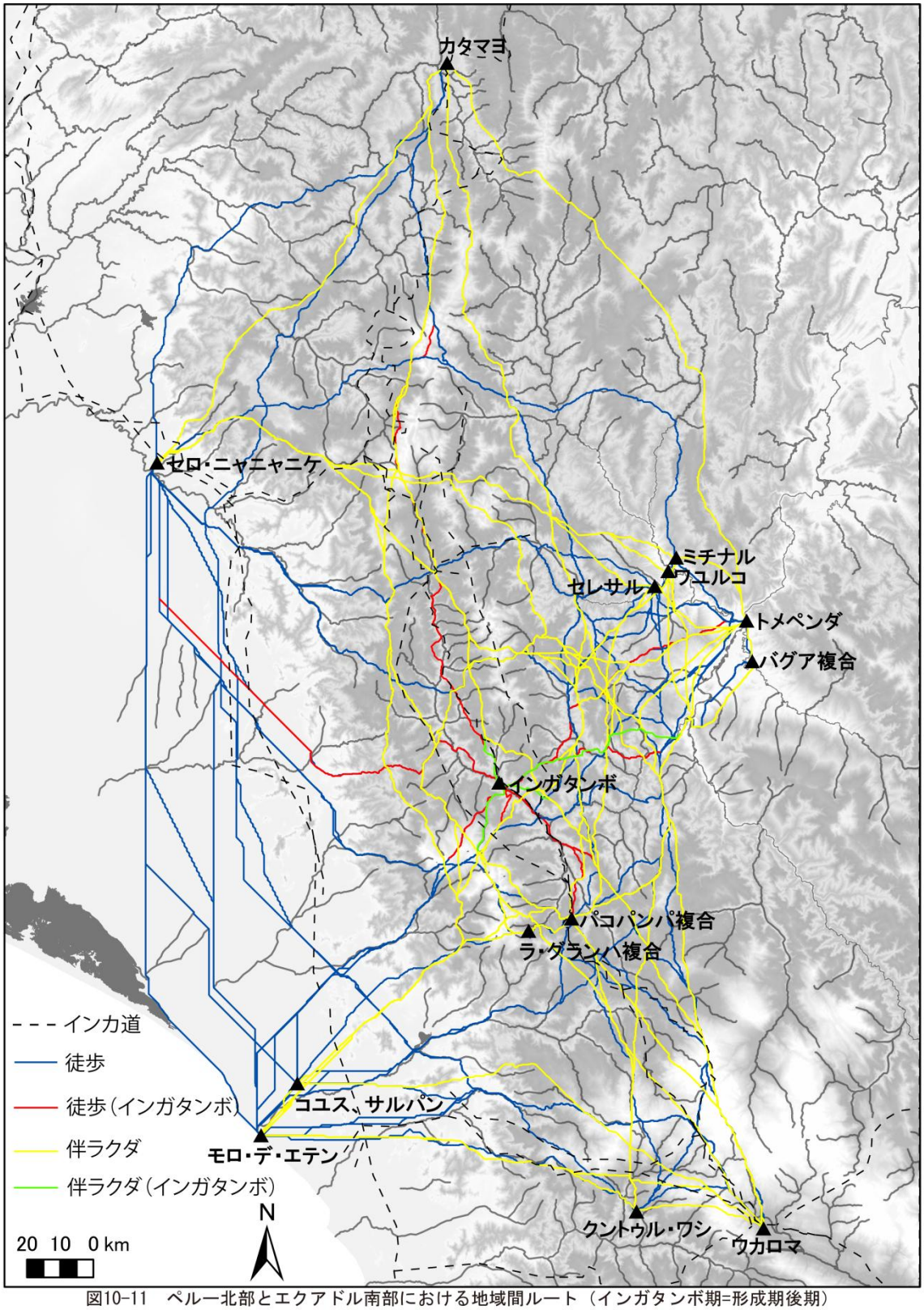


図10-11　ペルー北部とエクアドル南部における地域間ルート（インガタンボ期=形成期後期）

10-5. 小括：地域間ルートの通時的変遷

本節では、前節において実施したルート解析の結果を、建築特徴や土器を中心とした考古遺物の比較をふまえて検討し、インガタンボ、あるいはワンカバンバ川流域を中心に、ペルー北部とエクアドル南部における地域間ルートの通時的変化について論じる。

10-5-1. ワンカバンバ期（形成期早期-前期）

ワンカバンバ期における地域間ルートの解析結果は、図 10-8（形成期早期）、および図 10-9（形成期前期）の通りである。この時期には、ペルー北部地域以北において、ラクダ科動物の出土例は報告されていないため、徒歩移動が主要な移動方法であったと考えられる。

インガタンボの発掘調査では、形成期早期と形成期前期の区別は明確ではなかったが[1]、ここでは、分析においてポイント（ルート分析の起点）となる周辺地域の各遺跡の時期に応じて、二つの時期に分けて分析を行った。

形成期早期には、インガタンボ徒歩ルートと周辺遺跡間徒歩ルートは、ほとんど重なりあわず、双方のルートに一致はみられない。このことは、当該時期の地域間ルートにおいて、インガタンボ徒歩ルートの重要性が低いこと、つまりは地域間交流にインガタンボが積極的に組み込まれていなかったことを示唆している。これを肯定するように、インガタンボと周辺地域との交流の具体的な証拠は、この時期（ワンカバンバ I-II 期）には確認されていない。これらの状況を考慮して、地域間交流の度合いと有無を地域間ルートに反映させながら、当該時期の主要ルートを同定したのが、図 10-12 である。図 10-12 では、インガタンボと周辺地域の諸神殿との交流が認められないことから、インガタンボ徒歩ルートを取り除き、周辺遺跡間徒歩ルートだけを示している。

また、形成期前期には、遺跡数が増加することで、解析されたルート数も増すが、基本的には形成期早期と同様の傾向を示す。しかしながら、ワンカバンバ期後半（ワンカバンバ III-IV 期：形成期前期相当）になると、資料数は極めて限られているものの、海水生種の貝製品が 1 点検出される。さらに、ワンカバンバ川流域を除いた周辺地域では、土器の利用とその類似性が指摘されるようになり、地域間交流の存在がみられるようになる。

ここで、第 8 章で述べた周辺地域における神殿建築や土器の比較分析を考慮すると、神殿建築や無頚壺とコンポジット鉢の有無によって、対象地域は、北部熱帯低地のバグア複合と北部山地のパコパンパ複合（パンダンチェ）を境として、南北 2 地域に区分される。また、土器装飾に関しては、ガルバンサルではサン・フアン期にエクアドル南部海岸との関係が、ペルー極北部海岸ではエクアドル南部山地との関係が、赤色塗彩を主要な装飾技法として文様を描く土器などから指摘できる。さらに、ペルー北部山地と北部海岸では、装飾に関しても器形と同様に、高い共通性が認められる。北部熱帯低地のバグア複合も装飾の面では

[1]四つのサブフェイズが確認されているため（第 4 章参照）、ここではワンカバンバ I-II 期（サブフェイズ I～II）を形成期早期相当、ワンカバンバ III-IV 期（サブフェイズ III-IV）を形成期前期相当としている。

北部山地の事例に近い。その一方で、神殿建築の特徴においては、インガタンボと極北部海岸や、北部熱帯低地の諸遺跡間に類似性が認められる。

このようにして、各地域の建築や土器の類似性や差異、および貝製品の出土状況をふまえて、地域間交流の度合いと有無を地域間ルートに反映させ、同定した当該時期の主要ルートが、図 10-13 である。形成期早期のルート（図 10-12）との差異は、海岸へ抜けるインガタンボルートの存在が考慮されている点にある。つまり、この時期には、インガタンボを中心とした社会の人々の戦略として、単純に距離が近く、移動時間の短い北部山地の社会ではなく、海岸部、とくに極北部海岸に存在した社会との交流が積極的に行われたと考えられる。

なお、土器の共通性と差異に注目した場合、エクアドルからペルーへの土器の拡がりは、多面的なものであったことが示唆される。そして、土器属性の分布状況とワンカバンバ川流域において土器の利用開始が周辺地域よりも遅れることから、仮説的に提示できるペルー北部地域への土器の導入経路は以下の 3 通りとなる。

①エクアドル南部海岸からペルー極北部海岸トゥンベス川流域
②エクアドル南部山地からペルー極北部海岸ピウラ川、チラ川流域
③エクアドル南部山地、エクアドル南部熱帯低地からペルー北部熱帯低地、北部山地

さらに、中央アンデス全体への土器の導入について言及した場合、実際には中央山地のコトシュの事例も考慮する必要があるため、④エクアドル南部熱帯低地、アマゾン川流域からウカヤリを通ってペルー中央山地（コトシュ）、といった経路も想定される。このようにして、土器属性の分布とルート分析から示唆される土器の導入経路は、北から南へという単純な形態をとらずに、上記のように複雑な状況を呈する。

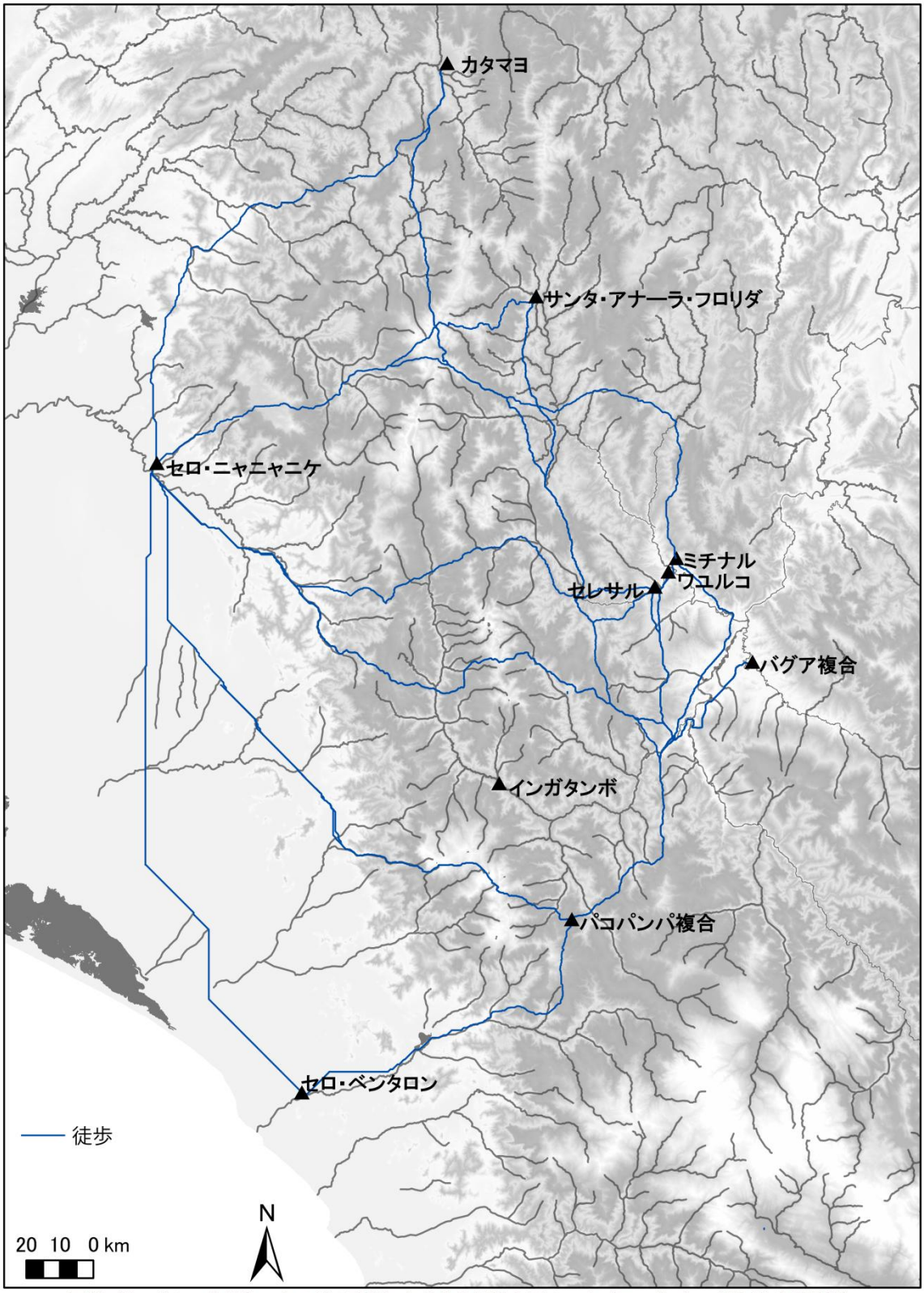


図10-12　ペルー北部とエクアドル南部における地域間主要ルート（ワンカバンバ期=形成期早期）

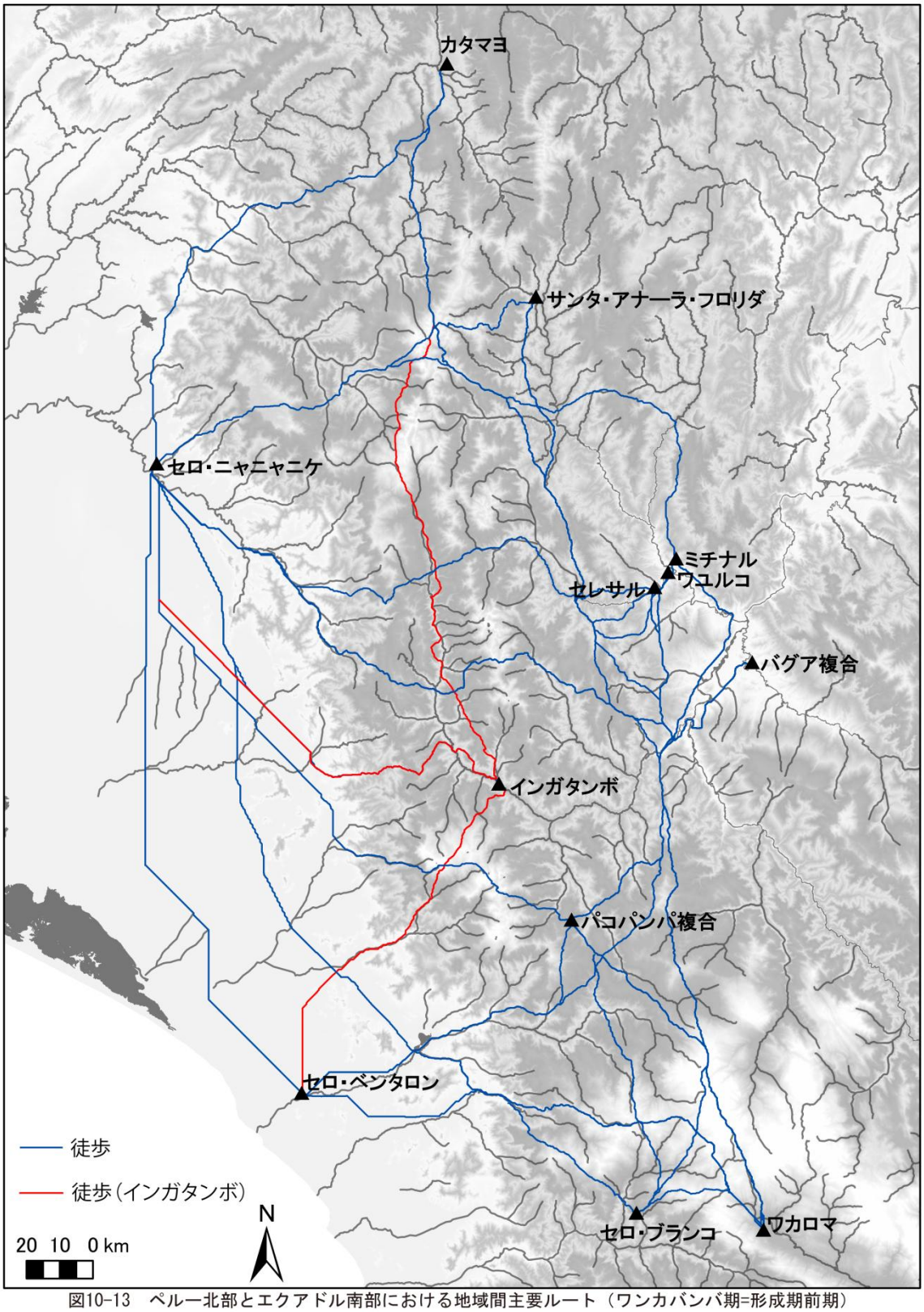


図10-13　ペルー北部とエクアドル南部における地域間主要ルート（ワンカバンバ期=形成期前期）

10-5-2. ポマワカ期（形成期中期）

ポマワカ期における地域間ルートの解析結果は、図 10-10 の通りである。この時期になると、インガタンボと周辺地域との交流を示す具体的な証拠が増加するとともに、ペルー北部地域でラクダ科動物が出土するようになる。したがって、地域間交流に際して、ワンカバンバ期にみられた徒歩移動からラクダ科動物を伴う徒歩移動へと、次第に移動手段が変化していったと考えられる。また、ラクダ科動物を伴う徒歩移動は、物資の運搬量や運搬効率の増加を導いたが、それと同時に地域間ルートの変化も生じさせた。つまり、ラクダ科動物を伴う移動に際して、動物を連れた移動に適した生態環境を通るように、主要ルートが変化したことが想定されるのである。

図 10-10 における徒歩移動ルートの傾向は、ワンカバンバ期と大差はない。しかしながら、ラクダ科動物を伴う徒歩移動ルートに目を向けると、伴ラクダ：周辺遺跡間ルートがワンカバンバ川流域を通過しており、伴ラクダ：インガタンボルートと、多くの地域、とくにワンカバンバ川流域付近で重なり合いをみせている。このことは、ペルー北部とエクアドル南部における地域間交流に、ワンカバンバ川流域社会が組み込まれたことを示唆する。

また、この傾向は、とくに北部海岸と北部熱帯低地を結ぶルートと、エクアドル南部山地とペルー北部山地を結ぶ山地ルートに顕著である。ペルー極北部地域と北部山地の交流においては、第 1 節で述べた山間ルートが利用できるが、それとは別のルートもワンカバンバ川流域の西側に存在する。この西側のルート沿いには、発掘された神殿の報告例はないが、ジャガー的な要素を持つ図像が刻まれた石彫で著名なコンゴーナがある[Watanabe 2010]。しかし、神殿の分布や土器属性の分布などからみると、極北部地域と北部山地の交流においては、上記の山地ルートの優位性が伺える。

このように、地域間ルートが変化し、地域間交流におけるワンカバンバ川流域の重要性が増すことと軌を同じくして、ワンカバンバ川流域社会では土器の利用がはじまり、神殿も大規模化する。また、それに加えて、ウミギクガイをはじめとした海水生種の貝の利用が顕著となる。ただし、他地域との地域間交流と一口に述べても、先述したように交流の在り方は一様ではない。インガタンボの事例をみると、日用土器とされる粗製の壺形土器は、有頚壺が中心であり、ペルー北部山地や北部海岸以南に特徴的な無頚壺は確認されないのである。神殿の形態的特徴の比較でも、同様の傾向がみられ、ペルー極北部海岸と北部熱帯低地、とくに後者との強い関係が示唆されている。その一方で、精製土器に関しては、日用土器や神殿建築で関係が示唆されたペルー北部熱帯低地や極北部海岸だけでなく、ペルー北部海岸や北部山地の諸神殿との関係も指摘される。

さらに、土器以外では、ポマワカ期から多くの海水生種の貝製品がみられるようになる。このなかには、暖流系の貝も含まれており、ペルー北部海岸だけでなく、ペルー極北部海岸、あるいはエクアドル南部海岸や中央海岸からもたらされたと考えられる。先述の通り、エクアドルからの貝の輸送に関しては、はじめに海岸から山地へと運ばれた後で、ペルーへ搬出されたことが推測される。搬入元の一つとして推測されるのは、この時期に大量のウミギク

ガイが確認されているカタマヨ複合である。そして、ペルーへの搬出先としての役割を有していた神殿の一つが、インガタンボであったと考えられる。なぜならば、インガタンボでは製品だけでなく、加工途中の未製品や原材料と考えられる貝殻も出土しているのに対し、インガタンボと同様にエクアドルからのルート上に位置するセロ・ニャニャニケでは、ウミギクガイがほとんど確認されていないためである。

ただし、土器に関しては、インガタンボとカタマヨ複合の土器との直接的な類似性は、壺形土器における短頚壺の出土割合の優位性以外には、とくに認識されない。カタマヨ複合との土器の類似がみられるのは、むしろペルー極北部海岸の事例である。したがって、エクアドル南部とインガタンボを結ぶルートは、あくまで貝の輸送ルートとして機能していたと考えられる。なお、この時期のペルーとエクアドルとの交流の存在は、土器の比較を通じて、ペルー極北部海岸やペルー北部熱帯低地、あるいはペルー北部海岸でも示唆される[Elera1993: 244-245]。

以上のことをふまえて、考古遺物からみられる地域間交流の度合いと有無を地域間ルートに反映させ、当該時期の主要ルートを同定したものが、図 10-14 である。ワンカバンバ期の地域間ルート（図 10-12 と図 10-13）と図 10-14 との相違点は、ラクダ科動物を伴う徒歩移動を中心として、地域間ルートが考察されていることである。また、伴ラクダ：インガタンボルートが伴ラクダ：周辺遺跡間ルートに組み込まれることで、物資が東西南北の各方面へ、より短時間で、かつ多量に運搬できるようになった点に特徴がある[1]。そして、これこそが、インガタンボがペルー北部一帯における地域間交流の中継地として重要になった最大の理由である。こうしたポマワカ期の変化は、インガタンボを中心とした社会の人々が、社会戦略としてより効率的な輸送手段であるラクダ科動物を利用しながら、周辺地域との交流を積極的に行った結果であり、また、当該地域で地域間交流が活性化するなかで、次第に地域間ルートが変化したことを示している。

[1]先述したように（p.350）、ラクダ科動物を伴う徒歩移動は、単なる徒歩移動よりも移動時間を要すると考えられる。しかし、多くの物資を運搬する際には、人力だけでは効率が悪く、また、荷を担ぐことで移動速度は減少する。そのため、ラクダ科動物を伴う徒歩移動の方が、短期間で、かつ効率よく多量の物資を運ぶことができると思われる。

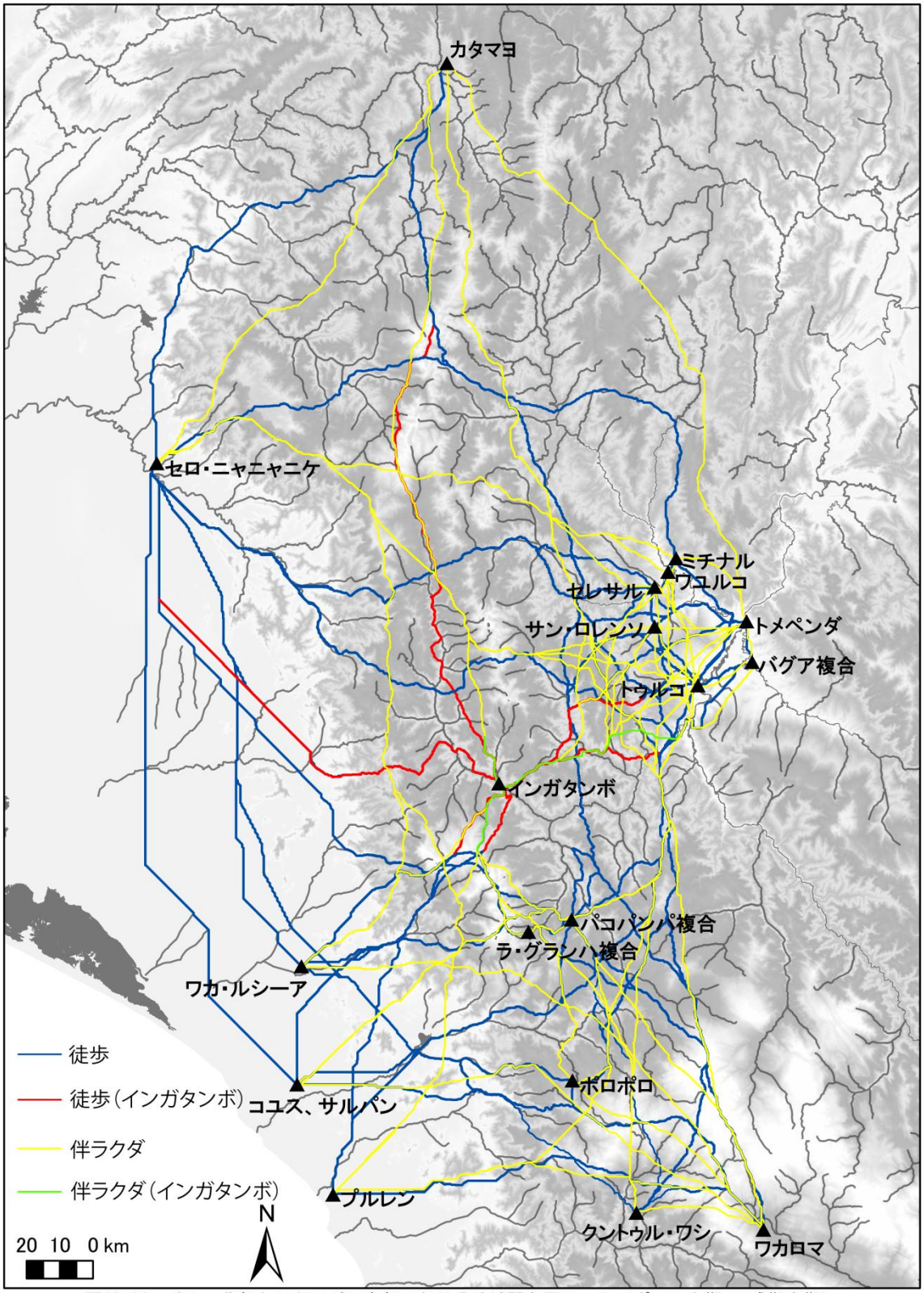


図10-14　ペルー北部とエクアドル南部における地域間主要ルート（ポマワカ期=形成期中期）

10-5-3. インガタンボ期（形成期後期）

インガタンボ期における地域間ルートの解析結果は、図 10-11 の通りである。この時期には、海岸部の多くの神殿が放棄され、神殿の数が減少すると同時に、山地へと神殿の主な分布が移行する。これにより、ルートも総じて山地へと移るが、地域間ルートの全体的傾向にはポマワカ期からの特別な変化はない。ただし、インガタンボと周辺地域との交流の具体的な証拠は増加し、これまでに確認されなかった遠距離起源の物資もみられるようになる。

インガタンボ期のインガタンボでは、ポマワカ期と同様に、海水生種の貝の出土が顕著である。それに加えて、インガタンボ II 期（インガタンボ期後半）には、ペルー南部山地のキスピシーサ産黒曜石の出土が認められる。さらに、神殿更新時に、金製品を伴う特殊な埋葬もみられる。金製品を伴う埋葬の事例は、ペルー北部山地と北部海岸に集中しており、北部海岸のチョンゴヤペ[Lothrop 1941]、モロ・デ・エテン、カヤルティとサルパン[Elera 1986]、セロ・コルバッチョ[Alva 1992; Bonavia 1994]に加えて、北部山地のクントゥル・ワシ[Onuki ed. 1995]、ラ・グランハ[Wester et al. 2000]とパコパンパ複合[関 2010]で確認されている。また、極北部海岸ピウラ川中流域のロマ・マカンチェ[Kaulicke 1998]と北部熱帯低地のトメペンダ[Olivera 1998]でも報告される。クントゥル・ワシとパコパンパ複合を除いて金製品の編年上の正確な位置づけは不明瞭ではあるものの、基本的に形成期後期のものと考えられる。

また、クントゥル・ワシとパコパンパ複合では、金製品を伴う埋葬は、形成期後期（インガタンボ期）のはじまりとともに、神殿更新の過程のなかで神殿中心部（基壇）に埋葬されている。インガタンボの事例は、形成期後期の最初期（インガタンボ I 期）ではなく、インガタンボ II 期の神殿更新に対応している。そして、埋葬は神殿中心部ではなく、基壇上の部屋状構造物から出土する。

さらに、クントゥル・ワシとパコパンパ複合の事例では、副葬された土器や人骨の分析から北部海岸との関係が示唆されている。同様の傾向はインガタンボでもみられ、副葬されていたといわれる還元焼成の鐙形ボトルに加えて、北部海岸や北部山地からの搬入品と考えられる精製土器が増加する。なお、インガタンボ II 期には、インガタンボ I 期と比して、北部海岸や北部山地との関連を示す土器がさらに増す。たとえば、搬入品と考えられる灰色磨研土器は、形成期中期（ポマワカ期）までの北部海岸に特徴的な土器で、形成期後期からは北部山地でも確認されるようになるものである。また、北部山地に特徴的な黒鉛が塗布された土器やオレンジ地赤彩土器も、この時期からみられるようになる。

ただし、インガタンボにおいては、この時期の北部山地では喪失、あるいは減少傾向がみられるプレコクションの多彩色やポストコクション塗彩を有する土器が引き続き確認される。これらの土器は、形成期後期には北部熱帯低地や極北部海岸を中心にみられる土器であるため、インガタンボでは、上記の 2 地域との関係もまた、重要視されていたと考えられる。これを裏づけるように、日用土器とされる壺形土器の器種構成は、形成期中期と同様に有頚壺が主となっている。

これらのことは、形成期後期のインガタンボ社会において、それまでみられたような北部熱帯低地や極北部海岸との地域間交流は存続する一方で、それらの地域にも増して、北部山地や北部海岸との関係が重視されたことを示している。つまり、こうした地域間交流の変化とは、インガタンボにおける諸活動を支える人々の戦略の結果であると考えられるのである。これは、神殿の形態からも示唆され、インガタンボの中心に位置する A 基壇では、この時期から北部地域の神殿との類似性がみられるようになる。なお、同時期のエクアドルでも、南部山地のプトゥシオで金製品の加工の痕跡がみつかるなど、ペルーと同様の動きが一部で認められる[Temme 2002]。しかし、エクアドル南部山地では神殿が存在せず、土器特徴においても、ペルー北部との明確な差を保持している。したがって、バーガーが指摘するように、ペルーとエクアドルでは、経済的構造、社会政治的構造、あるいはイデオロギー構造に差異が存在したと考えられる[Burger 2003: 481]。

以上のことをふまえて、考古遺物からみられる地域間交流の度合いと有無を地域間ルートに反映させ、当該時期の主要ルートを同定した（図 10-15）。先述したように、ポマワカ期のルート（図 10-14）との間には、ルートの全体的傾向に特別な変化はない。しかしながら、ルートを同定するための比較材料とした考古遺物の出土状況には、顕著な差異が存在していることから、地域間交流の特性に変化があったことが示唆される。

これまでみてきたように、本章では、地域間ルートと地域間交流の通時的変化を、GIS によるルート分析と考古資料の比較分析を通じて論じた。この一連の作業によって、生態環境から解析されたルートに、当該時期の社会状況の一端を加味することができたと考える。つまり、単に神殿間の結びつきをルートとして図示しただけでなく、各神殿の結びつき方の差異にアプローチしたのである。また、こうしたルート研究は、ワンカバンバ川流域と周辺地域の社会動態とを連動した動きとして捉えるための基礎ともなる。そこで、次章では、本章でルート研究、あるいは交流に関する議論の問題点としてあげられた地域間交流の様態などについて検討する。そして、ワンカバンバ川流域を中心とした形成期の地域間交流の社会動態と、その背景に存在する実際に交流を行った人々の行為や戦略を包括的に論じていく。

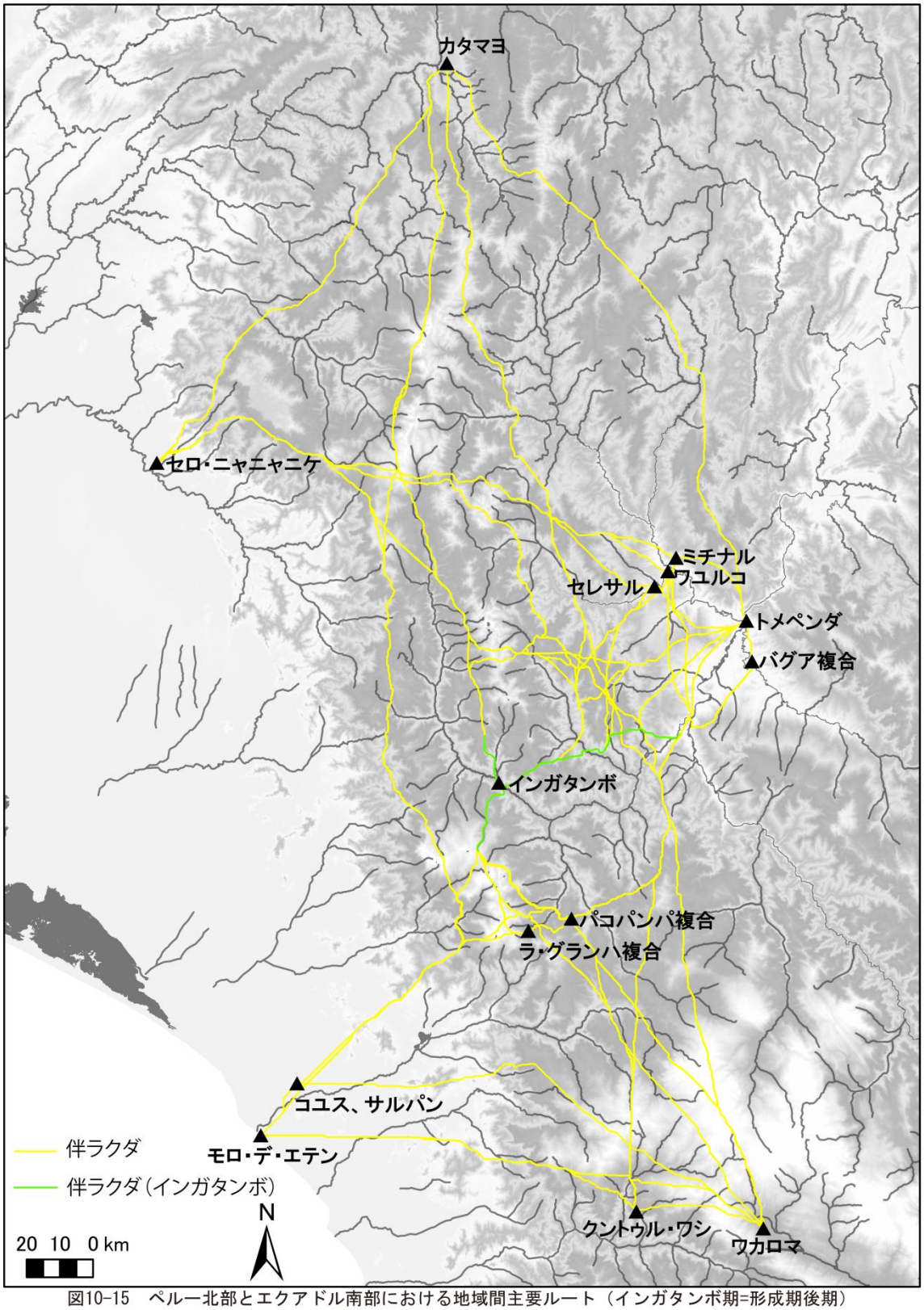


図10-15　ペルー北部とエクアドル南部における地域間主要ルート（インガタンボ期=形成期後期）

第 11 章：ワンカバンバ川流域における社会動態と社会成員の活動、および戦略

本章では、第 1 章で提示した目的に即し、前章までに提示した一次データとその分析結果である二次データを総合する。そして、ワンカバンバ川流域社会の動態を明らかにして、その背後に存在する社会成員の活動と戦略を空間的に三つのレベルから考察する。そのなかでも、社会成員、とくにリーダーの活動と戦略については、神殿をめぐる諸活動を介して詳細に論じていく。この際に鍵となるのが、ワンカバンバ川流域社会におけるリーダーの特質や社会的差異、そしてそれらを成立させるためのリーダーによるイデオロギー操作の問題である。また、社会成員の活動や戦略と密接に関わる外部社会との地域間交流についても、上記の鍵となる諸事項との関連から論じる。

まず、①インガタンボ神殿を対象として、発掘調査を通じてえられた建築（第 4 章)、および遺物データを用い（第 5-8 章)、神殿をめぐる社会成員の活動と戦略の通時的変化を捉える。ここではとくに、神殿建設や神殿における諸活動において、リーダーによって実施された他の社会成員との社会的差異化を図るための戦略について検討していく。

次に、②ワンカバンバ川流域を対象として、発掘データ（第 4-8 章）と遺跡踏査データにもとづいたセトルメント・パターンを同時に考察することで（第 9 章)、流域内のセトルメント成立の背景、ならびに神殿間の関係とそれらの通時的変化を論じる。そして、流域社会の空間利用のあり方から、リーダーを中心とした集団内の社会的差異を顕在化していく戦略や、生業と関わる経済的戦略、あるいは流域内の神殿間の関係をめぐる戦略について述べていく。

さらに、③対象をより広げて、考古遺物の比較（第 4-8 章）と GIS を軸とした地域間ルートの分析（第 10 章）から、ワンカバンバ川流域社会と外部社会との地域間関係の動態、および実際に交流を行った人々の活動や戦略を明らかにし、地域間交流の様態について検討する。なかでもとくに、インガタンボ、もしくはワンカバンバ川流域社会と周辺地域社会との地域間関係をめぐる流域社会の人々、とくにリーダーの戦略について論じていく。

そして、最後に上記の考察、論考を総括し、ワンカバンバ川流域における社会動態と社会成員の活動、ならびに戦略について包括的に述べる。

11-1．インガタンボ神殿における社会動態

先行研究によると、形成期は神殿を中心に社会が展開した時期である。前章までに指摘してきたように、ワンカバンバ川流域においても、当該社会における神殿の重要性は極めて高い。したがって、ワンカバンバ川流域の社会動態を把握するためには、神殿が建設された背景を明らかにすることが必要である。そのため、本節では、まず、神殿更新の通時的な特徴とその社会的背景を明らかにしていく。そして同時に、神殿で執り行われた諸活動の分析を通じて示された建設活動や儀礼、あるいは製作と生産、地域間交流を通じた物資の獲得や流通に関わる人々（とくにリーダー）の活動と戦略について検討する。そして、

これらのことをふまえて、神殿をめぐる活動にみられたリーダーの特質や彼らによるイデオロギー操作と、神殿活動にたずさわる集団内部の社会的差異について考察する。また、神殿の社会的位置づけを明らかにするとともに、神殿をめぐる諸活動の背景について検討していくことで、インガタンボの社会動態について論じる。

第 1 章で述べたとおり、これまで各地の形成期神殿では、反復的な建設活動である神殿更新が確認されてきた。そして第 2 章でもふれたように、神殿更新の性質や社会的位置づけは多様である。したがって、神殿更新を論じるためには、神殿の体積の増加から労働力の増大を推定するだけではなく、更新の契機や背景についても考察しなければならない。なぜなら、更新には、建設活動を実施する集団、もしくはそれを統御する人々の戦略が介在していると考えられるためである。

建造物をメディアとして捉える、あるいは景観の一部として捉えるアプローチでは、神殿の建設には、イデオロギーを体現するための建築プランや多量の資材や建設にたずさわる労働力といった経済的要素が必要とされる。そして、そこには、神殿建設を指揮するリーダーの社会的動機や、建設指導者と労働者間の社会関係が反映される。その一方で、建設活動や神殿で行われた儀礼には、政治的、宗教的イデオロギーだけでなく、神殿やそれを取り巻く空間に対する認識が概念化されていると考えられる。このため、神殿という空間において、建設活動や儀礼が繰り返し行われることで、当該社会の文化的記憶や宗教的知識が再認識、もしくは再解釈される[Staller 2008]。つまり、こうした視点に立てば、神殿は情報の管理と維持、蓄積のメディアであり、イデオロギーの普及装置として捉えることも可能となる。

以上のように、神殿更新の実態を掴むためには単に建設活動だけでなく、神殿の構造などからもその社会政治的側面を検討し、同時期に併存した流域内の神殿間の関係を考察して、神殿建設の背景を明らかにする必要がある。しかし、ワンカバンバ川流域において、建設活動の時期的変遷が明らかになっているのは、インガタンボ遺跡のみである。そのため、以下では第 4 章から第 8 章にわたって詳述したインガタンボの事例をもとに論を展開する。

11-1-1. ワンカバンバ期

インガタンボ遺跡における神殿の建設活動は、ワンカバンバ期にはじまる。ただし、神殿やその更新の規模は、続くポマワカ期とは比較にならないほど小さい。その一方で、基壇の高さは、ワンカバンバ I 期（約 1.5m）からワンカバンバ IV 期（約 2.6m）にかけて増加する。したがって、繰り返される更新活動によって次第に規模を増していったことは確認されるものの、一度に大規模な建設活動が行われた痕跡は認められない。そのうえ、この時期の更新では、古い時期の建造物を埋めて、その上に以前と同じような建造物が新たに築かれる。このため、更新の結果、高さが増して神殿の体積は増加していくが、神殿の基本構造そのものには大きな変化はみられない。

そのなかで注目すべきは、神殿を建設するという行為自体が、インガタンボの空間構造に大きな変化をもたらしたことである。たとえば、地表面に基壇が建てられることで、神殿という空間において、基壇上部と基壇下部というレベル差が表出して、離れた地点からでも視覚的に認識できるようになる。また、基壇の高さを考慮すると、遅くともワンカバンバ期の最終フェイズ（IV 期）には、基壇上部で行われる活動の詳細が、基壇下部からでは視認できない状況がつくりあげられていた。ただし、神殿の規模が小規模であり、建設に際して多くの労働力を必要としない点や、神殿内に一度に大人数を収容できないことなどから、この時期の神殿は小集団の人々によって支えられていたと考えられる。こうした神殿のあり方は、ペルー北部山地のワカロマ[関・坂井 1998; 関 2010]やペルー中央海岸におけるカルダルの事例 [Burger and Salazar 1991]でも指摘される。そこでは、神殿の建設活動は、強力な政治的リーダーが不在であったとしても、共同体の共同労働として実施されたと推測されている。

その一方、ワンカバンバ III 期には、基壇上部に泥漆喰を用いて精巧に仕上げられた建造物が造られる。しかし、それ以外の時期の建築については不明な点が多く、その機能も明らかではない。そのうえ、神殿の空間構造は明確に区分しておらず、神殿で儀礼が執り行われたような痕跡は少ない。しかし、儀礼については、神殿の基壇上に複数の小規模な構造物が認められることから、ペルー北部山地のワカロマ[Terada and Onuki 1982, 1988; 関 2006; 関・坂井 1998: 109-111]やラ・ガルガーダ[Grieder (et. al) 1988]で報告されたように、部屋状構造物内で火を用いた儀礼が行われていたとも考えられる。ただし、儀礼を統御、あるいは管理するような特定の人々の存在は、神殿の出土遺物からは認められない。このため、続くポマワカ期やインガタンボ期と比べると、神殿においてリーダーの存在や集団内部の社会的差異を明確に認識することは困難である。そして、これらのことからも、この時期の神殿をめぐる活動は協同性にもとづくものであったと考えられる。しかしながら、現在の理論的動向によれば、社会とは均一的なものではなく、どのような社会にも性差や年齢差などの社会的差異があり、他人より常に上を狙う個人や集団が存在している[Brumfiel and Fox 1994; Earle 1997; Price and Feinman 1995]。つまり、小規模ではあっても、神殿の建設活動や更新活動には共同作業を統率するリーダーが、主要基壇上で執り行われた儀礼にはそれを取り仕切る宗教的リーダーが存在した可能性が示唆されるのである。また、社会内の明確な社会的差異や階層分化が物質文化面において認められないことからも、この時期のリーダーが他の成員へおよぼす権力性は極めて脆弱であったと考えられる。したがって、神殿における活動は、小集団による共同作業のようなものであり、建設活動や神殿で執り行われる儀礼は、それを通じて物資や情報の交換が行われることで、集団の社会的紐帯を強固にしたことが推測される。

これらのことから、この時期のインガタンボにおける神殿建設、もしくは神殿をめぐる諸活動は、社会成員間の繋がりを密にし、社会を維持していくための一つの契機であったと考えられる。そして、神殿は人々が集うことで物資や情報の集積、あるいは交換の場と

なり、社会統合の中心となった。また同時に、神殿はこうした諸状況を支えるイデオロギーを表す存在ともなったため、神殿では様々な活動が継続的に執り行われることになったのである。

11-1-2. ポマワカ期

ポマワカ期になると、主要基壇では大規模な更新が行われ、基壇の体積は大幅に増大する。この時期の更新は、ワンカバンバ期とは質的に異なり、以前と同様の建造物を積み重ねるだけではなく、新たに異なる建築要素が加えられるものである。とくにポマワカ期初頭（I 期）の更新では、主要基壇上部南側に低層基壇が載り、その低層基壇から北側に設けられた主要階段までのスペースには広場状開放空間が造られるなど、これ以降も続く主要基壇の基本構造が築かれる。そして、空間構造において、基壇上部に低層基壇と開放空間の区分が生じることから、基壇下部を含めると神殿内に三つの空間レベルが表出するようになる。ポマワカ期には四つのサブ･フェイズが存在するが、基壇はその都度、高さを増したため、基壇下部とのレベル差は次第に明確化していったのである。

その一方、更新時の人身供犠と考えられる埋葬を伴って、B 基壇の建設もはじまる。主要基壇と比べて小規模ではあるものの、C 基壇と D 基壇も隣接して建設されたため、B 基壇を中心に基壇複合が形成されるようになる。ただし、主要基壇と B 基壇、もしくは基壇複合を貫くような明確な建築プランは存在せず、インガタンボでは、二つの独立した基壇が併存していた。なお、地形と基壇の高低差によって、主要基壇上部からは B 基壇上部が視認できるが、その逆は不可能である。

さらにポマワカ期の後半（III 期）に入ると、主要基壇上部の低層基壇上に、泥漆喰で精巧に仕上げられた部屋状構造物が築かれる。この構造物内で行われた活動は、外から全く認識できないため、主要基壇における空間構造のレベル差はより顕在化する。この場所では、更新時の床面の張りかえに際して、火を用いた儀礼が行われており、海水生種の貝を含む焼土層や灰層が検出された。これは、神殿更新自体が儀礼的行為であったことを如実に示している。

続くポマワカ IV 期には、III 期の低層基壇上の部屋状構造物が破壊され、その上に新たに円形構造物が築かれた。また、床面の張りかえの際に、動物が表象された石鉢が埋納されるなど、ポマワカ III 期にみられた更新時の儀礼が引き続きみうけられる。

このようにして、ポマワカ期の建設状況や空間構造を鑑みると、神殿には明確な設計方針があり、神殿の建設に際して、設計や労働の指揮など建設活動を主導するリーダーの存在が示唆される。しかし、埋葬には副葬品などの個体差はみられず、階層化を示す具体的証拠はない。したがって、建設活動を主導したリーダーとは、階層性に直接結びつくものではなく、単に建設活動における指導者であったと考えられる。

ただし、神殿では徐々に、空間構造のレベル差が顕在化するようになるため、執り行われる儀礼において参加者の限定といった、社会的差異が表出しはじめた。とくにポマワカ

期後半（ポマワカ III 期と IV 期）からは、主要基壇上に部屋状構造物が築かれ、主要基壇上部と下部の一部には開放空間がつくられるなど、空間構造の差異がより明確化された。ここからは、神殿内の空間が分化した可能性がみてとれる。このような神殿の中核部分に位置するアクセスの制限された部屋状構造物は、その立地と規模から、神殿を支える社会の成員全てが利用できたとは考えにくい。それに加えて、部屋のなかからはトウモロコシが検出されており、部屋では限られた参加者によるチチャ飲酒を伴う儀礼が執り行われたことが推測される。これとは逆に、広場状開放空間は、その立地とスペースから、より大人数が利用可能な空間であったと考えられる。これらのことは、神殿内で執り行われた儀礼が多様化したことを示唆する。つまり、部屋状構造物という閉鎖的空間で執り行われ、宗教的リーダーを中心に一部の人々のみが参加する秘儀的な儀礼と、基壇上部や基壇下部の開放空間で行われた他の社会成員参加型の儀礼との差異が生まれたのである。こうした空間構造の差異は、リーダーによる労働力や資源、あるいは儀礼の管理と関連する。そのため、これは、リーダーが儀礼を司ることで集団内の差異化を図り、その権威の正統性を他の社会成員に理解させる活動や戦略の萌芽として捉えることが可能である。この意味において、神殿更新とは、神殿活動に関わる集団の社会的紐帯を強める宗教的、儀礼的活動であるだけでなく、リーダーの戦略を社会の他の成員に知らしめる契機となる。つまり、更新は、集団内の関係性を再認識、もしくは再解釈し、建設活動や儀礼に関わる物資や情報を管理、維持、蓄積するための機会であり、手段となったのである。そして、その際に神殿は、ワンカバンバ期に有していた意味や役割を徐々に変化させ、イデオロギーの普及装置となっていったと考えられる。

このような神殿における空間分化は、形成期中期（ポマワカ期）の様々な地域で報告されている。たとえば、北部海岸のワカ・デ・ロス・レイエスやワカ・ルシーアでは、神殿の空間構造から、三つの階層とリーダーの存在が推測されている Pozorski Thomas 1980: 109; Shimada (et.al) 1982: 139]。また、関と坂井は、この時期の神殿の特徴として、儀礼空間の拡大がみられ、広場の敷設を伴って儀礼空間が外に向かって解放されるようになることについて言及した。そして、それと同時に、アクセスの制限された神殿の中核部に、部屋状構造物が設けられることから、神殿の空間構造において、閉鎖的儀礼空間と公共的（開放的）儀礼空間が、同時並行的に発達したことを指摘した [関・坂井 1998: 157-158]。つまり、神殿において建設活動や儀礼が行われ、更新に応じて神殿の形態や配置が繰り返し改変されることで、集団内の差異が次第に明確化されていくという図式がみられるのである。そしてこの際、建設活動や儀礼は、それ以前とは異なる状況を生み出していくための機会として、リーダーの手によって積極的、かつ継続的に実施されたと考えられる。また同時に、神殿はこうした諸状況を支えるイデオロギーを表す存在ともなっていたため、神殿をめぐる諸活動を通じて、神殿は最大限に活用されたのである。

このとき、地域間交流の活性化によって導入された技術や情報、土器や貝製品などの奢侈品は、その可塑性や可変性などを利用して象徴性を付与され、イデオロギーの表出、再

生、強化の場である儀礼に際して使用された。つまり、精製土器や奢侈品は、儀礼を通じて、宗教的リーダーの社会的地位を確かなものとし、他の社会成員との差異を明確化するために重要な役割を果たしたと考えられる。しかしながら、インガタンボでは、精製土器や奢侈品に神殿内の出土コンテクストによる偏在性は認められず、埋葬に関しても副葬品などの面において差異は認められない。そのため、建設活動や空間分化に伴う儀礼へのアクセスなどにおいて、集団内に差異が表出しはじめる一方で、物質文化面に階層性はいまだ顕在化していなかったといえる。こうした埋葬の副葬品における個人差が無いことや、続くインガタンボ期と比して他地域からの搬入品が少ないことは、リーダーは存在するものの、ポマワカ期におけるリーダーの権力の脆弱性、あるいは社会規模の小ささを反映するものである。これらのことから、この時期においても、神殿の建設や神殿における諸活動は、基本的に社会成員の協同性を基礎として行われたと考えられる。

11-1-3. インガタンボ期

インガタンボ期になると、ポマワカ期にみられた状況に大きな変化が生じた。インガタンボでは、床を張り直す際に火を用いた儀礼が伴われながら、最大規模の神殿更新が行われた。そして、神殿が極度に大規模化するとともに、それ以前の建築に新たな建築要素が加えられることで、空間構造が複雑化して空間分化がさらに進行した。

まず、インガタンボ期の初頭には（I 期）、ポマワカ期の神殿の上にさらに大規模な主要基壇がつくられ、基壇上部の低層基壇上には泥漆喰で精巧に仕上げられた儀礼的空間である六つの部屋状構造物が築かれた。これらの部屋状構造物は多彩色の壁画で彩られたが、規模も小さく、極めて限定的なスペースといえる。また、この部屋状構造物から採取された壺形土器片には、発酵の痕跡がみられるトウモロコシの澱粉が付着していたことなどから、部屋状構造物内でチチャを用いた少人数による儀礼が行われたと考えられる。つまり、低層基壇の高さが増し、その上に儀礼の痕跡を有する部屋状構造物が築かれることで、部屋状構造物やそのなかで執り行われる儀礼へのアクセスが極度に制限されたのである。さらに、主要基壇上部には開放空間も広がることから、主要基壇におけるレベル差はポマワカ期よりも顕在化した。とりわけ、主要基壇を中心として A 基壇が建設されると、その上部西側には西基壇が、東側には部屋状構造物が新たに築かれ、それらの間のスペースは開放空間となることで、空間構造はより複雑化した。このため、A 基壇には南北方向だけでも、①主要基壇上部の部屋状構造物、②主要基壇上部の開放空間、③A 基壇上部の開放空間（主要基壇下）、④A 基壇下といったレベル差が生じた。さらに、A 基壇上には西基壇と部屋状構造物が加わることから、東西方向にも付随的に空間的差異が生じることとなった。なお、A 基壇上部東側の部屋状構造物の建設に際しては、地域間交流を通じてもたらされた大量の海水生種の貝製品が基壇埋土に奉納されるなど、更新時の儀礼の痕跡が認められる。

その一方、B 基壇では、新たに部屋状構造物が築かれると同時に、基壇西面に A 基壇との間にある大規模な広場状開放空間へのアプローチとなる回廊が築かれるなど、A 基壇との

関連が重視されるようになる。つまり、インガタンボでは、それまで独立していた A 基壇と B 基壇が広場を挟んで繋がり、基壇と広場、テラスの複合配置が形成されたのである。

この複合配置では、本来的な地形の高低差に加えて、A 基壇の方が B 基壇よりも高いため、A 基壇主要基壇頂上部における活動は B 基壇から視認できない。しかし、A 基壇上部東側の部屋状構造物と B 基壇頂上部は、お互いに視認できる関係にある。また、A 基壇と B 基壇の間に広がる広場状開放空間は、インガタンボにおいて最も低い場所にあるため、どの基壇からも認識され、かつ最も収容能力の高い空間でもある。いずれにせよ、この時期の空間構造は、先述した A 基壇だけでなく、B 基壇や広場を含む複合配置として、より複雑なものへと変化している。つまり、神殿全体の配置に目を向けると、アクセスの制限された小人数用スペースから、開かれた大人数用スペースまでが同時に設けられる点に、集団内の社会的差異を明確化しようとするリーダーの動きが読み取れるのである。そして、このように分化された空間での秘儀的な儀礼を司ることで、リーダーは自らの正統性を社会の成員に理解させ、リーダーと一般成員という差異を顕在化していった。そしてその際に、遠隔地からもたらされた奢侈品の獲得と管理は、リーダーの権威を示す源、または、その権威を象徴するものとなっていたと考えられる。

続くインガタンボ II 期には、基壇自体に大規模な更新はみられないが、主要基壇上部の低層基壇上にある部屋状構造物は拡張された。また、主要基壇北東角にも新たに部屋状構造物が築かれた。そこからは、搬入品と考えられる精製土器が集中的に出土しており、奢侈品は、更新時に特定のコンテクストへ奉納されたことが示される。さらに、A 基壇上部東側では、インガタンボ I 期の部屋状構造物を埋めて、新たに小規模な部屋状構造物群が築かれた。そして、この部屋の更新時には、金製品やウミギクガイ、方ソーダ石、もしくは珪孔雀石製品などといった多量の副葬品を伴う埋葬が確認された。この埋葬の副葬品の質や量、あるいは埋葬されたコンテクストは、インガタンボでみられた他の埋葬（副葬品がなく、更新時の埋土より検出）とは明確に異なる。このことから、この特殊な埋葬は、更新に伴う単なる人身供犠ではなく、神殿の建設活動や儀礼に関わる重要な人物の埋葬であると考えられる。このような金製品を伴う特殊な埋葬の出現は、この時期のインガタンボにおいて、ポマワカ期に萌芽がみられた集団内部の社会的差異が拡大して、リーダーの権力性が強まったこと、もしくは社会規模が大きくなるなかで、集団内の差異化を図り、権威の正統性を社会の他の成員に理解させようとする個人的要素の強いエリートが形成されつつあったことを示唆する。このような状況は、インガタンボだけではなく、北部山地のパコパンパ複合やクントゥル・ワシでも報告される[加藤・関（編）1998; 大貫・加藤・関編 2010]。

これらのことを考慮すると、インガタンボ期の神殿更新は、単に集団の社会的紐帯を強める役割を果たす以上に、リーダーによってつくられた社会的秩序や社会的差異を集団の成員に認識させ、不平等を覆い隠すとともに、その権威を正統化する契機や手段となったと考えられる。つまり、ワンカバンバ期から存在する更新の内実に大きな変化が生じて、

神殿の建設活動は協同性を下地としながらも、リーダーの権力性にもとづいて集団の労働力が行使されるものへと変貌を遂げたことが伺えるのである。つまり、繰り返される神殿更新や神殿における儀礼によって、建設活動指導者と労働者、あるいは儀礼執行者と参加者といった社会的差異がより顕在化していき、物質文化面にも明確に表れるようになったと考えられる。そして、物質文化に表出されたイデオロギーは、更新や儀礼が繰り返されることで、次第に固定化されていくことになった。

また、この時期、インガタンボで神殿規模が極大化する一方で、ワンカバンバ川流域では神殿数が減少し、インガタンボとカニャリアッコ 3 だけに活動が認められる。ただし、後者は前者と比べて著しく小規模であることから、インガタンボへ流域全体の労働力が集中したことが示唆される。そのため、インガタンボの建設活動を主導したリーダーは、ポマワカ期までとは異なり、流域内の複数集団、すなわち流域社会全体の労働力を統括したと考えられる。つまり、神殿における諸活動が、流域社会においてインガタンボを中心とした社会関係を構築する機会ともなったということである。こうして、神殿は、集団内の他の社会成員、もしくは流域内の他の神殿社会との差異化を図ろうとするリーダーの戦略やそれを支えるイデオロギーを反映するようになっていったのである。

これまでにみてきたように、神殿の建設活動の規模や空間構造の差異化は、とくにインガタンボ期において、建設活動や儀礼を司るリーダーの地位をより確立していった。また、貝製品などの奢侈品の入手と管理も同様の役割を果たした。そのため、前章で述べたように神殿の建設に際して、地域間ルートの存在が常に意識されたのである。そして、インガタンボに代表される労働投下量の多い神殿では、ルートの重要性が増す時期、すなわち地域間交流の活発化する時期と、神殿が巨大化、複雑化する時期が一致するのである。

このようにして、インガタンボ期の神殿は、イデオロギーの普及装置としての性格を強く帯びるようになる。この場合、神殿の建設活動や儀礼、あるいは地域間交流は、それらの活動において、中心的役割を果たしたリーダーの戦略やイデオロギーを、広く社会に浸透させる場や機会となる。したがって、それらの活動を繰り返し行うことで、ワンカバンバ川流域社会の社会的差異が明確化され、当該社会の社会的枠組みが構築されることになったと考えられる。その結果、建設活動や儀礼、地域間交流が、リーダーによって、より積極的に実施されるようになるのである。

ここまで、神殿の建設活動、および空間構造の複雑化や神殿内のアクセスの制限といった問題を通じて、神殿更新とその社会的背景について述べ、更新を統御するリーダーの特質、ならびに他の成員との差異化を図るリーダーの戦略の通時的変化を論じてきた。このように、神殿更新を通時的にみたときに浮かび上がってくるインガタンボの最大の特徴は、紀元前 2500－550 年頃（形成期早期から形成期後期）という長期間にわたって、同じ場所で継続的に神殿更新が行われ続けたことである。これは、ペルー北部地域の他の遺跡では類をみない、インガタンボ独自の現象である。つまり、インガタンボを支える人々、とくに彼らを指揮したリーダーの戦略において、神殿更新は社会変化をもたらす非常に有益な

手段であり、社会成員との間に不均衡な社会関係を構築する契機となることで、重要な役割を果たし続けた。そのため、インガタンボでは、時期ごとにその背景を変化させながらも、継続的に神殿更新という活動が選択されてきたのである。

11-1-4. インガタンボにおける社会的差異と社会組織

前項までに述べてきたように、神殿の建設活動、および神殿の構造や遺物の出土コンテクストや出土状況から、インガタンボでは、ポマワカ期以降に集団内部の社会的差異が顕著に認められるようになる。しかし、神殿更新は単なる儀礼的な建設活動ではなく、その活動に際して様々な物資や情報が必要である。そのため、物資や情報の獲得、もしくは工芸品の製作は、神殿をめぐる活動において重要な活動の一部となる。つまり、神殿で確認される土器の製作（第 8 章）やその他の加工製品、とくに奢侈品の製作（第 7 章）といった経済的活動と神殿更新に関わる諸活動とは深く結びついており、そうした活動においても既述の社会的差異が介在しているのである。

たとえば、ポマワカ期には、つくりの粗い日用的用途とされる土器から、象徴性が付与されたような装飾を備え、出土コンテクストなどから儀礼用品、あるいは奢侈品とされる精製土器までが同時に現れる。神殿における儀礼と関連する精巧なボトルや鉢の製作に関しては、日用土器との製作過程の違いから、専業的製作者集団が存在した可能性が指摘される[鶴見 2000]。また、現時点ではデータが乏しく、詳細は不明であるが、加工途中の未製品や原材料（貝殻）なども出土しており、その出土コンテクストが限定的であることから、貝製品に関しても製作に関する専門的知識や技術を有した人々がインガタンボに存在していた可能性がある[1]。これらの製作活動は、製作に関わる技術や情報、イデオロギー、もしくは原材料などを他地域との交流を通して獲得したのちに、流域社会で実施されたと考えられる。そして製品は、神殿で執り行われる儀礼において利用された。したがって、一連の製作活動とは、ワンカバンバ川流域社会の人々、とくに神殿の建設活動や儀礼にみられたリーダーの意図や戦略を反映した結果であると考えられる。

さらに、インガタンボ期には、土器や黒曜石といった他地域からの搬入品が増加する。インガタンボ、あるいはワンカバンバ川流域では、第 7 章で指摘したように、周辺地域との交流において食糧資源をめぐる相互補完的関係は認められない。したがって、ワンカバンバ川流域で製作された土器や石器、貝製品などの奢侈品、または、その原材料が他地域との交換資源となっていたと考えられる。

しかし、他地域からもたらされた物資が、インガタンボ神殿への奉納品であった場合、周辺地域の諸社会との間に不均衡な交換関係が成立していた可能性もある。つまり、インガタンボ神殿で執り行われる儀礼や建設活動などに際して使用されることを目的として、他地域の人々が積極的に奉納を行った場合、物資による等価的な見返りがない場合も存在

[1]現状では、このような人々が製作だけを担う専門集団なのか、それとも多様な活動を担う中で製作も行っていた人々なのかは不明瞭である。

するのである。この仮説は、インガタンボでとくに貝の出土が多いことからも支持される。バーガーが指摘したように、輸送コストの高い貝を東斜面まで運ぶには、生存のための食料としての重要性以上に、儀礼的な価値があったことが想定されるためである［Burger 1998:239-242］。このようにして、インガタンボにおけるリーダーの戦略は、建設活動や儀礼、製作活動に加えて、後述する交流を通じた物資の獲得やその利用にも向けられるようになっていく。

なお、ラクダ科動物を利用した物資の運搬に関しても、専業的職能者集団の存在が推測される。なぜならば、ワンカバンバ川流域はラクダ科動物の成育には適しておらず、インガタンボで利用されたラクダ科動物はより飼育に適した他の地域よりもたらされたと考えられるためである。当然、ラクダ科動物の統御に必要な専門的知識も同時にもたらされたものであり、在来知ではなかったであろう。

このように、ワンカバンバ川流域社会では、とくにポマワカ期以降で、社会組織に大きな変化がみられた。建設活動や儀礼、もしくは地域間交流におけるリーダーと製作や輸送に関わる専業的職能者集団との関係は、非常に密接であり、彼らの存在はリーダーの戦略にとって極めて重要であったと考えられる。なぜならば、奢侈品となる土器や貝製品の製作、あるいは遠隔地から奢侈品をもたらす地域間交流は、建設活動や儀礼においてリーダーの地位を高め、正統性を確かなものとするために大きな役割を果たすからである。つまり、地域間交流の独占と成否は、神殿をめぐる宗教的、経済的、政治的活動を、リーダーが操作、もしくは支配するための重要な選択肢の一つとなったのである。

以上のようにみると、ワンカバンバ川流域における階層化の萌芽とは、特定の人々がその利益を追求する際に、神殿における諸活動を支える集団全体と関わる社会的問題の解決を図った結果として捉えることができる。つまり、ワンカバンバ川流域社会に生じた変化とは、当該社会の改変を目指す、特定の人々の行為の所産であり、それらの人々と他の成員との関係性の変化であると考えられる。なお、現在のデータからは、リーダーと一般成員という区分に加えて、土器や貝製品、石製品の製作やラクダ科動物を利用した資源運搬のための専業的職能者集団が存在した可能性が指摘されるだけである。しかし、実際には、性差や年齢差などを含めた、より複雑な社会的差異がワンカバンバ川流域社会に存在していたと考えられ、専業的職能者集団としてあげた人々も多様な活動を担うなかで、その一端として製作や運搬に従事していたことも想定される。

11-2. ワンカバンバ川流域における社会動態

前節では、神殿更新とそれに関わる諸活動を中心に、インガタンボという特定神殿における社会動態について論じた。ただし、議論のなかでは常に、インガタンボ遺跡とワンカバンバ川流域内の他の遺跡、あるいはそれら以外の遺跡との相互関係が、背後に暗示されていた。なぜならば、ワンカバンバ川流域では、インガタンボ遺跡が唯一の遺跡ではなく、それ以外にも多くの形成期に属する遺跡が存在したためである。したがって、ワンカバン

バ川流域内の遺跡間の関係性を考察することを抜きにして、インガタンボ、もしくはワンカバンバ川流域の社会動態を明らかにすることは不可能である。このため、本節では、インガタンボの発掘データに、第 3 章と第 9 章で論じた遺跡踏査データを加えることで、流域内のセトルメント・パターンとその成立の背景、ならびに神殿間の関係性を捉え、ワンカバンバ川流域内の社会動態を明らかにしていく。

11-2-1. ワンカバンバ川流域における空間分化

ワンカバンバ川流域における神殿の立地とその背景に関しては、第 9 章で述べたとおりである。神殿建設に先立って入念に場所の選定が行われ、水に関するリスクが考慮されていただけでなく、ルートとの関係が重要な要素となっていた。しかし、実際に形成期の人々、とくに社会の一般成員が住んでいた神殿以外の居住施設に関しては、先行研究においても、具体的な発掘を通じて明確に把握されているわけではない。

第 9 章でみてきたように、居住遺跡は、遺跡分布調査時の地表面観察による遺跡の規模や形態的特徴を通じて推定された。また、発掘調査を実施したインガタンボでも、全面的に発掘を行ったわけではなく、ヘケテペケ川中流域アマカス複合のモンテグランデやラス・ワカス、あるいはカハマルカ盆地のワカロマでみられたような、神殿に近接する居住区の様相は明らかではない。なお、現状の形成期研究では、上記の遺跡において、神殿と居住区とされる部屋状構造物が併存するということ以外に、両者の関係性などについては解明されていない。

このような状況に加えて、ワンカバンバ川流域内でワンカバンバ期の活動が認められるのは、インガタンボだけである。そのため、ワンカバンバ期の居住施設に関する詳細は不明である。

これに対して、ポマワカ期に入ると状況に変化が表れ、流域内に築かれた複数の神殿の周囲に居住施設がみられるようになる。つまり、神殿と居住域という空間分化が認められるようになるのである。また、遺跡分布データをみると、居住施設は神殿の周囲だけにとどまらず、耕作に適した谷の底部や河川の両側にそびえる山々の斜面に分布している。そして、居住施設が位置する場所では、高度や利用できる水量に応じた作物の栽培が可能である。このため、流域の各神殿を支えた社会成員は、神殿の周囲で谷の底部や両側にそびえる山々の斜面に居を構えながら、神殿における諸活動や生業活動に従事していたと考えられる。

それでは、当時の神殿には人が住んでいなかったのであろうか。インガタンボでは、ポマワカ期とインガタンボ期に主要基壇上部に部屋状構造物がみられ、インガタンボ期になると、A 基壇上部東側にも部屋状構造物群が築かれる。しかしながら、それらの部屋状構造物の規模を考慮すると、仮にそれらが居住用に利用されていたとしても、神殿内に居住していたのは極めて限られた小人数の人々のみであったと考えられる。前節で指摘したように、ポマワカ期には、神殿をめぐる活動からリーダーの存在が示唆されるようになる。そ

して、リーダーの権力性は確かに脆弱ではあるものの、この時期から次第に社会的差異が顕在化していくことが明らかとなっている。このことは、神殿内の限られた部屋状構造物に、特定の人々だけが居住した可能性を排除しない。つまり、各神殿の周囲の居住施設には、神殿を支える社会の一般成員の生活空間が展開するかたわら、神殿には社会内の限られた人や集団（リーダー）が次第に居住するようになっていったとも考えられるのである。

その一方で、インガタンボ期のワンカバンバ川流域では、神殿の数が減少し、居住施設が確認されなくなる。ただし、インガタンボで最大規模の更新が行われることを考慮した場合、ワンカバンバ川流域において単純に人口が減少したとは考えられない。また、インガタンボでは、神殿内に複数の部屋状構造物が確認されるようになるが、インガタンボの部屋状構造物だけに流域内の全ての人々が居住することは不可能である。そのため、遺跡分布調査では、この時期の居住施設はほとんど確認されていないが、インガタンボ期においても、ポマワカ期に示唆されたように、神殿にはリーダーが、それ以外の谷の底部や山の斜面には一般成員が居住し、神殿における諸活動や耕作に従事していた可能性はある。

さらに、第 9 章でも述べたように、ワンカバンバ川流域の形成期の集落は、ポマワカ市の周囲に集中しており、ポマワカ市周辺よりも河谷底部の耕作地面積が広大なプカラ市周辺にはほとんどみられず、神殿にいたっては存在しない。しかしながら、この状況は、プカラ市周辺地域が形成期において利用されなかったということにはならない。なぜならば、ポマワカ市とプカラ市は、徒歩で日帰りが十分に可能な距離であることから、プカラ市周辺地域は、形成期において耕作地として利用されていた可能性があるためである。つまり、形成期のワンカバンバ川流域社会では、神殿と居住施設とのセトルメントの分化に加えて、神殿と耕作地との分化も存在したと考えられるのである。

以上のように、ワンカバンバ川流域社会の人々は、在地の様々な生態環境を最大限に利用しようと試みた。そして、その結果として、神殿と居住域、もしくは耕作地といった空間分化が行われた。こうした空間分化は、神殿の建設活動や経済的活動にみられた社会的差異と対応しており、既述の空間構造の成立の背景にもリーダーの戦略が介在していたと考えられる。つまり、神殿とそれ以外の居住域、あるいは耕作地といった空間区分が行われ、人々の利用できる空間に差異が設けられることで、リーダーと他の社会成員間の社会的差異がより顕在化し、助長されることになるのである。

11-2-2. ワンカバンバ川流域における神殿間の関係

前項では、ワンカバンバ川流域における形成期の神殿と居住施設、もしくは耕作地との関係について明らかにした。本項では、その議論の焦点をより絞り、神殿のみを対象として、神殿間の関係について論じ、ワンカバンバ川流域内の社会動態を明らかにする。

ワンカバンバ期における神殿の事例は、インガタンボだけである。第 1 節で述べたように、この時期の神殿は、諸活動に関わる小集団の社会的紐帯の強化に寄与し、流域内の人々の社会的統合の中心として機能していたと考えられる。

これに対し、ポマワカ期に入ると、流域内に複数の神殿がほぼ等間隔の距離をおいて存在するようになる。この状況は、アマカス複合の事例で報告された「移転型神殿更新」[鶴見 2008a]である可能性もあるが、インガタンボ遺跡の堆積状況や遺跡分布調査時の表面採集データを鑑みると、神殿間に時期差は認められない。したがって、神殿が社会的統合の中心であり、共同体の核であれば、全ての神殿が併存した場合、流域内には複数の小集団が共存していたと考えられる。ただし、そのなかでも、とくにインガタンボとイェルマ 6 の神殿の規模が他を抜きんでている。これは、両神殿が当該時期のワンカバンバ川流域における社会的統合に際して、より中心的な役割を果たしていた神殿であり、他の神殿よりも多くの労働力が投下された結果である。その一方で、それら二つ以外の神殿の規模はほぼ同じである。したがって、他の神殿を支える各集団の規模はほぼ一様であり、それぞれの集団が共同体の活動として労働力を投下した結果、同規模の神殿が建設されたと考えられる。つまり、この時期のワンカバンバ川流域では、確かにインガタンボとイェルマ 6 の優位性はみられるものの、流域内を統合するような社会の存在は認められないのである。

続くインガタンボ期になると、流域の遺跡分布状況には大きな変化が生じ、遺跡数が大幅に減少して、神殿もインガタンボとカニャリアッコ 3 の二つのみとなる。しかし、カニャリアッコ 3 とインガタンボでは神殿規模に大きな差がある。ポマワカ期には流域内に、各自の神殿を中心とした複数の小集団が共存した可能性が指摘されたが、インガタンボ期における神殿の減少、およびインガタンボにおける大規模な更新活動をみると、流域内の労働力の大半がインカタンボに集中的に投下されたと考えられる。この場合、インガタンボの建設活動を主導したリーダーは、ポマワカ期までのようなインガタンボを支える小集団の労働力を管理しただけでなく、流域内の複数集団、つまりは流域社会全体の労働力を管理した可能性がある。このことは、ワンカバンバ川流域で、インガタンボを中心として流域内を統合するような社会が出現したことを示唆している。

以上のように、形成期のワンカバンバ川流域では、時間軸に沿って、神殿の建設、神殿の大規模化と神殿数の増加、神殿のさらなる巨大化と神殿数の減少といった現象がみられる。各時期における神殿更新の性格や神殿の空間構造、あるいは流域内の神殿間の関係をみると、これらの現象は漸次的に進行したのではなく、時期ごとに神殿を中心とした社会の特性が変化した結果であると考えられる。そして、そのなかで、ワンカバンバ川流域社会の人々は、神殿における諸活動を通じて、他の人々や集団との差異化を図ったのである。ただし、神殿の立地からも明らかなようにワンカバンバ川流域社会は常に流域外部社会との関係を有しており、外部社会からもたらされた物資や情報は、インガタンボをはじめとした流域社会の展開に大きく作用した。そのため、神殿、とくに大規模神殿は、地域間ルートの近くに建設されたのである。つまり、ワンカバンバ川流域における神殿を中心としたセトルメント成立の背景には、本節で述べたワンカバンバ川流域内部に向けた社会戦略だけではなく、ルートを介した外部社会との関係が重要であったことは明白である。

11-3．ワンカバンバ川流域社会と外部社会との地域間交流の様態

これまでに述べてきたように、ワンカバンバ川流域社会は、常に流域外部社会との関係を有している。そのため、ワンカバンバ川流域の社会動態は、単に内的な展開によるものではなく、周辺地域との地域間関係、すなわち地域間交流という外的な展開にも影響される。したがって、本節では、第 10 章で提示した地域間ルートの分析に、発掘データと遺跡踏査データを加え、輸送システム、ならびに地域間交流の様態と地域間ルートとの関係を捉える。そして、ワンカバンバ川流域社会の動態と地域間交流の関係について論じていく

前章で示したように、ラクダ科動物による輸送システムの確立は、地域間ルートの変化をもたらし、地域間交流を活性化させた。そして、こうした地域間交流における移動手段の変化は、地域間関係をめぐる戦略に影響を与え、結果的に交流の様態に変化をおよぼした。したがって、交流の様態の通時的変遷をみることで、形成期社会において交流にたずさわった人々、とくに建設活動や儀礼などから想定されるリーダーの意図や戦略が考察可能となる。そのため、レンフリューのモデルを援用し、地域間交流の様態についての検討をふまえながら、ワンカバンバ川流域を中心とした地域間交流の動態について論じる。

第 8 章で示したように、形成期のペルー北部地域とエクアドル南部地域では、海岸部から熱帯低地の広範囲にわたって土器の類似性が指摘される。確かにある種の器形や装飾技法には広域的な分布がみられるが、それと同時に、地域ごと、もしくは遺跡ごとに多様性も存在する。このような土器属性の広い分布と多様性は、形成期における地域間交流のあり方を反映するものである。つまり、各神殿は広範な地域に存在する複数の神殿との関係を有しているが、その関係のありかたは一様ではなく、各神殿が独立的かつ選択的に、他地域の神殿との交流を行ったということである。したがって、交流自体はあるものの、交流に消極的な神殿と、その逆に交流を活発に行い、密接な関係を有する特定の神殿が存在していたと考えられる。たとえば、土器の彩色技法の共通性や差異は、技術面におよぶ交流を示す指標となる。また、装飾の多様なバリエーションの共通性や差異からは、土器製作に関わる人々やそれを利用する人々のイデオロギーに関わる交流の存在が示唆される。つまり、複数の土器属性の組み合わせを共有する神殿間には、単に一つの属性のみを共有する神殿間以上の密接な関係が推測されるのである。

また、前章で指摘したように、先行研究では、形成期の地域間交流について、互酬にもとづいた「互酬連鎖交換: Down-the-line」が想定されている[Church 1996; Martin 2001; Tripcevich 2007]。ただし、チャーチは、交換を行う社会の支配下にはない第三者的な仲介者による「フリーランス交易: Middleman」がとられた可能性と、交流が行われた地理的距離や交換される物資に応じて、「互酬(居住地型) : Home-Base Reciprocity」もとられた可能性を指摘する [Church 1996: 597-598]。このチャーチの指摘は、極めて重要である。なぜならば、実際の交流に際しては、交換される物資の特性や交換相手となる社会間の関係、またはその地理的距離に応じて、異なる交流の様態がとられていたことを想定しておく必要があるためである。以下、上記の点を考慮しつつ、ワンカバンバ川流域の事例を検討し

ていく。

ワンカバンバ川流域で、最も古い時期であるワンカバンバ期前半には、他地域との地域間交流の具体的な証拠は認められない。インガタンボで地域間交流の証拠となる海水生種の貝製品がはじめて現れるのは、ワンカバンバ期後半である。しかし、インガタンボではワンカバンバ期後半においても土器が利用されず、海岸部との食糧資源に関する相互補完的関係も認められないため、地域間交流に関する証拠は極めて限られている。これに対して、ワンカバンバ川流域を除いた周辺地域間では、土器の利用とその類似性に指摘されるように、地域間交流の存在がみられる。なお、この時期にはラクダ科動物は確認されないため、地域間交流は徒歩移動によって行われたと考えられる。

これらのことをふまえて、地域間交流の様態を鑑みると、ワンカバンバ期後半のペルー北部、あるいはエクアドル南部では、基本的に「互酬」にもとづいた交流（「互酬(居住地型)：Home-Base Reciprocity」）の様態がとられていた可能性が示唆される。なぜならば、ワンカバンバ川流域の周辺地域間においては、土器の器形、および装飾に関する高い共通性がみられることから、製作技法や土器、もしくはイデオロギーに関わる情報などが直接的にやりとりされていたと考えられるためである。つまり、物資や情報の伝達が頻繁、かつ緊密に行われるためには、土器製作者やその製作を指揮するような人々が、神殿間を直接往来することが必要となるのである。しかし、全ての地域が一様に交流をもっていたわけではない。たとえば、第 8 章で指摘したように、無頸壺とその装飾技法の共通性がみられるペルー北部山地や北部海岸と北部熱帯低地、あるいは壺形土器における短頚壺の優位性がみられるペルー極北部海岸とエクアドル南部山地といったように、地域間交流には地域的偏重が存在する。また、ペルーとエクアドルにおける神殿の有無や、ペルー北部における神殿の形態的特徴の分布にも、土器と同様の地域的特徴が認められるのである。

このようななかで、ワンカバンバ川流域社会は、いかなる状況にあったのであろうか。前章で示した徒歩移動時の周辺遺跡間ルートを省察すると、徒歩移動による地域間交流が行われた場合、周辺地域社会にとって、ワンカバンバ川流域社会と接触を持つ必要性は低い。また、ワンカバンバ川流域には、とくに交換財となるような物資も存在しない。つまり、ワンカバンバ川流域社会とは、海水生種の貝製品から極めて低い程度の交流が伺われるものの、基本的に地域間交流網から外れた地域であったと考えられるのである。そして、この結果として、地理的中間にあるワンカバンバ川流域だけで、土器の利用がみられないという状況が生じた。したがって、ワンカバンバ川流域社会では、少なくとも地域間交流に対して、神殿を支える人々やその集合としての社会、もしくはリーダーからの特別な働きかけは認められず、地域間交流はあまり重視されていなかったのである。

しかしながら、ポマワカ期に入ると、これらの状況に大きな変化がみられる。その一つが、ラクダ科動物の出現と輸送システムの成立である。その結果、地域間交流はラクダ科動物を伴う徒歩移動へと次第に変化し、それに応じて地域間ルートも変化した。ただし、ポマワカ期になって急速にラクダ科動物を伴う輸送システムが確立し、地域間ルートが変

化したわけではなく、ラクダ科動物の導入が進むにつれて、漸進的に変遷したものと考えられる。そして、それを通じて、ワンカバンバ川流域は、周辺地域との地域間交流網に積極的に組み込まれていくようになるのである。

土器利用の開始もこの時期の大きな変化の一つである。土器には、細部においてワンカバンバ川流域の独自性が認められるが、器種構成ではペルー極北部海岸と北部熱帯低地、装飾面では上記の 2 地域に加えて北部山地との共通性が高い。そして、ポマワカ期後半（III 期）から装飾や器形のバリエーションが増加する。とくにポマワカ III 期には赤色と白色を塗り分けた土器（PM タイプ 3-4）、ポマワカ IV 期には多彩色土器（PM タイプ 2-3）や焼成後に顔料を充填するポストコクション（PM タイプ 5-3）を有する土器がみられるようになるなど、ペルー極北部海岸と北部熱帯低地、北部山地とのより強い関連を示す。

また、流域内には、神殿が複数建設され、その規模もワンカバンバ期より大規模化する。神殿の存在は、ペルー北部地域全体における共通点であるが、神殿の形態的特徴をみると、とくにペルー極北部海岸と北部熱帯低地との高い共通性を示している。

これらのことをふまえて、地域間交流の様態を考慮すると、この時期のワンカバンバ川流域社会と、ペルー北部、あるいはエクアドル南部に存在した社会との間には、ワンカバンバ期と同様に、「互酬（居住地型）」の交流がとられていた可能性がある。つまり、人々が直接往来して、物資や情報がやりとりされ、共有されていたことが示唆されるのである。なぜならば、インガタンボと極北部海岸における土器器形の共通性や、北部山地や北部海岸、北部熱帯低地との土器装飾の類似性、もしくは不動性を持つ神殿の存在や形態的特徴の類似など、技術やイデオロギー面において高い共通性が存在するためである。また、イデオロギーの共有を下地とした類似する神殿の存在は、他地域の人々をインガタンボ、あるいはワンカバンバ川流域へと導くきっかけにもなったであろう。そのなかでもとくに、土器や神殿にみられる共通性の高さと、共通性を有する事例の多さなどから、ワンカバンバ川流域社会とペルー極北部海岸、北部熱帯低地社会との間では、物資や情報が交換されただけでなく、神殿をめぐる諸活動に関わるイデオロギーも共有されるなど、他地域よりも非常に密接な関係が築かれていたと考えられる。

ただし、ポマワカ期におけるもう一つの大きな変化である、海水生種の貝の出土状況には、土器や神殿を通じてみられた状況とは異なる展開がみられる。まず、ポマワカ期には、貝製品だけでなく、それと同時に未製品や原材料が現れるようになる。また、大量のウミギクガイの破片が認められるとともに、サザエ科の貝（*Astraea olivacea*）が確認されるなど、ペルー極北部海岸を南限とするような暖流系の貝の出土が顕著となるのである。

このような暖流系の貝の獲得は、いかにして行われたのであろうか。第 10 章でも述べたように、インガタンボよりも産地に近い、エクアドル南部山地のカタマヨ複合では、集積されたと考えられる大量のウミギクガイが確認される。しかし、その一方で、インガタンボとエクアドル南部の中間に位置する、ペルー極北部海岸中流域のセロ・ニャニャニケでは、ウミギクガイはほとんどみられない。したがって、ウミギクガイの出土量は、産地で

あるエクアドル南部海岸、もしくは中央海岸からの距離に応じた単純な減少傾向を示してはいないのである。

次に、これらのことをふまえたうえで、地域間交流の様態について検討してみたい。ウミギクガイの獲得に際しては、インガタンボと産地であるエクアドル海岸部との地理的距離、ならびにエクアドル海岸部社会の存在から、インガタンボの人々が直接的に獲得に向かったとは一見考えにくい。そのため、先行研究では基本的に、ウミギクガイの交換が互酬交換を繰り返す「互酬連鎖交換: Down-the-line」で行われていたと考えられたのである[Martin 2001]。しかしながら、セロ・ニャニャニケの状況を鑑みると、ウミギクガイは、ペルー極北部海岸中流域の社会を介さずに、インガタンボにもたらされたと考えられる。

このようにしてみると、インガタンボにおけるウミギクガイの獲得は、チャーチが指摘した「フリーランス交易」で行われた可能性もある。ただし、この場合、神殿間を実際に移動し、交流を仲介する人物や集団は、どちらの神殿にも属さない存在となる。形成期中期（ポマワカ期）には、インガタンボだけでなく、ペルー北部の諸遺跡でラクダ科動物がみられるようになることから、ラクダ科動物を扱う集団がフリーのキャラバンとして活動した可能性はある。しかしながら、前章で述べたように、ペルー北部におけるラクダ科動物の利用は、在地の神殿を中心とした社会との関連のなかで徐々に展開した。このため、各地の神殿社会と無関係にラクダ科動物を扱う集団が存在したと想定するにはやや無理がある。これらのことから、インガタンボにおけるウミギクガイは、インガタンボを支えた社会の人々が主導となって、はじめは主に徒歩移動で、その後は次第にラクダ科動物を伴う徒歩移動によって、エクアドル南部のカタマヨ複合に展開した社会との直接的な交流のなかで獲得されたものであると考えられる。そしてこの際、ラクダ科動物とそれを扱う集団は、インガタンボの社会成員として地域間交流に従事し、奢侈品の獲得というリーダーの戦略において重要な役割を果たしたのである。

これは、遠く離れた地域間の交流に際して、無批判的に「互酬連鎖交換」の存在を想定するような研究への重要な提起となる[1]。では、ウミギクガイの獲得に関して、「互酬連鎖交換」ではなく、「互酬（居住地型）」がとられた可能性を指摘する意味について述べてみたい。「互酬連鎖交換」では、ウミギクガイの獲得に際して、エクアドルに展開した社会以外に仲介者的な社会の存在が必要となる。そのため、インガタンボ社会がウミギクガイを入手するためには、仲介者的な社会との交流が必要となり、その獲得戦略は仲介者的社会の動向に大きく左右される。しかし、「互酬（居住地型）」では、インガタンボとエクアドルに展開した社会との直接的な交流のなかで物資が獲得される。このため、インガタンボは、

[1]ただし、この仮説は、あくまで現在の研究状況に即したものであり、インガタンボからカタマヨ複合へのルート上に、他の形成期神殿が確認され、その状況が明らかになった時には修正が必要である。また、アンデス全体を対象とするようなマクロな視点に立てば、各神殿の交流の様態がみえずに、結果として地域間交流を連鎖型と捉えてしまうことがある。しかし、第 1 章より繰り返し問題としてあげているように、それでは各社会を中心とした地域間交流の多様性が覆い隠され、地域間交流の実態を掴むことはできない。

その地理を生かして、ペルー北部におけるウミギクガイの獲得に関わる中心地の一つとなりうるのである。このことは、とくにワンカバンバ川流域よりも南方に位置する神殿を中心とした諸社会に対するインガタンボ社会の強みとなる。したがって、インガタンボを支えた人々、とくにリーダーにとって、ウミギクガイの獲得や交換が、周辺地域社会との地域間関係を構築する際の重要な戦略となるのである。

ただし、上記のインガタンボとエクアドルに展開した社会との間に存在した地域間交流は、あくまでウミギクガイの獲得に関するだけものであったと考えられる。つまり、インガタンボとエクアドルに展開した社会との間には、インガタンボとペルー北部地域に展開した諸社会で実施された交流とは異なり、技術や情報、イデオロギー面におよぶ交流はみられず、あくまで物資の交換が中心であったことが推測される。なぜならば、ペルー北部の諸神殿では、ウミギクガイは奢侈品として儀礼や埋葬時に副葬品として用いられることが多く、使用コンテクストには共通性が認められる。そのため、ペルー北部の社会間では、ウミギクガイに関わるイデオロギーが共有されていたと考えられる一方で、ペルーとエクアドルの社会間では、その使用コンテクストの細部に差異がみられるからである[Burger 2003: 478-479; Stothert 2003: 362-366]。

以上のように、ポマワカ期にはインガタンボ、およびワンカバンバ川流域社会は、周辺地域との地域間交流に組み込まれていった。そして、地域間交流を介してもたらされた土器や貝製品、あるいはその原材料などが、神殿における儀礼や生産活動に使用されることで、地域間交流は当該社会において重要な役割を果たすことになった。こうしたことから、神殿を支える人々、とくに建設活動や儀礼を通して浮かび上がったリーダーは、集団内の差異化を図るため、戦略的、かつ積極的に地域間交流に関与していった。また、交流を通じて獲得した物資、とくに奢侈品となるウミギクガイの流通の中心地となることで、インガタンボやワンカバンバ川流域社会は、ペルー北部における地域間交流の要衝となった。こうして、交換される物資の特性や交流を行う社会との地理的な距離に応じて、異なった交流の様態をとることが、地域間関係を構築していくために、リーダーの戦略のなかで重要になっていったと考えられる。

なお、基本的には「互酬」にもとづいた交流が行われていたとしても、他地域からもたらされた物資が奉納品であった場合、その見返りが物資である必然性はなく、インガタンボやワンカバンバ川流域社会の神殿をめぐる諸活動への積極的な関与であった可能性がある。そして、このような状況は、インガタンボと交流相手先の社会との不均衡な関係を構築し、互いを認識する機会となった。このようにして、インガタンボ、もしくはワンカバンバ川流域社会は、地域間交流が交錯する要衝としての重要性を増し、その位置づけを大きく変化させたのである。

続くインガタンボ期（形成期後期）に入ると、ポマワカ期にみられた状況が部分的に引き継がれながらも、新たな展開がみられるようになる。

インガタンボでは、ペルー極北部海岸との土器器形の共通性や、北部山地と北部海岸、

あるいは、北部熱帯低地との土器装飾における類似などが認められる点で、ポマワカ期からの連続性がみられる。その一方で、コップ形や開口円筒鉢といった新たな器形や、還元焼成による黒色磨研土器（IG タイプ 3）や灰色磨研土器（IG タイプ 2）、もしくは黒鉛が塗布された土器（IG タイプ 3-3）やオレンジ地赤彩土器（IG タイプ 1）などといった、北部海岸と北部山地との極めて高い共通性を示す土器も認められるようなる。なお、黒色磨研土器と灰色磨研土器は、ポマワカ期において、とくに北部海岸に分布が多い土器であり、インガタンボ期には北部山地で多く確認されている。これらのことから、インガタンボでは、土器の搬入、製作技術や情報、イデオロギーの伝達を含めて、同時期の北部山地との交流、あるいは前時期の北部海岸からの影響が存在していると考えられる。実際に、このような傾向は、北部山地のクントゥル・ワシやパコパンパ複合でも認められている。ただし、インガタンボにおいては、この時期の北部山地では喪失、もしくは大きく減少する傾向のある多彩色（IG タイプ 5-3）やポストコクション塗彩（IG タイプ 8-3）を有する土器も、引き続き中心的な土器として利用された。これらの土器は、インガタンボ期において、主に北部熱帯低地や極北部海岸で確認される土器であり、上記の 2 地域との関係がポマワカ期と同様に重要視されていた結果であると考えられる。これを裏づけるように、インガタンボにおける日用土器の器種構成は、ポマワカ期と同様に有頚壺が主である。したがって、土器からみると、インガタンボでは、ポマワカ期にみられたように北部熱帯低地や極北部海岸との交流が重視される一方で、それらの地域にも増して北部山地や北部海岸との関係に注意が払われていたことが推測される。

これは、神殿の形態的特徴からも示唆され、更新の結果、巨大化したインガタンボの神殿の配置には、同時期のペルー北部山地や前時期の北部海岸の神殿との類似性がみられる。また、神殿内に金製品を伴う埋葬が築かれる点も、上記の 2 地域と共通している。ただし、インガタンボの金製品の事例は、インガタンボ期後半（インガタンボ II 期）であるため、クントゥル・ワシやパコパンパ複合とは時間差が認められる。これらのことから、ワンカバンバ川流域社会では、土器と同様に神殿をめぐる諸活動に関わるイデオロギー面についても、ペルー極北部海岸と北部熱帯低地の諸社会だけでなく、とりわけ北部山地や北部海岸に展開した社会との間に密接な交流が存在したものと考えられる。

さらに、インガタンボ期には、貝製品の出土がさらに顕著になる。その大半は、インガタンボ期前半(インガタンボ I 期)の神殿更新時にみられる灰層から出土しており、火を用いた儀礼的奉納であると考えられる。なお、未製品や原材料も確認されるが、出土量はポマワカ期よりも減少する[1]。

インガタンボ期前半には海水生種の貝が多数確認されるが、その大半は暖流系であり、この出土傾向はポマワカ期よりも顕著である。これらのことから、インガタンボ社会は、

[1]インガタンボ II 期へ入ると出土量はさらに減少する。しかし、インガタンボ II 期に関しては、形成期以降の活動を原因とする土層の撹乱によって、良好なコンテクストが少ないといった資料上の問題もあるため、この減少傾向の扱いには慎重な姿勢が必要である。

海水生種の貝の入手に際して、海岸部のなかでもとくに、ペルー極北部海岸やさらに北方のエクアドル海岸部に展開した社会との交流を、積極的に行っていたと考えられる。また、インガタンボ期後半には、インガタンボにおいて、わずか 2 点ではあるが、ペルー南部山地のキスピシーサ産黒曜石も確認されている。

なお、インガタンボ期では、インガタンボだけではなく、北部山地の諸遺跡でラクダ科動物の利用が高まる。そのため、この時期には、ラクダ科動物を伴う輸送システムが確立し、地域間交流はラクダ科動物を伴う徒歩移動が主となったと考えられる。

これらのことをふまえて、インガタンボ期における地域間交流の様態を考察すると、ポマワカ期にみられた状況が継続されていることが推測される。なぜならば、インガタンボ期においても、土器の器形や装飾、あるいは神殿の形態的特徴の類似など、技術的側面だけでなく、イデオロギー面においてもインガタンボと既述の諸地域との間に、直接的な往来を背景とするような高い共通性が存在するためである。つまり、周辺地域との地域間交流に際して、「互酬（居住地型）」の様態がとられたと考えられるのである。

また、インガタンボ期後半にみられた黒曜石についても、「互酬（居住地型）」によって、獲得されたものであると考えられる。これは、インガタンボにおける黒曜石の出土量が極めて少なく、さらには出土例が剝片であることに加えて、ペルー北部山地のクントゥル・ワシとパコパンパ複合では、インガタンボ以上にキスピシーサ産の黒曜石が出土しているためである [Burger and Glascock 2009]。つまり、インガタンボにおける黒曜石は、産地から直接獲得されたのではなく、クントゥル・ワシ、あるいはパコパンパ複合との交流を通じて獲得されたものと推測されるのである。

さらに　ウミギクガイに目を向けると、ポマワカ期と同様に、インガタンボとセロ・ニャニャニケの出土状況に差異が認められる。したがって、インガタンボ期においても、ウミギクガイの入手に関しては、エクアドルに展開した社会との直接的な交流のなかで獲得されたと考えられる。しかしながら、この時期には、インガタンボよりも南に位置するペルー北部山地のクントゥル・ワシで、ウミギクガイの出土量が大きく増加する[西澤 2007]。もちろん、クントゥル・ワシとインガタンボでは、発掘面積に大きな差異が存在するため、その量は直接的な比較の対象とはならない。ただし重要なことは、この時期のクントゥル・ワシでは神殿の大規模化や金製品を伴う埋葬の出現など、大きな社会変化が生じていることである。また、神殿の規模や構造、もしくは特殊な埋葬の副葬品量などを考慮すると、クントゥル・ワシはペルー北部における中心的な神殿の一つであったと考えられる。このため、インガタンボは交流の中継地として機能し続けたものの、ペルー北部におけるウミギクガイに関する地域間交流の中心地としての役割は、クントゥル・ワシが担うようになった可能性が示唆される。つまり、交流の様態は変化しないものの、その内実は質的に変化したと考えられるのである。上記の黒曜石やウミギクガイの出土状況から指摘されるように、クントゥル・ワシやパコパンパ複合との関係が変化した結果として、インガタンボは地域間交流の重要地ではあるものの、他の神殿への中継地としての役割を有するように

なっていったのである。

形成期後期の地域間交流の質的変化について、バーガーは、ペルー北部中央山地のチャビン・デ・ワンタルを中心として、汎アンデス的に地域間交流の活発化が起こった点を指摘した。そして、地域間交流に伴い、宗教イデオロギーが拡散して、広範な地域で、冶金技術や石材加工技術といった技術革新や階層化を含む社会変化が生じたと考えた [Burger 1988, 1992, 1993, 2008]。バーガーによれば、ペルー北部山地のクントゥル・ワシやパコパンパ複合といった大神殿は、この一連の動きのなかで成立したものであり、インガタンボではインガタンボ期の展開がこれに相当することになる。

これに対して、日本のアンデス調査団は、クントゥル・ワシの事例をもとにして、神殿建築や土器の変化、ならびに金製品を伴うような特殊な埋葬の出現といった変化を、直接的な人の移動を含めた、北部海岸からの影響と熱帯低地からの新たな儀礼体系が深く関わって[鶴見 2008a]、成立したものと指摘した[加藤・関編 1998; 大貫・加藤・関編 2010]。つまり、クントゥル・ワシにみられた変化を、汎アンデス的な変化ではなく、ペルー北部地域で起きた、よりローカルな展開のもとに生じた変化として捉えたのである。

クントゥル・ワシで報告されたような更新時に基壇中に築かれ、金製品が副葬された埋葬の事例は、パコパンパ複合やインガタンボなど、ペルー北部を中心に確認されている。そのため、ペルー北部地域において、海岸部と山地との間で密接な地域間交流が行われ、それを通じて物資やイデオロギーに関する情報が山地へともたらされた可能性はある。ただし、インガタンボとクントゥル・ワシやパコパンパ複合では、金製品の埋葬の出現に時間差が認められるため、インガタンボの埋葬、およびそのイデオロギーは、海岸部から直接持ち込まれたのではなく、北部山地を経由したものであったと考えられる。つまり、特殊な埋葬に象徴されるより個人性の強いエリートを中心とした新たな社会組織についても、北部山地の社会からもたらされたことが示唆されるのである。

以上のように、ワンカバンバ川流域社会では、ペルー極北部海岸や北部熱帯低地の諸社会だけでなく、とくに北部山地や北部海岸に展開した社会との間で物資や情報が交換され、その結果として神殿をめぐる諸活動に関わるイデオロギーが、他地域よりも色濃く共有された。この意味において、インガタンボにみられた地域間交流の質的変化は、クントゥル・ワシにみられたような、ペルー北部地域に生じた社会変化と関連しながら起きたものと考えられる。つまり、地域間交流は、各神殿社会がそれぞれの戦略や社会的背景に応じて、独自に地域間関係を構築した結果、複雑で多様性に富んだものへと変化したのである。

このような状況において、地域間ルートの結節点であったインガタンボは、ポマワカ期からみられた地域間交流の要衝としての立場をさらに確立していった。とくに、儀礼に利用されたウミギクガイの入手において、ペルー北部の神殿を中心とした社会にとって、インガタンボの果たした役割は重要であった。そのなかで、インガタンボの神殿を支える人々、とくにリーダーは、他地域から物資や情報を獲得することで、集団内の差異化を図るために、あるいは周辺地域に展開する他の神殿との関係を構築するために、それまで以上に積

極的に地域間交流を行ったのである。このようにみると、インガタンボに集積された物資や情報とは、各社会間で行われたリーダーを中心とした地域間交流の所産であると考えられる。

11-4. ワンカバンバ川流域における社会動態と社会成員の活動、および戦略

本節では、ワンカバンバ川流域社会の独自性や主体性を重視しつつ、前節までのデータ、ならびに論考を総括する。そして、先行研究との比較検討を交えながら、当該地域のコンテクストに即して、ワンカバンバ川流域の社会動態を明らかにし、その背景に存在する社会成員の活動と戦略について包括的に論じる。

11-4-1. ワンカバンバ期

ワンカバンバ期は、形成期早期から形成期前期という長期間にわたる先土器、もしくは無土器の時期である。流域内でこの時期の活動が唯一明らかなインガタンボでは、小規模な神殿の建設がみられる。そこでは、神殿は、小集団の儀礼用空間として社会的統合の中心になるとともに、建設活動や儀礼を支えるイデオロギーを示す存在であったと考えられる。また、神殿をめぐる諸活動におけるリーダーは存在したものの、明確な社会的差異は存在せず、諸活動は社会成員の協同性にもとづくものであった。その一方、ワンカバンバ期前半（形成期早期）におけるペルー北部海岸では、セロ・ベンタロンという大規模な神殿が築かれている。神殿を中心として集団が形成され、神殿で行われる建設活動や儀礼を社会統合の一つの指標とするならば、インガタンボとセロ・ベンタロンを中心とした社会集団の規模や統合の度合いには、大きな差異が認められることになる。なお、ペルー極北部海岸のチラ川やピウラ川の沿岸部では、神殿を有さない小集落や、小規模な祭祀建造物を有する小集落などが確認されており、インガタンボと類した状況がみられるなど、地域ごとに多様な社会的状況が認められる。

これに対して、ワンカバンバ期後半にあたる形成期前期になると、北部山地のパンダンチェやワカロマ、北部熱帯低地のバグア複合では、土器を有する社会がみられた。また、北部海岸ヘケテペケ川中流域のアマカス複合などでは、すでに神殿も存在していた。アマカス複合を調査した鶴見は、神殿と土器製作活動、そして土器利用を前提とした生業基盤（マニオク農耕）の確立との関係を指摘したうえで、神殿を擁する先進的な地域が、周辺の地域社会に土器を分配するのが、ペルー北部地域で最古の土器の生産・流通の実態であったとの仮説を提示した[鶴見 2008a]。ワンカバンバ川流域でも、マニオク農耕に適した生態環境を利用し、農耕が行われていたことは推測されるが、現在までに植物遺存体といった具体的な証拠は認められない[1]。また、ワンカバンバ川流域の遺跡分布調査では、この時

[1]インガタンボ遺跡全体の傾向として、神殿内が丁寧に清掃されており、基壇の盛り土に遺物が少ないことがあげられる。ただし、実施した発掘調査の範囲は限定的であるため、今後の調査によって、植物遺存体が検出される可能性はある。

期に対応する土器は採集されていないため、ワンカバンバ期の流域社会において土器利用がみられないことは明らかである。

それでは、この土器の利用開始時期の遅れとは何を意味しているのだろうか。土器の起源地の一つとされるエクアドルに展開した社会との単純な地理的距離は、同時代のペルー北部地域に存在した土器を有する社会よりも、ワンカバンバ川流域の方がはるかに近い。また、各地の事例をみてみると、神殿の建設と土器の導入時期に関して、かなりの地域差がみられる。たとえば、ヘケテペケ中流域のアマカス複合では、神殿の建設と定住化が他地域と比べて遅かったこと、そして、神殿の建設以降、神殿を中心として土器製作を含めた急激な社会変化があったことが報告されている[鶴見 2008a: 229]。しかしながら、ワンカバンバ川流域においては、小規模な神殿を中心とした社会の展開がみられるものの、土器製作とは結びついていない。とくに、周辺地域と比較して土器利用の開始時期に、数百年という時間差が存在するという現象は、ワンカバンバ川流域社会の独自的で、特殊な状況を示していると考えられる。

先述したように、ワンカバンバ川流域の生態環境は非常に豊かであり、現在においても食料に困窮するような状況はみられない。そのため、流域の生態環境を利用するだけで、当時の人口を十分に賄えた可能性はある。しかしながら、ワンカバンバ川流域社会に周辺地域の社会との交流が存在しなかったわけではない。なぜならば、1 点ながらも海水生種の貝製品が出土しており、また、小規模ではあるが、神殿の存在が報告されるなど、周辺地域との交流を示すデータも確認されるからである。さらに、ワンカバンバ川流域内の状況をみると、周辺地域へ抜ける地域間ルート上に、インガタンボが位置していることから、神殿建設に際してワンカバンバ川流域社会が、他地域との関係を考慮していたことが推測される。

他地域の事例によれば、この時期にはすでに、海岸部と河川中流域、あるいは山地や熱帯低地との資源交換が存在していることから、ワンカバンバ川流域でも同様の動きがあった可能性は十分にある。ただし、周辺地域の諸社会との地域間交流は存在したとしても、それは極めて緩やかなつながりであったと考えられる。なぜならば、貝製品や神殿の存在以外に、交流の具体的な証拠はみられないからである。また、ワンカバンバ川流域に、精製土器を含む奢侈品などの他地域との交換財が不足することは、隣接地域の社会が、ワンカバンバ川流域社会と、積極的に交流を持たなかった理由の一つであると推測される。つまり、周辺地域の神殿社会からみて、インガタンボの求心力は極めて低いものであったのである。

さらに、徒歩移動による周辺遺跡間の地域間ルートをみると、ペルー北部地域における海岸と山地、もしくは熱帯低地間の地域間交流に際して、ワンカバンバ川流域を通過した場合には移動距離がかさむことになる。そのため、ワンカバンバ川流域社会との交流を行う特別な理由が存在しない限り、ワンカバンバ川流域を積極的に通過するメリットはない。

上記のような状況をふまえると、ワンカバンバ川流域における土器利用の遅れとは、ワ

ンカバンバ川流域社会が、ペルー北部における土器の製作、交換、技術伝達といった一連の動きへ関与していなかったことを意味する。そして、可塑性を利用して土器に象徴性が加えられることで、交換財としての価値を有するようになるのであれば[Druc 2004]、土器利用開始時期の遅れは、他地域にとってワンカバンバ川流域との交流を行う必然性を減退させることにつながる。なぜなら、資源交換、とくに奢侈品の交換は、交換を行う社会、あるいはそれを司る人々の、他の人々との差異を打ち出していくという戦略に左右されるからである。以上のことが、ワンカバンバ期における流域社会の特殊性である。

なお、この時期の神殿更新は、以前と同様の建造物を積み重ねる更新であり、更新ごとに、極端な大規模化や空間配置の複雑化は生じなかった。このような更新の動機が、社会的紐帯を強固にするというような現状を再確認する側面が強いのであるならば、この時期のワンカバンバ川流域社会では、集団内の差異を打ち出すことではなく、社会関係を維持することが重視されており、変化の契機は少なかったと考えられる。

11-4-2. ポマワカ期

ポマワカ期（形成期中期）には、土器の利用がはじまるとともに、流域内の遺跡数が急増し、ほぼ一定の距離をおいて、複数の神殿がみられるようになる。また、神殿には、ワンカバンバ期とは異なり、形態や配置、規模や建築技法において、周辺地域の神殿との共通性が認められる。ただし、神殿の細部においては、インガタンボの独自性に示されるように、地域的な多様性が存在している。

また、13 ある流域内の神殿間にも多様性が認められ、インガタンボに代表される複数の神殿は、それ以外の神殿よりも大規模である。とくに、インガタンボとイェルマ 6 は、流域内で最大規模を誇る神殿であるため、流域の社会的統合に際して、より中心的な役割を果たしたことが想定される。しかし、複数の神殿が流域内に同時に存在することから、規模が突出した神殿はみられるが、流域全体を統合するような単一の集団は存在せず、各神殿を中心とした複数の集団が存在していたと考えられる。さらに、上記以外の神殿間ではほとんど規模差がみられないが、これは、各神殿で行われた更新の頻度と規模、そして労働投下量が、ほぼ同じであったためであると推測される。

その一方、神殿の周囲では、居住施設が認められるようになる。神殿に存在する部屋状構造物の規模を考慮すると、神殿を支える社会の成員全てが神殿内に居住することは不可能である。そのため、神殿内に居住することができたのは、極めて限られた小数の人々だけであったと考えられる。こうして、ワンカバンバ川流域では、神殿と居住域という空間分化がみられはじめたのである。

また、神殿更新自体にも変化がみられ、更新ごとに規模とそれに伴う労働投下量が増加し、空間配置の複雑化がもたらされた。とくに、ポマワカ期後半からは、空間区分がより顕在化した。そして神殿には、宗教的リーダーを中心とした限られた小集団のための閉鎖的儀礼空間（主要基壇最上部の部屋状構造物）と、一般成員を含めたより大人数のための

開放的儀礼空間（基壇上部の開放空間）が設けられた。

このようにして、建設活動や更新時の儀礼、大規模化した更新に伴う労働力の組織化や管理を考慮すると、建設活動指導者と労働者、もしくは儀礼執行者と参加者の明瞭な社会的差異が表出しはじめたことが推測される。また、儀礼の際には、トウモロコシがチチャとして利用された。これらのことから、リーダーの戦略やイデオロギーは、上記の諸活動を通じて造りあげられたイデオロギーの普及装置としての神殿を介して、社会に浸透し、集団内部の差異化に寄与したと考えられる。ただし、ポマワカ期の埋葬や奢侈品の出土状況には差異が認められない。つまり、ワンカバンバ川流域では、それぞれの神殿を核とした複数の集団内で一般成員とは異なるリーダーが現れるものの、その権力性は弱く、明確な階層分化はみられないのである。したがって、神殿をめぐる活動は、集団内の社会的差異はあるものの、ワンカバンバ期から認められた社会成員の協同性によって行われていたと考えられる。しかし、表出しはじめた集団内の社会的差異に応じて、神殿へのアクセスやその利用形態に差異が生じるようになった可能性はある。

また、流域全体に目を向けると、神殿をはじめとした大半の遺跡が、ワンカバンバ川とそれに注ぎ込む支流やケブラーダ付近に位置している。このような神殿と水利、あるいは農耕との関わりについては、様々な研究者が指摘するところであり、これまで、両者の経済的、および象徴的関係が検討されてきた[井口（ほか）2002; Shady 1974; Williams 1985; Zoubek 1997]。ワンカバンバ川流域の事例は、河川流域に等間隔に神殿が並ぶ点において、神殿を集団間で行われた灌漑による水の管理を円滑に実施するための装置であるとする「Water Temple （水の神殿）モデル[1]」との関連も示唆される。しかしながら、セトルメント、とくに神殿の分布は、耕作地としては適しているが、その面積は流域内で最大ではないポマワカ地域に集中しており、水利以外の要因、つまりは地域間ルートの存在がセトルメントの決定に大きく作用していたと考えられる。

第 9 章でも論じたが、これを支持するように、全ての神殿は南北に抜ける地域間ルート沿いに位置している。また、流域内で最大規模のインガタンボは、東西南北の全方面に抜ける主要ルートが交差する要衝にある。実際の交流は、ルートを利用する社会の戦略に依拠するが、ルート自体は地形という生態的要因に影響されることが大きい。このため、神殿とルートとの位置関係によって、地域間交流を通じた物資や情報へのアクセスに関して、流域内の集団間に利益、もしくは不利益が生じることとなり、その結果として、次第にインガタンボが流域内で隆盛を誇るようになったのである。この意味で、流域における神殿の成立や神殿社会の展開において、水利や農耕との関係だけでなく、流域外の社会に対して開いた地域間ルートとの関係はとくに重要であった。

これを傍証するように、ポマワカ期には、奢侈品である海水生種の貝製品の出土が顕著になる。また、これらの貝製品の多くは暖流系であるため、ペルー極北部海岸以北の社会、とくにウミギクガイに関してはエクアドル南部山地のカタマヨ複合との直接的な交流が存

[1]バリ島の民族誌事例から適用された[Zoubeck 1997]。

在したと考えられる。さらに、ラクダ科動物を伴う輸送システムの確立がみられると同時に、ペルー北部とエクアドル南部における地域間ルート（ラクダ科動物を伴う移動）は大きく変化し、その結果として、地域間交流におけるワンカバンバ川流域の重要性が増した。海産資源の増加には、このような背景が存在したのである。

その一方、利用がはじまる土器については、土器製作に関わる技術や情報、イデオロギーが流域外の社会からもたらされ、その利用当初より装飾などにおいて高い象徴性が付与された。また、儀礼と関連すると考えられる精巧なボトルや鉢の製作には、専業的製作者集団が存在した可能性も指摘される[鶴見 2000]。インガタンボの土器のバリエーションは少なく、細部に地域的な独自性は存在するものの、赤色スリップや白色スリップと刻線の組み合わせや多彩色土器といった装飾、器種構成など、ペルー北部地域、とくに極北部海岸と北部熱帯低地、北部山地の土器との共通性は高い[Guffroy 1989; Church 1996]。こうした象徴性が付与された土器は、神殿における儀礼と密接に関連していると考えられる。したがって、専業的製作者集団が存在したのであれば、その製作は、神殿における諸活動のリーダーの管理下におかれ、神殿、あるいはその近接地で行われたことが示唆される。この点においても、神殿はイデオロギーの伝達装置として、重要な役割を果たすことになったのである。

以上のようにして、神殿における儀礼を維持していくなかで、ワンカバンバ川流域社会にとって、常に外部社会との交流を持つことが不可欠となっていった。なぜならば、外部社会からもたらされる物資や情報は、リーダーのイデオロギーに関わる物質的基盤となるため、交流を通じてこれらを常に確保する必要が生じたためである。つまり、ペルー北部のなかで地域間交流の重要地となり、その交流を管理していくことは、儀礼を通じて自らを正統化し、一般成員との関係を強化するために、リーダーにとって重要な戦略となったのである。

ただし、土器の器種構成や精製土器、神殿の形態にみられる共通性と多様性、海水生種の貝の出土状況などからみると、地域間交流のあり方は一様ではなく、物資によって異なる交流の様態がとられたことが示唆される。また、インガタンボと周辺地域との地域間交流は、基本的に各神殿間との相互関係にもとづくものであったと考えられる。とくに、ウミギクガイといった暖流系の貝の獲得に関して、インガタンボはエクアドル南部地域に展開した社会との直接的な関係を独占的に有した。そのなかで、インガタンボは、独自の展開を有していた各神殿間の地域間交流が交錯する場所として、ペルー北部で重要な役割を果たすようになったのである。

こうした状況は、ペルー北部とエクアドル南部において同等政体間インタラクション[Renfrew 1982; Renfrew and Cherry eds. 1986]が存在したことを推測させる。つまり、各神殿にリーダーが存在し、独自性と独立性をもちながらも、地域間交流によって情報や技術、イデオロギーを共有するような状況である。これは、ワンカバンバ川流域内で、複数の神殿が併存し、流域全体を統合するような社会が明確に表れないこととも関連する。ま

た、ペルー北部において、神殿の大規模化や空間構造の差異化、土器の多様化、地域間交流の増加といった様々な社会的政治的変化が、ほぼ同時的に生じたこともこれを支持する。このようにして、ワンカバンバ川流域社会は、地域間交流に積極的に関与するようになったのである。

そのなかで、インガタンボをはじめとした流域社会は、エクアドル南部やペルー北部の各地からもたらされる資源獲得の中心地となった。また、ペルー北部のなかで「ゲートウェイ・コミュニティ」のように機能し、地域間交流の要衝ともなった。しかし、ワンカバンバ川流域では、ワンカバンバ期から小規模な神殿が建設されており、周辺地域の影響を受けて、この時期にはじめて神殿が建設されたわけではない。このことから、インガタンボの変化とは、あくまでも周辺地域からの影響をうけながら、インガタンボ神殿を支える人々、とくにリーダーの戦略のもとに生じたものであると考えられる。

なお、「ゲートウェイ・コミュニティ」には、従属先となる社会の存在が必要であるが、ワンカバンバ川流域、もしくは形成期の状況をみる限り、個々の神殿は独立した存在である。つまり、互酬的関係を前提として、各地の神殿が、独自に他地域の神殿との積極的な交流を行った結果として、ワンカバンバ川流域社会は、より広範な地域とのつながりを有するようになったのである。ただし、このようにして結ばれた各地の神殿社会との関係は、互酬的関係にもとづくものであったとしても、均質的なものではなく、神殿によっては不均衡な関係ですらあったと考えられる。これは、神殿の建築特徴や出土遺物の共通性、あるいはインガタンボにおけるそれらの独自性から示唆される。こうした状況のなかで、地域間交流の中心地として、インガタンボは自らの位置づけを築いていったのである。このため、周辺地域の海岸部や山地、熱帯低地の社会も、海産資源や土器の供給などを通じて、ワンカバンバ川流域社会と直接的に接触を図ろうとした。こうして、インガタンボは、ルート上の戦略的な地点を占拠することで、中継地としてのメリットを活かして利益を享受し「トランジット・コミュニティ」のような機能をも有することで、ペルー北部のなかで次第に影響力を高めていったと考えられる。つまり、ワンカバンバ川流域社会、ならびにインガタンボのリーダーにとって、交流の中心地でありつつも、各社会を結ぶ中継地としての位置をとることは、集団内の社会関係だけでなく、地域間関係の構築に関わる戦略の一部として極めて有益だったのである。こうしてインガタンボでは、リーダーを中心として神殿更新を行う一方で、地域間交流にもとづく物資や情報の獲得、および交換を重視した社会の展開が認められるようになるのである。

11-4-3. インガタンボ期

インガタンボ期になると、ワンカバンバ川流域では、ポマワカ期までに活動がみられた神殿の大半が放棄される。この時期の活動が認められる神殿は、インガタンボとカニャリアッコ 3 だけであるが、流域では新たに建設された神殿はなく、神殿が更新を伴いながら引き続き利用されるという点に関して、ポマワカ期からの連続性がみうけられる。また、

インガタンボでは、集中的な建設活動が実施され、併存していた二つの大基壇が統合されて巨大化し、「基壇・広場・テラス」の複合形態がとられる。しかし、カニャリアッコ 3 の神殿は、ポマワカ期の諸神殿と規模、および形態において大差はみられない。これらのことから、流域内において、インガタンボを頂点とするヒエラルキーが成立し、インガタンボを中心として流域内の社会的統合が進んだと考えられる。なお、現状では、居住施設はほとんど確認されていないが、インガタンボにおいて、これまで以上の集中的な建設活動がみられることから、単純に人口が減少したわけではなく、居住施設は、ポマワカ期と同様に神殿周辺に点在し、河谷底部や山の斜面を利用した農耕に適した土地に存在していたと推測される。この問題については、後述する。

その一方、インガタンボでは、更新に伴い、空間構造の複雑化と特定地点へのアクセスの制限がみられた。ポマワカ期には、閉鎖的儀礼空間と開放的儀礼空間の対比が指摘されたが、この時期には、増加した閉鎖的空間と開放空間の組み合わせによってさらに細やかなレベル差が生まれ、儀礼の際に人々が集まるスペースも、それに関わる集団の単位に応じて多様化したと考えられる。また、主要基壇上部の部屋状構造物内では、チチャの飲用を伴う儀礼が行われたことも示唆される。さらに、更新に際しては、とくに基壇頂上部において、床下への土器や貝製品が奉納されるなど様々な儀礼が執り行われている。上記の儀礼を伴うような神殿の大規模な更新には、多くの労働力とそれを管理する存在が必要である。これらのことからは、社会がリーダーや一般成員といった単純な区分を超えて、より複雑な社会組織に再編され、集団内に階層化が進展しはじめたことが伺える。神殿内に金製品などの副葬品を伴う特殊な埋葬が出現することも、これを支持する。

また、土器に関しては、器壁が厚く、つくりの粗い日用土器が増加する一方で、精巧に仕上げられたボトルや鉢には、以前にも増して象徴性が付与されるようになる。さらに、新しい器形や装飾がみられるようになるだけでなく、胎土や仕上げにおいて、他地域からの搬入土器が増え、精製土器のバリエーションは一気に増加する。とくにインガタンボ期後半には、ペルー北部海岸と北部山地からの搬入品が増えて、器種構成も多様になる。しかしながら、日用土器の器種構成はポマワカ期と同様に、ペルー北部よりもペルー極北部海岸、もしくはエクアドル南部社会と類似している。なお、精製土器に関しては、上記のように、とくにペルー北部山地とペルー北部海岸との共通性を示すものが多く認められるが、その一方で、ポマワカ期との連続性を有し、在地で製作されたと考えられる胎土や仕上げ、装飾を有する土器も継続してみられる。これは、周辺地域との共通性だけではなく、ワンカバンバ川流域の独自性を示す資料である。たとえば、インガタンボでは、形成期後期の北部山地ではあまりみられなくなり、分布が極北部海岸や北部熱帯低地に集中する多彩色土器が、インガタンボ期においても継続して利用されている。つまり、土器からみると、ポマワカ期からみられた北部熱帯低地や極北部海岸との地域間交流が存続する一方で、北部山地や北部海岸との関係がより重視されるようになったと考えられるのである。これは、神殿の形態的特徴にみられる共通性からも指摘される現象である。

詳細については将来的な発掘調査を待たなければならないが、ワンカバンバ川流域内で、土器の器形や装飾の多様性が確認されるのは、インガタンボだけである。したがって、セトルメントからも示されたように、インガタンボは、流域内で社会的に特殊な地位を占めたことが推測される。ただし、このような状況においても、日用土器は、ポマワカ期からの連続性が強くみうけられる点には、注意すべきである。なぜならば、流域の遺跡分布調査の結果として、インガタンボ期における遺跡数の減少が指摘されたが、それに加えて、居住施設までもが確認されないためである。インガタンボの土器編年の指標となるのは主に精製土器である。そのため、居住施設で利用された土器が日用土器に偏っていた場合、居住施設でポマワカ期とインガタンボ期の時期差を識別することは困難である。こうしてみると、インガタンボ期において、流域の遺跡数が減少する現象は、居住施設で日用土器だけが利用された結果であるとも捉えられ、その背景にはインガタンボのリーダーによって神殿以外の居住施設に住む人々の精製土器へのアクセスが制限されていた可能性がある。

次に、地域間交流に目を向けてみたい。先行研究では、この時期のアンデスにおいて、ラクダ科動物の利用が広がり、地域間交流が活発化したことが指摘される。そして、より広域におよぶ物資と情報のネットワークが構築され、地域社会や隣接地域社会との連続性や関係が希薄な「広域型神殿」を中心とした社会が展開したといわれる[加藤 2007]。また、神殿の位置づけも変化し、形成期中期までのような地域の核ではなく、政治経済的な単位とは関係のない広域にわたる宗教的儀式の中心となり、神殿は宗教的儀礼の場へと特化していったとも考えられている[加藤 2010]。このような神殿の社会的位置づけは、チャビン・デ・ワンタルでも推測されており、宗教的な巡礼地である神殿で執り行われる儀礼が、リーダーの権力基盤となったとされる[Burger 1992; Rick 2005]。なお、関は、神殿で執り行われる儀礼と同様に、広範な地域からもたらされた奢侈品の入手と製作が、階層化の出現においてリーダーの権力基盤となったとしているものの、神殿の成立には地域社会との関係が不可欠であるとみており[関 2010]、研究者間に意見の相違がみられる。しかしながら、全ての研究者が、形成期後期に生じた地域間交流の変化について言及している点は一致している。

このような地域間交流の活発化は、インガタンボでは土器や神殿建築以外にも、暖流系を中心とした海水生種の貝や黒曜石から示唆される。ただし、黒曜石は産地からの直接的な搬入ではなく、パコパンパ複合やクントゥル・ワシから持ち込まれたと考えられる。

また、ワンカバンバ川流域内でも、四方に抜ける地域間交流の要衝に位置するインガタンボが極大化することから、流域内の社会も地域間交流の活発化というアンデスの全体的動向と密接に関連しながら変容したと考えられる。つまり、他地域よりもたらされる物資や情報、とくに奢侈品や威信財の存在、および儀礼におけるそれらの使用が、社会におけるリーダーの正統性を示し、一般成員との不均衡な関係を構築、もしくは強化したのである。そして、流域における交流の要衝であるインガタンボが、地域間交流を独占した結果、ポマワカ期に存在した複数の神殿を支えた各集団のリーダーはその基盤を失い、インガタ

ンボを中心とした神殿間のヒエラルキーが成立した。したがって、インガタンボは、地域間ルートへのアクセスといった生態学的要因とそのルートの積極的な活用、および地域間交流の独占という相互作用の結果として、ワンカバンバ川流域社会の社会的統合の中心となったのである。

このようにみると、インガタンボは、インガタンボ期においても、北方のエクアドルからの資源を獲得するための「ゲートウェイ・コミュニティ」としての側面を持ちながらも[Burger 1992]、ルート上の戦略的な地点を占拠することで、中継地としてのメリットを活かして利益を享受し、「トランジット・コミュニティ」としての機能も果たしていた。しかし、実際には、ワンカバンバ川流域を中心としてみた場合、ペルー北部の地域間交流は、南北方向だけでなく、東西南北全域へと展開されている。また、インガタンボは、単なる中継地としてではなく、ポマワカ期と同様に一つの中心地であり、奢侈品の獲得のために社会的戦略の一環として積極的に地域間交流へ参与した。交換財として利用されたのは、インガタンボで製作された土器や奢侈品だけでなく、インガタンボに搬入された遠隔地起源の奢侈品やその原材料も同様である。形成期後期のアンデスでは地域間交流が活発化し、各地の社会で遠隔地起源の奢侈品が、リーダーの社会的地位の基盤を形成、あるいは強化するために、重要な役割を果たした。その結果、周辺地域の社会は、積極的に地域間交流に関与する必要が生まれ、海産資源や黒曜石、もしくは土器の供給など、ワンカバンバ川流域社会と積極的に直接的な接触を図ろうとしたと考えられる。とくに、儀礼に利用されたと考えられるウミギクガイの入手において、その獲得に関わる中心として、インガタンボの果たした役割は重要であった。そして、インガタンボ社会では、地域間交流の管理こそがリーダーの権力基盤となり、その維持のためにさらなる地域間交流が促進された。このようにして、ペルー北部地域では、各地で神殿の形態や構造、あるいは出土遺物の多様性が認識されつつも、各地の神殿社会の展開に連動性がみられるのである。そして、単に物資や情報が交換されるだけではなく、イデオロギー体系と深く関わる交流がさらに重視されるようになったことが、インガタンボ期の特徴であると考えられる。また、インガタンボ期の神殿では空間構造が複雑化するだけでなく、特殊な埋葬が行われるなど社会組織の再編が起こり、階層化の存在が顕著となる。それに伴い神殿は、以前よりも確立した階層性にもとづく、リーダーのための交易センターとしての役割も強く有するようになる。また、繰り返される更新や儀礼は、集団内の社会的差異を明確化するだけでなく、既存の差異を再確認させるための契機ともなった。

ただし、ワンカバンバ川流域社会は、ポマワカ期に築かれつつあった萌芽状態の階層性を基盤として展開したため、神殿の立地や更新、儀礼、地域間交流の役割など、ポマワカ期からの連続性も強くみられる。神殿は、宗教的中心であるとともに、情報や技術、物資の集積センターであり、集団の社会関係を再確認する場である。また、それに伴い、神殿の空間配置や神殿で執り行われる儀礼と建設活動は、イデオロギーを実践に通じて社会成員に伝達し、社会的現実を明確化する機会となった。さらに、注目すべきは、インガタン

ボでは、ワンカバンバ期からインガタンボ期の長期にわたって、大規模な神殿更新が継続的にみられる点である。つまり、社会における神殿の位置づけ、もしくは更新や儀礼の役割は、それぞれの時期において相違がみられるものの、インガタンボでは社会的差異の顕在化を図る戦略として、神殿更新が一貫して重視され続けるのである。また、神殿更新は単なる建設活動ではなく、宗教的、経済的、政治的行為でもあり、地域間交流と密接に関連するものであった。こうして、神殿は、単なる建設活動や儀礼におけるリーダーを超えて、より明確に階層化されたエリートを中心とした諸活動の場となっていったと考えられる。

こうした傾向はポマワカ期のインガタンボにもみられたが、インガタンボ期からは同時期に存在する他地域の神殿でも明確に認められ、各地の社会で遠隔地起源の奢侈品が、エリートの社会的地位の基盤を形成、あるいは強化するために、重要な役割を果たすようになった。そして、各地の神殿が地域間交流によって関係を持つようになる一方で、それぞれの神殿、もしくは地域においてとられた多様なエリートの戦略が、各社会の独自性を創出するようになったと考えられる。このような状況のなかで、ワンカバンバ川流域では、隣接地域との地域間交流を下地に、流域内を統合するような社会が出現した。また、インガタンボは、エリートの社会的戦略として積極的に地域間交流へ参与し、ペルー北部とエクアドル南部地域における地域間交流の中心地の一つとなったと考えられる。

しかし、インガタンボ期の地域間交流、およびそれと関連する社会変化を鑑みるときには、この時期のペルー北部山地に、北部海岸からの影響を受けて成立したとされるクントゥル・ワシとパコパンパ複合という大規模神殿の存在を考察する必要がある[大貫・加藤・関　編 2010]。なぜならば、これまで述べてきたように、インガタンボでは、神殿建築、土器、埋葬、遠隔地起源の物資の増加といった大きな変化が生じたが、この変化の背景には、先行する形成期中期の北部海岸、あるいは形成期後期の北部山地との関連が示唆されるためである。ただし、インガタンボの事例では、特殊な埋葬や黒曜石が現れるのは、クントゥル・ワシやパコパンパ複合と同時期の形成期後期の最初期（インガタンボ I 期）ではなく、インガタンボ期後半（インガタンボ II 期）である。そのため、形成期後期のはじめにクントゥル・ワシとパコパンパ複合で起こった現象とは、若干の時間差が存在するのである。

この現象を説明するには、バーガーとマトスによるアターリャに関する研究が参考になる[Burger and Matos 2002]。彼らは、ペルー南部山地の辰砂の産地近くに位置するアターリャが、辰砂の流通において地政学的位置を占め、チャビン・デ・ワンタルにとって重要な存在であったことを指摘した。そして、アターリャにおける神殿の成立は、辰砂というチャビン・デ・ワンタルのエリートにとって重要な物資の獲得が契機となって生じた現象であるとした。つまり、辰砂の入手と流通のために重要であると考えられる場所に、大神殿であるチャビン・デ・ワンタルの影響の下、アターリャの神殿が成立したと考えたのである。

第 1 章でも述べたように、この論は、考古学への世界システム論の援用であるため、批

判点も多いが、このモデルが示す特定の状況を説明するという視点自体は有効であると考えられる。なぜならば、インガタンボと北部山地の大規模神殿との関係を考察すると、形成期後期の地域間交流と社会変化に関して、バーガーとマトスのモデルと酷似する面が、分析結果としてみえてくるためである。つまり、インガタンボ期（形成期後期）のインガタンボは、ポマワカ期（形成期中期）までにあった地域間ルートの結節点という役割によって、北部の大規模神殿のエリートにとって物資、とくにウミギクガイの獲得において重要地となった。そのため、インガタンボは、クントゥル・ワシとパコパンパ複合を中心とした地域間交流のなかに取り込まれることになったという点である。

また、このモデルに依拠すれば、インガタンボにみられた地域間交流の活発化を示唆する特殊な埋葬や黒曜石は、クントゥル・ワシ、もしくはパコパンパ複合を通じてインガタンボにもたらされたことを推測させる。これは、インガタンボにおける特殊な埋葬の出現、あるいは北部海岸起源と考えられる土器の搬入が、インガタンボ期後半に顕著なことからも支持される。なお、ペルー北部の大神殿のなかでも、とくにパコパンパ複合は、神殿建築や出土した土器の特徴、それらの総体としての遺跡全体のシークエンスといった点で、インガタンボとの共通性が高い。総じて高い共通性がみられる要因は、ポマワカ期よりラクダ科動物の授受などからも指摘されるように、両者間に密接な地域間交流が存在したためであると考えられる。

このように、インガタンボを周辺地域との関係のなかで捉えようとする際に重要なことは古典的な世界システム論にある「中心」と「周縁」の不均衡な関係、つまりは両者の従属関係を論じることではなく、それぞれの、とくに「周縁」固有のコンテクストを重視し、「周縁」を主体とした見方から両者の関係を論じることである。なぜならば、物資文化、なかでも威信財の選択的な受容や使用は、あくまでそれを受給する「周縁」社会の選択的な対応に依拠するからである。したがって、この問題は、従来、「周縁」とされてきた社会の歴史的コンテクストから考察されなければならない。

インガタンボにおける神殿建築、土器、ウミギクガイ、黒曜石、金製品を伴う埋葬などの現象面を総合的に判断すると、インガタンボは、パコパンパ複合やクントゥル・ワシを中心としたペルー北部の地域間交流に組み込まれていたことが推測される。しかし、このことは、インガタンボとパコパンパ複合、もしくはクントゥル・ワシとの単純な従属関係を意味するわけではない。この状況におかれたインガタンボは、他地域よりもたらされる奢侈品へのアクセス、および儀礼におけるそれらの使用に対しての保証をえるという点で大きな利点を持つことになった。そして、これにより、インガタンボ社会におけるエリートは、その正統性を示し、社会成員との不均衡な関係を構築、あるいは強化することが可能となったのである。つまり、インガタンボ固有のコンテクストから、この問題を捉えることで、地域間交流の新たな側面を見出せるのである。また、インガタンボが交流の要衝としての立地を活用し、流域内で地域間交流を独占したのであれば、ポマワカ期に存在した複数の神殿を支えた各集団のリーダーは、当然その基盤を失う。このようにして、イン

ガタンボは流域社会の社会的統合の中心となり、ペルー北部地域、もしくはより広範囲に展開された地域間交流において、交通の要衝として重要な位置づけを確立したのである。

以上のように、インガタンボと周辺地域の諸神殿との関係は、各神殿間との相互関係だけでなく、より広域的な視点からも捉える必要がある。そのなかで、インガタンボは、様々な地域間関係が交錯する場としてだけでなく、パコパンパ複合やクントゥル・ワシを中心とした地域間交流に引き込まれつつも、エリートがその状況を利用し、積極的に地域間交流へ加わることで、大きな社会変化を遂げたと考えられるのである。

なお、現状においてインガタンボにおける活動は不明であるが、形成期後期の後半になると、これまで述べてきたような状況は、さらに変化する。この時期の活動が明らかな北部山地のクントゥル・ワシ（コパ期）では、それ以前にみられた地域間交流に依存した「広域型神殿」から地域に根差した「地域型神殿」への転換が図られたとされるのである[加藤 2007]。しかしながら、クントゥル・ワシでは、確かにペルー南部山地産の黒曜石や辰砂の利用は減少するが、暖流系のウミギクガイの搬入量が増加する[加藤 2010; 坂井・清水 2002]。そのため、地域型神殿とはなりつつも、北方との地域間交流を積極的に維持したようである。この時期には、インガタンボやパコパンパ複合といったより北方に位置する神殿での活動が衰退することから、両神殿に代わってクントゥル・ワシが、直接的に北方社会との交流を行った可能性も推測される。なぜならば、前章で述べたように、この時期の活動が認められるカタマヨ複合とラ・グランハ複合（エル・ローヨ）を結び、クントゥル・ワシへと続く最短ルートは、ワンカバンバ川流域の西側を通るためである。つまり、形成期後期後半において、クントゥル・ワシが直接的にウミギクガイの獲得を行ったのであれば、それこそが、インガタンボ社会が衰退した最大の要因であったとも考えられる。この仮説を裏づけるように、この時期のカタマヨ複合では、それまでに確認されなかった無頚壺が認められ、インガタンボより南方に位置するペルー北部山地との関係が強まることが示唆されるのである。

11-5. ワンカバンバ川流域を中心とした形成期の社会動態―地域間交流を軸に―

ワンカバンバ川流域を含む、エクアドル南部からペルー北部にかけての地域は、ペルーとエクアドルに展開した社会の「フロンティア」や「中間地域」とされてきたが、独自の社会状況がみられ、地域内の多様性が指摘されてきた地域でもある[Burger 1984, 1992, 2008; Guffroy 2008]。このため、本論では、「フロンティア」や「中間地域」といった枠組みのなかではなく、各地域社会の主体性を重視して、ワンカバンバ川流域社会の社会動態について論じてきた。なぜならば、「フロンティア」や「中間領域」という概念は、あくまで研究者の理論的見解にもとづくものであり、社会動態の解明に際しては、対象地域を特定の概念を用いて区分するよりも、固有のコンテクストを重視しつつ、様々な交流の場として捉えた方が[Burger 2003:478; Church 1996: 617-618]、生産的であると考えたためである。

これらをふまえて本論では、より具体的に、インガタンボ遺跡の発掘データとワンカバンバ川流域のセトルメント、および地域間ルートの分析を通じて、ワンカバンバ川流域社会の諸相について論じた。そして、他地域と比べた際に浮かび上がってくる、ワンカバンバ川流域社会の独自性や多様性、あるいは他地域の神殿社会との共通性を示してきた。

形成期における時期ごとの変化、および特殊性をみてみると、ワンカバンバ川流域社会における変化とは、神殿を中心とした社会特性の変化である。そのなかでもとくに、ワンカバンバ川流域社会の変化においては、流域外部の社会との地域間交流が重要な役割を果たした。そこでは地域間交流は、単に物資や情報、イデオロギーを交換する機会をつくるだけではなく、交流にたずさわる人々の戦略に即して、交流によって獲得された物資や情報が儀礼に用いられることで、集団内の差異化を図ると同時に、交流を行う他の神殿との関係を築くことに大きく寄与した。つまり、地域間交流は、単に社会変化の外的要因として内部の変化を促すだけではなく、交流を通じて社会内部の変化をもたらし、それが再び地域間交流に影響を与えるという点において、社会変化の内的要因ともなりうるのである。その一方、交流を行う社会では、相手社会との互酬的関係のなかで交流が行われるものの、結果として地域間交流そのものと神殿の特性に変化がおこり、集団内に社会的差異が生み出される。このようにみると、形成期の社会動態とは、まさに上記の一連の動きのなかで進行したものであると考えられる。

地域間交流は、これまでも社会動態論において社会変化の主要因の一つ、もしくは変化の「刺激剤」とされるなど中心的なテーマではあった。しかしながら、本論の関心は、社会変化の主要因や刺激剤としての交流を論じることではない。重要なことは、形成期において、極めて多様なあり方を呈する交流の具体的様相を明らかにして、社会変化との相関関係について論じることである。そこで本論では、宗教的、経済的、政治的活動の中心であるとともに、社会的統合の核であり、地域間交流の中心でもあると考えられた神殿を対象として、議論を展開したのである。このなかで、神殿とは地域間交流を通じて獲得された情報や技術、物資の集積センターである。そして、集積された情報や技術、物資は、神殿の建設や空間配置、あるいは執り行われる儀礼において用いられ、集団の社会関係を構築した。その一方で、建設活動や儀礼を指揮し、集団内における社会的地位を正当化するために、リーダーやエリートは情報や物資の獲得を目的に、積極的に地域間交流に関わった。こうして、地域間交流と神殿で行われる諸活動、とくにリーダーやエリートの活動との間に相関関係が成立したのである。そのなかで、交換される情報や技術、物資だけでなく、輸送に利用される荷駄獣や地域間ルートの管理は、地域間交流を支える礎として、戦略的に重要な位置を占めるようになった。

このようにして、インガタンボにおける社会変化は、他地域と比しても明らかなように、地域間交流と密接に関与していた。そして、インガタンボは、地域間交流に積極的に関わることで急激な展開をみせた一方で、その動向にも大きく左右されてきたのである。

たとえば、形成期前期（ワンカバンバ期後半）には、ペルー北部の各地の神殿間に、土

器の製作に関した地域間交流がみとめられたが、ワンカバンバ川流域では、このような減少は確認されなかった。つまり、ワンカバンバ川流域社会では、ペルー北部地域とエクアドル南部地域における地域間交流の対象とならなかったのである。そのため、この時期には、地域間交流と社会変化の相互関係はみられず、それが逆に、周辺地域とは異なるワンカバンバ川流域独自の社会状況を生じさせることになった。

その一方で、形成期中期（ポマワカ期）に入ると、ワンカバンバ川流域社会では、ペルー北部地域や極北部地域と積極的な地域間交流を行うようになる。しかし、地域間交流は全ての地域に対して一様に行われていたわけではなく、神殿の形態、日用土器や精製土器の特徴や奢侈品の出土状況から認められるように、各地域との結びつきはそれぞれ異なっていた。また、地域間交流の様態も交換される物資によって様々であり、そのため、各地域の神殿との地域間交流は、個々の関係性に応じて実施された。このことからは、ペルー北部において、地域間交流を統合するような特定の社会は存在せず、各神殿がそれぞれの目的や需要に応じて交流を行っていたことが推測される。そして、インガタンボ出土土器や神殿建築にみられた極北部海岸と北部熱帯低地の社会との交流の密接さ、もしくは儀礼や奢侈品として利用される暖流系の貝にみられるエクアドル南部山地の社会との交流の重視が、同時期に他地域で展開した社会とは異なる、ワンカバンバ川流域社会の独自性を生み出した重要な要素となったのである。このようにして、ポマワカ期には、地域間交流と社会変化に、強い相関関係が認められるようになる。

続く形成期後期（インガタンボ期）になると、ワンカバンバ川流域における地域間交流の位置づけは質的に変化する。インガタンボでは神殿が大規模化するとともに、土器や金製品を伴う埋葬などから極北部海岸や北部熱帯低地だけでなく、北部山地や北部海岸との関係が示唆されるようになるのである。さらに、黒曜石や方ソーダ石といった遠隔地起源の物資も確認されるようになる。黒曜石の産地としては、ペルー南部山地以外に、ペルー北部山地からより地理的に近いエクアドルのキト周辺が知られているが、インガタンボで出土した黒曜石は、ペルー南部山地のものである。したがって、黒曜石の獲得に際しては、単純な距離以上に、社会的、宗教的、政治的関連が重視されたと考えられる[Burger 1984]。

こうした形成期中期からの変化を通じて、神殿は顕在化しはじめた階層にもとづくエリートのための交易センターとしての役割をも有するようになっていった。そして、繰り返される更新や儀礼は、エリートと一般成員の関係を明確化するだけでなく、既存の差異を再確認させる契機となった。このようにして、階層化の進展とエリートの活動を支える空間として、神殿の社会的位置づけが変化するとともに、神殿を中心として展開した地域間交流も変化した。そしてその結果、地域間交流と社会変化の相関関係には、形成期中期からの変質がみられたのである。

このような状況の背景には、この時期にペルー北部山地で成立したパコパンパ複合とクントゥル・ワシという二つの大規模神殿が関与していると考えられる。パコパンパ複合やクントゥル・ワシは、北部海岸からの影響を受けて成立したとされるが、その変化は神殿

や土器、埋葬といった物質文化面だけではなく、イデオロギー面を含めた社会全体の変化である。そのような変化が、ペルー北部の大規模神殿を中心にみられたとき、インガタンボも時間的なずれを伴いながら、大規模神殿を中心とした地域間交流のなかに組み込まれていったのである。ただし、インガタンボ社会は単に大規模神殿の影響下に変化を遂げたのではなく、そこにはこの状況を利用して大規模神殿の権威を取り込むことで、自らの地位を高めようとするインガタンボのエリートの社会的戦略が存在していた。そして、このような地域間交流に根差したインガタンボ社会の展開は、形成期後期後半になって、地域間ルートの変遷を伴う地域間交流の変化、および神殿の特性が変化することによって、成り立たなくなっていったのである。

以上のように、ワンカバンバ川流域社会は、少なくとも形成期中期と形成期後期前半において、ペルー北部の海岸部と山地、熱帯低地、あるいは山地間の交流の要衝としての役割を果たしていた。そのような地域間交流の結果として、ワンカバンバ川流域は、交流を持つ各地の中間的な性格を有することも想定された。しかし、実際にはインガタンボ、もしくはワンカバンバ川流域と各地域との結びつきは画一的ではない。そのため、他地域から均質的な影響を受けた単なる中間地帯としてではなく、ワンカバンバ川流域社会独自の展開が見出されたのである。また、繰り返し述べてきたように地域間の結びつきは、固定的なものではなく、流動的である。このため、特定の物質文化（日用土器や精製土器、奢侈品）ごとに様々な地域との交流があり、かつそれらは時期的に変遷した。これは、地域間交流によって関連した各社会が、個々の戦略や社会的背景に応じて、独自に各地との関係を構築した結果であると考えられる。

第 12 章：結論

本論の結論は以下の通りである。

第一に、インガタンボでは、神殿において継続的に実施される神殿更新と儀礼を通じて社会変化が生じた。上記の諸活動には、活動に関与する人々のイデオロギーや社会的認識、およびそれらをふまえた社会成員、とくに他の成員との差異化を図るリーダーの戦略が介在しており、神殿はその普及装置、あるいは体現の場となった。そのため、時期ごとにリーダーの特性や戦略が変化することで、神殿の社会的位置づけも変化し、協同性にもとづいた集団内の社会的紐帯を求めるものから、リーダー、ならびにエリートと他の成員との社会的差異を創出、維持するための契機や手段へと推移した。

第二に、神殿で行われる諸活動、およびそれらを指揮するリーダーやエリートの存在を正統化し、社会的秩序を維持していくためには、地域間交流を通じて常に新たな建築要素や奢侈品といったイデオロギーに関わる物資や情報、その製作技術を獲得、もしくは生み出していくことが必要となった。そのため、継続的な神殿更新や儀礼、生産活動を支えていくうえで、外部社会との地域間交流は、インガタンボ社会の戦略として最も重要な要素となった。

第三に、インガタンボをはじめとしたワンカバンバ川流域社会では、地域間交流網に組み込まれるとともに、突如として周辺地域の諸特徴を有した神殿の建設活動が活発化した。それと同時に、土器の利用や奢侈品の製作が開始され、神殿と居住域の空間分化も生じるなど急激な社会変化が生じた。また、地域間交流にもとづく神殿建築や土器などにみられる外部社会との共通性の増加は、ワンカバンバ川流域社会と外部社会とのイデオロギーや生産活動、技術体系における紐帯をもたらすため、地域間交流を一層促進させた。これらのことからは、ワンカバンバ川流域社会の変化に際して、神殿における諸活動と地域間交流との相互関連の重要性が認められた。こうした相関関係は、神殿の立地にも反映されており、ポマワカ期に併存した複数の神殿のうち、地域間ルートの結節点にあるインガタンボが流域内の社会統合の核となった。

第四に、形成期における地域間交流の様態や特性は一様ではない。ワンカバンバ川流域を含むペルー北部において、地域間交流が活性化し、荷駄獣であるラクダ科動物の利用が徐々に展開していくなかで、次第に地域間交流ルートは変化した。それを受けて、ルートの結節点であるインガタンボでは神殿における諸活動が活発化して、階層化の萌芽を含む社会的差異が生じるとともに、社会組織の変化がみられるようになった。また、インガタンボは、常にペルー北部における地域間交流における重要地であったが、地域間交流が質的に変化するに従い、周辺地域社会の動向に応じて、インガタンボのペルー北部社会における位置づけは、外部社会の影響を受けつつも主体的に変化した。そのため、地域間交流を介して、ペルー北部における他の社会と同様のイデオロギー、経済、技術的背景を有していても、ワンカバンバ川流域では独自の社会展開がみられた。

第五に、インガタンボやワンカバンバ川流域でみられた社会変化は、当該地域で独立的に生じたものでも、周辺地域社会の影響下で一元的に引き起こされたものではなく、おかれた状況に積極的に関与した在地の人々の能動的な対応と、所与の社会的状況、ならびに生態環境を利用した戦略の結果であった。

以上のように、ワンカバンバ川流域では、ワンカバンバ期より神殿更新が繰り返され、小規模神殿を中心とした社会統合がみられるが、神殿を核とした小集団内に明確な社会的差異は認められない。また、地域間交流が積極的に行われておらず、流域社会は「閉鎖的」状況にあったと考えられる。

これに対して、ポマワカ期になって地域間交流が活性化し、周辺社会におけるイデオロギーにもとづいた奢侈品の社会的需要に能動的に対応していくなかで、インガタンボやワンカバンバ流域社会を取り巻く状況は大きく変化する。そして、その状況を利用したリーダーの戦略を通じて、流域社会では以前よりも大規模な神殿が複数建設され、集団内の社会的差異が徐々に顕在化していった。こうした流域社会の変化は、上記の社会的諸状況と地域間ルートの変化、そして輸送システムの漸次的変化との相互関連のなかで生じたものである。つまり、ワンカバンバ川流域社会は、地域間交流に積極的に関与し、交流を通じて獲得した奢侈品を、神殿における諸活動に不可欠なものとして位置づけることで、急激な展開をみせたと考えられる。また、地域間交流の活性化を経て物質文化に顕著に表れるようになった外部社会との共通性の増加は、外部社会との紐帯を生み出し、地域間交流をさらに助長した。そのなかで、流域内に存在する地域間ルートの結節点であるインガタンボは、ペルー北部の地域間交流の中心の一つとなった。

続くインガタンボ期には、流域社会の活動がインガタンボに収斂して、インガタンボは流域社会の統合の核となった、そこでは、地域間交流を軸として神殿における諸活動が活発に展開され、社会的差異はより顕著なものとなっていった。しかしながら、この時期では、周辺地域社会、とくにペルー北部の大規模神殿とインガタンボとの関係性、およびその状況にもとづいたインガタンボのエリートの社会的戦略に変化がみられた。そのため、地域間交流や神殿の社会的位置づけは前時期から質的に変化し、神殿を中心とした流域社会の特性も変化することになったのである。

これまでに述べてきたように、本論は、ワンカバンバ川流域の社会動態を、当該地域固有のコンテクストを重視しつつ、流域内の社会動態と流域外部との地域間関係の動態を明らかにすることを通じて論じることで、神殿を中心とした社会の一つの展開のあり方を示したものである。その際、行為主体である人々の活動や戦略を、神殿を軸とした考古学データから明らかにしてきた。また、地域間交流と社会変化の相互関係、とくに多様な環境を超えた集団間の地域間交流が社会にもたらす諸状況を、実際に社会を動かした人々の主体的実践に力点をおいて捉えた。そして、議論においては常に、ワンカバンバ川流域を「フ

ロンティア」として、他地域とは異なる枠組みのなかで捉えるのではなく、むしろ交流の場として他地域との連続性のなかで捉えることを試みた。これは、一口に地域間交流といっても、各地の独立した神殿間の交流は多様であり、交流の対象となる情報や物質文化によって、その様態が異なりうるためである。地域間交流と社会変化の関係に関しては、先行研究においても多くの議論が交わされてきた。しかし、本論では、従来ほとんど実施されてこなかった地域間ルートの分析を通じて、各地の神殿相互の結びつきを示し、インガタンボ、ならびにワンカバンバ川流域が地域間交流の重要地となっていく様相を具体的に明らかにした。このように、地域間交流を重視した社会とその社会変化に関する事例研究というだけでなく、多元的に地域間交流を掘り下げて論じた点に、本論の社会動態論への最大の寄与が認められよう。

しかしながら、本論で取り上げた社会成員の行為主体性については、今後の議論の深化が不可欠である。なぜならば、本論では、神殿をめぐる活動に特化して論を展開したため、神殿を中心とした社会を主体的に動かしたリーダーに注目したが、リーダー以外の人々（一般成員）の主体的実践については考察できなかったためである。

また、本論で議論の根幹に据えたワンカバンバ川流域、あるいはその周辺地域、とくに北部熱帯低地と極北部海岸は、依然として調査が乏しい。そのため、基礎となる編年すら不明確な部分も多く、議論の発展には各地で詳細なデータを充実させる必要がある。また、地域間交流を考察する際に用いた地域間ルートの分析は、あくまで現状から考えられる仮説である。したがって、将来的に議論を精緻化し、形成期のアンデス社会の全体像について生産的で発展的な研究を行っていくためには、マクロとミクロ双方の視点をふまえたデータの充実が不可欠である。これらのことから、今後の課題としてあげられるのは、以下の 4 点である。

第一に、ワンカバンバ川流域で、インガタンボ遺跡以外の神殿遺跡を発掘し、流域の社会的状況をより明らかにすることで、インガタンボ以外の神殿に関わる人々の主体性、もしくはそれらとインガタンボとの関係を解明する。また、神殿以外の居住施設の発掘を通じて、リーダー以外の社会成員の主体的実践について論じるための基礎を築く。

第二に、ワンカバンバ川流域周辺地域を含むペルー北部の広範囲を対象とし、各地の河川や盆地単位で徹底的な遺跡分布調査を実施することで、神殿の分布状況などの基礎データを充実させる。

第三に、神殿の分布状況といった基礎データだけでなく、研究対象地域の生態環境、とくに植生の問題を GIS のルート分析に加味することで、議論の精緻化を図る。また、神殿以外の遺跡を含めた包括的なルート分析を実施する。

そして最後に、上記三つの調査・研究をふまえて、インガタンボでみられた現象が、同時期に交流を有した周辺諸社会のなかでどのように認められるのか、あるいは神殿をめぐる諸活動や地域間交流がどのように周辺諸社会、あるいはアンデス形成期社会の変化と関連しているのか、というより大きな問題へと論を展開する必要がある。

引用文献

Alva Meneses, Ignacio

2010 Los Complejos de Cerro Ventarrón y Collud-Zarpán: del Precerámico al Formativo en el valle de Lambayeque. *Boletín de Arqueología PUCP* 12: 97-118.

Alva, Walter

1986 *Las Salinas de Chao: Asentamiento Temprano en el Norte del Perú*. Materialien zur Allgemeinen und Vergleichenden Archäologie 34, Verlag C.H. Beck, München.

1988a Investigaciones en el Complejo Formativo con Arquitectura Monumental Purulén, Costa Norte del Perú. *Beiträge zur Allgemeinen und Vergleichenden Archäologie* 8: 283-300.

1988b Excavaciones en el Santauario del Templo Formativo Udima-Poro Poro en el Sierra Norte del Perú. *Beiträge zur Allgemeinen und Vergleichenden Archäologie* 8: 301-352.

1992 Orfebreria del Formativo. In: *Oro del Antiguo Perú*. Jose Antonio de Lavalle (ed.), pp. 17-116. Banco de Credito del Peru.

2008 Ventarrón, Collud-Zarpán: Centros Ceremoniales Primigenios en Lambayeque. *Naylamp* 111: 25-35.

荒田恵

2007 「クントゥル・ワシ神殿と道具・工芸品—第一テラスおよび南西テラス出土遺物の分析—」『先史アンデス社会の文明形成プロセス』、 平成 14-18 年度科学研究費補助金[基盤研究（S）]研究成果報告書、加藤泰建（編）、pp. 125-157。

Arellano López, A. Jorge

2002 Primeras Evidencias del Formativo Tardío en la Sierra Central del Ecuador. In: *Formativo Sudamericano, Una Revaluación.* Ledergerber-Crespo, Paulina (ed.), pp. 160-175. Abya-Yala, Quito.

Bandy, Matthew S.

2005 Trade and Social Power in the Southern Titicaca Basin Formative. In: *Foundations of Power in the Prehispanic Andes, Archaeological Papers of the American Anthropological Association, Number 14.* Kevin J., Vaughn, Dennis Ogburn, and Christina A. Conlee (eds.), pp. 91-111. American Anthropological Association.

Beck, Colleen M.

1990 Cross-Cutting Relationships: The Relative Dating of Ancient Roads on the North Coast of Peru. In: *Ancinet Road Networks and Settlement Hierarchies in the New World.* Charles D. Trombold (ed.), pp. 66-79, Cambridge University Press.

Bennett, Wendell

1948 The Peruvian Co-Tradition. In: *A Reappraisal of Peruvian Archaeology*. Wendell Bennett (ed.), pp. 1-7. Memoirs of the Society for American Archaeology 4. American Antiquity 13 (4).

Berenguer, José

2004 *Caravanas, Interacción y Cambio en el Desierto de Atacama*. Museo Chileno de Arte Precolombino, Santiago.

Billman, R. Brian

1996 *The Evolution of Prehistoric Political Organizations in the Moche Valley, Peru*, Ph.D. Dissertation, University of California, Santa Barbara.

1999a Settlement pattern research in the Americas: Past, present, and future. In: *Settlement Pattern Studies in the Americas*. Billman, R. Brian and Gary, M. Feinman (eds.), pp.1-8. Smithsonian Institution Press.

1999b Reconstructing Prehistoric Political Economies and Cycles of Political Power in the Moche Valley. In: *Settlement Pattern Studies in the Americas*. Billman, R. Brian and Gary, M. Feinman (eds.), pp.131-159. Smithsonian Institution Press.

Binford, Lewis R.

1962 Archaeology as Anthropology. *American Antiquity* 28 (2), pp. 217-225.

Binford, Sally R. and Lewis, R. Binford (eds.)

1968 *New Perspectives in Archaeology*. Aldine Publishing Company, Chicago.

Bird, Junius and John, Hyslop

1985 The Preceramic Excavations at the Huaca Prieta, Chicama Valley, Peru. American Museum of Natural History, New York.

Bischof, Henning

1975 El Machalilla temprano y algunos sitios cercanos a Valdivia. In: Estudio sobre la arqueología del Ecuador, Udo Oberem (ed.), pp. 39-62. Bonn: Bonner Amerikanistische Studien. BAS.

1982 La Fase Engoroy - Períodos, Cronología y Relaciones. In: *Primer Simposio de Correlaciones Antropologicas Andino - Mesoamericano*, *25-31 de Julio de 1971, Salinas-Ecuador*. Jorge G. Marcos and Presley p. 39-62 Norton (eds.), pp. 135-176. Escuela Tecnica de Arqueología, Guayaquil.

1999 Los Mates Tallados de Huaca Prieta ¿Evidencias de Arte Valdivia en el Arcaico Centroandino?. Boletín de Arqueológica PUCP 3: 85-119.

Bonavia, Duccio

1982 *Precerámico Peruano. Los Gavilanes. Mar, Desierto y Oásis en La Historia del Hombre*. Corporación Financiera de Desarrollo S.A. COFIDE and Instituto Arqueológico Alemán, Lima.

Bourget, Steve

1990 Caracoles sagrados en la iconografía Moche" *Gaceta Arqueológica Andina*.

Vol. V, N° 20, pp. 45-58.

Brennan, Curtiss T.

1978 *Investigations at Cerro Arena, Peru: Incipient Urbanism on the Peruvian North Coast,* Ph.D. Dissertation, University of Arizona.

1980 Cerro Arena: Early cultural complexity and nucleation in north coast Peru, *Journal of Field Archaeology* 7, pp. 1-22.

Bruhns, Karen Olsen

1989 Intercambio entre la Costa y la Sierra en el Formativo Tardío: Nuevas Evidencias del Azuay. In: *Relaciones Interculturales en el Área Ecuatorial del Pácifico durante la ëpoca Precolombina*. Bouchard, J.F. and M. Guinea (eds.), pp. 57-74, BAR International Series 503. British Archaeological Reports, Oxford.

2003 Social and Cultural Development in the Ecuadorian Highlands and Eastern Lowlands during the Formative. In: *Archaeology of Formative Ecuador*. Raymond, J. Scott and Richard L. Burger (eds.), pp.125-174. Dumbarton Oaks Research Library and Collection, Washington, D.C.

Brumfiel, Elizabeth M. and John, W. Fox (eds.)

1994 *Factional Competition and Political Development in the New World*. Cambridge University Press.

Brush, Stephen

1974 El Lugar del Hombre en el Ecosistema Andino. *Revista del Museo Nacional* 40: 277-299.

1977 *Mountain, Field and Family: The Economy and Human Ecology of an Andean Valley*. University of Pennsylvania Press, Philadelphia.

Burger, Richard L.

1978 *The Occupation of Chavín, Ancash, in the Initial Period and Early Horizon.* Ph.D. Dissertation. University of California.

1984 Archaeological Areas and Prehistoric Frontiers: The Case of Formative Peru and Ecuador. In: *Social and Economics Organization in the Prehispanic Andes.* Browman, David L., Richard L. Burger and Mario A. Rivera (eds.), pp.33-71. BAR International Series 194. British Archaeological Reports, Oxford.

1985 Concluding Remarks: Early Peruvian Civilization and Its Relation to the Chavin Horizon. In: *Early Ceremonial Architecture in the Andes*. Christopher Donnan (ed.), pp. 269-289. Dumberton Oaks Researchi Library and Collection.

1988 Unity and Heterogeneity within the Chavin Horizon, In: *Peruvian Prehistory; An Overview of Pre Inca and Inca Society*. Richard, W. Keating (ed.), pp. 99-104. Cambridge University Press.

1992 *Chavin and the Origins of Andean Civilization*. Thames and Hudson, London.

1993 The Chavin Horizon: Stylistic Chimera or Socioeconomic Metamorphosis? In: *Latin American Horizon: A Symposium at Dumbarton Oaks*. Donald Stephen

Rice (ed.), pp. 41-82. Dumbarton Oaks Research Library and Collection, Washington, D.C.

1998 *Excavaciones en Chavín de Huantar*. Pontificia Universidad Católica del Peru, Lima.

2003 Conclusions: Cultures of the Ecuadorian Formative in their Andean Context. In: *Archaeology of Formative Ecuador*. J. Scott Raymond and Richard L. Burger (eds.), pp.456-486. Dumbarton Oaks Research Library and Collection, Washington, D.C.

2008 Chavín de Huántar and Its Sphere of Influence. In: *Handbook of South American Archaeology*. Helaine Silverman and William H. Isbell (eds.), pp. 681-703. Springer.

2009a Los Fundamentos Social de la Arquitectura Monumental del Periodo Inicial en el Valle de Lurín. In: *Arqueología del Periodo Formativo en la Cuenca Baja de Lurín Vol. 1.* Richard L. Burger and Krzysztof, Makowski (eds.), pp. 17-36. Pontificia Universidad Católica del Perú, Fond Editorial, Lima.

2009b El Niño, la Civilización Andina Temprana y la Respuesta Humana: Algunas Reflexiones desde Manchay. In: *Arqueología del Periodo Formativo en la Cuenca Baja de Lurín Vol. 1.* Richard L. Burger and Krzysztof, Makowski (eds.), pp. 187-208. Pontificia Universidad Católica del Perú, Fond Editorial, Lima.

Burger, Rchard L. and Robert, B. Gordon

1998 Early Central Andean Metalworking from Mina Perdida, Peru. *Science* 281: 1108-1111.

Burger, Richard L. and Lucy, Salazar-Burger

1991 The Second Season of Investigations at the Initial Period Center of Cardal, Lurin Valley. *Journal of Field Archaeology* 18: 257-296.

2008 The Manchay Culture and the Coastal Inspiration for Highland Chavín Civilization. In: *Chavín Art, Architecture and Culture.* Williams J Conklin and Jeffrey Quilter (eds.), pp. 85-105. Cotsen Institute, Los Angeles.

2009a Investigaciones Arqueológicas en Mina Perdida, Valle de Lurín. In: *Arqueología del Periodo Formativo en la Cuenca Baja de Lurín Vol. 1.* Richard L. Burger and Krzysztof, Makowski (eds.), pp. 37-58. Pontificia Universidad Católica del Perú, Fond Editorial, Lima.

2009b La Segunda Temporada de Investigaciones en Cardal, Valle de Lurín (1987), In: *Arqueología del Periodo Formativo en la Cuenca Baja de Lurín Vol. 1.* Richard L. Burger and Krzysztof, Makowski (eds.), pp. 59-81. Pontificia Universidad Católica del Perú, Fond Editorial, Lima.

Burger, Richard L. and Michael, D. Glascock

2000 Locating the Quispisisa Obsidian Source in the Department of Ayacucho, Peru. Latin American Antiquity 5: 258-268.

2002 Tracking the Source of Quispisisa Obsidian from Huancavelica to Ayacucho. In: *Andean Archaeology I: Variations in Sociopolitical Organization*. William H. Isbell and Helaine silverman (eds.), pp.341-368. Kluwer Academic/Plenum, New York.

2009 Intercambio Prehistórico de Obsidiana a Larga Distancia en el Norte Peruano. *Revista del Museo de Arqueología e Historia* 11: 17-50.

Burger, Richard L. and Ramiro, Matos Mendieta

2002 Atalla: A Center on the Periphery of The Chavin Horizon. *Latin American Antiquity* 13 (2): 153-177.

Bushnell, Geoffrey

1951 *The Archaeology of the Santa Elena Peninsula in South-West Ecuador*. The Syndics of the Cambridge University.

Caldwell, Joseph R.

1964 Interaction Spheres in Prehistory. In: *Hopewellian Studies*, Joseph Caldwell and Robert Hall (eds.), pp. 133-143. Scientific Papers, No. 12, Illinois State Museum, Springfield.

Cárdenas Mercedes, Cirilo Huapaya and Jaime Deza

1991 *Arqueología del Macizo de Illescas, Sechura, Piura. Segundo Informe. Excavaciones en Bayóbar*. Pontificia Universidad Católica del Perú.

Church, Warren Brooks

1996 *Prehistoric Cultural Development and Interregional Interaction in the Tropical Montane Forests of Peru*. Ph.D. Dissertation, Yale University.

Church, Warren B. and Adriana, von Hagen

2008 Chachapoyas: Cultural Development at an Andean Cloud Forest Crossroad. In: Handbook of South American Archaeology, Helaine Silverman and William H. Isbell (eds.), pp. 903-926, Springer.

Collier, Donald and John, Murra

1943 Survey and Excavations in Southern Ecuador, *Anthropological Series 35.* Field Museum of Natural History, Chicago.

Contreras, Daniel A.

2007 Socio Political and Geomorphologic Dynamics at Chavin de Huantar, Peru. Ph. D dissertation. Department of Anthropological Sciences, Stanford University.

2010 Landscape and Environment: Insights from the Prehispanic Central Andes. *Journal of Archaeological Research* 18: 241-288.

2011 How far to Conchucos?: A GIS approach to assessing the implications of exotic materials at Chavín de Huántar. *World Archaeology* 43(3):380- 397.

Cummins, Tom

2003 Nature as Culture's Representation: A Change of Focus in Late Formative Iconography. In: *Archaeology of Formative Ecuador*, J. Scott Raymond and

Richard L. Burger (eds.), pp.423-464, Dumbarton Oaks Research Library and Collection, Washington, D.C.

D'Altroy, Terence N.

1992 *Provincial Power in Inka Empire*. Smithsonian Institution Press.

D'Altroy, Terence N. and Christine, A. Hastorf

2001 *Empire and Domestic Economy*. Kluwer Academic / Plenum Publishers, New York.

Damp, Jonathan E.

1988 *La Primera Ocupación Valdivia de Real Alto: Patrones Económicos, Arquitectónicos e Ideológicos*. Biblioteca Ecuatoriaca de Arqueología, 3. Escuela Superior Politécnica del Litoral, Guayaquil / Corporación Editora Nacional, Quito.

DeBoer, Warren R

2003 Ceramic Assemblage Variability in the Formative of Ecuador and Peru. In: *Archaeology of Formative Ecuador*, J. Scott Raymond and Richard L. Burger (eds.), pp.289-336. Dumbarton Oaks Research Library and Collection, Washington, D.C.

DeMarrais Elizabeth, Luis Jailme Castillo and Timothy Earle

1996 Ideology, Materialization, and Power Strategies. *Current Anthropology* 37 (1): 15-31.

Díaz, Amanda and Luc, Ortlieb

1993 El Fenómeno "El Niño" y los Moluscos de la Costa Peruana. *Bulletin de l'Institut Français d'Etudes Andines* 22 (1): 159-177.

Diessel, Wilhelm

2004 *Huntar, San Marcos, Chavin: Sitios Arqueologicos en la Sierra de Ancash*. Instituto Cultural RVNA, Lima.

Dillehay Tom D.

2009 Latin American Archaeology in History and Practice. In: *Handobook of Archaeological Theories*. Bentley Alexander R., Herbert D.G. Maschner and Chrisropher Chippindale (eds.), pp. 165-186. Altamira Press.

Dillehay Tom D., Herberto H. Eling Jr. and Jack Rossen

2005 Preceramic Irrigation Canals in the Peruvian Andes. *Proceedings of the National Academy of Science*, 102/47): 17241-17244.

Donnan, Christopher (ed.)

1985 *Early Ceremonial Architecture in the Andes*. Dumbarton Oaks Research Library and Collection, Washington, D.C.

Druc, Isabelle C.

1998 *Ceramic Production and Distribution in the Chavín Sphere of Influence (North-Central Andes)*, BAR International Series 731. British Archaeological Reports, Oxford.

2004 Ceramic Diversity in Chavín de Huantar, Peru. *Latin American Antiquity* 15 (3): 344-363.

Dunnel, Robert C.

1986 Methodological Issues in Americanist Artifact Classification. In: *Advances in Archaeological Method and Theory vol. 9*. Michael Schiffer (ed.), pp. 149-207. Elsevier Science and Technology Books..

Earle, Timothy

1997 How Chiefs Come to Power, The Political Economy in Prehistory. Stanford University Press, Stanford, California.

2002 Bronze Age Economics : The Beginnings of Political Economies. Westview Press, Boulder.

Elera, Carlos G. Arévalo

1986 *Investigaciones sobre Patrones Funerarios en el Sitio Formativo del Morro de Eten, Valle de Lambayeque, Costa Norte del Peru.* Memoria de Bachiller. Pontificia Universidad Católica del Perú.

1992 Arquitectura y Otras Manifestaciones Culturales del Sitio Formativo del Morro de Eten: Un Enfoque Preliminar. In: Estudios de Arqueologia Peruana. Duccio Bonavia (ed.), pp. 177-192. Fomciencias.

1993 El Complejo Cultural Cupisnique: Antecedentes y Desarrollo de su Ideología Religiosa. In El Mundo Ceremonial Andino (*Senri Ethnological Studies 37).* Luis Millones and Yoshio Onuki (eds.), pp. 229-257. Museo Nacional de Etnología, Osaka.

1997 Cupisnique y Salinar: Alugunas Reflexiones Preliminaries. In: *Archaeológica Peruana 2*. E. Bonnier and H. Bischof (eds.), pp. 176-201. Sociedad Arqueológica Peruano-Alemana, Reiss-Museum Mannheim.

1998 *The Puémape Site and the Cupisnique Culture: A Case Study on the Origins and the Development of Complex Society in the Central Andes, Perú*. Ph.D. Dissertation. University of Calgary.

Elera Carlos, José Pinilla and Victor Vasquez

1992 Bioindicadores Zoologicos de Eventos ENSO para el Formativo Medio y Tardío de Puemape-Peru. In: *Pachacamac*, Revista de Investigaciones del Museo de la Nación 1 (1): 9-19.

Espinosa, Reyes

2002 *La Gran Ruta Inca, El Cápaq Ñan*. Petróleos del Perú, Lima.

Estrada, Emilio

1958 *Las Culturas Pre-Clásicas, Formativas o Arcaicas del Ecuador*. Publicacion del Museo Víctor Emilio Estrada, Guayaquil.

Evans Clifford, Betty J. Meggers and Emilio Estrada

1959 *Cultura Valdivia*. Publicacion del Museo Víctor Emilio Estrada, Guayaquil.

Flannery, Kent V.

1972 The Cultural Evolution of Civilizations. *Annual Review of Ecology and Systematics*, 3:399-426.

Flores, Isabel Espinoza

1975 *Excavaciones en El Mirador, Pacopampa*. Seminario de Historia Rural Andina, Universidad Nacional de San Marcos.

2005 Excavaciones en El Mirador, Pacopampa. *Arqueología y Sociedad* 16: 125-140.

Ford, James A.

1969 *A Comparison of Formative Cultures in the Americas: Diffusion or the Psychic Unity of Man, Smithonian Contributions to Anthropology Vol II*. Smithonian Institution Press, Washington D.C.

Fuchs, Peter

1997 Nuevos datos arqueométricos para la historia de ocupación de Cerro Sechín, Periodo Lítico al Formativo. In: Archaeológica Peruana 2, E. Bonnier y H. Bischof (eds.), pp.145-161. Sociedad Arqueológica Peruano - Alemana /Reiss-Museum Mannheim, Heidelberg.

Fung Pineda, Rosa

1975 Excavaciones en Pacopampa, Cajamarca. *Revista del Museo Nacional* 41: 129-207.

2005 Excavaciones en Pacopampa, Cajamarca, Pacopampa. *Arqueología y Sociedad 16:* 63-122.

Ghezzi, Ivan

2006 Religious Warfare at Chanquillo, In: *Andean Archaeology III*, Williams, H. Isbell and Helaine Siliverman (eds.), pp.67-84. Springer, New York.

Ghezzi, Ivan and Clive, Ruggles

2008 Las Trece Torres de Chankillo. *Boletín de Arqueología PUCP* 10: 215-236.

Goldstein, Paul

2000 Exotic Goods and Every Day Chiefs: Long-Distance Exchange and Indigenous Sociopolitical Development in the South Central Andes. *Latin American Antiquity* 11 (4): 335-361.

Gomis, Dominique

2002 La Cerámica Formativa Tardía de la Sierra Austral del Ecuador. In: *Formativo Sudamericano, Una Revaluación.* Ledergerber-Crespo, Paulina (ed.), pp. 139-159. Abya-Yala, Quito.

Gorriti, Manuel

2000 Moluscos Marinos: Spondylus, Strombus y Conus. Su Significado en las Sociedades Andinas. *Boletín del Museo de Arqueología y Antropología* 11 (3). pp. 10-21.

Green, Stanton W. and Stephen, M. Perlman

1985 Frontiers, Boundaries, and Open Social Systems. In: *The Archaeology of*

Frontiers and Boundaries. Green, Stanton W. and Stephen M. Perlman(eds.), pp. 3-13. Academic Press, Orlando.

Grieder, Terence

2009a Pottery Comparison. In: Grieder, Terence et.al, pp. 84-96. *Art and Archaeology of Challuabamba, Ecuador*. University of Texas Press, Austin.

2009b Reconstructing Challuabamba's History. In: Grieder, Terence et.al, pp. 207-218. *Art and Archaeology of Challuabamba, Ecuador*. University of Texas Press, Austin.

Grieder Terence, James D. Farmer, David V. Hill, Peter W. Stahl and Douglas H. Ubelaker

2009 *Art and Archaeology of Challuabamba, Ecuador*. University of Texas Press, Austin.

Grieder Terence, Albelto Bueno M., C.Earle Smith,JR., and Roberto M.Malina

1988 *La Galgada, Peru: A Preceramic Culture in Tradition*. University of Texas Press, Austin.

Grobman Alexander, Duccio Bonavia, Tom Dillehay, Dolores Piperno and Irene Holst

2012 Preceramic maize from Paredones and Huaca Prieta, Peru. *Proceedings of the National Academy of Sciences of the United States of America* 109 (5): 1755-1759.

Guffroy, Jean

1989 Un Centro Ceremonial Formativo en el Alto Piura. *Bulletin de l'Institut Français d'Etudes Andines* 18 (2): 161-207.

1992 Las Tradiciones Culturales Formativas en el Alto Piura. In: *Estudios Arqueología Peruana*. Duccio Bonavia (ed.), pp. 99-122. Fomciencias.

1994 *Cerro Ñañanique: Un Établissement Monumental de la Période Formative, en Limite de Désert (Haut Piura, Pérou)*. Orstom Éditions, Paris.

2004 *Catamayo Precolombino: Investigaciones Arqueológicas en la Provincia de Loja (Ecuador)*. IRD Éditions, Paris.

2008 Cultural Boundaries and Crossings: Ecuador and Peru. In: *Handbook of South American Archaeology*. Silverman H. and W. Isabell (eds.), pp.889-902. Springer.

Guffroy Jean, Peter Kaulicke and Krzysztof Makowski

1989 La Prehistoria del Departamento de Piura: Estado de Los Conocimientos y Problematica. *Bulletin de l'Institut Français d'Etudes Andines* 18 (2): 117-142.

Haas, Jonathan

1987 Introduction. In: *The Origins and Development of the Andean State.* Jonathan Haas, Shelia Pozorski and Thomas Pozorski (eds.), pp. 1-4. Cambridge.

Hastorf, Christine A. and Sissel, Johannessen

1993 Pre-Hispanic Political Change and the Role of Maize in the Central Andes of

Peru. *American Anthropologist* 95 (1): 115-138.

Hirth, Kenneth G.

1978 Interregional Trade and the Formation of Prehistoric Gateway Communities. American Antiquity 43 (1): 35-46.

Hodder, Ian

1982 *Symbols in Action: Ethnoarchaeological Studies of Material Culture*. Cambridge University Press.

1986 *Reading the Past: Current Approaches to Interpretation in Archaeology*. Cambridge University Press.

Houcquenghem, Anne-Marie

1990 A Propósito del Artícilo: Un Centro Ceremonial Formative en el Alto Piura. *Bulletin de l'Institut Français d'Etudes Andines* 19 (2): 379-397.

1991 Frontera entre ´´Áreas Culturales´´ Nor y Centroandinas en los Valles y la Costa del Extremo Norte Peruano. *Bulletin de l'Institut Français d'Etudes Andines* 20 (2): 309-348.

1993 Rutas de Entrada del Mullu en el Extremo Norte del Perú. *Bulletin de l'Institut Français d'Etudes Andines* 22 (3): 701-719.

Hocquenghem Anne-Marie, Jaime Idrovo, Peter Kaulicke and Dominique Gomis

1993 Bases del Intercambio entre las Sociedades Norperuanas y Surecuatorianas : Unas Zona de Transición Entre 1500 A.C: y 600 D.C.. *Bulletin de l'Institut Français d'Etudes Andines* 22 (2): 443-466.

Hocquenghem, Anne-Marie and Peter, Kaulicke

1995 Estudio de una Colección de Cerámica de Yacila, Extremo Norte del Perú. *Bulletin de l'Institut Français d'Etudes Andines 24* (2): 213-243.

Hyslop, John

1984 *Inka Road System.* Academic Press.

Ikehara, Hugo and Koichiro, Shibata

2005 Festines e integración social en el Periodo Formaivo: nuevas evidencias de Cerro Blanco, valle bajo de Nepeña. *Boletín de Arqueología PUCP* 9: 123-160.

稲村哲也

1995 『リャマとアルパカ―アンデスの先住民社会と牧畜文化』、花伝社。

INGEMMET

1987 *Geología de los Cuadrángulos de Pomahuaca (12-e)*. Boletín No. 39, Serie A. Carta Geológica Nacional. Instituto Geológico Minero y Metalúrgico.

井口欣也

1996 「チャビン問題再考―中央アンデス地域形成期研究の新たな展開に向けて―」『リトルワールド研究報告』第 13 号、野外民族博物館リトルワールド。

1998 「神殿から国家へ　中央アンデス地帯の形成期社会における神殿と社会の展開について」『文化人類学の展開―南アメリカのフィールドから―』、大貫良夫・木村秀雄（編）、pp. 47-68、北樹出版。

2002a「クントゥル･ワシの土器のタイポロジー」『アンデス先史学の人類学的研究―クントゥル･ワシ遺跡の発掘』平成 11～13 年度科学研究費補助金[基盤研究(A)(2)]研究成果報告書、加藤泰建（編）、pp. 25-44。

2002b 「クントゥル･ワシにおける神殿建築の変遷過程」『アンデス先史学の人類学的研究―クントゥル・ワシ遺跡の発掘』平成 11～13 年度科学研究費補助金[基盤研究（A）（2）]研究成果報告書、加藤泰建（編）、pp. 45-81。

2007 「クントゥル・ワシ遺跡出土の土器資料」『先史アンデス社会の文明形成プロセス』, 平成 14 - 18 年度科学研究費補助金[基盤研究（S）]研究成果報告書、加藤泰建（編）、pp. 59-90。

Inokuchi, Kinya

1998 La Cerámica de Kuntur Wasi y el Problema Chavín. *Boletín de Arqueología PUCP* 2: 161-180.

2010 La Arquitectura de Kuntur Wasi. *Boletín de Arqueología PUCP* 12: 219-248.

井口欣也・大貫良夫・鶴見英成・松本雄一、アルバロ・ルイス

2002 「ペルー、ワヌコ盆地一般調査概要」『古代アメリカ』第 5 号: 69-88。

印東道子

2007 「序―生態資源と象徴化」『資源人類学 07 生態資源と象徴化』、印東道子（編）、pp.13-23、弘文堂。

Isbell, William H.

1997 *Mummies and Mortuay Monumens: A Postprocessual Prehistory of Central Andean Social Organization*. University Texas Press.

Izumi, Seiichi and Terada, Kazuo

1966 *Andes 3: Excavtions at Pechiche and Garbanzal, Tumbes Valley, Peru, 1960*. Kadokawa Publishing.

1972 Andes 4: Excavations at Kotosh, Peru, 1963 and 1966. University of Tokyo Press.

金田明大・津村宏臣・新納泉

2001 『考古学のための GIS 入門』、古今書院。

加藤泰建

1976 「ペルー、ラ・パンパの土器分類と型式論」『民族学研究』41(3): 12-30。

1993 「アンデス形成期の祭祀建築」『民族芸術』9: 37-48、講談社。

1998 「アンデス文明の形成」『文化人類学の展開―南アメリカのフィールドから―』、大貫良夫・木村秀雄（編）、pp. 27-46、北樹出版。

2007 「先史アンデスの文明形成プロセス研究とクントゥル・ワシ遺跡データベース」『先史アンデス社会の文明形成プロセス』、平成 14-18 年度科学研究費補助金[基盤研究（S）]研究成果報告書、pp. 1-20。

2010 「大神殿の出現と変容するアンデス社会」『古代アンデス　神殿から始まる文明』、大貫良夫・加藤泰建・関雄二（編）、pp. 105-152、朝日新聞出版。

加藤泰建（編）

2007 『先史アンデス社会の文明形成プロセス』、平成 14-18 年度科学研究費補助金[基

盤研究（S）]研究成果報告書。

加藤泰建・井口欣也

1998 「コンドルの館」『文明の創造力—古代アンデスの神殿と社会』、加藤泰建・関雄二（編）、pp. 163-224、角川書店。

加藤泰建・関雄二（編）

1998 『文明の創造力—古代アンデスの神殿と社会』角川書店。

Kauffmann Doig, Federico

1991 *Introducción al Perú Antiguo, Una Nueva Perspectiva*. Kompaktos, Lima.

Kaulicke, Peter

1975 *Pandanche: Un Caso del Formativo en los Andes de Cajamarca*. Seminario de Historia Rural Andina, Lima.

1998 El Periodo Formativo de Piura. *Boletín de Arqueología PUCP* 2: 19-36.

2005a Pandanche: Un Caso del Formativo en los Andes de Cajamarca. *Arqueología y Sociedad* 16: 141-180.

2005b El Formativo de Pacopampa: Un Ensayo de Interpretación. *Arqueología y Sociedad* 16: 193-214.

2010 Las Cronología del Formativo: 50 años de Investigaciones Japonesas en Perspectiva. Pontificia Universidad Católica del Perú, Fond Editorial.

Kembel, Silvia Rodriguez

2001 *Architectural Sequence and Chronology at Chavín de Huantar, Peru*. Ph.D. Dissertation. Stanford University.

2008 The Architecture at the Monumental Center of Chavín de Huántar: Sequence, Transformations and Chronology. In: *Chavín Art, Architecture and Culture*, Williams J Conklin and Jeffrey Quilter (eds.), pp. 35-81. Cotsen Institute, Los Angeles.

Kembel, Silvia Rodriguez and John, Rick W.

2004 Building Authority at Chavín de Huántar: Models of Social Organization and Development in the Inicial Period and Early Horizon. In: *Andean Archaeology*, Helaine Silverman (ed.), pp. 51-76. Blackwell Studies in Global Archaeology. Blackwell.

Kroeber, Alfred L.

1944 *Peruvian Archaeology in 1942.* Viking Fund Publications in Anthropology Number 4, New York.

Lannning, Edward P.

1963 A Ceramic sequence for the Piura and Chira Coast, North Peru. *University of California Publications in American Archaeology and Ethnology* 46 (2): 135-284.

Larco, Elera

1941 *Los Cupisuniques*. Casa Editora " La Crónica" y " Variedades" S. A. Ltda, Lima.

Lathrap, Donald D.
1970 *The Upper Amazon*. Praeger, New York.
Lathrap Donald W., Donald Collier, and Chandra Helen
1975 *Andent Ecuador: Culture, Clay and Creativity, 3000-300 B.C.*, Field Museum of Natural History, Chicago.
Lightfoot, Kent G. and Antoinette, Matinez
1995 Frontiers and Boundaries in Archaeological Perspective. *Annual Review of Anthropology* 24: 471-492.
Lippi, Ronald D
1998 *Una Exploración Arqueológia del Pichincha Occidental, Ecuador*. Museo Jacinto Jijon y Caamaño, Consejo Provincial de Pichincha, Quito.
2003 Appendix B: Formative Period Chronology for the Northern and Central Highlands of Ecuador. In: *Archaeology of Formative Ecuador*. J. Scott Raymond and Richard L. Burger (eds.), pp.529-537. Dumbarton Oaks Research Library and Collection, Washington, D.C.
Lothrop, Samuel K.
1941 Gold Ornament of Chavin Style from Chongoyape, Peru. *American Antiquity* 3：250-262.
ルンブレラス・ルイス
1977 『アンデス文明―石器からインカ帝国まで―』増田義郎訳、岩波書店。
Lumbreras, Luis G.
1993 *Chavín de Huántar: Excavaciones en la Galería de las Ofrendas.* Materialien zur Allgemeinen und Vergleichenden Archäologie. Philipp von Zabern.
Malaver Pizarro, Manuel Enrique
2001 *Arquitectura Monumental Formativa del Sitio Ingatambo, Valle del Río Huancabamba, Provincia de Jaén*. Proyecto de Investigación para Optar el Título de Licenciado en Arqueología. Universidad Nacional de Trujillo.
Maldonado, Elena (ed.)
1992 *Arqueología de Cerro Sechin. Tomo I: Arquitectura*. Pontificia Universidad Catolica del Peru, Fundación Volkswagenwerk-Alemania.
MacNeish Richard S., Thomas C. Patterson and David L. Browman
1975 *The Central Peruvian Prehistoric Interaction Sphere*. Papers of The Robert S.Peabody Foundation for Archaeology. Vol. 7. Andover, Massachusetts.
マン・マイケル
2002 『ソーシャルパワー：社会的な〈力〉の世界史Ⅰ　先史からヨーロッパ文明の形成へ』、森本醇・君塚直隆訳、 NTT 出版。
Marcos, Jorge G.
1988 *Real Alto: La Historia de un Centro Ceremonial Valdivia*. Biblioteca Ecuatoriana de Arqueología 4 y 5. Escuela Superior Politécnica del Litoral / Corporación Editora Nacional, Guayaquil.

Marcos Jorge G., Aurelio Álvarez Pérz, and Giorgio Spinolo

2002 La Producción durante el Formativo Temprano: El Desarrollo Agrícola Artesanal y el Intercambio de Exóticos en Real Alto. In: *Formativo Sudamericano, Una Revaluación.* Ledergerber-Crespo, Paulina (ed.), pp. 97-113. Abya-Yala, Quito.

Macneish Richard S., Thomas C. Patterson and David L. Browman

1975 *The Central Peruvian Prehistoric Interaction Sphere*. Papers of The Robert S.Peabody Foundation for Archaeology. Vol. 7. Andover, Massachusetts.

Martin, J. Alexander

2001 *The Dynamics of Pre-Columbian Spondylus Trade Across The South American Central Pacific Coast*. A Thesis Submitted to the Faculty of The Dorothy F. Schmidt College of Arts and Letters in Partial Fulfillment of the Requirement for the Degree of Master of Arts. Florida Atlantic University, Boca Raton.

松本雄一

2009 「カンパナユック・ルミとチャビン問題-チャビン相互作用圏の周縁からの視点」『古代アメリカ』12: 65-94。

Meggers Betty J., Clifford Evans and Emilio Estrada

1965 *The Farly Formative Period of Costal Ecuador: The Valdivia and Machalilla Phase*. Smithsonian Contributions to Anthropology 1. Smithsonian Institution Press, Washington D.C..

Mesía, Christian

2007 *Intrasite Spatial Organization at Chavin de Huantar during the Andean Formative: Three Dimensional Modeling, Stratigraphy and Ceramics*. Ph.D. Dissertation. Department of Anthropological Sciences, Stanford University.

Miasta Gutierrez, Jaime

1979 *El Alto Amazonas, Arqueología de Jaén y San Ignacio, Perú.* Universidad Nacional Mayor de San Marcos, Seminario de Historia Rural Andina.

Miller, George R. and Anne, L. Gill

1990 Zooarchaeology at Pirincay, a Formative Period Site in Highland Ecuador. *Journal of Field Archaeology* 17(1):49 -68.

Miller, George R. and Richard, L. Burger

1995 Our Father the Cayman, our dinner the Llama: Animal Utilization at Chavin de Huantar, Peru. *American Antiquity* 60(3), 421-458.

2000 Chárki at Chavín: Ethnographic Models and Archaeological Data. *American Antiquity* 65 (3): 573-576.

Moore, Jerry D.

1996 *Architecture and Power in the Ancient Andes: The Archaeology of Public Buildings*. Cambridge University Press.

2005 *Cultural Landscape in the Ancient Andes: Archaeologies of Place*. University

Press of Florida, Gainesville.

2010 Architecture, Settlement, and Formative Developments in the Equatorial Andes: New Discoveries in the Department of Tumbes, Peru. *Latin American Antiquity* 21 (2): 147-172.

Morales, Daniel

1977 *Seminario Arqueológico Numero 1*. Universidad Nacional Mayor de San Marcos, Seminario de Historia Rural Andina.

1980 *El Díos Felino en Pacopampa*. Universidad Nacional Mayor de San Marcos, Seminario de Historia Rural Andina.

1998 Investigaciones Arqueológicas en Pacopampa, Departamento de Cajamrca. *Boletín de Arqueología PUCP* 2：113-126.

2005 El Dios Felino en Pacopampa, *Arqueología y Sociedad* 16: 215-290.

Moseley, Michael

1975 The Maritime Foundations of Andean Civilization. Cummings Publishing Company, Mento Park, California.

Mosely, Michael and Feldman, Robert

1982 Vivir con crisis: Percepción humana de proceso y tiempo. *Revista del Museo Nacional* 46: 267-287. Lima.

Murra, J. V.

1975 *Formaciones Económicas y Políticas del Mundo Andino*. Instituto de Estudios Peruanos, Lima, Perú.

1985 "El Archipélago Vertical", Revisited. *Andean Ecology and Civilization*. Syozo Masuda, Izumi Shimada and Craig Morris (eds.), pp. 103-140. Univesity of Tokyo Press.

西澤弘恵

2007 「クントゥル・ワシ遺跡出土の遺物資料—石製品、骨・貝製品、土製品、金属製品—」『先史アンデス社会の文明形成プロセス』平成 14 - 18 年度科学研究費補助金[基盤研究（S）]研究成果報告書、加藤泰建（編）、pp. 91-123。

Olivera, Quirino

1993 *El Formativo en Tomependa Cuenca Inferior del Chinchipe*. Proyecto de Investigacion para Optar el Título de Licenciado en Arqueologia. Universidad Nacional de Trujillo.

1998 Evidencias Arqueológicas del Periodo Formativo en la Cuenca Baja del Río Utcubamba y Chinchipe. *Boletín de Arqueología PUCP* 2: 105-112.

2008 Manifestaciones Arqueológicas Tempranas en el Alto Amazonas. *Amazonía Peruana* 31: 303-322.

大貫良夫

1989 「ペルー北高地カハマルカ盆地の形成期文化」『東京大学教養学部人文科学科紀要・文化人類学研究報告』5：145-255。

1992 「中央アンデス先史時代の環境と文化の相互関係のプロセス」『東京大学教養学

部人文科学科紀要・文化人類学研究報告』6：1-46。

1995 「アメリカ大陸の文化」『モンゴロイドの地球』、大貫良夫（編）、pp. 39-116。東京大学出版会。

1998 「交差した手の神殿」『文明の創造力―古代アンデスの神殿と社会』、加藤泰建・関雄二（編） 、pp. 43-94、角川書店。

Onuki, Yoshio

1993 Las Actividados Ceremoniales Tempranas en la Cuenca del Alto Huallaga y Algunos Problemas Generales. In: *El Mundo Ceremonial Andino (Ethnological Studies 37)*. Luis Millones y Yoshio Onuki (eds.), pp. 69-96. National Museum of Ethnology, Osaka.

Onuki, Yoshio (ed.)

1995 *Kuntur Wasi y Cerro Blanco, Dos sitios del Formativo en el Norte del Perú*. Hokusen-sha.

大貫良夫・加藤泰建・関雄二（編）

2010 『古代アンデス　神殿から始まる文明』、朝日新聞出版。

大貫良夫・藤井龍彦

1974 「ラ・パンパの発掘」『東京大学教養学部人文科学科紀要・文化人類学研究報告 2：45-84。

Orton Clive, Paul Tyers and Alan Vince

1993 *Pottery in Archaeology*. Cambridge University Press.

Parker, Bradley J.

2006 Toward an Understanding of Borderland Processes. *American Antiquity* 71 (1): 77-100.

Parker, Bradley J. and Lars, Rodseth (eds.)

2005 *Untaming the Frontier in Anthropology, Archaeology, and History*. University of Arizona Press.

Polia Meconi, Mario

1995 *Los Guayacundos Ayahuacas: Una Arqueología Desconocida*. Concejo Municipal de Ayabaca, Pontificia Universidad Católica del Perú, Lima.

Porras, Pedro

1982 *Arqueología de Quito: I fase Cotocollao. Centro de Investigaciones Arqueológicas*, Pontificia Universidad Católica del Ecuador, Quito.

1987 *Investigaciones Arqueológicas a las Faldas del Sangay*, Provincia Morona Santiago. Artes Gráficas Señal, Quito.

Pozorski, Shelia

1976 *Prehistoric Subsistence Patterns and Site Economics in the Moche Valley, Peru*. Ph.D. Dissertation. University of Texas.

1979 Prehistoric Diet and Subsistence of the Moche Valley, Peru. *World Archaeology* 11 (2): 163-184.

Pozorski, Shelia and Thomas, Pozorski

1979 An Early Subsistence Exchange System in the Moche Valley, Peru. *Journal of Field Archaeology* 6 (4): 413-432.

1987 Early Settlement and Subsistence in the Casma Valley, Peru. University of Iowa Press.

1992 Early Civilization in the Casma Valley, Peru. *Antiquity* 66: 845-870.

2002 The Sechín Alto Complex and Its Place within Casma Valley Initial Period Development. In: *Andean Archaeology I: Variations in Sociopolitical Organization.* William H. Isbell and Helaine Silverman (eds.), pp.21-51. Kluwer Academic/Plenum, New York.

2008 Early Cultural Complexity on the Coast of Peru. In: *Handbook of South American Archaeology*. Helaine Silverman and William H. Isbell (eds.), pp. 607-631, Springer.

Pozorski, Thomas G.

1980 The Early Horizon Site of Huaca de los Reyes: Societal Implications. *American Antiquity* 45 (1): 100 - 110.

Price, Douglas T. and Gary, Feinman (eds.)

1995 *Foundations of Social Inequality*. Plenum Press.

Pulgar Vidal, Javier

1987 *Geografía del Perú：Las Ocho Regiones Naturales (Novena Edición).* PEISA, Lima, Perú.

Quilter, Jeffrey

1989 *Life and Death at Paloma: Society and Mortuary Practices in a Preceramic Peruvian Village*. University of Iowa Press, Iowa City.

Ravines, Rogger

1983 *Inventario de Monumentos Arqueológicas del Perú, Zona Norte (Primera Aproximacion)*. Instituto Nacional de Cultura, Lima.

1988 Colán, Nuevas Evidencias Arqueológicas. *Revista del Museo Nacional* 68: 55-118.

2008 A cerca de la Arqueología de Piura. *Boletin de Lima XXX* 154: 31-150.

Raymond, J. Scott

2003 Appendix D: Formative Period Chronology for the Southern Highlands of Ecuador. In: *Archaeology of Formative Ecuador*. J. Scott Raymond and Richard L. Burger (eds.), pp. 547-551. Dumbarton Oaks Research Library and Collection, Washington, D.C.

Raymond, J. Scott, and Richard, L. Burger (eds.)

2003 *Archaeology of Formative Ecuador: a Symposium at Dumbarton Oaks, 7 and 8 October 1995*. Dumbarton Oaks Research Library and Collection.

Renfrew, Coloin

1975 Trade as Action at Distance : Question of Integration and Communication. In:

Ancient Civilization and Trade. Jeremy A. Sabloff and C.C. Lamberg-Karlovsky (eds.), pp. 3-54. University of New Mexico Press.

1982 Socio-Economic Change in Ranked Societies. In: *Ranking, Resource and Exchange: Aspects of the Archaeologi of Early European Society.* Renfrew, Colin and Stephen Shennan (eds.), pp. 1-8. Cambridge University Press.

1984 Trade as action at a distance. In: *Approach to Social Archaeology*. Renfrew, Colin (ed.), pp. 86-134. Cambridge University Press.

Renfrew, Colin. and John, F. Cherry

1986 *Peer Polity Interaction and Socio-Political Change*. Cambridge University Press.

レンフルー・コリン、ポール・バーン

2007 『考古学―理論・方法・実践―』、池田裕・常木晃・三宅裕・松本建速・前田修訳、東洋書林。

Rice, Prudence

1987 Pottery Analysis: A Sourcebook. University of Chicago Press.

Richardson III James B., McConaughy Mark A. and Heaps De Peña Allison

1990 The Northern Frontier of the Kingdom of Chimor: The Piura, Chira, and Tumbez Valley. In: *The Northern Dynasties Kinship and Statecraft in Chimor*. Michael E. Moseley and Alana Cordy-Collins (eds.,), pp. 419-445. Dumbarton Oaks Reseach Library and Collection, Washington D.C.

Rick, John

2005 The Evolution of Authority and Power at Chavin de Huantar, Peru. In: *Foundations of Power in the Prehispanic Andes*, Archaeological Papers of the American Anthropological Association 14. Kevin J.Vaughn, Dennis Ogburn, and Christina A. Conlee (eds.), pp. 71-89. American Anthropological Association.

2008 Context, Construction, and Ritual in the Development of Authority at Chavín de Huántar. In: *Chavín Art, Architecture and Culture*. Williams J Conklin and Jeffrey Quilter (eds.), pp. 3-34. Cotsen Institute, Los Angeles.

Rojas Ponce, Pedro.

1985 La Huaca Huayurco, Jaén. In: *Historia de Cajamarca I: Arqueología*. Rogger Ravines (eds.), pp.181-186. Instituto Nacional de Cultura-Cajamarca.

Rosas, Hermilio La Noire and Ruth, Shady Solís

1970 *Pacopampa: Un Centro Formativo en la Sierra, Nor-Peruana*. Universidad Nacional Mayor de San Marcos, Seminario de Historia Rural Andina.

2005 Pacopampa. Un Centro Formativo en la Sierra Nor-Peruana. *Arqueología y Sociedad* 16: 11-62.

Rouse, Irving

1960 The Classification of Artifacts in Archaeology. *American Antiquity* 25 (3), pp. 313-323.

Rowe, John H.

1967 Form and Meaning in Chavín Art. In: *Peruvian Archaeology, Selected Readings*, John H. Rowe and Dorothy Menzel (eds.), pp. 72-103. Peek Publication, California.

Rowlands, Michael

1987 Centre and Periphery: A Review of a Concept. In: *Centre and Periphery in the Ancient World*. Rowlands, Michael, Mogens Larsen, and Kristian Kristiansen (eds), pp. 1- 11. Cambridge University Press.

坂井正人・清水正明

2002 「クントゥル・ワシ神殿における石器と石材—海岸との交流と疎遠、石器工房をめぐって—」『アンデス先史学の人類学的研究—クントゥル・ワシ遺跡の発掘』平成11～13年度科学研究費補助金[基盤研究(A)(2)]研究成果報告書、加藤泰建(編) pp. 175-190。

Salazar, Burger

2009 Escaleras al cielo: altares, rituales y ancestros en el sitio arqueológico de Cardal. In: *Arqueología del Periodo Formativo en la Cuenca Baja de Lurín Vol. 1.* Richard L. Burger and Krzysztof, Makowski (eds.), pp. 83-94. Pontificia Universidad Católica del Perú, Fond Editorial, Lima.

Sandweiss, Dan

1986 The beach ridges at Santa, Peru: El Niño, uplift, and prehistory. *Geoarchaeology* 1, 17-28.

Santillana, Julián I

1975 *Prospección Arqueológica en Pacopampa*. Universidad Nacional Mayor de San Marcos, Seminario de Historia Rural Andina.

2005 Prospección en el Sitio Arqueológico de Pacopampa. *Arqueología y Sociedad* 16: 181-192.

関雄二

1990 「鳥・蛇・ジャガー - 中央アンデス北部高地の形成期における動物表象 - 」『民族文化の世界（上)』(大林太良教授退官記念論集）pp.508-533、小学館。

1995 「政治的な作物としてのトウモロコシ：アンデス形成期の食糧基盤を探る」『文明学原論』、古代オリエント博物館（編)、pp. 55 - 78、山川出版社。

1997 『アンデスの考古学』、同成社。

1998a 「形成期時代の終焉」『文明の創造力—古代アンデスの神殿と社会』、加藤泰建・関雄二（編） 、pp. 225-266、角川書店。

1998b 「文明の想像力」『文明の創造力—古代アンデスの神殿と社会』、加藤泰建・関雄二（編） 、pp. 297-311、角川書店。

2003 「第4部：古代アンデス」『古代王権の誕生 II 』、初期王権研究委員会（編)、pp.207 - 265、角川書店。

2006 『古代アンデス権力の考古学』、京都大学学術出版会。

2007 「ジャガイモとトウモロコシ」『資源人類学 07　生態資源と象徴化』、

印東道子（編）、pp.209-244、弘文堂。
2008 「古代アンデス社会におけるエリートの誕生と工芸品生産」『國學院雑誌』109(11)：165-183。
2010 「形成期社会における権力の生成」『古代アンデス　神殿から始まる文明』、大貫良夫・加藤泰建・関雄二（編）、pp. 153-202、朝日新聞出版。

Seki, Yuji
1997 Excavaciones en el Sitio la Bomba, Valle Medio de Jequetepeque, Cajamarca. *Boletín de Arqueología PUCP* 1: 115-136.
1998 El Period Formativo en el Valle de Cajamarca. *Boletín de Arqueología PUCP* 2: 147-160.

関雄二・青山和夫
2005 『岩波 アメリカ大陸古代文明事典』、岩波書店。

関雄二・坂井正人
1998 「聖なる丘」『文明の創造力―古代アンデスの神殿と社会』、加藤泰建・関雄二（編）、pp. 95-162、角川書店。

Seki Yuji, Juan Pablo Villanueva, Masato Sakai, Diana Alemán, Mauro Ordónez, Walter Tosso, Aracely Espinoza, Kinya Inokuchi and Daniel Morales
2010 Nuevas Evidencias del Sitio Arqueológico de Pacopampa, en la Sierra norte del Perú. *Boletín de Arqueología PUCP* 12: 69-96.

Seki Yuji, Walter Tosso, Juan Pablo Villanueva and Kinya Inokuchi
2006 Proyecto Arqueológico Pacopampa 05: Avances y Correlaciones Regionales. Arqueología y Sociedad 17: 149-177.

関雄二・米田穣
2004 「ペルー北高地における食性の復元―炭素・窒素同位体分析による考察―」『国立民族学博物館研究報告』28(4)：515－537。

Shady, Ruth Solís
1973 *La Arqueología de la Cuenca Inferior del Utcubamba*. Ph.D. Dissertation. Universidad Nacional Mayor de San Marcos.
1974 Investigaciones Arqueológicas en la Cuenca del Utcubamba, Amazonas. *Artículo Reproducido de Las Actas del XLI Congreso Internacional de Americanistas, Vol 3. México*: 579-589.
1987 Tradición y Cambio en las Sociedades Formativas de Bagua, Amazonias, Perú. *Revista Andina* 5: 457-487.
1992 Sociedades del Nororiente Peruano durante el Formativo. *Pachacamac* Revista de Investigaciones del Museo de la Nación 1 (1): 21-47.
1997 *La Ciudad Sagrada de Caral-Supe en los Albores de la Civilizació en el Perú*. Universidad Nacional Mayor de San Marcos, Perú.
2000 Susteno Socioeconómico de la Sociedad de Caral-Supe en los Orígenes de la Civilización en el Perú, *Arqueología y Sosiedad* 13: 49-66.
2001 *La Ciudad Sagrada de Caral-Supe y Los Orígenes de la Civilización Andina*.

Museo de Arqueología y Antropología, Universidad Nacional Mayor de San Marcos, Perú.

2002 Sociedades Formativas de Bagua-Jaén y sus Relaciones Andinas y Amazónicas. In: *Formativo Sudamericano, Una Revaluación.* Ledergerber - Crespo, Paulina (ed.), pp. 201-211, Abya-Yala, Quito.

2003 *Caral Supe: La Civilización más Antigua de América*. Instituto Nacional de Cultura. Proyecto Especial Arqueológico Caral-Supe, Lima.

2004 *Caral: The City of Sacred Fire/La Ciudad del Fuego Sagrado*. Interbank, Lima.

2008 America's First City? The Case of Latin Archaic Caral, In: *Andean Archaeology III*: North and South. William H. Isbell and Helaine Silverman (eds.), pp.28-66. Springer.

Shady, Ruth and Hermilio, Rosas

1979 El Complejo Bagua y El Sistema de Establecimientos durante el Formativo en la Sierra Norte del Perú. *Ñawpa Pacha* 17: 109-154.

1982 Algunas Consideraciones sobre las Relaciones de Bagua con Otros Centros Formativos del Area Andina. In: *Primer Simposio de Correlaciones Antropologicas Andino-Mesoamericano, 25-31 de Julio de 1971, Salinas-Ecuador*, Jorge G. Marcos and Presley Norton (eds.), pp. 383-397. Escuela Tecnica de Arqueologia, Guayaquil.

1987 Tradición y Cambio en las Sociedades Formativas de Bagua, Amazonas, Perú, *Revista Andina* 2: 457-487.

Shanks, Michael and Christopher, Tilley

1987 *Social Theory and Arhcaeology*, Polity Press.

Shibata, Koichiro

2004 Nueva cronología tentativa del Período Formativo: Aproximación a la arquitectura ceremonial. In: *Desarrollo Arqueológico Costa Norte del Perú – Tomo I*. L. Valle (ed.), pp.79-98- Ediciones SIAN. Trujillo.

芝田幸一郎

2011 『ペルー北部中央海岸ネペーニャ谷からみたアンデス形成期社会の競合モデル - 神殿、集う人々、旅する指導者-』。東京大学大学院提出博士論文。

Shimada Izumi, Carlos G Elera and Melody J.Shimada

1982 Excavaciones Efectuadas en el Centro Ceremonial de Huaca Lucia-Cholope del Horizonte Temprano, Batan Grande, Costa de Perú: 1979-81. Arqueológicas 19: 109-210.

Shimada Izumi, Carlos G. Elera, Víctor Chang, Héctor Neff, Michael Grascock, Ursel Wagner and A. M. Wippern

1994 Hornos y producción de cerámica durante el período formativo en Batangrande , Costa Norte del Perú. In: *Tecnología y Organización de la Producción de Cerámica Prehispánica en los Andes*. Izumi Shimada (ed.), pp.

67-120. Fondo Editorial de la PUCP, Perú.

Shimada Izumi, Crystal Schaaf, Loniie G. Thompson, Ellen Mosley Thompson and R. Byrd

1991 Implicaciones culturales de una gran sequía del siglo d.C en los Andes peruanos. *Boletín de Lima* 77: 33-56. Lima.

Shimada, Melody and Shimada, Izumi

1985 Prehistoric Llama Breeding and Herding on the North Coast of Peru. *American Antiquity* 50 (1): 3-26.

清水正明・加藤泰建・清水マリナ

2007 「クントゥル・ワシ遺跡より出土したソーダライト製品の原産地同定」『先史アンデス社会の文明形成プロセス』平成 14-18 年度科学研究費補助金[基盤研究(S)]研究成果報告書、加藤泰建（編)、pp. 159-168。

Staller, John Edward

2001 The Jelí Phase Complex at La Emerenciana, a Late Valdivia Site in Southern El Oro Province, Ecuador, *Andean Past* 6: 117-174.

2008 An Introduction to Pre-Columbian Landscapes of Creation and Origen. In: *Pre-Columbian Landscapes of Creation and Origin*. Staller, John Edward (ed.), pp. 1-10. Springer, New York.

Staller, John Edward (ed.)

2008 *Pre-Columbian Landscapes of Creation and Origin*. Springer, New York.

Stanish, Charles

Steadman, Lee Hyde

1995 Excavations at Camata: An Early Ceramic Chronology for the Western Titicaca Basin, Peru. Ph.D. Dissertation. University of California, Barkley.

Stein, Gil

1998 World system theory and alternative modes of interaction in the Archaeology of Culture Contact. In: *Studies in Culture Contact: Interaction, Culture Change and Archaeology.* J. G. Cusick, pp. 220-255. Center for Archaeological Investigations, Occasional Paper No.25. Southern Illinois University Press, Carbondale.

2002 From passive periphery to active agents: Emerging perspectives in the archaeology of interregional interaction. *American Anthropologist* 104(3): 903-916.

Stothert, Karen E

2003 Expression of Ideology in the Formative Period of Ecuador. In: *Archaeology of Formative Ecuador*. J. Scott Raymond and Richard L. Burger (eds.), pp.337-421. Dumbarton Oaks Research Library and Collection, Washington, D.C.

Strong, William D. and Clifford Evans Jr.

1952 *Cultural Stratigraphy in the Viru Valley, Northern Peru: the Formative and*

Florescent Epochs. Columbia University Studies in Archaeology and Ethnology 4.

Tello, C. Julio

1943 Discovery of the Chavin Culture in Peru. *American Antiquity* 9 (1): 135-160.

1960 *Chavín: Cultura Matriz de la Civilización Andina.* Universidad de San Marcos, Perú.

Tellenbach, Micael

1986 *Las Excavaciones en el Asentamiento Formativo de Montegrande, Valle de Jequetepeque en el Norte del Perú*. Materialien zur Allgemeinen und Vergleichenden Archäologie 39. Verlag C.H. Beck, München.

Temme, W. Mathilde

2002 El Formativo en Putushío: Sierra Sur del Ecuado. In: *Formativo Sudamericano, Una Revaluación*. Ledergerber-Crespo, Paulina (ed.), pp. 124-138. Abya-Yala, Quito.

Terada, Kazuo and Yoshio, Onuki (eds.)

1982 *Excavations at Huacaloma in the Cajamarca Valley, Peru, 1979*. University of Tokyo Press.

1985 *The Formative Period in the Cajamarca Basin:Excavations at Huacaloma and Layzón, 1982*. University of Tokyo Press.

1988 *Las Excavaciones en Cerro Blanco y Huacaloma, Cajamarca, Peru, 1985*. Andes Chosashitsu, Departamento de Antropología Cultural, Universidad de Tokio.

Tilley, Christopher

1991 A Phenomenology og Landscape: Place, paths, and monuments. Berg Publishers.

1996 The Powers of Rocks: Topography and Monument Construction on Bodmin Moor. *World Archaeology* 28 (2): 161-176.

Topic, John R. and Theresa, Lange Topic

1983 Coast-Highland Relations in Northen Peru: Some Observations on Routes, Networks, and Scales of Interaction. In: *Civilazation in the Ancient Americas, Essays in Honor of Gordon R. Willey*. Leventhal, Richard M. and Alan L. Kolata (eds.), pp.237-259. University of New Mexico Press and Peabody Museum of Archaeology and Ethnology Harvard University.

Tripcevich, Nicholas

2007 *Quarries, Caravans, and Routes to Complexity: Prehispanic Obsidian in the South-Central Andes*. Ph.D Disertation, University of California, Santa Barbara.

Trigger, Bruce G.

1990 Monumental Architecture: A Thermodynamic Explanation of Symbolic Behaviour. *World Archaeology* 22 (2): 119-132.

Trombold, Charles

1990 An Introduction to the Study of Ancient New World Road Networks, In: *Ancinet Road Networks and Settlement Hierarchies in the New World*. Charles D. Trombold (ed.), pp. 1-9. Cambridge University Press.

常木晃

1990 「考古学における交換研究のための覚書(1)」『東海大学校地内遺跡調査団報告』1: 191-200。

1991 「考古学における交換研究のための覚書(2)」『東海大学校地内遺跡調査団報告』2: 178-191。

鶴見英成

2000 「中央アンデス形成期における鐙型ボトル成形プロセス」『古代アメリカ』第 3 号：53-66、古代アメリカ学会。

2008a 『ペルー北部、ヘケテペケ川中流域アマカス平原における先史アンデス文明形成期の社会過程』、東京大学大学院提出博士論文。

2008b 「ペルー北部、諸河谷中流域の調査：形成期地域間ルート研究事始」『古代アメリカ』第 11 号：61-73。

鶴見英成・吉田邦夫・米田穣

2007 「クントゥル・ワシ遺跡の年代的位置」『先史アンデス社会の文明形成プロセス』, 平成 14-18 年度科学研究費補助金[基盤研究(S)]研究成果報告書、加藤泰建(編)、pp. 49-58。

Uhle, Max

1922 *Influencias Mayas en el Alto Ecuador*. Boletín de la Academica Nacional de Historia. Vol. 4-5. Quito.

Ulbert, Cornelius

1994 Die Keramik der Formativzeitlichen Siedlung Montegrande, Jequetepequetal, Nord-Peru. *Marerialien zur Allegemeinen und Vergleichenden Archäologie*, Band 52, Mainz.

鵜沢和弘

2007a 「クントゥル・ワシ遺跡出土哺乳類」『先史アンデス社会の文明形成プロセス』平成 14-18 年度科学研究費補助金[基盤研究(S)]研究成果報告書、加藤泰建(編)、pp. 169-181。

2007b 「先史アンデスにおけるラクダ科家畜の拡散」『資源人類学 07　生態資源と象徴化』、印東道子（編)、pp.99-128、弘文堂。

Uzawa, Kazuhiro

2010 La Difusión de los Camélidos Domesticados en el Norte del Perú durante el Periodo Formativo. *Boletín de Arqueología PUCP* 12: 249-260.

Valdez, Francisco

2007 Mayo-Chincipe: The Half-Open Door. In: *Ecuador; the Secret Art of Precolumbian Ecuador*. David Klein y Iván Cruz Cevallos (eds.), pp. 321-349. 5 Continents, Milan.

2008a Inter-Zonal Relationships in Ecuador. In: *Handbook of South American Archaeology*. Silverman H. and W. Isabell (eds.), pp. 865-888. Springer.

2008b Mayo Chinchipe, el Orto Formativo Temprano. *Miscelánea Antropológica Ecuatoriana*, 1 (1): 170-197.

Vaughn, Kevin J

2005 Crafts and the Materialization of Chiefly Power in Nasca. In *Foundations of Power in the Prehispanic Andes. Archaeological Papers of the American Anthropological Association, Number 14*. Kevin J.Vaughn, Dennis Ogburn, and Christina A. Conlee (eds.), pp. 113-130. American Anthropological Association.

Vásquez Sánchez, Víctor F and Teresa E. Rosales Tham

2008 *Análisis de Restos de Fauna, Vegetales y Granos de Almidón del Sitio Ingatambo*. Arqueobios, Centro de Investigaciones Arqueobiológicas y Paleoecológicas Andinas, Trujillo.

2009 *Análisis de Restos de Fauna y Vegetales del Sitio Ingatambo*. Arqueobios, Centro de Investigaciones Arqueobiológicas y Paleoecológicas Andinas, Trujillo.

Vega-Centeno, Rafael

2005a *Ritual and Architecture in a Context of Emergent Complexity: A Perspective from Cerro Lampay, a Late Archaic Site in the Central Andes*. Ph.D. Dissertation, University of Arizona.

2005b Consumo y ritual en la construcción de espacios públicos para el Periodo Arcaico Tardío: en caos de Cerro Lampay. *Boletín de Arqueología PUCP* 9: 91-122.

Villalba, Marcelo

1988 *Cotocollao: Una Aldea Formative del Valle Quito*. *Miscelanea Antropologica Ecuatoriana* 2. Museo del Banco Central del Ecuador, Quito.

Watanabe, Shinya

2010 Dos Monolitos del Sitio de Congona, Sierra norte del Perú. *Boletín de Arqueología PUCP* 12: 53-68.

Wheeler, Jane C.

1983 On the origin and early development of camelid pastoralism in the Andes. In: *Animals and Archaeology: 3. Early herders and their flocks*. Clutton-Brock, Juliet and Grigson Caroline (eds.), pp. 395-410. BAR International Series 202, Oxford.

Wheeler, Jane C.

1995 De la Caza a la Domesticación. In: *Terarmachay: Cazadores y Pastores Prehistoricos de los Andes*. D. Lavallée, M. Julien, J. Wheeler, and C. Karlin (eds.), pp. 49-67. Instituto Francés de Estudios Andinos, Lima

Wells, Lisa

1990 Holocene history of the El Niño phenomenon as recorded in flood sediments of northern coastal Peru. *Geology* 18: 1134-1137.

Wester Carlos, Juan Martínez and Arturo Tandaypan

2000 *La Granja, Investigaciones Arqueológicas.* Museo Nacional Brüning, Lambayeque – Perú, Sociedad Minera la Granja S.A., Cambior.

Williams, León Carlos

1985 A Scheme for the Early Monumental Architecture of the Central Coast of Peru. In: *Early Ceremonial Achitecture*. Christopher Donnan (ed.), pp.227-240. Dumbarton Oarks Reseach Library and Collection, Washington D.C..

1988 Inicios de la Tradición Arquitectónica Andina. In: *Arquitectura y Arqueología - Pasado y Futuro de la Construccion en el Perú*. Victor Rangel Flores (eds.), pp. 27-34. Simposio, 13-16 de agosto de 1987, Chiclayo.

Willey, Gordon

1945 Horizon Styles and Pottery Traditions in Peruvian Archaeology. *American Antiquity* 11 (1): 49-56.

1951 The Chavín Problem: A review and Critique. *Southern Journal of Anthropology* 7 (2): 103-114.

1953 *Prehistoric Settlement Patterns in the Viru Valley, Peru*. Smithsonian Institution Breau of American Ethnology, Washington D.C..

1971 *An Introduction to American Archaeology. Vol. II: Southe America*. Prentice-Hall, Inc. Englewood Cliffs, New Jersey.

Willey, Gordon R. and Philip, Phillips

1958 *Method and Theory in American Archaeology*. University of Chicago Press.

ウィリー, G. R.・J.A. サブロフ

1979[1974] 『アメリカ考古学史』、小谷凱線宣訳、学生社。

Willey, Gordon R. and Jeremy, A. Sabloff

1993 *A History of American Archaeology (Third Edition)*. W. H. Freeman Company, New York.

Wilson, David J.

1988 *Prehispanic Settlement Patterns in the Lower Santa Valley, Peru: A Regional Perspective on the Origins and Development of Complex North-Coast Society*. Smithsonian Series in Archaeological Inquity. Smithsonian Institute, Washington D.C.

Wing, Elizabeth S.

1972 Utilization of Animal Resources in the Peruvian Andes. In: Excavations at Kotosh, Peru, 1963 and 1966, Izumi, A. & K. Terada (eds.), pp. 327-351. University of Tokyo Press.

1983 Domestication and Use of Animals in the Americas. In: *Domestication, Conservation and Use of Animal Resources*. Peel, Lynnette J. and Derek E.

Tribe (eds.). Elsevier.

Yamamoto, Atsushi

2007 El Reconocimiento del Valle de Huancabamba, Jaén, Cajamarca, Perú, *Arkeos* 2 (2): 1-16.

2010 Ingatambo: Un Sitio Estratégico de Contacto Interregional en la zona norte del Perú. *Boletín de Arqueología PUCP* 12: 25-52.

Yamamoto, Atsushi and José, Peña Martínez

2006 *Informe Preliminar del Proyecto de Investigación Arqueológica en el Valle de Huancabamba, Perú*, Instituto Nacional de Cultura, Lima, Perú.

2007 *Informe del Proyecto de Investigación Arqueológica "INGATAMBO", en el Valle de Huancabamba, Provincia de Jaén, Departamento de Cajamarca, Perú*, Instituto Nacional de Cultura, Lima, Perú.

2008 *Informe del Proyecto de Investigación Arqueológica "INGATAMBO", en el Valle de Huancabamba, Provincia de Jaén, Departamento de Cajamarca, Perú (Segunda Temporada)*, Instituto Nacional de Cultura, Lima, Perú.

山本紀夫

1993 「植物の栽培化と農耕の誕生」『アメリカ大陸の自然誌 3 新大陸文明の盛衰』、赤澤威・坂口豊・冨田幸光・山本紀夫（編）、pp. 1-48。岩波書店。

2004 『ジャガイモとインカ帝国』、東京大学出版会。

Yoffee, Norman

1993 Too Many Chiefs? (or Safe Texts for the '90s). In Archaeological Theory: Who Sets the Agenda?, edited by N. Yoffee and A. Sherratt, pp. 60-78. Cambridge University Press, Cambridge.

2005 Myths of the Archaic State: Evolution of the Earliest Cities, States, and *Civilizations*. Cambridge University Press, Cambridge.

米田穣・関雄二

2002 「ペルー北高地カハマルカ地方の形成期諸遺跡より出土した人骨の食性復元」『アンデス先史学の人類学的研究―クントゥル・ワシ遺跡の発掘』、平成 11-13 年度科学研究費補助金[基盤研究(A)(2)]研究成果報告書、加藤泰建(編)、pp.139-150。

Zeidler, James A

1986 La Evolución Local de Asentamientos Formativos en el Litoral Ecuatoriano: el caso de Real Alto. *Arqueología de la Costa Ecuatoriana: Nuevos Enfoques*. Jorge Marcos (ed.). pp. 85-127. Corporación Editoria Nacional, Quito.

1988 Feline Imagery, Stone Mortars, and Formative Period Interaction Spheres in the Northern Andean Area. *Journal of Latin American Lore* 14 (2): 242-268.

1994 Archaeological Testing in the Middle Jama Valley. In: *Regional Archaeology in Northern Manabí, Ecuador. Vol. 1. Environment, Cultural Chronology, and Prehistoric Subsistence in the Jama River Valley*. James A. Zeidler and Deborah M. Pearsall (eds.), pp. 71-88. University of Pittsburgh, Pittsburgh and Ediciones Libri Mundi, Quito.

2008 The Ecuadorian Formative. In: Handbook of South American Archaeology. Helaine Silverman and William H. Isbell (eds.), pp. 459-503. Springer.

Zeidler, James A and John, S. Isaacson

2003 Settlement Process and historical Contingency in the Western Lowlands of Ecuador. In: *Archaeology of Formative Ecuador,* J. Scott Raymond and Richard L. Burger. pp. 69-123. Dumbarton Oaks Research Library and Collection.

Zeidler, James A and Deborah, Pearsall (eds.)

1994 Regional Archaeology in Northern Manabí, Ecuador. University of Pittsburgh Memoirs in Latin American Archarology 8. University of Pittsburgh and Ediciones Libri Mundi.

Zoubek, Andrew Thomas

1997 *The Initial Period Occupation of Huaca El Gallo/ Huaca La Gallina, Virú Valley, Peru and its Implications for Guañape Phase Social Complexity*. Ph.D. Dissertation. Yale University.

附録：インガタンボ遺跡の層位状況

インガタンボ遺跡の発掘調査は、2006 年と 2007 年の計 2 シーズンにわたって実施された。ここでは、発掘に際して記録した層位断面図をもとに、各発掘区域の層位状況を示す。より具体的には、標準土色帳を用いて、各層位の「土層の色」と「含有される礫の大きさと割合」について記述する。また、第 4 章で述べた建築フェイズと土層との時期的関係について明示する。

1. A 基壇の発掘区と層位状況

A 基壇は、2006 年と 2007 年の両シーズンにおいて発掘を実施した、インガタンボ遺跡のなかで発掘面積が最も大きい発掘区である。

本文の第 4 章でも述べたように、発掘に際しては、A 基壇主要基壇の北面に位置するインガタンボ期の主要階段を起点、および東西南北の軸として、遺跡全体に基本単位となる 2×2mのグリッドを組んでいる。そして、A 基壇に関しては、地表面で視認できる建造物に応じて、A～D 区の四つの発掘区に細分したのちに、発掘を行った[附録図 1]。なお、A 区は A 基壇の主要基壇に対応し、B 区は A 基壇上の東側部分（部屋状構造物）、C 区は西基壇、D 区は A 基壇北面にある基壇へのアプローチ部分に対応している。

2006 年に実施したのは、A 区と B 区の発掘である。A 区では、主要基壇全体の堆積状況を確認し、建設時期を把握するために、主要基壇の中央部に十字形のトレンチを入れ、遺構の出土状況に応じて、発掘区域を部分的に拡張した。また、B 区では、ポマワカ市の博物館収蔵の盗掘品出土地点とされる部屋状構造物の清掃と発掘を実施し、A 区との時期的関係の把握に努めた。

2007 年については、前年度の調査成果を受けて、A 区、C 区、D 区で発掘を実施した。A 区では、前年度に確認された主要基壇上部の部屋状構造物の詳細を把握するため、また、主要基壇の規模と形態を把握するために、主要基壇上部と北東角にて発掘を行った。なお、C 区と D 区の発掘については、堆積状況を確認し、他の発掘区との時期的関係を把握するために、それぞれの発掘区に 1 本のトレンチを設けた。以下、発掘区ごとに記述していく。

1-1. A 区

1-1-1. トレンチ 1

2006 年に実施した A 基壇主要基壇（A 区）を南北方向に切るトレンチである[附録図 2（断面図 1）－7（断面図 6）]。主要基壇北面において 2 時期（ポマワカ期とインガタンボ期）の主要階段を確認し、主要基壇上部では部屋状構造物を検出した。主要階段では、形成期以降の覆土が基壇の傾斜にあわせて堆積しているが、主要基壇上部は水平堆積である。なお、表土、ならびに地表面に近い層では、形成期以降の地方王国期（後期中間期）とインカ期（後期ホライズン）の堆積が確認されている。

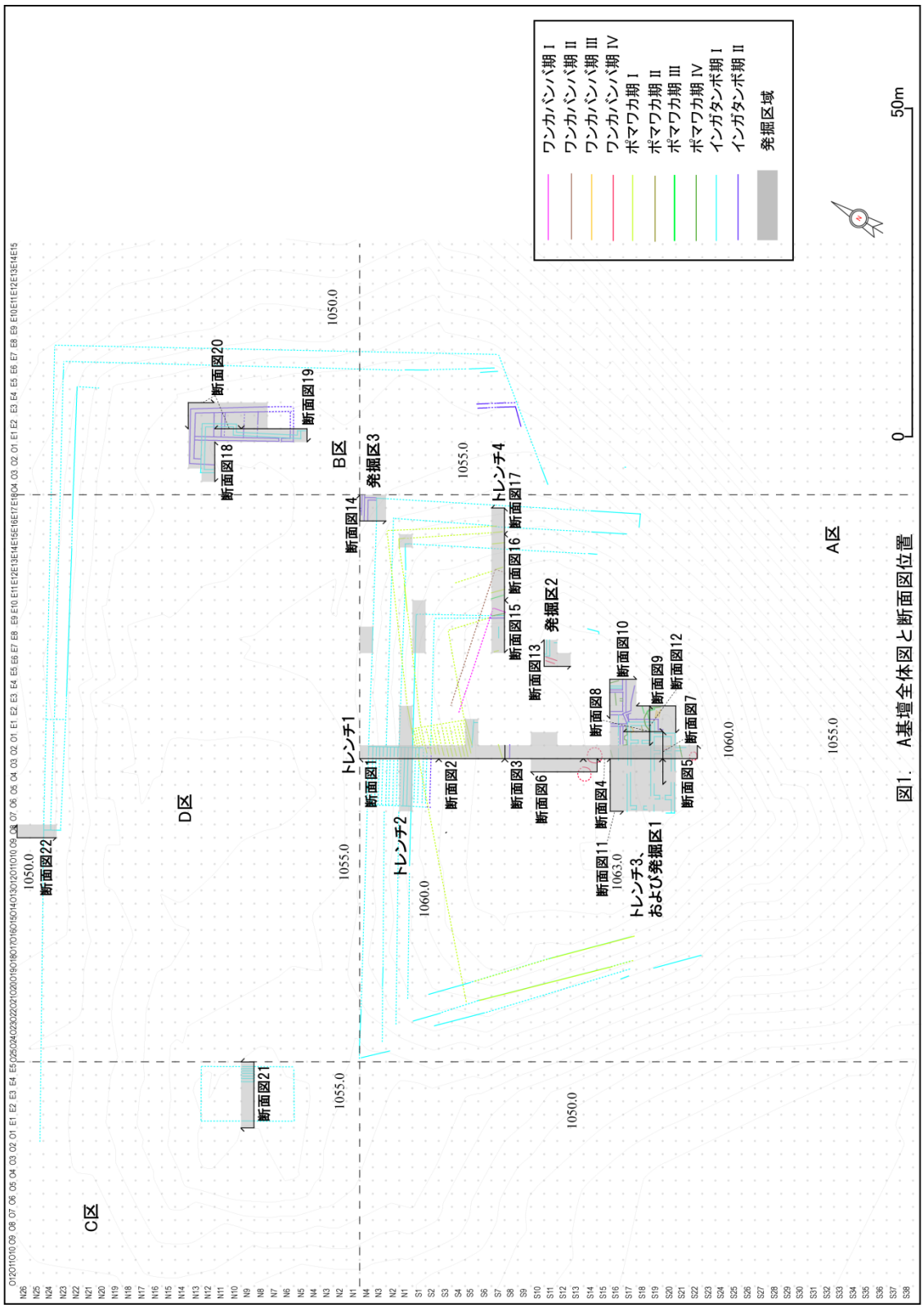


図1.　A基壇全体図と断面図位置

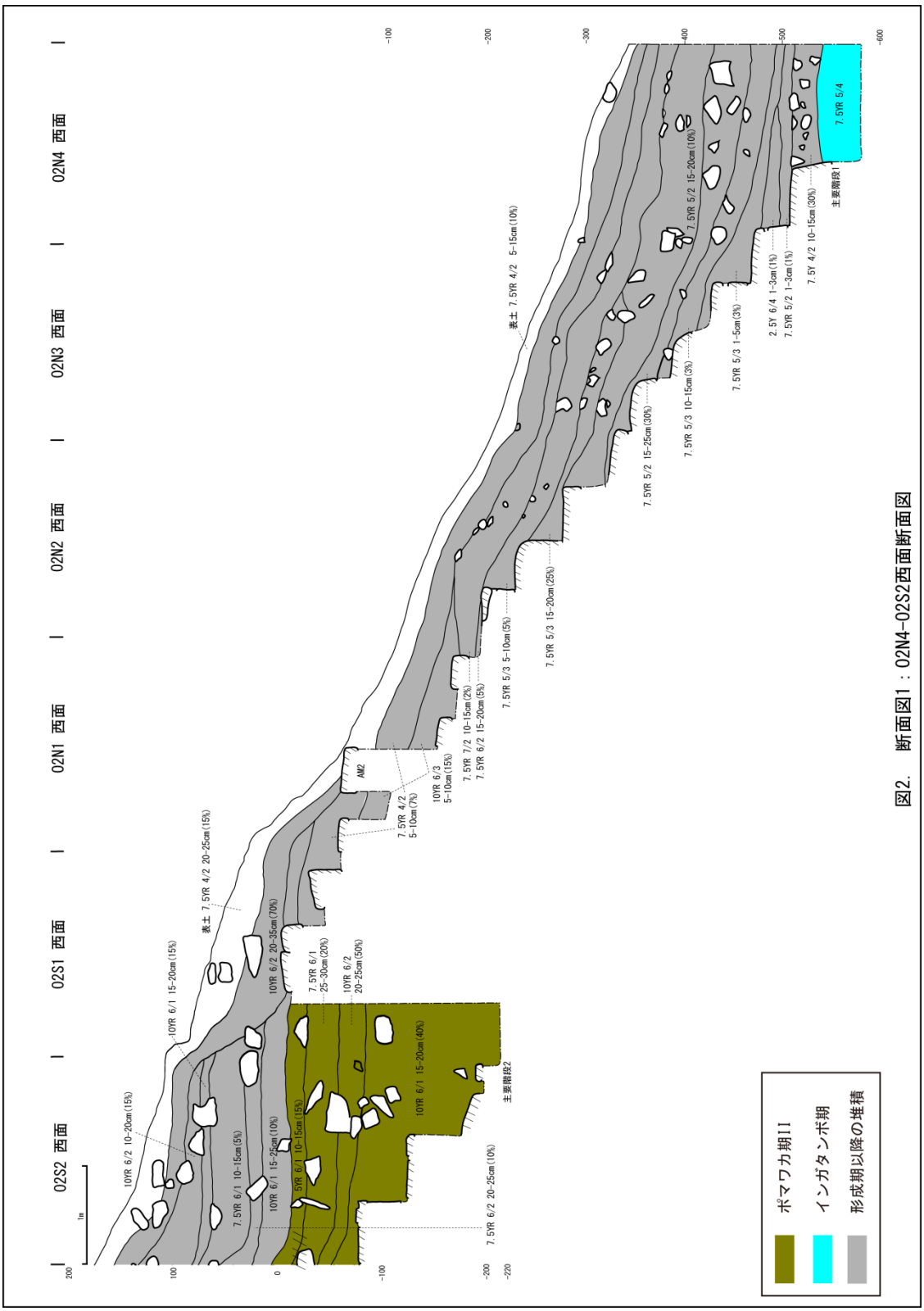


図2. 断面図1：02N4-02S2西面断面図

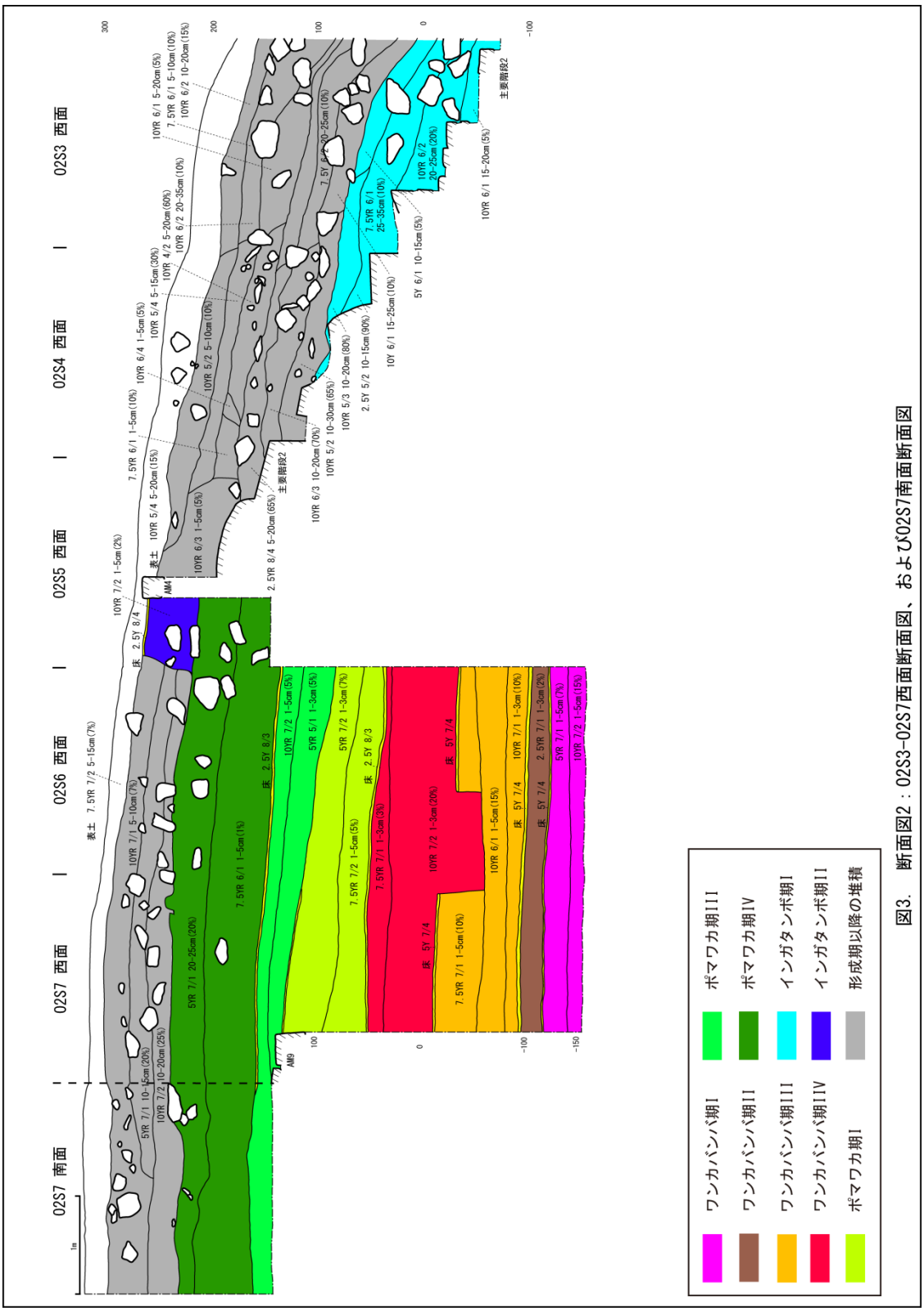


図3.　断面図2：02S3–02S7西面断面図、および02S7南面断面図

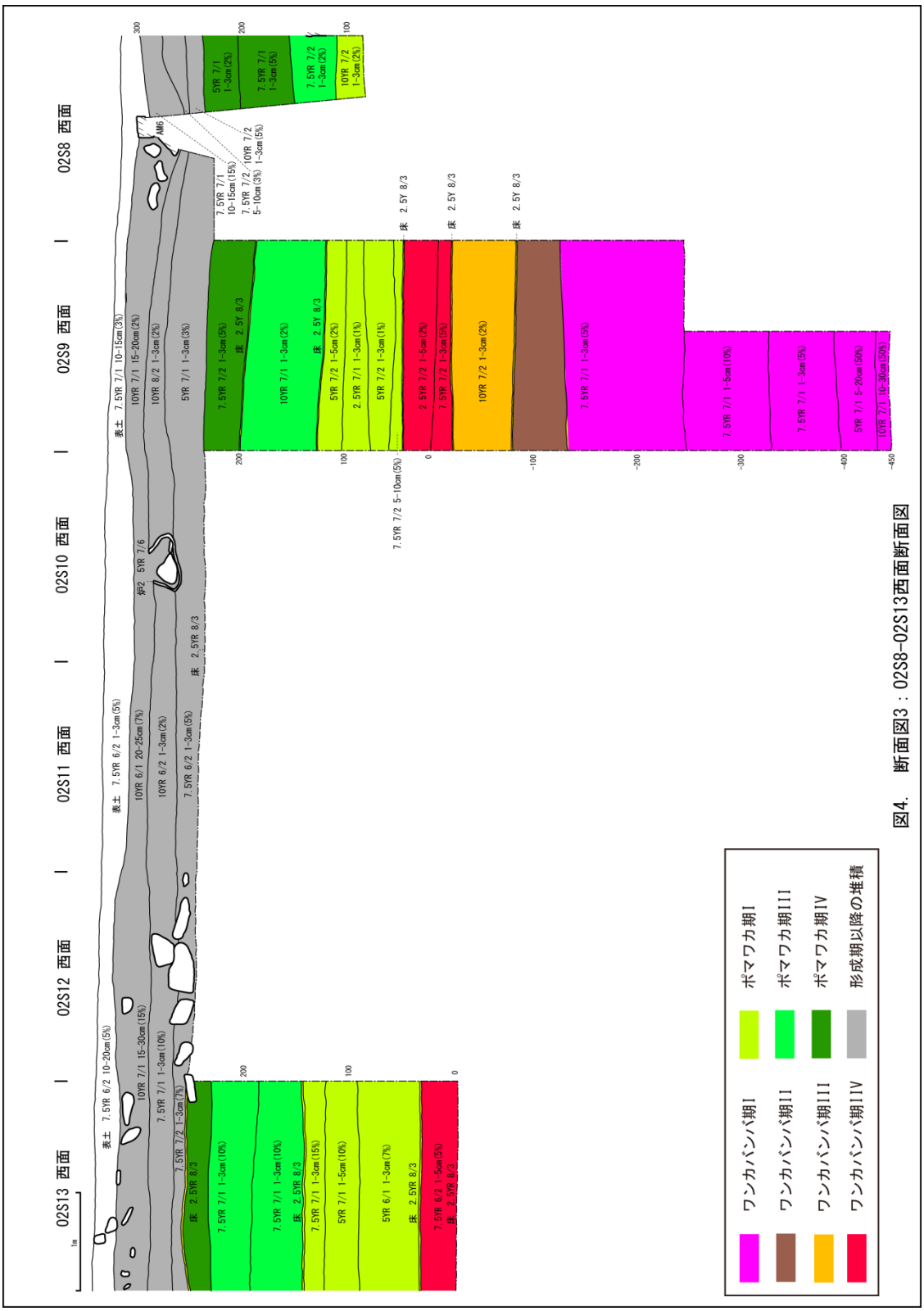


図4. 断面図3：02S8-02S13西面断面図

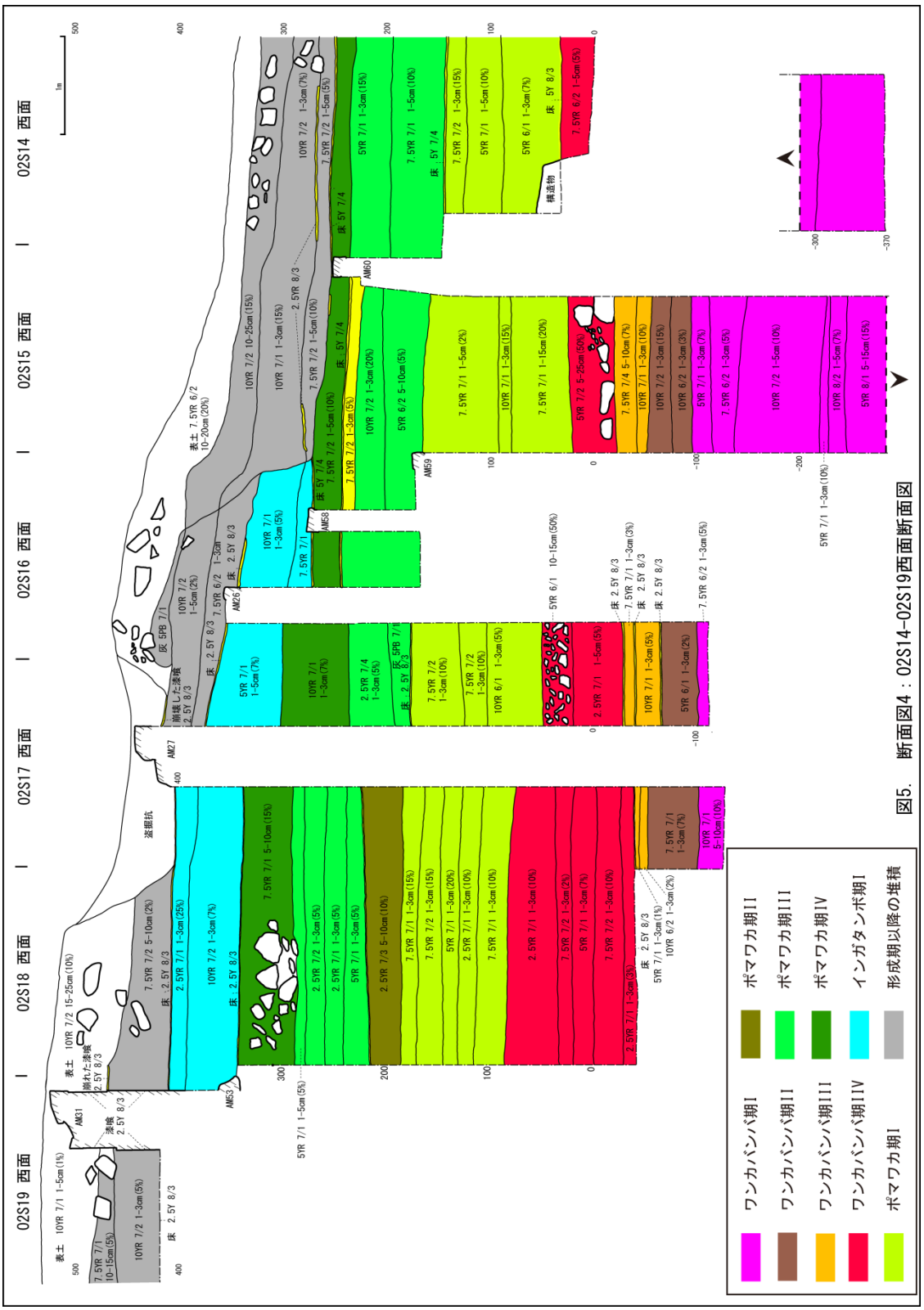


図5. 断面図4：02S14–02S19西面断面図

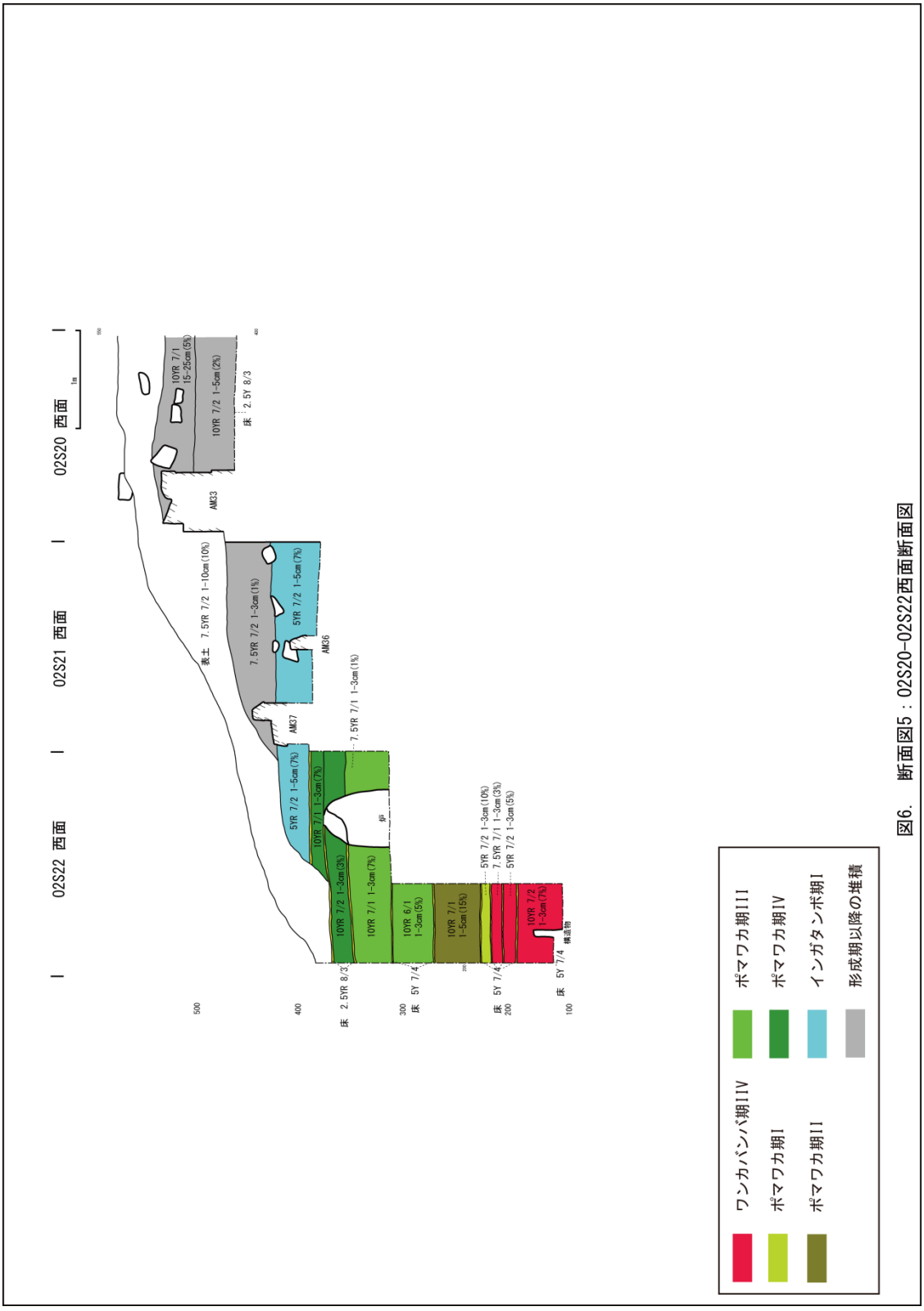


図6. 断面図5：02S20-02S22西面断面図

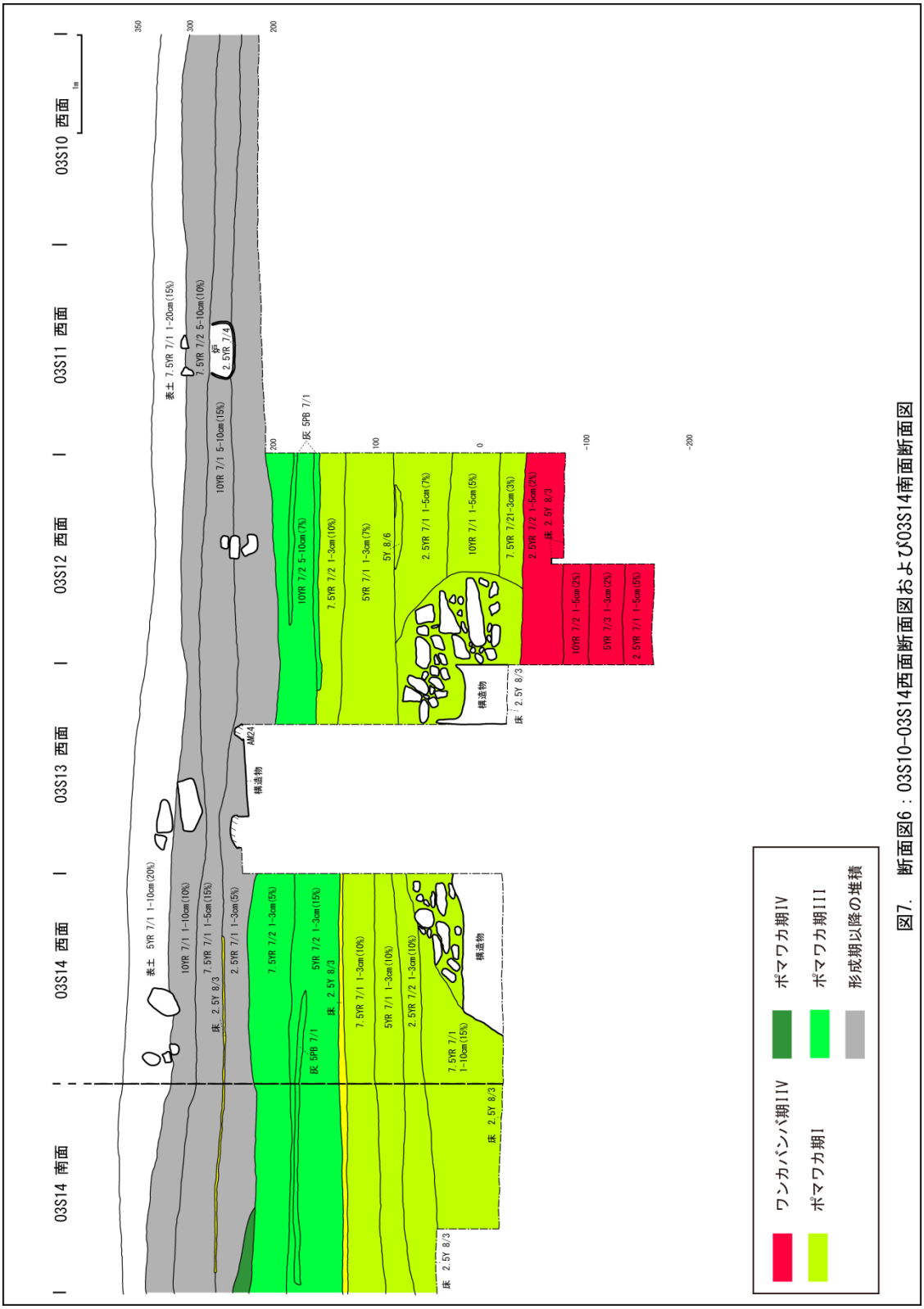


図7. 断面図6：03S10–03S14西面断面図および03S14南面断面図

1-1-2. トレンチ 2

トレンチ 1 で確認された主要階段の形態と規模を確認するために設けられた東西方向のトレンチである。発掘自体は階段を検出した時点で止めているため、その下部については未発掘である。主要階段の上部は、形成期以降の覆土となっている。

1-1-3. トレンチ 3、および発掘区 1（AE4S16-AO6S16、AE4S17-AO6S17、AE3S18-AO6S18、AE3S19-AO6S19、AE3S20-AO6S20）

トレンチ 1 で確認された主要基壇上部の部屋状構造物を詳細に把握するために設けられた東西方向のトレンチと発掘区である[附録図 8（断面図 7）‐13（断面図 12）]。2006 年シーズンでは、極めて部分的に発掘区を拡張しただけであったため、2007 年シーズンにおいて、より広範囲に発掘区を設けて、重点的に発掘を行った。その結果、2 時期（ポマワカ期とインガタンボ期）にわたる部屋状構造物の建設過程が明らかとなった。また、部屋状構造物の下層から、ワンカバンバ期の建造物の一部も検出した。なお、形成期以降の堆積は、トレンチ 1 に比べてあまり顕著ではない。

1-1-4. 発掘区 2（AE6S11-S12、AE7S11-12）

2006 年の発掘では、主要基壇上部の部屋状構造物と主要基壇北面の主要階段の中間に位置する地点の状況を把握できなかったため、2007 年に地表面で視認可能な壁の周囲に小規模な発掘区を設けた[附録図 14（断面図 13）]。その結果、既述の中間地点には、広場状開放空間が存在したことが明らかとなった。また、開放空間の下層からは、ワンカバンバ期の建造物の一部が検出された。なお、地表面付近には、形成期以降の堆積も認められた。

1-1-5. 発掘区 3（AE17N3-N4、AE18N3-N4）

2006 年に発掘した主要基壇の形態と規模を検証し、主要基壇と後述する B 区との関係を把握するために、2007 年に設けられた発掘区である[附録図 15（断面図 14）]。その結果、主要基壇北東角には、インガタンボ期に部屋状構造物が敷設されたことが明らかとなった。

1-1-6. トレンチ 4

トレンチ 1 と組んで十字形をとるように設定された、A 基壇主要基壇（A 区）東側を東西方向に切るトレンチである[附録図 16（断面図 15）‐18（断面図 17）]。ただし、主要基壇上部の堆積が想定よりもはるかに深かったことから、実際の発掘ではトレンチ 1 と交差していない。このトレンチによって、主要基壇の東面擁壁の建設過程が把握された。なお、主要基壇上部と、東面擁壁の裏込め部分は水平堆積となっているが、トレンチ 1 と同様に、表土や地表面に近い層では、形成期以降の堆積が確認され、部分的に形成期の層位の攪乱もみられる。

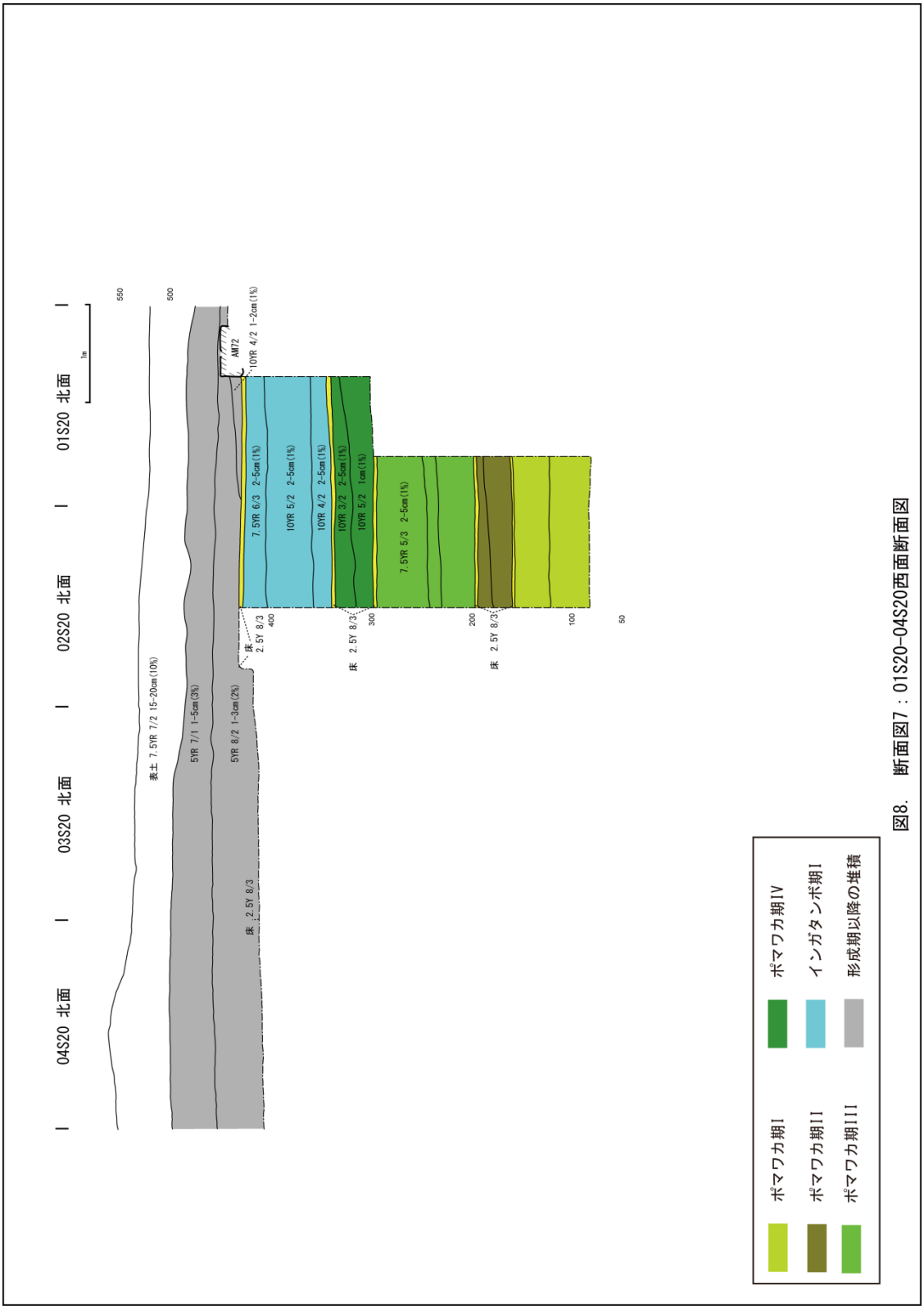


図8. 断面図7：01S20–04S20西面断面図

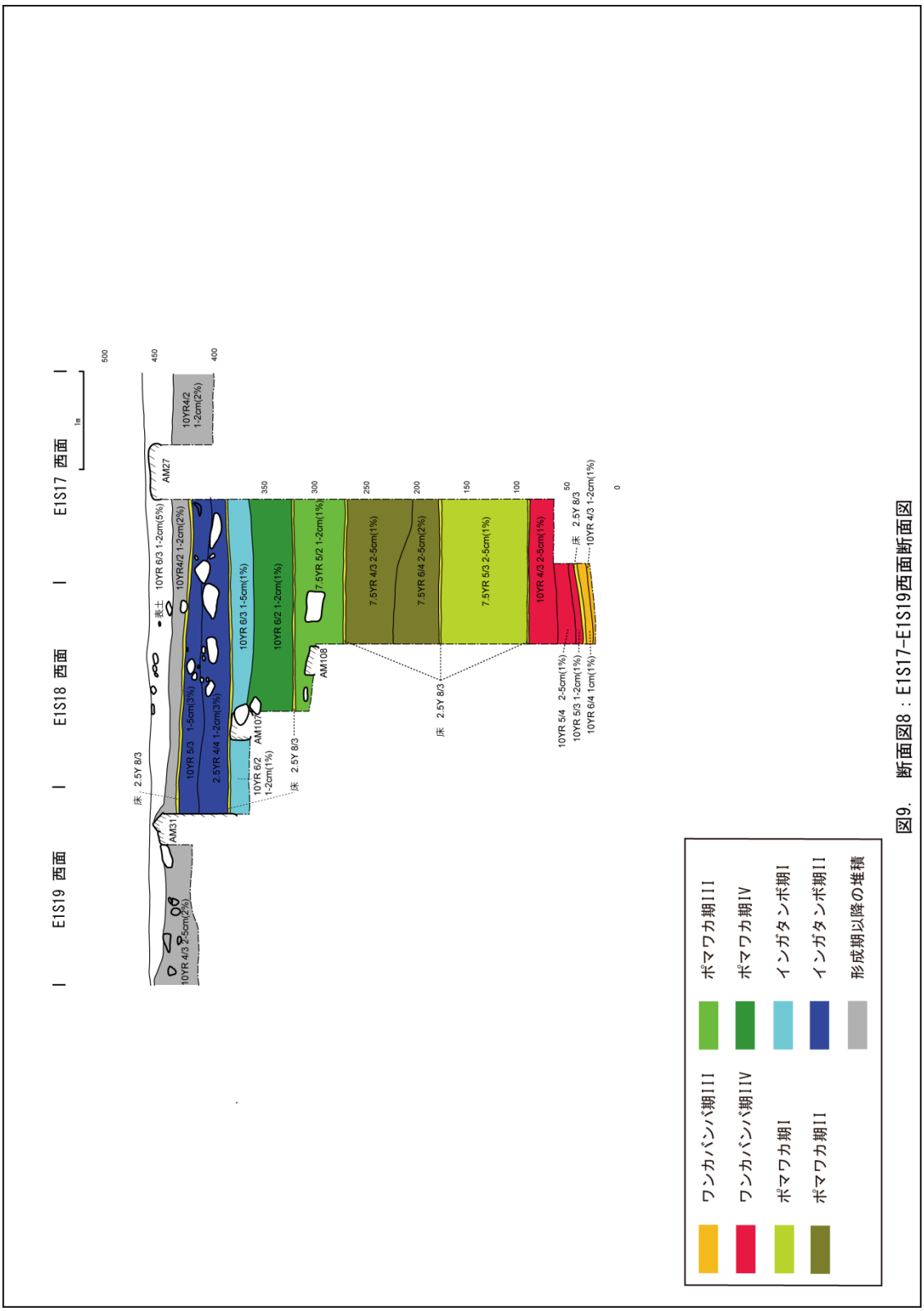


図9. 断面図8：E1S17-E1S19西面断面図

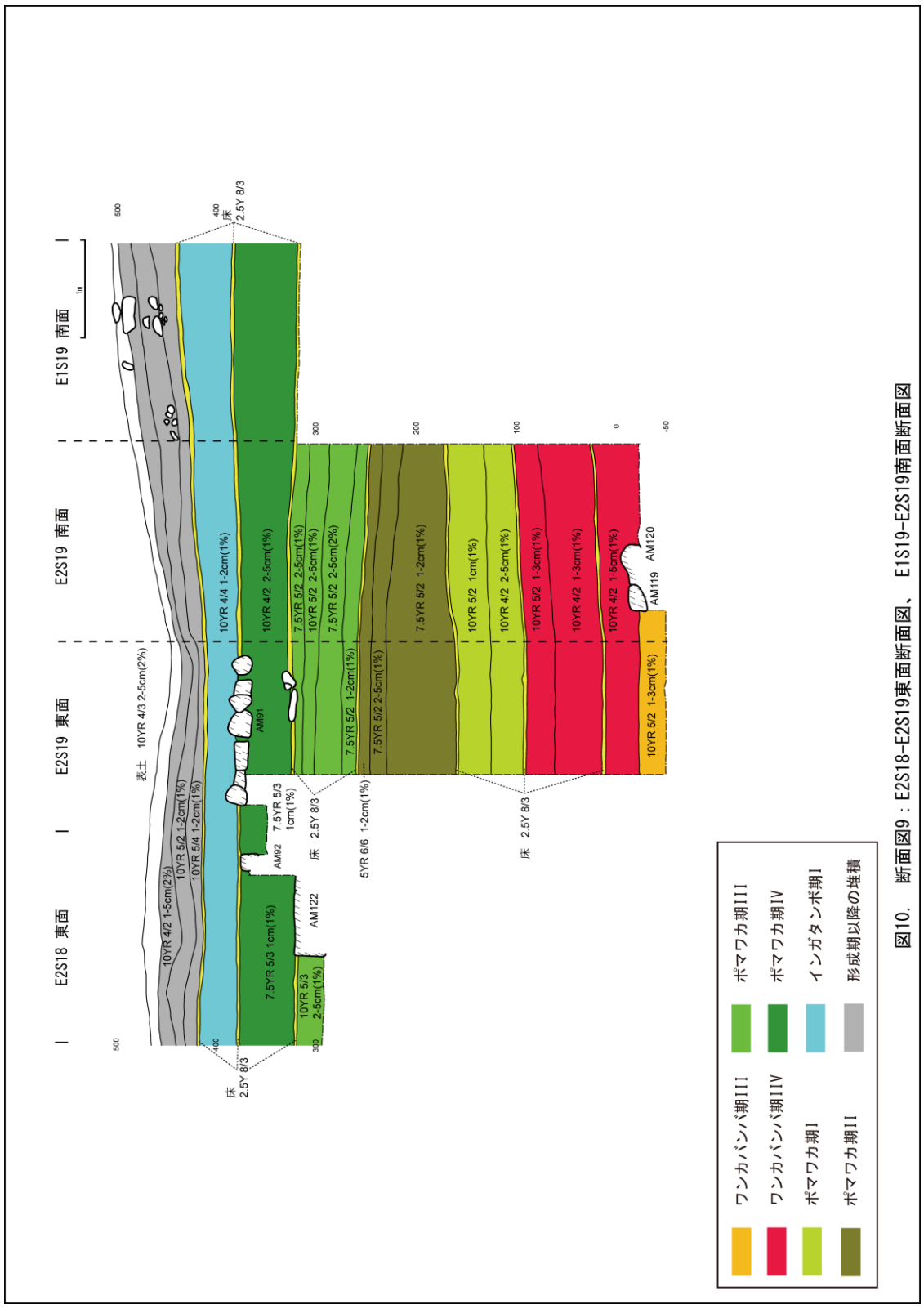


図10. 断面図9：E2S18–E2S19東面断面図、 E1S19–E2S19南面断面図

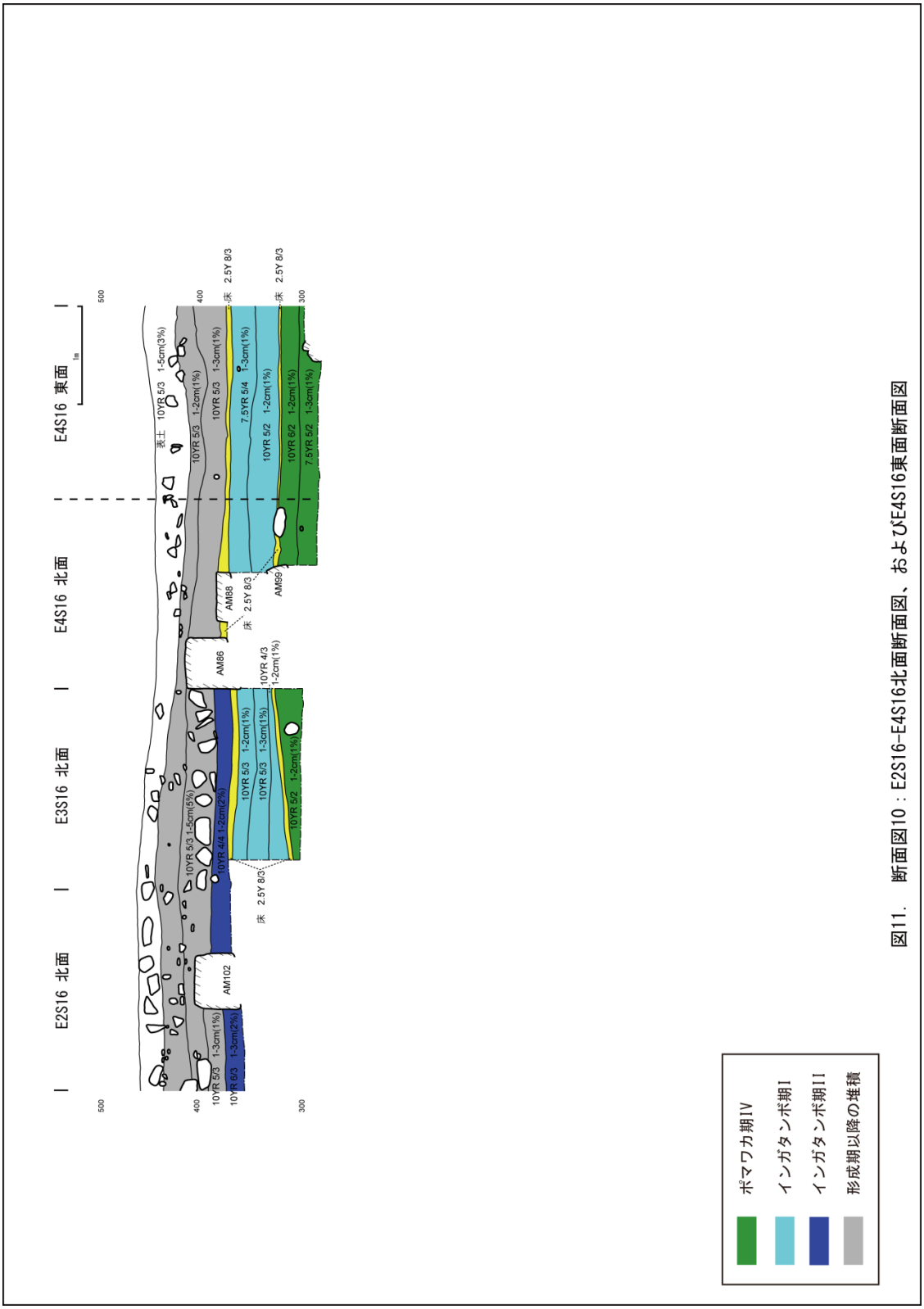


図11. 断面図10：E2S16-E4S16北面断面図、およびE4S16東面断面図

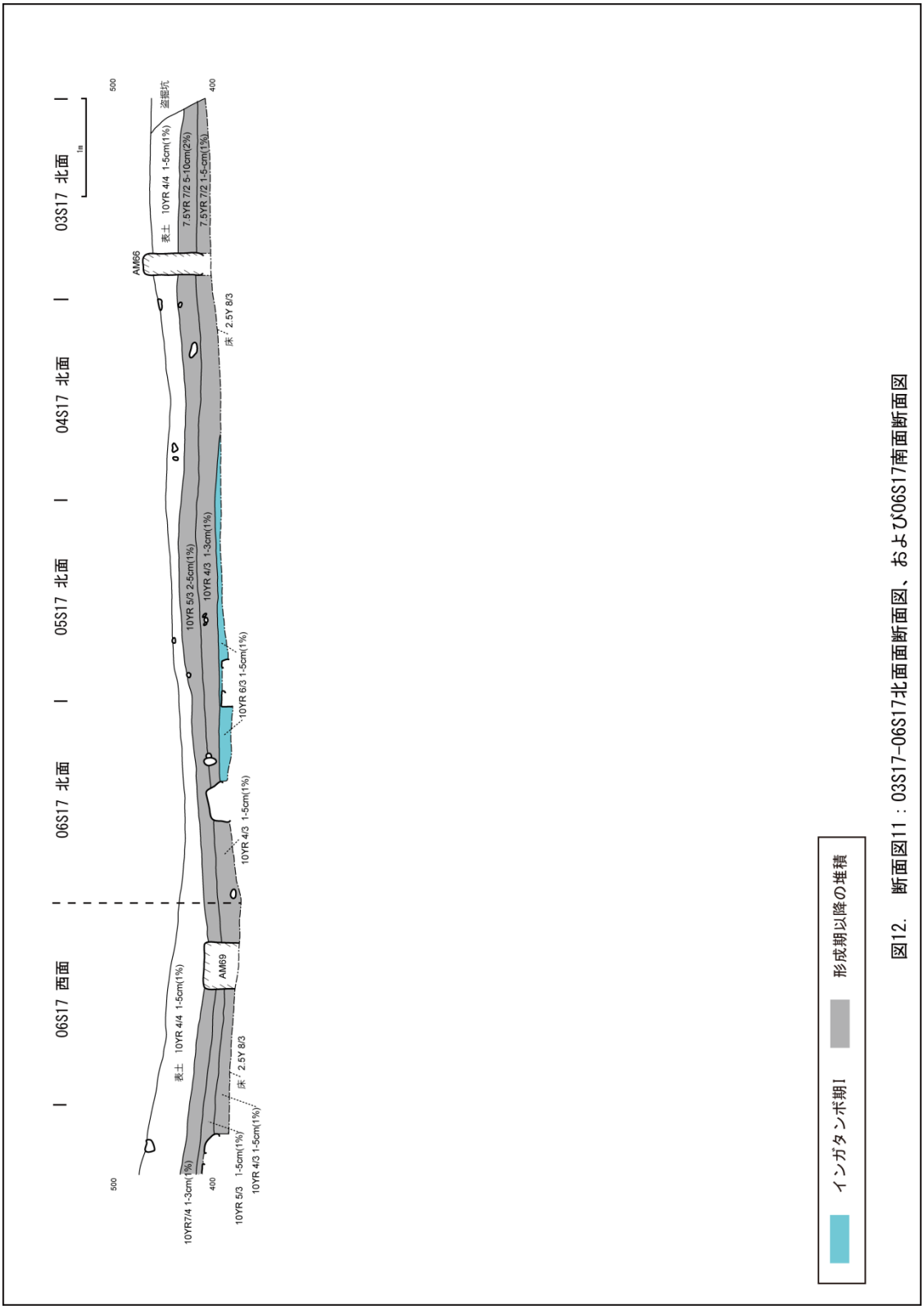


図12. 断面図11：03S17–06S17北面断面図、および06S17南面断面図

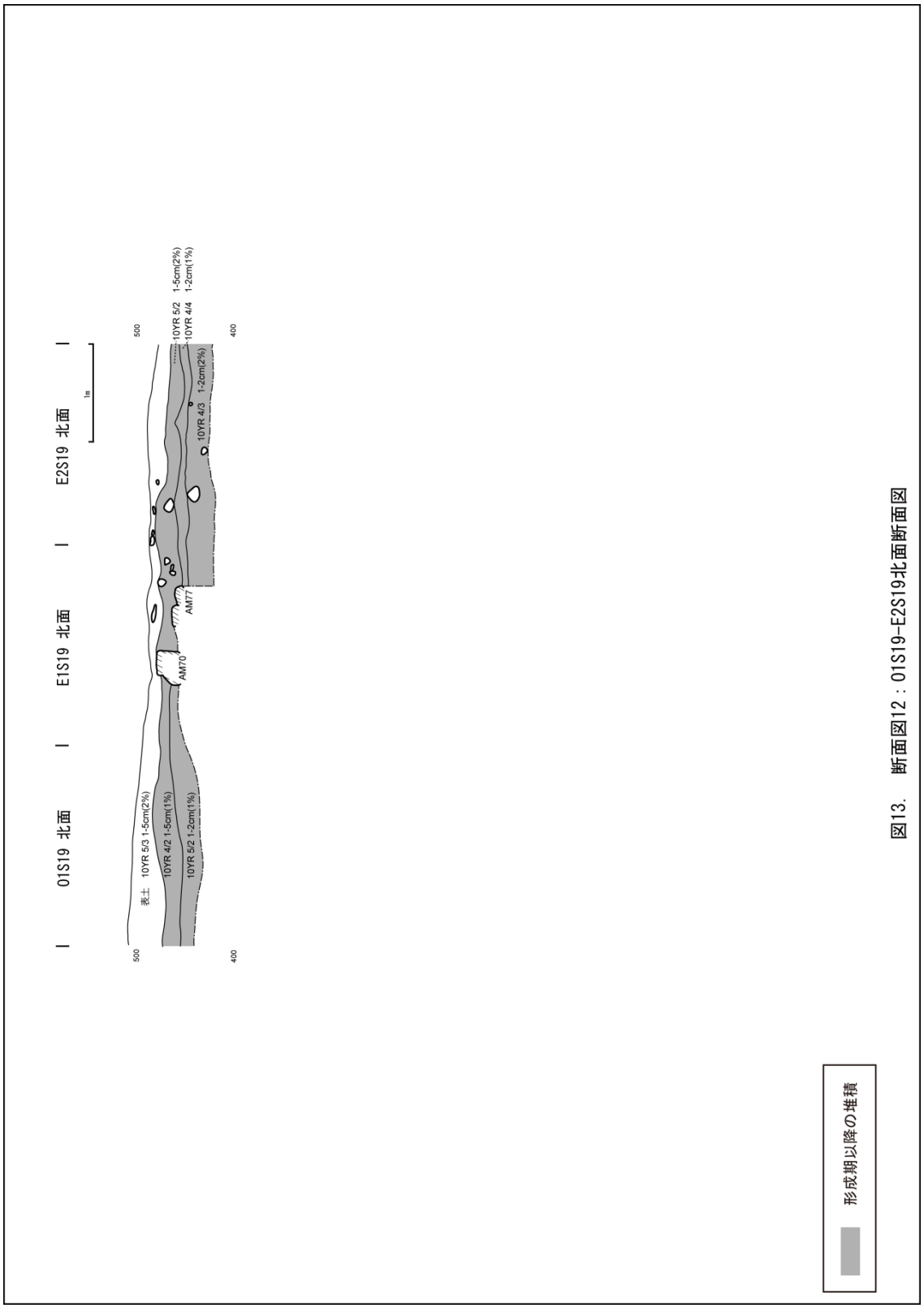


図13. 断面図12：O1S19-E2S19北面断面図

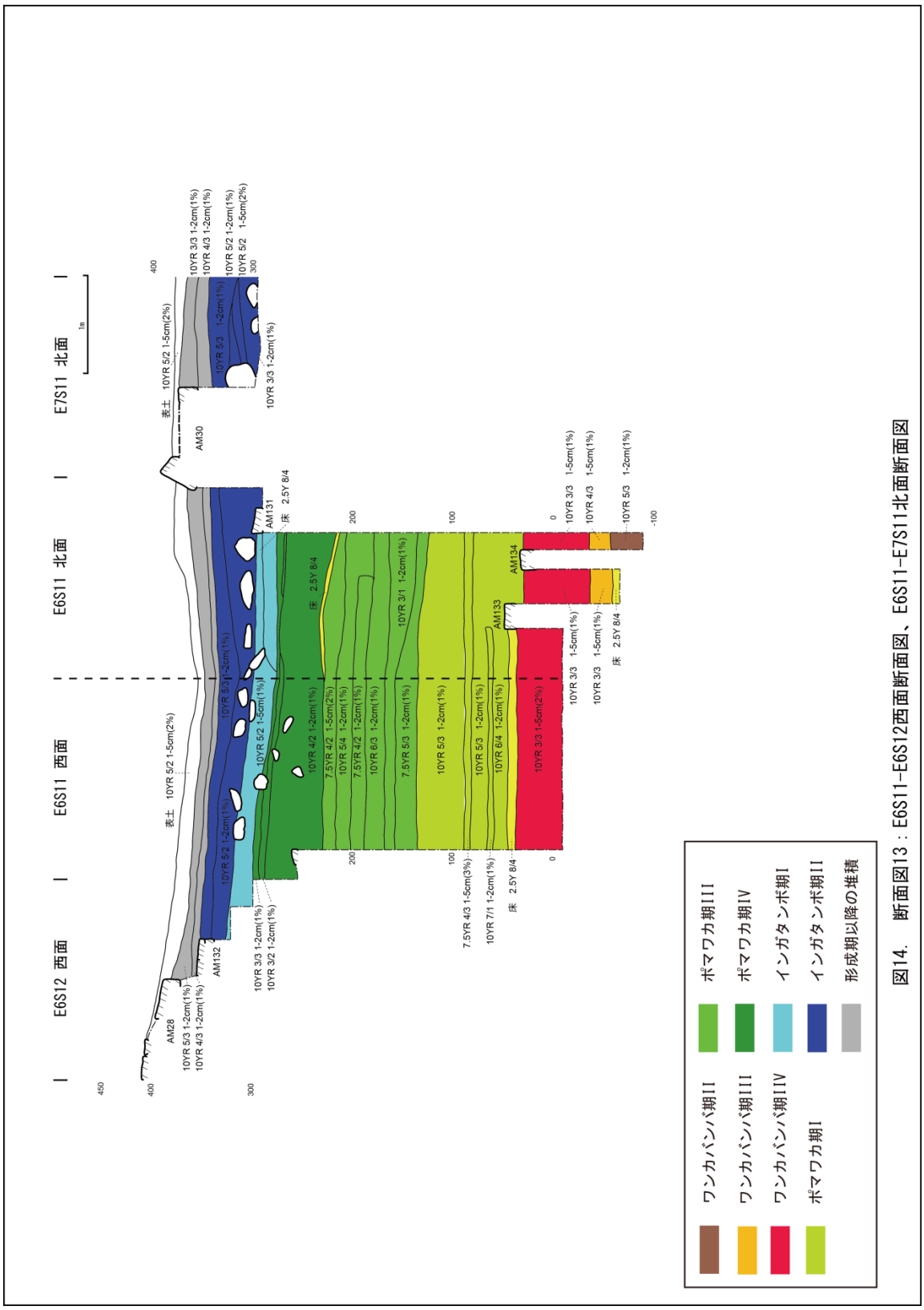


図14. 断面図13：E6S11-E6S12西面断面図、E6S11-E7S11北面断面図

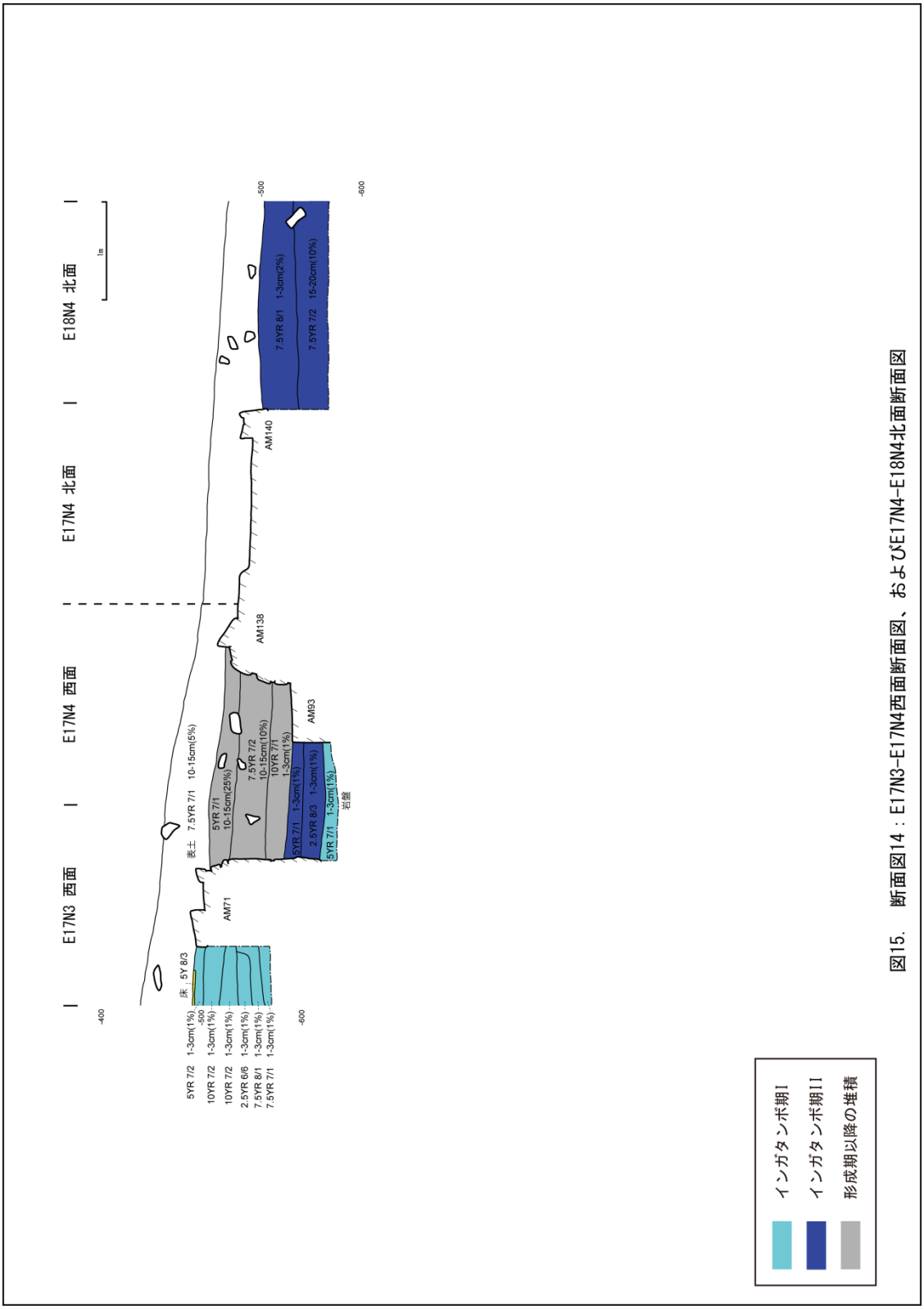


図15. 断面図14：E17N3-E17N4西面断面図、およびE17N4-E18N4北面断面図

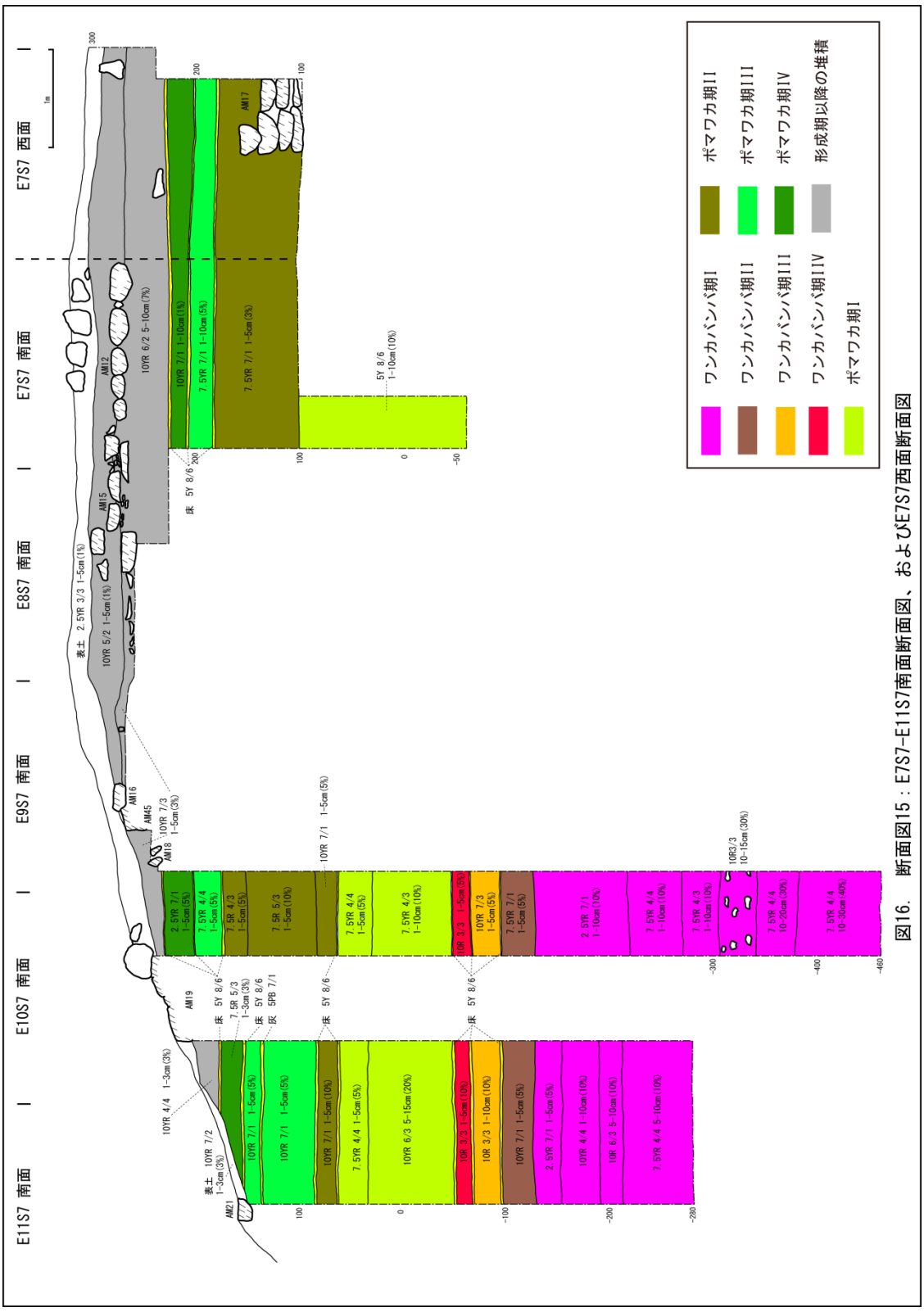


図16. 断面図15：E7S7–E11S7南面断面図、およびE7S7西面断面図

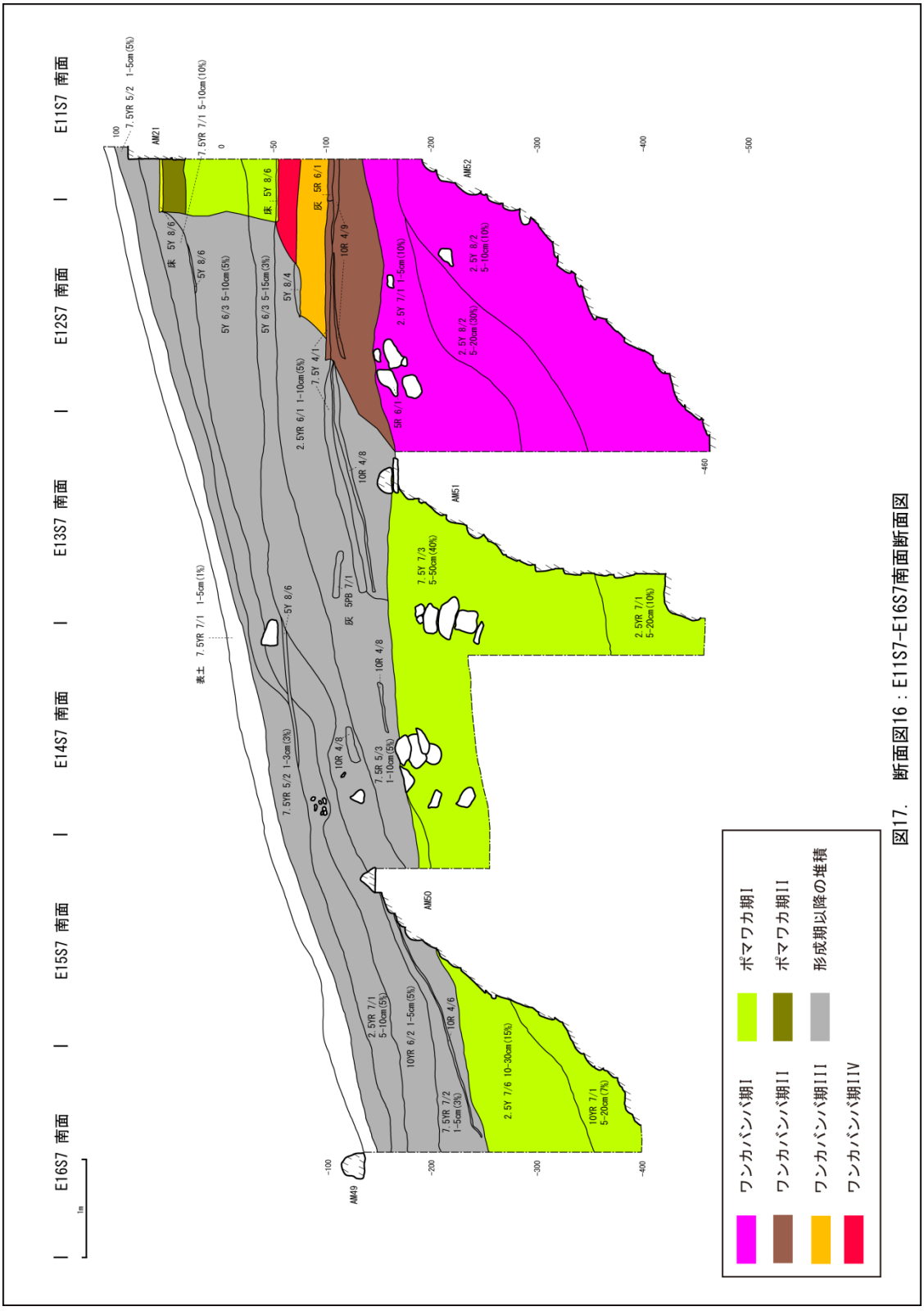


図17. 断面図16：E11S7-E16S7南面断面図

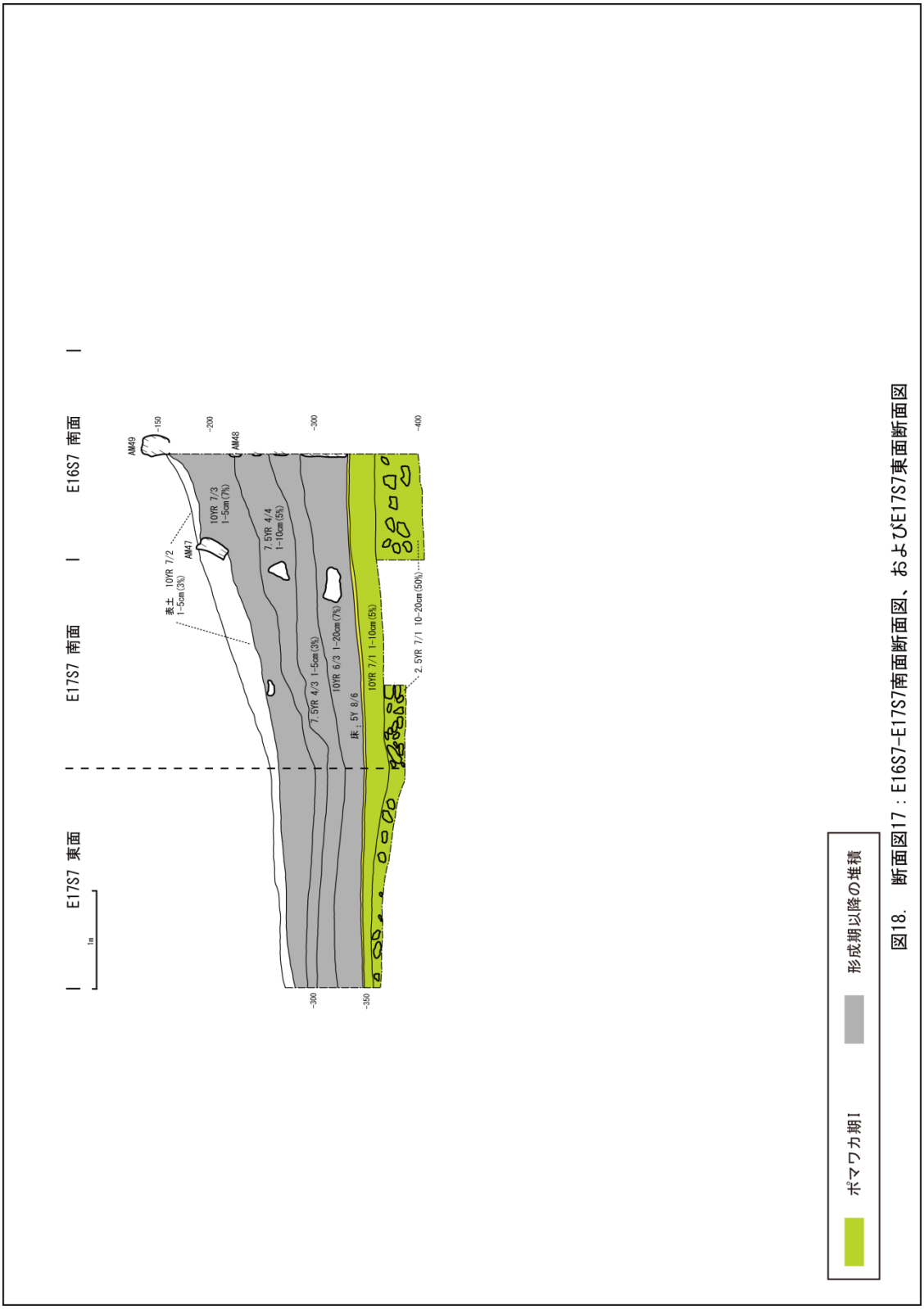


図18. 断面図17：E16S7-E17S7南面断面図、およびE17S7東面断面図

1-2. B区

地表面で視認できる部屋状構造物の形態と規模、および主要基壇（A区）との関係を明らかにするために設けられた発掘区で、2006年に発掘が行われた。はじめに、盗掘坑の清掃を実施した後に、南北方向にトレンチを入れ、建造物の出土状況に応じて、東西方向に発掘区を拡張した[附録図19（断面図18）- 21（断面図20）]。この結果、インガタンボ期における部屋状構造物の建設過程が明らかとなった。なお、この発掘区では、形成期以降の堆積は、ほとんど確認されていない。

1-3. C区

A基壇上に載る主要基壇と西基壇の時期的関係を明らかにするために、2007年に西基壇の中央部を東西方向に横切るトレンチを入れ、発掘を実施した[附録図22（断面図21）]。その結果、地表面に露出している建造物と地表面付近の層は、形成期以降に属することが判明した。なお、この発掘区で検出された形成期の文化層と建造物は、インガタンボ期に対応するものであり、この時期に小規模な基壇が築かれていたことが明らかとなっている。

1-4. D区

A基壇全体に対する主要階段の建設過程を明らかにするために、A基壇北面擁壁の中央部に南北方向のトレンチを設けて、2007年に発掘を実施した [附録図23（断面図22）]。その結果、形成期（インガタンボ期）と形成期以降の各時期に対応する二つの主要階段を検出した。

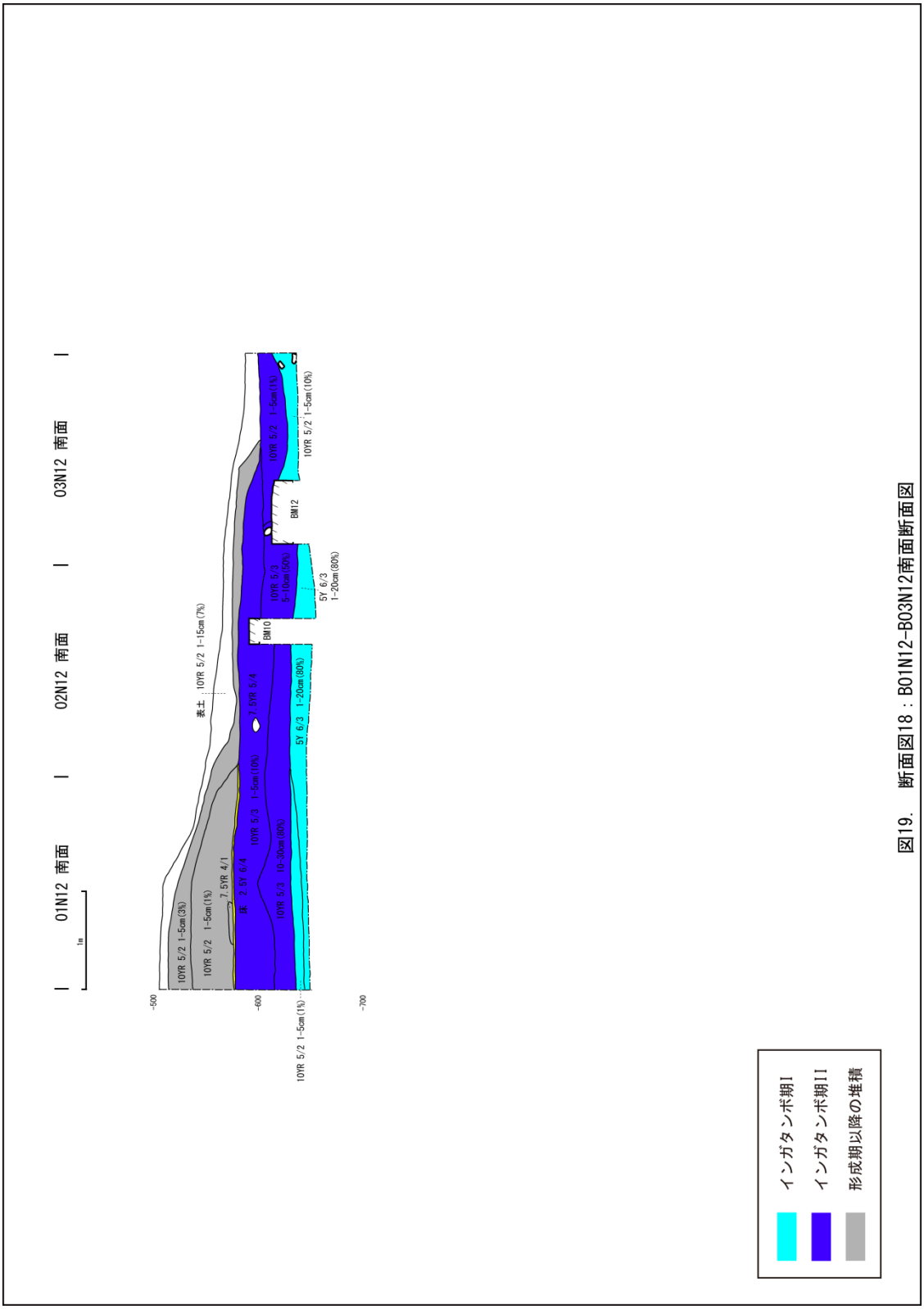


図19. 断面図18：B01N12-B03N12南面断面図

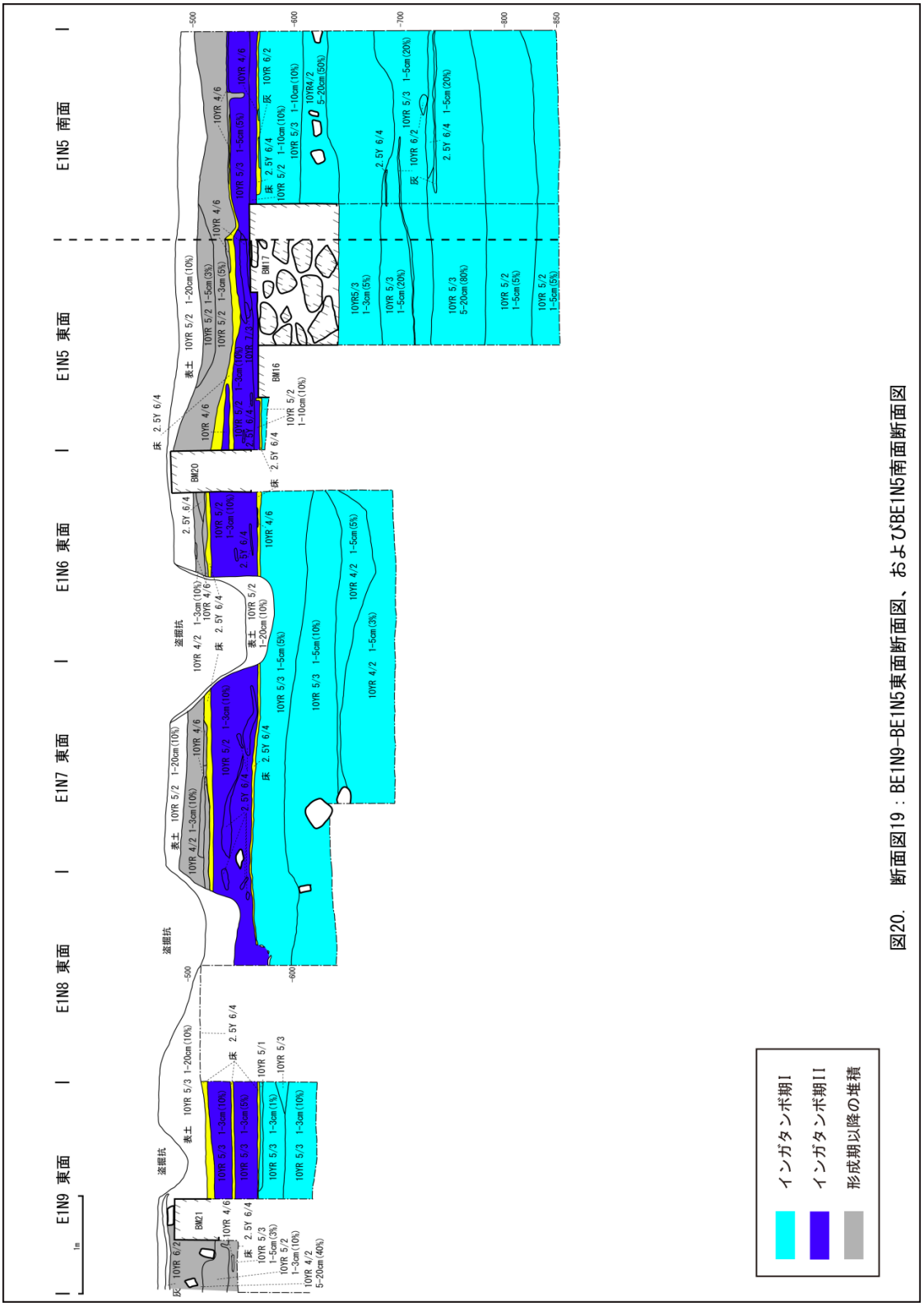


図20. 断面図19：BE1N9-BE1N5東面断面図、およびBE1N5南面断面図

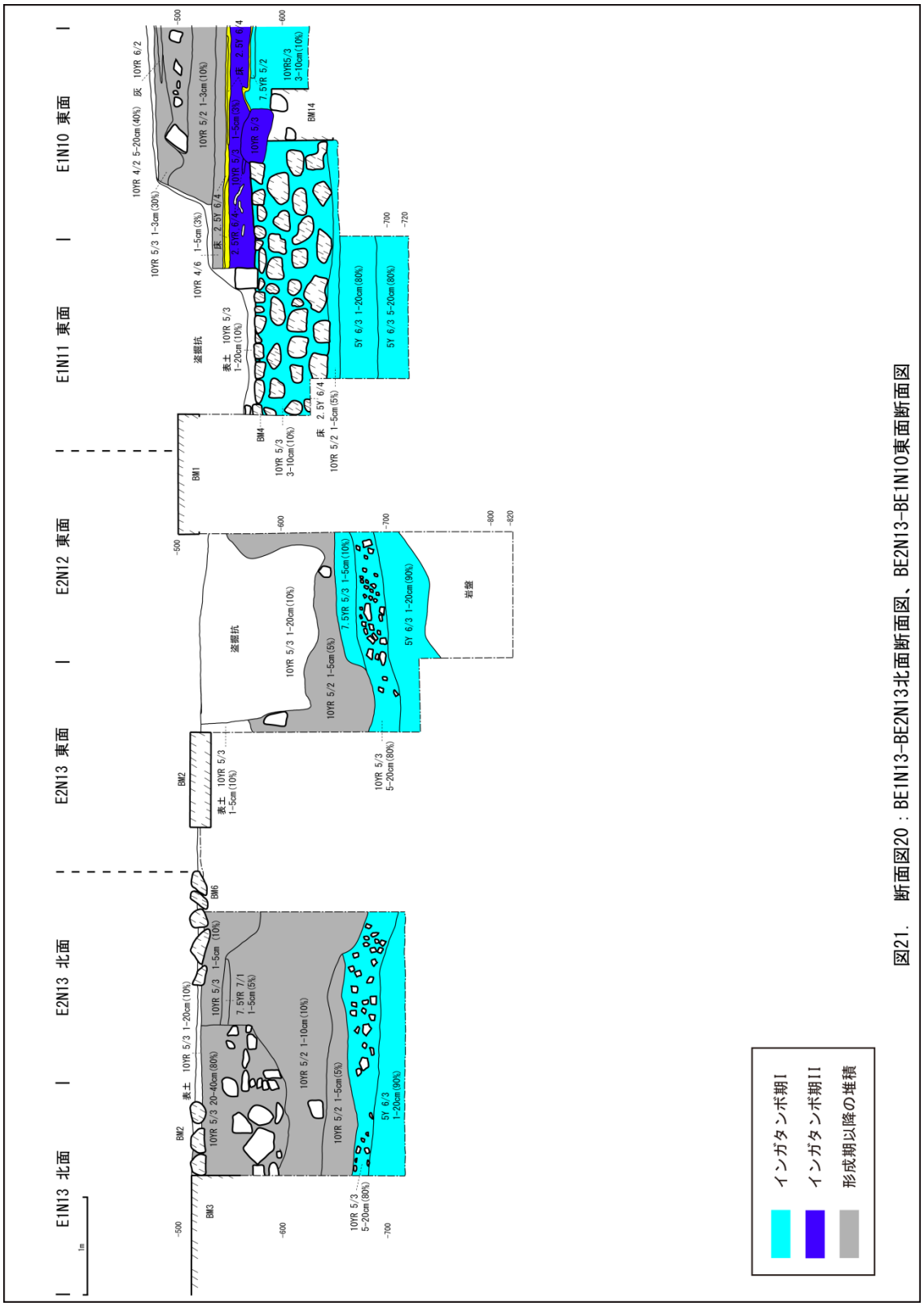


図21. 断面図20：BE1N13-BE2N13北面断面図、BE2N13-BE1N10東面断面図

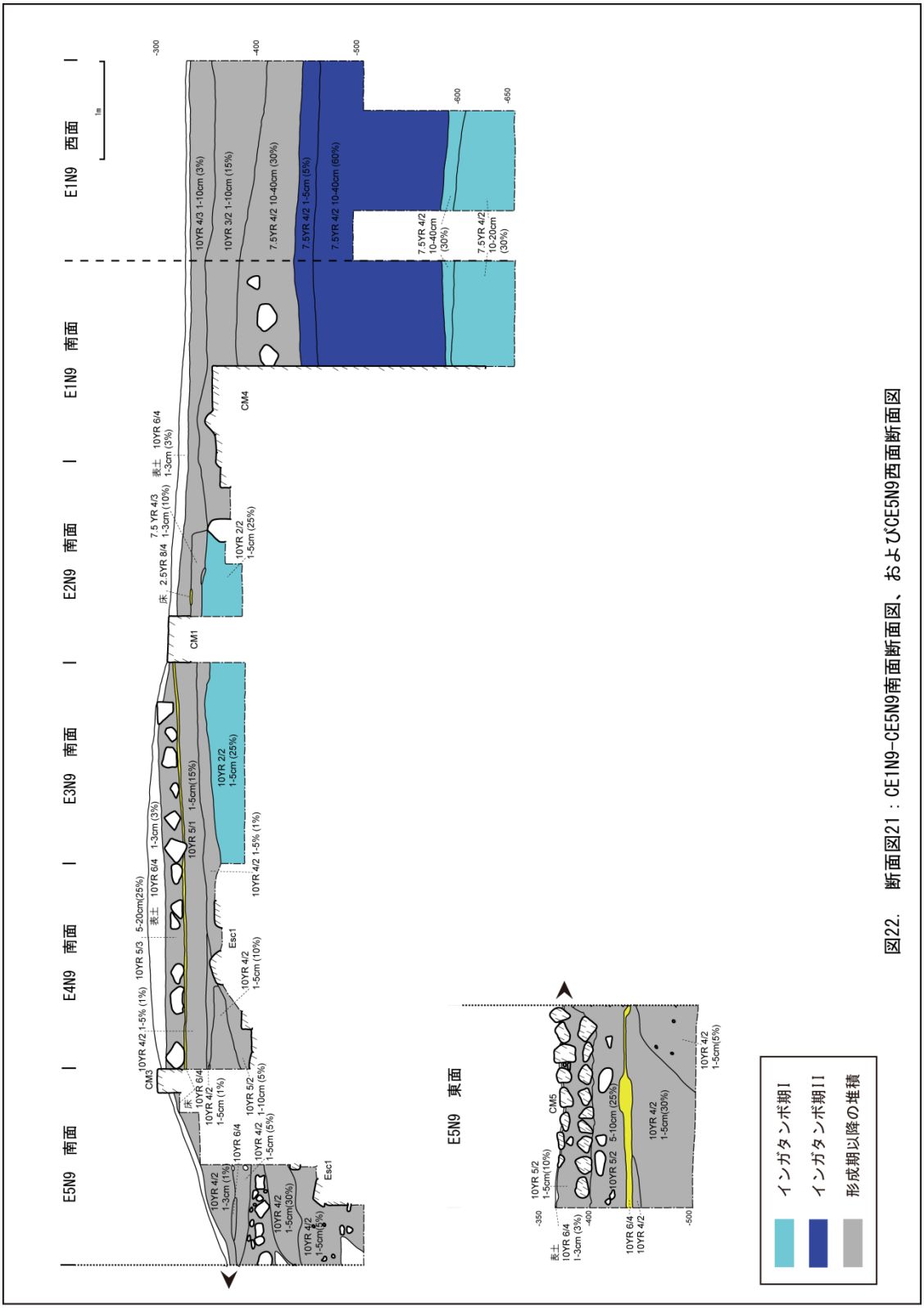


図22. 断面図21：CE1N9-CE5N9南面断面図、およびCE5N9西面断面図

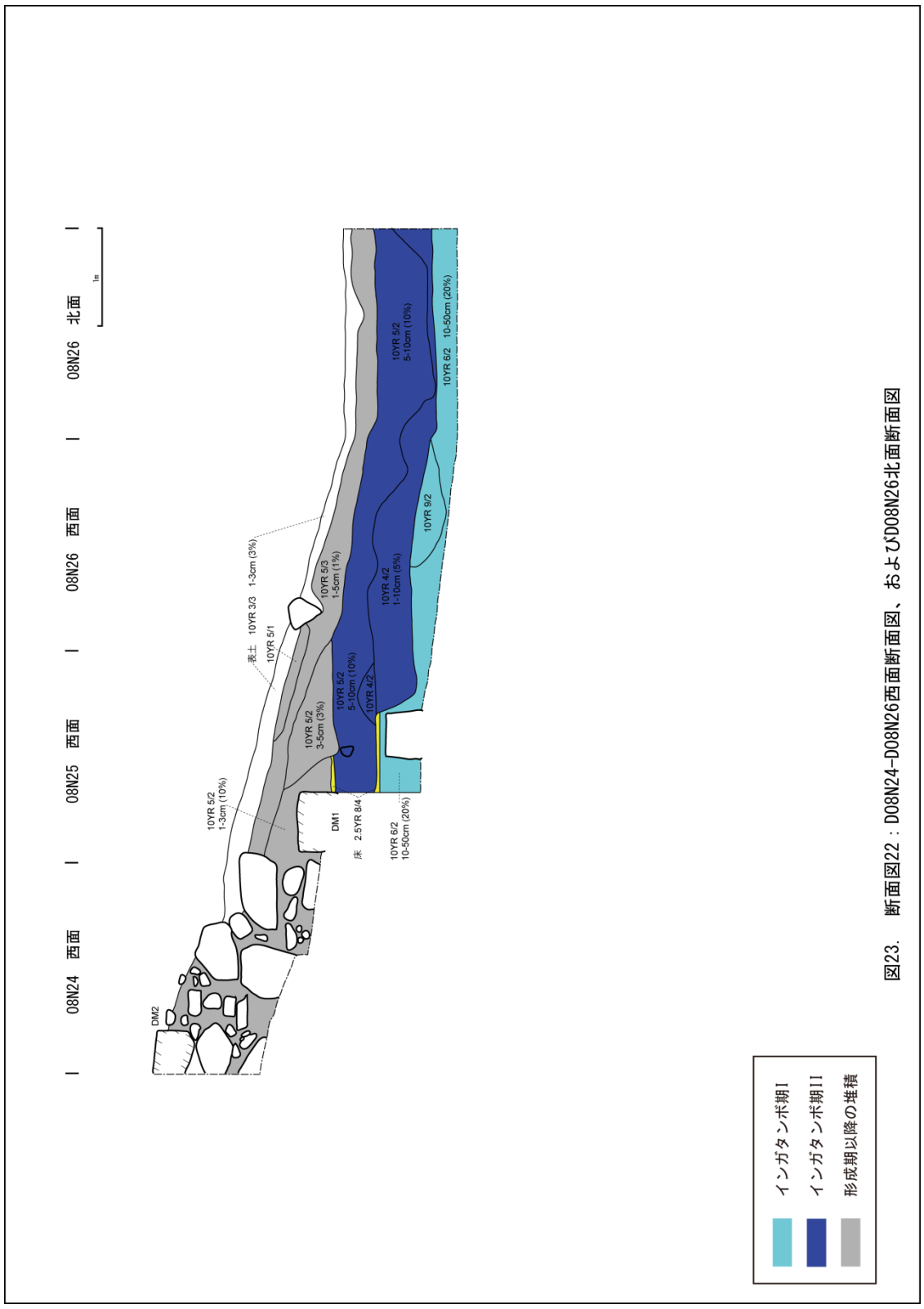


図23. 断面図22：DO8N24-DO8N26西面断面図、およびDO8N26北面断面図

2. B 基壇の発掘区と層位状況

インガタンボ遺跡で二番目に大規模である B 基壇の建設時期と建設過程を把握し、A 基壇との空間的、時間的関係を明らかにするために、2007 年に発掘を実施した[附録図 24]。実際の発掘では、まず、B 基壇上において地表面で視認できる部屋状構造物の西壁に沿って、南北方向のトレンチを設けた。次に、検出した遺構と堆積状況に応じて、既述のトレンチを東側に拡張しながら発掘を行った[附録図 25（断面図 23）- 28（断面図 26）]。そして、その結果として、形成期における B 基壇の建設過程（ワンカバンバ期からインガタンボ期まで）を確認した。

なお、基壇頂上部では、地表面で視認できる構造物の存在しない地点で、形成期以降、あるいは現代の活動による層位の攪乱が部分的に認められた。しかし、基本的に堆積状況は良好であり、とくに断面図を作成した建造物直下の層位には、後世の攪乱は確認されていない。

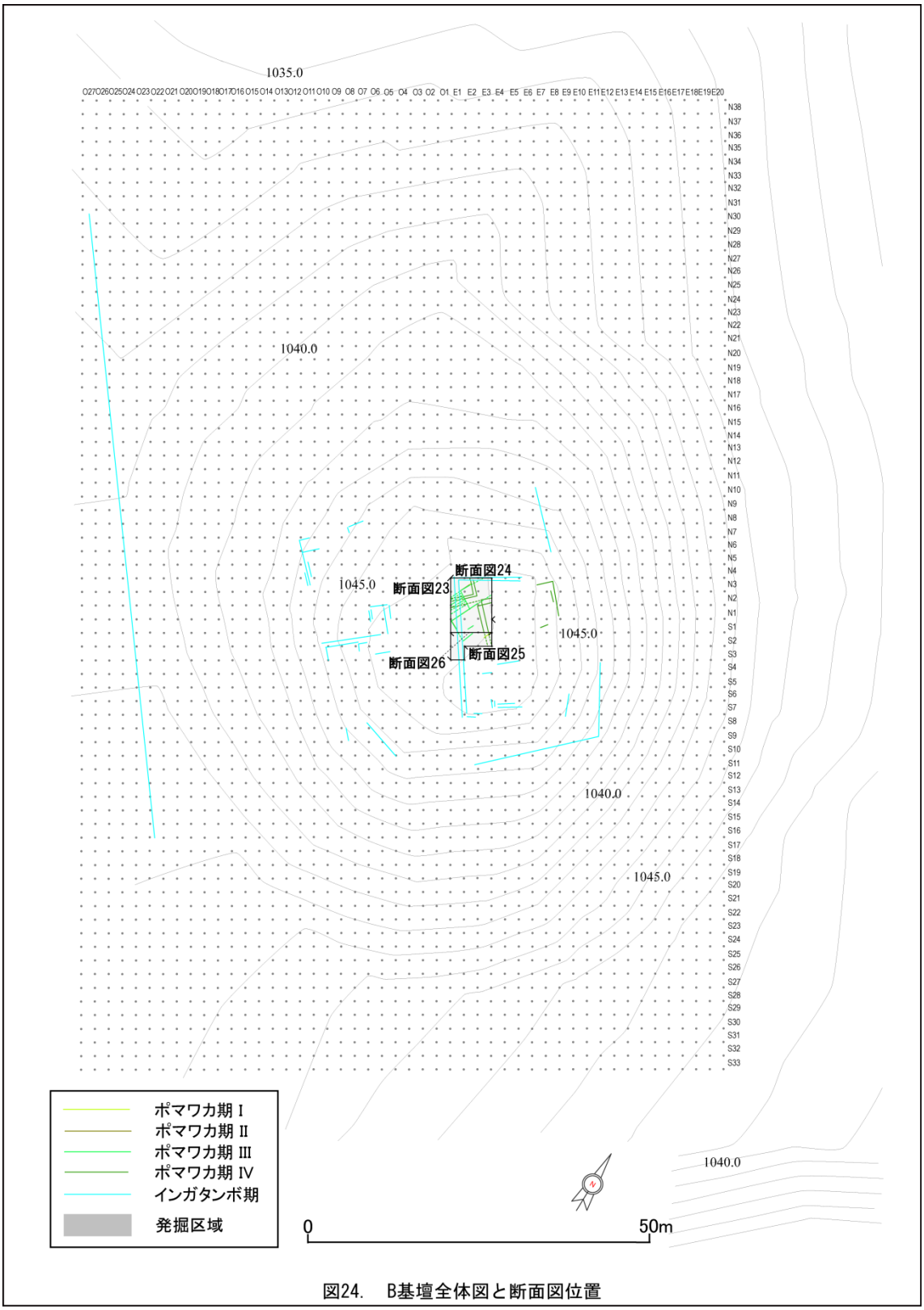


図24.　B基壇全体図と断面図位置

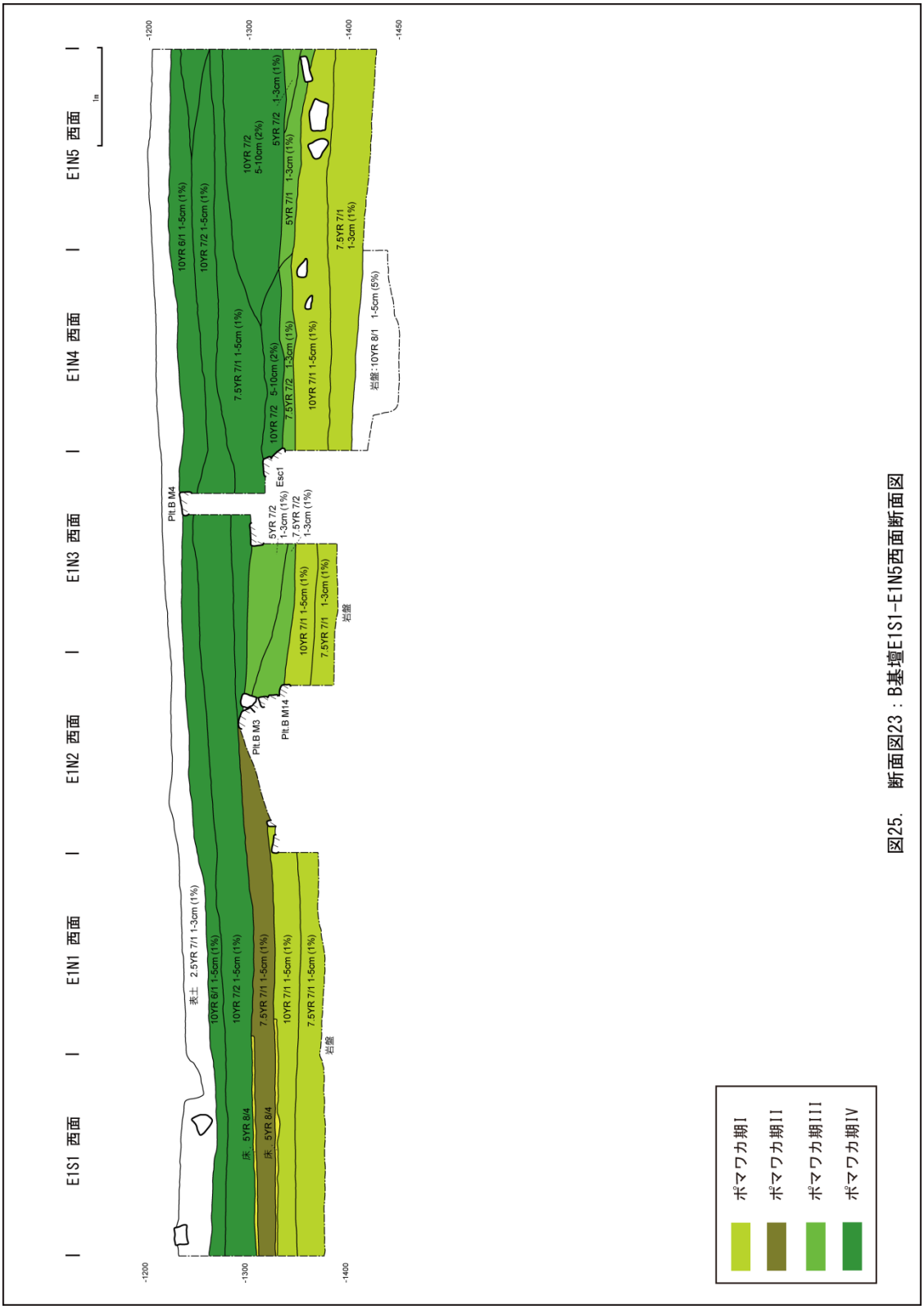


図25. 断面図23：B基壇E1S1-E1N5西面断面図

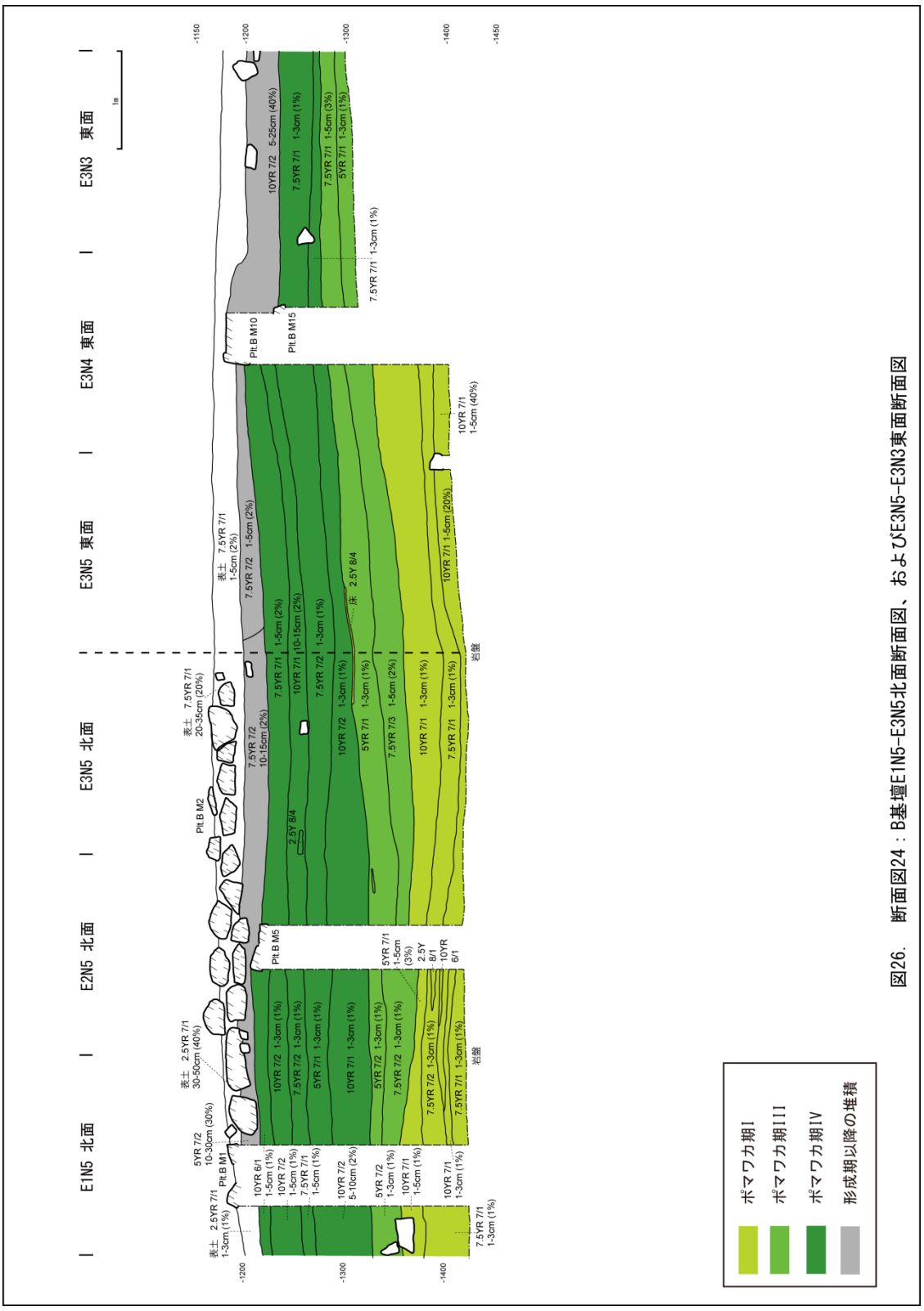


図26. 断面図24：B基壇E1N5-E3N5北面断面図、およびE3N5-E3N3東面断面図

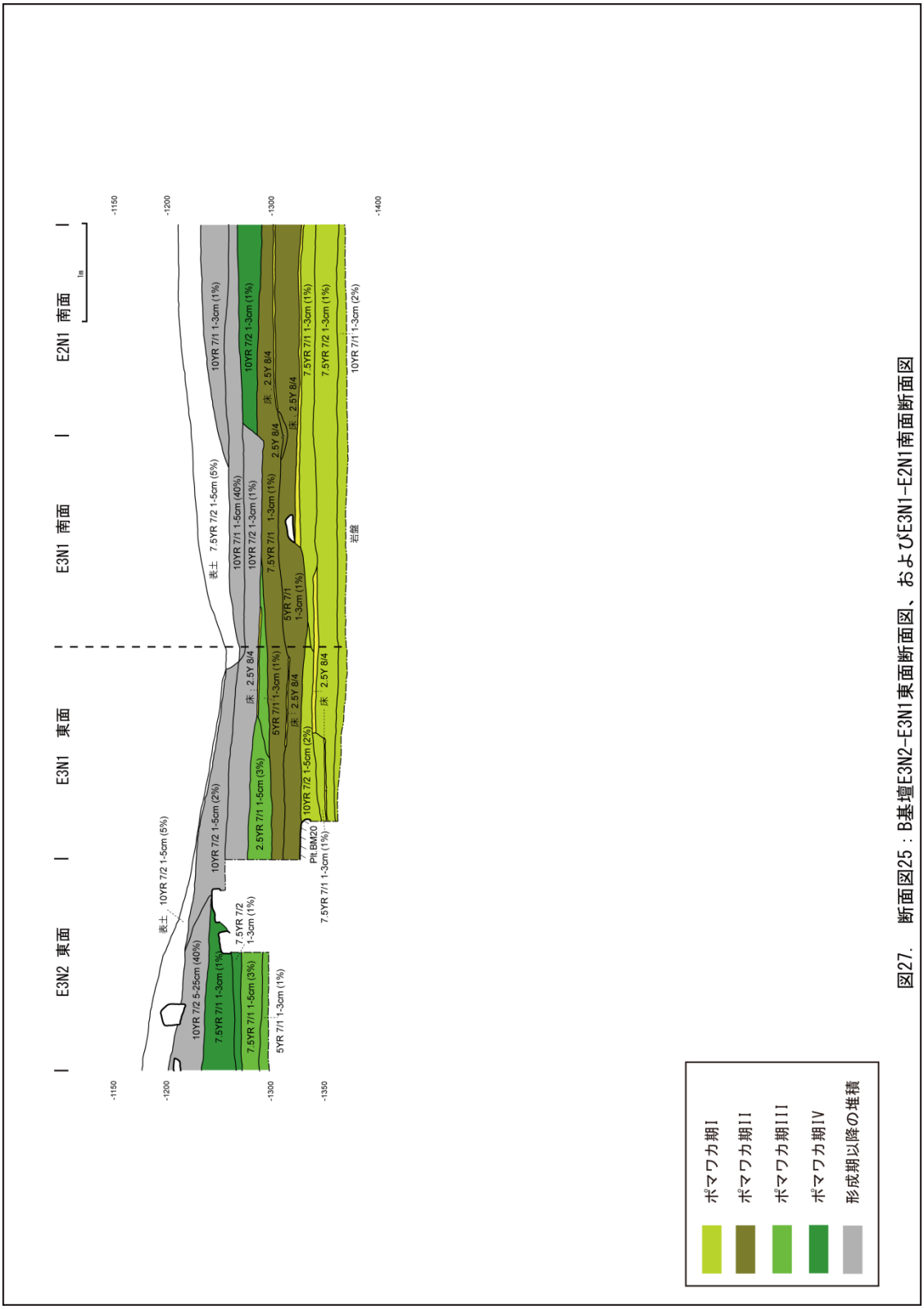


図27. 断面図25：B基壇E3N2-E3N1東面断面図、およびE3N1-E2N1南面断面図

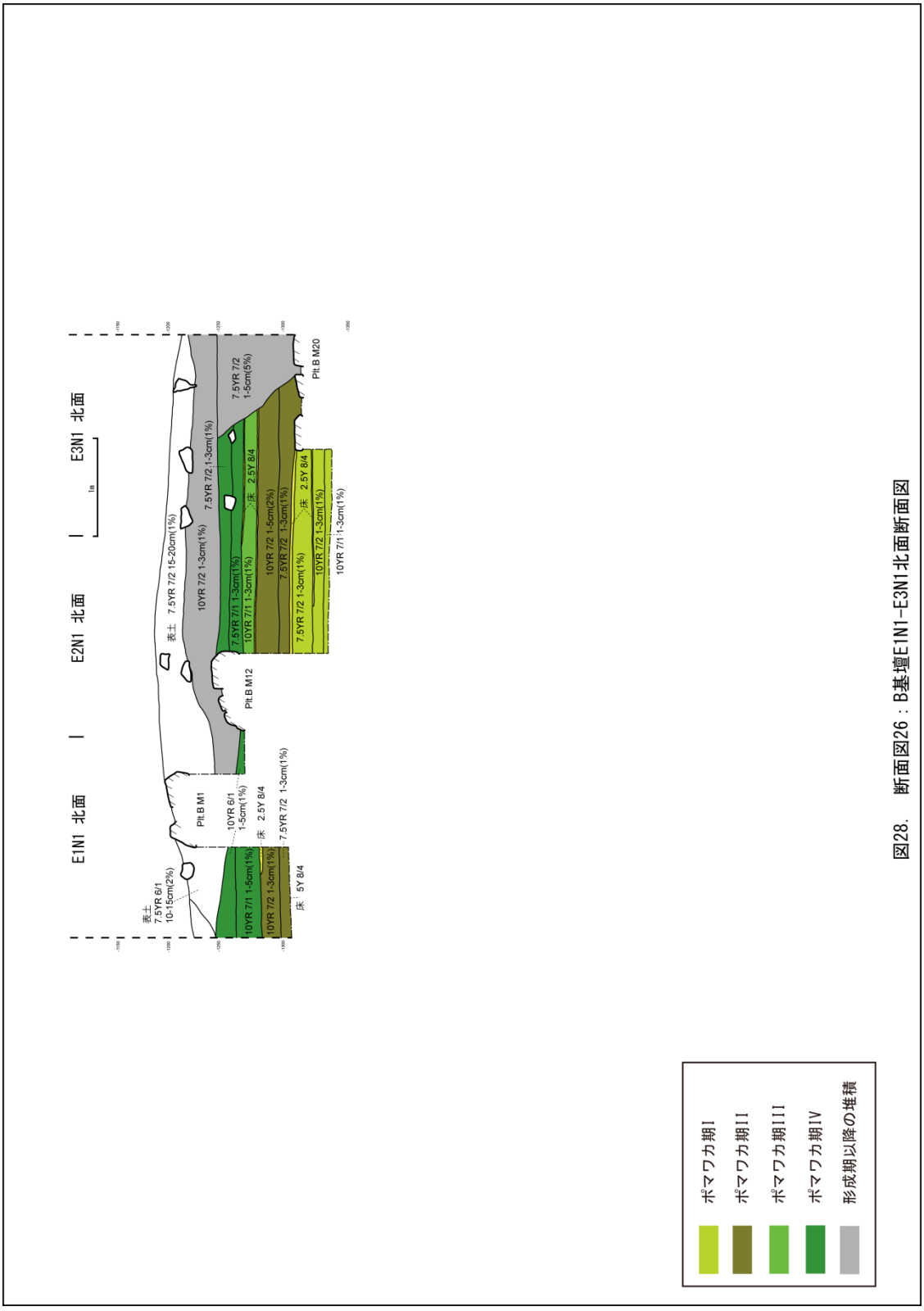


図28. 断面図26：B基壇E1N1–E3N1北面断面図

3. C 基壇の発掘区と層位状況

2007 年に、C 基壇の建設時期と他の基壇、とくに隣接する B 基壇との空間的、時間的関係の把握のため、地表面で視認できる部屋状構造物に沿って、2 箇所のグリッドを設定し、発掘を行った[附録図 29]。C 基壇では、文化層の堆積が極めて浅く、地表面を剥ぐと 1 層の形成期対応層（ポマワカ期）のみが確認される。なお、文化層直下は、岩盤となっている[附録図 30（断面図 27, 28）]。

4. D 基壇の発掘区と層位状況

C 基壇と同様に、建設時期と B 基壇、もしくは C 基壇との空間的、時間的関係を明らかにするために、地表面で視認できる部屋状構造物の角に 1 箇所のグリッドを設けて、2007 年に発掘を実施した。その結果、建造物と対応するポマワカ期の文化層の存在が確認された。D 基壇では、C 基壇と比べて文化層の堆積が深いが、これらは基壇建設時の盛土であると考えられる[附録図 30（断面図 29）]。なお、発掘面積が極度に狭いこともあり、安全上の問題などから、岩盤の検出には至っていない。

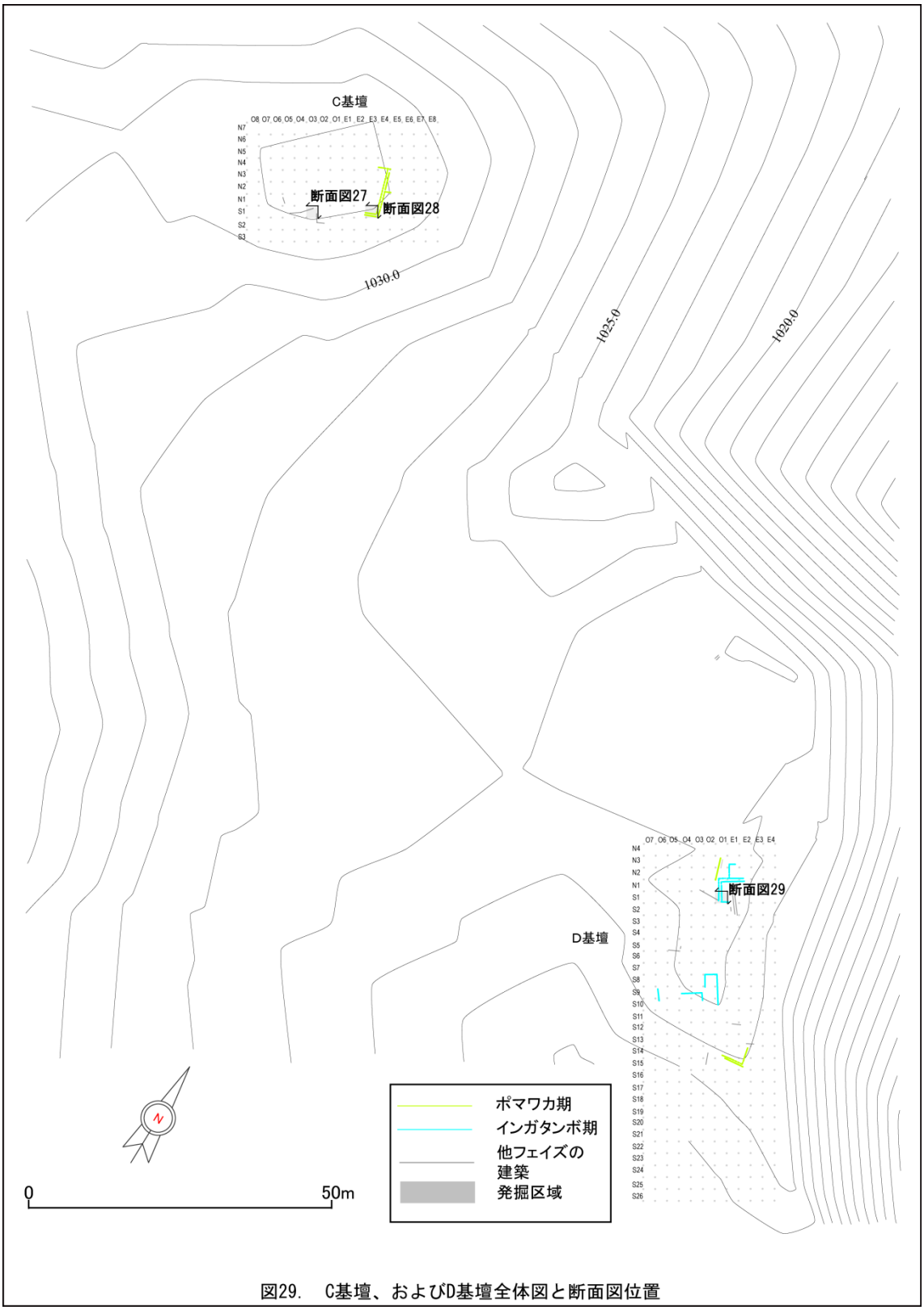


図29.　C基壇、およびD基壇全体図と断面図位置

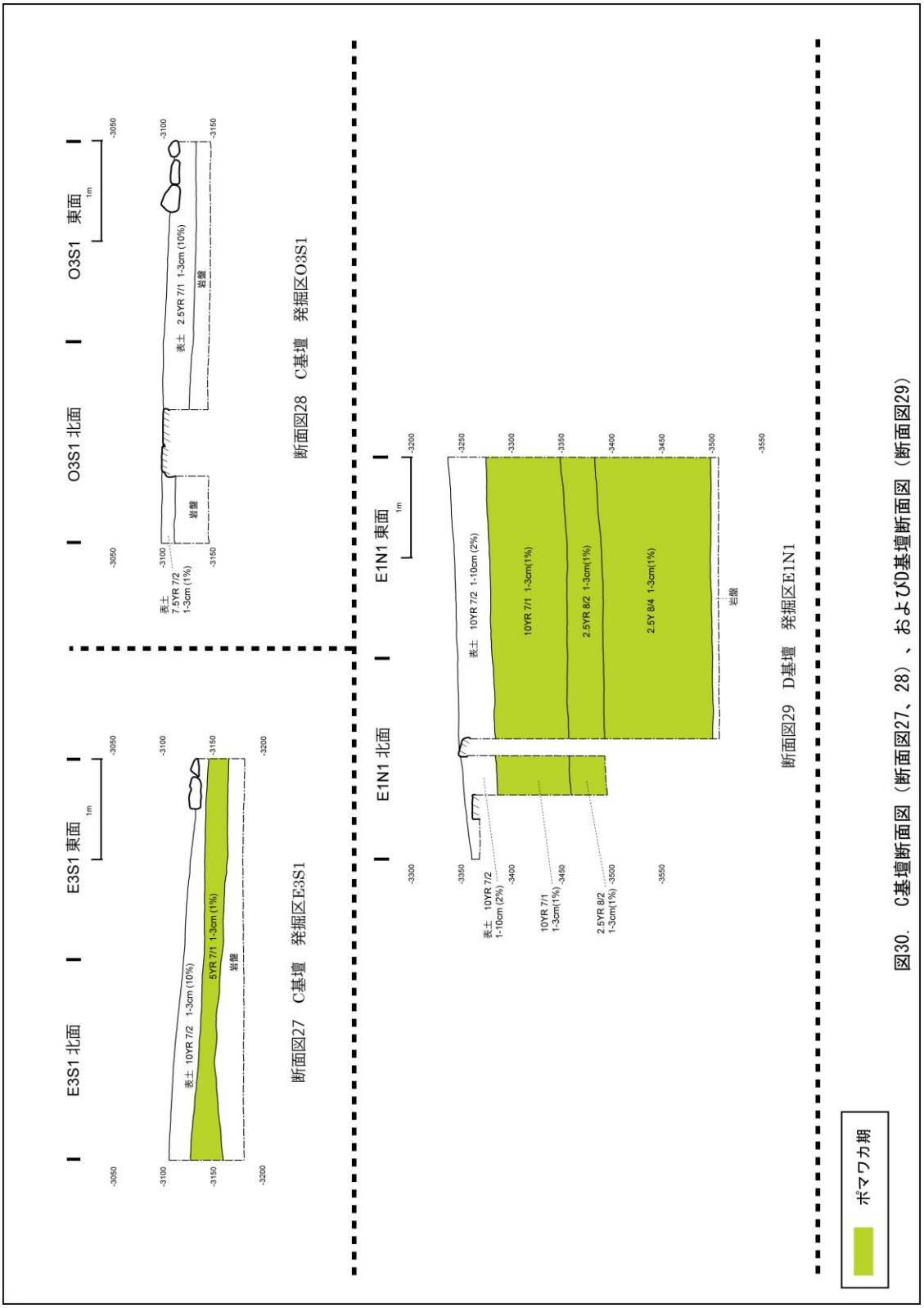


図30. C基壇断面図（断面図27、28）、およびD基壇断面図（断面図29）